（財）　大阪府文化財センター調査報告書　第 196 集

東大阪市・八尾市

# 池島・福万寺遺跡 9

（池島Ⅱ期地区 02 － 1 調査区・06 － 2 調査区）

―一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書―

2009 年 12 月

財団法人　大阪府文化財センター

池島・福万寺遺跡 9

二〇〇九年十二月

財団法人　大阪府文化財センター

東大阪市・八尾市

# 池島・福万寺遺跡９

（池島Ⅱ期地区 02 － 1 調査区・06 － 2 調査区）

―一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書―

財団法人　大阪府文化財センター

１　06－２調査区　第 13 ｂ面　東側　遺構集中部（南から）

２　06－２調査区　第 14－２面　水田検出状況（南から）

巻頭図版２

06 －２調査区　第 10 面　小形仿製鏡

# 序　　文

本書は、当センターが 1989 年以来発掘調査を進めてまいりました恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査の池島Ⅰ期地区と池島Ⅱ期地区をつなぐ施設部および池島Ⅱ期地区の報告書です。治水緑地の調査は、これまでに福万寺Ⅰ期地区・池島Ⅰ期地区の調査を終了し、現在は福万寺Ⅱ期地区・池島Ⅱ期地区の調査を進めております。

河内平野は、弥生文化が早くに普及したところとして知られ、早くから稲作が定着した地域のひとつです。大阪では、平野や生駒山地の扇状地を中心に数多くの人間生活の痕跡が確認され、日本列島の弥生文化研究の中心地域として数々の弥生時代の遺跡が発掘調査されております。

本遺跡も、既往の調査によって弥生時代前期から現代に至る各時代の農耕関係の遺構が確認されています。これまでの調査で、弥生時代各時期の水田、古代の条里制に伴う水田区画など、日本列島の農耕を考える重要資料に恵まれた遺跡であることが明らかになっています。本書に収められた、池島遺跡（その８）調査区および池島・福万寺遺跡Ⅱ（その６）調査区では、既往の調査同様に現代から弥生時代に至る各時期の水田遺構が確認されました。最後になりましたが、調査の過程でお世話になった地元の皆様をはじめ大阪府土木部、同部寝屋川水系改修工営所、同南部工区、大阪府教育委員会、東大阪市教育委員会など関係諸機関、指導助言を賜った多くの方々に厚く御礼申し上げますとともに、今後とも当センターの調査にご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

**平成 21 年 12 月**

**財団法人　大阪府文化財センター**

**理事長　水　野　正　好**

# 例　　言

1　本書は、東大阪市池島町と八尾市福万寺町にまたがる地域に計画された恩智川治水緑地建設に伴う池島・福万寺遺跡Ⅱ期地区 02 － 1 調査区および 06 － 2 調査区の発掘調査報告書である。

2　調査は、大阪府寝屋川水系改修工営所から財団法人大阪府文化財センターが一級河川恩智川治水緑地池島遺跡発掘調査（その８）として平成 14 年２月 22 日～平成 16 年２月 27 日の間委託を受け、現地調査を平成 14 年６月３日～平成 16 年２月 27 日に実施し、さらに池島・福万寺遺跡Ⅱ発掘調査（その６）として平成 18 年９月１日～平成 20 年５月 30 日の間委託を受け、現地調査を平成 18 年 10 月６日～平成 20 年４月 30 日に実施し、さらに池島・福万寺遺跡Ⅱ発掘調査（その 10）として平成 20 年９月１日～平成 22 年９月 30 日の間委託を受け、平成 20 年９月１日～平成 21 年６月 30 日に遺物整理を実施した発掘調査の報告書である。

3　調査は、以下の組織体制で行なった。

02 － 1 調査区

[ 調査 ]　平成 13 年度

調査部長　井藤　徹、調整課長　赤木克視、中部調査事務所長　藤田憲司、調査第二係長　國乗和雄、技師　廣瀬時習、専門調査員　鹿野　塁

[ 調査 ]　平成 14 年度

調査部長　玉井　功、調整課長　赤木克視、中部調査事務所長　藤田憲司、調査第四係長　國乗和雄、技師　廣瀬時習、専門調査員　鹿野　塁

[ 調査 ]　平成 15 年度

調査部長　玉井　功、調整課長　赤木克視、中部調査事務所長　小野久隆、調査第三係長　國乗和雄、技師　廣瀬時習、専門調査員　福田由里子

06 － 2 調査区

[ 調査 ]　平成 18 年度

調査部長　赤木克視、調整課長　田中和弘、中部調査事務所長　小野久隆、池島支所長　寺川史郎、調査第一係長　広瀬雅信、技師　廣瀬時習

[ 調査 ]　平成 19 年度

調査部長　赤木克視、調整課長　田中和弘、中部調査事務所長　小野久隆、池島支所長　寺川史郎、調査第一係長　広瀬雅信、班長　宮崎泰史、技師　廣瀬時習、専門調査員　飯田浩光、乾　哲也

[ 調査・整理 ]　平成 20 年度

調査部長　赤木克視、調査課長　田中和弘、中部調査事務所長　寺川史郎、池島支所長（兼）調査第一係長　金光正裕、主査　陣内暢子、技師　湯本　整、専門調査員　飯田浩光

[ 整理 ]　平成 21 年度

調査部長（兼）調査課長　福田英人、調整グループ長　金光正裕、調査グループ長　寺川史郎、調査グループ主幹（兼）池島総括　小野久隆、主査　陣内暢子

4　本書で用いた現場写真は調査担当者が撮影した。遺物写真撮影に関しては、調査グループ主査　片山彰一が担当した。木製品・自然木の樹種、種子遺体、石材の同定は調査グループ主査　山口誠治が行い、また出土遺物に関しては、瓦の同定を調査グループ副主査　駒井正明が行なった。

5　本報告書の作成にあたり、地震痕跡については寒川　旭氏（独立行政法人　産業技術総合研究所）、陶磁器に関しては森村健一氏（堺市市長公室）、縄文土器に関しては大野　薫氏（大阪府教育委員会）、魚類遺存体については丸山真史氏（京都大学大学院・現　橿原考古学研究所）にご指導いただいた。記して厚く御礼申し上げる。

6　発掘調査・整理の実施にあたり下記の関係諸機関、方々にご指導・ご助言をいただいた。記して感謝の意を表する。（順不同）

大阪府寝屋川水系改修工営所、同所南部工区、大阪府教育委員会、東大阪市教育委員会、八尾市教育委員会、財団法人東大阪市施設利用サービス協会、財団法人八尾市文化財調査研究会、大庭重信氏（財団法人　大阪市文化財協会）、別所秀高氏（鴻池新田会所）、松田順一郎氏（財団法人　東大阪市施設利用サービス協会）

7　分析については、以下の分析をそれぞれの業者に委託して行なっている。分析結果については本文中にその概要を記した。

02 － 1 調査区

放射性炭素 14 年代測定（AMS）分析：株式会社パレオ・ラボ

06 － 2 調査区

花粉・珪藻・植物珪酸体分析：株式会社パリノ・サーヴェイ

土壌薄片作製鑑定・土壌軟Ｘ線写真撮影：株式会社パレオ・ラボ

8　本書の執筆は陣内暢子・廣瀬時習・飯田浩光・乾哲也・後川恵太郎が分担して行った。目次に執筆分担を記載している。巻末の表６掲載遺物一覧は陣内が作成した。編集は飯田が行い、廣瀬が補佐した。

9　本調査で出土した遺物および写真・実測図等の記録類は、財団法人　大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

# 凡　　例

1　実測図の基準高は、東京湾平均海水面（T.P. 値）を使用している。

2　遺構平面図の座標値は、世界測地系に基づく国土座標第Ⅵ系で標記している。また本書で用いた方位は座標北を基準とした。ちなみに磁北は西に６°　18′、真北は東に０°　12′振っている。

3　本書中の遺構位置などの表記においては、第１章第３節で記述した区割にしたがって表記しており、「5g」「6f」もしくは「5g 区」「6f 区」などと表記している。

4　発掘調査および遺物整理については、(財）大阪府文化財センターの『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003 年）に準拠した。

5　地層および土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編　農林水産省農林水産技術会議事務局 監修　財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版　標準土色帖』1990・2005 年版に基づいている。

6　遺構全体平面図は 500 分の１、遺構図は 20 分の１もしくは 40 分の１、遺物実測図の縮尺は下記を原則とする。ただし、一部必要に応じて任意の縮尺を設定しており、その都度スケールを表示している。

〔遺物実測図の縮尺〕

土器：４分の１　土製品：３分の１　瓦：６分の１　石製品：３分の２・２分の１・３分の１

骨角製品：３分の１　木製品：２分の１・４分の１・６分の１　金属製品：２分の１・４分の１

7　遺構番号については遺構の種類に関わらず１から番号を付した。なお、02 －１調査区（その８）の遺構番号には番号の前に「A」を、06 －２調査区（その６）の遺構番号には「B」を付け、「A ○○」「B ○○」のように区別のつくよう表記している。また、平面図や遺構図に記載している遺物や遺物出土状況図の遺物については「土器○○」「銅鏡○○」のように、遺物の種類の後に遺物挿図番号を付け、表記している。

8　池島Ⅰ期地区の遺構番号・遺構名称については、『池島・福万寺遺跡３』に基づいて記述している。

9　本文中では、引用および参考とした文献を「(○○○○ 1990)」という形で記載し、本文末尾に引用・参考文献一覧を掲載している。

10　遺物実測図は以下のような原則に基づいて掲載している。

・口縁（または底部）残存部分が６分の１未満の土器は、実測図の口縁部（底部）水平線を途中で切って表現する。

・遺物の赤色顔料塗布（または赤漆）の部分は朱彩、黒漆は黒で表す。

・サヌカイト製品の新欠は黒く塗りつぶす。

・木製品の焦げはアミフセで表す。

11　図１・４は、国土地理院発行２万５千分の１の地形図「大阪府東南部」「信貴山」平成 10 年発行を縮小したものである。

12　図４の遺跡名・遺跡の範囲は、大阪府教育委員会『大阪府文化財分布図』2001 年による。

# 目次

巻頭図版
序文
例言
凡例
目次

第１章　調査にいたる経緯と経過
１．池島・福万寺遺跡の位置と調査……（廣瀬）…… 1
２．調査の経緯…… 2
１）02 － 1 調査区 ……（廣瀬）
２）06 － 2 調査区 ……（飯田）
３．調査方法……（廣瀬）…… 4

第２章　地理的・歴史的環境……（飯田）
１．地理的環境…… 6
２．歴史的環境…… 8

第３章　基本層序 ……（廣瀬）…… 10

第４章　調査成果
１．現代～古墳時代面の調査　（遺構：廣瀬　遺物：陣内）
１）第１面・第１面ベース（第１ｂ面）…… 13
２）第２面…… 21
３）第３面…… 27
４）第４面…… 30
５）第５面…… 33
６）第６面…… 36
７）第７面…… 39
８）第８面…… 43
９）第９面…… 49
10）第10面 …… 58
２．弥生時代～縄文時代面の調査
１）第 11 面・第 11 面ベース（第 11 ｂ面） ……（遺構：乾　遺物：陣内）…… 69
２）第 12 面・第 12 面ベース（第 12 ｂ面） ……（遺構：乾･後川　遺物：陣内）…… 84
３）第 13 面・第 13 面ベース（第 13 ｂ面） ……（遺構：飯田　遺物：陣内）… 110

４）第 14 －２面・第 14 －２面ベース（第 14 －２ｂ面）　（遺構：飯田　遺物：陣内）… 139
５）第 15 面 …… （遺構：飯田）… 162

第５章　総括
１．近世～古墳時代の調査成果…… （廣瀬）… 164
２．弥生時代～縄文時代晩期の調査成果…… （飯田・乾・後川）… 165

写真図版

# 挿図目次

図１　池島･福万寺遺跡の位置　1
図２　池島･福万寺遺跡の調査区配置　2
図３　02－１･06－２調査区の地区割り　4
図４　周辺の遺跡分布図　7
図５　調査地　断面図　10･11
図６　第１ｂ面　平面図　14
図７　第１面　遺構図　15
図８　第２－１面　遺構図　16
図９　第１面　出土遺物（１）　17
図10 第１面　出土遺物（２）　18
図11 第１面　出土遺物（３）　19
図12 第２－１面　平面図　22
図13 第２面　出土遺物（１）　25
図14 第２面　出土遺物（２）　26
図15 第３－１・２・３面の変遷　27
図16 第３－２面　遺構図　28
図17 第３面　出土遺物　29
図18 第４面　平面図　30
図19 第４面　出土遺物　31
図20 第５面　平面図　33
図21 第５面　出土遺物　35
図22 第６面　平面図　36
図23 第６面　出土遺物　37
図24 第７面　平面図　39
図25 第７面　出土遺物　40
図26 第８面　平面図　44
図27 第２－１～８面　条里坪境　断面図　45
図28 第８面　遺構図　46
図29 第８面　出土遺物（１）　47
図30 第８面　出土遺物（２）　48
図31 第９面　平面図　50
図32 第９面　遺構図（１）　51
図33 第９面　遺構図（２）　52
図34 第９面　遺構図（３）　55
図35 第９面　出土遺物　56
図36 第10面　平面図　58
図37 第10面　A391微高地　平面図　60
図38 第10面　遺構図（１）　61
図39 第10面　遺構図（２）　62
図40 第10面　遺構図（３）　63
図41 第10面　遺構図（４）　64
図42 第10面　遺構図（５）　65
図43 第10面　出土遺物　67
図44 第11面　平面図　71
図45 第11面　遺構図　73
図46 第11ｂ面　平面図　75
図47 第11ｂ面　遺構図（１）　77
図48 第11ｂ面　遺構図（２）　78
図49 第11ｂ面　遺構図（３）　79
図50 第11ｂ面　遺構図（４）　80

図51 第11ｂ面　遺構図（５）　81
図52 第11面　出土遺物　82
図53 第12面　平面図　85
図54 第12面　遺構図（１）　87
図55 第12面　遺構図（２）　89
図56 第12面　遺構図（３）　91
図57 第12面　遺構図（４）　93
図58 第12面　遺構図（５）　94
図59 第12面　遺構図（６）　95
図60 第12面　遺構図（７）　97
図61 第12ｂ面　平面図　99
図62 第12ｂ面　遺構図（１）　101
図63 第12ｂ面　遺構図（２）　102
図64 第12ｂ面　遺構図（３）　103
図65 第12ｂ面　自然科学分析（１）　105
図66 第12ｂ面　自然科学分析（２）　106
図67 第12面　出土遺物（１）　108
図68 第12面　出土遺物（２）　109
図69 第13面　遺構図（１）　110
図70 第13面　平面図　111
図71 第13面　遺構図（２）　114
図72 第13面　遺構図（３）　115
図73 第13面　遺構図（４）　116
図74 第13面　遺構図（５）　117
図75 第13面　遺構図（６）　118
図76 第13ｂ面　平面図　121
図77 第13ｂ面　遺構図（１）　123
図78 第13ｂ面　B419微高地　平面図　124
図79 第13ｂ面　遺構図（２）　125
図80 第13ｂ面　遺構図（３）　126
図81 第13ｂ面　遺構図（４）　128
図82 第13ｂ面　遺構図（５）　129
図83 第13ｂ面　遺構図（６）　130
図84 第13ｂ面　遺構図（７）　132
図85 第13ｂ面　遺構図（８）　133
図86 第13ｂ面　遺構図（９）　134
図87 第13面　出土遺物（１）　136
図88 第13面　出土遺物（２）　137
図89 第14－２面　遺構図（１）　140
図90 第14－２面　平面図　141
図91 第14－２面　遺構図（２）　143
図92 02－１調査区　第14－２面　水田域　平面図　144
図93 第14－２面　遺構図（３）　146
図94 第14－２面　遺構図（４）　147
図95 第14－２面　遺構図（５）　148
図96 第14－２面　遺構図（６）　148
図97 第14－２面　遺構図（７）　149
図98 06－２調査区　第14－２面　水田域　平面図　150
図99 第14－２面　遺構図（８）　151
図100 第14－２ｂ面　平面図　153
図101 第14－２ｂ面　遺構図　155
図102 第14面　出土遺物（１）02－１調査区　157
図103 第14面　出土遺物（２）02－１調査区　159
図104 第14面　出土遺物（３）06－２調査区　160
図105 第14面　出土遺物（４）06－２調査区　161
図106 第15面　平面図　162

# 挿入表目次

表１　第12面　立木・流木の樹種　86
表２　B342土坑出土魚骨　126
表３　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果　172
表４　B240溝植物遺体同定結果一覧　173
表５　B240溝珪藻分析結果一覧　174
表６　掲載遺物一覧　175～196

# 挿入写真目次


写真１　02－１調査区　第１面　東半(北東から)　13
写真２　02－１調査区　第１ｂ面　北半(北東から)　13
写真３　第１～２－４面　A51島畠　断面(南西から)　13
写真４　02－１調査区　1b土坑　断面(北西から)　13
写真５　第１面　Ａ１井戸(南から)　15
写真６　第１面　Ａ２井戸(南から)　15
写真７　02－１調査区　第２－１面　南半(北東から)　23
写真８　第２－１面　B3畦畔とB4水口(南東から)　23
写真９　02－１調査区　第３－１面　北半(西から)　28
写真10　06－２調査区　第３－２面　西半(南から)　28
写真11　第３－２面　B15条里畦畔(南から)　28
写真12　06－２調査区　第１ｂ～８面　条里坪境(南から)　28
写真13　06－２調査区　第４面　東半(北西から)　31
写真14　02－１調査区　第４面　北半(南東から)　31
写真15　02－１調査区　第５面　南半(北東から)　34
写真16　06－２調査区　第５面　東半(北西から)　34
写真17　06－２調査区　第６面　西半(南から)　38
写真18　第６面　A116水口（南東から）　38
写真19　02－１調査区　第７面　南半(西から)　41
写真20　06－２調査区　第７面　西半(南から)　41
写真21　02－１調査区　第８面　北半(北東から)　43
写真22　06－２調査区　第８面　東半(南から)　43
写真23　02－１調査区　第３～７面　条里坪境(西から)　45
写真24　06－２調査区　第２～７面　条里坪境(南から)　45
写真25　第８面　B42土坑　断面(南東から)　46
写真26　第９面　A120坪境溝(西から)　53
写真27　第９面　溝群(B43･56～59)(南から)　53
写真28　第９面　B45溝(南から)　53
写真29　06－２調査区　第７～11ｂ層(南から)　53
写真30　02－１調査区　第10面　A391微高地(南から)　59
写真31　06－２調査区　第10面　東半　全景(南から)　59
写真32　第10面　B49･B85溝(南から)　59
写真33　第10面　A260ピット(東から)　59
写真34　第12面　A509流路　断面(南から)　88
写真35　第11ｂ面　B197流路　断面(東から)　88
写真36　第12面　B209高まり　断面(東から)　88
写真37　第12面　B199高まり、B200溝、B203高まり断面(東から)　88
写真38　06－２調査区　第12ｂ面　畝溝底部分(南から)　102
写真39　06－２調査区　第12層下面　畝溝検出状況(南から)　102
写真40　第13面　A633水口(南から)　110
写真41　06－２調査区　第13面　東半(北から)　110
写真42　B499流路　下部　断面(南から)　115
写真43　B267流路　東肩　断面(南から)　115
写真44　第13ｂ面　B266土坑(西から)　116
写真45　第13ｂ面　B287土坑(東から)　117
写真46　06－２調査区　第13ｂ面　西半(北東から)　120
写真47　06－２調査区　第13ｂ面　遺構集中部(南から)　120
写真48　第13面　B340土坑(南西から)　125
写真49　第14－２面　B428土坑(南から)　130
写真50　第13ｂ面　B390ピット(南から)　134
写真51　06－２調査区　第14－２面　西半(南東から)　139
写真52　第14－２面　A677土坑　出土土器(北から)　140
写真53　第14－２面　A678土坑　出土土器(東から)　140
写真54　02－１調査区　第14－２面　畦畔(東から)　144
写真55　第14－２面　A674溝･A676高まり(南から)　144
写真56　第14－２面　B429～436杭(南から)　145
写真57　第14－２面　B440溝　断面(東から)　149
写真58　06－２調査区　深掘トレンチ②　断面(南から)　162

# 巻頭図版目次

図版１
１．06－２調査区　第13ｂ面　東側　遺構集中部（南から）
２．06－２調査区　第14－２面　水田検出状況（南から）
図版２　06－２調査区　第10面　小形仿製鏡

# 図版目次

図版１　遺構
１．02－１調査区　第２－１面　北半　全景（北東から）
２．第２－１面　A57水口（北から）
図版２　遺構
１．06－２調査区　第２－１面　西半　全景（北東から）
２．第２－１面　B1・B2島畠と水田（北から）
図版３　遺構
１．06－２調査区　第２－１面　東半　全景（北西から）
２．02－１調査区　第３－１面　南半　全景（北東から）
図版４　遺構
１．02－１調査区　第３－２面　北半　全景（北東から）
２．06－２調査区　第３－２面　東半　全景（南から）
図版５　遺構
１．第３－３面　A101坪境（東から）
２．第３－３面　A105畦畔（南から）
図版６　遺構
１．02－１調査区　第４面　北半　全景（西から）
２．06－２調査区　第４面　西半　全景（南から）
図版７　遺構
１．02－１調査区　第６面　南半　全景（北東から）
２．06－２調査区　第７面　東半　全景（南東から）
図版８　遺構
１．02－１調査区　第８面　南半　全景（北東から）
２．第８面　B42土坑（北西から）
図版９　遺構
１．02－１調査区　第９面　南半　全景（北東から）
２．02－１調査区　第９面　南半　全景（南から）
図版10　遺構
１．06－２調査区　第９面　東半　全景（南から）
２．02－１調査区　第10面　北半　全景（南東から）
図版11　遺構
１．第10面　A391微高地（北から）
２．第10面　A242土坑・A243ピット（南から）
３．第10面　A243ピット（西から）
４．第10面　A282土坑（北から）
５．第10面　A374土坑（南東から）
図版12　遺構
１．06－２調査区　第10面　西半　全景（北東から）
２．06－２調査区　第10面　東半　全景（南から）
図版13　遺構
１．02－１調査区　第11面　南半　全景（南東から）
２．02－１調査区　第11面　畦畔（西から）
図版14　遺構
１．06－２調査区　第11面　西半　全景（南から）
２．06－２調査区　第11ｂ面　西側　全景（北東から）
図版15　遺構
１．02－１調査区　第12面　北半　全景（西から）
２．第12面　南半　水田域Ｂ（南東から）
図版16　遺構
１．06－２調査区　第12面　西半　全景（南から）
２．第12面　B213～219杭と立木・流木（南西から）
図版17　遺構
１．06－２調査区　第12面　東半　全景（南から）

２．第12面　A527水口（南東から）

３．第12面　B198溝（北から）

４．02－１調査区　第12面　土器437（南東から）

５．06－２調査区　第12面　土器460（北から）

図版18　遺構

１．06－２調査区　第12ｂ面　西半　全景（南から）

２．06－２調査区　第12ｂ面　畝溝（南東から）

図版19　遺構

１．02－１調査区　第13面　北半　全景（西から）

２．02－１調査区　第13面　南半　全景（西から）

図版20　遺構

１．第13面　A561～563畦畔、A633水口（西から）

２．06－２調査区　第13面　西半　全景（南から）

図版21　遺構

１．第13面　B335溝（南東から）

２．第12面　B240溝・第13面　B335溝断面（北西から）

図版22　遺構

１．06－２調査区

第13ｂ面　東側　土坑・ピット群（南から）

２．第13ｂ面　B340土坑（南から）

図版23　遺構

１．第13ｂ面　B341土坑（西から）

２．第13ｂ面　B342土坑（左）・B404ピット（右）（西から）

図版24　遺構

１．第13ｂ面　B349ピット（北西から）

２．第13ｂ面　B374土坑（南から）

図版25　遺構

１．第13ｂ面　B401ピット（南から）

２．02－１調査区　第14－１層　牙製垂飾508（南西から）

図版26　遺構

１．02－１調査区　第14－２面　南半　全景（西から）

２．06－２調査区　第14－２面　東半　全景（南から）

図版27　遺構

１．第14－２面　A674溝と水田域（南西から）

２．06－2調査区　第14－２面　畦畔検出状況（南から）

図版28　遺構

１．第14－２面　B440溝と水田（北西から）

２．第14－２面　B422溝　土器出土地点と断層（南東から）

図版29　遺構

１．06－２調査区　第14－２ｂ面　東半　全景（南から）

２．第14－2ｂ面　A691溝（東から）

３．第14－2ｂ面　B491ピット（南から）

４．02－１調査区　第14－２ｂ層除去面　足跡（南から）

５．02－１調査区　第14－２ｂ層中　土器出土状況（西から）

図版30　遺構

１．02－１調査区　第15面　北半　全景（南から）

２．06－２調査区　北側法面（南から）

図版 31　遺物

陶磁器、瓦、転用円板

図版 32　遺物

土製紡錘車、砥石、金属製品

図版 33　遺物

金属製品、小形仿製鏡、銭貨、土師器、須恵器

図版 34　遺物

須恵器、サヌカイト片、弥生土器、石庖丁

図版 35　遺物

石鏃、サヌカイト片、弥生土器

図版 36　遺物

弥生土器、土製紡錘車、石庖丁、サヌカイト片

図版 37　遺物

弥生土器、石鏃、サヌカイト石核、サヌカイト片

図版 38　遺物

縄文土器、牙製垂飾

図版 39　遺物

縄文土器、木製品

図版 40　遺物

木製品

図版 41　遺物

木製品

# 第１章　調査にいたる経緯と経過

## １. 池島･福万寺遺跡の位置と調査

池島・福万寺遺跡は、大阪府東部の八尾市福万寺町・福万寺北町と東大阪市池島町にかけて所在する遺跡である。条里地割が明瞭に残る地域として知られた地域で、現在の景観は、玉串川が天井川化し河道が固定された中世以降大きくは変化していないと考えられる。遺跡中央部を南北に流れる恩智川は、条里地割に組み込まれた直線的な人工河川と推定されている。遺跡の規模は、東西約 1.2 ㎞、南北 1.7 ㎞、総面積 130ha である。

図１　池島・福万寺遺跡の位置（大阪府東部東大阪市・八尾市付近）

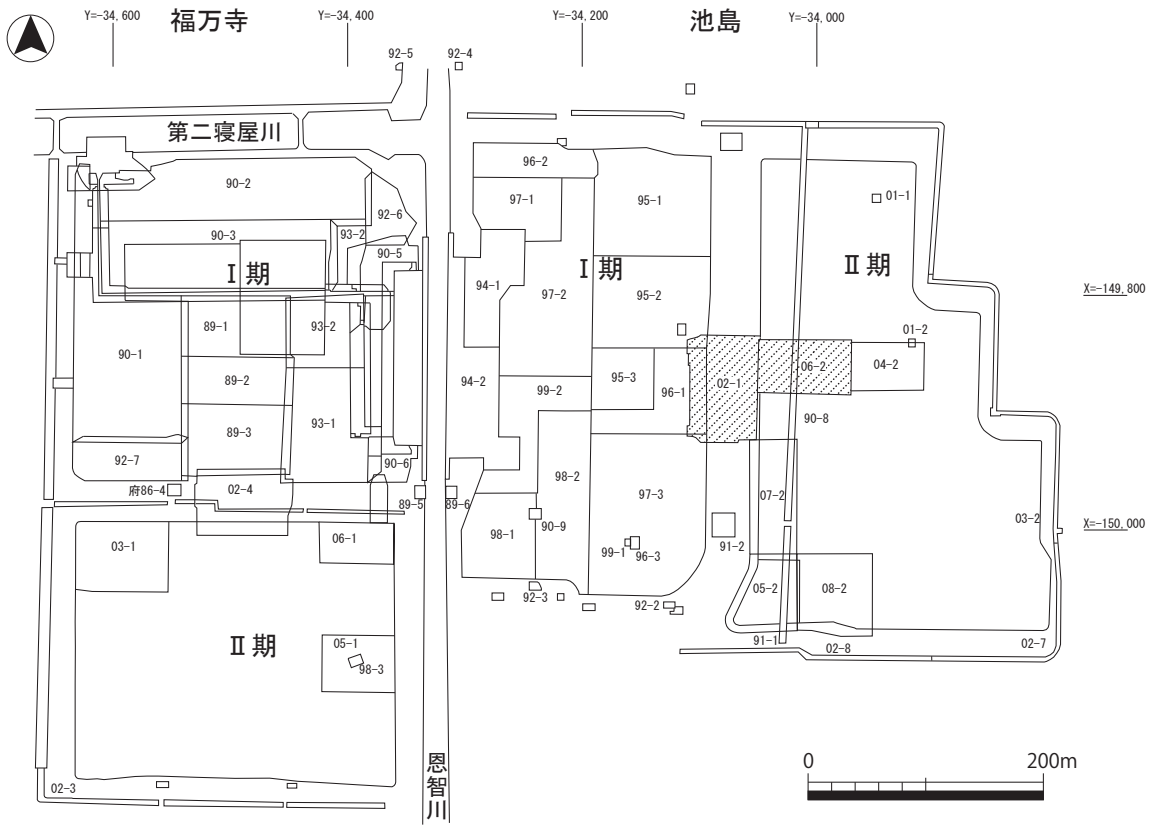



図２　池島・福万寺遺跡の調査区配置

当遺跡では、大阪府による恩智川治水緑地建設に伴って、発掘調査が 1982 年度より継続して実施されている。恩智川治水緑地建設にあたっては、遺跡範囲全体のおよそ３分の１の 40.2ha が調査対象地となっている。

これまで当センターが実施した発掘調査では、遺構・遺物の調査とともに地形環境との関連性やその変遷について積極的に検討を行ってきた。そのなかでは関連諸科学研究との連携に大きな力を注ぎ、発掘調査データの蓄積と検討から、現在までに福万寺地区を中心に時期的な景観変遷の理解が進んでいる。これまでの調査成果については概要報告書および報告書等が刊行されている。

## ２. 調査の経緯

池島・福万寺遺跡の発掘調査は、多目的遊水地としての恩智川治水緑地の建設に先立って行われているもので、下流の大阪市および周辺の市町村を洪水被害から守るため、豪雨時には増水した河川の水を一時的に貯留する機能も持っている。

当遺跡では、治水緑地建設計画以前にも東大阪市遺跡保護調査会による調査が行なわれている。治水緑地建設にあたり、1981 年から大阪府教育委員会により試掘調査２箇所、発掘調査が５箇所で行われた。その後、1989 年から大阪府教育委員会の指示により福万寺Ⅰ期地区・池島Ⅰ期地区の池床部の調査は、財団法人大阪文化財センター（現　財団法人大阪府文化財センター）が行うことに決定した。福万寺Ⅰ期地区については 1989 年４月から調査を開始し、1995 年３月に調査を終了した。また池島Ⅰ期地区については、1989 年から当センターによって部分的な確認調査が実施され、1994 年から施設部といわれる恩智川に面した越流堤部分から調査を開始し、2002 年３月をもって池床部のすべての調

査を終了している。これらの調査の詳細については、既に福万寺Ⅰ期・池島Ⅰ期の両地区の総括報告書が刊行されており、それらを参照されたい。

2002年2月からは、池島Ⅰ期地区の調査の終了に合わせて、当調査の関わる池島Ⅰ・Ⅱ期地区間の諸施設建設に先立つ調査が開始された。福万寺Ⅰ・Ⅱ期地区間の諸施設の建設に伴う調査も2003年2月からはじまり、現在では池島Ⅱ期・福万寺Ⅱ期の両地区とも池床部の調査が進行している。両Ⅱ期地区については、各調査区毎に整理作業が実施され、現在までに7冊の報告書が刊行されている。

本書に関わる調査は、2002年2月22日に大阪府土木部と当センターが契約を締結した2002年2月22日から2004年2月27日の3年度にわたる債務契約に基づく発掘調査（事業名称：池島遺跡その8）と、2006年8月31日に大阪府土木部と当センターが契約を締結した2006年9月1日～2008年5月30日の3年度にわたる債務契約に基づく発掘調査（事業名称：池島・福万寺遺跡Ⅱ発掘調査その6）の発掘調査の2件である。

その8については、既に2006年2月に概要報告書を刊行しているが、その後の整理作業の進捗により、若干の異同が生じてきた。そのため、この事業については本書をもって正式報告とする。以下、調査区ごとに調査の経過を詳述する。

池島遺跡その8（02－1調査区）

当地区の現地での調査は2002年6月3日に開始し、2004年2月27日をもって終了した。その経過を記すと、2002年8月29日に近世後期の水田景観の良好に残る第2－1面南半の航空測量に伴う空撮を行い、続いて同年9月5日に第2－1面北半の空撮を行った。同年11月4日に第3－3面北半の空撮を行い、同7日に同面南半の空撮を行った。続く同年11月22日には第4面南半、同28日には同面北半の撮影を行った。2003年3月4日には古墳時代の遺構面である第10面南半の撮影を行い、続いて同月13日に同面北半の空撮を行った。以降、調査は弥生時代の各面に及び、同年3月18日には弥生時代後期の水田面第11面南半の空撮を行い、続いて同27日に同面北半の空撮を行った。同年5月10日には弥生時代中期の第12面北半の空撮を行い、同年6月7日には同面南半の空撮を行った。この後、同年8月7日に第13面北半、同年9月1日に第13面南半、同年10月11日に第14－2面南半、同月27日に第14－2面北半の空撮を行い、最後に橋脚部分について縄文時代後期の遺構面の調査を行った。（廣瀬）

池島・福万寺遺跡Ⅱその6（06－2調査区）

当調査区の現地での調査は2006年10月6日に開始し、2008年4月30日で終了した。まず近代・近世の遺構面を確認するためのトレンチ調査を実施し、断面記録を作成した。その後近代の耕作土および近世の洪水堆積土の機械掘削を2006年12月18日～22日に行い、2007年1月5日より遺構面の本格的な調査を開始し、近世～縄文時代晩期までの約20の遺構面を調査した。空中写真測量については、第1回目を2007年3月8日に第3－1面で実施した。その後、中世の第3－2面（3月）・第4面（4月）、古代の第9面（6月）、古墳時代の第10面（7月）について実施した。弥生時代については、後期の第11面（7月）、中期の第12面（10月）、前期末～中期初頭の第13面（11月）を実施した。そして最終回の空中写真測量を縄文時代晩期～弥生時代前期中葉の第14－2面について2008年2月5日に実施した。尚、弥生時代前期末～中期初頭の第13ｂ面において、集落跡を検出した。この成果を受け、2007年12月8日に当該面の現地公開を実施し、約100人が現地を訪れた。また、調査期間中に大阪府立弥生文化博物館主催の発掘体験や、中学生・高校生の体験学習・見学会を実施した。（飯田）

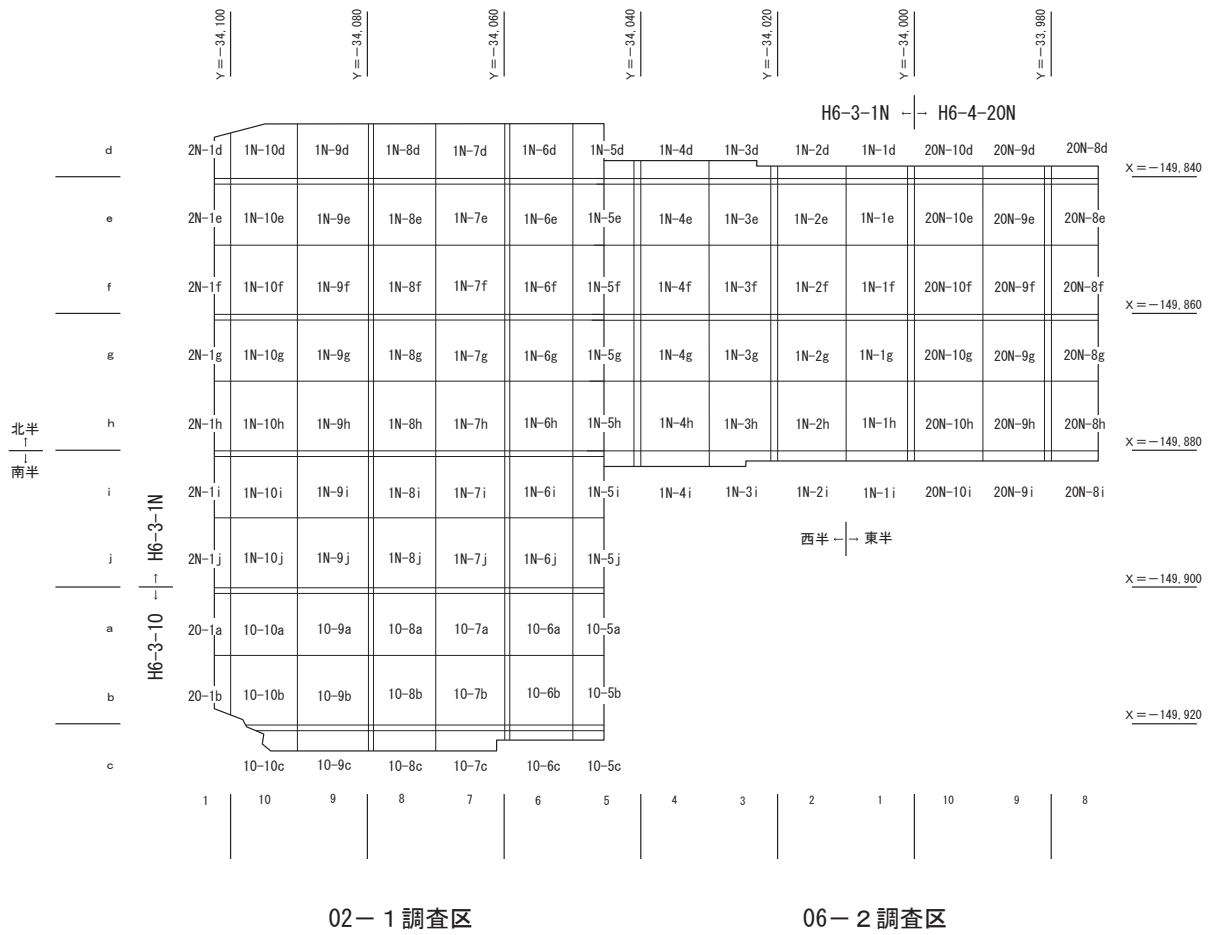



図３　02 － 1 ・06 － 2 調査区の地区割り

## 3．調査方法

池島・福万寺遺跡では、各調査区に調査開始年度と請負契約に記された工区数字の順に略称を付与している。本書に関わる調査は、それぞれ、

池島遺跡（その８）　⇒　02 － 1 調査区

池島・福万寺遺跡Ⅱ（その６）　⇒　06 － 2 調査区

と呼称され、本書では文中に関連する周辺調査区をも含めてこうした呼称に統一して説明を行う。

通常、当遺跡の工期が複数年度にまたがる調査にあたっては、各年度ごとに調査区を設定し分割して調査を行うが、面積の関係上当調査区では調査区を１つのトレンチとして東半・西半とに分けて調査を行った。写真撮影、測量などについては、この東半・西半を境に東西に分けて調査を行っている。

調査にあたっては、当センターの 2003 年８月刊行の『遺跡調査基本マニュアル（暫定版）』に沿って調査を行っている。調査は世界測地系に基づいて調査を行い、本報告にあたってもすべてその方式に従った。しかし、今までに刊行されている当遺跡に関わる『池島・福万寺遺跡』１・２・３の報告書では日本測地系によって位置関係が報告されている。『池島・福万寺遺跡』４・５・６・７の報告書および本書に関して先述のように世界測地系を採用して位置情報を記載しているため、位置の照合にあたっては注意を要する。なお、世界測地系による座標値は日本測地系による座標に比べて、およそ南に 730m、東に 550m ずれるので注意されたい。

当センターの発掘調査においては、通常、まず現代の盛土とその下の用地買収以前の耕作土をバックフォーにて除去し、そこから人力掘削を開始する。しかし、池島・福万寺遺跡Ⅱ期地区調査においては、近代から近世遺構面については、幅２ｍのトレンチ調査を行ない確認を行なったうえで、近世後期の遺構面の直上まで機械掘削を行なう「人力掘削３」という調査掘削作業を行うことになっている。このため、06 － 2 調査区の調査開始にあたっては、世界測地系に沿って、図３に示したように X= － 149,840・149,860・149,880 ライン、Y= － 33,980・34,000・34,020 の各ライン南にトレンチを設定し掘削して、分層を行い調査を進め機械掘削の深度の確認を行うこととした。ただし、当調査区の場合、部分的に現代の盛土が分厚く堆積していたことから、まずこの部分の除去作業をバックフォーにて行い、この後に人力掘削３の調査掘削を行った。一方、02 － 1 調査区については、機械掘削にて、現代表土を除去し、ここを機械掘削終了面として調査を開始している。

調査区の区割りについては、世界測地系に準じた国土座標第Ⅵ系に基づき、Ｈ６と表記される第Ⅰ～Ⅱ区画、2,500 分の 1 地形図の北東隅を起点とした 1N・20N などと表記される 100m 四方の区画の第Ⅲ区画、それをさらに 10 等分し南北軸にアルファベット小文字（ａ～ｊ）、東西軸にアラビア数字（1 ～ 10）を与えた 10m 四方の区画のⅣ区画を用いて、遺物の取り上げなどの位置を表記して調査を進めた。具体的には「Ｈ６－３－ 1N － 6j」などと表記される。なお、こうした調査方法のため現地調査を含む本報告に関わるすべての北は座標北となっている。また、標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準としている。

各遺構面の測量にあたっては、縮尺 100 分の 1 の平板測量を基本とし、周辺調査区との関連を含めた重要な面に関しては航空測量に伴う空撮を実施した。遺構図に関しては、各遺構によって任意の縮尺を設定し、平面図・断面図などを作成した。

調査は部分的な遺構面の検出を含めると 02 － 1 調査区では 25 面、06 － 2 調査区では 20 面の調査を行っている。このなかで、第 11 層以下の各層については土壌層上面とともに下面の自然堆積層上面である「ｂ面」の調査を行っている。ｂ面は土壌化が及ばなかった部分の上面である。「ｂ面」の調査は、土壌層上面では検出できない最終景観以前の遺構の痕跡や自然地形の復元を目的として行った。（廣瀬）

# 第２章　地理的・歴史的環境

## １．地理的環境

当遺跡は、河内平野の南東部に位置し、生駒山西麓から派生する扇状地と低地との境界に立地する。生駒山から流下する箕後川・長門川などの小河川、および旧大和川水系の玉串川・恩智川などがもたらす土砂が、遺跡形成に多大な影響を与えてきた。高橋 学氏は、河内平野沖積面の地形について類型化しているが、当遺跡はその類型のうちの三角州Ⅰａ帯、つまり弥生時代中期頃までに河川の搬出した土砂で陸化した場所に位置する（高橋 1991）。河角龍典氏は、当遺跡周辺のさらに詳細な微地形分類を試み、生駒山西麓の扇状地帯、自然堤防、後背湿地、旧河道について形成時期から類型化している（河角 1999）。この類型では、池島Ⅱ期地区の位置は鎌倉時代以降に形成された扇状地帯と天井川化した玉串川との間の排水不良になりやすい後背湿地に該当する。

河内平野の古環境を復元した梶山彦太郎氏・市原　実氏によれば（梶山・市原 1986）、両氏の設定した時代区分の内の「河内湾Ⅰの時代」（約 7000 ～ 6000 年前）は縄文海進の時期に当る。当遺跡でも池島Ⅰ期地区において海成層がみられ、海成層下底近くで約 6300 年前のアカホヤ火山灰が確認されている。また、この海成層最上部での放射性炭素年代が 4300cal.yr.B.P.（縄文時代中期初頭）であり、当遺跡出土の最古の土器が縄文時代中期末葉の北白川Ｃ式であることから、中期以降に周辺が陸化していくとされる（高橋 1997、河角 2002）。縄文時代晩期から弥生時代前期には、河内潟は河内湖へと淡水化し、湖岸線も後退して、当遺跡付近は低湿地へと変貌する（地学団体研究会大阪支部編 1999）。この低湿地に初期水田が営まれるようになる。弥生時代中期には、生駒山西麓から流下する小河川のもたらす土砂により、遺跡周辺はさらに陸地化が進む。弥生時代後期、河内湖の水面の上昇や河川の氾濫の頻発に伴い、当遺跡周辺の低地部の集落は、生駒山麓の扇状地など比較的高い場所へと後退していく。古墳時代には、当遺跡の集落跡は、弥生時代中期後半に形成された微高地や、弥生時代後期前半の流路堆積物などにより生じた微高地などに営まれていた。古代から中世にかけては、佐堂遺跡や水走遺跡で

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 意岐部遺跡 | 23 | 河内寺跡 | 45 | 縄手遺跡 | 67 | 心合寺山古墳 | 89 | 跡部遺跡 |
| 2 | 菱江寺跡 | 24 | 松本塚古墳 | 46 | えの木塚古墳 | 68 | 西の口遺跡 | 90 | 跡部銅鐸出土地 |
| 3 | 吉田遺跡 | 25 | 丸山古墳 | 47 | 上六万寺遺跡 | 69 | 楽音寺跡 | 91 | 太子堂遺跡 |
| 4 | 塚山古墳 | 26 | 神津嶽祭祀遺跡 | 48 | 船山遺跡 | 70 | 萩山古墳 | 92 | 勝軍寺跡 |
| 5 | 額田寺跡 | 27 | 水走氏館跡 | 49 | 桜井古墳群 | 71 | 大光寺山遺跡 | 93 | 木の本遺跡 |
| 6 | 辻子谷遺跡 | 28 | 五条古墳 | 50 | 岩滝山遺跡 | 72 | 禿山古墳 | 94 | 田井中遺跡 |
| 7 | 法通寺跡 | 29 | 客坊山遺跡群 | 51 | 二本松古墳 | 73 | 西の山古墳 | 95 | 竜華寺跡 |
| 8 | 舳古墳群 | 30 | 五条山古墳群 | 52 | 往生院金堂跡 | 74 | 花岡山古墳 | 96 | 弓削寺跡 |
| 9 | 若宮古墳群 | 31 | 市尻遺跡 | 53 | 池島東遺跡 | 75 | 花岡山遺跡 | 97 | 郡川西塚古墳 |
| 10 | 正興寺山遺跡 | 32 | 山畑遺跡 | 54 | コモ田遺跡 | 76 | 向山1号墳 | 98 | 郡川東塚古墳 |
| 11 | 神並古墳群 | 33 | 瓢箪山古墳 | 55 | 北屋敷遺跡 | 77 | 向山2号墳 | 99 | 教興寺跡 |
| 12 | 夫婦塚古墳 | 34 | 五里山古墳群 | 56 | 西代遺跡 | 78 | 向山瓦窯跡 | 100 | 恩智弥生時代遺跡 |
| 13 | 千手寺山遺跡 | 35 | 巨摩廃寺遺跡 | 57 | 半堂遺跡 | 79 | 双子塚古墳 | 101 | 恩智銅鐸出土地 |
| 14 | 墓尾古墳群 | 36 | 小若江遺跡 | 58 | 大賀世古墳 | 80 | 愛宕塚古墳 | 102 | 恩智城跡 |
| 15 | 辻子谷古墳群 | 37 | 新上小阪遺跡 | 59 | 浄土寺谷古墳群 | 81 | 薗光寺跡 | 103 | 大県郡条里遺跡 |
| 16 | 額田山古墳群 | 38 | 玉串遺跡 | 60 | 常光寺古墳 | 82 | 核山古墳 | 104 | 山ノ井遺跡 |
| 17 | つぼ塚古墳 | 39 | 花園遺跡 | 61 | 貝花遺跡 | 83 | 中谷山古墳 | 105 | 岩戸古墳群 |
| 18 | みかん山古墳群 | 40 | 花屋敷遺跡 | 62 | 浄土寺跡 | 84 | 穴太廃寺 | 106 | 信貴霊苑内古墳 |
| 19 | 豊浦谷古墳群 | 41 | 北鳥池遺跡 | 63 | 萱振1号墳 | 85 | 久宝寺寺内町 | | |
| 20 | 鵜立遺跡 | 42 | 五合田遺跡 | 64 | 山本町北遺跡 | 86 | 東郷廃寺 | | |
| 21 | 狐塚遺跡 | 43 | 段上遺跡 | 65 | 鏡塚古墳 | 87 | 高麗寺跡 | | |
| 22 | 皿池遺跡 | 44 | 下六万寺遺跡 | 66 | 心合寺跡 | 88 | 渋川廃寺 | | |

遺跡地名（番号は図４に対応）

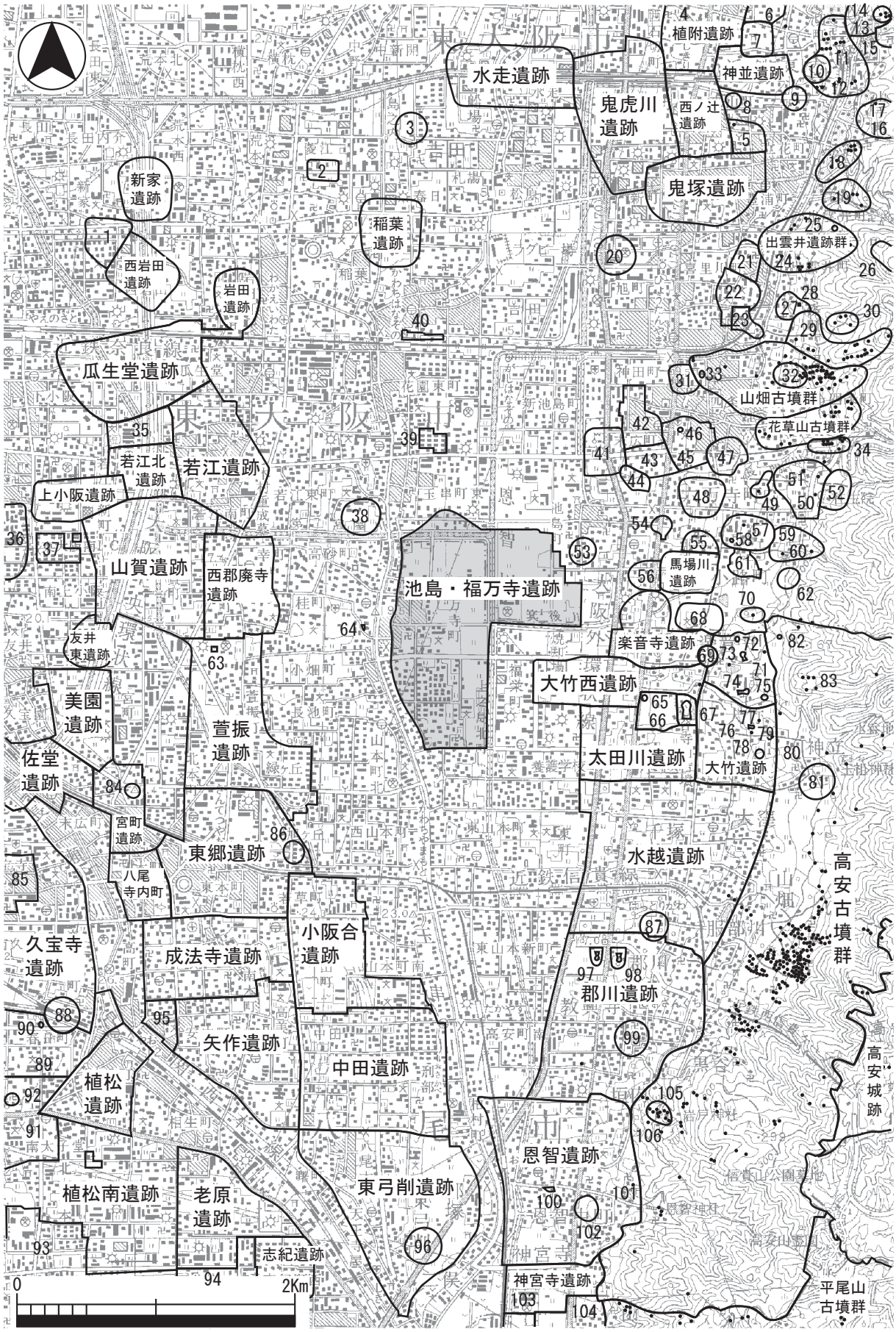

植附遺跡
水走遺跡
神並遺跡
鬼虎川遺跡
西ノ辻遺跡
鬼塚遺跡
新家遺跡
稲葉遺跡
西岩田遺跡
岩田遺跡
出雲井遺跡群
瓜生堂遺跡
山畑古墳群
花草山古墳群
若江北遺跡
若江遺跡
上小阪遺跡
山賀遺跡
西郡廃寺遺跡
池島・福万寺遺跡
馬場川遺跡
友井東遺跡
楽音寺遺跡
大竹西遺跡
美園遺跡
萱振遺跡
太田川遺跡
大竹遺跡
佐堂遺跡
宮町遺跡
東郷遺跡
八尾寺内町
水越遺跡
高安古墳群
久宝寺遺跡
成法寺遺跡
小阪合遺跡
郡川遺跡
矢作遺跡
中田遺跡
植松遺跡
高安城跡
恩智遺跡
植松南遺跡
老原遺跡
東弓削遺跡
志紀遺跡
神宮寺遺跡
平尾山古墳群
0
2Km

図４　周辺の遺跡分布図

堰や堤防の跡が確認されており、地方豪族や国司の支配下での局地的な河川改修により、この地域一体の川筋が固定されていった（地学団体研究会大阪支部編　前掲書）。

旧大和川水系の一つであり、遺跡西側を流れる玉串川は、1704 年の大和川付け替え直前のルートを流れるようになった時期を、古代の条里型地割の施行以降とする説（高橋 1995）と、古墳時代中期とする説（阪田 1997）がある。この川は中世後半から近世初頭にかけて天井川化し、度重なる氾濫による堆積物をもたらし、その土砂を利用して島畠が営まれた（高橋 1995）。また、当遺跡のほぼ中央を流れる恩智川については、周囲における条里遺構の坪境線の方向などから、10 世紀前半から 12 世紀後半頃のいずれかの時期に人工的に設定された排水河川であったと考えられている（井上 2002）。

## ２．歴史的環境

生駒山西麓では、神並遺跡、正興寺山遺跡、山畑遺跡などで後期旧石器時代のナイフ形石器が採集されており、この頃から人間の活動の痕跡が認められる。

縄文時代早期には、神並遺跡で集石土坑や土偶が確認され、集落の存在が想定されている。恩智遺跡では前期から晩期の各時期の土器が出土し、縄文時代の拠点的集落と評価されている。後期には、縄手遺跡で竪穴住居や埋甕などが確認されており、集落が継続的に営まれていたようである（大野 1997）。

縄文時代晩期前半には馬場川遺跡や恩智遺跡などの集落が扇状地に営まれるが、後半には鬼虎川遺跡、水走遺跡などの集落が沖積地にも出現する。鬼虎川遺跡の東隣の鬼塚遺跡では、滋賀里Ⅳ式後半期の土器に籾圧痕が認められ、水稲耕作の存在を示唆する。しかし明瞭な水田遺構が確認できるのは弥生時代前期中葉からであり、当遺跡のほか、若江北遺跡、山賀遺跡、志紀遺跡などで初期水田が検出されている。

弥生時代前期前葉から中葉には、山賀遺跡、跡部遺跡、中田遺跡、大竹西遺跡など、主に平野部に位置する遺跡で集落が営まれ始める。ただし、これら集落の多くは前期の間に廃絶し、中期には鬼虎川遺跡、亀井遺跡などの大規模環濠集落や、瓜生堂遺跡、水越遺跡、恩智遺跡などの拠点的集落が成立する。また、大阪市加美遺跡や瓜生堂遺跡の方形周溝墓のような規模の卓越した墳墓も中期に出現している。

弥生時代後期には、沖積地の環濠集落が衰退し、生駒山西麓の扇状地周辺において小規模な集落が数多く認められるようになる。鬼塚遺跡、山畑遺跡、岩滝山遺跡、馬場川遺跡、大竹遺跡など、当遺跡東側の山麓沿いに集落が分布する。このうち山畑遺跡と岩滝山遺跡の集落は、標高 80 ～ 100 mの山麓に突如出現し、弥生時代の終わりに姿を消す典型的な高地性集落である。遺跡西方の平野側では、亀井遺跡、田井中遺跡、恩智遺跡などの集落が後期に存続する一方、新たに若江北遺跡、西郡廃寺遺跡、萱振遺跡、中田遺跡、久宝寺遺跡、弓削遺跡などの集落遺跡が現れる。

古墳時代の庄内式期から布留式前半期には、弥生時代後期以来の扇状地の集落群が、馬場川遺跡、水越遺跡などを除いて衰退するのに対し、沖積平野の集落群は飛躍的に発達し、他地域に先駆けて庄内形甕がみられる。とりわけ長瀬川右岸の東郷遺跡、成法寺遺跡、小阪合遺跡、矢作遺跡、中田遺跡、東弓削遺跡は、「中田遺跡群」として 1 遺跡で把握すべきとされる大規模集落であり（山田 1994、市村 2006）、加美遺跡、久宝寺遺跡の大集落とともに卓越した存在である。これら遺跡からは瀬戸内海沿岸地域や山陰地域などの外来系土器が多量に出土し、列島規模での活発な交流が遺跡群の隆盛を裏付ける。

布留式後半期には、平野部の大集落群は萱振遺跡や久宝寺遺跡の一部などを除いて姿を消す。ただし小阪合遺跡では、最近の調査で当該期の河川跡から祭祀遺構が発見され、内行花文鏡、鹿角装刀剣、鉄鉾、玉類、有孔円板、ミニチュア土器などが出土した（樋口 2007）。一方、生駒山西麓の扇状地では、

前期から中期にかけて楽音寺・大竹古墳群が造営される。向山古墳、西ノ山古墳、花岡山古墳、中ノ谷古墳、心合寺山古墳、鏡塚古墳の順に、前期から中期まで首長墓が築造され続ける。心合寺山古墳では、導水施設を表現した家形埴輪が出土している。低地部では、心合寺山古墳にやや先行して、靫形埴輪の出土で知られる萱振１号墳や、精巧な家形埴輪が出土した美園古墳などの小形の方墳が確認されている。

古墳時代中期から後期にかけては、当遺跡の福万寺Ｉ期地区でも集落跡が確認されている。移動式竈や羽釜・甑からなる炊飯具セットや韓式系土器が出土し、渡来系集団の居住が想定されている（江浦1991）。周辺の集落遺跡でも、北鳥池遺跡、縄手遺跡などで韓式系土器が、また郡川遺跡では馬歯や製塩土器など馬匹生産を窺わせる遺物が出土しており、これら集落の展開に渡来人の関与が想定される。

郡川遺跡内では、中期終わりから後期初頭頃にかけて、当地域では先駆けて横穴式石室を採用している前方後円墳の郡川西塚古墳と郡川東塚古墳が築かれる。５世紀末から７世紀初頭頃には、山畑古墳群、高安古墳群などの群集墳が生駒山西麓沿いに造営される。高安古墳群には、ミニチュア炊飯具形土器を副葬する古墳がみられ、渡来系集団の関わりが看取される。そして６世紀後半～末には、全長 15 mを越す大阪府最大級の横穴式石室を持つ山畑２号墳や愛宕塚古墳が築造された。

７世紀代、生駒山西麓の東高野街道沿いでは、古代寺院が数多く建立される。河内寺廃寺では素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しており、７世紀前半頃にはこの地域に仏教文化が浸透していた。当遺跡の南東１km にも心合寺跡が所在し、７世紀中葉頃の単弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している（大阪府立近つ飛鳥博物館編 2007）。７世紀後半には高安山中に古代山城の高安城が、白村江の戦いを契機に 667 年に築城される。調査により倉庫と考えられる礎石建物跡が確認されている。

当遺跡付近は、現地表面に条里型地割が良好に遺存していることで知られている。発掘調査から、この地割は 10 世紀前半まで遡り、これとは別の正方位地割が７世紀中頃から後半にかけて施行された可能性が想定されている。この７世紀代の地割は、律令国家主導による施行とされており、中河内では当遺跡のほか、志紀遺跡や美園遺跡などで７世紀代に遡る条里遺構が確認されている（市村 2007）。

平安時代には、当遺跡一帯は荘園「玉櫛荘」の範囲に該当する。「玉櫛荘」は当初摂関家の所領であったが、1137（保延３）年、宇治平等院の建立の際、平等院に寄進され、以後室町時代にかけて平等院領となっている。先述の 10 世紀前半施行の条里型地割は、この荘園開発との関わりが指摘されている。

鎌倉時代に至り、この地域は開発領主の水走氏の所領となる。水走氏の地名が残る東大阪市水走遺跡では、12 世紀後半の大溝や 13 世紀前半の土壙墓、13 世紀中葉から 15 世紀の集落が確認されている（若松・上野 2002）。池島・福万寺遺跡では、（財）八尾市文化財調査研究会による調査で 13 世紀前半から 15 世紀前半の掘立柱建物、井戸、土坑などが確認されており、屋敷地跡と考えられている。

南北朝時代、玉櫛荘は楠木氏の支配下に入り、当遺跡周辺も同氏の拠点であったようである。南北朝合一の後は、河内国守護の畠山氏がこの一帯を支配するようになる。当遺跡の北西約 2km の若江遺跡では、同氏が築いた若江城の遺構と考えられる 15 世紀前半の溝や井戸、土坑などが確認されている。若江城は、その後 16 世紀中頃に三好氏の居城となり、この時期の幅５m以上の溝が巡る方形区画や建物跡、礎石や石垣など、城郭に相応しい遺構が検出されている。

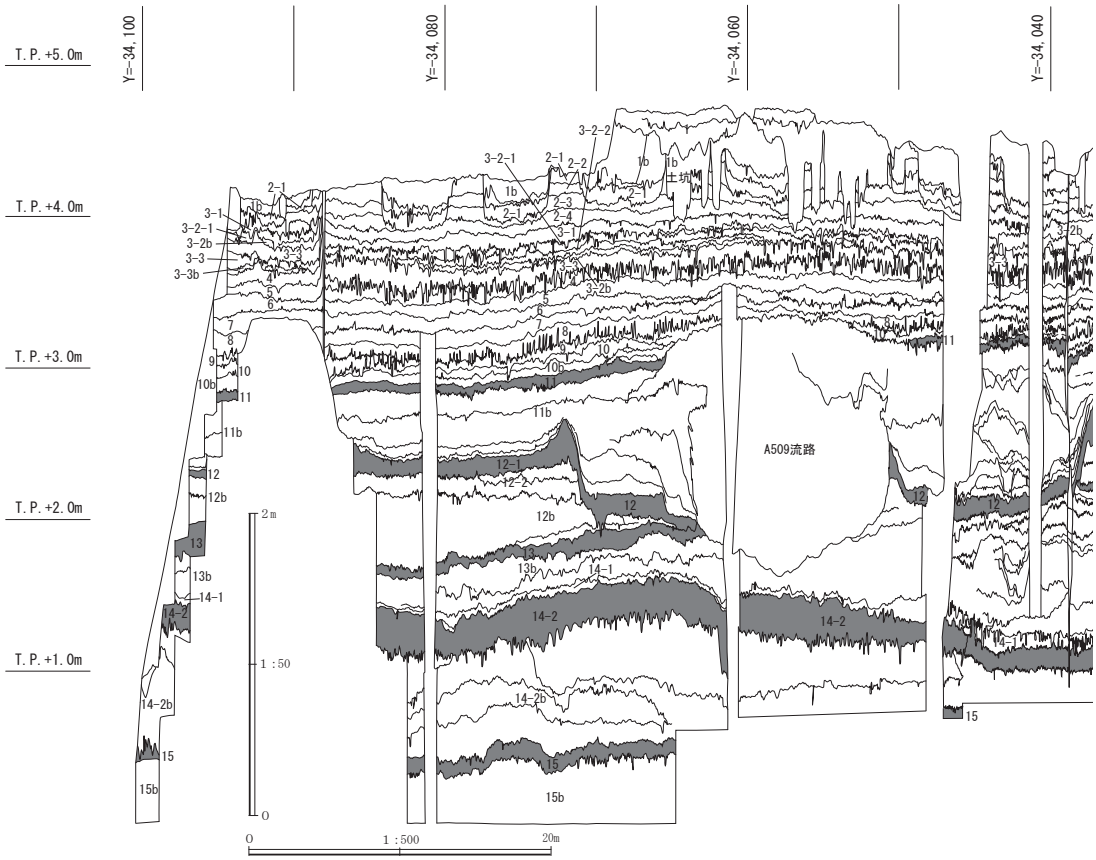
江戸時代に入ると、「池ノ島村」は幕府領に、「福万寺村」は狭山藩北条氏領となる。宝永元（1704）年の大和川付け替え工事は、当地域一帯の農業に多大な影響をもたらした。旧河床地帯に多くの畑地が開発され、砂地に適している木綿の栽培が盛んに行なわれるようになる。当遺跡でも木綿栽培などが行なわれたと考えられる島畠が多数確認されている。（飯田）

# 第３章　基本層序

本報告に関わる調査にあたっては、池島Ｉ期地区との連続性に注意を払い、基本的に層序認識の統一を図った。しかし、06 －２調査区の調査では古代以降の堆積環境が既往の調査成果と異なる部分があり、その層序的な連続性を十分に理解したとは言えない。調査では、水成堆積物による旧地表面の埋積、地表面となった水成堆積物の上部の撹乱・土壌化を１サイクルとした繰り返しの結果とし、層位的な状況を示し、各層の土壌とその母材を認識することに力点をおいてきた。このため、各層の土壌部分をａ層、母材となった自然堆積層をｂ層として呼称し、同一層番号のａ層・ｂ層（例：第２－１ａ層・２－１ｂ層）と呼称して調査を行ってきた。以下各層の状況を記述する。

【第１層】近・現代の作土層で、下部の第１ｂ層を攪拌したオリーブ褐色2.5 Ｙ4/3 の粗砂を含む砂質シルトのａ層と、色調が部分により異なる橙色5YR6/8 ～黄橙色10YR7/8 の極細砂～極粗砂からなるｂ層である。遺跡全域で確認されるが、部分により層厚は異なり、厚いところではｂ層が50cm を超える。

【第２層】色調は部分により相違しているが、極細砂～中砂を多く含む近世から中世末にかけての砂質系の土壌化層である。およそ４層に分層が可能で、第２－１層：黄灰色2.5Y4/1・第２－２層：灰色5Y5/1・第２－３層：灰色7.5Y5/1・第２－４層：灰オリーブ色7.5Y5/2 の部分により極細砂から中砂を多く含む層であり、遺存状況は地域により異なっている。大きく第２－１・２－２層と第２－３・２－４層に分けることが可能である。また、非常に部分的ではあるが第２－３ｂ層を検出した部分がある。また、第２－４ｂ層は、わずかにしか見られない部分もあるが、下部に粘性の強い粘土～シルト、上部に極細砂からなっている。



【第３層】シルト～細砂を主体とした土壌化層と自然堆積層からなる層である。おおよそ３層に分層可能で、第３－１層は黄褐色2.5Y5/3 系のシルト混砂質土、第３－１ｂ層は灰オリーブ色7.5Y6/2 ～4/2 のシルト～粘土であった。第３－２層は暗青灰色5B4/1 ～青灰色10BG5/1 の極細砂～細砂混シルトの層、第3－２ｂ層は、暗青灰色5BG4/1 の粘土～粘質シルトであった。第３－３層は青灰色5B4/1 の粘土～シルトを主体とする粘性のあるシルトの土壌であり、第３－３ｂ層は、明黄褐色10YR6/6 ～2.5Y7/6 の極細砂～細砂であった。南北方向の条里畦畔を境に土質・色調も相違するなど、ベースに含まれる氾濫堆積物の状況により土質が変化している。東ほど粘性が強くなっていく。02 －1 調査区では、最下部に粘性の強いシルトと細砂の自然堆積層が遺存している部分もあった。

【第４層】オリーブ黒色10Y3/1 の粘土～シルトで構成され、細砂～中砂が混じる。02 －1 調査区では上層に比べて粘性が強く大きく変化したが、東ほど上層の粘性が強く類似した土壌になり識別が難しかった。02 －1 調査区では、前述の第３層のｂ層が遺存している部分で、良好に同層が残っている。

【第５層】暗緑灰色7.5GY4/1 の中砂～粗砂の混じる粘土～シルトで構成され、上部に酸化カルシウムの見られる部分がある。上下ともｂ層を挟まず遺存状況は悪い。西ほど酸化カルシウムが多く層下部が分かりにくく、第４層との境が明瞭ではない。

【第６層】緑黒色10GY2/1 の粘土～シルトの層である。粘性は強いが東ほど細砂～中砂を多く含む。上下ともｂ層を挟まず遺存状況は悪い。

【第７層】暗灰色N3/ の粘土～シルトである。地形的に高くなる東ほど砂質混じりで、全体の土質も変化してゆく。なかでも、06 －２調査区の坪境より東の十七ノ坪は、下層の砂粒がかなり巻き上げられ、土質が大きく変化し、砂混じりのシルトである。また、上下ともｂ層を挟まず遺存状況は悪いが、東に行くほど特に悪くなり、層厚も薄くなっていく。

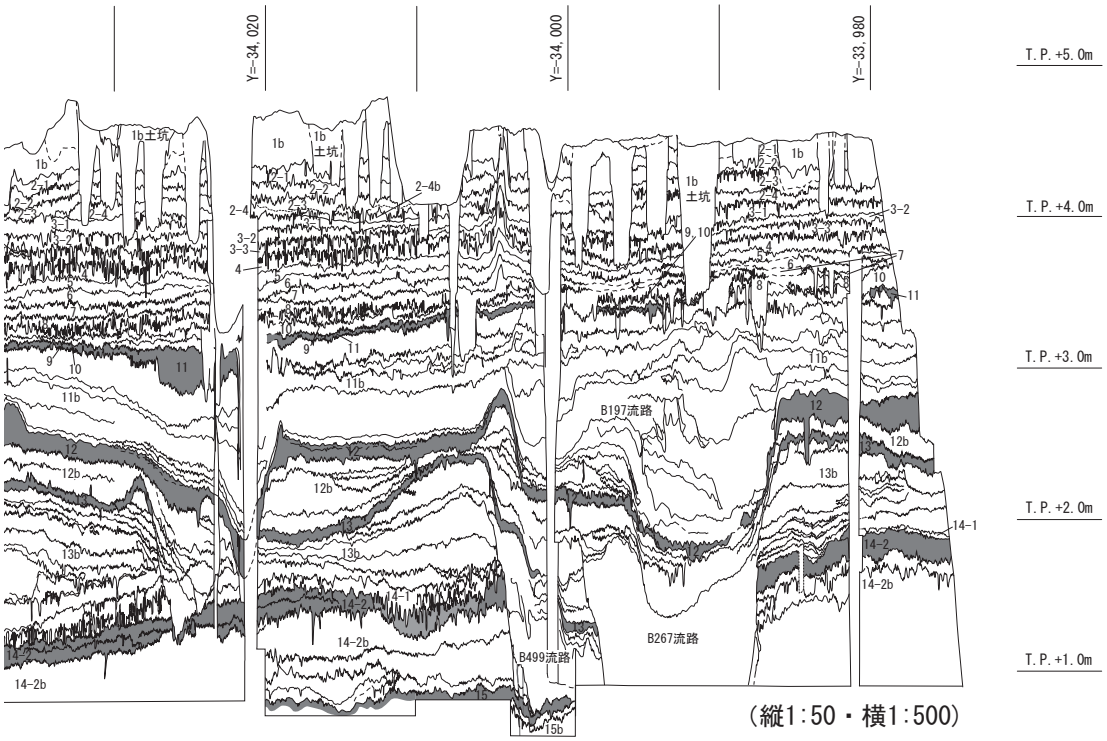



図５　調査地断面図 (X= － 149,860 ライン )

【第８層】青灰色 10BG5/1 の極細砂～細砂の混じる古代と考えられる粘土～シルト層である。東ほど砂質が混じるとともに、第７層同様に層厚も薄くなり、遺存状況は悪くなる。地震による地形の変形構造が見られ、上下層と合わせて交じり合ったような状況を呈する部分もあった。

【第９層】オリーブ灰～青灰色10Y5/2 ～10BG5/1 の極細砂～細砂の混じる粘土～シルト層である。第８層に比べて色調が大きく変化し、色調が明るくなるとともに、土質も大きく変化している。上層の地震による変形の影響のためか遺存状況は非常に悪く、ほとんど識別が不可能な部分もみられる。

【第 10 層】オリーブ灰～暗灰色10Y5/2 ～N3/ の古墳時代の層と考えられる粘土～シルト層である。06 －２調査区東側では極細砂～細砂を多く含むのに対し、西側では粘性が強く、砂が比較的少ないという違いが見られる。02 －１調査区では粘性が強いが、南の微高地ではやはり砂が多く含まれている。また、東側ほど上層からの削平で遺存状況は悪い。

【第 11 層】灰色N4/ の有機物を多く含む粘土～シルトのａ層と暗オリーブ色5GY4/1 の極細砂の多く含まれるシルト質層と灰白～浅黄色2.5Y8/1 ～7/3 の中砂～極粗砂の２つのｂ層からなる弥生時代後期と考えられる層である。上部と下部が粘土～シルトで構成され、この間に粗粒の氾濫堆積物層が調査区全域に厚く堆積している。なかでも、第12 面のA509 流路部分やB197 流路部分は、堆積が厚く、この部分では第11 面段階には微高地を形成している。この第11 ｂ層の氾濫堆積物中には、若干ではあるが、上部の安定した時期があるようで、土壌化の進行した部分的な層がみられた。

【第 12 層】基本的には、暗オリーブ灰～黒色2.5GY4/1 ～2/1 の極細砂～細砂を含む粘土～シルトのａ層と明黄褐～暗オリーブ灰色2.5Y7/6 ～2.5GY4/1 のシルト～粗砂と灰～暗灰色N4/ ～N3/ の極細砂～細砂を含む粘土～シルトのｂ層からなる弥生時代中期の層である。上部を第11 ｂ層によって覆われて遺存状況は良好である。また、この第12 ａ層はA532 微高地部分などでは２～３層に分層が可能で第12 －１・12 －２・12 －３層というように３層に分層している地区がある。実際には、これら下部の層に伴う遺構は確認されていないが、注意を要する。また、B225 微高地では、後述するように畠の可能性も指摘される部分が見られたほか第12 ～13 層にかけて層中に土壌化した帯が見られるなど、注意を要する層である。

【第 13 層】暗青灰色10BG4/1 ～3/1・灰～黒色N4 ～N2/ の極細砂～細砂を含む粘土～シルトのａ層と調査区全域に厚く堆積する粘土～シルトで構成される明青灰～暗青灰色10BG7/1 ～3/1 の氾濫堆積物層のｂ層や灰色N5/ などの粘土～シルトからなるｂ層で構成される弥生時代中期～前期の層である。上部を第12 層で削平されている部分もあるが、第12 ｂ層で覆われているも多くみられた。東ほど第13 ｂ層の堆積が厚く地形的には東に微高地が広がり西はほぼ平坦な地形となる。したがって、東は、細粒のシルト～極細砂を中心とした層で、西は粘性のある粘土～シルトの層となっている。

【第 14 層】縄文時代晩期～弥生時代前期の層で、第14 －１層と第14 －２層に分層が可能であった。第14 －１層は暗灰～オリーブ黒色N3/ ～10Y3/1 の細砂の混じる粘土～シルトのａ層である。第14 －２層は黒～青黒色N2/ ～5BG2/1 のシルトのａ層であり、酸化カルシウム塊を含む層である。第14 －２ｂ層は、灰色5Y4/1 のシルト～細砂や黄褐色2.5Y5/4 の細砂～粗砂、灰色5Y4/1 シルト～極細砂、オリーブ黒色5Y3/1 粘土～シルトで構成されるｂ層である。全体的に黒味の強い泥炭質の土壌であるが、水田が築かれていた部分は砂質が多く含まれている。

【第 15 層】緑黒色10GY2/1 の粘土のａ層と下部の明オリーブ灰～暗オリーブ灰色2.5GY7/1 ～3/1 の有機物を含むｂ層からなる縄文時代後期の層である。02 －１調査区の調査区西半の深掘部分および06 －２調査区深掘トレンチで確認している。（廣瀬）

# 第４章　調査成果

## １．現代～古墳時代面の調査

### １）　第１面・第１面ベース（第１ｂ面）（図６、写真１・２）

当遺跡周辺は、調査開始以前までは水田・畠からなる田園的な景観が比較的広範囲に広がる地域であった。調査の第１段階である機械掘削前後の状況は、農耕関連遺構ということになる。ただし、本書で報告する２調査区では機械掘削前後の調査の手順が相違している。後述する第１面に関しては、06－２調査区の場合、調査区内の 20 ｍピッチに設定した幅２ｍのトレンチ部分のみの調査であり、おおよその遺構配置は確認できたものの、全体は調査を行っていない。

第１面は、現在耕土を除去した面である。基本的には、現在耕土を除去した部分で確認される粗砂混じりの極細砂～細砂を主体とする氾濫堆積物の上面である。従来池島Ｉ期地区で第１ベース層（1 ｂ層）といわれる近世後期の氾濫堆積物層の上面である。02－１調査区の西半部分は、調査以前に治水緑地の堤防が築かれていた関係で、上部が撹乱を受けていたため当該層は遺存しておらず、第２層が露出した状態であった。また、06－２調査区も、東側の３分の１程度の部分は、調査開始以前に削平を

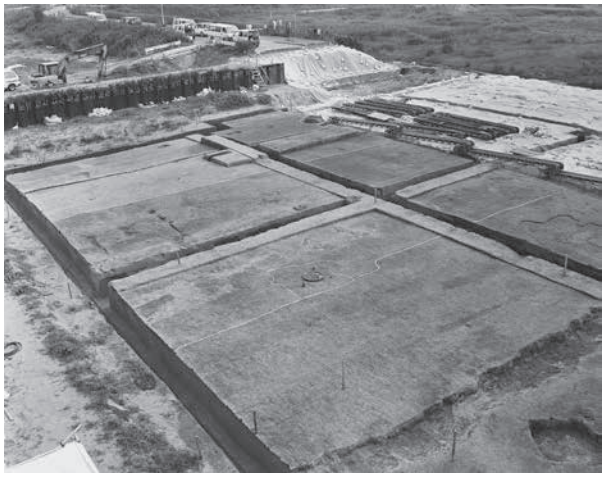


写真１　02－１調査区　第１面　東半（北東から）

写真２　02－１調査区　第１ｂ面　北半（北東から）

写真３　第１～２－４面　A51 島畠　断面（南西から）

写真４　02－１調査区　1b 土坑　断面（北西から）

図６　第１ｂ面　平面図

受けており、ほとんど第２－１層が露出した状態であった。

地形は、削平を受けている部分が不明であるが、調査区南部の、第二十一ノ坪東側や北東部の第十七ノ・二十ノ坪の境の南北坪境付近が高い。しかし、北東端部も削平を受けて不明なため本来の状況については分らない部分が多い。

遺構は、従来から「1b 土坑」（写真３・４）といわれてきた「天地返し」を意図したと考えられる土坑や、耕作に伴うと考えられる溝、井戸などが確認されている。溝は、第十七ノ・二十ノ坪では南北方向、第二十一ノ坪では東西方向に統一されている。こうした溝の方向は、近世末から近代初頭にかけての土地

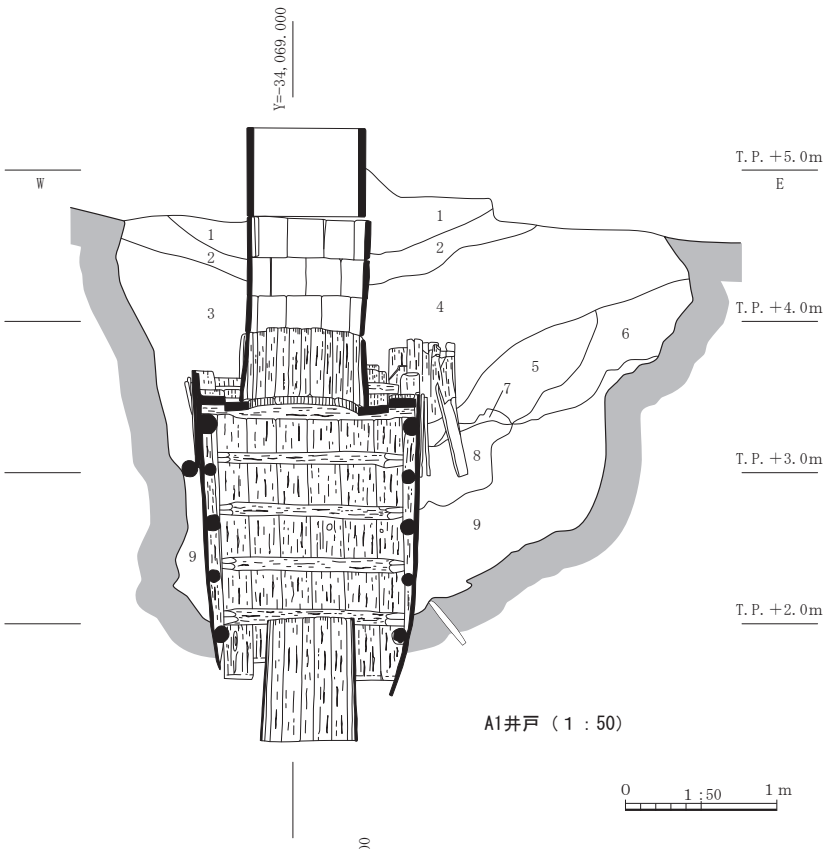
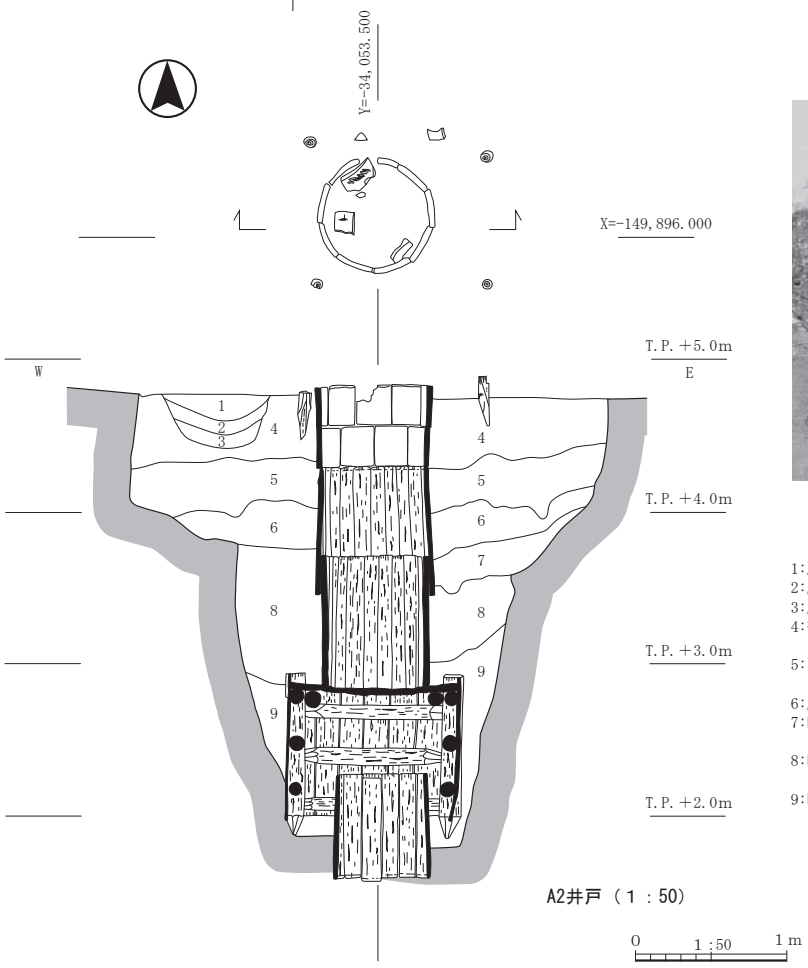


写真５　第１面　A1 井戸（南から）

1:暗灰黄　　2.5Y5/2 シルト
（中～極粗砂・シルトブロック含む）
2:暗灰黄　　2.5Y4/2 シルト
（中～粗砂・粘土ブロック含む）
3:オリーブ褐 2.5Y4/3 シルト
（中～粗砂・粘土ブロック・瓦・木片含む）
4:暗灰黄　　2.5Y4/2 シルト
（中～粗砂含む やや粘性強くシルト多い）
5:灰　　7.5Y5/1 シルト
（シルトブロック含む）
6:灰オリーブ 5Y4/2　細～中砂混シルト
7:緑黒　　10G2/1　粘質シルト
8:にぶい黄橙 10YR6/4 砂（中～粗砂）
9:灰　　7.5Y5/1 シルト
（中砂含む ブロック状に粘質シルト）



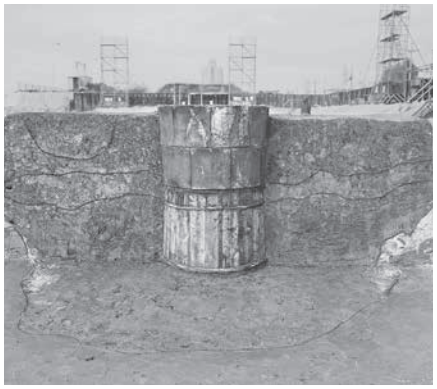



写真６　第１面　A2 井戸（南から）

1:灰黄褐　　10YR4/2 細砂混シルト
2:灰黄褐　　10YR5/2 細砂混シルト
3:灰黄褐　　10YR5/2 シルト
4:褐　　10YR4/4 シルト
（細～中砂多く混じる 粘土ブロック多い）
5:にぶい黄褐 10YR5/3 シルト
（細～中砂多く混じる 粘土ブロック含む）
6:灰オリーブ 7.5Y4/2 極細～細砂混粘質シルト
7:暗青灰　　10BG4/1～灰黄褐10YR6/2 細砂混粘質シルト
（粘土～シルトブロック）
8:暗青灰　　10BG4/1 細～中砂混粘質シルト
（粘土～シルトブロック含む）
9:暗青灰　　10BG4/1 細～中砂混粘質シルト

図７　第１面　遺構図

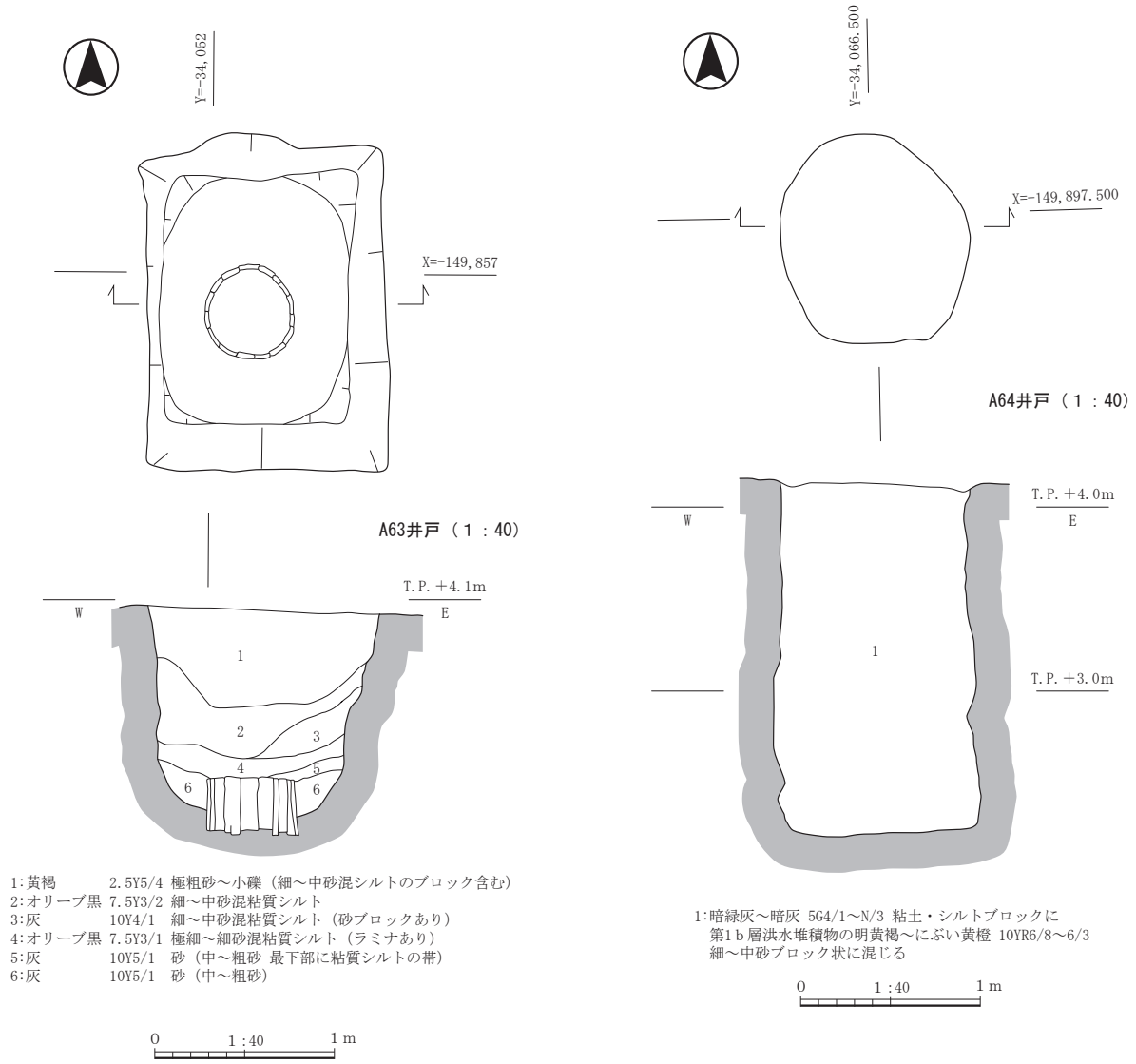
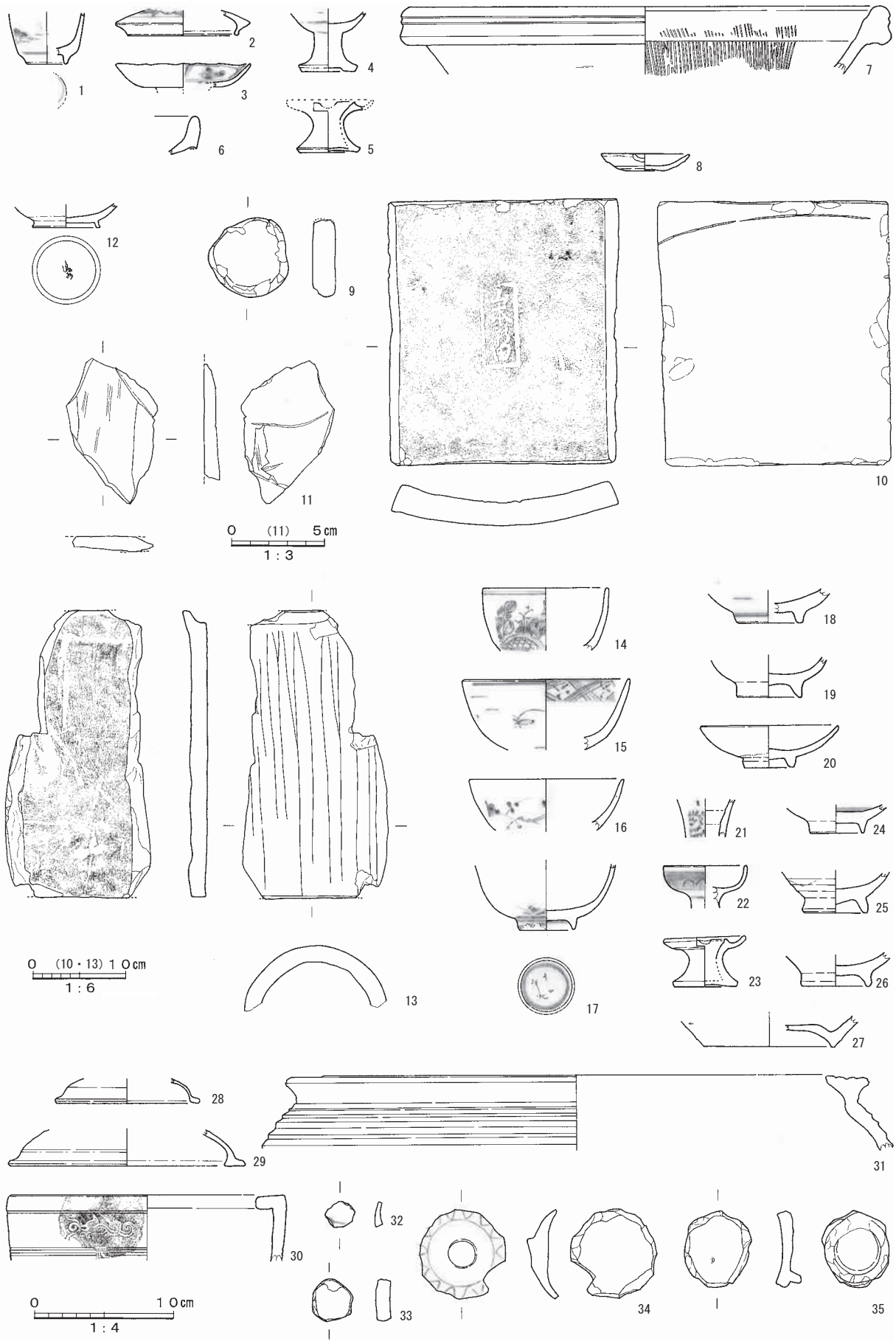



**図８　第２－１面　遺構図**

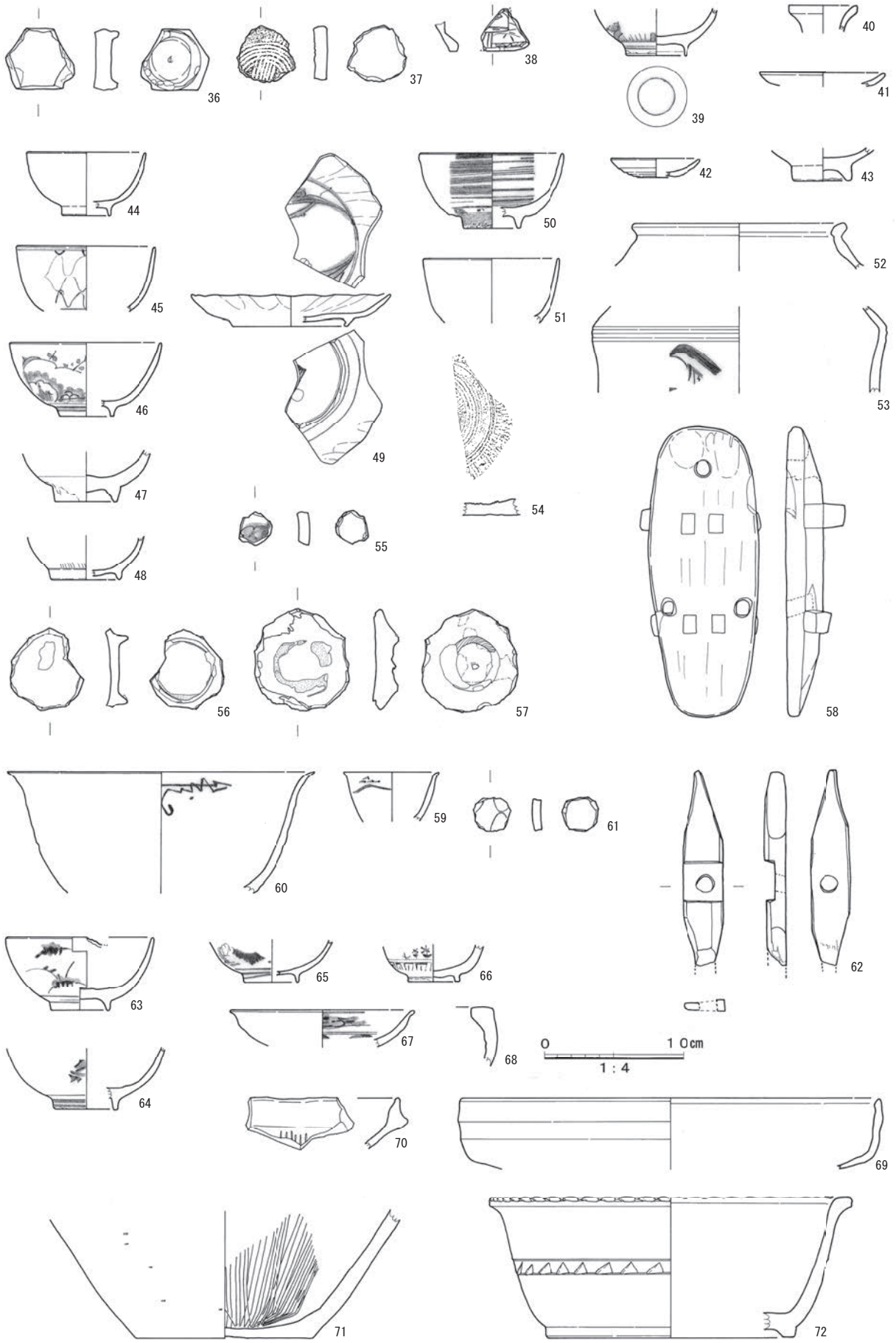
利用図とも符合し、当該遺構面の時期比定の基準となるものである。第二十一ノ坪土坑群は、重複が激しく、規模も大小が見られた。一方、第二十ノ坪の土坑は、およそ幅 1.0 m前後の深さ 30 ㎝程度の長さ不統一なもの、その他に長さ 2.0m ×幅 1.5 程度の深さ約 10 ㎝程度のものが並んで見られた。06 －２調査区の第二十ノ坪では、東西 3.0 m・南北 0.8 m程度の長方形で南北に列になって並ぶ土坑が検出された。また第二十ノ･十七ノ坪境の東側で密集した部分が見られたが、その東では密集度は低い。又、この調査の東端部分の第十七ノ坪の 04 －２調査区との境部分で東西方向の幅 2.0 m程度の土坑を確認した。第十七ノ坪は、坪内において土坑の方向が途中から変わる状況が 04 －２調査区西側で確認されている。土地利用の問題とも絡む可能性が高い。第二十ノ坪・二十一ノ坪の状況から、これらの土坑の位置は、第２－１面の島畠部分にあたる場合が多く、地形的に高い島畠部分を意図的に選んで掘られたものと考えられる。

井戸は、02 －１調査区で、A1・2・63 ～ 65 井戸を確認した（図７・８、写真５・６）。このうち、**A1 井戸**については調査開始時点においても埋没しきらず、内部が空洞になっており、底部分から現代の遺物が確認されている。また、**A63 井戸**（図８）は、方形の掘り方で底部に桶枠を持つ構造で、最下



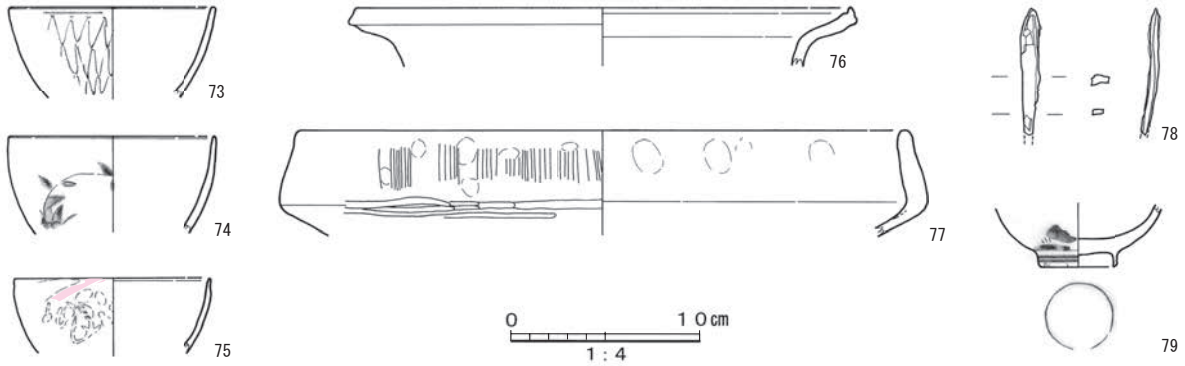

1～7：機械掘削終了面、8～11：A1 井戸、12：A2 井戸、13：A9 暗渠、14～35：(02－1) 第1層

図9　第1面　出土遺物（1）




36～38：(02－1) 第1層、39：A10溝、40：A24溝、41：A25溝、42・43：A26溝、44～58：A1b土坑、59～62：(02－1) 第1b層、63～72：(06－2) 第1層

図10　第1面　出土遺物（2）




73～78：B1b 土坑、79：（06－2）第１b 層

**図 11　第１面　出土遺物（３）**

部は後述する弥生時代中期の洪水堆積物の途中に達している。検出面は第２－１面であるが、埋土上部が 1b 土坑で撹乱されていたため輪郭の検出が第２－１面になったためで、他の井戸同様に第１面段階の遺構の可能性が高い。**A64 井戸**（図８）は、平面円形の幅 1.7 mの直径の土坑で深さは、約 1.9 mほどである。掘り方のみで、構造物は検出されなかったが、垂直に深い遺構である。後述する第 12 b 層の氾濫堆積物層まで掘り込んでいる。（廣瀬）

第１面出土遺物（図９～ 11）

【02 －１調査区】機械掘削終了面（図９－１～７）　機械掘削終了面から陶磁器、土師器、瓦等が多数出土した。１は瀬戸染付坏、２は波佐見染付重ね鉢蓋、３は稜花口縁の伊万里染付芙蓉手皿、４は波佐見染付仏飯具、５は京・信楽系灯明台、６は土師器炮烙、７は備前擂鉢である。17 世紀から 19 世紀のものである。

第１面 **A1 井戸**（図９－８～ 11、図版 31）から磁器、瓦、砥石等が少量出土した。８は京・信楽系灯明皿、９は瓦転用円板、10 は井戸瓦、11 は砥石である。８は焼成時にリング状の重ね道具を使用した痕跡として、外面底部の色調が他と比べ異なる。又、使用痕のススが付着している。19 世紀のものである。10 は、凹面に「山本新田」と刻印されている。山本新田は大和川付替え後、宝永５年（1708 年）に玉串川河川敷に帯状に開かれた新田である。池島・福万寺遺跡の福万寺側の西の位置にある。何故、池島側の井戸から出土しているのか疑問である。他に４枚同じ刻印を持つ井戸瓦が出土している。11 は凝灰質頁岩製で、砥面が１面残存する。第１面 **A2 井戸**（図９－ 12）から陶磁器、瓦等が少量出土した。12 は肥前系京焼系碗で外底面に「清水」の印が施されている。18 世紀のものである。第１面 **A7 溝**から陶器片２点、土師器片２点が出土した。いずれも細片で詳細は不明であるが、土師器の１点は羽釜か鍋の口縁片で 16 ～ 17 世紀かと思うものである。第１面 **A9 暗渠**（図９－ 13、図版 31）から土師器片２点、陶器片２点、瓦１点（13）が出土した。13 は丸瓦で近世かと思うものである。玉縁が短く、凹面に布目痕がある。暗渠に使われていたと考えられる。

**第１層**（図９・10 － 14 ～ 38、図版 31）から陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦等が多数出土した。14 ～ 18 は波佐見染付碗、19 は肥前系青磁碗、20 は波佐見白磁皿、21 は波佐見染付瓶、22 は波佐見赤絵仏飯具、23 は京・信楽系灯明台、24 は肥前系刷毛目碗、25 は唐津鉄釉碗、26 は肥前系碗、27 は京・信楽系土瓶？、28 は備前伊部手蓋、29 は京・信楽系鍋蓋、30 は土師器火鉢、31 は丹波甕、32 ～ 37 は転用円板、38 は土製品の人形である。

主に 17 世紀後半から 19 世紀までのもので 18 世紀のものが多い。17 は高台内に呉須で「大明年製」

のくずれと思う銘がある。22 は焼成後、赤彩で蓮弁が描かれている。28 は「伊部手」と呼ばれる薄くきれいな光沢のある製品である。転用円板は、33 が瓦質土器でその他は陶磁器である。池島・福万寺遺跡で出土した転用円板の重さは 10g 前後が多いが、それより重いものが多い。38 は人を表しているが何かは不明である。

第１ｂ面 A10 溝（図 10 － 39）から磁器１点（39）と須恵器片１点が出土した。39 は波佐見染付碗で 18 世紀中頃のものである。高台内に呉須で圏線が描かれ、高台に離れ砂が少し付着している。第１ｂ面 A24 溝（図 10 － 40）から陶器１点（40）と瓦細片１点が出土した。40 は備前徳利である。16 世紀末から 17 世紀初めのものである。第１ｂ面 A25 溝（図 10 － 41）から土師器２点（41）が出土した。41 は土師器皿で 18 世紀ぐらいかと思う。内外面使用された痕跡のススが付着している。第１ｂ面 A26 溝（図 10 － 42・43）からは陶磁器、瓦等が少量出土した。42 は京・信楽系灯明皿、43 は肥前系碗である。19 世紀、18 世紀のものである。第１ｂ面 A35 溝から磁器染付片１点が出土した。細片だが、一重網目文が施され、18 世紀かと思うものである。第１ｂ面 A39 溝から陶磁器片２点、瓦片１点が出土した。いずれも細片だが、磁器染付片１点は破片の周囲を加工しようとしているような剥離が見られる。陶器は擂鉢底部片である。

第１ｂ面 A1b 土坑（図 10 － 44 ～ 58、図版 31・40）から陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、下駄等が多数出土した。44 は肥前系白磁碗、45 は伊万里染付碗、46･47 は波佐見染付碗、48 は波佐見白磁瓶、49 は伊万里染付皿、50･51 は肥前系碗、52 は中国製かと思う褐釉壺、53 は肥前系壺、54 は丹波擂鉢、55 ～ 57 は転用円板、58 は差歯下駄である。48 は釉の下に削り痕が見え、高台に離れ砂が付着している。49 は内面に捻花文が描かれ、外底面に呉須で銘款の痕跡がある。高台に離れ砂が付着している。50 も高台に離れ砂が付着している。53 は素焼きの上に鉄絵が施されている。55 は景徳鎮窯系の盤の底を転用している。57 は見込みに輪状の砂目があり、畳付は糸切り痕がある。51 は 19 世紀のものであるが、それ以外は 17 ～ 18 世紀のものである。58 はスギ材の露卯で、前壺１、横緒孔２、枘孔４で、歯が斜め後ろに摩滅している。右足用か。

**第１ｂ層**（図 10 － 59 ～ 62、図版 31・40）から陶磁器、土師器、瓦質土器、木製品（62）等が出土した。59 は波佐見染付坏、60 は波佐見染付鉢、61 は磁器転用円板、62 は木製品で紡織具糸巻きである。陶磁器は 17 ～ 18 世紀のものである。

**【06 － 2 調査区】第１層**（図 10 － 63 ～ 72）から陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦等が出土した。63 ～ 65 は波佐見染付碗、66 は波佐見染付瓶、67 は波佐見染付皿、68 は瓦質土器火鉢、69 は土師器炮烙、70 は丹波擂鉢、71 は堺擂鉢、72 は陶器鉢である。63 は口縁が一部階段状に低くなっていてどのように水平の口縁につくのか不明である。63・64・66 は高台に離れ砂が付着している。69 は使用痕跡として内面に炭化物が付着している。71 は内面に焼台の痕跡がある。陶磁器は 72 以外、17 世紀後半から 18 世紀のものである。

第１ｂ面 B1b 土坑（図 11 － 73 ～ 78、図版 33）から陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦等が少量出土している。73・74 は伊万里染付碗、75 は肥前系京焼系赤絵碗、76 は土師器羽釜、77 は土師器炮烙、78 は不明鉄製品である。75 は赤と黄色で模様が描かれているが、剥落していて詳細は不明である。75 が 18 世紀のもので、それ以外は 17 世紀のものである。

**第１ｂ層**（図 11 － 79）から磁器１点（79）が出土した。波佐見染付碗で、高台に離れ砂が少し付着している。18 世紀のものである。（陣内）

**２）第２面**　（図 12、写真７、図版１・２・３）

第２層は、近世～中世末頃と考えられる土層である。第２層は、前述の即応の調査において粗い砂粒を多く含む砂質系の耕作土が連続し、層間にｂ層を挟まないことから、第２－１面を除くと遺構面の遺存状況があまり良好でない場合が多い。従来から、第２－１～２－４層のおよそ４層程度に分層されてきたが、02－１・06－２調査区とも４層に分層が可能であった。02－１調査区段階では、これまでの調査との関係から４面にわたる面的な調査を行った。しかし、第１ｂ層に覆われた第２－１面以外は遺存状況も悪く、地形的な変化も見られなかった。こうしたことから、06－２調査区調査開始段階において、改めて土層の観察を行い調査方針を再検討した。そして、第２－１層と第２－２層の層境が不明瞭でわかりにくかったことや、土質も第２－１・２－２層と第２－３・２－４層に様相が分かれたことから、本調査では第２－１面と第２－３面の２つの遺構面について調査を行った。通常、第２層の各面は島畠を特徴とする水田景観が広がる面であるが、当調査区は恩智川からも遠く前述の微高地のため全体の地形がやや高く、第２－１面を除くと島畠はあまり見られず、僅かに調査区南西部で盛土による島畠の痕跡を確認した。

地形は、削平を受けている部分が不明であるが、調査区南部及び東部が高い地形である。

第２－１面では、坪境畦畔・畦畔、水口、島畠と、２本の並行する畦畔に挟まれた水路状の遺構等を確認した。第２－１面では、従来から地下げによる島畠とその間に掘削された水路状の水田遺構が検出されている。本書で報告する２つの調査区においても同様な島畠とその間の水田面を確認している。第２－１面は、前述の第１ｂ層の氾濫堆積物を除去した面で、洪水による浸食などのために若干の削平を受けているが、当遺跡の各調査面のなかでも遺構面の遺存状況の良好な面である。

第十七ノ・二十ノ坪境の南北坪境では、B7 高まりが検出された。この高まりの西側にはもう１条のやや低い B5 高まりが並列するように検出された。両高まり間を水路として利用したものと考えられる。この坪境西側の第二十ノ坪では、02－１調査区から 06－２調査区の西端部分にかけて、南北方向の島畠状の高まりとその間に溝状に伸びる水田を検出した。それぞれの島畠の幅には 1.1 ～ 5.4 ｍと差があるが、**A48 ～ A50 島畠**の間は幅１ｍほどの細い溝で区切られている。これらの島畠は、「地下げ型」といわれる島畠造成部分の周辺を掘削し、掘削した土壌を盛り上げて造成されたものである。

また、B2 島畠から東では B3 畦畔（写真８）を境に地形が高くなり、B6 坪境まで平坦な地形が続いている。この部分は、前段階で全面にわたって B1b 土坑を検出した部分で、遺存状況が非常に悪い部分であるが、検出した遺構面は若干の凹凸を持っていた。また、B6 坪境より東は、大型の B1b 土坑の連続でやはり遺存状況が悪いが、東端部で B9・10 島畠を検出したほか、B8－１・２島畠が存在していたようである。これは、B1b 土坑で撹乱を受けているため本来は複数であった可能性もある。

第２－１面では島畠の広がる景観が復元され、「地下げ型」といわれる島畠が、条里地割に伴う坪境を境に北半の第二十ノ坪は南北方向、南半の第二十一ノ坪は東西方向に確認された。しかし、第二十ノ坪と第二十一ノ坪の東半部では、「1b 土坑」の掘り込みによって大きく撹乱を受け、島畠の残りが悪い。

また、第二十一ノ坪では、A53 島畠および、A55 島畠は後述する第２－４面段階に第２－４ｂ層の氾濫堆積物を芯にして造られた島畠をベースにしており、「地下げ型」の島畠ではない。**A56 坪境**は、調査区中央部で A57 水口が作られ、この部分で第二十ノ坪と第二十一ノ坪の田面間を繋ぎ、給排水を制御している。第二十一ノ坪には、坪境から南に A51・52・53・54・55 島畠（写真３）が造られているが、A51・52・53・54 島畠では、前述の水口の延長上に島畠を横切って南北方向に A58・

59・60 溝を設けて水路としている。また、撹乱のため正確には確認できなかったが、A53・55 島畠間は A62 溝によって区切られていたものと考えられる。

第２－２面以下の各層は、先述のように何れも遺存状況が悪いことから、土質の大きく変わる第２－３面を検出した。しかし、この面も含めて第２－３・２－４面ともほとんど遺構は確認できなかった。

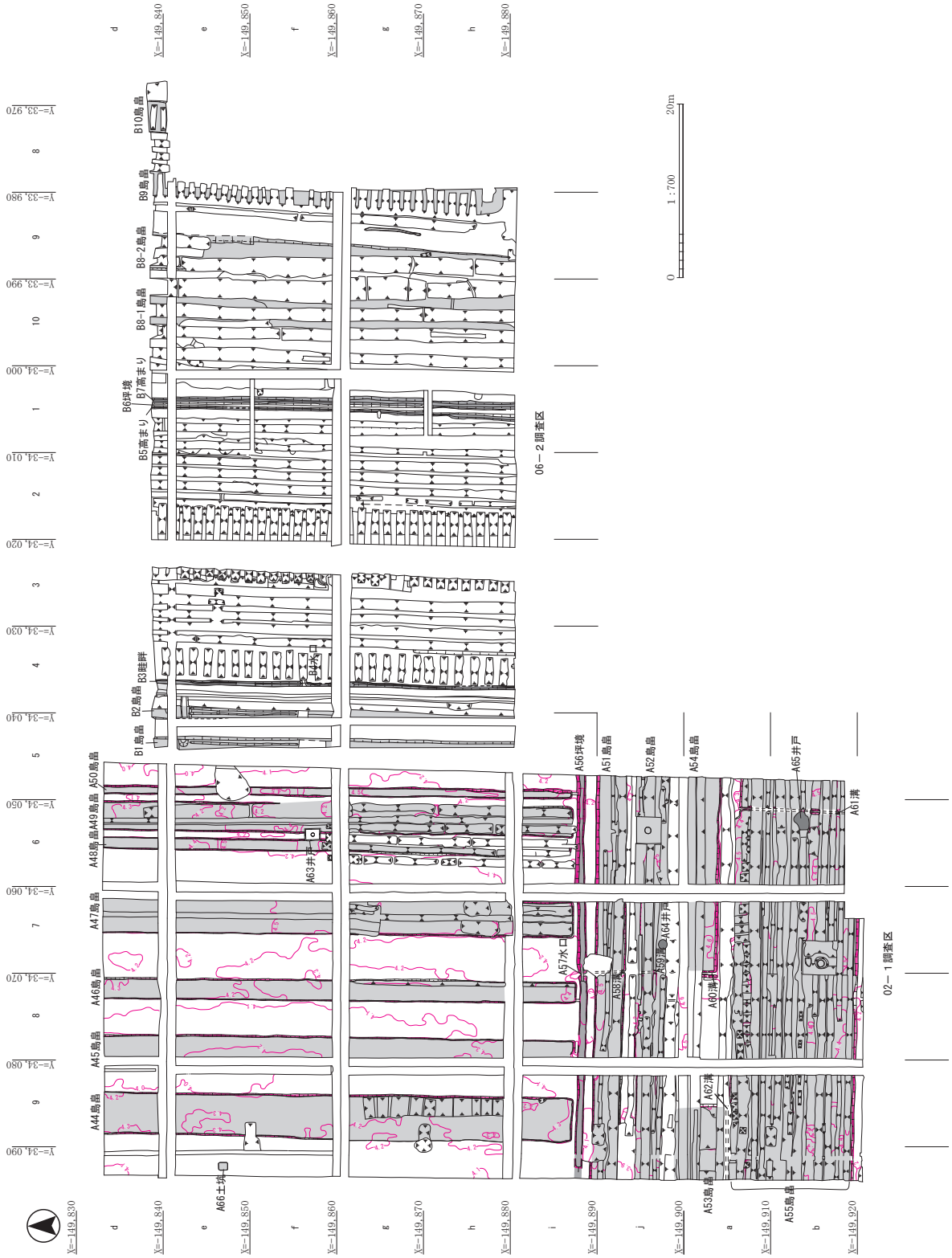



図 12　第２－１面　平面図

写真７　02－１調査区　第２－１面　南半（北東から）

写真８　第２－１面　B3 畦畔と B4 水口（南東から）

また、06－２調査区南東端部では第２層の最下部で下部の自然堆積層がやや分厚く遺存する部分を確認した。但し、調査区端部で土層断面でも島畠等の盛り上がりを明確にはできなかった。しかし、これらの状況から、両調査区では第２－２層以下の各面の島畠は無いと考えられる。（廣瀬）

第２面出土遺物（図 13・14）

【02－１調査区】 第２－１面 **A63 井戸**（図 13－80、図版 31）からは須恵器転用円板１点（80）等が極少量出土した（第１面の遺構）。**第２－１層**（図 13－81・82、図版 31）から陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦等が少量出土した。81 は龍泉窯系青磁碗、82 は丹波擂鉢である。81 は線描蓮弁文が施され 15 世紀第４四半期のもので、82 は 17 世紀第２四半期のものである。第２－１層と断定できない第２－１層～２－２層・２－３層から出土したものとして図 13－83～88（図版 40・41）を掲載した。83 は肥前系碗、84 は肥前系灰釉碗、85 は漆器椀、86～88 は不明木製品である。83 は緑釉流しかけで、83・84 は 18 世紀のものである。85 は赤漆に黒漆で三方に丸に亀甲に花菱文を描いている。86 はスギ材で棒状を呈し、箸かもしれない。87 はヒノキ材で下駄の歯かと思うもので、88 はヒノキ材で木釘が１本残っていて、裏面に生きているか不明だが段があり、浅い線刻がある。

**第２－２層**（図 13－89～94、図版 31・32）から陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、金属製品（94）等が出土した。89･90 は波佐見染付碗、91 は備前壺、92･93 は転用円板、94 はキセルの雁首である。89・90 は 18 世紀のもので、91 は 15 世紀のもので内面に自然釉が付着している。94 は 18 世紀後半かと思うものである。92 は須恵器、93 は瓦を転用したものである。

第２－３面 **A73 坪境**から陶器擂鉢体部片１点、土師器羽釜鍔片１点、瓦質土器擂鉢片１点が出土した。いずれも細片で詳細は不明だが、土師器と瓦質土器は 16 世紀かと思うものである。

**第２－３層**（図 13－95～108、図版 31・32）から陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、砥石等が多数出土した。95・96 は景徳鎮窯系青花碗、97 は漳州窯系青花碗、98 は波佐見染付碗、99・100 は唐津皿、101 は肥前系灰釉碗、102 は土師器鍋、103～105 は転用円板、106 は砥石、107・108 は不明石製品である。95 は 16 世紀前半のもので、96 は高台内に吉祥文「永保長春」が呉須で描かれ、内面は万頭心で鳥文が描かれている。16 世紀第４四半期のものである。97 は草花文が描かれ 17 世紀初めのものである。98～101 は 17 世紀のものである。99 は見込みに砂目が３箇所あり、灯明皿に転用されている。100 は見込みに胎土目が３箇所ある。101 は三日月高台である。102 は 16 世紀かと思うものである。転用円板の 103 は瓦質土器、104 は瓦、105 は丹波擂鉢を転用している。106 は凝灰質

頁岩で、砥面が５面ある。107 は先端に敲打痕があるように見える。

**第２－４層**（図 13 － 109 ～図 14 － 127、図版 31・33・40・41）から陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、銭貨、漆器椀、下駄、不明木製品等が多数出土した。109・110 は景徳鎮窯系青花碗、111 は景徳鎮窯系青花皿、112 は唐津灰釉碗、113・114 は丹波擂鉢、115 は緑釉陶器、116 は土師器皿、117 は瓦質土器擂鉢、118・119 は瓦質土器土管、120・121 は転用円板、122・123 は銭貨、124 は漆器椀、125・126 は不明木製品、127 は差歯下駄である。109・110 は 16 世紀前半のものである。111 は 16 世紀末から 17 世紀初めのもので、内面に密教法具を文様化した羯磨文が描かれ、高台内部に線状の印が施されている。線状の印は所有を示すものらしい。113 は鉄釉が掛けられた 18 世紀のもの、114 は 17 世紀第３四半期のものである。116 は灯明皿でススが付着している。117 とともに 16 世紀かと思うものである。120 は 13 世紀第３四半期の龍泉窯系青磁碗、121 は 17 世紀第２四半期の肥前系碗を転用したものである。122 は残りが悪く北宋銭の「元祐通寶」か「元豊通寶」かは不明である。123 は第１ｂ層～２－３層のいずれかから出土したものであるが、「元祐通寶」なのでここで掲載した。124 はブナ科材で、外面に赤漆に黒漆で鳥の足を描いている。125 はスギ材で蓋かと思われるが、孔１個と木釘５本が残っていた。126 もスギ材で、側面に木釘が５本（内１本は痕跡のみ）残っていた。127 は側溝出土だが、出土年月日から第２－４層に掲載した。スギ材で、枘孔２個のうち１個に枘が残っていた。

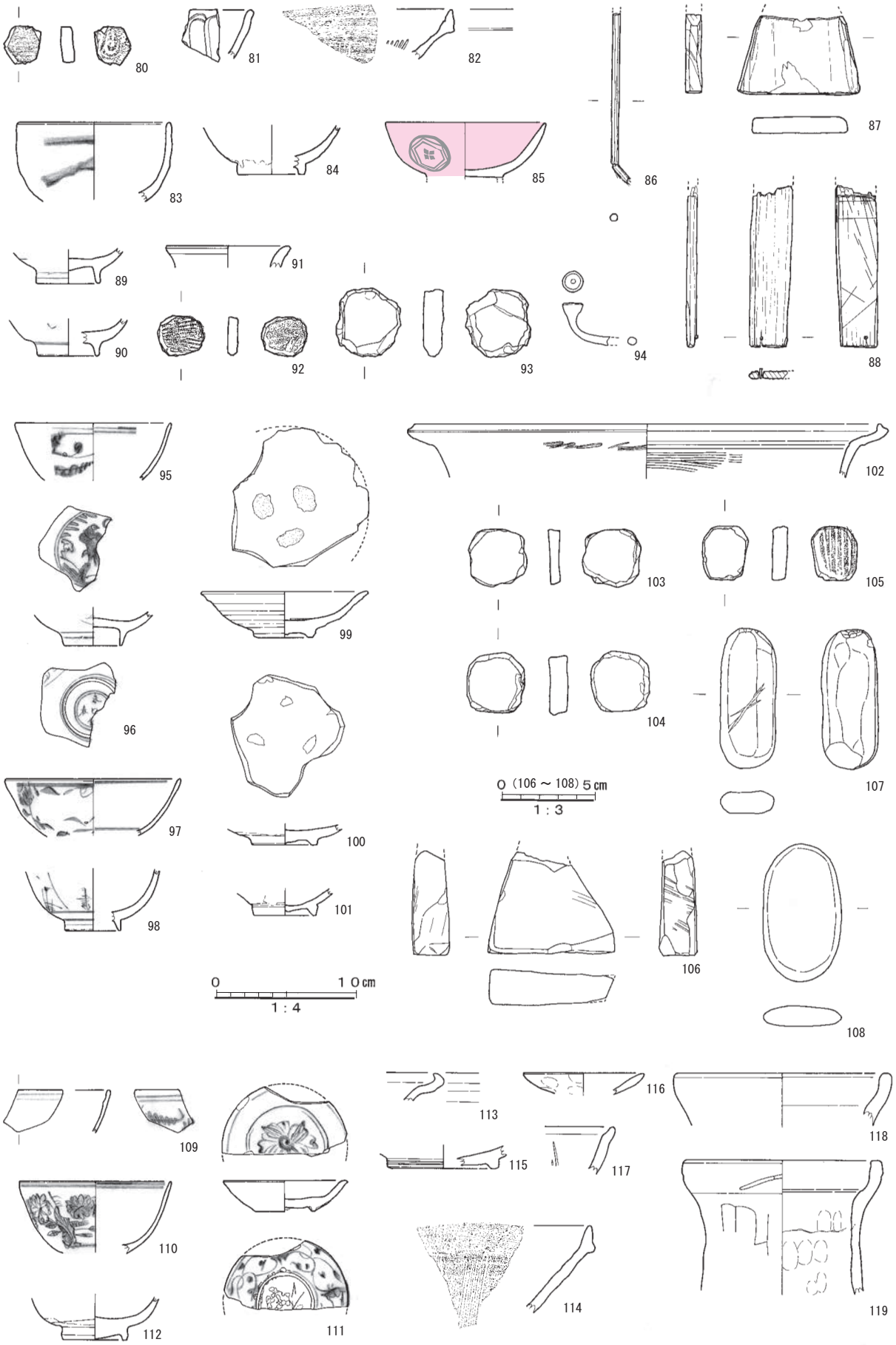
時期のわかる少ない遺物からであるが、第２－１層、第２－２層が 18 世紀、第２－３層、第２－４層が 16 世紀から 17 世紀と考えられる。

**【06 － 2 調査区】 第２－１・２層**（図 14 － 128 ～ 132・137、図版 32・39）は第２－１層か第２－２層から出土したものである。陶器、土師器、瓦質土器、須恵器、瓦・刷毛？（137）等が少量出土した。128 は龍泉窯系青磁碗、129 は波佐見染付碗、130 は土師器皿、131 は瓦質土器ミニチュア羽釜、132 は土製品である。128 は転用円板かもしれないが、15 世紀のものである。129 は 18 世紀のものである。130 は実測可能のため実測したが、13 世紀ぐらいの古いものかもしれない。131 は 16 世紀から 17 世紀かと思うものである。132 は大型紡錘車かと思うもので、周縁が磨滅していて、孔から紐ずれと思われる痕跡がある。137 はヒノキ材で２枚が合わさり、線刻上に小孔がある。

**第２－２層**（図 14 － 133 ～ 136）から磁器、土師器、瓦器、瓦、漆器椀（136）等が少量出土した。133 は波佐見染付碗、134 は転用円板、135 は丸瓦である。133 は 18 世紀のもので、内外面気泡が多く、高台内に呉須で銘？が施されている。134 は 17 世紀後半の波佐見青磁碗を転用したものである。135 は近世のものである。136 は土圧でひしゃげているが、ブナ科材で外面に黒漆、内面に赤漆が施されている。

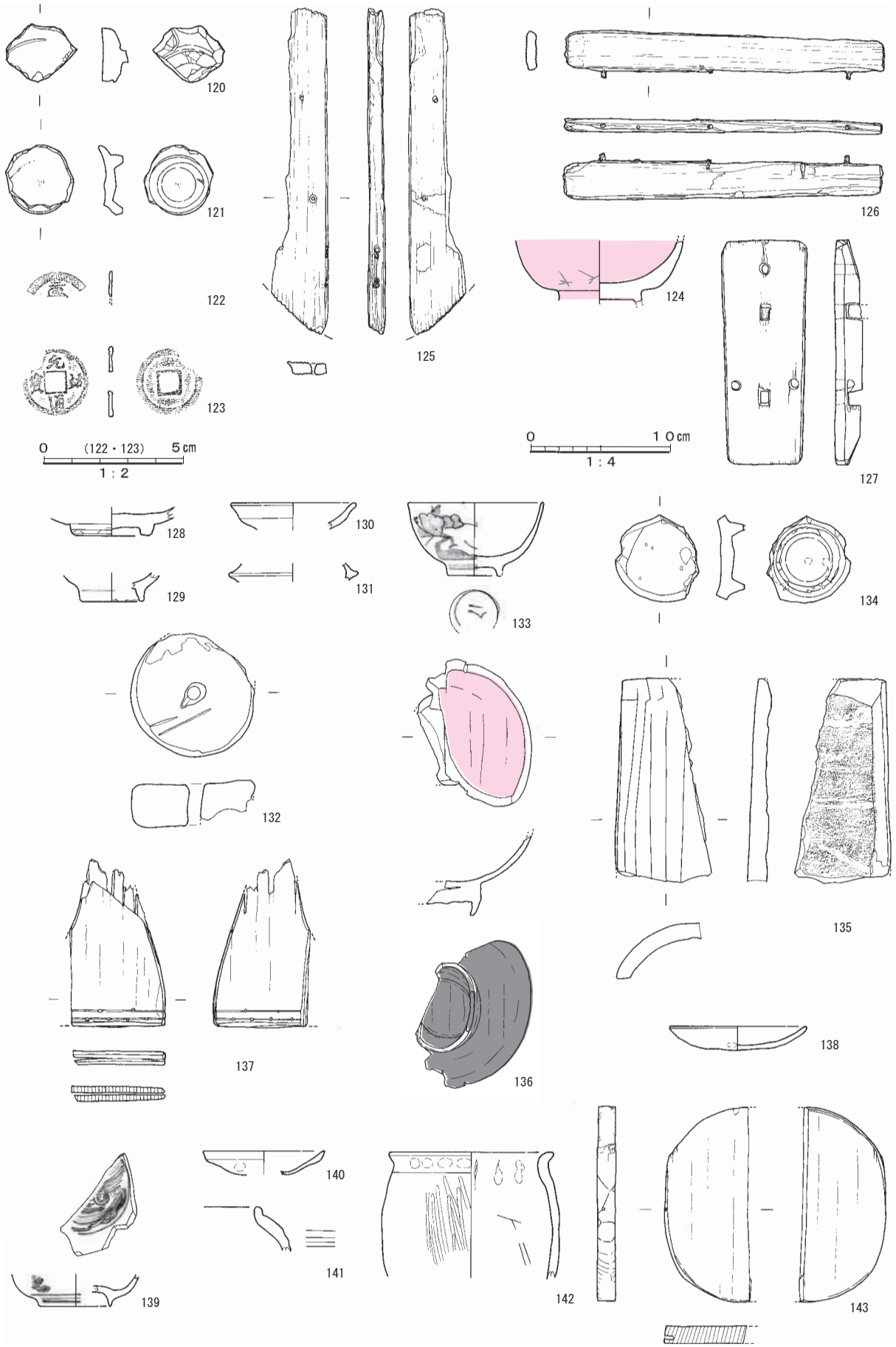
第２－３面 **B12 土坑**（図 14 － 138）から土師器皿１点（138）が出土した。口縁部外面にススが付着しており、灯明皿と考える。17 世紀から 18 世紀かと思うものである。

**第２－３・４層**（図 14 － 139 ～ 143、図版 31・39）からは、陶磁器、土師器、瓦質土器、須恵器、木製品等が少量出土した。139 は景徳鎮窯系青花碗、140 は土師器皿、141 は土師器羽釜、142 は混入の弥生土器甕、143 は曲物の底板？である。139 は蛟龍文を描き、万頭心で高台内にノッキング痕がある。16 世紀第４四半期のものである。140 は 16 世紀末から 17 世紀初めかと思うものでる。141 は大和型で本来は瓦質のもので、16 世紀かと思うものである。143 はスギ材で、側面に釘孔と思うものが１箇所ある。第２－３面まで 18 世紀のものが出土しているが、第２－３・４層になると 16 ～ 17 世紀のものが主になってくる。（陣内）




80：A63井戸、81・82：(02－1）第２－１層、83～88：(02－1）第２－１～２－２層・２－３層、89～94：(02－1）第２－２層、95～108：(02－1）第２－３層、109～119：(02－1）第２－４層

図13　第２面　出土遺物（１）




120～122, 124～127:(02－1）第２－４層、123:(02－1）第１b～２－３層、128～132・137:(06－２）第２－１・２層、133～136:(06－２）第２－２層、138：B12土坑、139～143：(06－２）第２－３・４

図14　第２面　出土遺物（２）

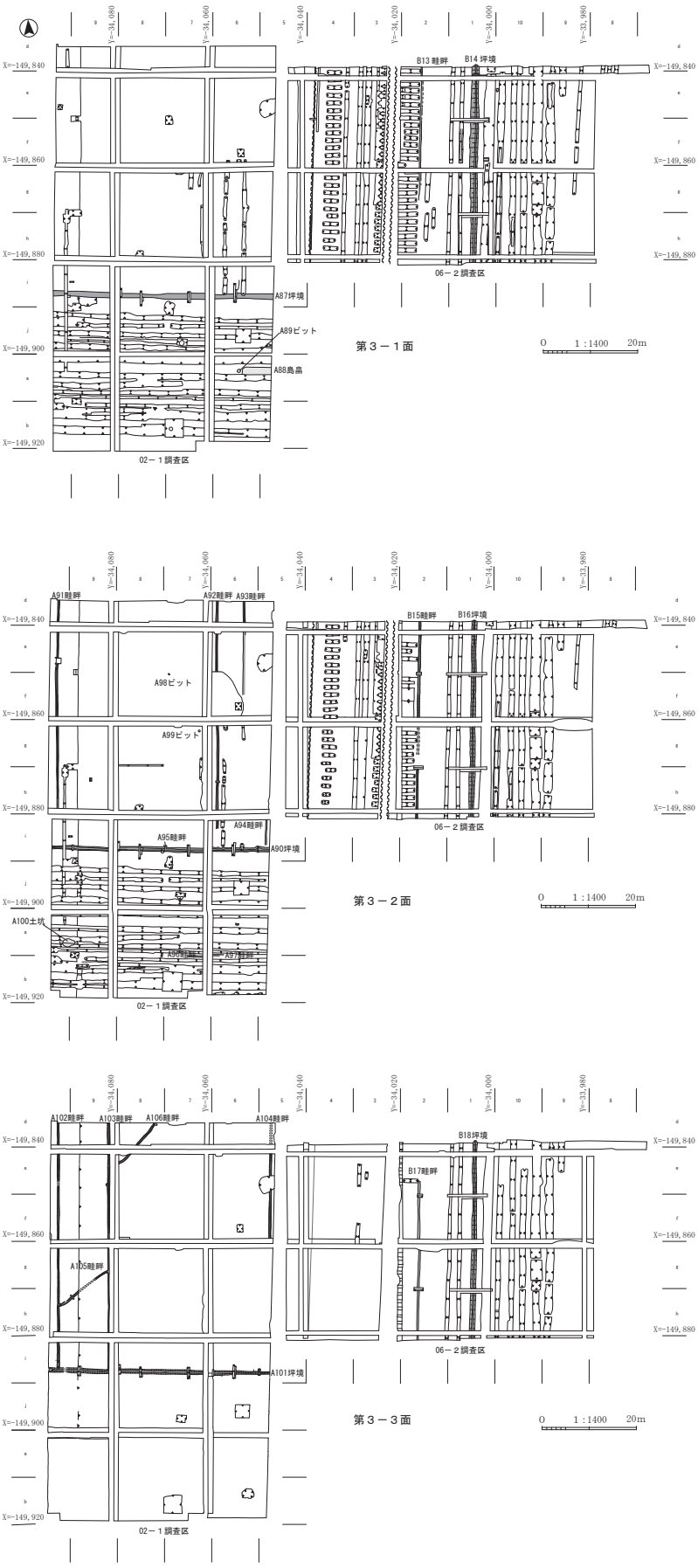



図 15　第３－１・２・３面の変遷

**３）　第３面**（図 15、写真９・10、図版３～５）

第３面は、第２－４層およびその下部に部分的に残る第２－４ｂ層を除去した面である。第３層は、粘性の強いシルト～細砂を基調とした層で、大きく３層に分層が可能であった。調査では、第３－１・３－２・３－３面の各面の検出を行った。しかし、第３層の時期は調査された治水緑地全域とも洪水が頻発し、各層とも部分的な洪水堆積物の被覆による遺構面の更新が激しかったと考えられている。

本来であれば、第３層は各層間に自然堆積層を挟むことが多く、遺存状況の良好な場合が多い。各層は部分的にさらに細分が可能な場合も見られた。しかし、当調査区では氾濫堆積物の供給が少なかったためか、確実な自然堆積層の被覆はほとんど確認されず、やや攪拌を受けた自然堆積層の残骸と作土層が連続する状況であった。

地形は、削平を受けている部分が不明であるが、各面とも基本的には南の第二十一ノ坪の東側と東の第十七ノ坪が高いことから、大局的には南東が高く北西にかけて緩やかに低くなっていく。

遺構は、第３－１・３－２・３－３面各面において、条里地割りに伴う幹線畦畔やそれらを接続する支線畦畔を確認した。本書では、各層の遺構の変遷をわかるように提示した（図 15）。これまでの池島Ｉ期地区の調査においては、第２～３面にかけてはとくに島畠の

写真９　02－１調査区　第３－１面　北半（西から）

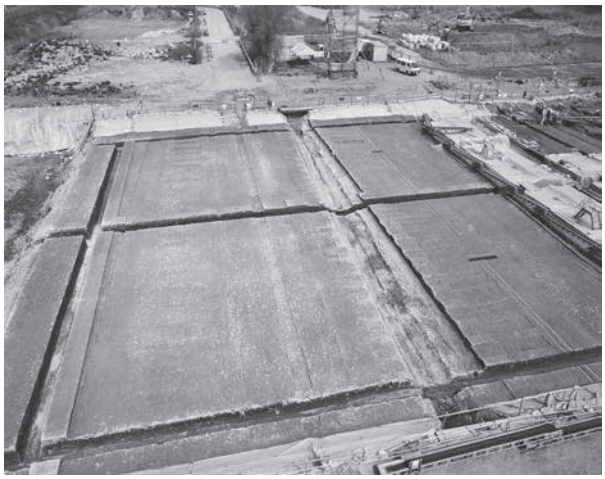


写真 10　06－２調査区　第３－２面　西半（南から）

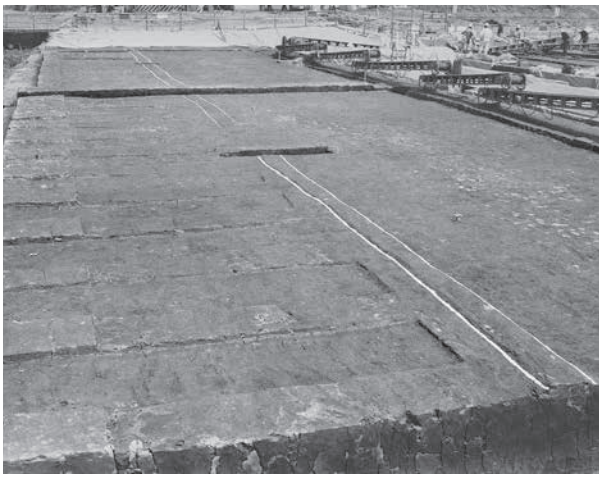


写真 11　第３－２面　B15 条里畦畔（南から）

写真 12　06－２調査区　第１ｂ～８面　条里坪境（南から）

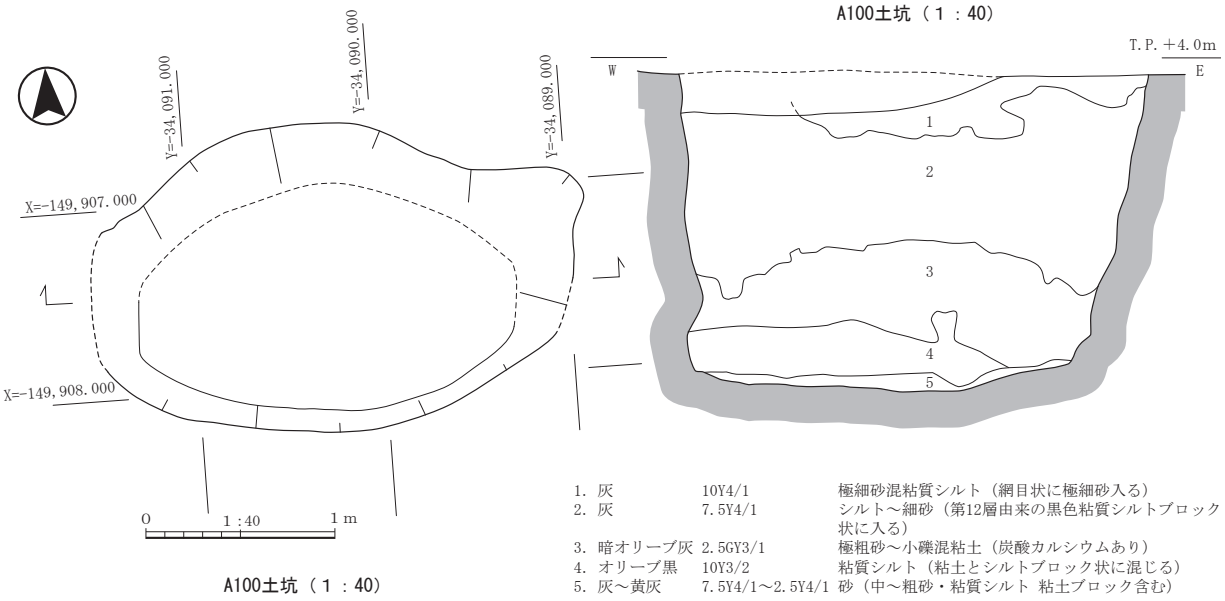
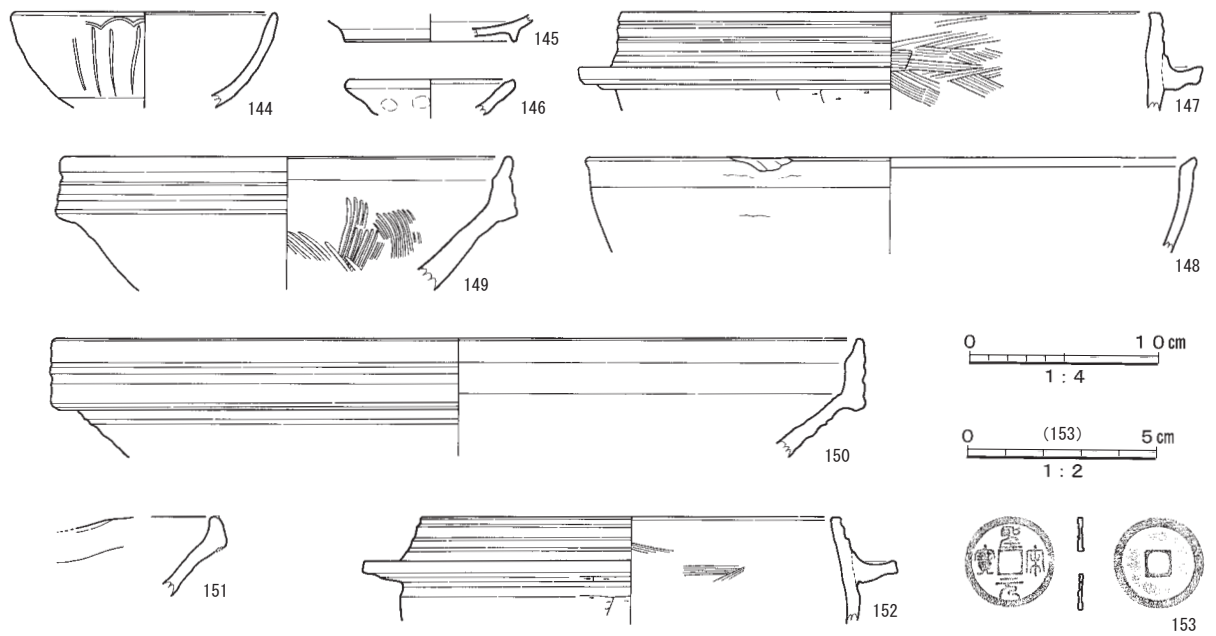



図 16　第３－２面　遺構図




144～150：(02－1）第３－１層、151：(02－1）第３－２層、152・153：(02－1）第３－３層

**図 17　第３面　出土遺物**

発達する状況が見られたが、今回の調査では第２面段階に第二十ノ坪に僅かに見られただけである。

また第３－３面の北西部において、地割りに沿った幹線畦畔間をつなぐ支線畦畔が北東から南西に斜行してつながるなど興味深い状況が見られた。このほか検出された第３－３面の第二十ノ坪付近の一部では、遺構面が小さな凹凸が激しい状況であった。遺構面の状況から、廃絶時の状況を推定する鍵となる可能性もある。（廣瀬）

第３面出土遺物（図 17）

【02－1調査区】 **第３－１層**（図 17－144～150、図版 31）から陶磁器、土師器、瓦質土器、須恵器、瓦等が出土した。144 は龍泉窯系青磁碗、145 は景徳鎮窯系端反皿、146 は土師器皿、147 は土師器羽釜、148 は瓦質土器鉢、149・150 は備前擂鉢である。144 は線描蓮弁文が施され、15 世紀第４四半期のものである。145 は 16 世紀末から 17 世紀初めのものである。146 は内外面にススが付着し灯明皿と考える 15 世紀後半かと思うものである。147・148 は 16 世紀かと思うものである。149・150 は 16 世紀末のものであり、149 はかなり使用された痕跡がある。

**第３－２層**（図 17－151）から磁器、土師器、東播系須恵器、須恵器等が極少量出土した。151 は東播系須恵器片口鉢で、12 世紀中から後半かと思うものである。

第３－３面 **A101 坪境**から土師器片２点、瓦器片２点が出土した。

**第３－３層**（図 17－152・153、図版 33）から土師器、瓦器等が極少量出土した。152 は土師器羽釜、153 は銭貨である。152 は 16 世紀かと思うもので、153 は北宋銭の「聖宋元寶」である。

第３－１層、３－２層、３－３層も遺物が少なく、15 世紀後半から 16 世紀のものが出土しているとしかいえない。

【06－2調査区】 **第３－１層**から陶磁器片、土師器片、瓦質土器片、須恵器片、瓦片等が極少量出土した。磁器は染付で 18 世紀かと思うもので混入と考える。瓦質土器は羽釜片で 15 世紀から 16 世紀かと思うものである。また、 **第３－３層**から土師器片２点、瓦器（?）片１点が出土した。土師器片１点は 15 世紀かと思う皿である。（陣内）

4） **第４面**（図 18、写真 13・14、図版６）

第４面は、第３層下部の第３－３ｂ層を除去した遺構面である。第３層に比べて粘性が強くなることが特徴で、上層に比べると細粒の粘質の土壌で構成されている。なかでも 02 －１調査区では、比較して粘性が強く粘土を主体としている。従来から、この段階前後の各面から第９層にかけて粘性が強い傾

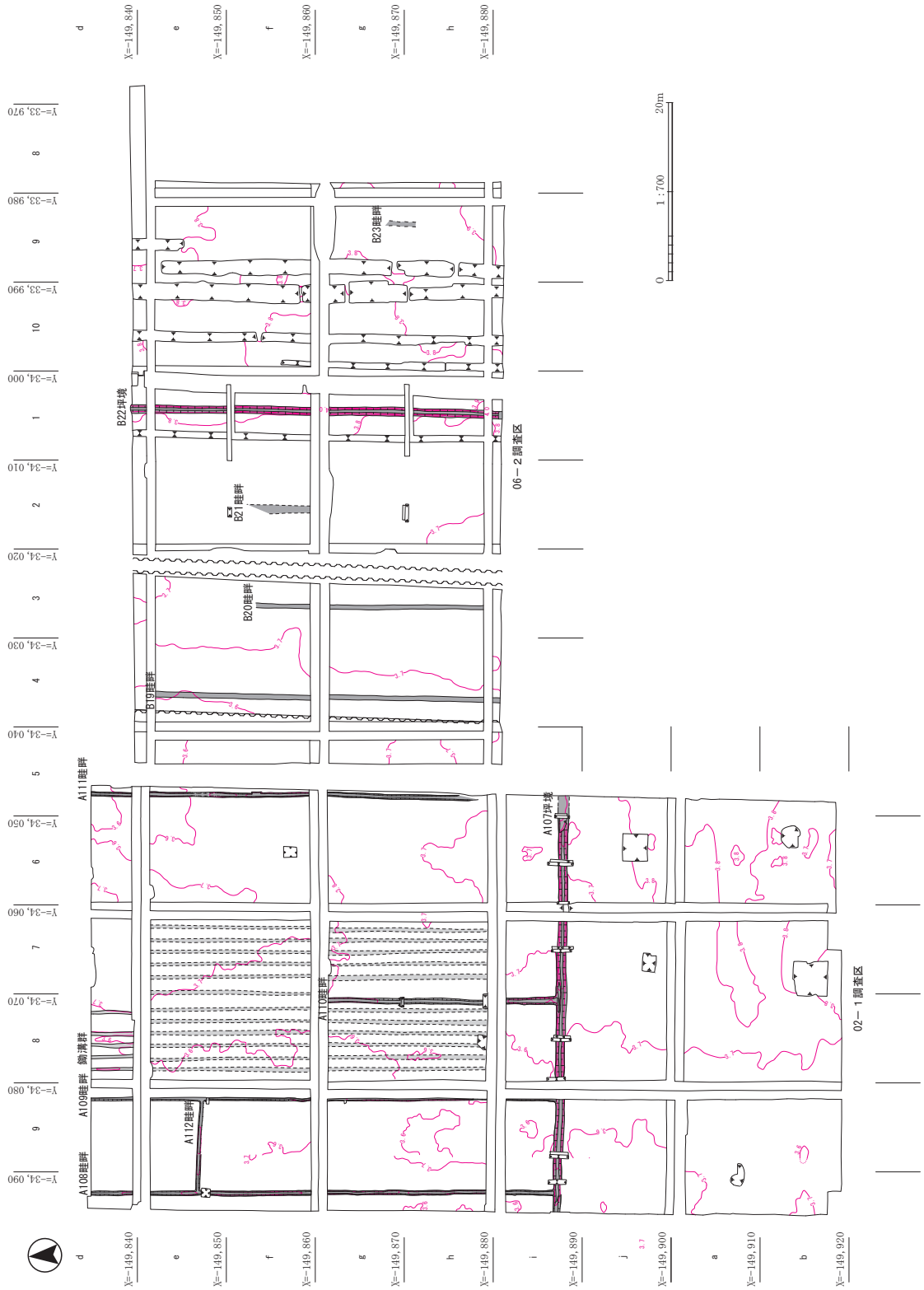



図 18　第４面　平面図

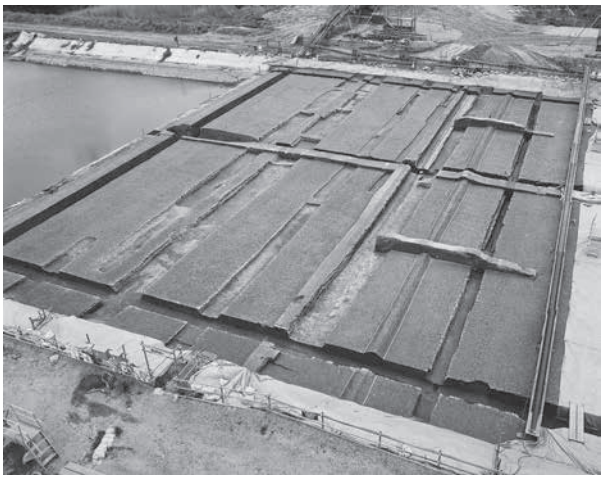
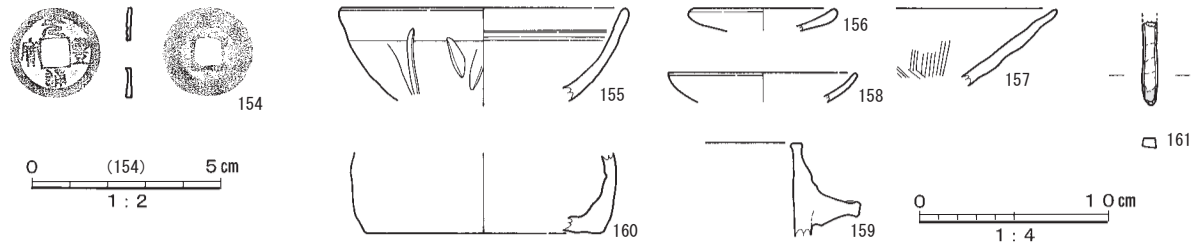


写真 13　06 － 2 調査区　第 4 面　東半（北西から）

写真 14　02 － 1 調査区　第 4 面　北半（南東から）




154：（02 － 1）第 4 層、155 ～ 161：（06 － 2）第 4 層

図 19　第 4 面　出土遺物

向である。02 － 1 調査区にあたる調査区北西部では第 3 － 3 b 層の氾濫堆積物に被覆されて良好に遺構面を検出したが、大部分は第 3 － 3 層からの攪拌により遺構面の遺存状況は悪かった。

地形は、東および南が高く西に低くなると考えられる。02 － 1 調査区北部中央～南東部にかけての地域が高く、そこから東西に低くなってゆくが、全体的に見れば、東の 06 － 2 調査区側に向かってわずかに高くなり、B22 坪境の東側ではその傾斜が比較的明瞭であるが、その西側は比較的平坦であった。遺構面の標高は一番低い北西部で T.P.3.55 m前後、その他はおよそ T.P.3.60 ～ 3.70 m前後、坪境より東で T.P.3.80 ～ 3.90 m程度である。

第 4 面では、第 3 － 3 面同様に条里地割りに伴う畦畔を良好に検出したほか、02 － 1 調査区の北部で畝立と考えられる盛り上がりとその間の低まった部分からなる溝群が良好に検出された。これは、A109 畦畔と A110 畦畔間及び A110 畦畔から東へ 10.00m の間に幅 1.50m 程度の間隔で溝が検出されたものである。溝埋土は自然堆積層であったことからこれらの溝は畝立てに伴う畝間の溝である可能性が高く、その間が本来は畝立てであったと考えられる。こうした畦畔に囲まれた畝立て遺構は、既往の調査においても確認されており、一部の畝自体が良好に形態を残して検出されている。当調査区でも、最北端部分の低いところ（網フセ実線部分）では、畝立てが良好に検出された。こうした痕跡については、畠作の痕跡と考えることが妥当であるが、水稲稲作と畠作が平行して行われた「混作」、水稲稲作収穫後の季節に「二毛作」を行ったなどの考えが可能である。

そのほか第 3 － 3 面同様に支線畦畔が検出された。この面の畦畔は通常の条里地割り幹線畦畔に直交する畦畔であった。また、06 － 2 調査区も含めて、第二十ノ坪では、ほぼ 11 ～ 12 mピッチで南北方向に延びる長地型の幹線畦畔を検出した。第二十一ノ坪は、第 3 － 3 b 層の被覆も見られず、第 3 － 3

層からの攪拌によってかなり上面を削平されて、畦畔等の遺構を検出できなかった。第３－３層段階の攪拌の痕跡や足跡などが多数見られた程度である。（廣瀬）

第４面出土遺物（図 19）

【02 － 1 調査区】 **第４層**（図 19 － 154、図版 33）から土師器、瓦器、銭貨（154）等が出土した。土師器皿片が多い。13 世紀から 15 世紀かと思うものであるが、小破片のため掲載出来なかった。154 は北宋の「元豊通寶」である。

【06 － 2 調査区】 第４面 **B19 畦畔**から土師器片１点、13 世紀初めかと思う瓦器椀片１点が出土した。第４面 **B20 畦畔**から土師器片２点が出土した。

**第４層**（図 19 － 155 ～ 161、図版 31）から土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、須恵器、瓦、木製品等が出土した。155 は龍泉窯系青磁碗、156 は土師器皿、157 は土師器皿？、158 は瓦器椀、159 は瓦質土器羽釜、160 は瀬戸灰釉壺、161 は不明木製品である。155 は蓮弁文が施され 14 世紀中頃のもので、156・159 は 16 世紀かと思うものである。157 は皿にしては大きく、内面がハケメ調整で何か不明である。158 は 14 世紀前半、160 は内外面に自然釉が付着し、15 世紀のものである。161 はスギ材で、先端が炭化している。第４層出土の時期のわかる遺物は 14 世紀から 16 世紀と幅広い。（陣内）

5）**第５面**（図 20、写真 15・16）

第５面は、第４層を除去した面である。第４層と第５層の間には間層がほとんど挟まず土壌化層の連続であるが、第５層は 7.5GY4/1の中砂～粗砂の混じる粘土～シルトの粘土の層である。06 － 2 調査区の B27 坪境より東では、第４層自体がやや砂質を多く含んでいるため、層識別は容易であった。ま

**図 20　第５面　平面図**

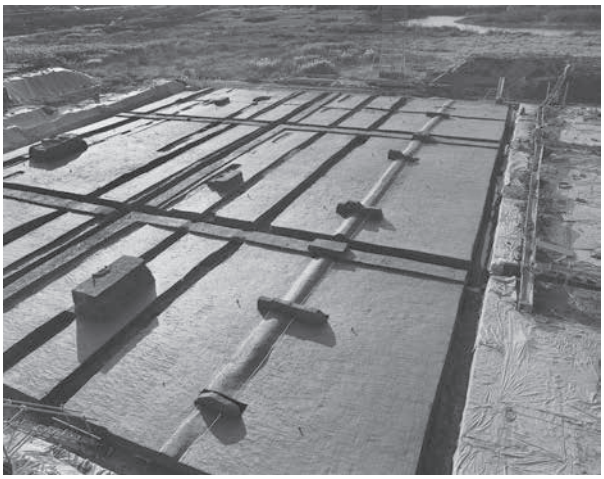


写真 15　02 － 1 調査区　第 5 面　南半（北東から）

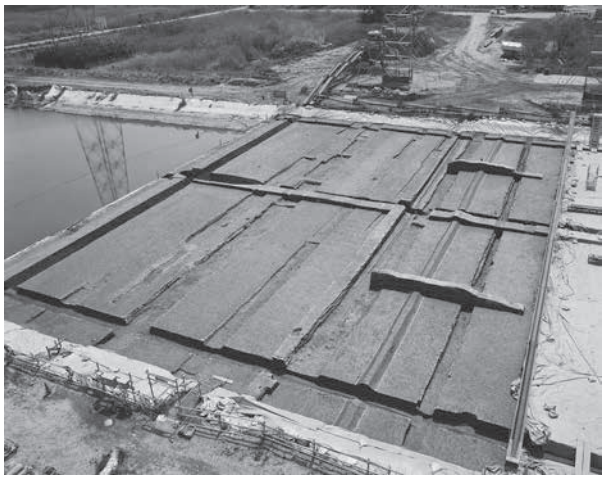


写真 16　06 － 2 調査区　第 5 面　東半（北西から）

た、02 － 1 調査区の第 4 層下部には酸化カルシウムの塊が層状に見られた。但し、第二十ノ坪も東の 06 － 2 調査区の方向に行くにしたがい、粘性は弱まり、逆に粗粒砂が目立つようになってゆく。地形的には、これまで同様に全体的に見れば、若干東が高い。しかし、02 － 1 調査区北部の中央から南東部にかけての地域は、後述する第 11 b 層の氾濫堆積物が厚く、この付近に若干高い南北方向の帯がみられる。遺構面の標高は、T.P.3.50 ～ 3.80 m程度である。

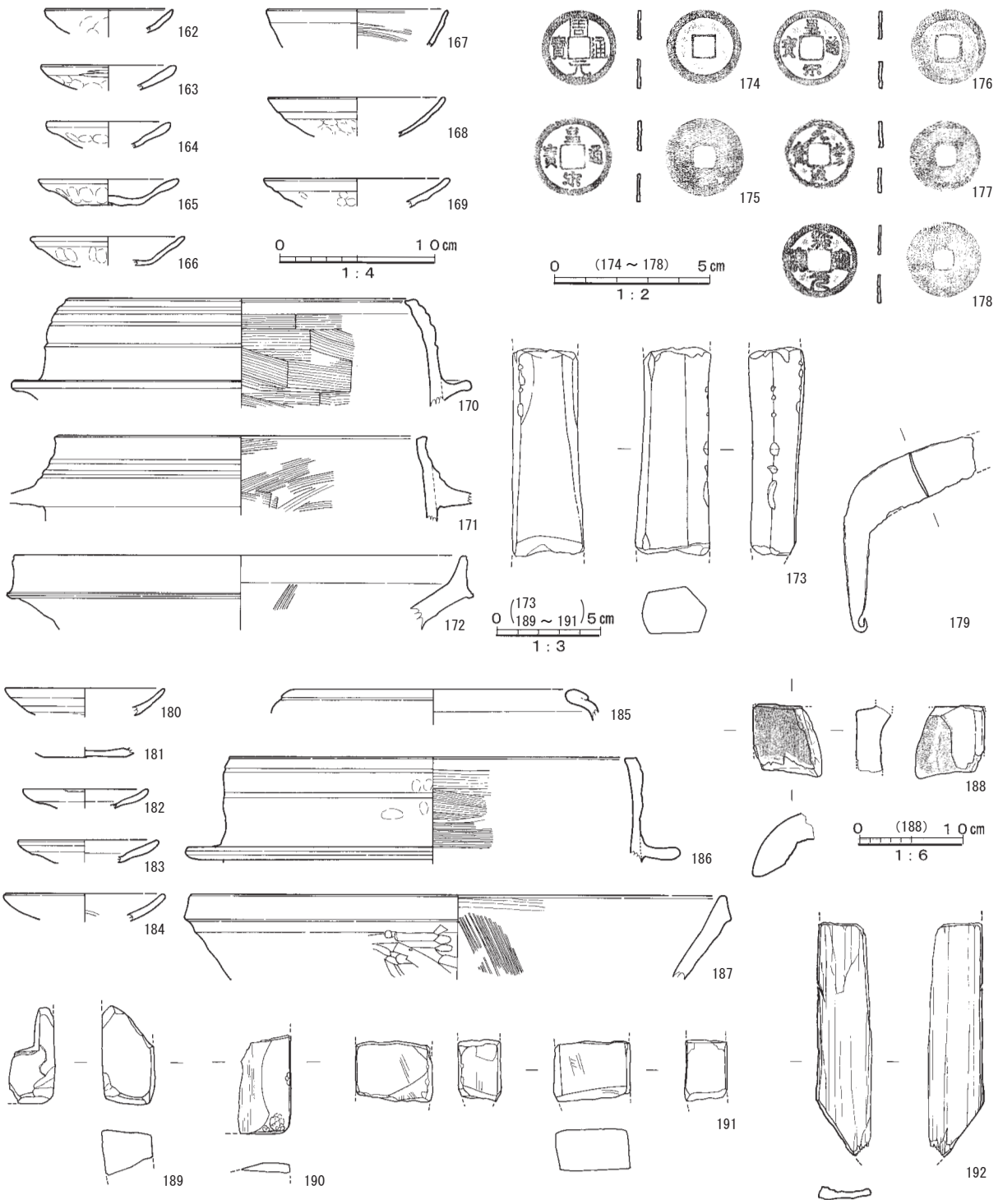
遺構面は、上層からの明瞭な踏み込み等は目立たないが、第 4 層下部に多く見られた酸化カルシウムの塊が検出面でも目立った。遺構の検出はほとんどなく、わずかに第二十ノ坪で A113 坪境とそこから派生する A114 畦畔、B24 ～ 26 畦畔、B27 坪境が検出されたのみである。**A113 坪境・B27 坪境**とも、高さ 0.17 ～ 0.20 mほどの高まりを持つ畦畔で、水路等は確認されていない。このほかの遺構は検出されていないが、02 － 1 調査区の第二十ノ坪の条里地割に伴う幹線畦畔推定位置の付近の第 5 層の除去作業中に、銅銭が 5 枚出土しているが、出土状況は明瞭ではない。このほか、銭が出土したと同じ条里畦畔の南側で拳大の礫が第 5 面検出中に出土している。これに関しては、条里地割りに伴う坪境付近に礫が見られることがたびたび指摘されている。（廣瀬）

第 5 面出土遺物（図 21）

【02 － 1 調査区】 第 5 面 **A113 坪境**から瓦質土器かと思う破片が 1 点出土した。**第 5 層**（図 21 － 162 ～ 179、図版 32・33）から土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、砥石、銭貨、鉄製品等が出土した。162 ～ 166 は土師器皿、167 ～ 169 は瓦器椀、170 は土師器羽釜、171 は瓦質土器羽釜、172 は備前擂鉢、173 は砥石、174 ～ 178 は銭貨、179 は鉄鎌である。162・163 が 13 世紀、164 ～ 166・170・171 が 15 世紀かと思うもの、167 ～ 169 は 13 世紀後半から 13 世紀末かと思うものである。172 は内外面に自然釉（内底面はゴマ灰という）が付着し、15 世紀後半のものである。173 は砂岩製で、砥面は 6 面である。179 は茎部を折り曲げ柄からはずれにくくしている。銭貨は 174 が後周の「周通元寶」、175・176 は北宋の「皇宋通寶」、177 は北宋の「元豊通寶」、178 は北宋の「聖宋元寶」である。

時期のわかる遺物は、13 世紀のものと 15 世紀のもので、14 世紀のものがない。

【06 － 2 調査区】 第 5 面 **B25 畦畔**から瓦質土器片 1 点が出土した。第 5 面 **B27 坪境**から 14 世紀かと思う瓦質土器鉢口縁片と 11 世紀前半かと思う土師器椀高台片 1 点が出土した。**第 5 層**（図 21 － 180 ～ 187・189 ～ 192、図版 32・40）から輸入磁器、土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、瓦、砥石等が出土した。180 は閩江窯系白磁皿、181 は華南沿海窯系白磁皿、182・183 は土師器皿、184 は瓦器椀、




162～179：(02－1) 第5層、180～187，189～192：(06－2) 第5層、188：第6面 B32 畦畔

**図 21　第5面　出土遺物**

185・186 は土師器羽釜、187 は瓦質土器擂鉢、189 は不明石製品、190・191 は砥石、192 はスギ材で不明木製品である。180 は 15 世紀後半のもの、181 は外底面が部分的に露胎で、回転ケズリ調整の 13 世紀第 1 四半期のものである。182・183・186 は 15 世紀かと思うもので、184・185・187 は 14 世紀のものである。189 は結晶片岩製で、段が生きているとして何になるのか不明である。190 は粘板岩製の表面破片で、砥面が 2 面でススが付着している。191 は流紋岩質溶結凝灰岩製で、砥面が 4 面である。

06－2 調査区の第 5 層は 14 世紀から 15 世紀の遺物を含んでいる。(陣内)

6）**第６面**（図 22、写真 17、図版７）

第６面は第５層の土壌化層を除去して検出される遺構面である。第６層は、第５層からの攪拌で遺構面は遺存していない。粘性が強いが、細砂～中砂を多く含む粘土層である。東ほど砂質は強くなる。

地形は、前段階同様に全体的には東ほど高いが、前段階から顕著になってきた 02 － 1 調査区の南東

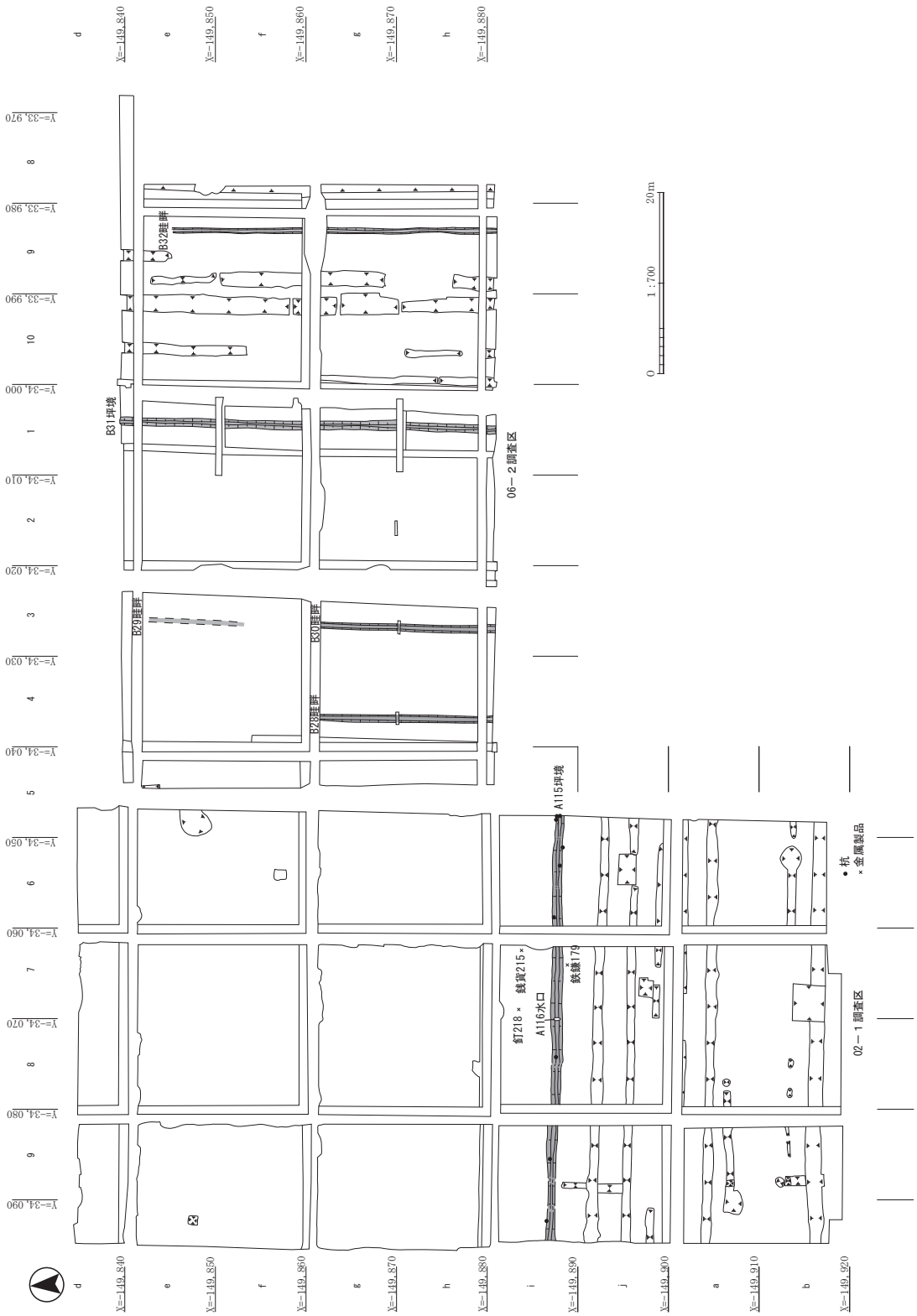
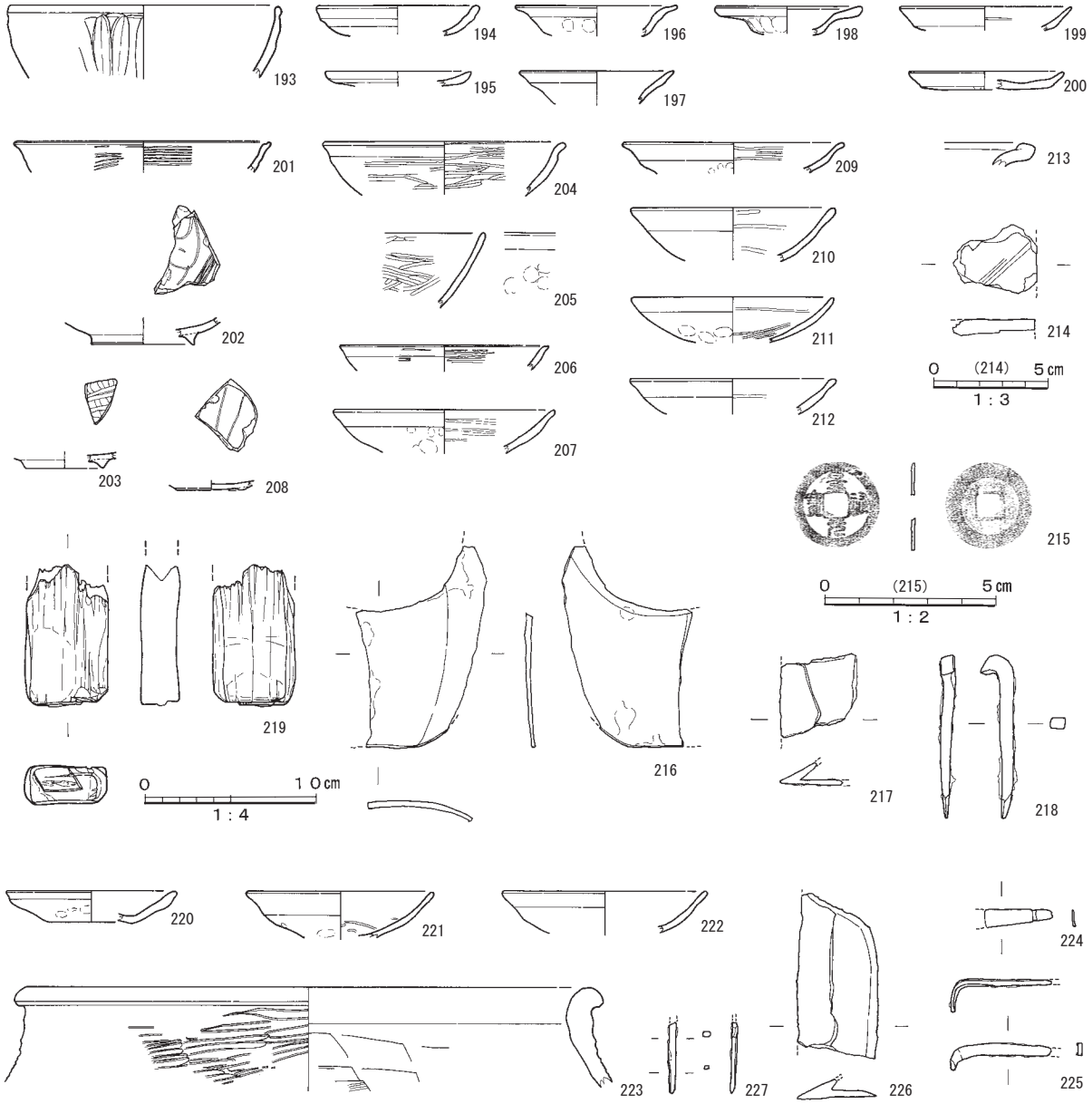



**図 22　第６面　平面図**

から北西方向に伸びる第 11 b 層の高まりの影響を受けて北側中央部から南東部にかけての地域が若干高く、そこから東西に低くなってゆく部分が見られた。遺構面の標高は T.P.3.40 ～ 3.70 mである。

遺構は上層からの攪拌で遺存状況は悪いが、A115 坪境のほか、B31 坪境、B28 ～ 30・32 畦畔が確認された（写真 17、図版７）。**A115 坪境**では、中央部付近に写真 18 のような A116 水口が確認された。**A116 水口**は、第６面の検出中に確認されたことから本来は上層の第５面段階の暗渠等の掘形の可能性もある。しかし、いずれにしても、この水口の築かれた位置は上下の条里地割において幹線畦畔が確認されていた位置に近く、幹線畦畔との関係でこの位置に設定されていたと考えられる。

このほか、A115 坪境精査中には、坪境畦畔の肩部付近から杭及び杭跡が確認された。いずれも単独で杭間の間隔も統一性はない。また当面で検出したものであるが、先述の A116 水口同様に帰属面が当面とは限らない可能性も高い。第６面の坪境検出時に確認されていることから、どちらかといえば上層の坪境に対応する護岸等の補強作業のものと考えることが適当かと思われる。




193 ～ 219：（02 － 1）第６層、222：B28 畦畔、220・221，223 ～ 227：（06 － 2）第６層

**図 23　第６面　出土遺物**

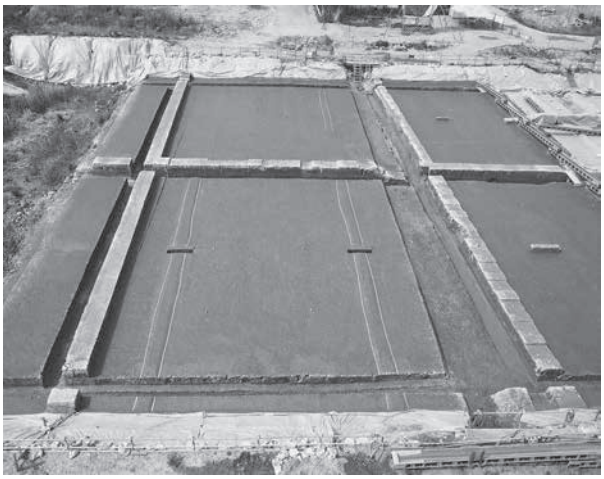


写真 17　06 － 2 調査区　第 6 面　西半（南から）

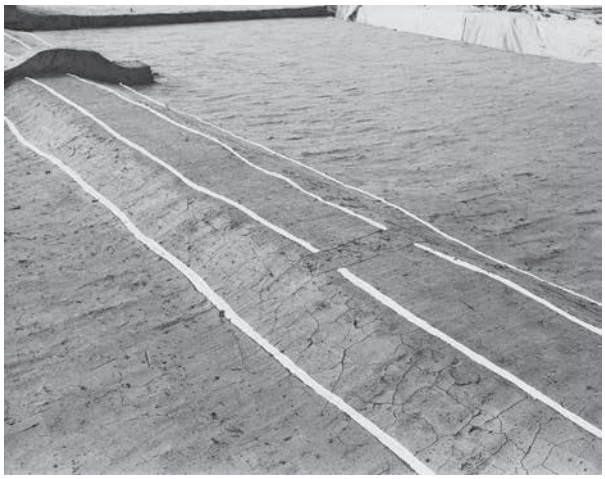


写真 18　第 6 面　A116 水口（南東から）

また 06 － 2 調査区では、第二十ノ坪において 2 条の幹線畦畔、第十七ノ坪において 1 条の幹線畦畔を確認している。いずれも、土壌が水田部分より若干ではあるが砂質が強い感じであった。（廣瀬）

第 6 面出土遺物 ( 図 23)

【02 － 1 調査区】 第 6 面 **A115 坪境**からは土師器片、瓦器片が少量出土した。いずれも細片だが、土師器片には 14 世紀から 15 世紀かと思うへそ皿の破片がある。瓦器片は 12 世紀末から 13 世紀初めかと思うものと 13 世紀後半かと思うものがある。

**第 6 層**（図 23 － 193 ～ 219、図版 31 ～ 33･41）から磁器、土師器、瓦器、須恵器、銭貨、鉄製品、木製品等が多く出土した。土師器皿、瓦器椀が多い。193 は龍泉窯系青磁椀、194 ～ 198 は土師器皿、199･200 は瓦器皿、201 ～ 212 は瓦器椀、213 は土師器羽釜、214 は砥石、215 は銭貨、216 は鉄鋤、217 は鉄鋤か鍬、218 は鉄釘、219 は不明木製品である。193 は蓮弁文が施され 14 世紀初めのもの、土師器皿は主に 12 世紀から 14 世紀かと思うもので、瓦器皿は 13 世紀、瓦器椀は 12 世紀前半から 13 世紀後半のものがあり、13 世紀代中頃から後半のものが多い。201・202 は大和型である。214 は珪質片岩製の表面破片で、砥面は 1 面である。215 は北宋の「景祐元寶」である。219 は下端を突出させるような加工痕がある。コウヤマキ材で作られており特殊なものかもしれない。

【06 － 2 調査区】 第 6 面 **B28 畦畔**（図 23 － 222）から瓦器椀片 2 点が出土した。222 は 13 世紀末から 14 世紀初めのものである。第 6 面 **B30 畦畔**から 13 世紀代かと思う瓦器椀口縁片 1 点と瓦器片 1 点が出土した。第 6 面 **B32 畦畔**（図 21 － 188）から丸瓦 1 点（188）が出土した。188 は凸面が平行タタキ調整でススが付着し、凹面が面取りが広くスジ状の段になった布目痕があり、室町時代かと思うものである。

**第 6 層**（図 23 － 220・221・223 ～ 227、図版 33）から土師器、瓦器、瓦質土器、鉄製品等が出土した。土師器皿が多い。220 は土師器皿、221 は瓦器椀、223 は瓦質土器甕、224 は鉄小刀？、225 はかすがい？、226 は鉄鋤か鍬、227 は鉄釘である。220 は 14 世紀後半かと思うもの、221 は 13 世紀末から 14 世紀初めのもの、223 は 15 世紀かと思うものである。

池島 I 期地区の第 6 層出土遺物は、13 世紀、13 世紀末から 14 世紀初めのものが多く、今回報告の遺物の時期と齟齬をきたさない。（陣内）

**7）第7面**（図24、写真19・20、図版7）

第7面は土壌化層である第6層を除去して検出される面である。第7層は、暗灰色N3/の粘土～シルトの層で、極細砂～中砂を含む。第6層よりやや砂粒は多く、色調も淡く薄い。粘性は強いが、砂の混りが多く層上部に部分的に炭酸カルシウムが多く見られる。06－2調査区の東側は、酸化して茶褐

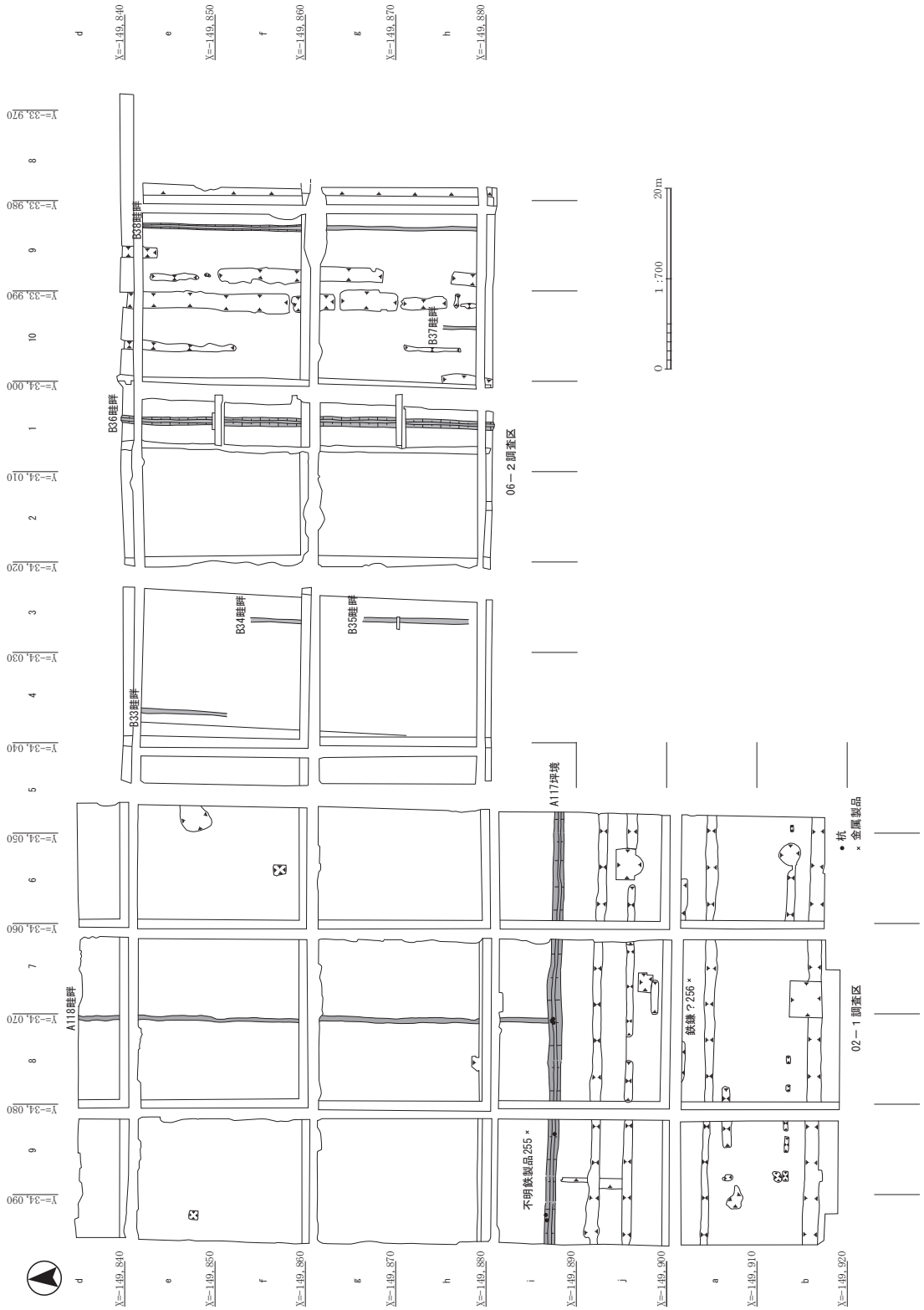
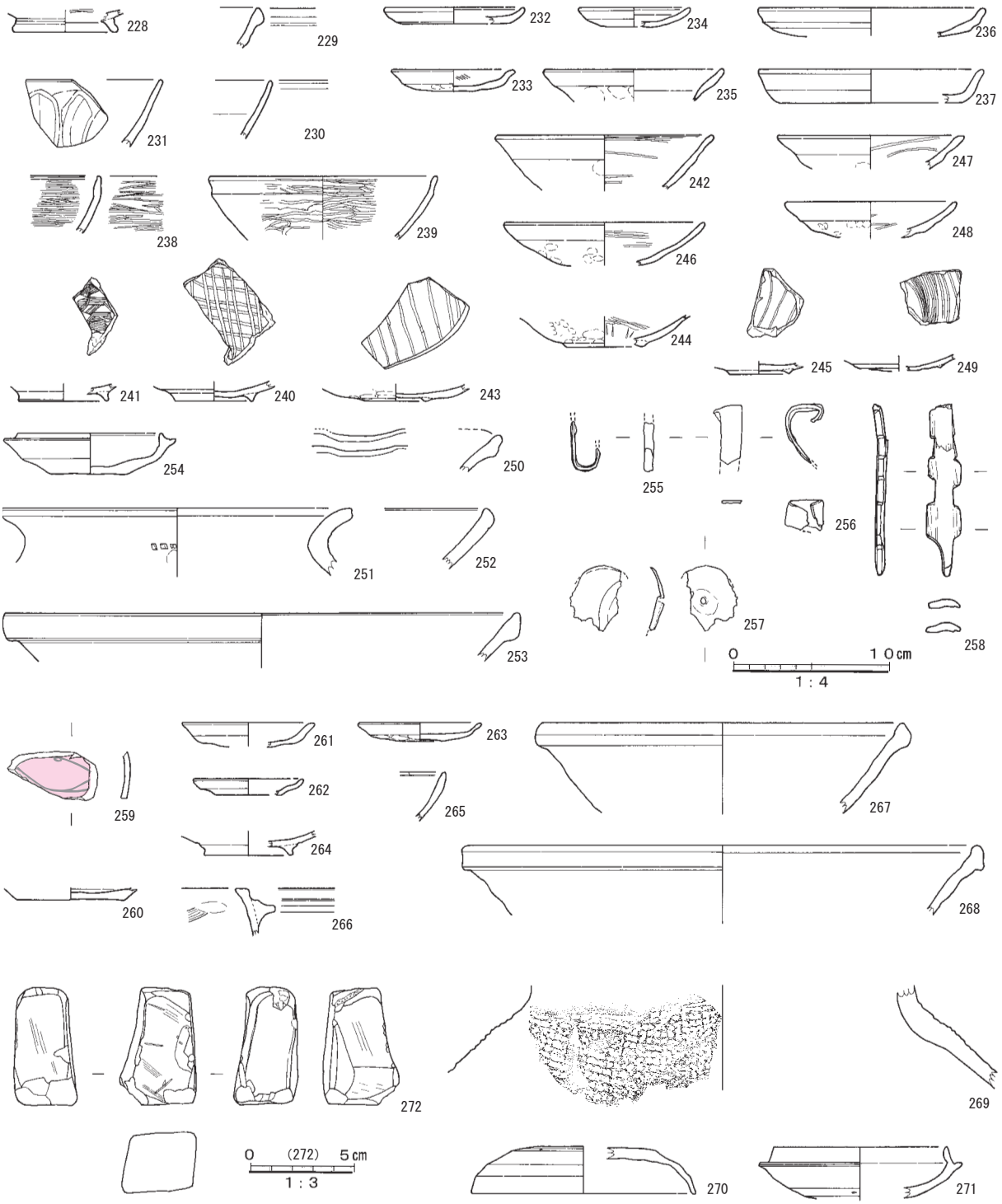



図24　第7面　平面図




228：A117 坪境、229 ～ 258：（02 － 1）第７層、259：B36 坪境、260 ～ 268：（06 － 2）第７層、269 ～ 272：（02 － 1）第７～９層

**図 25　第７面　出土遺物**

色に変質している。上面は第６層からの踏み込みなどで凹凸が多く、遺存状況は悪い。

地形は、これまで同様に基本的には東と南が高く、下層の第 11 ｂ層の氾濫堆積物の影響による東への地形的な変化が顕著になってきている。しかし、同様な盛り上がりが 02 － 1 調査区北部中央から南東部にかけての地域にあり、その部分はわずかに周辺より地形的に高い。

これに関連して、06 － 2 調査区の東半は東に続く 04 － 2 調査区に向かって第７層以下第 11 層までの層が大きく変化していくので説明しておきたい。先述のように、これは第 12 層の弥生時代中期の遺

写真 19　02 － 1 調査区　第 7 面　南半（西から）

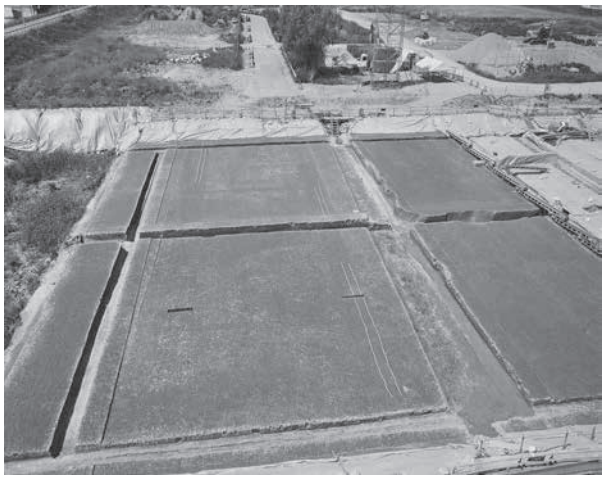


写真 20　06 － 2 調査区　第 7 面　西半（南から）

構面を被覆している第 11 b 層の氾濫堆積物の影響によるもので、基本的には調査区全域に堆積しているものである。なかでも、02 － 1 調査区の東半から 04 － 2 調査区にかけては第 12 面の段階の地形的な起伏が激しく、この低い部分を中心に東ほど厚く氾濫堆積物が堆積している。

遺構は坪境・条里畦畔（写真 19・20、図版 7）が検出された。西では東西方向の A117 坪境及びそこから二十ノ坪の北に延びる A118 畦畔が検出された。**A117 坪境**は幅約 1.0m・高さ約 0.3m 程度である。**A118 畦畔**はほとんど色調の相違として検出されたのみで、第 6 層の擬似畦畔状を呈するが、周辺に比べてやや攪拌の度合いが少ないようであった。東では、B36 坪境および B33 ～ 35・37・38 畦畔が確認された。**B36 坪境**は、幅 0.8 ～ 1.2m・高さ 0.21m 程度である。当面で検出された畦畔は、位置的には条里畦畔推定位置に近いが、遺存状況が悪く、位置的にも上面の畦畔に伴う可能性も否定できない痕跡程度の遺構である。（廣瀬）

第 7 面出土遺物（図 25）

【02 － 1 調査区】 第 7 面 **A117 坪境**（図 25 － 228）から土師器、瓦器等が少量出土した。228 は瓦器椀高台で大きくしっかりしている。11 世紀後半のものである。

**第 7 層**（図 25 － 229 ～ 258、図版 31・32・41）から磁器、土師器、瓦器、瓦質土器、東播系須恵器、須恵器、鉄製品、木製品等が多く出土した。229・230 は華南沿海窯系白磁碗、231 は龍泉窯系青磁碗、232 ～ 237 は土師器皿、238 ～ 249 は瓦器椀、250 は瓦質土器鉢、251 は東播系須恵器甕、252・253 は東播系須恵器鉢、254 は須恵器杯、256 は鉄鎌？、255・257 は不明鉄製品、258 は不明木製品である。229・230 は 13 世紀前半のもので、231 は鎬蓮弁文が施され 13 世紀第 4 四半期のものである。土師器皿は 13 世紀代のものが多く、12 世紀や 15 世紀と思われるものもある。瓦器椀は 12 世紀から 13 世紀のもので、13 世紀代のものが多い。238 は楠葉型、249 は大和型である。250 は 14 世紀かと思うもので、252 は 12 世紀中頃、253 は 12 世紀末から 13 世紀初めかと思うものである。254 は下からの巻上げと考える。256 は刃の部分が曲げられている。255・257 はそれぞれ責金物、飾釘の頭部かもしれない。258 は両側面を凹凸させている。コウヤマキ材で作られており、特殊なものかもしれない。第 7 層は 13 世紀のものが主に出土している。

図 25 － 269 ～ 272 は第 7 ～ 9 層のいずれかから出土したもので、ここに掲載した。269 は瓦質土器甕、270 は須恵器杯蓋、271 は須恵器杯、272 は砥石である。269 は 13 世紀から 14 世紀かと思うもので、270・271 は 6 世紀第 4 四半期のものである。272 は凝灰質頁岩製で、砥面が 4 面で右側面に

削られたような段がある。

【06 － 2 調査区】

第 7 面 **B36 坪境**（図 25 － 259、図版 39）から 14 世紀から 15 世紀かと思う土師器皿片 1 点、 6 世紀末から 7 世紀初めかと思う須恵器杯片 1 点、漆器椀片 1 点（259）が出土した。259 はカツラ材で、赤漆に内面は黒漆で文様を描いている。第 7 面 B38 畦畔から外面平行タタキ調整、内面当て具痕のある須恵器片 1 点が出土した。

**第 7 層**（図 25 － 260 ～ 268、図版 31）から磁器、土師器、瓦器、東播系須恵器、須恵器等が出土した。260 は華南沿海窯系白磁皿、261・262 は土師器皿、263 は瓦器皿、264・265 は瓦器椀、266 は土師器羽釜、267・268 は東播系須恵器鉢である。260 は 13 世紀第 1 四半期で外底面回転ヘラケズリの後、釉が線状に付着している。261 は 13 世紀後半、262 は 15 世紀かと思うものである。263 は 13 世紀かと思うもので、264・265 は 12 世紀前半から中頃のものである。265 は楠葉型である。266 は大和型（？）の 14 世紀かと思うもので、267・268 は 12 世紀末から 13 世紀初めのものである。第 7 層は主に 12 世紀から 13 世紀の遺物が出土している。

池島 I 期地区の第 7 層出土遺物は 11 世紀末から 13 世紀のもので、今回報告の遺物の時期と齟齬はきたさない。（陣内）

**8）第8面**（図 26、写真 21・22、図版8）

第8面は土壌化層である第7層を除去して検出される遺構面である。第8層は、上面は第7層からの攪拌によって削平されているが、灰色 N4/ の粘土～シルトの層で、細砂を僅かに含んだ層である。西半部分の層下面は凹凸に大きく変形し、下層の第9層が変形している。これについては、従来から地震による地形の変形構造と指摘されているものと考えられる。また、02 － 1 調査区の調査では、松田順一郎氏（財団法人東大阪市文化財協会、現　財団法人東大阪市施設利用サービス協会）に実見していただき同様なご教示をいただいた。

地形は、第7面の記述でも指摘した、第 11 b 層の影響による地形の傾斜がさらに顕在化した状況である。したがって基本的に東ほど高く、02 － 1 調査区の中央部北から南東部にかけての地域が若干高い。

遺構は坪境のほか、06 － 2 調査区で畦畔の痕跡の可能性がある筋状の変色痕跡と土坑 1 基・溝 1 条が確認された。

**A119 坪境溝**は、北側に若干の高まりを持つ溝で、高まりは上幅 0.10 ～ 0.30 m、高さ 0.10 mを測る。溝は、幅 1.00 ～ 1.20 m、深さ 0.10 mを測る（図版8）。周辺部に比べて、埋土は第7層との区別がつきにくいがやや淡い色調を呈する粘土～シルトである。坪境溝内から杭跡及び石を検出したが、いずれも上層に関連するものの可能性をぬぐえない。このほか二十ノ坪北東部で礫を2点検出した。

**B41 坪境**（図 27、写真 22）は、幅 0.7 ～ 1.05 m、高さ 0.25 mのものである。**B39 畦畔**は、わずかに色調の違う筋状の部分がみられたもので、本来畦畔であったのかどうかは確定できない。

**B40 溝**（図 28）は、東側を現代の水路の矢板打設による地形の落ち込みによって切られているが、現状で長さ 2.5 m、幅 0.84 m、深さ 0.07 mである。埋土は 1 層で、遺物も出土していない。

**B42 土坑**（図 28、写真 25、図版8）は、B41 坪境の東で確認されたものである。規模は、長軸 2.66 m・短軸 1.63 m、深さ 0.66 mの長方形の遺構である。埋土は、掘り上げてすぐに埋め戻したような状況で、下層の第8層～ 11 b 層上部の各層がブロック上に混じりあったような状況を呈している。調査では第8面の検出時に確認されたため当面で記述するが、埋土に第8層と考えられるブロックが混じっていることを考えると、本来は上層の遺構の可能性が高い。遺物は出土していない。

こうした遺構は、これまでにも池島Ⅰ期地区の調査などで第7面段階に同様な遺構が検出されている。いずれも、すぐに埋め戻したかのように、埋土が下層のブロックで構成されていることを特徴としている。遺物もまったく出土しない場合が多く、性格等は不明である。（廣瀬）

写真 21　02 － 1 調査区　第8面　北半（北東から）

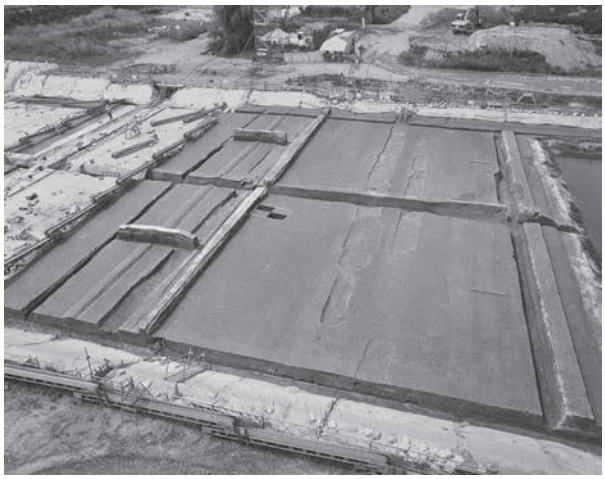


写真 22　06 － 2 調査区　第8面　東半（南から）

第８面出土遺物（図 29・30）

【02 － 1 調査区】 第８面 **A119 坪境溝**から土師器片、瓦器片等が極少量出土した。いずれも破片だが、瓦器片の中に 12 世紀かと思うものがある。**第８層**（図 29 － 273 ～図 30 － 336、図版 31・32・41）から黒色土器Ａ類、黒色土器Ｂ類、土師器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、須恵器、銭貨（328）、鉄製品（329

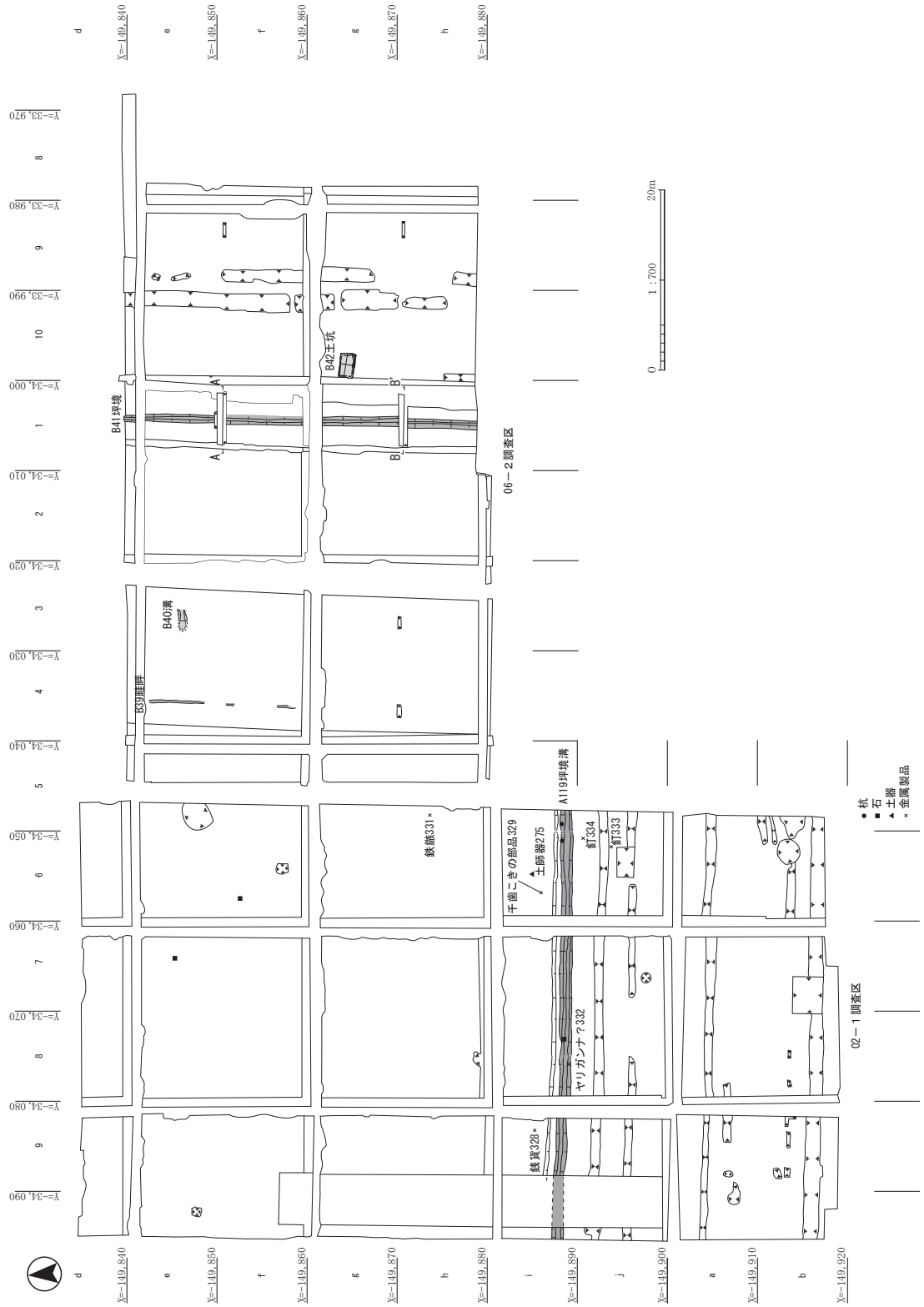



図 26　第８面　平面図

写真 23　02 － 1 調査区　第３～７面　条里坪境（西から）

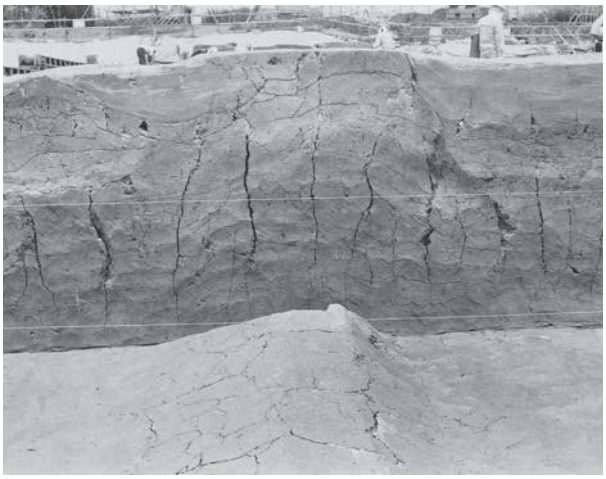
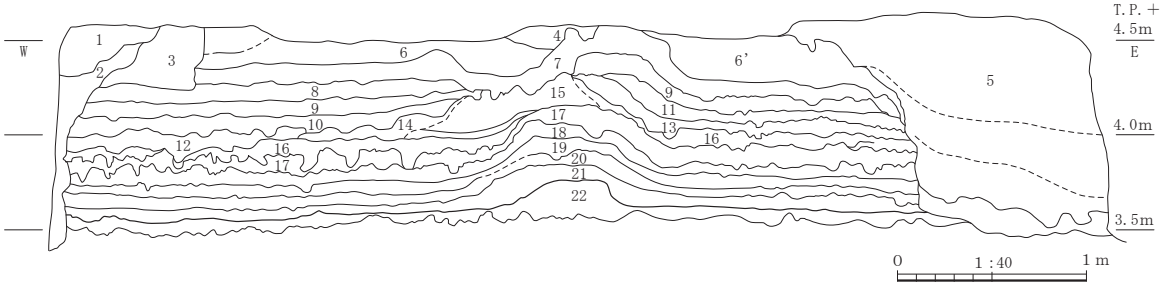


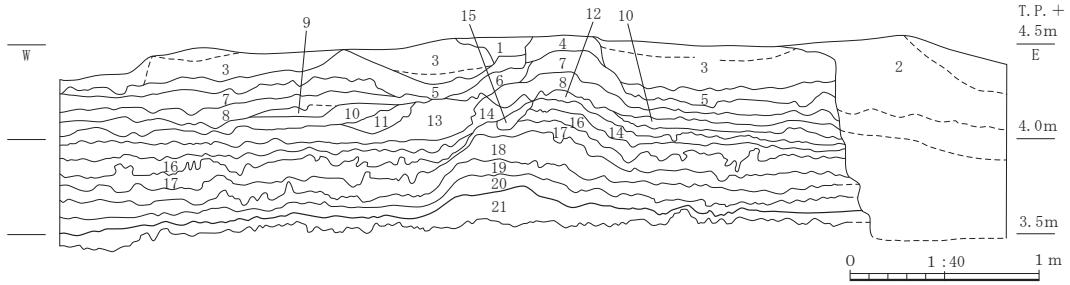
写真 24　06 － 2 調査区　第２～７面　条里坪境（南から）

条里坪境 断面(X=-149,850ラインのY=-34,004～-34,010付近)（１：40）




| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1:褐 | 7.5YR4/3 | シルト混細砂 | (1b土坑埋土(上部)) | 11:灰褐 | 7.5YR4/2 | シルト混中砂 | (第２-４層) |
| 2:褐 | 7.5YR4/4 | シルト混中砂 | (1b土坑埋土(下部)) | 12:にぶい黄橙 | 10YR6/4 | シルト混中～粗砂 | (第２-４-２層) |
| 3:明褐 | 7.5YR5/8 | 中砂混粘質シルト | (1b土坑) | 13:灰黄褐 | 10YR4/2 | 細砂～極粗砂混シルト | (第３-１層) |
| 4:黄褐 | 10YR5/6 | 細砂混粘質シルト | (第１層下面遺構) | 14:にぶい黄褐 | 10YR5/4 | 粘質シルト | (第３-１層) |
| 5:にぶい黄橙 | 10YR6/4 | 極細～中砂混粘質シルト | (1b土坑埋土) | 15:明黄褐 | 10YR6/6 | (ラミナ有) | |
| 6:灰褐 | 7.5YR4/2 | シルト～極細砂 | | ～にぶい黄褐 | ～10YR5/3 | | (第３-１ｂ層) |
| ～灰黄褐 | ～10YR6/2 | (ラミナあり) | (第１ｂ層氾濫堆積物) | 16:暗灰黄 | 2.5Y4/2 | シルト混細砂 | (第３-２層) |
| 6:褐 | 7.5YR4/3 | シルト(坪境東ややシルト多い) | | 17:褐灰 | 10YR4/1 | 粘質シルト | (第３-３層) |
| 7:褐灰 | 10YR4/1 | シルト混細砂(鉄分多い) | (第２-１層) | 18:黄灰 | 2.5Y4/1 | 粘質シルト(鉄分沈着あり) | (第４層) |
| 8:灰褐 | 7.5YR4/2 | シルト混中砂（１㎜大の礫少量含む、鉄分含む) | (第２-２層) | 19:オリーブ黒 | 5Y3/2 | 細砂混粘質シルト | (第５層) |
| | | | | 20:灰 | 5Y4/1 | 粘質シルト | (第６層) |
| 9:暗灰黄 | 2.5Y4/2 | シルト混粗砂 | (第２-３層) | 21:灰 | 7.5Y4/1 | 粘質シルト | (第７層) |
| 10:にぶい褐 | 7.5YR5/3 | シルト混粗砂 | (第２-４層) | 22:灰 | 5Y4/1 | 細砂混粘質シルト | (第８層) |

条里坪境 断面(X=-149,870ラインのY=-34,004～-34,010付近)（１：40）




| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1:灰白 | 10YR7/1 | 中～粗砂 | | 11:暗オリーブ | 5Y4/3 | シルト混極細～極粗砂 | (第２-４層) |
| ～明黄褐 | ～10YR7/6 | | | 12:にぶい黄褐 | 10YR5/4 | 粘質シルト | (第３-１層) |
| 2:にぶい黄橙 | 10YR7/2 | 粘質シルト混細～中砂 | (1b土坑埋土) | 13:明黄褐 | 10YR6/6 | | |
| ～明黄褐 | ～10YR7/6 | | | ～にぶい黄褐 | ～10YR5/3 | ラミナあり 氾濫堆積物 | (第３-１ｂ層) |
| 3:にぶい橙 | 7.5YR7/3 | シルト混細～極粗砂 ラミナあり | | 14:灰 | 7.5Y4/1 | 粘質シルト(鉄分含む) | (第３-２層) |
| ～橙 | ～7.5YR7/6 | | | 15:暗オリーブ | 5Y4/3 | シルト混粗砂 | |
| 4:黄灰 | 2.5Y4/1 | シルト混中砂(鉄分含む) | (第２-１層) | 16:黒褐 | 2.5Y3/2 | 粘質シルト混極細砂 | (第３-３層) |
| 5:暗褐 | 10YR3/3 | シルト混中砂(鉄分含む) | (第２-１層) | 17:オリーブ黒 | 7.5Y3/2 | 粘質シルト(鉄分含む) | (第４層) |
| 6:オリーブ褐 | 2.5Y4/3 | シルト混細砂 | | 18:灰 | 7.5Y4/1 | 粗～極粗砂混粘質シルト（鉄分含む) | (第５層) |
| 7:灰 | 5Y4/1 | シルト混中砂(鉄分含む) | (第２-２層) | 19:暗緑灰 | 5G3/1 | 細～粗砂混粘質シルト（鉄分含む) | (第６層) |
| 8:灰オリーブ | 5Y4/2 | シルト混粗砂(第２-３層) | | 20:暗緑灰 | 10G3/1 | 粗砂混粘質シルト（鉄分含む) | (第７層) |
| 9:暗灰黄 | 2.5Y4/2 | シルト混粗砂 | | 21:暗灰 | N3/ | 中砂混粘質シルト（鉄分含む) | (第８層) |
| 10:オリーブ褐 | 2.5Y4/3 | シルト混粗～極粗砂 | (第２-４層) | | | | |

図 27　第２－１～８面　条里坪境　断面図

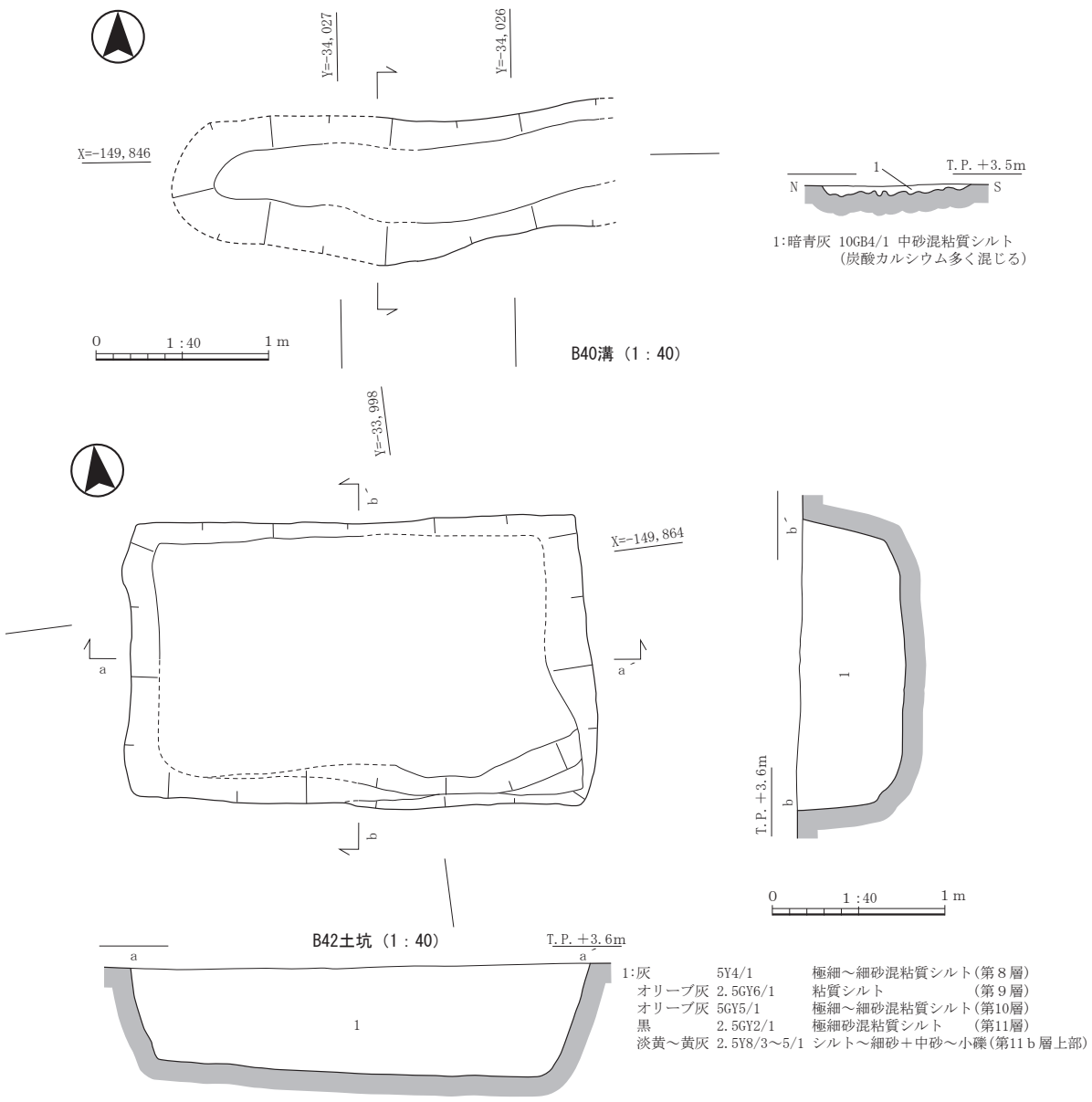
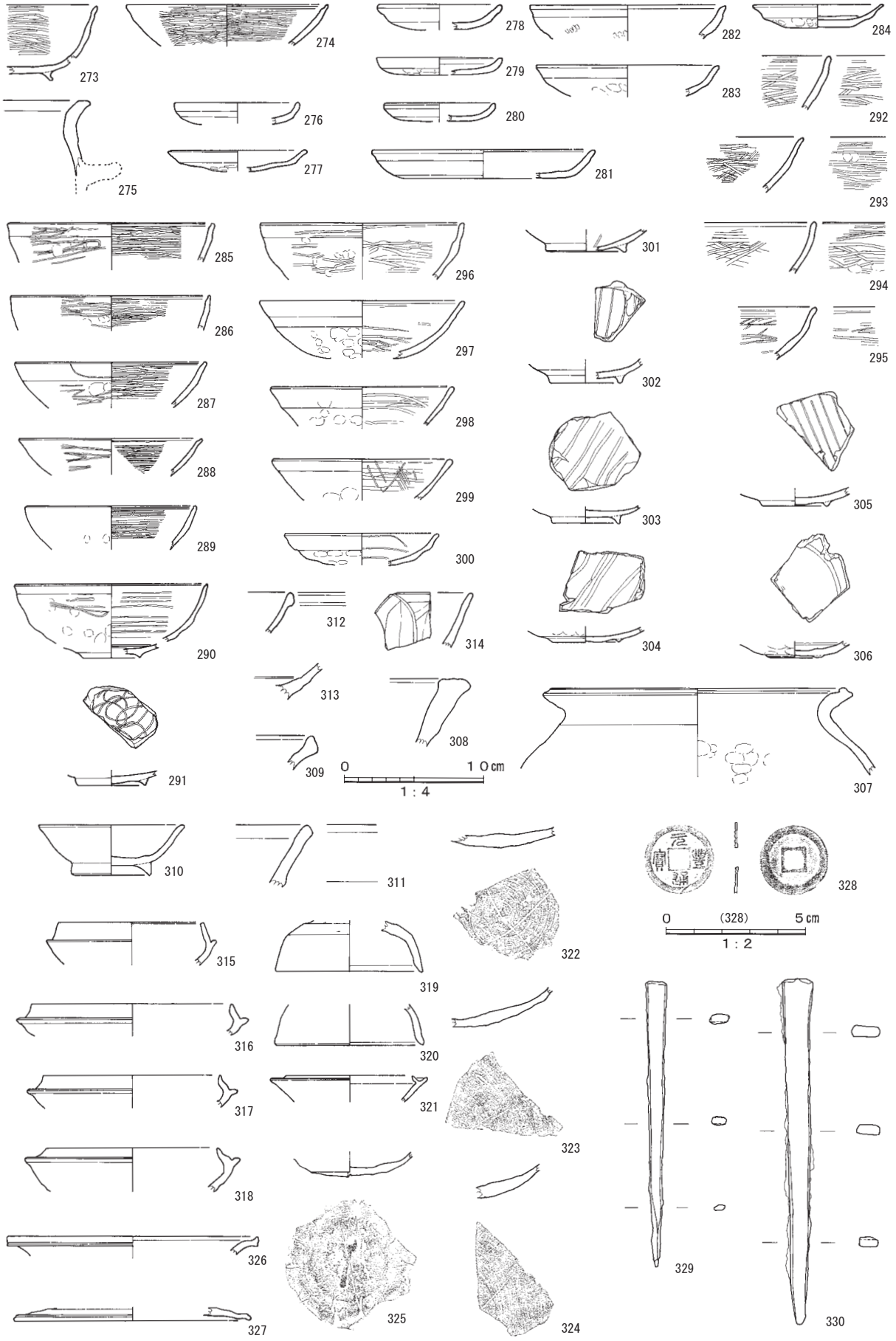


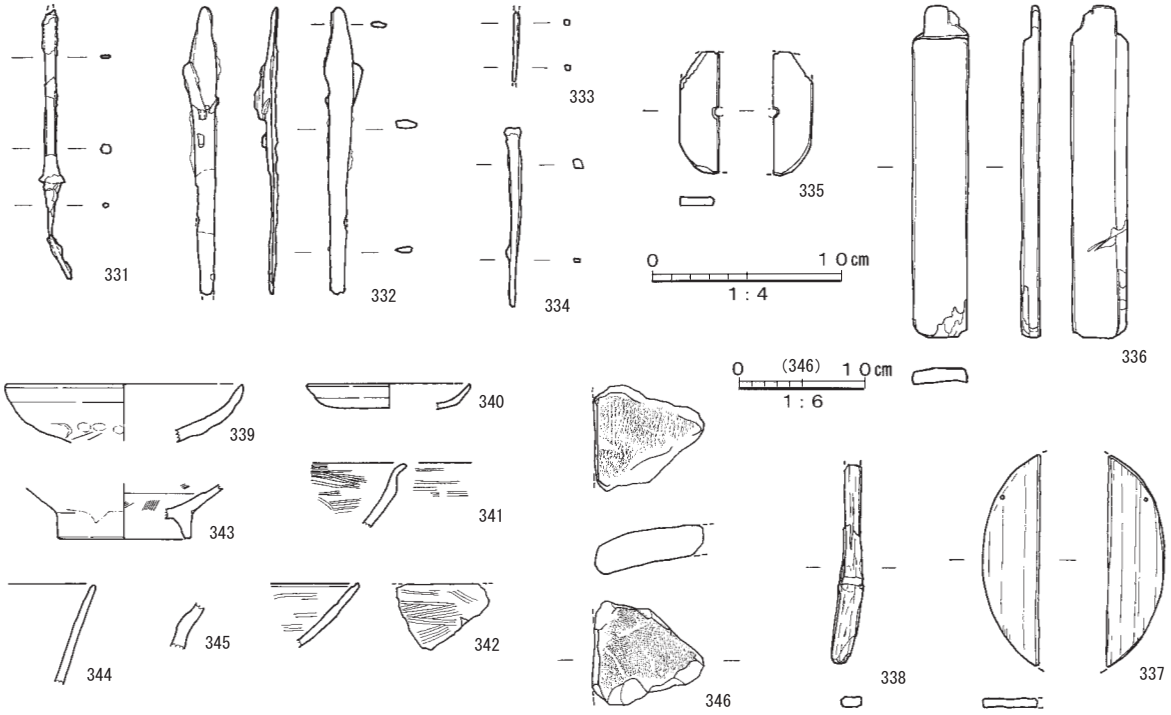

図 28　第８面　遺構図

写真 25　第８面　B42 土坑　断面（南東から）




273～330：（02－1）第８層

図 29　第８面　出土遺物（１）




331 ～ 336：(02 － 1) 第８層、337：B41 坪境、338：B42 土坑、339 ～ 346：(06 － 2) 第８層

**図 30　第８面　出土遺物（２）**

～ 334)、木製品（335･336）等が多く出土した。細片が多く、瓦器椀が多い。273 は黒色土器 A 類椀、274 は黒色土器 B 類椀、276 ～ 283 は土師器皿、284 は瓦器皿、285 ～ 306 は瓦器椀、275・307 は土師器羽釜、308 は瓦質土器鉢、309 は東播系須恵器鉢、310 は灰釉陶器瀬戸山茶碗、311 は陶器、312・313 は華南沿海窯系白磁碗、314 は龍泉窯系青磁碗、315 ～ 318・321 は須恵器杯、319・320･327 は須恵器杯蓋、326 は須恵器壺、322 ～ 325 は須恵器杯片でヘラ記号を施されたものである。329 と 331 は第８～９層出土であるがここに掲載した。273 ～ 275 は 10 世紀かと思うもので、従来の第８面の年代のものである。土師器皿は 12 世紀代のものが多い。284 は 13 世紀前半かと思うもので、瓦器椀は 12 世紀中頃から 13 世紀前半のものが多い。285 ～ 288・290・291 は大和型である。290 は径がもう少し小さいかもしれない。307 は 12 世紀かと思うものである。310 は内外面無釉の部分があり、外底面に糸切痕が、内面に重ね焼痕がある。13 世紀のものである。須恵器は下からの巻上げと考えられ、６世紀第４四半期から７世紀前半のものが多い。328 は北宋の「元豊通寶」である。329 は細いので千歯こきの歯かと思うものである。330 は馬鍬の歯、331 は鉄鏃、332 は刃先が反っているのでヤリガンナかと思うものである。333・334 は鉄釘である。335 はスギ材で、半円形に近いものに孔が開いているので紡錘車かと思うものである。336 はスギ材の不明木製品で上端が段になっている。

【06 － 2 調査区】 第８面 **B41 坪境**（図 30 － 337、図版 40）から木製品の曲物の蓋と思われるもの１点（337）が出土した。337 はスギ材で、紐孔かと思う小孔１個が残存し、孔に繊維かと思うものも存在している。第８面 **B42 土坑**（図 30 － 338）から 13 世紀かと思う土師器皿片１点と瓦器片１点、不明木製品１点（338）が出土した。338 は断面が四角く、現状は折れ曲がっている。コウヤマキ材で作られており、特殊なものかもしれない。

**第８層**（図 30 － 339 ～ 346、図版 31）から土師器、瓦器、須恵器、東播系須恵器、磁器、瓦、製塩土器等が出土した。339 は土師器皿、340 は瓦器皿、341・342 は瓦器椀、343 は華南沿海窯系白磁碗、344 は須恵器杯？、345 は製塩土器、346 は平瓦である。339・340 が 13 世紀かと思うもの

で、341・342は12世紀後半のもの、343は内面に櫛描文が施され13世紀前半のものである。346は側面を面取りし、凸面は平行タタキ調整で、凹面は布目痕がある平安後期以降中世前半のものである。344・345は下からの巻上げと考えられ、８世紀かと思うものである。

池島Ⅰ期地区の第８層出土遺物の時期は、９世紀から10世紀のものと11世紀後半から12世紀初めのものがあり、後者が量的に少ないため第８面は10世紀としている。今回報告する第８層出土遺物は12世紀から13世紀のものが多く、従来の時期と齟齬をきたしている。（陣内）

**９）第９面**（図31、図版９・10）

第９面は第８層の土壌化層を除去して検出される面である。第９層は、上部を第８層からの攪拌によって削平されているが、青灰色10BG5/1の粘土～シルトの土層で、東に行くにしたがい第10層との識別が困難になり分層できなかった。理由としては、先述の第８層が変形のため非常に分離しにくかったことや、層厚が非常に薄く下層の第10層との層境が不明瞭なためである。02－１調査区南半の高い部分では第９層に当たる層が薄く、下層の第10層がほとんど見え隠れする状況であった。また、06－２調査区部分でも、東半ではこの部分を第９・10層相当として分層できなかった。

地形は、前段階同様に第11ｂ層の氾濫堆積物により、東ほど高く、これまで同様に02－１調査区中央部から南東部にかけての地域が若干高くなっている地形である。このほか、02－１調査区の南半部分が、後述する第10・11面の地形を反映して高くなっている。

この面では坪境、溝、土坑、石などを検出した。出土遺物等も少なく前後関係も不明な遺構が多いが、東西南北を意識した遺構が大半を占めるなか、A134溝・B49溝（図32）の二つだけが方向を異にしている。この二つを含めて、遺構の帰属面については問題が多い。

坪境は、02－１調査区のA120坪境溝（写真26）と06－２調査区のB45溝（図32、写真28、図版10）がその可能性が高い。**A120坪境溝**は、第８面段階での土層観察において坪境溝下部に同様の第９層がやや窪んだ状況で確認された。また、坪境溝の溝北側は幅1.40ｍ程度の畦状の高まりを確認した。**B45溝**は、前段階の坪境より若干西にずれるが、幅0.9ｍ、深さ0.17ｍ程度の浅い溝である。ただし、このすぐ西側には**B46溝**（図32）が位置し、規模的にはこちらのほうが大きく、深さもやや深めである。両者の関係は同時並存していたのかも不明である。

このほか、第二十一ノ坪の調査区南端部分では東西方向の幅0.20ｍ程度の浅い溝が13条検出され、一部の溝には切り合い関係も見られたが、埋土はほとんど変わらない。このほかこれらの溝群と切り合いを持つ南北方向のA135溝を調査区南東端部で確認した。

06－２調査区では、調査区東半の第十七ノ坪で**B43～59・63～72・74～90・92・93・98・99・102・104～106・117溝**（図32・33、写真27～29、図版10）の53条の溝を検出した。大部分は南北方向のものであるが、一部は東西方向を指向している。溝は、いずれも幅0.3～0.5ｍ、深さ0.2～0.3ｍ程度のもので、幅のわりに深い溝が多いことが特徴である。溝間には、切り合い関係があることから複数回にわたって掘削された溝の集積と考えられる。

従来から、第８層から第９層にかけてこうした遺構が集中する部分が池島Ⅰ期地区においても確認されている。これらの遺構を含めて今回の遺構群も、第十七ノ坪でしか検出されていないことから、いずれも坪境に規制されている可能性が高い。また、今回第９面で検出を行なったが、断面観察では第８層の途中まで輪郭線が上がる可能性のある溝も見られた。しかし、いずれの調査においてもこうした遺

構群は地形的に高い部分で検出される場合が多く、各層の層厚が薄いなどの問題もあって、帰属面を確定しにくい状況である。

第９面では A128・131・133 溝と坪境に切られる形で A134 溝を確認した。この溝は、調査区南西端部から北端中央部に延びる溝で、先行して調査を行った調査区南半部ではこの溝周辺にはほとんど第

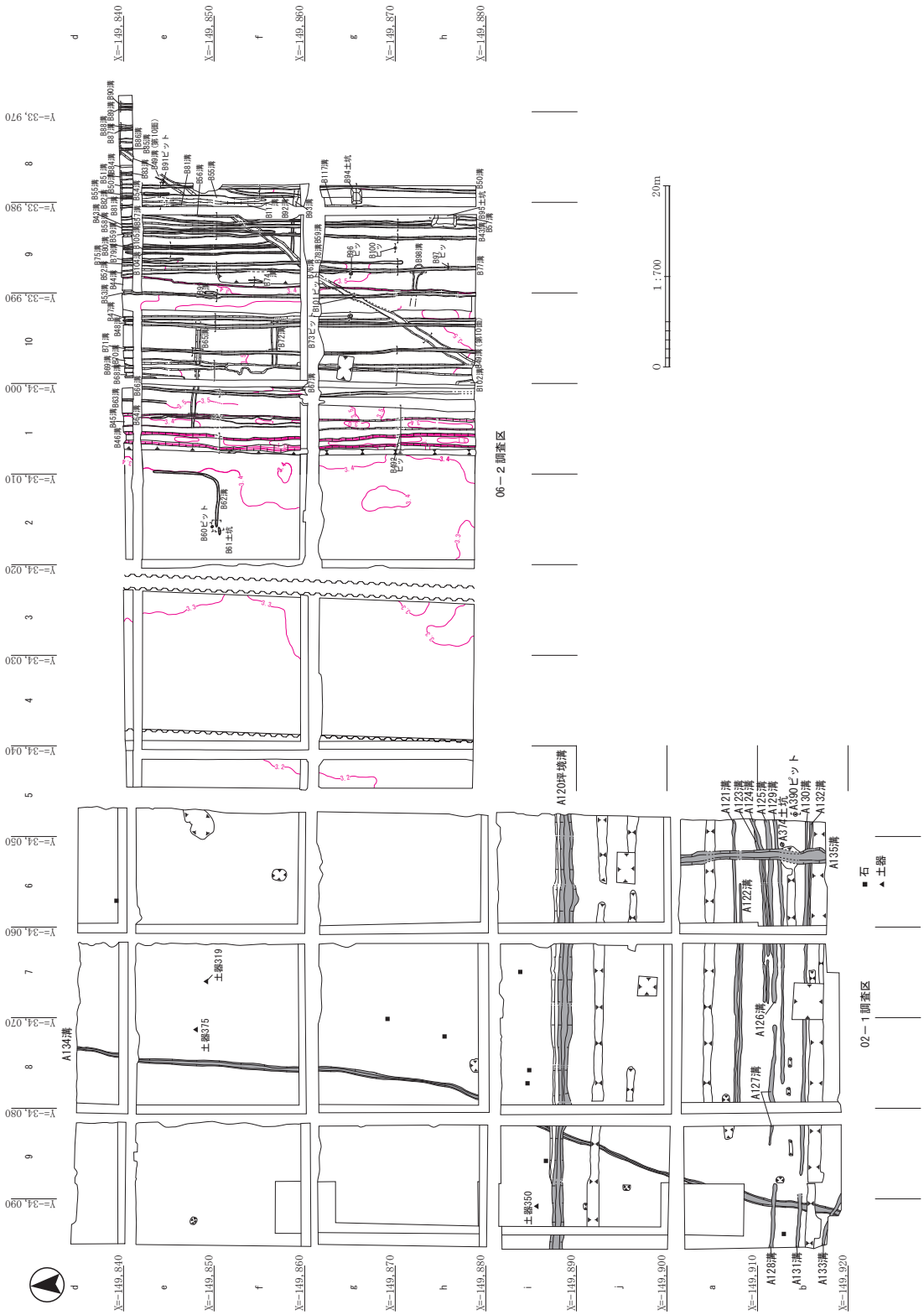



図 31　第９面　平面図

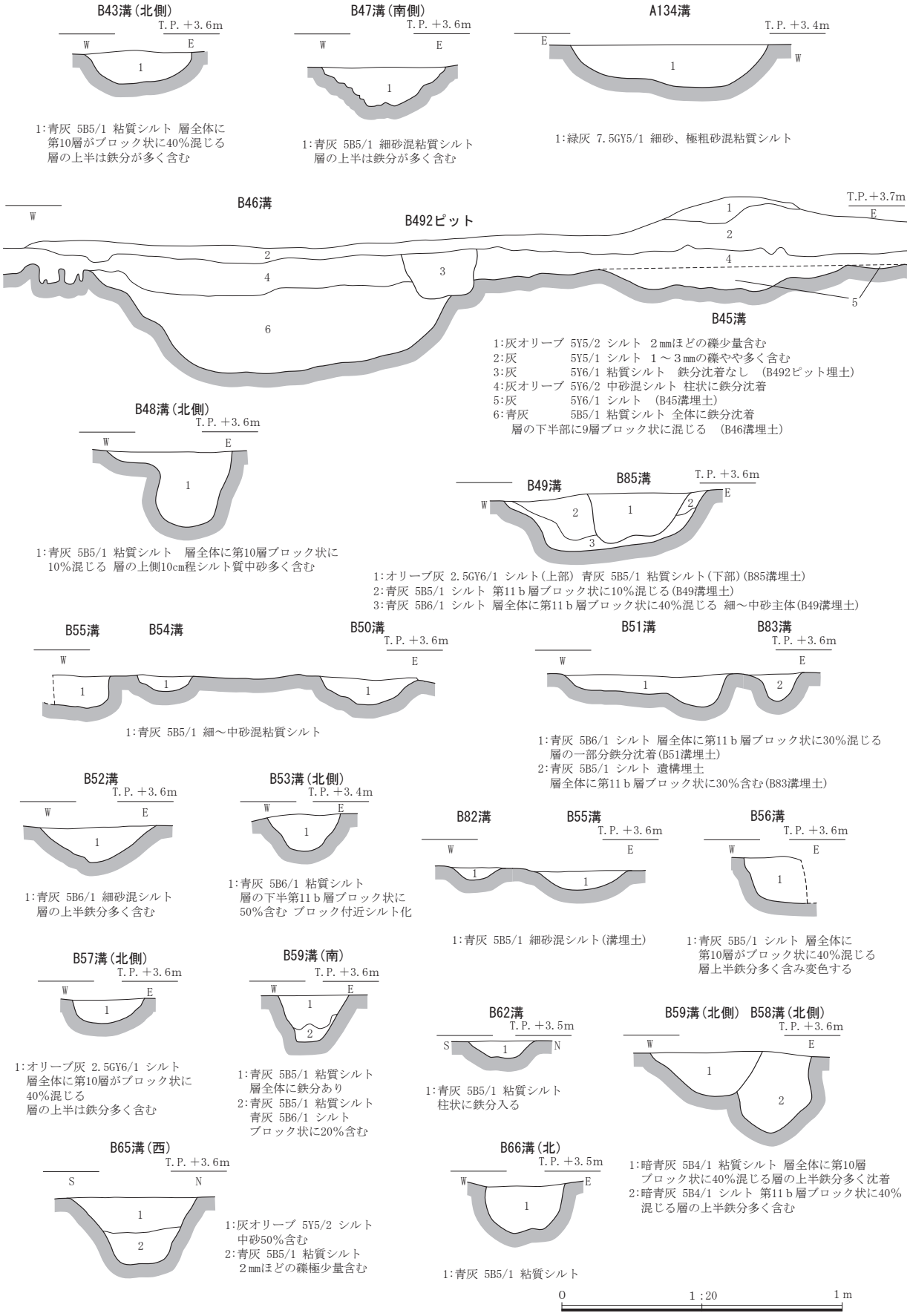

B43溝(北側)
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 粘質シルト 層全体に
第10層がブロック状に40%混じる
層の上半は鉄分が多く含む
B47溝(南側)
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 細砂混粘質シルト
層の上半は鉄分が多く含む
A134溝
T.P.＋3.4m
E
W
1
1:緑灰 7.5GY5/1 細砂、極粗砂混粘質シルト
B46溝
B492ピット
T.P.＋3.7m
W
E
1
2
3
4
5
6
B45溝
1:灰オリーブ 5Y5/2 シルト 2mmほどの礫少量含む
2:灰 5Y5/1 シルト 1～3mmの礫やや多く含む
3:灰 5Y6/1 粘質シルト 鉄分沈着なし (B492ピット埋土)
4:灰オリーブ 5Y6/2 中砂混シルト 柱状に鉄分沈着
5:灰 5Y6/1 シルト (B45溝埋土)
6:青灰 5B5/1 粘質シルト 全体に鉄分沈着
層の下半部に9層ブロック状に混じる (B46溝埋土)
B48溝(北側)
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 粘質シルト 層全体に第10層ブロック状に
10%混じる 層の上側10cm程シルト質中砂多く含む
B49溝
B85溝
T.P.＋3.6m
W
E
1
2
3
1:オリーブ灰 2.5GY6/1 シルト(上部) 青灰 5B5/1 粘質シルト(下部)(B85溝埋土)
2:青灰 5B5/1 シルト 第11b層ブロック状に10%混じる(B49溝埋土)
3:青灰 5B6/1 シルト 層全体に第11b層ブロック状に40%混じる 細～中砂主体(B49溝埋土)
B55溝
B54溝
B50溝
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 細～中砂混粘質シルト
B51溝
B83溝
T.P.＋3.6m
W
E
1
2
1:青灰 5B6/1 シルト 層全体に第11b層ブロック状に30%混じる
層の一部分鉄分沈着(B51溝埋土)
2:青灰 5B5/1 シルト 遺構埋土
層全体に第11b層ブロック状に30%含む(B83溝埋土)
B52溝
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:青灰 5B6/1 細砂混シルト
層の上半鉄分多く含む
B53溝(北側)
T.P.＋3.4m
W
E
1
1:青灰 5B6/1 粘質シルト
層の下半第11b層ブロック状に
50%含む ブロック付近シルト化
B82溝
B55溝
T.P.＋3.6m
W
E
1
1
1:青灰 5B5/1 細砂混シルト(溝埋土)
B56溝
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 シルト 層全体に
第10層がブロック状に40%混じる
層上半鉄分多く含み変色する
B57溝(北側)
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:オリーブ灰 2.5GY6/1 シルト
層全体に第10層がブロック状に
40%混じる
層の上半は鉄分多く含む
B59溝(南)
T.P.＋3.6m
W
E
1
2
1:青灰 5B5/1 粘質シルト
層全体に鉄分あり
2:青灰 5B5/1 粘質シルト
青灰 5B6/1 シルト
ブロック状に20%含む
B62溝
T.P.＋3.5m
S
N
1
1:青灰 5B5/1 粘質シルト
柱状に鉄分入る
B59溝(北側) B58溝(北側)
T.P.＋3.6m
W
E
1
2
1:暗青灰 5B4/1 粘質シルト 層全体に第10層
ブロック状に40%混じる層の上半鉄分多く沈着
2:暗青灰 5B4/1 シルト 第11b層ブロック状に40%
混じる層の上半鉄分多く含む
B65溝(西)
T.P.＋3.6m
S
N
1
2
1:灰オリーブ 5Y5/2 シルト
中砂50%含む
2:青灰 5B5/1 粘質シルト
2mmほどの礫極少量含む
B66溝(北)
T.P.＋3.5m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 粘質シルト
0
1:20
1m

図32 第９面 遺構図（１）

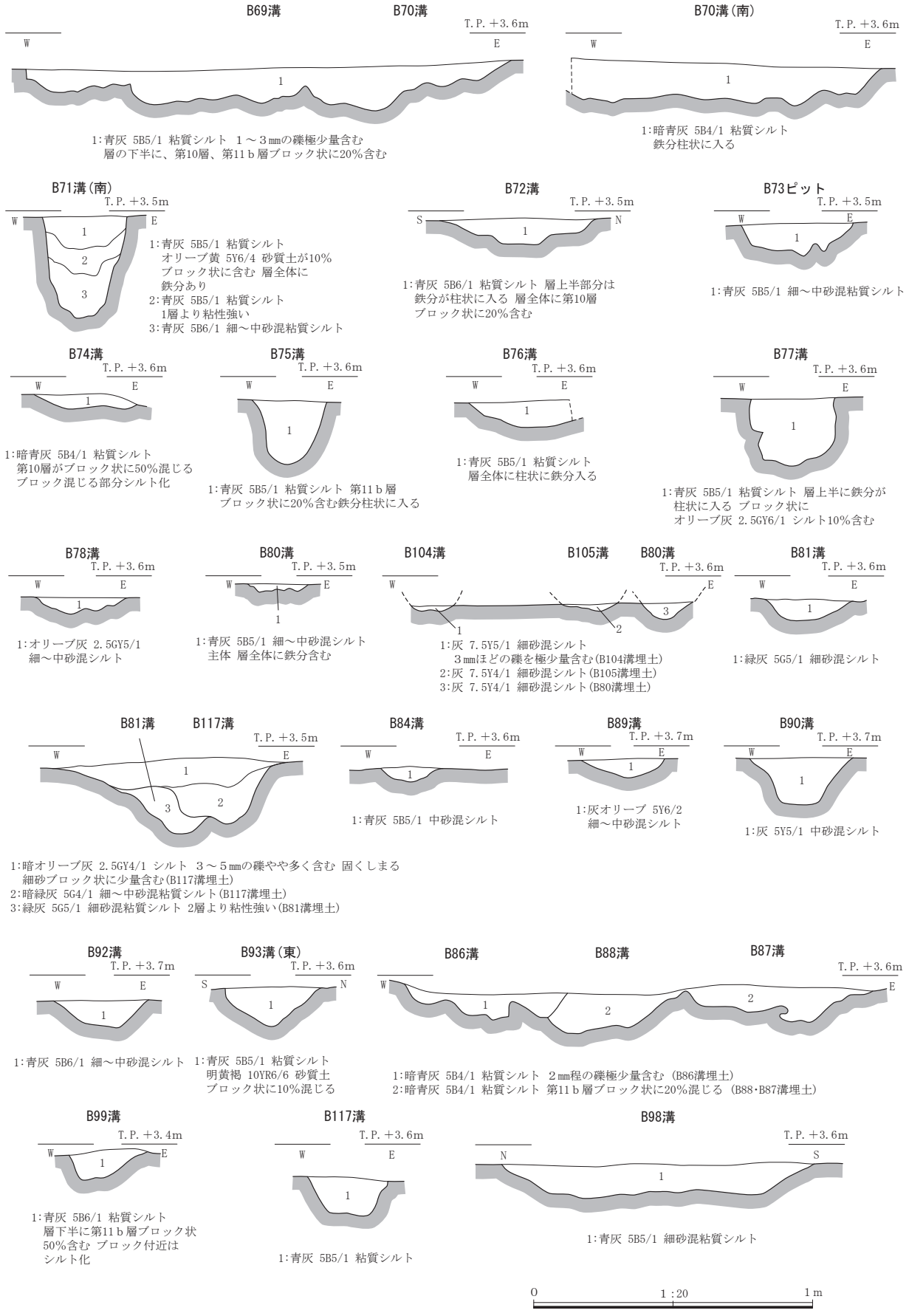

B69溝
B70溝
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 粘質シルト 1～3㎜の礫極少量含む
層の下半に、第10層、第11ｂ層ブロック状に20%含む
B70溝(南)
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:暗青灰 5B4/1 粘質シルト
鉄分柱状に入る
B71溝(南)
T.P.＋3.5m
W
E
1
2
3
1:青灰 5B5/1 粘質シルト
オリーブ黄 5Y6/4 砂質土が10%
ブロック状に含む 層全体に
鉄分あり
2:青灰 5B5/1 粘質シルト
1層より粘性強い
3:青灰 5B6/1 細～中砂混粘質シルト
B72溝
T.P.＋3.5m
S
N
1
1:青灰 5B6/1 粘質シルト 層上半部分は
鉄分が柱状に入る 層全体に第10層
ブロック状に20%含む
B73ピット
T.P.＋3.5m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 細～中砂混粘質シルト
B74溝
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:暗青灰 5B4/1 粘質シルト
第10層がブロック状に50%混じる
ブロック混じる部分シルト化
B75溝
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 粘質シルト 第11ｂ層
ブロック状に20%含む鉄分柱状に入る
B76溝
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 粘質シルト
層全体に柱状に鉄分入る
B77溝
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 粘質シルト 層上半に鉄分が
柱状に入る ブロック状に
オリーブ灰 2.5GY6/1 シルト10%含む
B78溝
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:オリーブ灰 2.5GY5/1
細～中砂混シルト
B80溝
T.P.＋3.5m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 細～中砂混シルト
主体 層全体に鉄分含む
B104溝
B105溝
B80溝
T.P.＋3.6m
W
E
1
2
3
1:灰 7.5Y5/1 細砂混シルト
3㎜ほどの礫を極少量含む(B104溝埋土)
2:灰 7.5Y4/1 細砂混シルト(B105溝埋土)
3:灰 7.5Y4/1 細砂混シルト(B80溝埋土)
B81溝
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:緑灰 5G5/1 細砂混シルト
B81溝
B117溝
T.P.＋3.5m
W
E
1
2
3
B84溝
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 中砂混シルト
B89溝
T.P.＋3.7m
W
E
1
1:灰オリーブ 5Y6/2
細～中砂混シルト
B90溝
T.P.＋3.7m
W
E
1
1:灰 5Y5/1 中砂混シルト
1:暗オリーブ灰 2.5GY4/1 シルト 3～5㎜の礫やや多く含む 固くしまる
細砂ブロック状に少量含む(B117溝埋土)
2:暗緑灰 5G4/1 細～中砂混粘質シルト(B117溝埋土)
3:緑灰 5G5/1 細砂混粘質シルト 2層より粘性強い(B81溝埋土)
B92溝
T.P.＋3.7m
W
E
1
1:青灰 5B6/1 細～中砂混シルト
B93溝(東)
T.P.＋3.6m
S
N
1
1:青灰 5B5/1 粘質シルト
明黄褐 10YR6/6 砂質土
ブロック状に10%混じる
B86溝
B88溝
B87溝
T.P.＋3.6m
W
E
1
2
2
1:暗青灰 5B4/1 粘質シルト 2㎜程の礫極少量含む (B86溝埋土)
2:暗青灰 5B4/1 粘質シルト 第11ｂ層ブロック状に20%混じる (B88・B87溝埋土)
B99溝
T.P.＋3.4m
W
E
1
1:青灰 5B6/1 粘質シルト
層下半に第11ｂ層ブロック状
50%含む ブロック付近は
シルト化
B117溝
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 粘質シルト
B98溝
T.P.＋3.6m
N
S
1
1:青灰 5B5/1 細砂混粘質シルト
0
1:20
1m

図 33　第９面　遺構図（２）

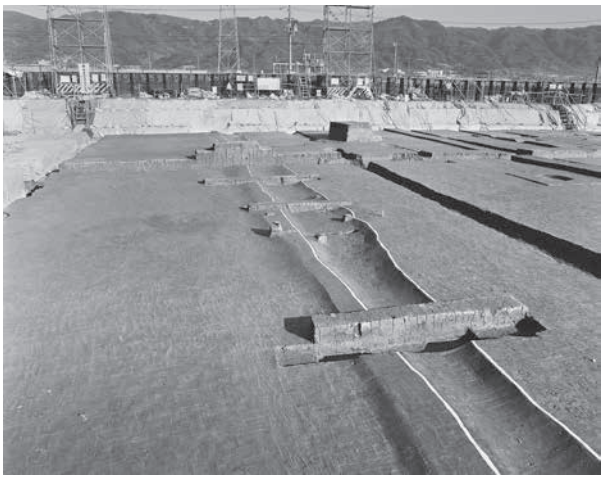


写真 26　第９面　A120 坪境溝（西から）

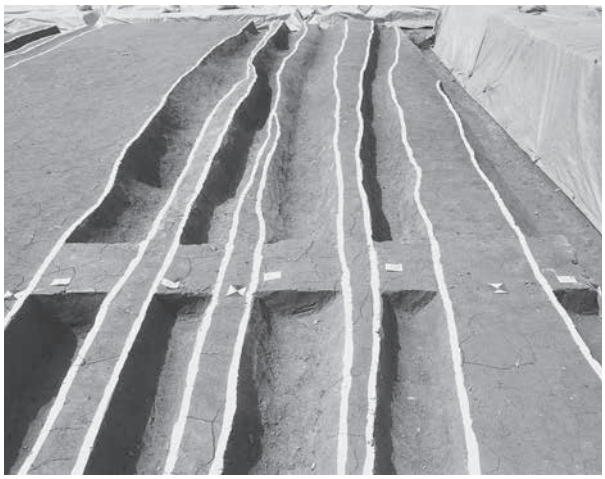


写真 27　第９面　溝群（B43・56 ～ 59）（南から）

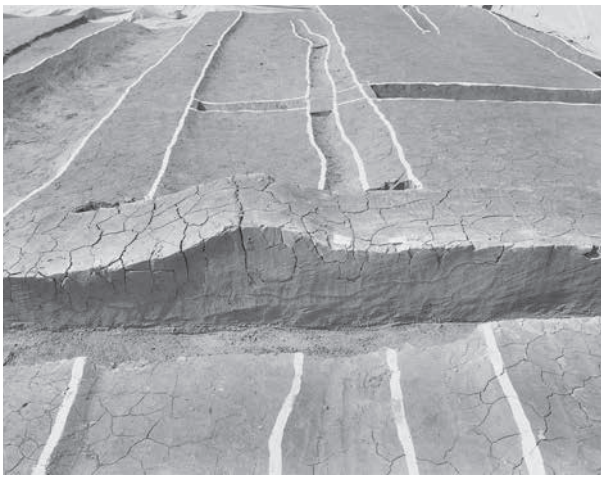


写真 28　第９面　B45 溝（南から）

写真 29　06 －２調査区　第７～ 11 ｂ層（南から）

9 層が見られなかったため第 10 面の溝として認識していた。しかし、調査区北半の断面を確認したところ、第 9 面に掘り込み面があることがわかったため、第 9 面の A134 溝として認識されたものである。幅 0.50 ～ 0.70 m、深さ 0.10 ～ 0.15 m程度の溝で、総延長 80.00 mを超える溝である。埋土も調査区南半では見分けにくく、やや粘質の暗い粘土～シルトの土層であったが、北半では溝底部にわずかに細砂～中砂を確認できた部分があった。この溝の延長部分と考えられる溝が池島Ⅰ期地区の 97 －３調査区で検出されている。97 －３調査区では溝 54 と呼称されているもので、幅も 1.00 m弱、深さ 0.30 mのやや幅広の溝である。

このほか検出面は第 10 面であるが、時期的にこの面に関わると見られる **A374 土坑**と、調査区東の法面部分の第 10 層よりやや上部分の壁から **A390 ピット**を検出した（図 34・図版 11）。直径 0.40 ～ 0.50m 程度の遺構で、底部付近からほぼ完形の土師器が置かれたような状況で出土した。A374 土坑から出土した土師器（図 43 － 392）は、８世紀初め頃のものである。A390 ピットから出土した土師器も体部下半に指頭圧痕が明瞭に残り内面には暗文が丹念にめぐらされ、同時期頃のものであろう 。これまで福万寺Ⅰ期地区を中心に、ほぼ同様な土器埋納ピットが第 9 面において検出されており、当地域での古代における土地開発との関連が指摘されている。当遺跡における土器埋納遺構については福万寺Ⅰ期地区の調査成果を基礎にして江浦　洋（江浦 1996）、山崎頼人・秋山浩三・朝田公年が、池島Ⅰ期地区の成果も交え、土器や銭などの埋納遺構を集成している（山崎・秋山・朝田 2000）。井上智博は、福万寺Ⅰ期地区の正式報告の中で、これらを整理して古代から中世における農耕祭祀との関連の

中で再検討している。井上は、第９ａ面（当調査区第９面相当）においては地割り等の境界部分だけでなく、非水田域の可能性が高い微高地と水田域の境界付近などにも分布し、続く第８ａ面段階では畦畔の近くに分布するものが目立つと指摘している（井上編 2002）。時期的には飛鳥時代に相当する面に土器埋納遺構が多く、奈良時代に関する資料は少ない。出土遺物総体のなかでも奈良時代の資料は少ない。今回報告する土器埋納遺構は時期的に見て資料的に少ない奈良時代に相当する時期の資料であり、広大な当遺跡調査地内における開発の中でどのように位置付けることができるのか興味深い。

最後に、それらの様相について周辺調査区との関係などの問題点をまとめたい。当調査区の調査に当たっては、西接する 95 － 2・96 － 1・97 － 3 の各調査区との層位的な整合性を勘案しながら調査を行ってきた。これらについて、整理作業の過程で遺物なども加えて検討を行い、層位の整理を行った結果、いくつかの面で池島Ⅰ期地区における統一された層序認識とは齟齬をきたしている可能性が高い。第３面の各枝番号の層序の対応関係、第５～９面の各面の対応関係などである。具体的には、今回の報告では出土遺物からみて第８・９層の時期が大きく相違している。これは、本書でも後述しているように池島Ⅱ期地区ではⅠ期地区に比べて下層の弥生時代の地形が高い。このため、第８・９・10 層の遺存状況が非常に悪く、遺物にも混じりが多い。しかし、一方でこのことはこの地域が長期に安定していた時期があるということである。

こうしたことから、この地域は、各時期に安定期に利用されていた可能性が高く、遺物の混じりも多いのであろう。（廣瀬）

第９面出土遺物（図 35）

【02 － 1 調査区】 第９面 **A120 坪境溝**（図 35 － 347 ～ 349）から土師器、瓦器、黒色土器Ａ類、東播系須恵器、瓦、石等が出土した。347 は土師器杯か皿、348 は瓦器椀、349 は丸瓦である。347・348 は 12 世紀前半のもので、349 は中世かと思うものである。

**第９層**（図 35 － 350 ～ 376、図版 41）から土師器、須恵器、瓦器、木製品等が多く出土した。350 は土師器椀？、351・352 は須恵器杯・杯Ｂ、353・354 は須恵器壺である。７世紀後半から９世紀かと思うもので、従来の第９層の時期を示す遺物である。上からの混入や下からの巻上げと考えられる遺物として、355 ～ 359 は土師器皿、360 は瓦器皿、361 ～ 365 は瓦器椀、366 は土師器羽釜、367・368 は須恵器杯蓋、369 ～ 373 は須恵器杯、374 は須恵器椀？である。376 は不明木製品である。375 は土師器高杯で９～ 10 層出土であるがここに掲載した。土師器皿は 12 世紀代のものが多く、360 は 12 世紀末から 13 世紀初めかと思うものである。瓦器椀も 12 世紀代のものが多い。366 も 12 世紀代かと思うものである。須恵器杯蓋、杯は６世紀末から７世紀前半のものが多い。368 は天井部にヘラ記号がある。375 は７世紀かと思うものである。376 はヒノキ材で小孔が１個あり、表、裏面に無数に線刻がある。まな板かもしれない。

【06 － 2 調査区】 第９面 **B43 溝**（図 35 － 377）から土師器片３点と黒色土器Ａ類椀１点（377）が出土した。377 は 10 世紀中頃かと思うものである。第９面 **B44 溝**から須恵器細片３点が出土した。第９面 **B45 溝**（図 35 － 378･379、図版 31）から土師器片４点、須恵器片２点（378）、磁器片１点（379）が出土した。378 は須恵器杯、379 は華南沿海窯系白磁椀である。378 は７世紀前半、379 は 13 世紀前半のものである。巻上げ、混入と考えられる。第９面 **B46 溝**から土師器片１点、６世紀かと思う須恵器杯片１点が出土した。第９面 **B47 溝**から須恵器片２点、弥生土器底部１点が出土した。第９面 **B48 溝**から土師器片２点、６世紀末から７世紀初めかと思う須恵器杯蓋片１点が出土した。第９面 **B49 溝**か

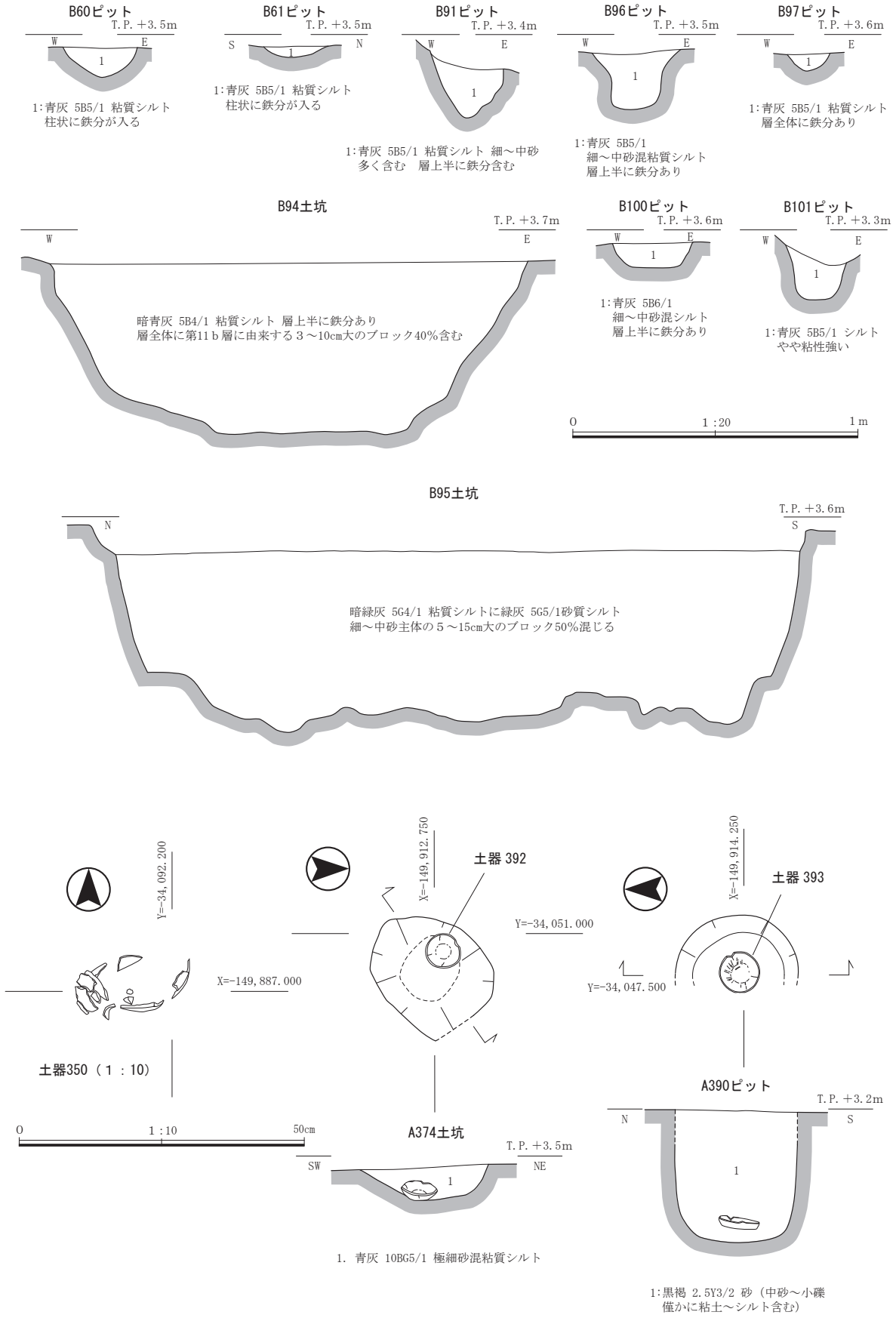
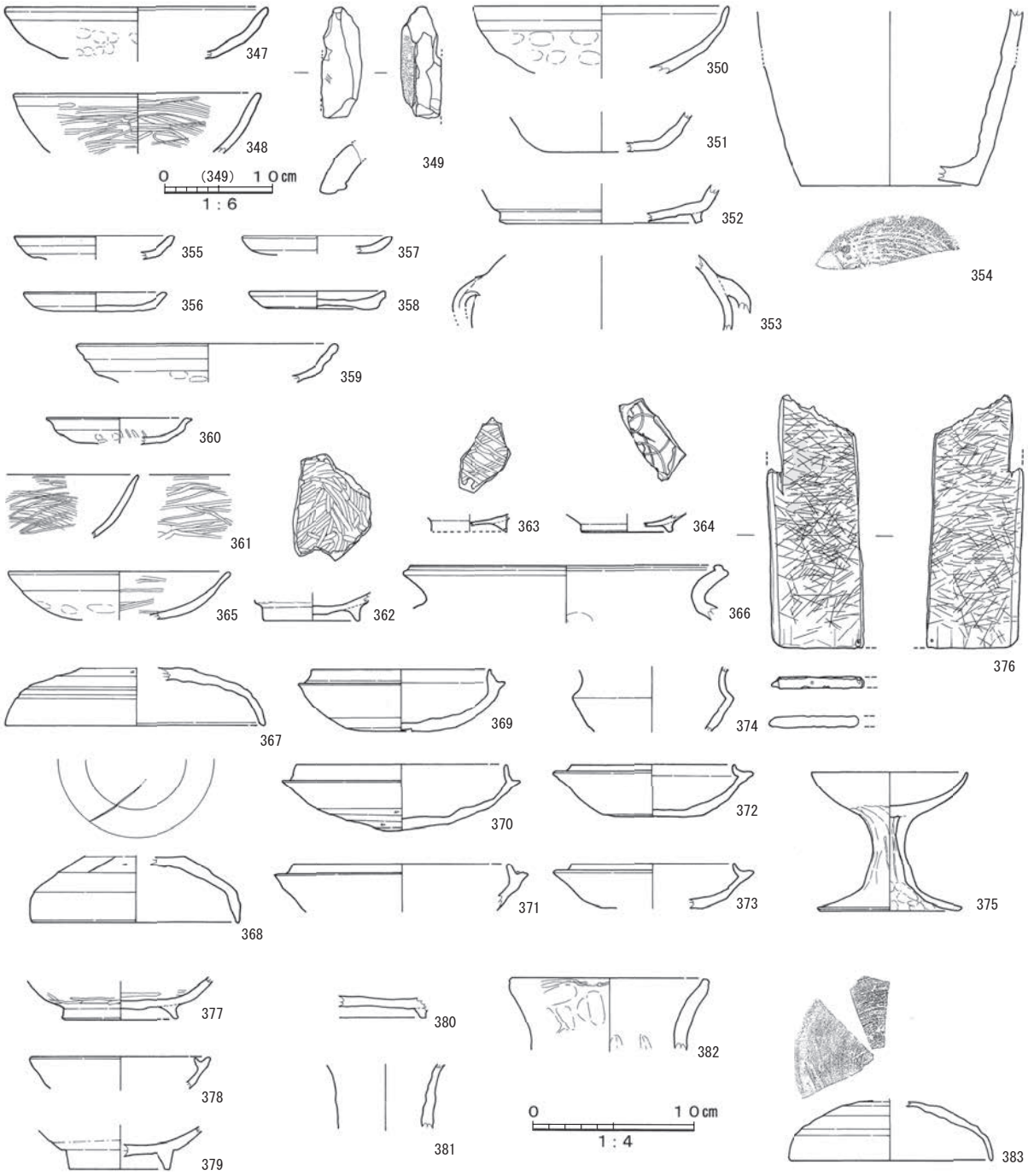

B60ピット
T.P.＋3.5m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 粘質シルト
柱状に鉄分が入る
B61ピット
T.P.＋3.5m
S
N
1
1:青灰 5B5/1 粘質シルト
柱状に鉄分が入る
B91ピット
T.P.＋3.4m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 粘質シルト 細～中砂
多く含む　層上半に鉄分含む
B96ピット
T.P.＋3.5m
W
E
1
1:青灰 5B5/1
細～中砂混粘質シルト
層上半に鉄分あり
B97ピット
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 粘質シルト
層全体に鉄分あり
B94土坑
T.P.＋3.7m
W
E
暗青灰 5B4/1 粘質シルト 層上半に鉄分あり
層全体に第11ｂ層に由来する３～10cm大のブロック40%含む
B100ピット
T.P.＋3.6m
W
E
1
1:青灰 5B6/1
細～中砂混シルト
層上半に鉄分あり
B101ピット
T.P.＋3.3m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 シルト
やや粘性強い
0
1:20
1m
B95土坑
T.P.＋3.6m
N
S
暗緑灰 5G4/1 粘質シルトに緑灰 5G5/1砂質シルト
細～中砂主体の５～15cm大のブロック50%混じる
Y=-34,092.200
X=-149,887.000
土器350（1：10）
0
1:10
50cm
X=-149,912.750
土器 392
Y=-34,051.000
A374土坑
T.P.＋3.5m
SW
NE
1
1. 青灰 10BG5/1 極細砂混粘質シルト
X=-149,914.250
土器 393
Y=-34,047.500
A390ピット
T.P.＋3.2m
N
S
1
1:黒褐 2.5Y3/2 砂（中砂～小礫
僅かに粘土～シルト含む）

図 34　第９面　遺構図（３）




347～349：A120 坪境、350～376：（02－1）第９層、377：B43 溝、378・379：B45 溝、380～383：第９層

**図 35　第９面　出土遺物**

ら土師器片極少量と弥生Ⅴ～Ⅵ様式の弥生土器底部１点が出土した。第９面 B50 溝から須恵器片１点と土師器片１点が出土した。土師器片は９世紀ぐらいの杯かもしれない。第９面 B51 溝から７世紀前半かと思うヘラ切り未調整の須恵器杯片１点が出土した。第９面 B52 溝から須恵器片１点が出土した。第９面 B53 溝から須恵器片２点、14 世紀かと思う瓦器椀片１点が出土した。第９面 B54 溝から土師器片１点出土した。第９面 B55 溝から須恵器片、土師器片、弥生土器片、石等が極少量出土した。第９面 B56 溝から瓦器？片１点が出土した。第９面 B57 溝から８世紀かと思う須恵器壺片１点、土師器片１点等が出土した。第９面 B58 溝から須恵器片１点、土師器片２点等が出土した（第９面 B106 溝として土師器片３点が出土した）。第９面 B59 溝から土師器甕片１点、土師器片１点が出土した。第９面 B65 溝

から土師器皿片１点が出土した。て字状口縁で 11 世紀後半のものである。第９面 B75 溝から須恵器片１点、土師器片１点が出土した。第９面 B80 溝から土師器片１点が出土した。第９面 B104 溝から６世紀かと思う須恵器杯片１点が出土した。第９面 B105 溝から７世紀前半の須恵器杯蓋片１点が出土した。第９面 B117 溝から６世紀末から７世紀初めかと思う須恵器杯片等２点、土師器片５点が出土した。

**第９層**（図 35 － 380 ～ 383、図版 33）から須恵器、土師器、製塩土器等が少量出土した。380 は土師器杯Ｂ高台、381 は須恵器壺頸部、382 は製塩土器、383 は須恵器杯蓋である。380 は外底部にススが付着しており、381 は内面に自然釉が付着している。380 ～ 382 は８世紀から９世紀かと思うもので、従来の第９層の時期を示すものと思う。383 は巻上げと考えられるが、天井部に線刻と思うものがある。

池島Ｉ期地区の第９層出土遺物は、７世紀から８世紀が主で、第９層の上限は６世紀まで遡る可能性があるのに対し、今回報告する出土遺物は６世紀末から９世紀のものの中に 12 世紀のものがかなり混入している。（陣内）

**10）第 10 面**（図 36、写真 31、図版 10 ～ 12）

第 10 面は、第９層を除去し検出した面である（図 36）。極細砂～細砂混じりの粘土～シルトを母材とする土壌化した土層である。第９層の堆積が薄く、また部分的に第８層の粘土～シルトが混ざり合って残る部分があり、遺構面の遺存状況はよくない。また、池島Ⅰ期地区での調査成果においては、第

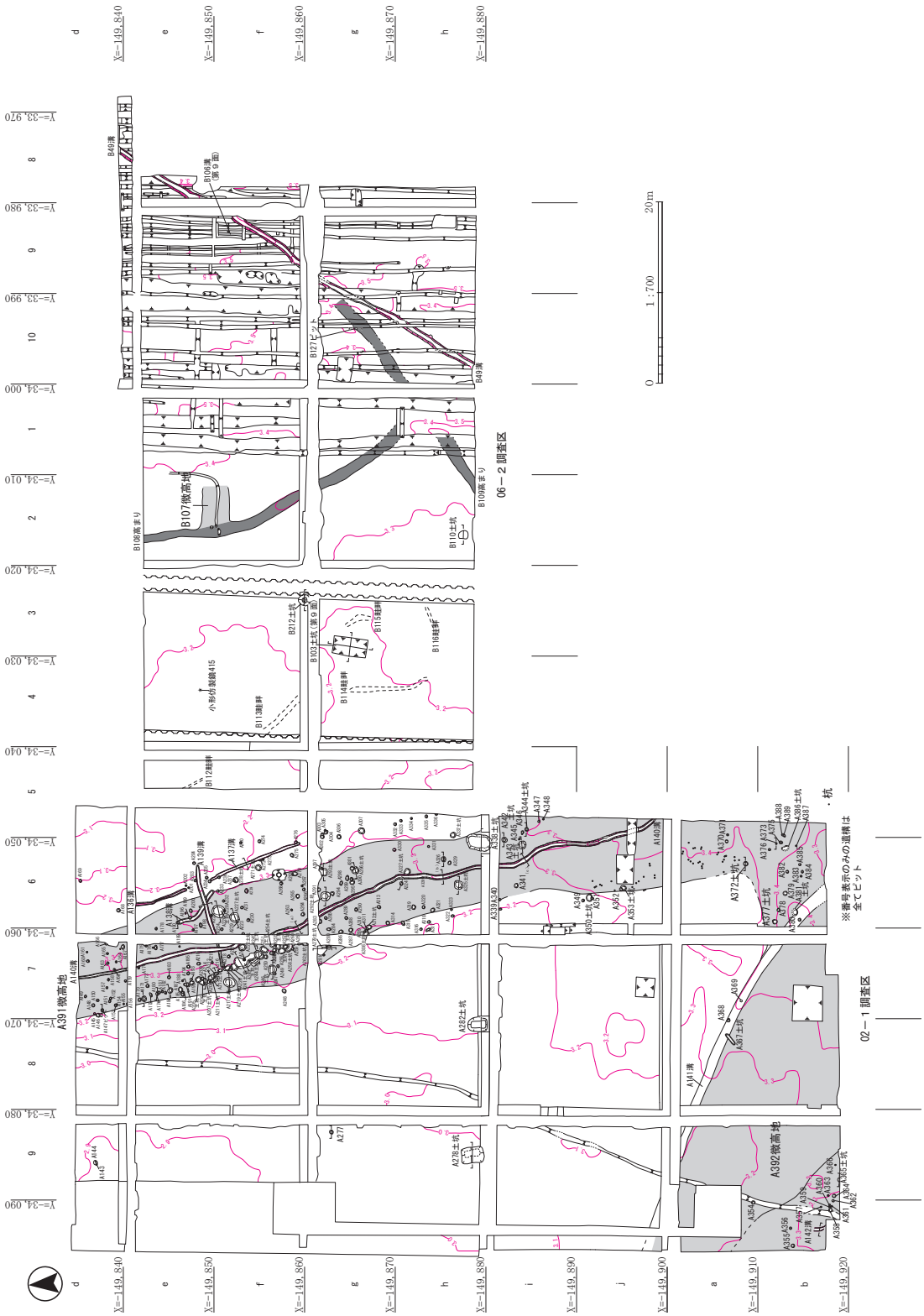



図 36　第 10 面　平面図

写真 30　第 10 面　A391 微高地（南から）

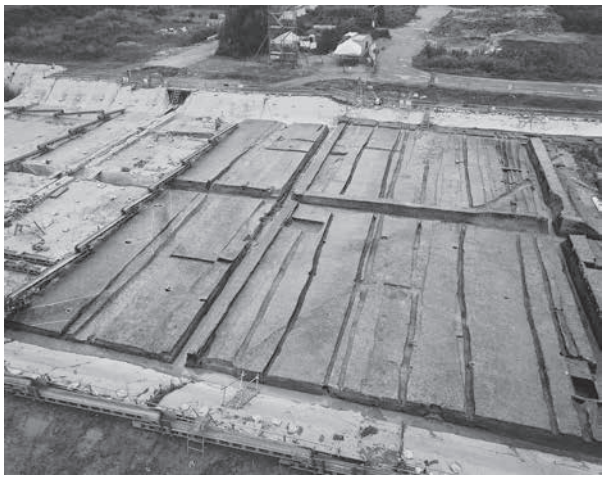


写真 31　06 －２調査区　第 10 面東半　全景（南から）

写真 32　第 10 面　B49・B85 溝（南から）

写真 33　第 10 面　A260 ピット（東から）

10 層がおよそ２～３層に分層されたが、当調査区では明瞭に細分できる部分が見られないことから単一の層として認識し、古墳時代に対応する第 10 面として調査を行った。また、第９面の記述において説明したように、東側の 06 －２調査区の部分では第９層と第 10 層が分層出来ず、第９・10 層相当層という認識をした。この部分では、第 10 面の検出に当って第９層を平面的に少しづつ下げてゆくことにより、遺構等の検出を行った。先述の第 11 ｂ層の氾濫堆積物によって高くなった 02 －１調査区の中央北から南東に伸びる **A391 微高地**は、粘性のある層がほとんど無くなり、第 11 ｂ層が露出し粗粒堆積物がベースとなり、部分的な凹凸に土壌化した粘性のある粘土～シルトが堆積したような状況であった。

第 10 面の地形は、前段階までの状況がさらに顕在化した状況である。したがって、基本的には東が高く西が低い地形である。しかし、前述のように、A391 微高地の南西には南東部で接合する A392 微高地が扇状に広がりその間に南東から北西に低くなる谷状の地形がある。また、A391 微高地より東は全体的に高くなって行くが、やはり A391 微高地の東にも谷状の若干低くなった部分がみられ、その東に B108・109 高まりによって西を区切られた B107 微高地が広がっている。

第 10 面は、微高地とそれに挟まれた若干低い谷状の部分からなる。遺構は、その微高地部分を中心に溝、土坑、ピットを検出した。また、東の微高地に挟まれた谷状の部分からは、痕跡程度ながら水田畦畔と考えられる筋状の痕跡を検出している。

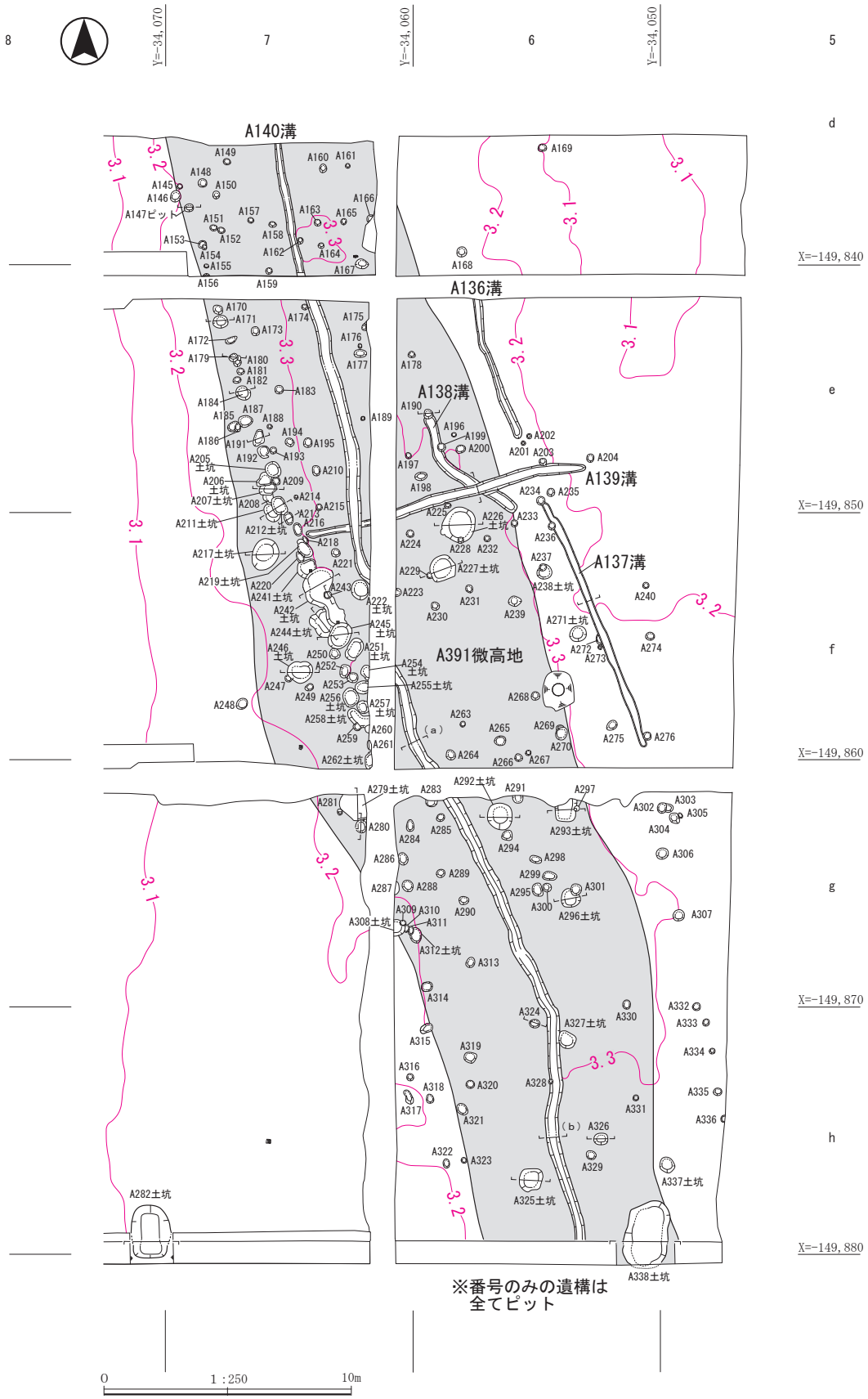



図 37　第 10 面　A391 微高地　平面図

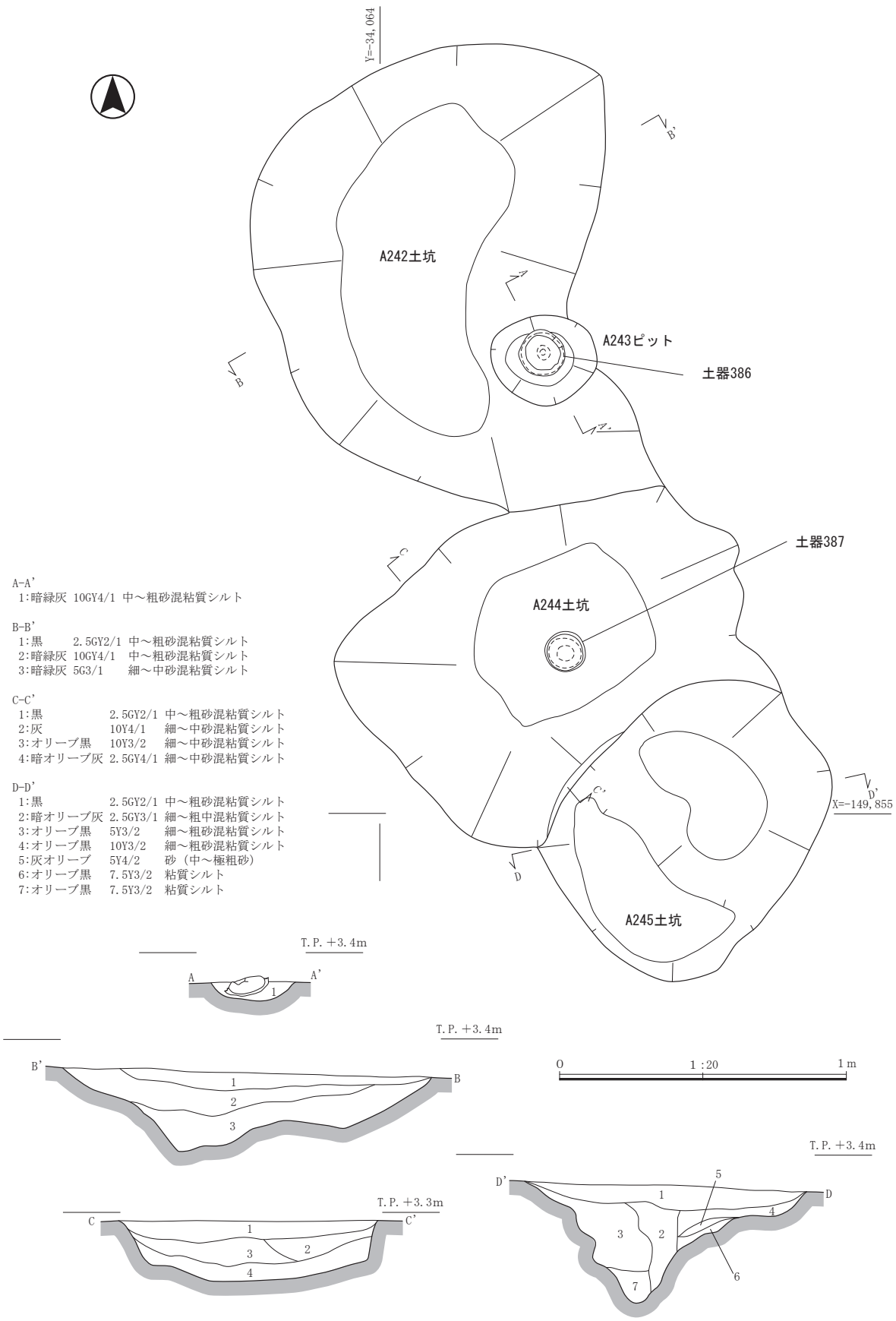



図 38　第 10 面　遺構図（1）

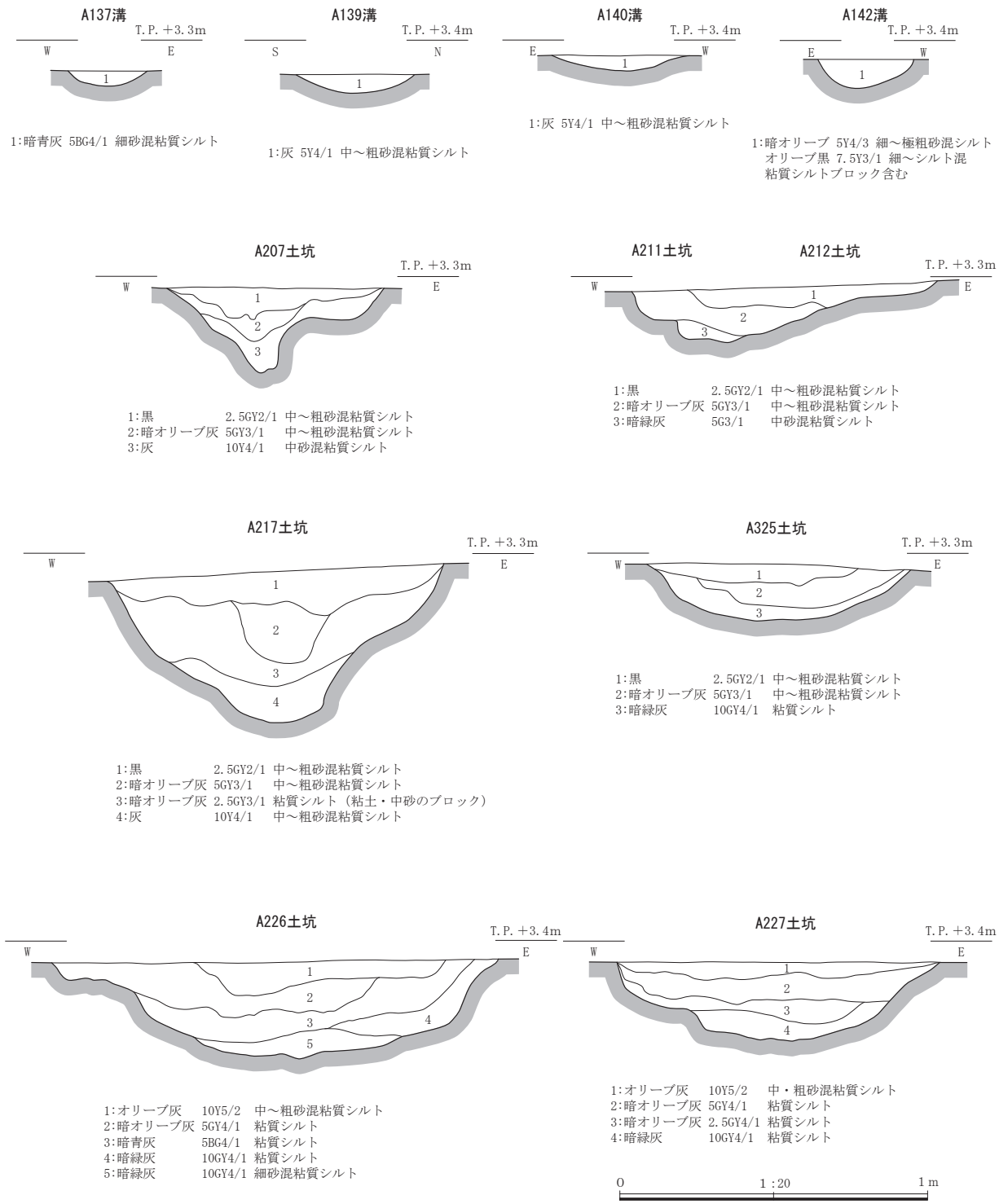



**図 39　第 10 面　遺構図（２）**

溝は、まず A391 微高地の中心を通る A140 溝（図 39）、同じく A391 微高地の東縁部分を微高地に沿って延びる A136・137 溝（図 39）、A391 微高地に直交する A139 溝（図 39）がある。また、A392 微高地の東端を微高地の縁にそって延びる A141 溝、06 －２調査区東側で南西から北東に伸びる B49 溝（写真 32）を確認した。この **B49 溝**は第９面の調査において確認されたものである。検出されたベース層は、先述した第９層・10 層が分割できなかった部分であるため、遺構の帰属面については疑問もある。しかし、第９面の南北方向の溝の検出段階ではほとんど検出できなかった事や、第９面の他の遺構とは方向性が大きく食い違うことなどから、第 10 面の遺構の可能性を考えた。

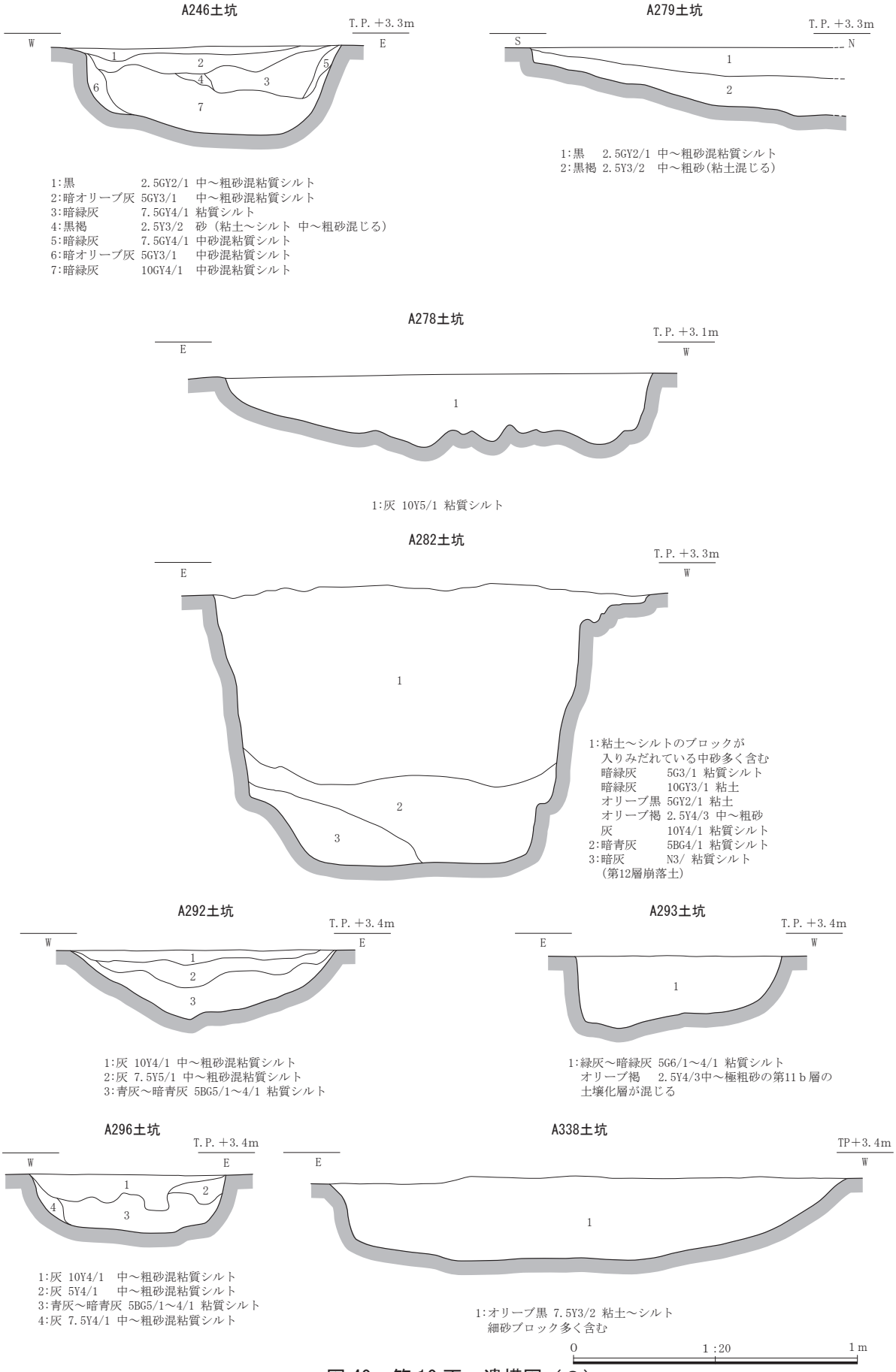



図 40　第 10 面　遺構図（３）

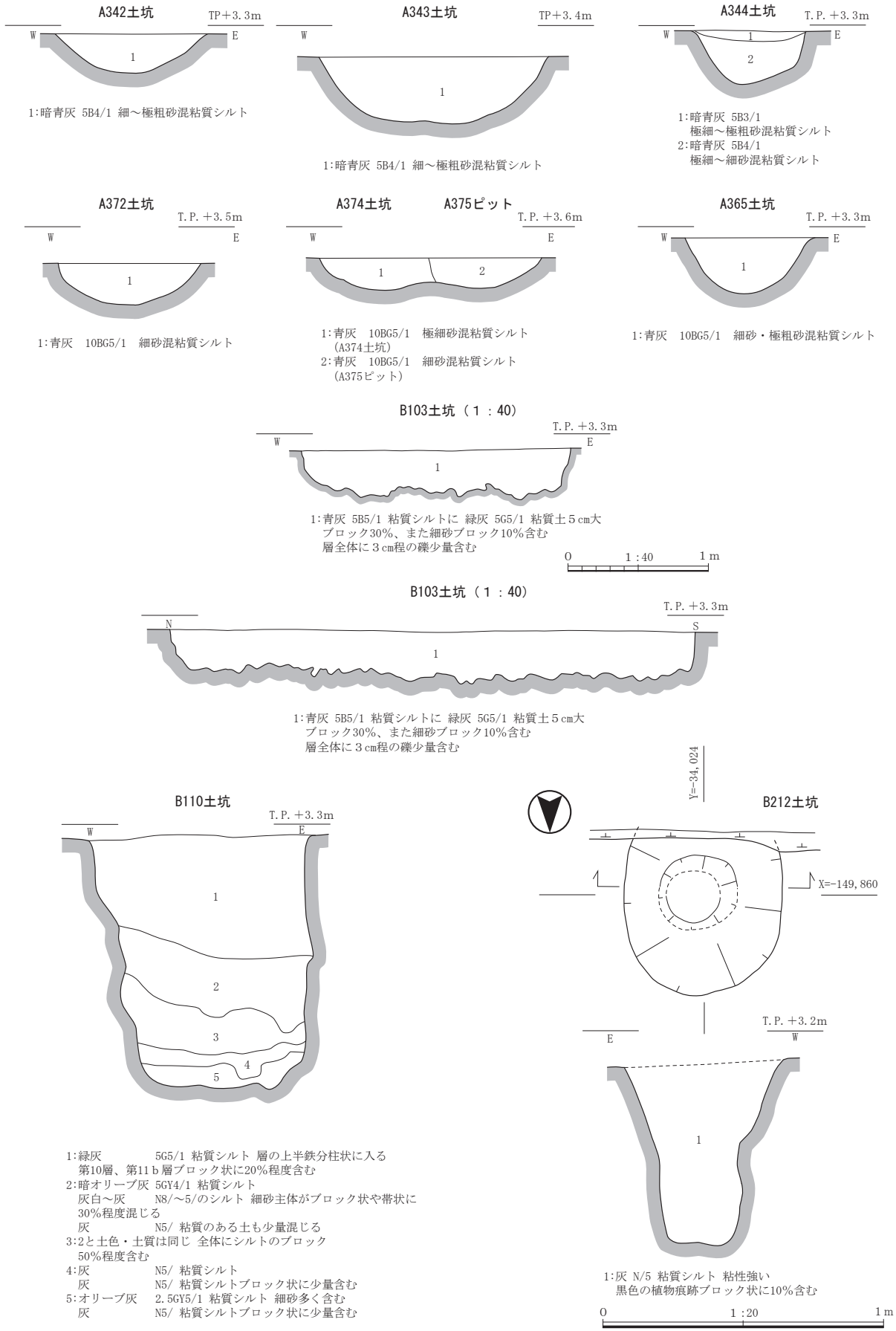



図41　第10面　遺構図（4）

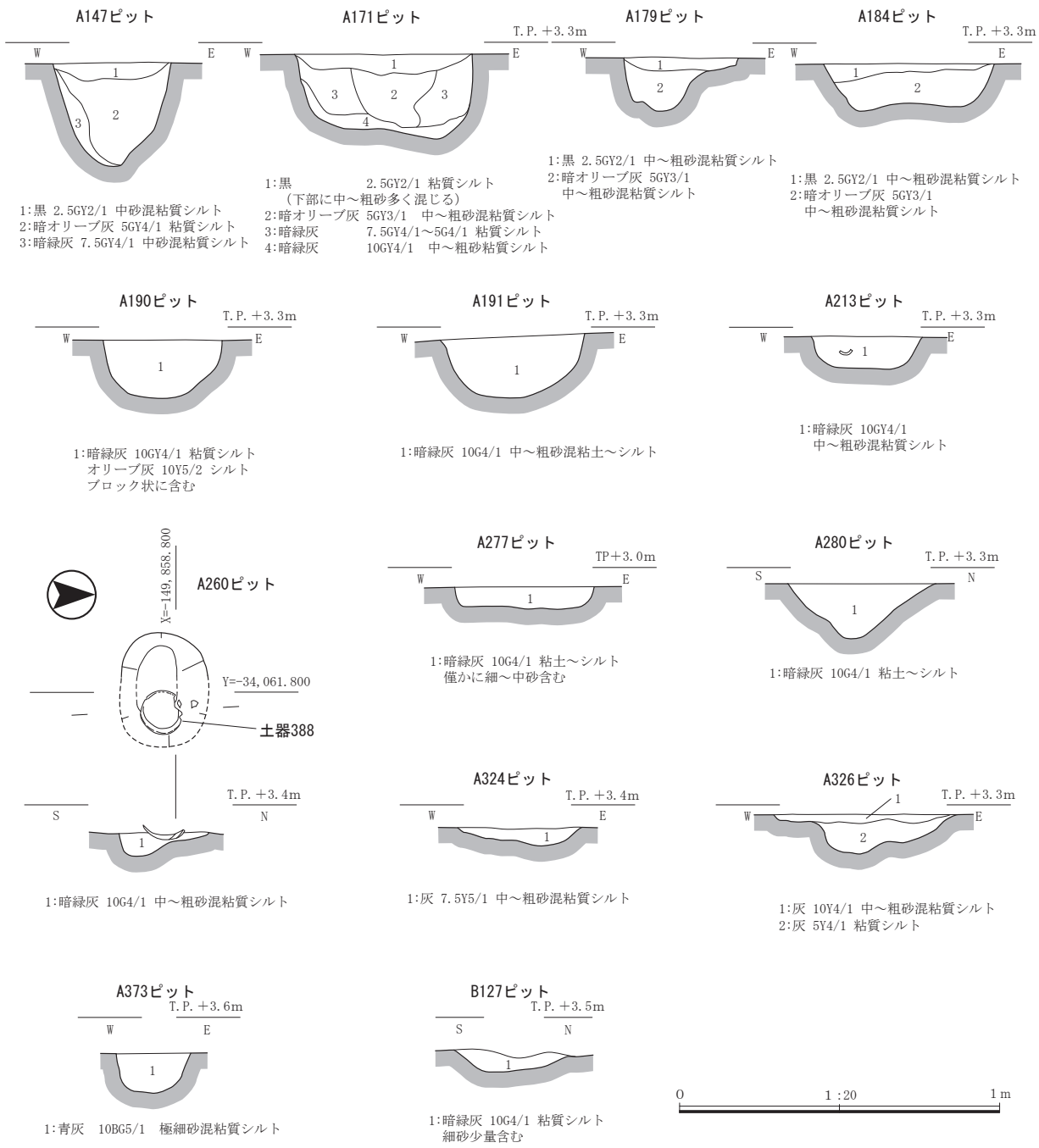



図 42　第 10 面　遺構図（５）

第 10 面では、A391 微高地上と A392 微高地の南西端部、両微高地の交わる部分から土坑・ピットなどを多数検出した。特に調査区北半の A391 微高地でその傾向が顕著であり、いくつもの土坑とピットが切り合っていた（図 37、写真 30）。しかし、土坑・ピットは平面において建物などの構築物が復元できるような規則性のある並び方をするものは見られず、微高地の形状に沿って列状に並ぶものが見られた程度である。遺構は、基本的に粗粒堆積物のベースに掘り込まれていることから、肩部が崩れるなどの状況が見られる場合が多く、形状は不整形になるものが多かった。埋土は比較的単純で単層の遺構が多かった。ここでは、そのうち遺物が出土した遺構を取り上げる。

A243 ピット、A244 土坑の底から土器が出土した（図 38、図版 11）。**A243 ピット**は径 0.29 m、深

さ 0.07 m。完形に近い須恵器杯身が出土した。口径 13.4 ㎝、器高 4 ㎝、６世紀後半の所産と思われる（図 43 － 386）。**A244 土坑**は最大幅 1.40 m、深さ 0.21m で両脇の土坑に比べると比較的整った形である。完形の須恵器杯蓋が出土した。口径 14.2 ㎝、器高 4.6 ㎝、６世紀前半の所産と思われる（図 43 － 387）。**A260 ピット**（図 42、写真 33）は、土層観察用トレンチにかかって検出されたものであるが、直径 0.27 m、深さ 0.07 m。完形に近い須恵器杯蓋が出土した。口径 12.6 ㎝、器高 4.0 ㎝、６世紀後半の所産と思われる（図 43 － 388）。

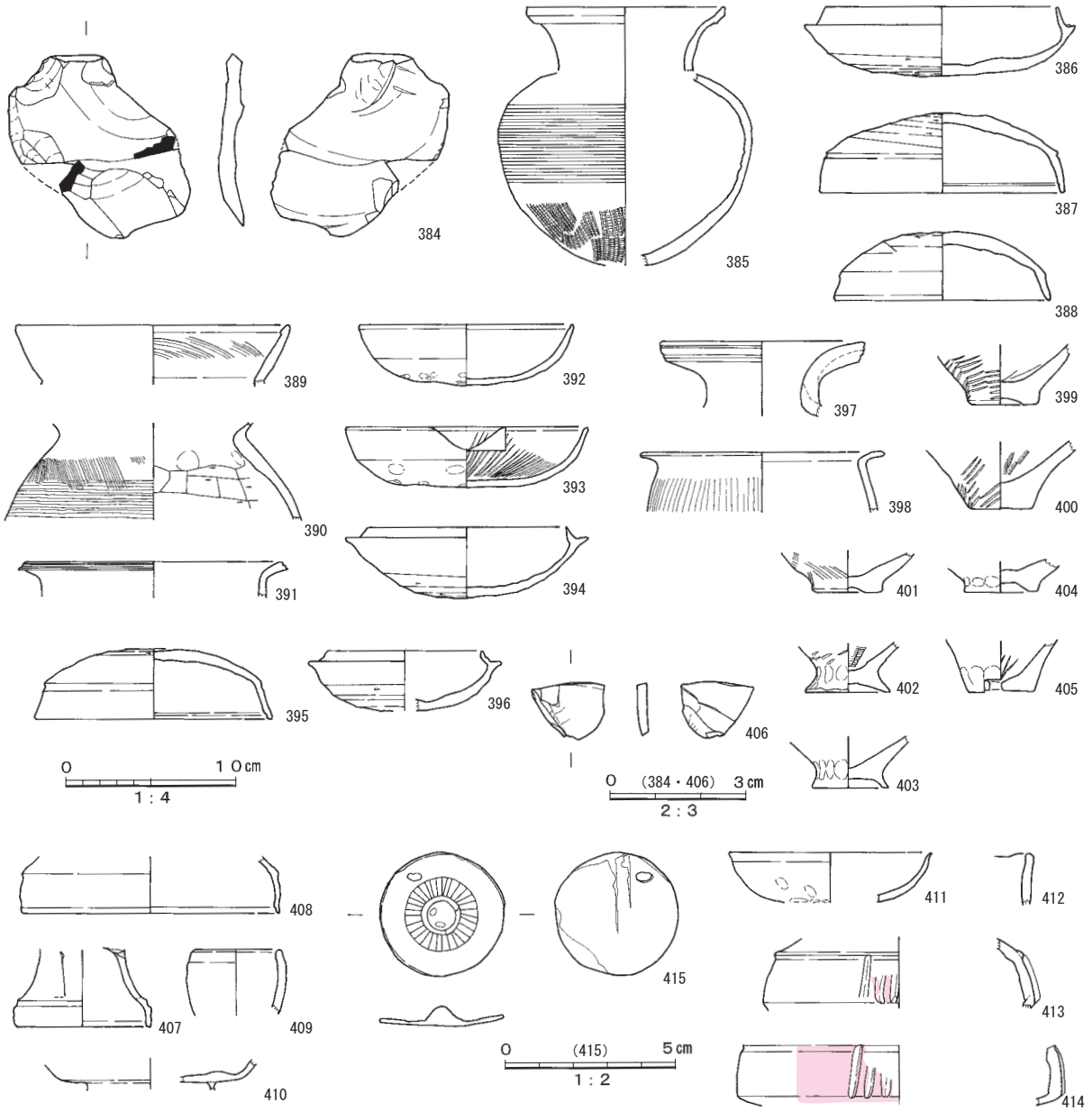
このほかのピットは、基本的には埋土も単層が多く、遺物を出土しない不整形で浅いものが多い。一部、埋土の状況から柱痕などの可能性も考えられたが、明瞭なものはほとんどなかった。

上述した微高地上以外の場所で、A282 土坑のような遺構もわずかではあるが検出した。**A282 土坑**（図 40、図版 11）は、ほぼ方形で深さが 1.00 m以上あり、埋土は粘土ブロックを主体としており、人為的に埋め戻された状況が想定される。当面で検出されたほかの土坑とは、規模や埋土において大きく異なる。A278 土坑（図 40）も同様に人為的に埋め戻されたような埋土の大型土坑である。B103 土坑（図 41）および B110 土坑（図 41）は形状や埋土の様相などから類似した遺構である。従来から池島Ⅰ期地区で第７面を中心に確認されている大型土坑と同様なものの可能性が高く、本来は上層の遺構の可能性が高い。

当調査区の第 10 面では、後述するように須恵器を出土する遺構が 02 － 1 調査区の南東～北西に伸びる微高地を中心に検出された。遺構の配列などから明瞭な建物などの痕跡は確認できなかったが、今後の調査において南東に伸びる微高地の延長線上に集落域が検出される可能性もあろう。（廣瀬）

第 10 面出土遺物（図 43）

【02 － 1 調査区】第 10 面 **A137 溝**から土師器片３点、弥生土器片１点が出土した。第 10 面 **A139 溝**から土師器片２点が出土した。第 10 面 **A140 溝**（図 43 － 384）から須恵器片１点、土師器？片１点、サヌカイト片１点（384）が出土した。第 10 面 **A179 ピット**から土師器片１点が出土した。第 10 面 **A190 ピット**から土師器片１点が出土した。第 10 面 **A191 ピット**から庄内式甕口縁片１点が出土した。第 10 面 **A205 土坑**から土師器片１点、弥生土器高杯脚？片１点が出土した。第 10 面 **A207 土坑**から須恵器杯蓋口縁片１点が出土した。６世紀後半から７世紀にかけてのものである。第 10 面 **A212 土坑**（図 43 － 385）から須恵器壺１点（385）が出土した。A213 ピットから出土した破片と接合した。385 は外面格子状タタキにカキ目を施し、内外面に自然釉が付着している。６世紀前半かと思うものである。第 10 面 **A241 土坑**から土師器片１点が出土した。第 10 面 **A242 土坑**から土師器片１点が出土した。第 10 面 **A243 ピット**（図 43 － 386、図版 33）から須恵器杯１点（386）が出土した。386 は６世紀第２四半期から中頃のものである。第 10 面 **A244 土坑**（図 43 － 387、図版 34）から須恵器杯蓋１点（387）が出土した。387 は口縁内部に段の名残があり、６世紀第２四半期のものである。第 10 面 **A246 土坑**から土師器片１点が出土した。第 10 面 **A247 ピット**から土師器片１点が出土した。第 10 面 **A260 ピット**（図 43 － 388、図版 34）から須恵器杯蓋１点（388）、土師器片２点が出土した。388 は６世紀第４四半期のものである。第 10 面 **A277 ピット**から土師器片２点が出土した。第 10 面 **A279 土坑**（図 43 － 389 ～ 391）から布留式甕２点（389・390）、弥生土器甕１点（391）、土師器片が少量出土した。389・390 は布留Ⅱ～Ⅲ期のものである。391 は口縁端部に凹線文２条を施され、弥生Ⅳ－４様式かと思うものである。混じりと考える。第 10 面 **A280 ピット**から土師器片１点が出土した。第 10 面 **A282 土坑**から 13 世紀かと思う土師器皿口縁片１点、12 世紀かと思う瓦器椀口縁片１点等数片が出土




384：A140 溝、385：A212 土坑、386：A243 ピット、387：A244 土坑、388：A260 ピット、389 ～ 391：A279 土坑、392：A374 土坑、393：A390 ピット、394 ～ 406：（02 － 1）第 10 層、407 ～ 415：（06 － 2）第 10 層

**図 43　第 10 面　出土遺物**

した。第 10 面 **A294 ピット**から 7 世紀前半と思うヘラ切り未調整の須恵器杯片 1 点が出土した。第 10 面 **A295 ピット**から 6 世紀後半から 7 世紀前半の須恵器杯蓋片 1 点が出土した。第 10 面 **A324 ピット**から須恵器杯蓋口縁片 1 点が出土した。6 世紀後半から 7 世紀にかけてのものである。第 10 面 **A326 ピット**から土師器片 2 点が出土した。第 10 面 **A338 土坑**から 13 世紀くらいの瓦器片 1 点、弥生土器片 2 点が出土した。第 10 面 **A341 ピット**から土師器細片 2 点が出土した。第 10 面 **A343 土坑**から黒色土器 A 類片 1 点、土師器片 1 点が出土した。第 10 面 **A373 ピット**から土師器片 1 点が出土した。第 10 面 **A374 土坑**（図 43 － 392、図版 33）から土師器杯 1 点（392）が出土した。8 世紀初めかと思うものである。第 10 面 **A375 ピット**から 8 世紀かと思う土師器杯口縁片 1 点が出土した。第 10 面 **A390 ピット**（図 43 － 393、図版 33）から土師器杯 1 点（393）が出土した。口縁部の欠けは故意かもしれない。内面に放射状暗文を施している。8 世紀初めかと思うものである。

**第 10 層**（図 43 － 394 ～ 406、図版 34）から須恵器、土師器、弥生土器、サヌカイト片等が多く

出土した。弥生土器が多く、甕口縁が多い。土師器の中で布留式甕口縁も数点出土している。395 は須恵器杯蓋、394・396 は須恵器杯、397 ～ 405 は弥生土器で、397 が壺、398 が甕、399・400 が甕底部、401 ～ 403 は鉢底部、405 は有孔底部、406 はサヌカイトチップである。394 は第 11 ｂ層掘削時に粘土の塊として出土し、完形である事から第 10 面の土坑、ピットにもともと入っていたのかもしれない。６世紀第４四半期から７世紀初めのものである。395 は６世紀第２四半期で、外面に自然釉が付着している。396 は７世紀前半、弥生土器は 398 が弥生Ⅳ－２様式である以外、弥生Ⅴ様式である。397 は口縁端部に擬似凹線文２条を施されている。

【06 －２調査区】 **第 10 層**（図 43 － 407 ～ 415、巻頭図版２、図版 33）から、須恵器、土師器、弥生土器、製塩土器、鏡等が出土した。407 は須恵器高杯脚、408 は須恵器杯蓋、409 は須恵器堤瓶？、410 は須恵器杯Ｂ、411 は土師器杯、412 は製塩土器、413・414 は弥生土器台付鉢、415 は小形仿製鏡である。407 が三方スカシ孔を持ち、５世紀中頃から第４四半期かと思うもので、408 は６世紀第２四半期、409 は６世紀第４四半期以降のものである。410 ～ 412 は８世紀かと思うものである。412 は二次焼成で赤色化している。413･414 は吉備系かと思われ、外面に棒状浮文と一部赤彩も施されている。弥生中期末から後期のものである。414 が第 11 面出土であるので第 11 層に掲載してもよいものかもしれない。415 は径 3.59 × 3.60 ㎝、高さ 0.54 ㎝、重さ 9.1 ｇを測る重圏鏡である。平縁で幅 0.5 ㎝の櫛歯文帯と１円圏をもつ。鈕は鈕孔がない。平縁に 0.25 × 0.4 ㎝の不定形の孔がある。この小孔は懸垂を意図したものではないかと湯本・飯田氏は類推している（註１）。又、湯本・飯田氏は、池島Ⅰ期地区西端部の庄内式後半から布留式前半の遺構が集中する集落域で方格四乳鏡、画文帯同向式神獣鏡の破片が出土し、東南端で布留式後半と考えられる 167 土坑から内行花文鏡の破片が出土していることから、Ⅱ期地区で同時期の集落がなければⅠ期地区の集落との関係の中でこの小形仿製鏡も存在すると考えている。

池島Ⅰ期地区では庄内式段階から TK209 型式（Ⅱ型式５段階、６世紀末から７世紀初）の遺構が微高地から検出され、第Ⅰ期（庄内式）、第Ⅱ期（布留Ⅰ・Ⅱ期）、第Ⅲ期（布留Ⅲ～Ⅳ期）、第Ⅳ期（須恵器出現以降～ TK209 式段階以前）に分けられた。池島Ⅰ期地区では第Ⅰ期に属する遺構が多く、何箇所かにまとまっていた。今回報告した遺構は A279 土坑が布留式期と思う以外、第Ⅳ期のものが目立つ。池島Ⅰ期地区の第Ⅳ期の遺構は他の第Ⅰ～Ⅲ期に比べ散在していて少なかった。（陣内）

## ２．弥生時代～縄文時代面の調査

### １）第 11 面・第 11 面ベース（第 11 ｂ面）

第 11 面（図 44、図版 13・14）

遺構面の状況と検出遺構

第 11 面は、第 10 層の土壌層を除去した面である。第 11 層は、灰色で粘土～シルトの土質で粘性が強く、しまりがよい土壌である。土壌化していることや、下層の第 11 ｂ層の状況などから、池島・福万寺遺跡Ⅰ期地区の第 11 層に相当する土壌層の可能性が考えられる層である。しかし、第 10 ｂ層によって覆われておらず、層の対応は難しい。

地形は、全体に南東から北西方向に傾斜し、02 － 1 調査区の北西で最も低くなる。また、第 10 面の状況と同様に第 11 ｂ層中の氾濫堆積物によってつくられた南北方向の微高地が２ヶ所あり、その部分は第 11 ｂ層が厚く堆積して盛り上がっていた。その部分は上面の削平が大きく、第 11 層の残りが悪くなっており、部分的に第 11 ｂ層が露出していた。そのため、微高地縁辺での第 11 層の状況は不明な部分が多い。遺構は、高まり、溝、堤、畦畔、土坑、ピットを検出した。以下、第 11 面検出地形、遺構について詳述する。

微高地とその周辺（図版 13）

**A440 微高地**は、南北約 60 m、東西約 10 mの範囲で検出され、細長の長方形を呈する。南南東から北北西に走行し、更に北側の調査区外にのびている。微高地の高さは均一で、水田域との比高差は 0.1 ～ 0.4 mである。微高地を形成する土は、細砂～粗砂を主体とする第 11 ｂ層の氾濫堆積物である。微高地上は上面の削平により第 11 層が遺存しておらず、第 11 面段階での状況については不明である。

微高地南西側には、微高地の西に沿うように、長さ 18.2 m、幅 0.7 ～ 1 m、高さ 0.03 mの **A442 堤**があり、その東側に接して、長さ 14 m、幅 0.7 ～ 0.9 m、深さ 0.05 ～ 0.14 mの **A438 溝**が検出されている。A442 堤を形成する土は第 11 層と同様で、ブロック土などはなく確実に盛土であるとの判断はできなかった。堤、溝とも残りは悪く、途中で途切れているが、本来は A440 微高地に沿ってさらに北側に伸びていたものと考えられる。第 11 ｂ面でもほぼ同じ場所に溝が検出されており、第 11 ｂ面であわせて詳述する。

**B494 微高地**は、南北約 40 m、東西約 40 mの範囲で検出され、調査区東側全体が微高地になっており、更に南北の調査区外にのびている。微高地の高さはほぼ均一で、水田域との比高差は 0.2 ～ 0.3 m である。微高地を形成する土は、Y ＝－ 33,980 から Y ＝－ 33,990 付近は、細砂～粗砂を主体とする第 11 ｂ層の氾濫堆積物が主体であり、その部分には第 11 層が遺存していない。それ以外の部分でも第 11 ｂ層が高くなっているため､第 11 層の残りが悪い。微高地に沿うような溝は検出されなかったが、B494 微高地とその周辺は上面の削平によって、第 11 面の遺構が削られてしまった可能性も考えられる。また、標高のコンタラインも上面の遺構などによって途切れており、そのまま図示している。主に第 11 ｂ層で形成された２つの微高地は、第 12 面の平面図に記載した A509 流路、B197 流路にそれぞれ対応しており、流路の堆積によって形成された自然堤防であることがわかる。

**A441 微高地**は、南北約 15 m、東西約 40 mの範囲で検出された。東南東から西北西に走行し、更に調査区外にのびている。微高地の高さはほぼ均一で、水田域との比高差は 0.1 ～ 0.4 mである。先述の２つの微高地とは異なり、第 11 層が遺存しており、微高地を形成する土も氾濫堆積物を主体としたも

のではない。微高地が形成された要因としては、第 12 面の A532 微高地の高さが踏襲されたものと考えられる。

微高地北側に沿って、長さ約 30 m、幅約 0.7 ～ 1.1 m、水田面からの高さ 0.1 m、微高地からの高さ 0.03 ～ 0.1 mの **A439 高まり**が検出された。高まりを形成する土は第 11 層と同様でブロック土などがなく、確実に盛土であるとの判断はできなかった。

微高地南西側で検出された溝は、**A436 溝**が検出長 4.6 m、幅 1 m前後、深さ 0.1 m前後で、**A437 溝**が検出長 4.7 m、幅 0.5 m前後、深さ 0.1 m前後である。残りが悪く、途切れた状態で検出された。第 11 b面でも同じ場所に溝が検出されており、第 11 b面であわせて詳述する。

水田と畦畔（図版 13・14）

畦畔は 44 条が検出されたが、全体に残りが悪く、途切れて検出したものが大半を占める。高さも 0.01 ～ 0.05 mほどであり、正確な水田区画がわかるものは水田域 A の北西部分のみで、約 25 ㎡の正方形である。水田域 A の畦畔は基本的に南東－北西方向に幹線小畦畔（江浦 1994）を造り、その間をそれに直交する形の支線小畦畔でつないでいる。幹線小畦畔は等高線に直交し、支線小畦畔は等高線に平行しており、地形を利用しながら水田を形成したことがわかる。水田域 A は、西接の 95 － 2 調査区の水田域 J 地区（廣瀬編 2007）と同様のものであると考えられる。

水田域 B は、水田域 A に比べて全体に残りが悪く、畦畔は痕跡的に検出した。そのため、掘削は行なっていない。水田構造は水田域 A と同様で、幹線・支線小畦畔によって構成されている。また、水田域 A と B を分ける A440 微高地は、池島 I 期地区の 4 微高地と考えられ、水田域 B は池島 I 期地区の水田域 I 地区に対応する可能性がある。

その他の遺構（図 45）

微高地の縁辺を中心に土坑を 7 基、ピットを 27 基検出したが、先述のように微高地縁辺には第 11 層が残っていない部分が多く、厳密な帰属面については不明である。**B118 土坑**は、東側を側溝で削ってはいるが、南北長 1.2 m、東西復元幅約 1 mの長方形を呈し、深さ 0.3 mである。埋土と平面形状の特徴から、第 9 面の方形土坑であると考えられる。ピットは径約 0.3 ～ 0.5 mの円形または楕円形を呈し、深さは 0.1 ～ 0.4 mほどである。平面的にまとまって検出されず、柱痕も確認できなかったため、建物などを復元することはできなかった。（乾）

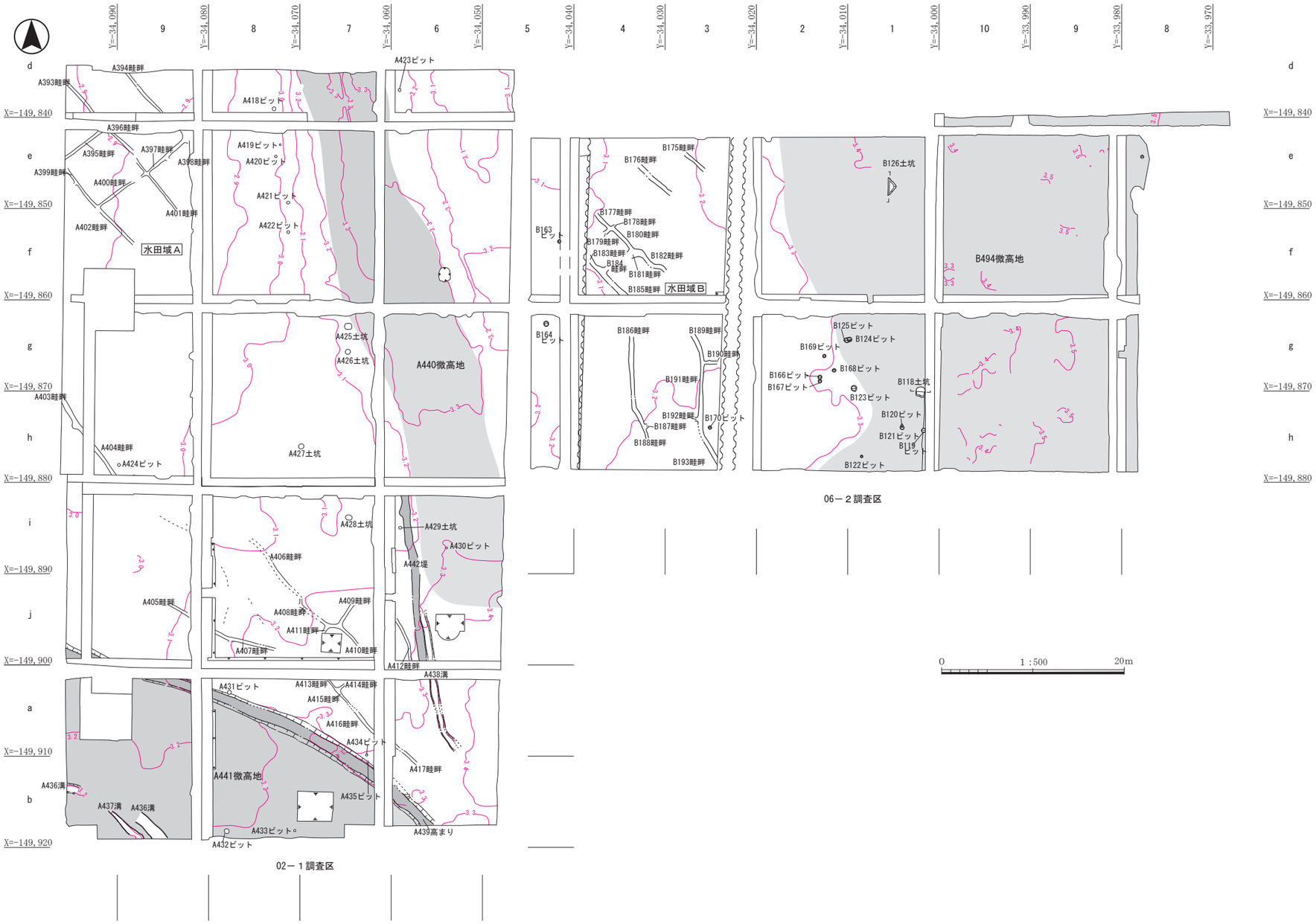

Y=-34,090
9
Y=-34,080
8
Y=-34,070
7
Y=-34,060
6
Y=-34,050
5
Y=-34,040
4
Y=-34,030
3
Y=-34,020
2
Y=-34,010
1
Y=-34,000
10
Y=-33,990
9
Y=-33,980
8
Y=-33,970
d
e
f
g
h
i
j
a
b
X=-149,840
X=-149,850
X=-149,860
X=-149,870
X=-149,880
X=-149,890
X=-149,900
X=-149,910
X=-149,920
A393畦畔
A394畦畔
A396畦畔
A395畦畔
A397畦畔
A398畦畔
A399畦畔
A400畦畔
A401畦畔
A402畦畔
水田域A
A403畦畔
A404畦畔
A424ピット
A405畦畔
A423ピット
A418ピット
A419ピット
A420ピット
A421ピット
A422ピット
A425土坑
A426土坑
A427土坑
A440微高地
A428土坑
A406畦畔
A408畦畔
A411畦畔
A409畦畔
A407畦畔
A410畦畔
A429土坑
A430ピット
A442堤
A412畦畔
A438溝
A431ピット
A413畦畔
A414畦畔
A415畦畔
A416畦畔
A434ピット
A441微高地
A435ピット
A433ピット
A432ピット
A417畦畔
A439高まり
A436溝
A437溝
A436溝
B163ピット
B164ピット
B175畦畔
B176畦畔
B177畦畔
B178畦畔
B180畦畔
B179畦畔
B183畦畔
B182畦畔
B184畦畔
B181畦畔
B185畦畔
水田域B
B186畦畔
B189畦畔
B190畦畔
B191畦畔
B192畦畔
B170ピット
B187畦畔
B188畦畔
B193畦畔
B126土坑
B125ピット
B124ピット
B169ピット
B168ピット
B166ピット
B167ピット
B123ピット
B118土坑
B120ピット
B121ピット
B119ピット
B122ピット
B494微高地
06－２調査区
02－１調査区
0
1:500
20m

図 44　第 11 面　平面図

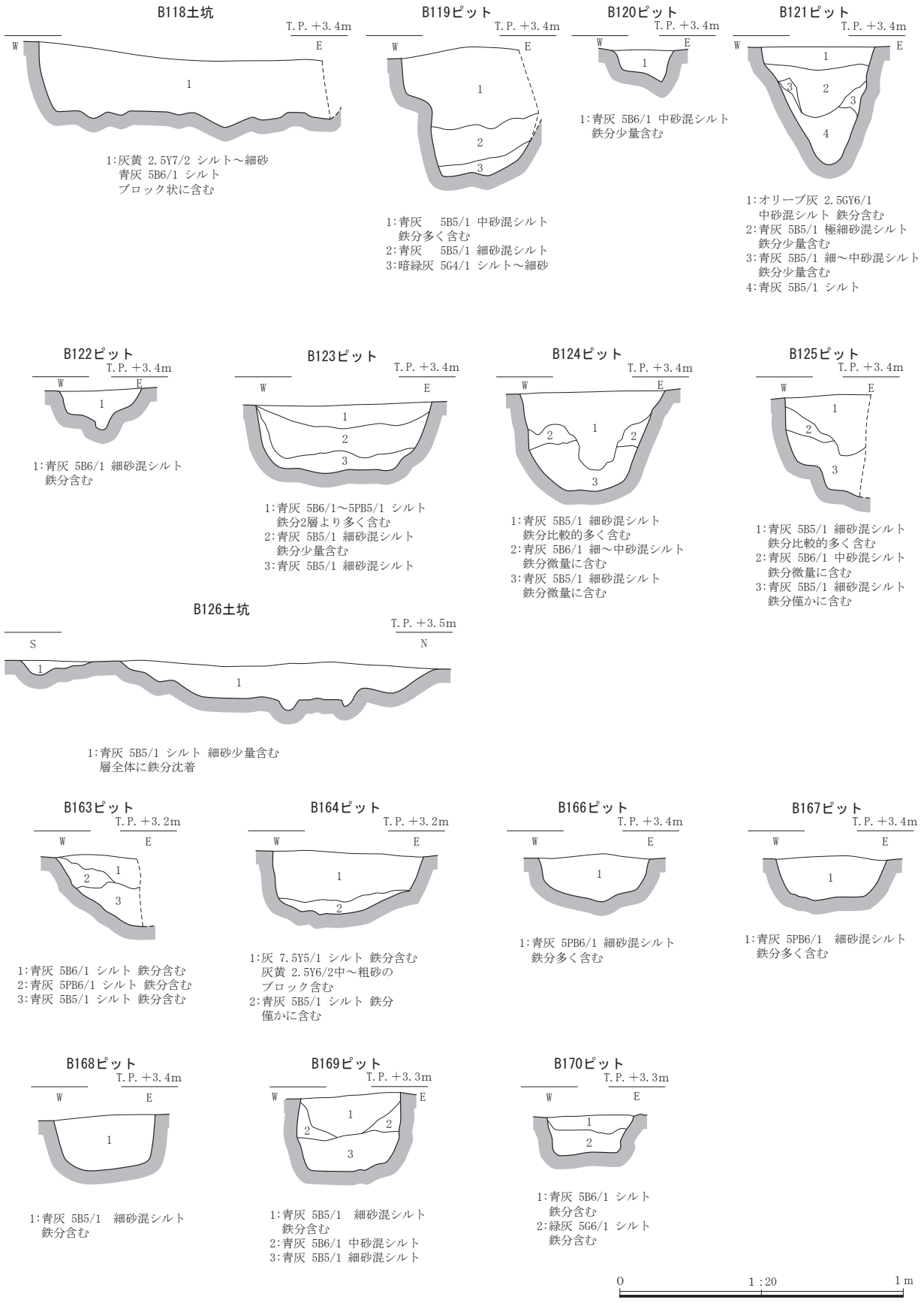

B118土坑
T.P.＋3.4m
W
E
1
1:灰黄 2.5Y7/2 シルト～細砂
青灰 5B6/1 シルト
ブロック状に含む
B119ピット
T.P.＋3.4m
W
E
1
2
3
1:青灰 5B5/1 中砂混シルト
鉄分多く含む
2:青灰 5B5/1 細砂混シルト
3:暗緑灰 5G4/1 シルト～細砂
B120ピット
T.P.＋3.4m
W
E
1
1:青灰 5B6/1 中砂混シルト
鉄分少量含む
B121ピット
T.P.＋3.4m
W
E
1
2
3
3
4
1:オリーブ灰 2.5GY6/1
中砂混シルト 鉄分含む
2:青灰 5B5/1 極細砂混シルト
鉄分少量含む
3:青灰 5B5/1 細～中砂混シルト
鉄分少量含む
4:青灰 5B5/1 シルト
B122ピット
T.P.＋3.4m
W
E
1
1:青灰 5B6/1 細砂混シルト
鉄分含む
B123ピット
T.P.＋3.4m
W
E
1
2
3
1:青灰 5B6/1～5PB5/1 シルト
鉄分2層より多く含む
2:青灰 5B5/1 細砂混シルト
鉄分少量含む
3:青灰 5B5/1 細砂混シルト
B124ピット
T.P.＋3.4m
W
E
1
2
2
3
1:青灰 5B5/1 細砂混シルト
鉄分比較的多く含む
2:青灰 5B6/1 細～中砂混シルト
鉄分微量に含む
3:青灰 5B5/1 細砂混シルト
鉄分微量に含む
B125ピット
T.P.＋3.4m
W
E
1
2
3
1:青灰 5B5/1 細砂混シルト
鉄分比較的多く含む
2:青灰 5B6/1 中砂混シルト
鉄分微量に含む
3:青灰 5B5/1 細砂混シルト
鉄分僅かに含む
B126土坑
T.P.＋3.5m
S
N
1
1
1:青灰 5B5/1 シルト 細砂少量含む
層全体に鉄分沈着
B163ピット
T.P.＋3.2m
W
E
1
2
3
1:青灰 5B6/1 シルト 鉄分含む
2:青灰 5PB6/1 シルト 鉄分含む
3:青灰 5B5/1 シルト 鉄分含む
B164ピット
T.P.＋3.2m
W
E
1
2
1:灰 7.5Y5/1 シルト 鉄分含む
灰黄 2.5Y6/2中～粗砂の
ブロック含む
2:青灰 5B5/1 シルト 鉄分
僅かに含む
B166ピット
T.P.＋3.4m
W
E
1
1:青灰 5PB6/1 細砂混シルト
鉄分多く含む
B167ピット
T.P.＋3.4m
W
E
1
1:青灰 5PB6/1 細砂混シルト
鉄分多く含む
B168ピット
T.P.＋3.4m
W
E
1
1:青灰 5B5/1 細砂混シルト
鉄分含む
B169ピット
T.P.＋3.3m
W
E
1
2
2
3
1:青灰 5B5/1 細砂混シルト
鉄分含む
2:青灰 5B6/1 中砂混シルト
3:青灰 5B5/1 細砂混シルト
B170ピット
T.P.＋3.3m
W
E
1
2
1:青灰 5B6/1 シルト
鉄分含む
2:緑灰 5G6/1 シルト
鉄分含む
0
1:20
1m

図 45　第 11 面　遺構図

第 11 面ベース（第 11 ｂ面）（図 46、図版 14）

遺構面の状況と検出遺構

第 11 ｂ面は、先述の第 11 層を除去した第 11 ｂ層の氾濫堆積物層の上面である。第 11 ｂ層は、堆積の状況や周辺の成果から考えて、弥生時代後期以前の氾濫堆積物層である。ただ、第 11 ｂ層は 1 回による氾濫で堆積したものではなく、安定と氾濫を繰り返しながら堆積したものと考えられる。第 11 ｂ層は大きく分けて、最も下部の極細砂を主体とするシルト、その上の中砂～極粗砂、最上部の極細砂を主体とするシルトの３つに分けられる。この内、中砂～極粗砂の部分が第 11 面の微高地に対応する自然堤防を形成するものである。

地形は、第 11 面と大きな変化はなく、全体に南東から北西方向へ低くなっている。微高地も同様に検出され、ベース面から盛り上がっていることが確認された。

遺構は溝、土坑、ピットを確認した。以下、第 11 ｂ面検出地形、遺構について詳述する。

微高地と溝（図 47・48）

**A502 溝**は A695 微高地の西に沿うように検出され、長さ 30.4 m、幅 0.5 m前後、深さ 0.2 mである。当溝は、第 11 面の A438 溝と位置、方向が一致している。**A504 溝**は第 11 面の A439 高まりの直下から検出され、長さ 29.5 m、幅 2 m前後、深さ 0.1 m前後である。

次に A694 微高地南西で検出された溝群について述べる。**A505 溝**は長さ 14.4 m、幅 0.5 m前後、深さ 0.3 m前後である。断面は U 字形を呈し、埋土下半部に砂を多く含む。**A506 溝**は長さ 9.2 m、幅 1 m 前後、深さ 0.4 m前後である。断面は逆三角形を呈し、埋土はレンズ状に堆積しており、最上部の 1 層は第 11 層に対応している。**A507 溝**は長さ 5 m、幅 0.5 m前後、深さ 0.3 m前後である。断面は U 字形を呈し、埋土下半部にブロック土を含む。**A508 溝**は長さ 5 m、幅 1 m前後、深さ 0.1 m前後である。これらの溝群は南東から北西方向に走行し、第 11 面の A436･A437 溝と、位置、方向が一致している。よって、第 11 層中に掘削されたと考えられ、趙氏の示す下面検出遺構 D（趙 1995）に対応する。また、第 11 面でも検出していることから考えると、第 11 面段階でも溝が継続して使われていたか、第 11 面段階では溝が機能しておらず、溝痕跡の凹みのみを検出したかの２つが考えられる。しかし、上面によって溝自体が削平されているため、どちらの場合かが判別できなかった。溝の機能としては、微高地上に形成されていること、水田域に近いことから、水田への給水を目的とした溝であったと考えられる。

調査区中央で検出された **B173 溝**は、長さ約 40 m、幅 5 m前後、深さ 0.4 m前後である。地形に沿って南東から北西方向にのび、断面形は全体になだらかな傾斜を持っているため、自然地形の落ち込みである可能性が高い。

調査区東側では溝を 4 条検出した。B128・B141 溝は、その形態、位置関係から、第 9 面の溝群の掘り残しと考えられる。**B129 溝**は、長さ 15 m、幅 0.5 m前後、深さ 0.1 m前後である。南東から北西に向かってのび、微高地でも最も高い部分に形成されている。**B148 溝**は、長さ 12.2 m、幅 0.7 m前後、深さ 0.05 m前後で、東西にのびる。

水田について

調査区北西で第 11 面の水田域 A を検出したが、第 11 ｂ面でも同じ場所に畦畔の痕跡が検出され、水田域 A ´ とした。部分的にしか検出されず、長さは 5 ～ 10 mである。水田域 A とは畦畔の方向が同一であるが、検出場所が若干異なっており、特に第 11 面の A393 畦畔と A394 畦畔のあいだで畦畔痕跡が検出されたため、別の水田域が形成されていた可能性もある。

図 46　第 11 b 面　平面図

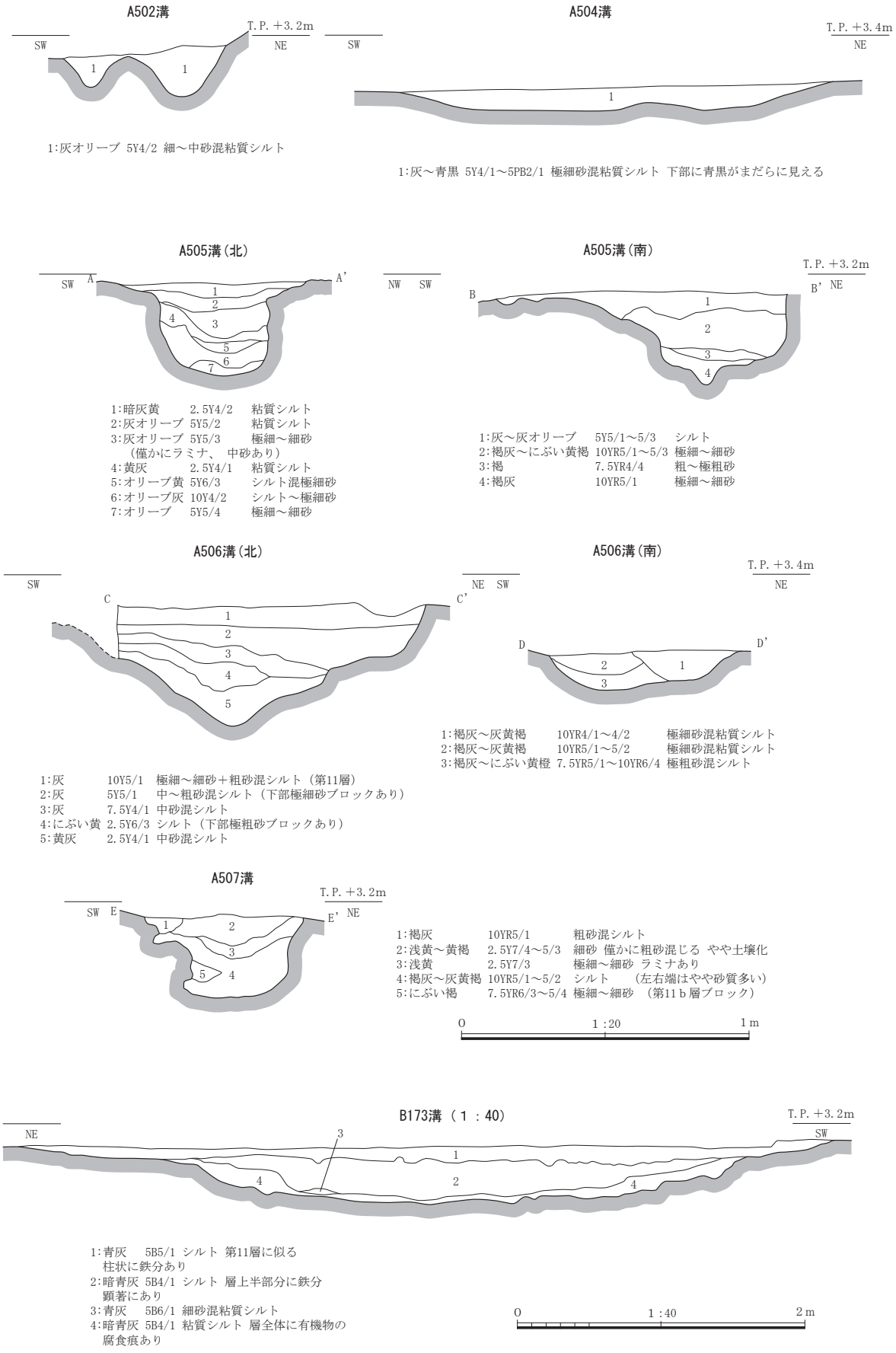



図47 第11ｂ面 遺構図(1)

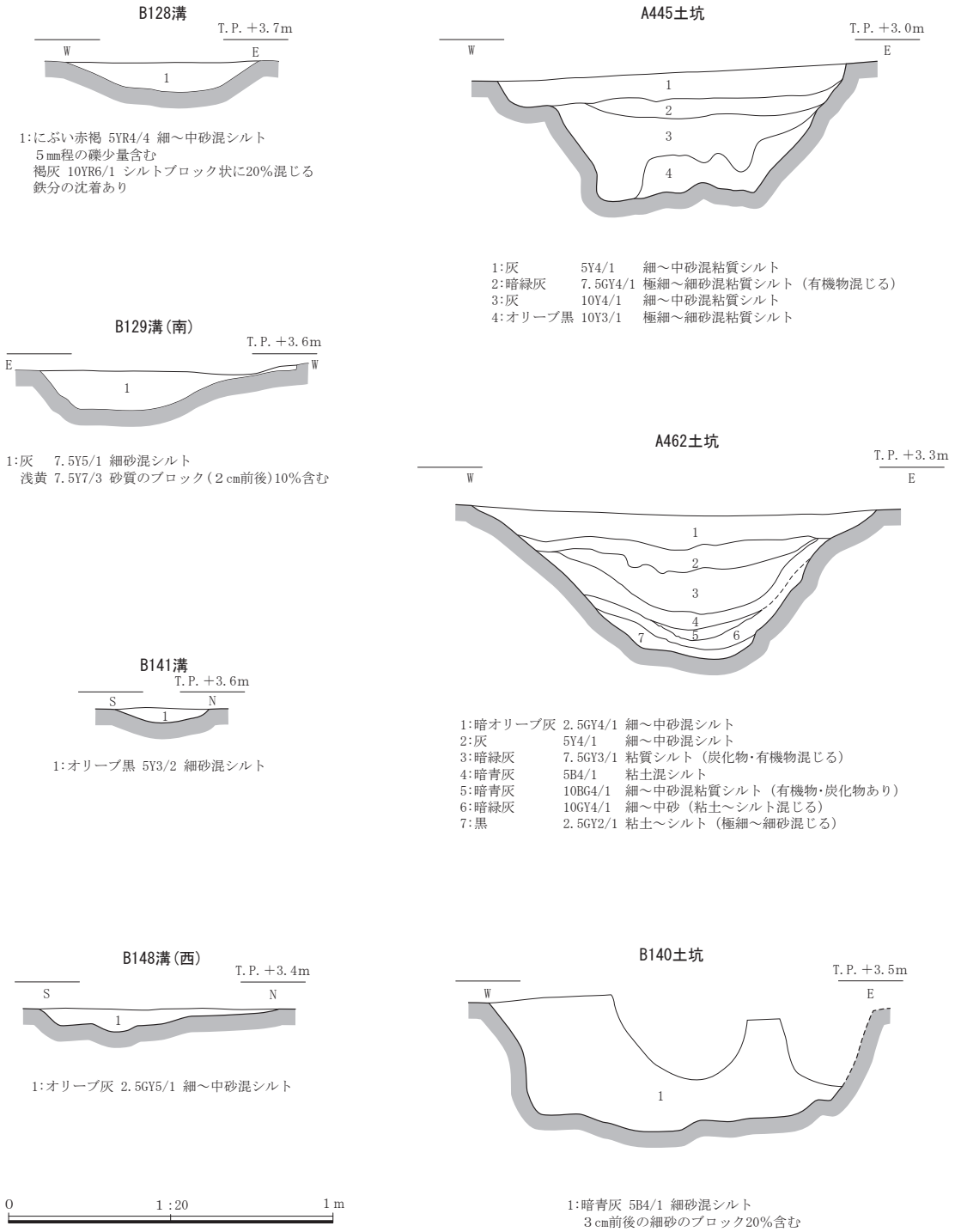



図 48　第 11 b 面　遺構図（２）

その他の遺構（図 48 ～ 51）

調査区全体にわたって土坑、ピットを検出したが、規則性はなく、ピットには踏み込みや植物の生痕と考えられるものも含まれる。また、上面遺構の掘り残しも当面で検出していると考えられ、遺構の帰属面には注意が必要である。

**B140 土坑**（図 48）は第９面の溝によって削平されているが、検出長 1.19 m、幅１m前後の長方形を呈し、埋土にブロック土が多く含まれる。**B157 土坑**（図 49）は東側が調査区外ではあるが、南北 3.5 m、東西検出長１mの方形、または長方形を呈し、埋土にブロック土が多く含まれる。そういった特徴

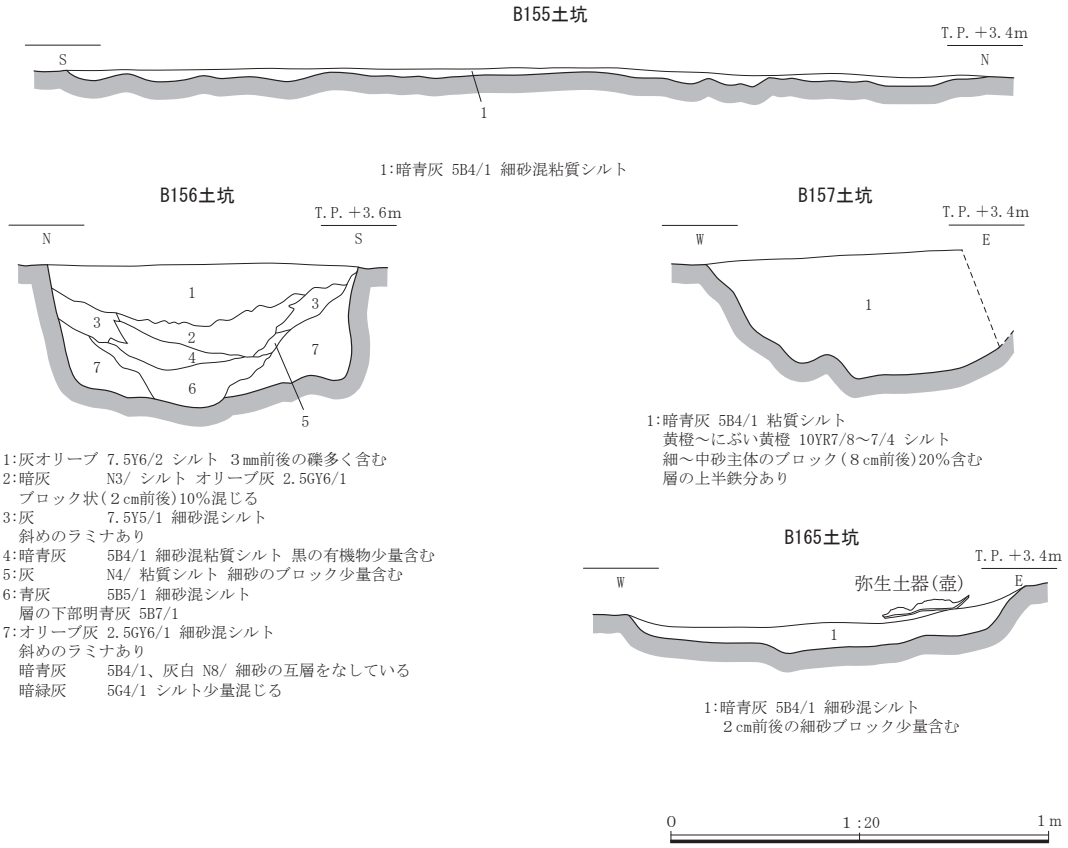



**図 49　第 11 b 面　遺構図（3）**

から、これらの土坑は第９面の方形土坑であると考えられる。

**A445 土坑**（図 48）は長軸 1.2 m、短軸 0.9 m、深さ 0.4 m前後で、楕円形を呈し、断面は逆台形である。**A462 土坑**（図 48）は長軸 1.4 m、短軸 1 m、深さ 0.4 m前後で、楕円形を呈し、断面は椀形である。**B156 土坑**（図 49）は長軸 0.82 m、短軸 0.8 m、深さ 0.38 mで、楕円形を呈し、断面は逆台形である。埋土に植物とみられる有機物や炭を含んでおり、A462 土坑と共通しているが、性格は明らかではない。**B165 土坑**（図 49）は長軸 1.05 m、短軸 1 m、深さ 0.18 mで、楕円形を呈し、断面は皿形である。当初は土坑に気付かずに掘削したため、弥生土器片を浮いた状態で検出した。この土器は本来は埋土中に存在していたと考えられる。土坑の性格は不明である。

ピットは深さが 0.1 mに満たないものが大半で、深さが 0.2 m前後のピットのみ述べることとする。**B133 ピット**（図 50）は径 0.2 m、深さ 0.3 m、**B134 ピット**（図 50）は径 0.24 m、深さ 0.17 m、**B142 ピット**（図 50）は径 0.33 m、深さ 0.4 m、**B143 ピット**（図 50）は径 0.28 m、深さ 0.31 m、**B144 ピット**（図 50）は径 0.44 m、深さ 0.31 m、**B150 ピット**（図 51）は径 0.37 m、深さ 0.23 m、**B161 ピット**（図 51）は径 0.23 m、深さ 0.18 m、**B172 ピット**（図 51）は径 0.56 m、深さ 0.71 mである。これらのピットは微高地周辺に集中しているが、柱痕は検出されず、規則性も見出せなかった。埋土は暗青灰～青灰のシルト～粘質シルトを主体としている。（乾）

第 11 面出土遺物（図 52）

【02 － 1 調査区】

**第 11 層**から庄内期に入るかもしれない弥生？土器甕口縁片 1 点、弥生Ⅴ～Ⅵ様式の甕底部片 1 点等

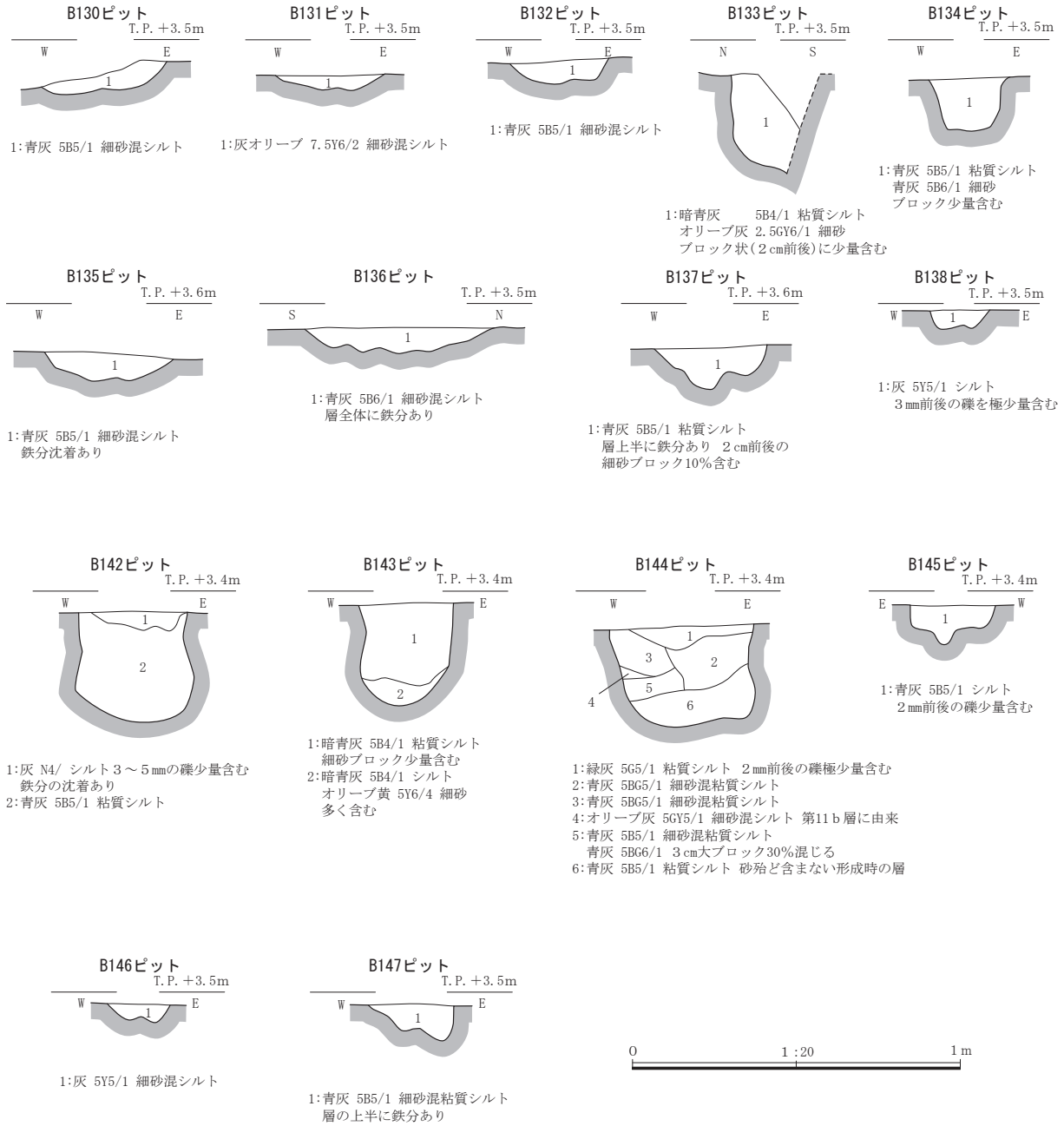



**図 50　第 11 ｂ面　遺構図（４）**

弥生土器片数点と土師器片数点が出土した。

第 11 ｂ面 **A445 土坑**から弥生中期かと思う弥生土器甕片 1 点が出土した。

第 11 ｂ面 **A506 溝**から弥生後期と思う弥生土器甕片 1 点他弥生土器片が極少量出土した。

**第 11 ｂ層**（図 52 － 416 ～ 420、図版 34・41）から弥生土器、布留式土器片 1 点、サヌカイト片 1 点（418）、木製品等が少量出土した。416・417 は弥生土器甕、419・420 は不明木製品である。416・417 は弥生Ⅳ様式である。419 はブナ科材で径 1.5 ㎝の孔が 1 個あいている。420 はケヤキ材で側面が弧状に上に突出している。どのような形になるのか不明である。

【06 － 2 調査区】

第 11 面 **B119 ピット**から弥生土器片 1 点が出土した。

第 11 面 **B125 ピット**から須恵器片 1 点が出土した。

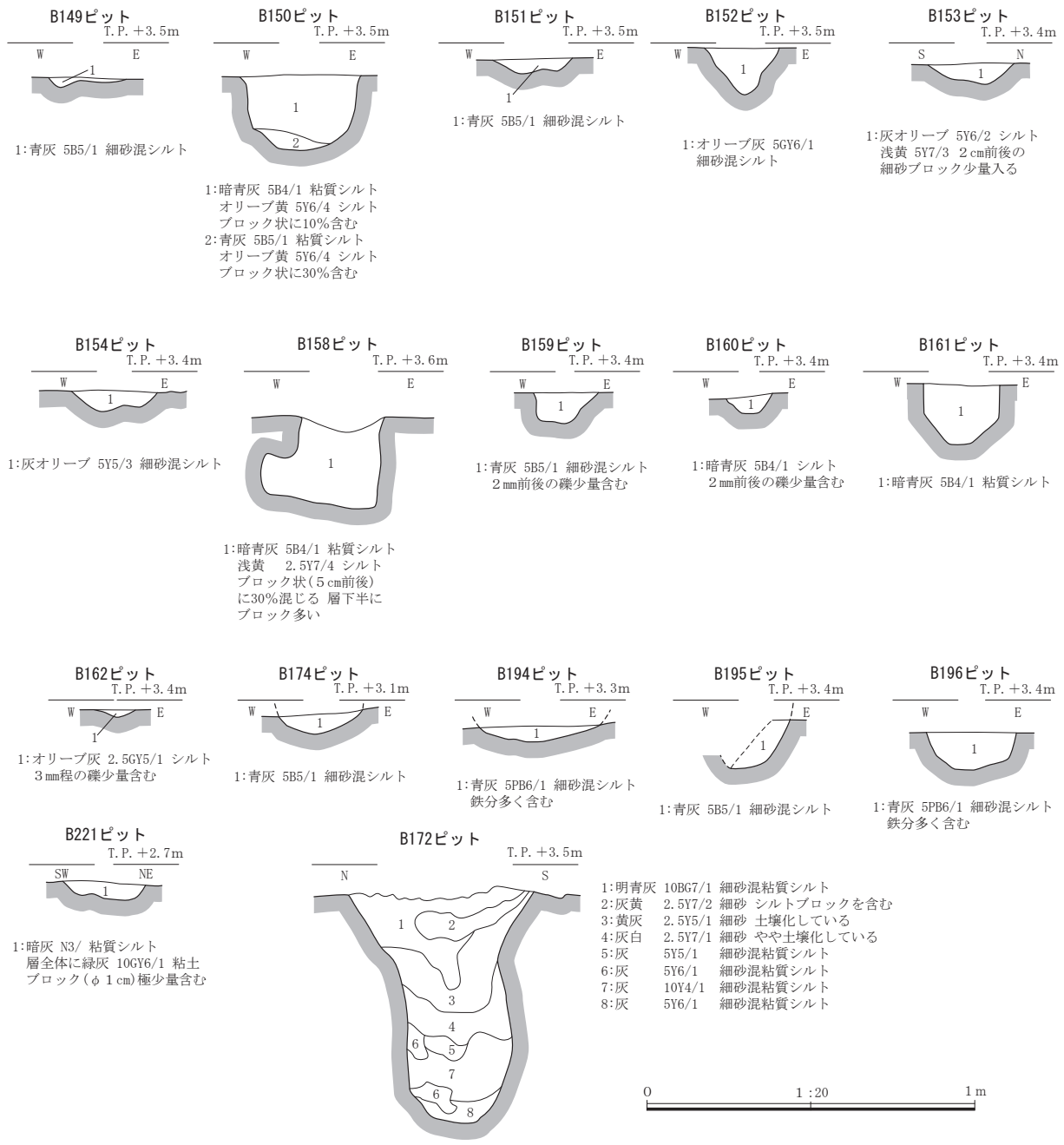



**図 51　第 11 b 面　遺構図（５）**

第 11 面 **B163 ピット**から弥生土器片 1 点が出土した。

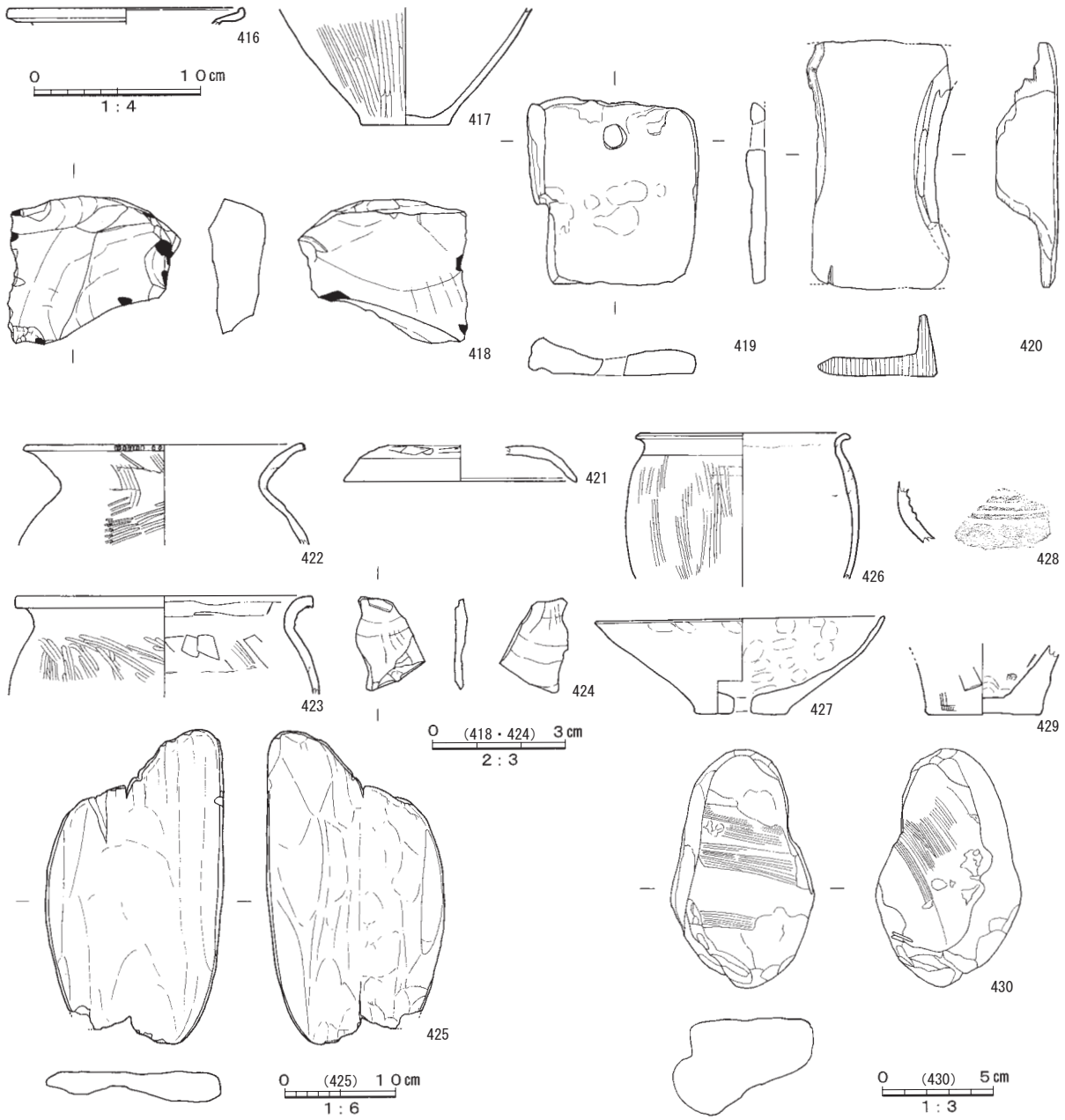
**第 11 面**（図 52 － 421）から須恵器杯蓋 1 点が出土した。外面底部を手持ちでヘラケズリしているが、形から考えると 6 世紀末から 7 世紀初めかと思うものである。陶邑産ではないのかもしれない。10 面の時期から混入と考えられる。

**第 11 層**（図 52 － 422）から須恵器、土師器、弥生土器が少量出土した。422 は弥生土器甕で、弥生Ⅴ様式のものである。

第 11 b 面 **B140 土坑**から弥生土器片 1 点が出土した。

第 11 b 面 **B165 土坑**から薄手で内外面ハケメ調整の弥生土器壺胴部片 1 点が出土した。弥生後期と思う。

第 11 b 面 **B173 落ち込み**から弥生後期かと思う弥生土器甕底部 1 点が出土した。




416～420：(02－1) 第11ｂ層、421：(06－2) 第11面、422：(06－2) 第11層、423～425：B197流路、426～430：(06－2) 第11ｂ層

図52　第11面　出土遺物

第 11 b 面 **B197 流路**（図 52 － 423 ～ 425、図版 34）から弥生土器が少量、サヌカイト片 1 点（424）、不明木製品 1 点（425）が出土した。

423 は甕で、外面ヘラミガキ調整で口縁部端部にススが多く付着している。弥生Ⅴ－０様式である。425 はヒノキ材である。

**第 11 b 層**（図 52 － 426 ～ 430）から弥生土器、石製品が少量出土した。

426 は甕、427 は有孔鉢、428 は壺頸片、429 は甕底部、430 は砥石？である。426 は外面ヘラミガキ調整で、弥生Ⅳ－ 4 様式かと思うものである。427 は弥生ⅤからⅥ様式、428 は段上沈線文 2 条の文様が施され弥生Ⅰ－ 2 ～ 3 様式、429 は弥生Ⅰ様式末からⅡ様式のものである。430 は 2 面に擦痕があり、砥石として使ったのかもしれない。

池島Ⅰ期地区の第 11 面の遺構は弥生Ⅴ～Ⅵ様式の遺物を出土し、第 11 b 層は弥生Ⅳ様式の遺物が主に出土している。今回報告する遺物は少ないが、池島Ⅰ期地区の様相に齟齬をきたすものはない。（陣内）

**２）第 12 面・第 12 面ベース（第 12 ｂ面）**

第 12 面（図 53、図版 15 ～ 17）

遺構面の状況と検出遺構

第 12 面は、第 11 ｂ層の氾濫堆積物を除去して検出した遺構面である。調査区全域を第 11 ｂ層が覆っており、極細砂～細砂を含む粘土～シルトの第 12 層上面が良好な状態で遺存していた。第 12 層は従来、当遺跡で「第２黒色粘土（泥）層」と呼称されている土壌に対応すると考えられる。

第 12 面の地形は、全体に南から北に向かって標高を減じており、調査区南西の A532 微高地南端が T.P.2.9 ｍと最も高い。微高地は３ヶ所検出され、いずれも南東からやや北西方向に向かってのびている。低地部分は微高地に挟まれているため同方向にのび、３本の流路も同様である。これらの地形は第 14 層を覆う氾濫堆積物である第 13 ｂ層と、第 13 層を覆う氾濫堆積物である第 12 ｂ層によって形成されており、第 13 面の地形と比べると、地形の逆転現象が見られることが以前から指摘されている（廣瀬編 2007）。

また、第 12 層は部分的に細分することができたが、範囲が限られているため、第 12 面では記述せず、第 12 ｂ面でまとめて記述することとした。

遺構面からは高まり、流路、溝、畦畔、水口などを検出した。以下、第 12 面検出地形、遺構について詳述する。

流路について（図 54、写真 34・35、図版 15 ～ 17）

３つの流路の帰属面については、第 11 ｂ層中と考えられ、本来は第 11 ｂ面の記述とすべきであるが、自然堆積の連続であって、平面的な調査を行っておらず、第 12 面で記述することとした。

**B197 流路**は、長さ約 35 ｍ、幅約 15 ｍ、深さ約１ｍ前後で、断面逆台形を呈し、更に南北にのびている。やや南南東から北北西に走向し、地形の状況から南から北に向かって流れていたと考えられる。流路中央部では、第 12 層を削平しているが、西側の部分では第 12 層の削平が少なく、B210 畦畔を確認することができた。

図 54 は B197 流路の縮小断面図である。最も下部の線が第 12 層（５層）、上部の線が第 11 層（1 層）で、その間が第 11 ｂ層（２・３・４層）である。先述したように第 11 ｂ層は大きく３層に分けられ、最も下部の４層は第 12 層の直上を覆う極細砂を主体とするシルト、３層は４層の上位に堆積し、４・５層を切り込む。３層はその氾濫堆積作用によって、部分的に T.P. ３ｍまで堆積が進み、自然堤防を形成する。２層はそれを埋める湿地状の堆積である。

流路部分で水田畦畔が確認されたことは、流路によって削平されていた部分が第 12 面段階で水田だったことを示唆しており、平面的に見ても微高地、高まりと流路部分は主軸が同一である。よって、低地部分である水田に氾濫堆積物が押し寄せ、水田部分を削平しながら埋没した可能性が考えられる。

**A509 流路**は、長さ約 80 ｍ、幅約 15 ｍ、深さ約２ｍ前後で、断面逆台形を呈し、更に南北にのびている。南南東から北北西に走向し、地形の状況から南から北に向かって流れたと考えられる。埋土の状況は B197 流路とほぼ変わらず、同じ層番号で記述する。

３層は４・５層を切り込み、３層を堆積させて自然堤防となって埋没している。流路中央では３層による下刻と削平が大きく、平面図上で、T.P. ２ｍ以下の部分は第 12・13 層が削平されており、第 13 ｂ層が露出している状況であった。特に、X ＝－ 149,890 ライン付近の流路底面では T.P.1.5 ｍ付近まで削平が及んでおり、流路肩付近の A528・A531・B244 高まりも部分的に削られている。

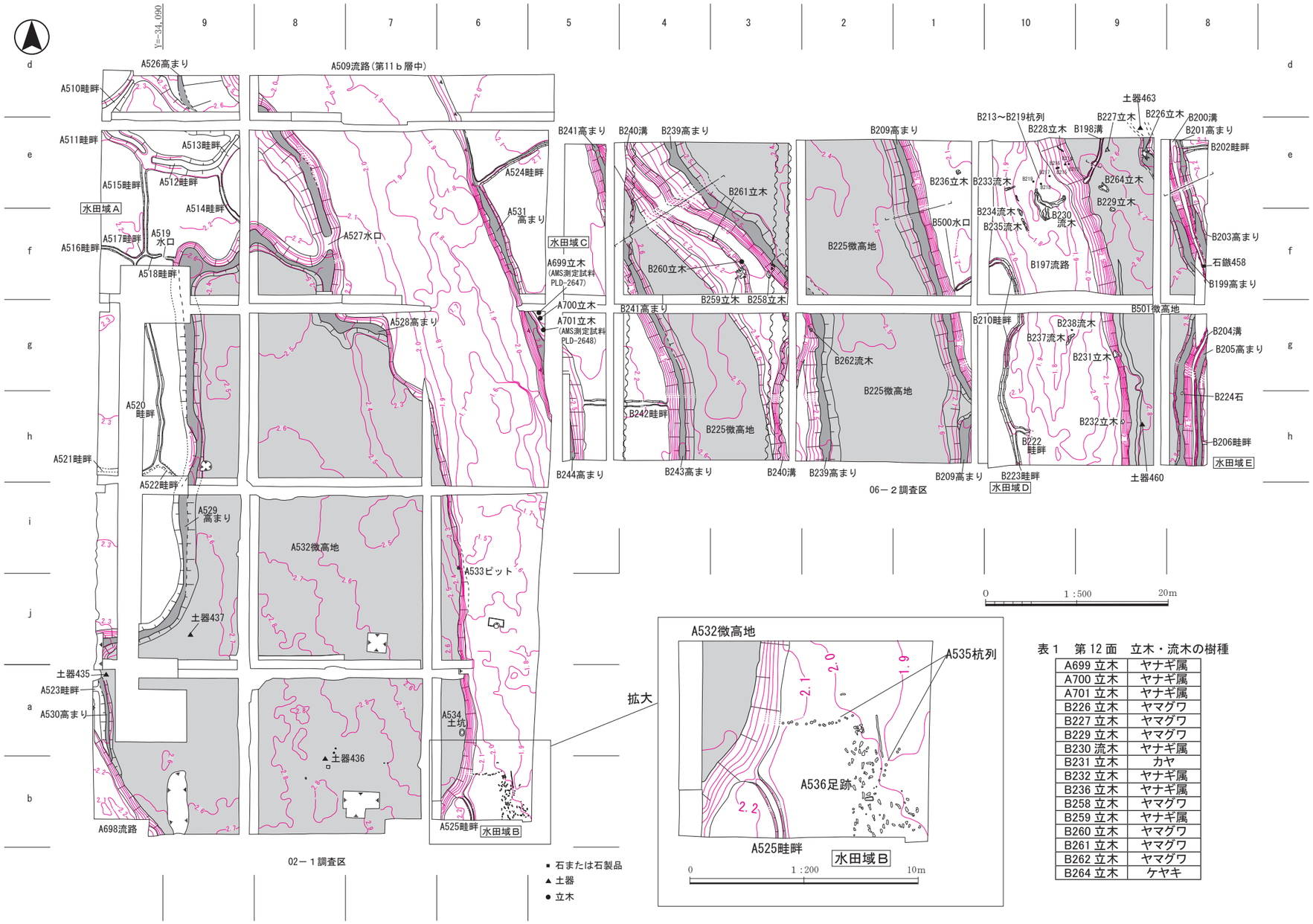



表１　第 12 面　立木・流木の樹種

| | |
|---|---|
| A699 立木 | ヤナギ属 |
| A700 立木 | ヤナギ属 |
| A701 立木 | ヤナギ属 |
| B226 立木 | ヤマグワ |
| B227 立木 | ヤマグワ |
| B229 立木 | ヤマグワ |
| B230 流木 | ヤナギ属 |
| B231 立木 | カヤ |
| B232 立木 | ヤナギ属 |
| B236 立木 | ヤナギ属 |
| B258 立木 | ヤマグワ |
| B259 立木 | ヤナギ属 |
| B260 立木 | ヤマグワ |
| B261 立木 | ヤマグワ |
| B262 立木 | ヤマグワ |
| B264 立木 | ケヤキ |

図 53　第 12 面　平面図

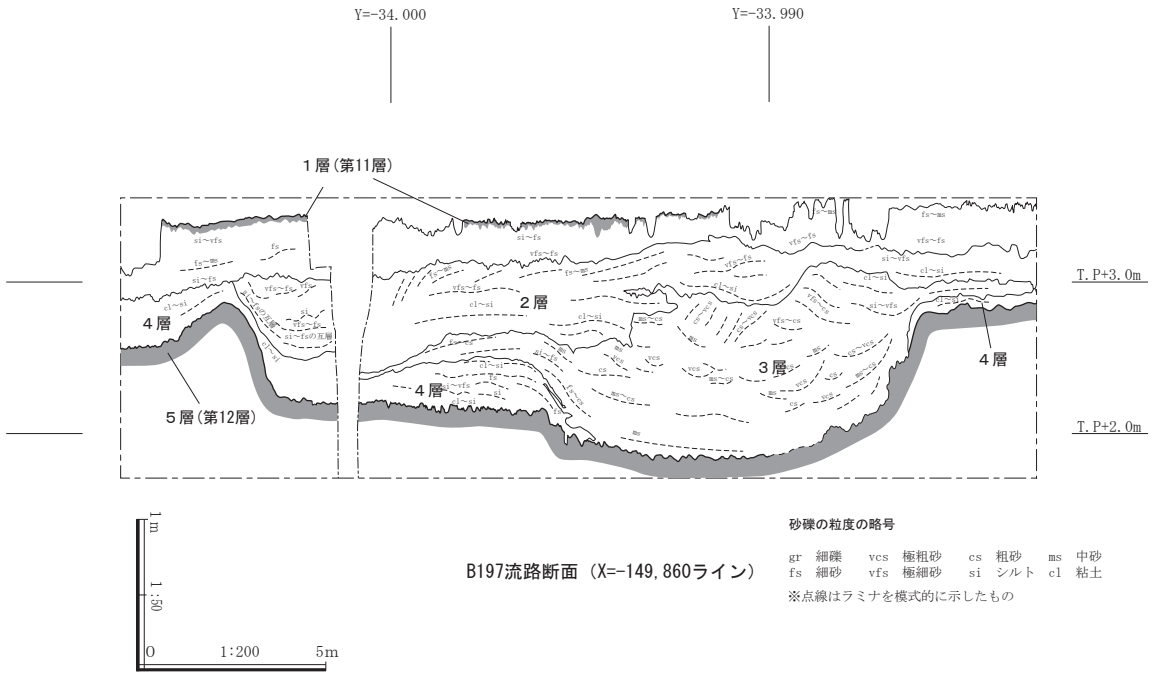



図 54　第 12 面　遺構図（１）

また、流路南端部分では第 12 層の削平が及んでいない部分があり、A525 畦畔が検出された。その東側では、A535 杭列、A536 足跡が検出された。

**A698 流路**は、長さ約 15 m、幅約 5 m、深さ約 0.5 mで検出され、大半は調査区外であった。そのため、細かな状況は不明であるが、先述の流路と同様のものと考えられる。池島 I 期地区の 102 流路に対応する。

これらの第 11 b 層は、『池島・福万寺遺跡３』で井上氏が指摘されている「第 12 － 1 層」に対応し、３層が「第 12 － 1 層上部」、4 層が「第 12 － 1 層下部」にあたる可能性が考えられる（井上 2007）。

また、これらの流路は埋没後、古墳時代まで微高地として存続しており、土地利用に大きな影響を与えている。

微高地と高まりについて（図 55、写真 36・37、図版 16・17）

微高地とは、氾濫堆積物を主体とした層によって形成された広範囲に高い地形で、高まりとは、主として微高地端部分に盛土によって形成された遺構である。

**A532 微高地**は、南北約 60 m、東西約 40 mの範囲で検出され、更に南側にのびている。不整の長方形を呈し、南西側に張り出し部が存在する。北側、西側端にはそれぞれ A528・A529・A530 高まりが形成されている。南と北ではその高さに 0.5 mの違いがあり、なだらかに北側に向かって傾斜している。微高地を形成する土は第 12 b 層の細砂～粗砂を主体とする氾濫堆積物である。

**B225 微高地**は、南北約 35m、東西約 30m の範囲で検出され、更に南北にのびている。X ＝－ 149,870 以南は南北方向にのびるが、以北ではやや西に方向を変える。東端に B209、西端に B241・B243 高まりが形成されており、微高地中央を B239 高まり、B240 溝が縦断する。南端と北端ではその高さに 0.2m の違いがあり、なだらかに北側に向かって傾斜している。微高地を形成する土は、東側

写真 34　第 12 面　A509 流路　断面（南から）

写真 35　第 11 ｂ面　B197 流路　断面（東から）

写真 36　第 12 面　B209 高まり　断面（東から）

写真 37　第 12 面　B199 高まり、B200 溝、B203 高まり
断面（東から）

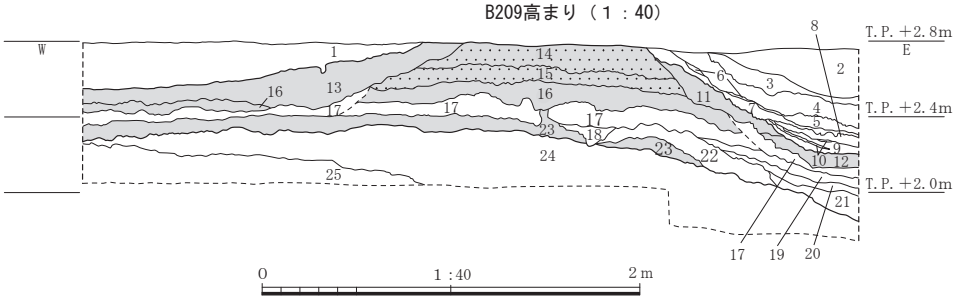
は第 13 ｂ面の B499 流路によって形成されたシルト～中砂からなる第 13 ｂ層の自然堤防である。西側はそれを覆う極細砂～シルトからなる第 12 ｂ層の後背湿地状の堆積によって形成されている。

**B501 微高地**は、南北約 35m、東西約 5 ～ 10m の範囲で検出され、更に南北にのびている。不整の長方形を呈し、中央東側に張り出し部が存在する。東接する 04 －２調査区では、この張り出し部の続きは確認されていないため、あと 1 m 以内で屈曲部が存在すると思われるが、調査区法面の崩壊などで確認できなかった。B225 微高地と同じように X ＝－ 149,870 以南は南北方向にのびるが、以北ではやや西に方向を変える。微高地東端には B199 高まり、B200 溝、B201・B203・B205 高まりが形成されている。南端と北端ではその高さに 0.2m の違いがあり、なだらかに北側に向かって傾斜している。微高地を形成する土は、主に第 13 ｂ層の自然堤防形成時の堆積であり、B225 微高地の東側と同様である。

**A528 高まり**は、A532 微高地の北端に形成されており、長さ約 27m、幅約 1.5 ～ 3 m、微高地からの高さ約 0.2m、水田面からの高さ約 0.4m である。高まりは A509 流路によって削平されており、本来は微高地東側一帯に形成されていたものと考えられる。

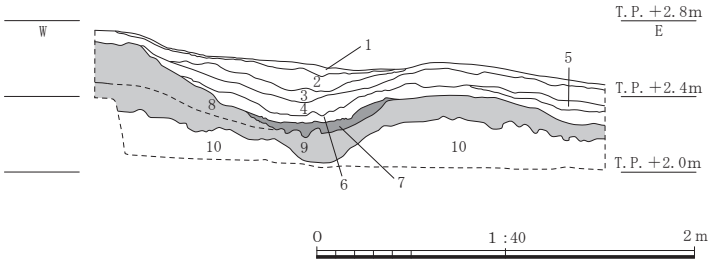
**A529 高まり**は、A532 微高地の西端に形成されており、長さ約 63m、幅約 1.5 ～ 3 m、微高地からの高さ約 0.2 m、水田面からの高さ約 0.4 m である。西側で調査区外に出てしまうが、すぐ南側で A530 高まりが検出されるため、同一のものであると思われる。また、A530 高まりも南側で A698 流

B209高まり（１：40）




1:暗オリーブ灰　5GY4/1 細砂混シルト 柱状に鉄分沈着
浅黄 2.5Y7/3 極細～細砂混シルトとオリーブ黒 5Y3/2の有機物細長く横に堆積
2:灰白～黄　5Y7/1～2.5Y7/8 極細～極粗砂混シルト ラミナあり
水平堆積で細～粗砂の互層 左端には３～５㎜の礫混じる
3:灰オリーブ～明黄褐 5Y5/2～2.5Y6/8 極細～細砂混シルト 下層で有機物堆積あり
4:黄灰　2.5Y4/1 シルト 極細砂混シルト多く含む
粘性やや強い 層全体に植物遺体多量に混じる
5:灰　7.5Y4/1 細砂混シルト ４層と比べると粘性は弱い
所々に４層の木片が層上半に混じる東側でシルトの水平堆積あり
6:灰　7.5Y4/1 極細砂混シルト ５層と比べ粘性強い
7:オリーブ黒　10Y3/1 粘質シルト ６層と粘性同じ 東側はシルトより多く含む
8:灰　5Y4/1 極細砂混粘質シルト ７層と比べ粘性弱い
9:オリーブ黒　5GY2/1 極細砂混粘質シルト ８層と比べ粘性強い 極細砂８層より少なく含む
10:オリーブ黒　5GY2/1 粘質シルト ９層と色同じだが有機物を層全体に少し含む
11:緑黒　7.5GY2/1 粘質シルト ８層と粘性は同じ(第12層)
層全体に暗青灰 10BG4/1の小さなブロック含む　層の中程に鉄分あり
12:オリーブ黒　5GY2/1 細砂混粘質シルト 11層と同じく層全体に
暗青灰 10BG4/1の粘質シルトブロック含む(第12層)
13:黒　10Y2/1 粘質シルト 11層と同じく層全体に
暗青灰 10BG4/1の粘質シルトブロック含む 粘性弱い 細砂の小塊層全体に含む(第12層)
14:暗灰　N3/ 粘質シルト 11層と同じく層全体に暗青灰 10BG4/1の粘質シルトブロック含む
有機物少量含む 13層に比べ粘性弱い 細砂少量含む(B209高まり盛土)
15:暗灰　N3/ 粘質シルト 14層と色同じ 砂粒、有機物より多く含む(B209高まり盛土)
16:オリーブ黒　5GY2/1 粘質シルト 12層と類似(第12－２層)
17:オリーブ黒　10Y3/1 粘質シルト 16層と比べ粘性強い 層の下層で細～中砂多く含む
東側では灰　10Y6/1のシルトブロック含む(第12ｂ層)
18:暗緑灰　10GY3/1 粘質シルト 層上半に細～中砂の塊があり粘性17層と同じ
19:暗緑灰　5G3/1 粘質シルト 西側では細～中砂ブロック状に多く含む
17層に比べ粘性強い 極細砂少量含む
20:緑黒　5G2/1 極細砂混粘質シルト　19層に比べやや暗い色調 粘性より弱い
21:オリーブ黒　10Y3/1 粘質シルト 20層に比べ粘性非常に強い
22:暗オリーブ灰　5GY3/1 粘質シルト 層下半で細～中砂やや多く含む
24層に比べ粘性強い
23:緑黒　7.5GY2/1 シルト～中砂 層全体で細～中砂多く含む
24層に比べ粘質シルト多い(第13層)
24:灰オリーブ～黒 5Y4/2～5Y2/1 粘質シルト～中砂 西から東へと色調暗くなる
中砂多く含む（第13ｂ層）
25:緑黒　10GY2/1 粘質シルト 24層に比べ粘性強い 細～中砂層上半に少量含む(第13ｂ層)

B199高まり（１：40）　B200溝（１：40）　B203 高まり（１：40）




1:灰オリーブ 5Y4/2 極細砂混シルト
ラミナ堆積(レンズ状) 層全体に有機物10%程混じる(第11ｂ層)
2:灰　N5/ シルト 低い部分に極細砂主体とする
砂少量堆積 また植物遺体多く含む(第11ｂ層)
3:灰　N5/ シルト 部分的に極細砂のラミナあり
層全体に極細～細砂ラミナ状に少量混じる(第11ｂ層)
4:灰　10Y4/1 粘質シルト 極細砂層全体に少量含む
203高まり以東は植物遺体少量含む(第11ｂ層)
5:灰　10Y4/1 粘質シルト ６層に似るが、層全体に
極細砂のラミナ少量混じる(第11ｂ層)
6:灰　10Y4/1 シルト 層全体に灰白10Y7/2 極細～細砂やや多く含む
第12層のブロック(φ２～３㎝)層全体に少量含む(第11ｂ層)
7:オリーブ灰 10Y5/2 シルト 第12ａ層ブロック状に
層全体に入る(第11ｂ層)
8:暗灰　N3/ 粘質シルト ９層との層境不明確 層中に
カルシウム粒少量含む(φ１㎜)(第12ａ層)
9:暗灰　N3/ 粘質シルト ３㎜大のカルシウム粒多く含む(第12ａ層)
10:灰　N4/ 粘質シルト 鉄分含む しまり強い(第12ｂ層)

図55　第12面　遺構図（２）

路によって削平されている。

**A526 高まり**は、A527 水口以北に形成された高まりである。X ＝－ 149,840 以南では畦畔状、以北では幅が広くなだらかで、長さ約 23 m、幅約２～５m前後、高さ約 0.4 m前後である。北側は、第 13 面の A634 微高地を踏襲した形で、南側は、A532 微高地とのあいだを繋ぐように畦畔状に形成されている。また A526 高まりは、池島Ｉ期地区の 12 微高地として検出されている。

**A531、B244 高まり**は同一であり、長さ約 40 m、幅約２m、高さ約 0.3 m前後である。南南東から北北西にのび、更に調査区外にのびている。東側に水田畦畔が接続している。

**B209 高まり**は、B225 微高地の東端に形成されており、長さ約 35 m、幅約３m前後、微高地側の高さは約 0.2 m、水田面からの高さは約 0.6 mである。X ＝－ 149,870 付近で東側に屈曲するが、高まり頂部が側溝内に入ってしまい、確認できなかった。図 55 は B209 高まりの断面図である。断面の１～ 12 層まではラミナを含む第 11 ｂ層の自然堆積層であり、13 ～ 16 層までは第 12 層に対応する。そのうち、14、15 層は高まりの盛土と考えられ、16 層は高まり造成前に形成された土壌層である。

**B241・B243 高まり**は、B225 微高地の西端に形成されており、長さ約 35 m、幅約３m前後、微高地側の高さは約 0.2 m、水田面からの高さは約 0.6 mである。B209 高まりと同様に盛土によって形成されており、第 11 ｂ層に覆われていた。

上述したように微高地は、自然地形の変遷の結果、形成されたものであるが、高まりはその形状や形成される土によれば、盛土による人為的なものと判断される。また、微高地はある程度、その形を成形されていると考えられ、やや南北ラインを志向し、06 － 2 調査区側では、X ＝－ 149,870 以北は北北西に方向を変化させる。微高地の成形は水田部分を広げ、水をまわす目的によって行われ、高まりは微高地から水田への土砂流入を防ぐと同時に、それ自体が微高地成形によって生じた土を盛ったものである可能性が考えられる。よって、第 12 面では、自然地形を少ない範囲で改変しつつ、利用した水田経営が考えられる。

溝と付属の高まりについて（図 55 ～ 57、図版 16・17）

溝は微高地上でのみ３条が確認された。

B199・B201・B203・B205 高まり、B200・B204 溝は、B501 微高地の東側に位置する。調査区外に分断されているが、B201・B203・B205 高まり、B200・B204 溝は同一の遺構である。

**B199 高まり**は検出長約 30 m、幅約１m、微高地からの高さ約 0.1 m、溝底からの高さ約 0.5 mである。主軸はX＝－ 149,868 ライン以南は南北であるが、以北は北東にのび、X＝－ 149,858 ライン以北は北西にのびる。B203 高まり、B200・B204 溝も同様である。

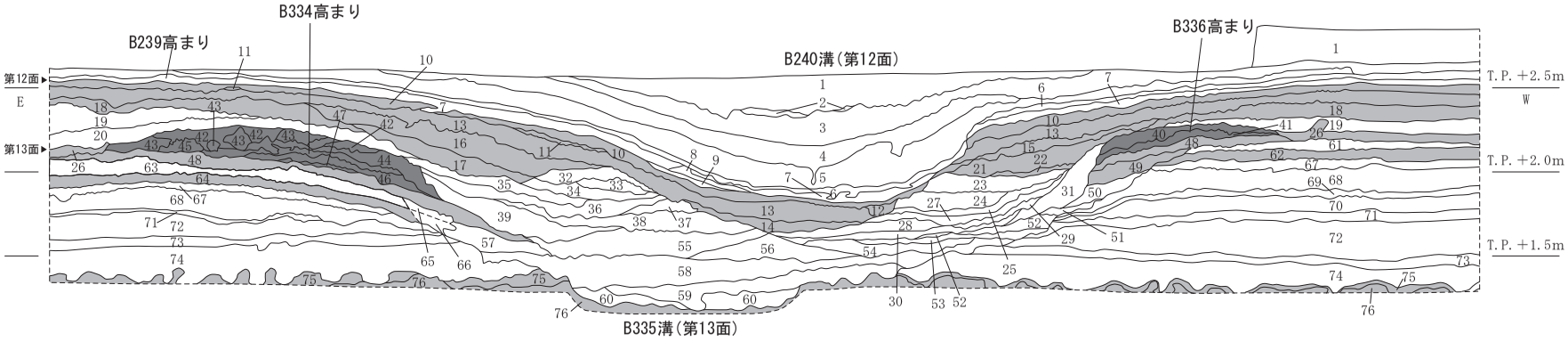
**B203 高まり**は検出長約 30m、幅約 0.5m、田面からの高さ約 0.1m、溝底からの高さ約 0.3m である。

両高まりとも、断面観察の結果からは盛土であるとの確証は得られなかった。また、水田域Ｅの畦畔はこの高まりに接続しており、高まり以東が水田域となっていると考えられる。

**B200・B204 溝**は検出長約 30m、幅約１m である。埋土は１～７層まで細分されたが、１～６層までは第 11 ｂ層の堆積である。７層は第 11 ｂ層とは異なって暗色の度合いが強く、第 12 層のブロックが層全体に混じっている状況が観察されたため、溝機能時の堆積と考えられる。

これらの高まりと溝の関係は、堤と溝の関係と考えることができ、溝の機能としては、東側の水田に伴う取排水の溝であると考えられる。

また、**B224 石**としたものが B199 高まりの直上で確認された。石は、長軸 0.33 m、短軸 0.23 m、




B335溝・B240溝断面（１：40）

0　1:40　1m

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1:明青灰 | 5BG7/1 | 粘質シルト | (第11ｂ層) |
| 2:淡黄 | 5Y8/4 | 細～中砂 | (第11ｂ層) |
| 3:青灰 | 5BG6/1 | 粘質シルト | 極細砂のラミナあり(第11ｂ層) |
| 4:緑灰 | 10G6/1 | 粘質シルト | 極細砂のラミナあり 有機物ラミナ状に含む(第11ｂ層) |
| 5:オリーブ灰 | 2.5GY6/1 | 粘質シルト | (第11ｂ層) |
| 6:明緑灰 | 10GY7/1 | 粘質シルト | 極細砂のラミナあり(第11ｂ層) |
| 7:オリーブ灰 | 2.5GY6/1 | 粘質シルト | (第11ｂ層) |
| 8:緑灰 | 7.5GY5/1 | 粘質シルト | 中～粗砂少量含む(第11ｂ層) |
| 9:灰 | 10Y6/1 | 粘質シルト | (第11ｂ層) |
| 10:灰 | N6/ | 粘質シルト | 上部に有機物の薄層挟む(第12層) |
| 11:明オリーブ灰 | 2.5GY7/1 | 粘質シルト | (第12層) |
| 12:灰 | 10Y6/1 | 粘質シルト | (第12層) |
| 13:暗青灰 | 10BG4/1 | 粘質シルト | 有機物ブロック状に含む(第12層) |
| 14:灰 | 7.5Y5/1 | 粘質シルト | 炭酸Caの結核あり　粗砂多く含む(第12層) |
| 15:灰 | N5/ | 粘質シルト | 有機物ブロック状に含む(第12層) |
| 16:緑灰 | 10G5/1 | 粘質シルト | (第12層) |
| 17:青灰 | 5BG6/1 | 粘質シルト | (第12層) |
| 18:緑灰 | 10G5/1 | 粘質シルト | 炭化物微量に含む(第12層) |
| 19:青灰 | 5BG5/1 | 粘質シルト | (第12ｂ層) |
| 20:緑灰 | 5G5/1 | 粘質シルト | (第12ｂ層) |
| 21:青灰 | 5BG5/1 | 粘質シルト | 炭化物微量に含む(第12層) |
| 22:青灰 | 10BG5/1 | 粘質シルト | 炭酸Ca結核あり(第12層) |
| 23:青灰 | 5BG6/1 | 粘質シルト | 炭酸Ca結核あり 炭化物微量に含む |
| 24:緑灰 | 5G6/1 | 粘質シルト | ラミナあり |
| 25:灰白 | 5GY8/1 | 粘質シルト | |
| 26:灰 | N4/ | 粘質シルト | (第13層) |
| 27:灰 | 7.5Y6/1 | 粘質シルト | 有機物層状に含む |
| 28:灰白 | 10Y8/2 | 砂礫 | (φ２～３mm大中心) |
| 29:緑灰 | 10G6/1 | 粘質シルト | ラミナあり |
| 30:灰 | 5Y5/1 | 粘質シルト | |
| 31:明緑灰 | 10GY7/1 | 粗砂混シルト | |
| 32:青灰 | 10BG6/1 | 粗砂混粘質シルト | |
| 33:灰白 | 10Y7/2 | 砂礫 | |
| 34:青灰 | 5B6/1 | 粘質シルト | 極細砂ラミナあり |
| 35:青灰 | 5BG6/1 | 粘質シルト | 粗砂少量含む |
| 36:明緑灰 | 10G7/1 | 粘質シルト | 極細砂ラミナあり |
| 37:灰 | N6/ | 細砂混粘質シルト | |
| 38:青灰 | 5BG6/1 | 細砂混粘質シルト | 炭酸Caの結核あり |
| 39:緑灰 | 10G6/1 | 粘質シルト | 植物遺体含む |
| 40:青灰 | 10BG5/1 | 細砂混シルト | 第14-２層ブロック状に含む(B336高まり盛土) |
| 41:緑灰 | 10G5/1 | 細砂混シルト | (B336高まり盛土) |
| 42:緑灰 | 10GY6/1 | 粘質シルト | 第14-２層ブロック状に含む(B334高まり盛土) |
| 43:暗灰 | N3/ | 粘質シルト | (第14-２層ブロック土)(B334高まり盛土) |
| 44:緑灰 | 10G6/1 | 細砂混シルト | (B334高まり盛土) |
| 45:灰白 | 5Y7/2 | 細砂混シルト | (B334高まり盛土) |
| 46:青灰 | 5BG6/1 | 細砂混シルト | 細砂微量に含む(B334高まり盛土) |
| 47:淡黄 | 5Y7/4 | 極細砂 | (B334高まり盛土) |
| 48:緑灰 | 5G5/1 | 粘質シルト | (第13層) |
| 49:青灰 | 10BG5/1 | シルト | 極細砂微量に含む(第13層) |
| 50:青灰 | 5BG5/1 | 極細砂混シルト | |
| 51:緑灰 | 10G5/1 | 粘質シルト | |
| 52:青灰 | 5BG5/1 | 粘質シルト | |
| 53:青灰 | 5BG6/1 | 粗砂混シルト | |
| 54:緑灰 | 10G5/1 | 粘質シルト | 炭化物ブロック状に含む |
| 55:緑灰 | 10G5/1 | 細砂混粘質シルト | |
| 56:淡黄 | 5Y7/3 | 砂礫 | (φ２～８mm大中心) |
| 57:淡黄 | 7.5Y8/3 | 砂礫 | (φ２～３mm大中心) |
| 58:淡黄 | 5Y8/3 | 砂礫混粘質シルト | 炭酸Ca結核あり |
| 59:灰白 | 10Y7/2 | 砂礫混粘質シルト | |
| 60:緑灰 | 10G6/1 | 粘質シルト | (ブロック土)　第14-2層のブロック５～10cm大含む |
| 61:明青灰 | 5BG7/1 | 粘質シルト | |
| 62:緑灰 | 10G5/1 | 粘質シルト | (第13層) |
| 63:明緑灰 | 10G7/1 | 粘質シルト | |
| 64:緑灰 | 10G5/1 | 粘質シルト | (第13層) |
| 65:緑灰 | 10G5/1 | 粘質シルト | |
| 66:緑灰 | 5G6/1 | 粘質シルト | |
| 67:緑灰 | 5G6/1 | 粘質シルト | (第13ｂ層) |
| 68:灰白 | 7.5Y8/2 | 極細砂～細砂 | (第13ｂ層) |
| 69:青灰 | 5BG6/1 | 粘質シルト | (第13ｂ層) |
| 70:淡黄 | 7.5Y8/3 | 砂礫 | (φ２～３mm大中心)(第13ｂ層) |
| 71:青灰 | 10BG5/1 | 粘質シルト | (第13ｂ層) |
| 72:灰白 | 5Y8/2 | 中～極粗砂 | (第13ｂ層) |
| 73:灰 | 10Y5/1 | 粘質シルト | 植物遺体含む(第13ｂ層) |
| 74:灰 | 7.5Y5/1 | 粘質シルト | (第13ｂ層) |
| 75:オリーブ灰 | 2.5GY5/1 | 細砂混シルト | (第14-１層) |
| 76:暗灰 | N3/ | 粘質シルト | (第14-２層) |

図 56　第 12 面　遺構図（３）

高さ 0.08 mで絹雲母片岩である。石は、第 12 面検出段階で半ば以上が露出し、下方は第 12 層に埋没していた。掘り込みは確認されなかったため、高まりを造成する際に置いて埋めた状況が想定される。A526・A528 高まり付近からも、長軸 0.21 m、短軸 0.14 m、高さ 0.06 mの花崗岩が出土している。また、東接する 04 －２調査区でも、同じような状況で石が出土しており（廣瀬編 2008）、共通性があるとも考えられる。

**B240 溝**は先述のように B225 微高地の中央に形成され、検出長約 37m、幅約５～ 7.5m、深さ約 0.6m 前後で、X ＝－ 149,860 以南では南北方向、以北では南東－北西方向に主軸を置き、地形的に南から北に流れていたと考えられる。溝の東肩に沿って **B239 高まり**が形成され、検出長約 37m、幅約２m、高さ約 0.1m である。断面図から、溝、高まりは第 13 面の B335 溝と B334 高まりを踏襲していることがわかる。ただ、B239 高まりは B334 高まりの影響を受けて自然に盛り上がっているものとも考えられる。西肩では高まりは確認されなかった。

溝の断面は図の部分では両肩ともなだらかに傾斜し、椀状にくぼむ形となっているが、全体を通して見ると、西肩がゆるい傾斜で、東肩は急な傾斜になっている。溝埋土は基本的に第 11 ｂ層で埋没しており、１～９層までは第 11 ｂ層である。溝底部にのみ７層の一部と８・９層が堆積しており、流水堆積ではあるが、確実に機能時の堆積であるとは言い切れない。

第 12 面の最終埋没ラインは、10 層の上面で、10 ～ 18・21・22 層は第 12 層である。それより下層の B335 溝は、主に第 12 ｂ層で埋没している。ラミナが観察される 24・34・36 層は本来、溝の形を踏襲してレンズ状に堆積していたと考えられるが、第 12 層によって削られている。よって、第 12 面最終埋没にいたるまでに溝は何回かの再掘削が行われたと考えられる。

また、B240 溝では調査区南端の法面で、植物遺体、珪藻化石分析を行なった（表４・５、註２）。断面１・２は６～９層に対応する第 11 ｂ層である。断面３・４は 10 ～ 14 層に対応する溝埋土である。検出数、同定種は各表に示したとおりである。珪藻化石に関しては、断面３・４からの検出数が少なく、古環境を復元しづらいが、断面１・２と似たような状況を示している。以下に全体の特徴を述べる。

塩分濃度を示す種は、貧塩－不定性種が 32％程度、貧塩－好塩性種が２％である。よって、溝内の塩分濃度は高くないと考えられ、閉鎖水域ではない可能性が指摘できる。

酸性、アルカリ性を示す種は、好アルカリ性種が 32％、好酸性種 22％程度である。酸性を示す割合が高ければ、湿地環境であることを指摘できるが、分析結果からはどちらともいえない。

流水性を示す種は、流水不明種が 46％、流水不定種 40％である。その多くは水生植物に付着するものであり、陸生珪藻は５％以下しか検出されなかった。よって、溝内の古環境は、流水域もしくは止水域で、あまり乾燥しない状況にあったことがわかる。

**B198 溝**は、B501 微高地の北側で検出され、検出長 4.9m、幅約 0.3 ～ 0.7m、深さ約 0.2m である。B197 流路とは高さの違いがあるが平面上は接続しており、接続部から北東方向にのびる。埋土の大半を占める１層は、基本的には第 11 ｂ層の堆積であり、おそらくは B197 流路との接続部分から溝に流れ込み、埋没させた氾濫堆積物であると考えられる。そのため、溝上部の堆積はやや削平されていると考えられるものの、溝底の状況はパックされて良好に遺存していた。

溝底は北側に向かって若干低くなっており、最大 0.04m の差がある。また、溝底には長軸約 0.2m、短軸約 0.08m、深さ約 0.03m、平面菱形を呈し、断面は逆三角形や四角形の凹みが多く確認された。溝の底幅に長軸をあわせて存在し、その形状から鋤痕跡と考えられる。埋土は中砂を主体としてシルト

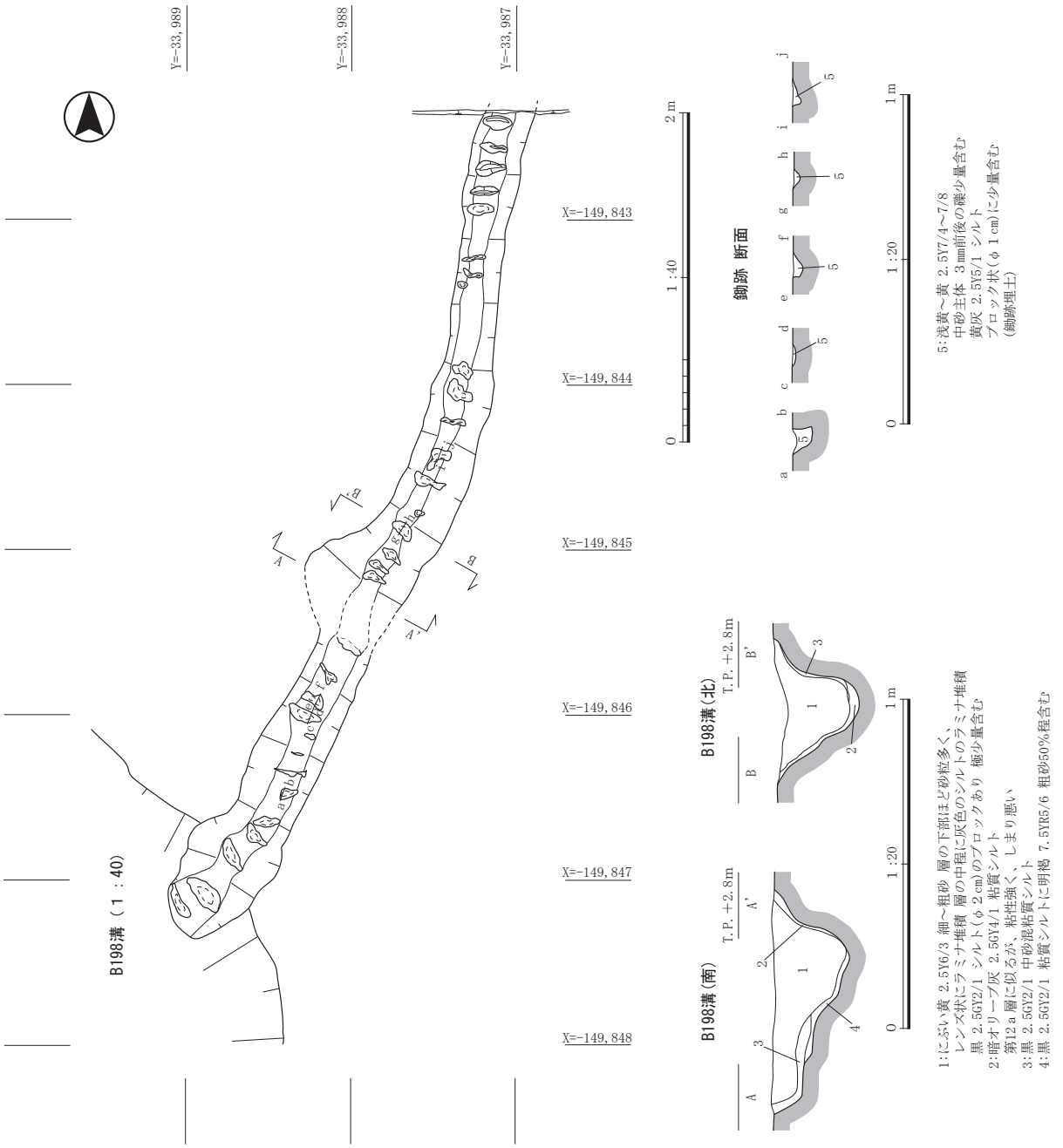



**図 57　第 12 面　遺構図（４）**

ブロックが混じっており、４層と共通している。これらの４・５層は１層による埋没以前に堆積しており、機能時堆積の層と考えられる。よって、４・５層に含まれる砂は１層以前に溝を埋めた堆積であり、溝は機能時に流水していたことがわかる。また、鋤痕跡は溝開削時、もしくは溝の再掘削時のものであると考えられる。

水田と畦畔について（図版 15 ～ 17）

水田は５ヶ所で確認された。池島Ｉ期地区Ｋ地区に続く９筆が確認された水田域Ａ、畦畔のみが確認された水田域Ｂ、３筆が確認された水田域Ｃ、１筆が確認された水田域Ｄ、04 －２調査区につながる部分で畦畔のみが確認された水田域Ｅである。

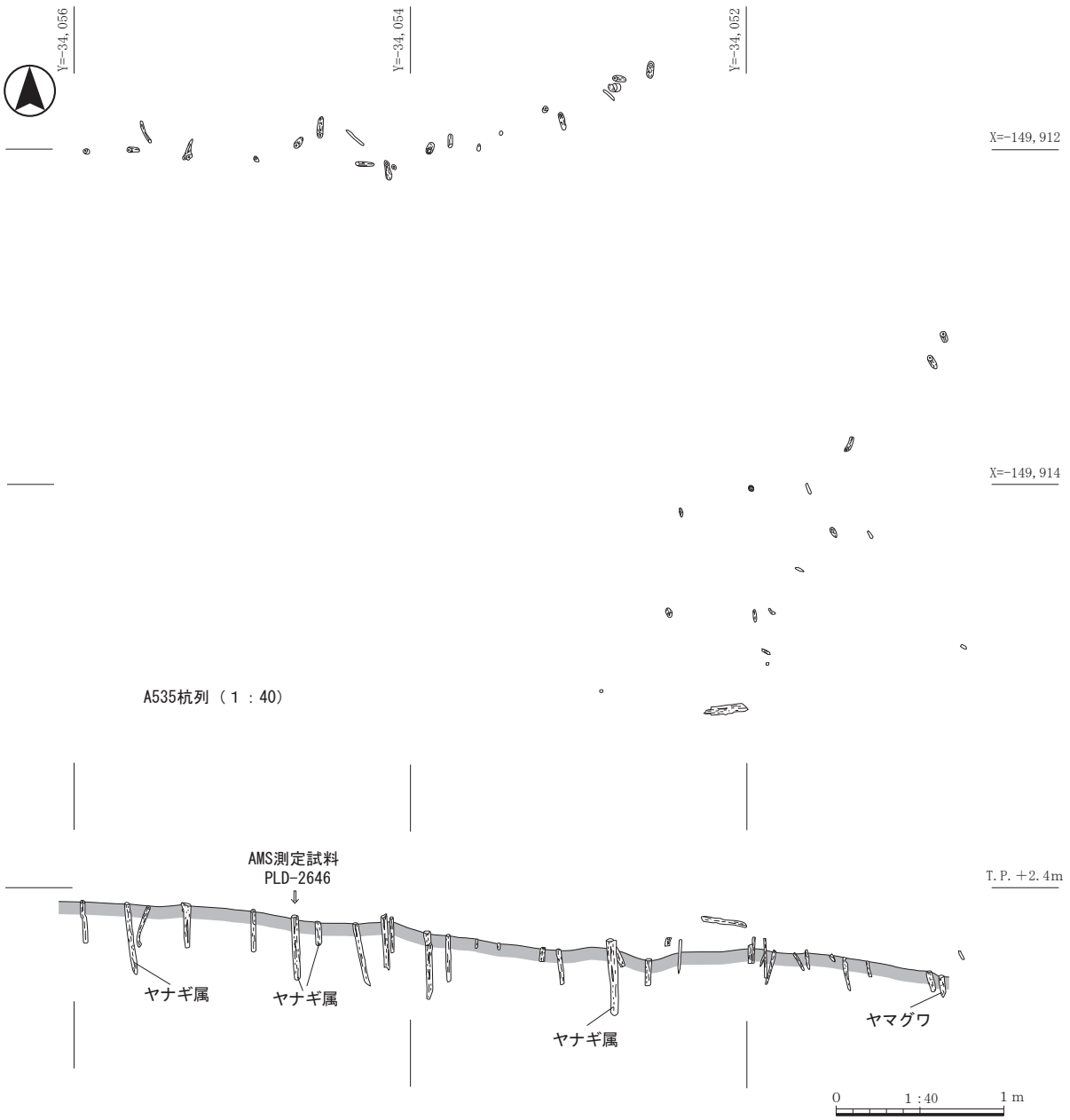



図 58　第 12 面　遺構図（５）

**水田域 A** は、全体に東から西にむかって低くなっており、東側では取水口と思われる A527 水口を検出した。池島 I 期地区でも K 地区は東から西、南から北に水が回されたことが述べられており、矛盾しない。畦畔の検出長は約３～ 15m で一定ではなく、そのため不整形となるが、基本的には主軸を等高線にあわせて形成している。幅は約 0.5m 前後、高さは約 0.05m 前後であるが、**A510 ～ A513 畦畔**は異なり、幅約 1.8m 前後、高さ約 0.1m 前後で、A511 畦畔と A515 畦畔の接続部では、約 0.2m の比高差がある。その規模から支線となる大畦畔と考えられるが、第 13 面でも同じ場所に畦畔が形成されており、A526 高まりと同様に第 13 面の高まりを踏襲した可能性がある。

**水田域 B** では畦畔を確認したが、水田を復元するには至らなかった。畦畔は検出長約３m、幅約 0.5m、高さ 0.05m である。A527 水口の存在から A509 流路の部分が第 12 面段階でも流路であった可能性があり、畦畔も検出されたことから、流路際に形成された水田とも考えられる。また、現在調査中の南側 07 －２調査区では水田域 B の続きが検出されている。

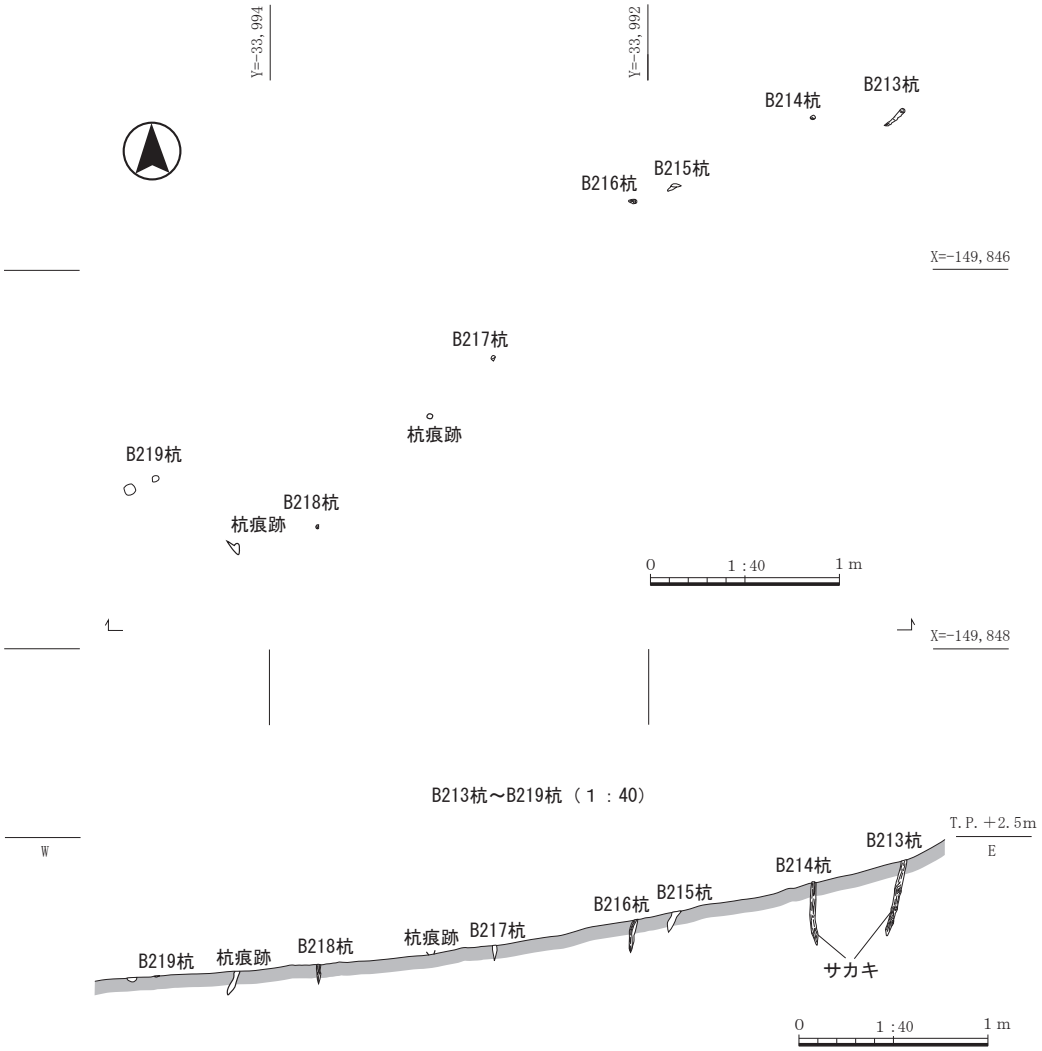



図 59　第 12 面　遺構図（６）

**水田域 C** では、A531・B244 高まりと B241・B243 高まりにはさまれて水田が形成され、南から北にむかって低くなっており、水口などは確認されないが、南から北へ水を回したと考えられる。畦畔は検出長約 9 m、幅約 0.5m 前後、高さ約 0.1m 前後である。1 筆は南北約 25 ～ 30m、東西約 9 m で、長方形を呈し、標高差の激しくなる部分で東西畦畔を形成したと考えられる。

**水田域 D** では、B209 高まりに接続する形で畦畔が検出され、B500 水口も検出された。流路部は若干第 12 層が削られている可能性があるが、現状では西から東にむかって低くなっている。**B210・B223 畦畔**は検出長約 20m、幅約 0.5m 前後、高さ約 0.05m 前後である。東にのびる **B222 畦畔**は途中で途切れるような状況で、B197 流路によって削平されていると判断される。B197 流路部分は第 13 面段階でも流路であるが、第12面ではやや安定した状況であり、その部分に水田が形成されたと考えられる。

**水田域 E** では、B201・B205 高まりに接続する畦畔を確認した。東接する 04 － 2 調査区では B206 畦畔と連続する畦畔が確認されているが、南側に屈曲し 1 筆としては復元できない。東西長は 04 － 2 調査区とあわせると約 5 m である。幅約 0.7m 前後、高さ約 0.05m 前後である。

杭について（図 58・59、図版 15・16）

**A535 杭列**は、大きく分けて北側の 21 本が長軸約 3.2m、短軸約 0.3m で東西方向にのび、南側の 17 本が長軸約 2.6m、短軸約 1 m でやや南西－北東方向にのびる。杭の検出面は第 12 面ではなく、第 11

ｂ層下部のシルト～細砂の面である（B197 流路の４層）。本来は第 12 面の畦畔を検出するために行なった、第 12 層直上に堆積する第 11 ｂ層のシルト層内の精査で検出した。A536 足跡も同様である。足跡は第 11 ｂ層の中砂～極粗砂（B197 流路の３層）で埋没しており、踏み込まれたのがシルト層上面か、中砂～極粗砂が堆積してからかは明らかではないが、砂の堆積は約１ｍあり、その上面からの踏み込みでないことは明らかである。よって、踏み込みの時期は４層上面もしくは、３層が浅く堆積していた時期に限られる。細かく図示しえなかったが、杭列周辺にも足跡が多く存在しており、両者が関係を持っている可能性も考えられる。杭列の機能に関しては、杭以外の施設が検出されなかったため、明らかではない。樹種については、サンプル採取した６本のうち、５本がヤナギ属、１本がヤマグワであった。

B197 流路の北東側では、**B213 ～ B219 杭列**が検出された。杭列は痕跡を含めて９本が長さ約４ｍにわたって検出され、北東－南西方向にのびる。A535 杭列とは異なって、検出面は第 12 面であるが、第 11 ｂ層下部の層が削られている部分もあったため、明らかではない。杭は長さ 0.3m 前後、幅 0.03m 前後で、先端を加工しているが、表面は皮が残存していた。

杭列の機能に関しては、杭以外の施設が検出されなかったため、明らかではないが、東接する B501 微高地上で B198 溝が検出されており、B198 溝の取排水に関係があった可能性がある。樹種については、サンプル採取した２本はともにサカキであった。

立木、流木について（図版 16）

第 11 ｂ層中、および第 12 層直上で、立木、流木を検出した。前述した「第 12 － 1 層下部」との関係性があるため、特に記述する。立木、流木の差は根が生えているかどうかで判断し、どの面に帰属するかについては、根株と面の関係から判断した。

まず、流木に関しては、その全てが第 11 ｂ層中に埋没していたため、第 11 ｂ層のいずれかの時期に流されてきたものと考えられる。立木は、B501 微高地上で確認された **B226・B227・B229・B264 立木**と、A531 高まりで確認された **A699・700・701 立木**は第 12 層中に根株が入り込んでいることから、第 12 面段階のものと考えられる。他の立木については、状態が良くないものもあり、判断が難しいが、水田域Ｄの北側で確認された **B236 立木**は第 11 ｂ層中に根株が存在し、第 12 面検出時には根株が面から浮いている状態であったため、第 11 ｂ層中に生えたものと判断された。B236 立木の生えた時期は「第 12 － 1 層下部」の面であったと考えられ、ある程度、地面が安定する時期を経ながら第 11 ｂ層が堆積していったことが想定できよう。樹種については、A699・700・701 立木、B230 流木、B232 ・236・259 立木がヤナギ属、B231 立木がカヤ、B226・227・229・258・260 ～ 262 立木がヤマグワ、B264 立木がケヤキ、ヤナギ属とヤマグワが大半を占めていた。

また、杭、立木については、計３点を AMS 測定にかけ、年代測定を行なった（表３、註３）。A699 立木の試料でやや古い年代が測定されたが、A701 立木、A535 杭列の試料の暦年代較正値においては、同じ年代と推測された。

地表面直上検出土器について（図 60、図版 17）

微高地上の第 12 層直上から、土器 435・436・437（図 67）、460・463（図 68）が出土した。第 11 ｂ層によって覆われていたため、第 12 面廃絶時の状況を残している。そのうち、土器 435・437・460 については、残りが良好であったため出土状況図を作成した。特に土器 460 はほぼ完形に復元でき、もとは微高地上に正置されていた可能性もある。（乾）

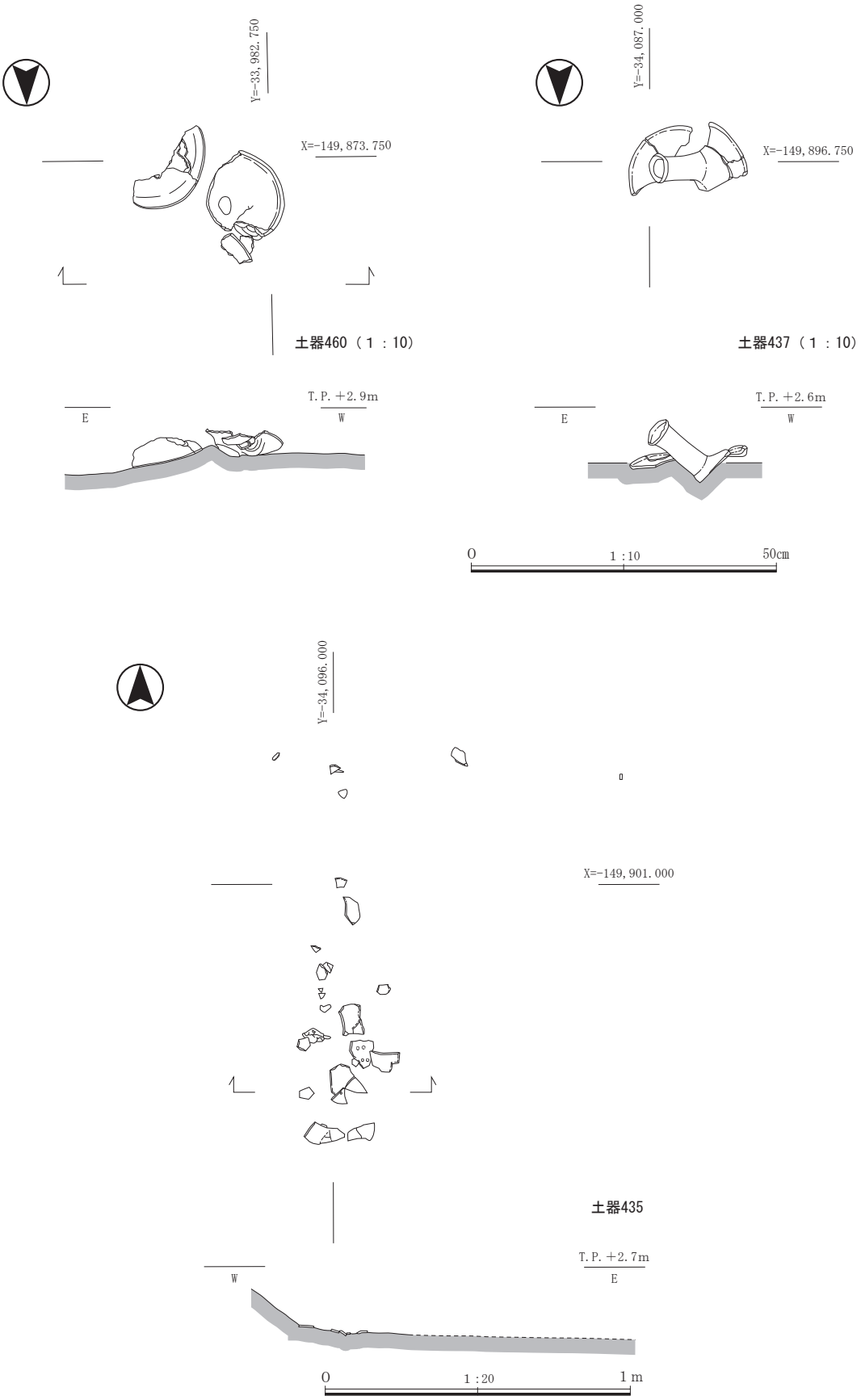



図 60　第 12 面　遺構図（7）

第 12 面ベース（第 12 ｂ面）（図 61、図版 18）

遺構面の状況と検出遺構

第 12 ｂ面は、土壌化層の第 12 ａ層を除去して検出した遺構面である。また、前述したように第 12 ａ層は部分的に細別できたため、当面で部分的に記述することとする。

第 12 層は、A532、B225 微高地で細分が可能であった。A532 微高地では第 12 － 1 ～ 12 － 3 層に細分したが、遺構は確認されなかった。B225 微高地では、第 12 層である灰色の粘土～シルトの直上に、灰色の粘質シルトがラミナ状に堆積し、その上部に植物を多く含む黒褐色の粘質シルトが堆積し、さらにそれを覆うように第 11 ｂ層が堆積していた。第 12 面としたものは第 11 ｂ層を掘削して検出した黒褐色の粘質シルトである。上記の灰色のラミナ状堆積を除去した部分を第 12 層下面とした。

地形は第 12 面と変化なく、全体に南から北へ低くなっている。第 12 ｂ層の堆積は調査区全体に及んでいるが、場所によってその層厚に違いがあり、約 0.1 ～ 0.5 ｍである。

遺構は、第 12 層下面遺構として畝溝、第 12 ｂ面遺構として畝溝、溝、ピットを検出した。以下、検出遺構について詳述する。

畝溝について（図 62・63、写真 38・39、図版 18）

畝溝は調査区中央の B225 微高地上の B243 高まりと B240 溝の間で検出された。第 12 層下面と第 12 ｂ面で検出され、両面ともほぼ同じような形で検出されており、その規模も同様である。第 12 層下面（図 62）の南側では畝部分と畝溝部分が検出されたが、畝部分は遺存状況が不良で、畝溝にあたる凹部分の間が畝であったと考えられる。そういった状況から、畝溝にのみ遺構番号をつけ記述する。

両面ともに、畝・畝溝は西南西－東北東方向にのび、長さ約 2 ～ 5 ｍ、幅 0.2 ～ 0.5 ｍ、畝溝の深さは約 0.05 ｍである。畝溝間の距離は約 1 ｍである。ただ、第 12 ｂ面で検出された畝溝は途切れる部分が多く、良好には遺存していない。畠にともなう耕作痕の可能性も考えられる。

畝および畝溝の作土はシルト質で砂礫等を含まない。畝溝（図 63）が検出された微高地の層序は下層から第 12 ｂ層が弱く土壌化した粘土～シルト（５層）、極細砂混シルト（４層）、極細砂混シルト（３層）、植物遺体・灰白シルト偽礫を含む極細砂混粘質シルト（２層）、第 11 ｂ層である粘質シルト・砂礫層（１層）である。このうち、４層は３層の細別で土質はほとんど変わらず、暗色の度合いで上下を区別した。２層は微高地上が水没するような環境下で泥質な堆積が進行していく過程で、葦葭などの植物が生えたのちに人為的な撹乱（耕作）によって形成された地層と考えている。この植物は層中で炭化しており、地層にラミナ状に本来含まれていたものであるが、耕作によって灰白シルトとともに細かく偽礫化している。

畝溝が検出された部分の B225 微高地は北東方向にやや低くなっており、畝溝底面のレベルも同様である。畝溝の底は断面観察では凹凸が顕著ではなく平滑である。また、畝溝部分については部分的に掘り下げを行なって平面的な調査を行なっているが、落ち込んでいる部分やベースの隆起などは観察できなかった。ただし、先に述べたように畠が検出された微高地では土壌が連続しているため暗色化しているベースの地層と判別することができなかった可能性もある。

畝・畝溝は北東方向に低くなる地形に対して北東－南西方向に配置させているが、南西側の高所から B240 溝に向かって若干放射状に並ぶ可能性もある。

畝、畝溝部分で行なった自然科学分析について（図 65・66）

検出された畝、畝溝部分の性格を考えることを目的にして、軟Ｘ線写真、珪藻化石、花粉、植物珪酸

図 61　第 12 b 面　平面図

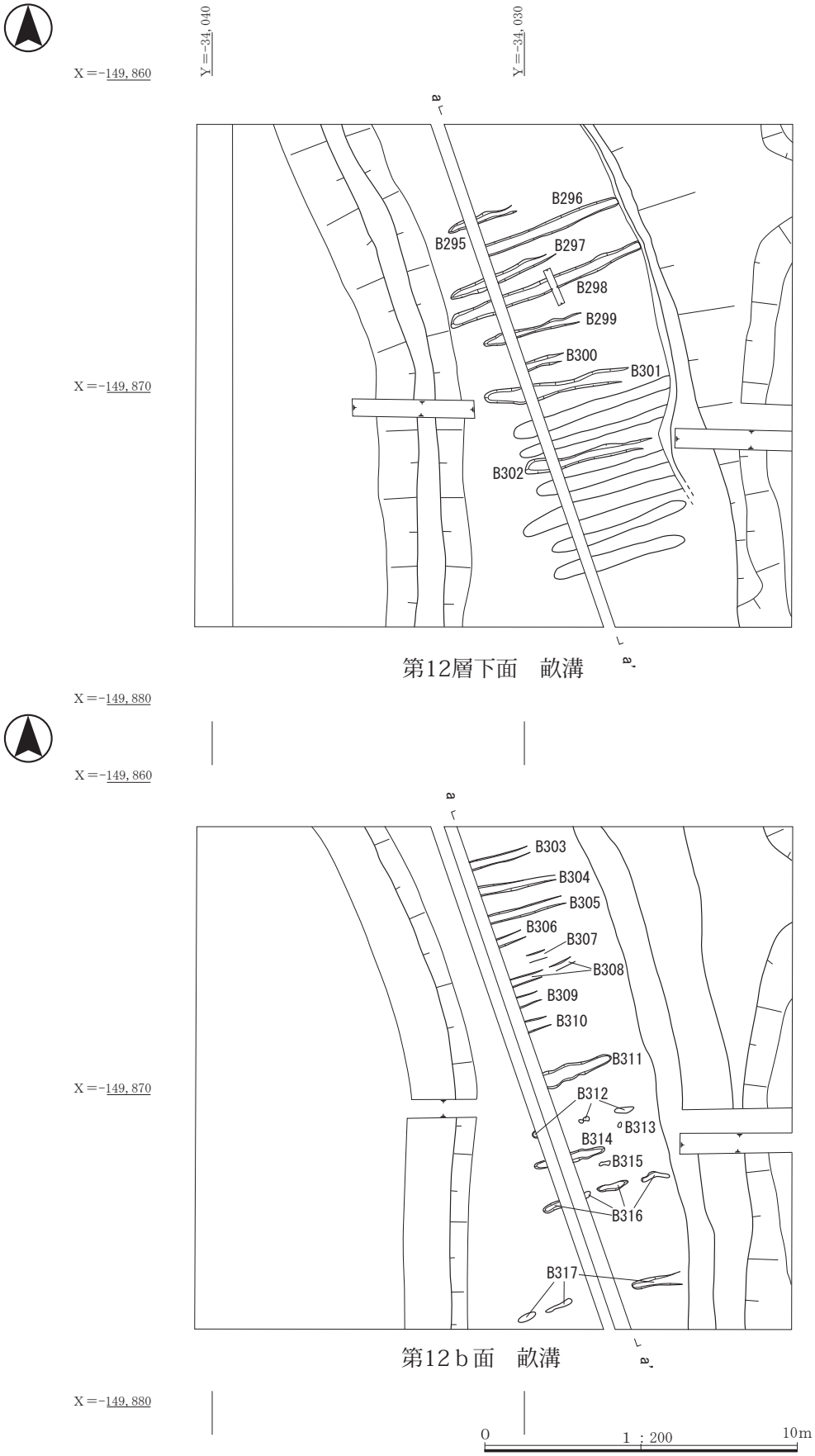
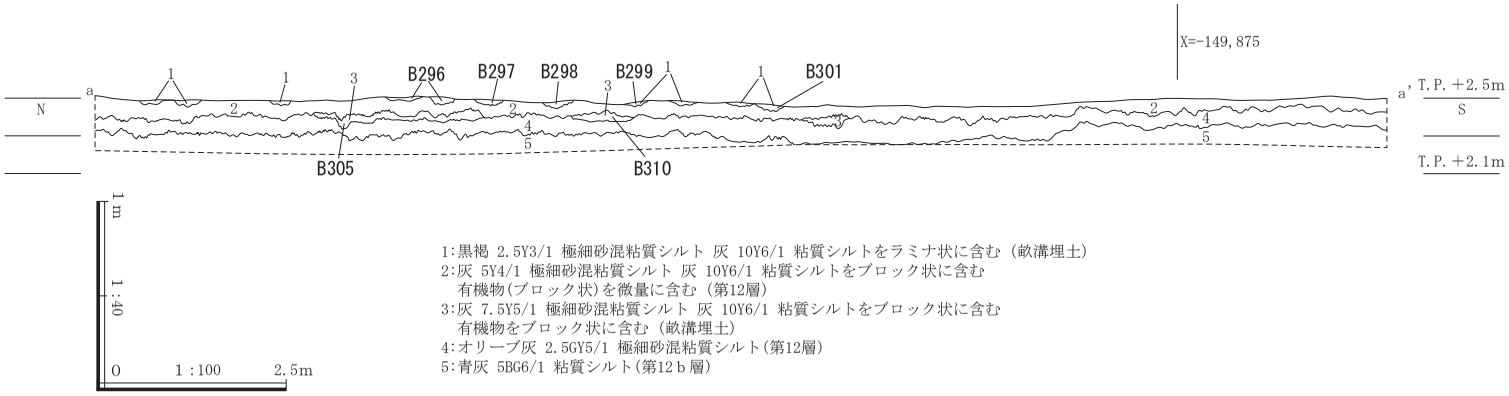



図 62　第 12 ｂ面　遺構図（1）




1:黒褐 2.5Y3/1 極細砂混粘質シルト 灰 10Y6/1 粘質シルトをラミナ状に含む（畝溝埋土）
2:灰 5Y4/1 極細砂混粘質シルト 灰 10Y6/1 粘質シルトをブロック状に含む
有機物(ブロック状)を微量に含む（第12層）
3:灰 7.5Y5/1 極細砂混粘質シルト 灰 10Y6/1 粘質シルトをブロック状に含む
有機物をブロック状に含む（畝溝埋土）
4:オリーブ灰 2.5GY5/1 極細砂混粘質シルト(第12層)
5:青灰 5BG6/1 粘質シルト(第12ｂ層)

畝溝　断面

図 63　第 12 ｂ面　遺構図（２）

写真 38　06 －２調査区　第 12 ｂ面　畝溝底部分
（南から）

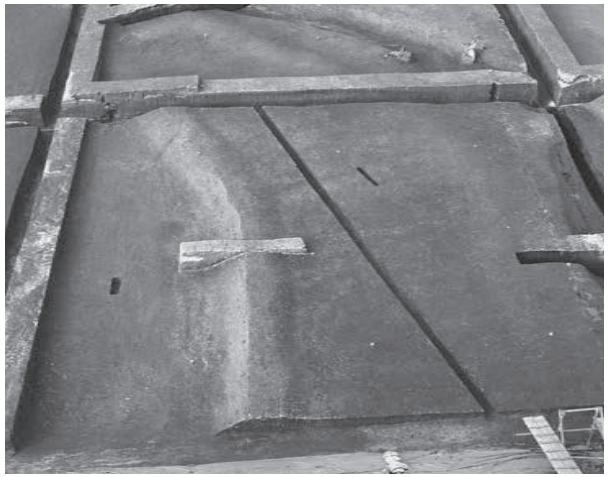


写真 39　06 －２調査区　第 12 層下面　畝溝検出状況
（南から）

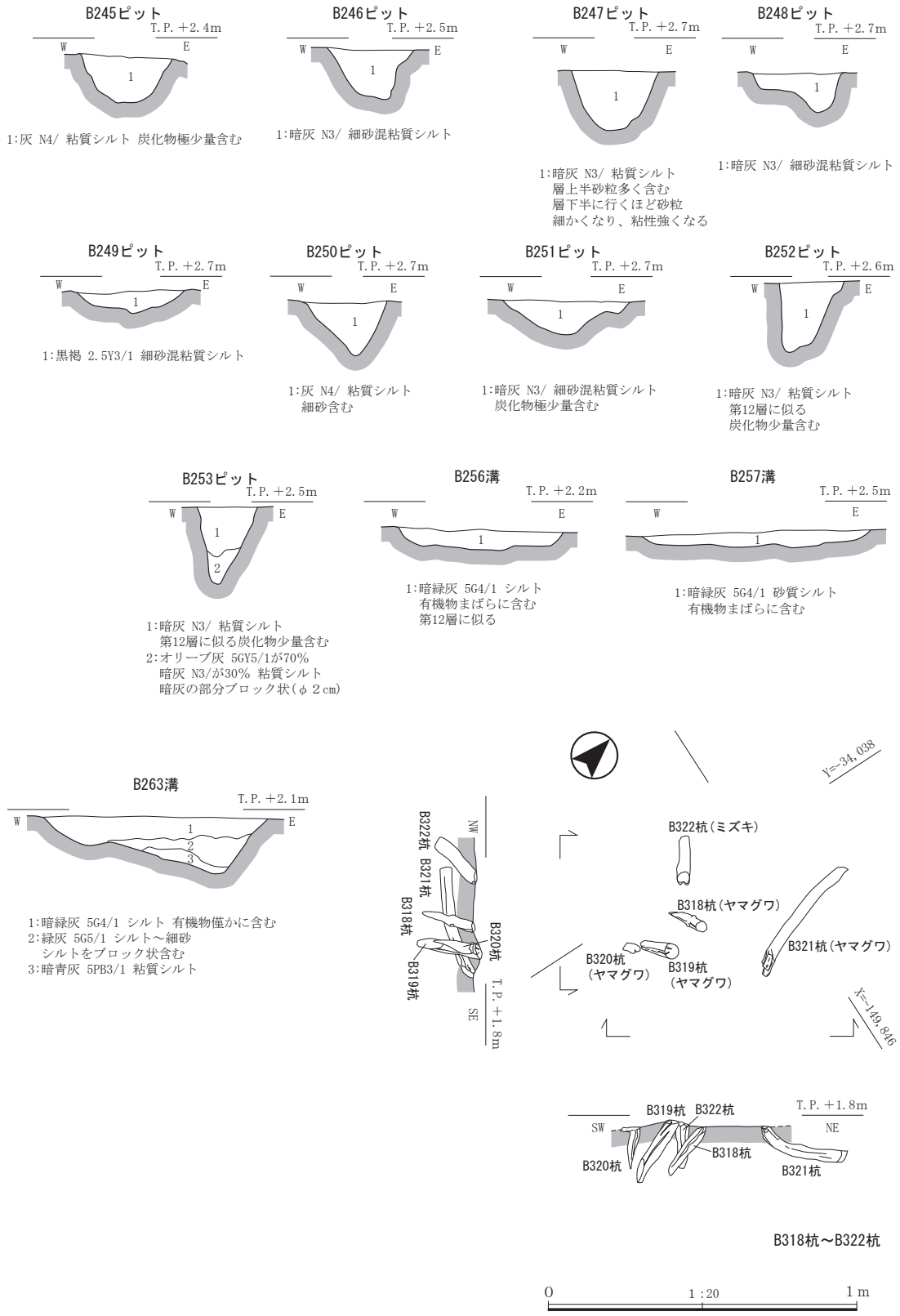



図 64　第 12 b 面　遺構図（3）

体分析を行なった。

軟Ｘ線写真分析では、畝、畝溝部分での堆積物、土壌構造についての観察を行なった（註４）。珪藻化石、花粉、植物珪酸体分析では、畝、畝溝部分の形成要因を明らかにする目的で行なった（註５）。

・軟Ｘ線写真分析

畝、畝溝部分ともに、細かいブロック土が認められ、よく攪拌された土壌であることが認められたが、畠作土に観察される粒団の発達がないことから、畠作土とは考えられず、水田作土の状況に近いと観察された。

・珪藻化石、花粉、植物珪酸体分析

珪藻化石分析では、畝、畝溝部分ともに陸生珪藻がやや多くみられ、好気的環境であったことがわかった。現在の畠作土では陸生珪藻が多く検出される。

花粉化石分析では、花粉化石の遺存状態が悪く、良好な観察結果が得られなかった。

植物珪酸体分析では、畝、畝溝部分ともに機動細胞珪酸体でイネ属が多くみられ、ほかにタケ亜科、ヨシ属がやや多くみられた。

溝について（図 64）

第 12 面の微高地上から確認されたものが 4 条、水田部分から確認されたものが 5 条である。

**B240 溝**は、第 12 面で検出された溝であるが、第 12 面でも記述したように、当面において再掘削が確認された。溝の形状などはほぼ変化がないが、北西部の溝底で B318 ～ B322 杭が検出された。

**B255 溝**は第 12 面の B204 溝の下層から検出され、長さ約 12 m、幅約 4 m、深さ約 0.4 mである。

**B257 溝**は B225 微高地上で検出され、長さ約 32 m、幅約 0.9 m、深さ約 0.05 mである。

**B256 溝**は、第 12 面の水田域 D 部分で、**B263・B323・B324・B325 溝**は水田域 C 部分で検出された。規模は幅約 0.3 m前後、深さ約 0.1 mで、南南東－北北西に走行する。帰属面、時期に関しては、一部に切り合いがみられるが、水田域 C 部分においては、第 13 層が露出しており、明確な帰属面がとらえられなかった。溝の性格は不明である。

水田について

B501 微高地南東で畦畔を確認し、水田域 F とした。検出された**B254 畦畔**は長さ約 1.5 m、幅約 0.4 m、高さ約 0.01 mであるが、畦畔周辺は、生痕と考えられる無数の凹凸によって遺構面が乱されており、そういった凹凸を検出した可能性がある。

杭について（図 64）

B240 溝の北西において**B318 ～ 322 杭**を確認した。長さ 0.1 ～ 0.4 m前後、幅 0.04 m前後で、大半は先端を加工している。杭の性格については不明であるが、溝の機能時に打ち込まれたと考えられる。樹種については、B318 ～ 321 がヤマグワ、B322 がミズキであった。

その他の遺構（図 64）

主に第 12 面の微高地部分においてピットを 15 基検出した。径 0.3 m前後、深さ 0.1 m前後で、平面で柱の並びは認められず、柱痕も検出されなかった。埋土は第 12 層に似る暗灰色のシルトで埋没しているものが多く、第 12 面のくぼみを検出した可能性もある。また、B225・B501 微高地部分では植物によると思われる生痕が多く検出されている。（乾・後川）

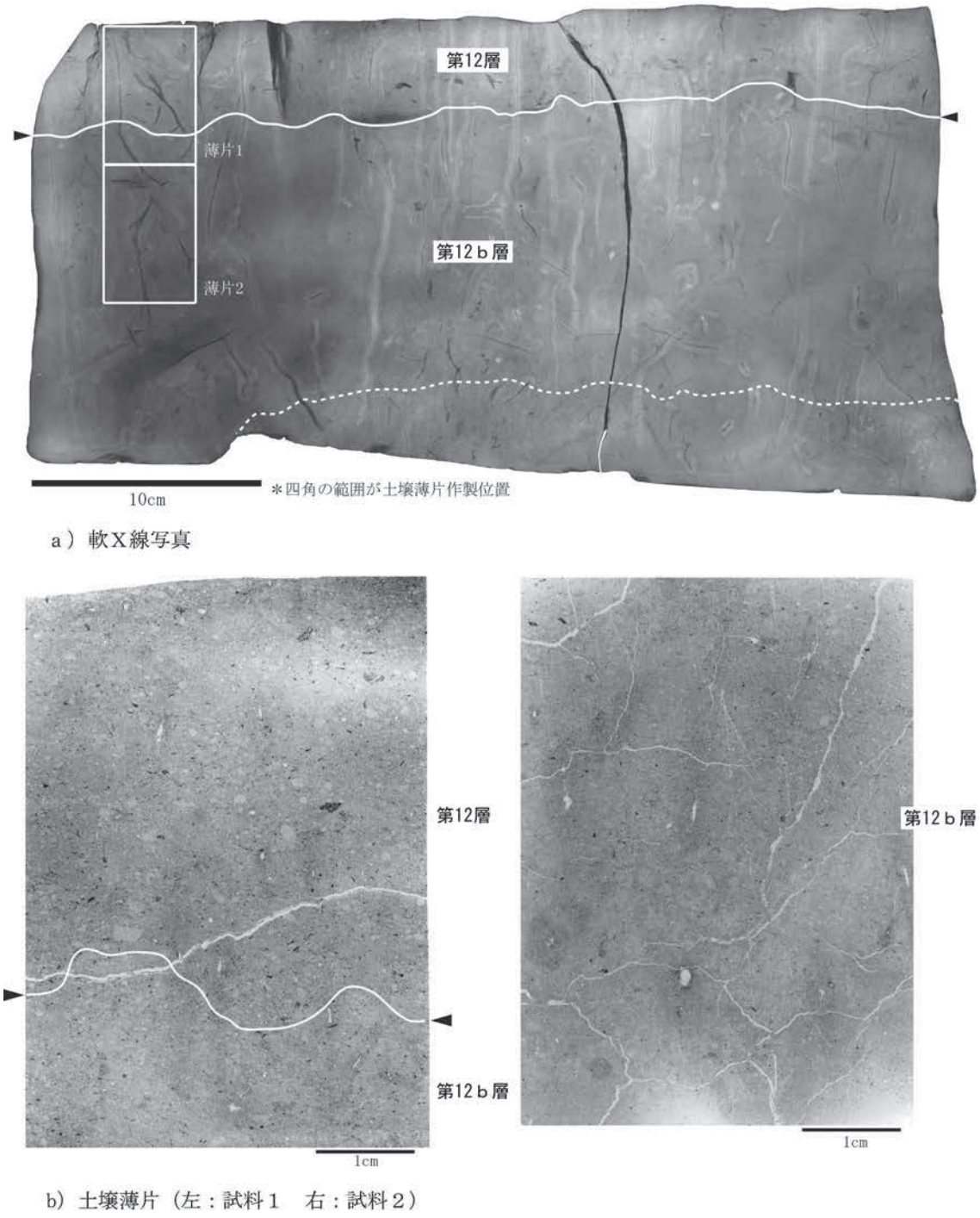



図 65　第 12 ｂ面　自然科学分析（１）

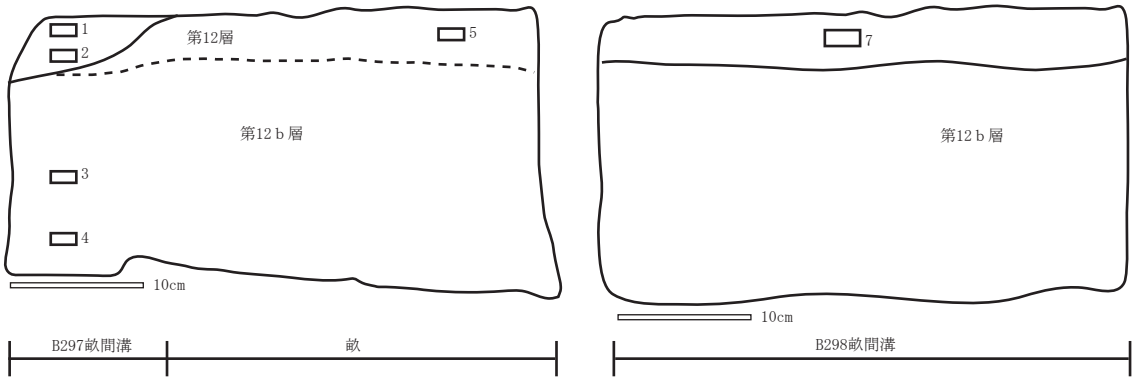
第 12 面出土遺物（図 67・68）

【02 － 1 調査区】

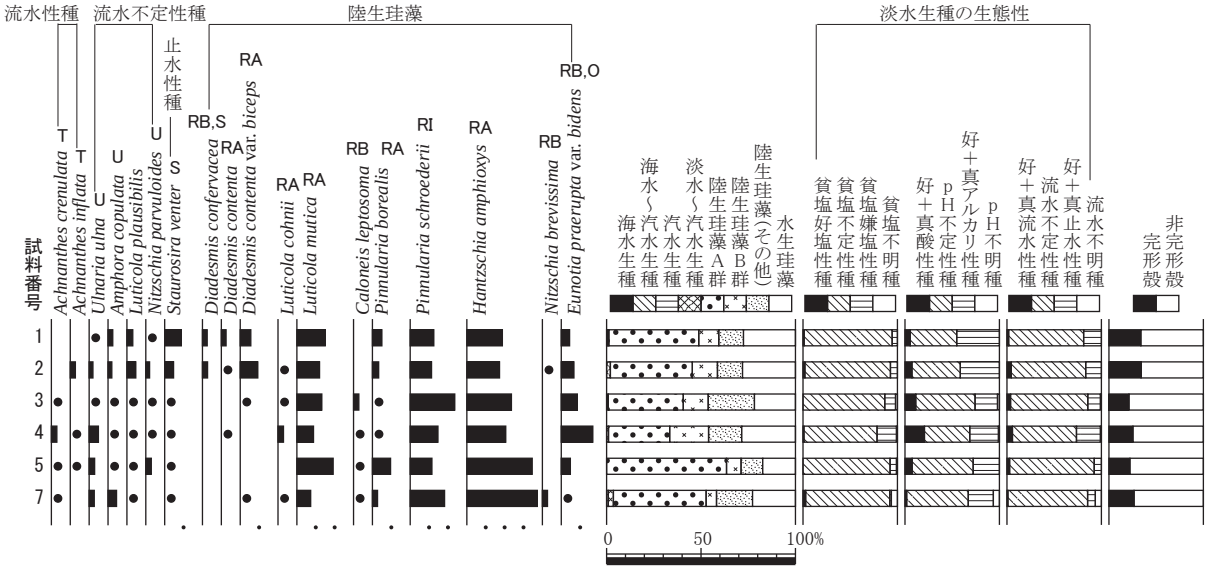
第 12 面 **A509 流路**（図 67 － 431 ～ 434）から弥生土器、縄文土器が少量出土した。

431・432 は弥生土器甕で弥生Ⅳ－２～３様式である。431 は口縁端部に凹線文１条を施され、内外面は粗いハケメと細かいハケメ調整である。432 は外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ調整である。433・434 は縄文土器深鉢で長原式である。細片であるが弥生前期の土器片も出土している。

第 12 面 **A530 高まり**（図 67 － 435、図版 34）から弥生土器壺１点が出土した。外面に簾状文６帯

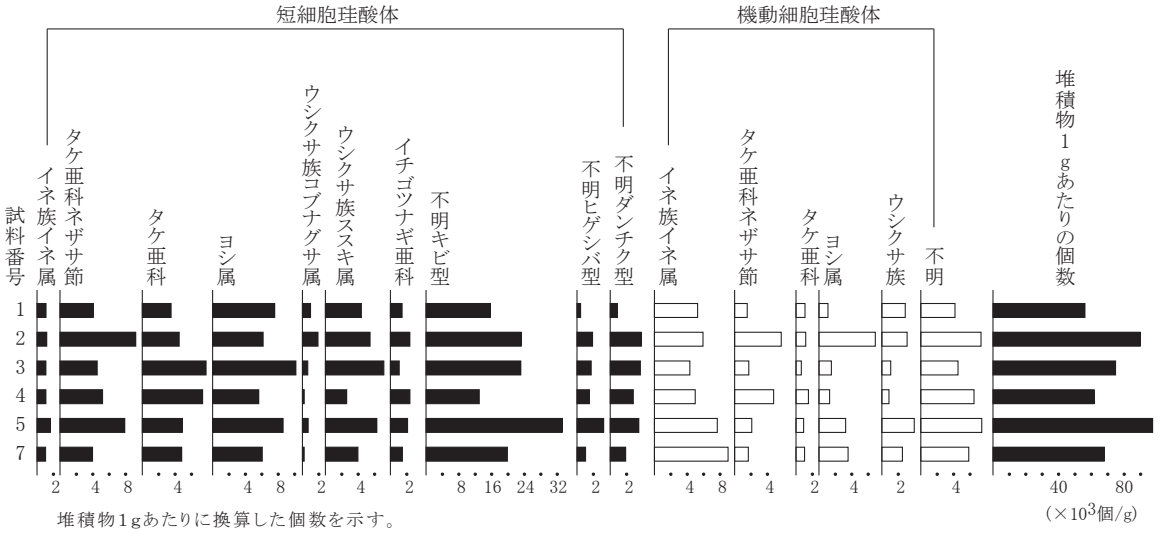



試料採取位置




海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。
いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満の産出を示す。
(S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種, RA:陸生珪藻A群, RB:陸生珪藻B群, RI:未区分陸生珪藻)

主要珪藻化石群集の層位分布




堆積物1gあたりに換算した個数を示す。

植物珪酸体含量

**図 66　第 12 ｂ面　自然科学分析（2）**

と円形浮文２列が施されている。弥生Ⅳ－３様式かと思うものである。

**第 12 層**（図 67 － 436 ～ 451、図版 35）から弥生土器、サヌカイト片が出土した。436 ～ 449 は第 12 － 1 層、450・451 は第 12 － 3 層からの出土である。436 は壺、437・446 は高杯脚、450 は甕蓋、438 ～ 440 は甕、441 ～ 445・451 は甕底部、447・448 はサヌカイト片、449 はサヌカイトチップである。436・437・440・445・446 は弥生Ⅳ様式、451 は弥生Ⅳ－ 1 様式、438・439・444・450 は弥生Ⅲ様式、441 ～ 443 は弥生Ⅱ様式かと思うものである。436 は外底面ヘラミガキ調整で、外面にススが付着している。437 は脚裾内面にススが厚く付着している。447・448 は製品としては厚みがあり、Ａ面に自然面が残るのでサヌカイト片で掲載した。

**第 12 ｂ層**（図 68 － 452 ～ 455、図版 35）から弥生土器、石製品が少量出土した。452･453 は甕、454 はサヌカイト製の凸基Ⅱ式石鏃、455 は投弾？である。452 は弥生Ⅳ様式、453 は弥生Ⅱ様式かと思うものである。454 は片側縁を鋸歯状に調整している。455 は一部にススが付着し、二次焼成で赤色化している。

遺物量は少ないが、第 12 層（第 12 － 1 層、12 － 3 層）、第 12 ｂ層の遺物を見ると、弥生Ⅳ様式が主で弥生Ⅲ様式、Ⅱ様式が混じる状況である。第 12 面の遺構出土や第 12 面上から出土した弥生Ⅳ様式はやや新しいものである。

【06 － 2 調査区】

**第 12 面**（図 68 － 460、図版 34）から弥生土器把手付鉢 1 点（460）が出土した。輪状の底部で内面粗いハケメ調整で、弥生Ⅳ－ 1 様式かと思うものである。

第 12 面 **B199 高まり**（図 68 － 456・457）から弥生土器が少量出土した。456・457 は甕で、457 は口縁端部に刻目が施されている。それぞれ弥生Ⅳ様式、Ⅱ様式かと思うものである。細片であるが、中期の壺、甕蓋片もある。

第 12 面 **B200 溝**（図 68 － 458、図版 35）から石鏃 1 点 が出土した。サヌカイト製で、凸基Ⅰ式で周縁を鋸歯状に調整している。

第 12 面 **B204 溝**（図 68 － 459）から弥生土器片が 3 点出土した。459 は甕で、弥生Ⅳ様式かと思うものである。

第 12 面 **B239 高まり**（図 68 － 461､図版 34）から石庖丁 1 点 が出土した。Ⅱ類直線刃半月形で､Ａ・Ｂ面とも紐孔をあけるときの敲打痕と使用痕がある。

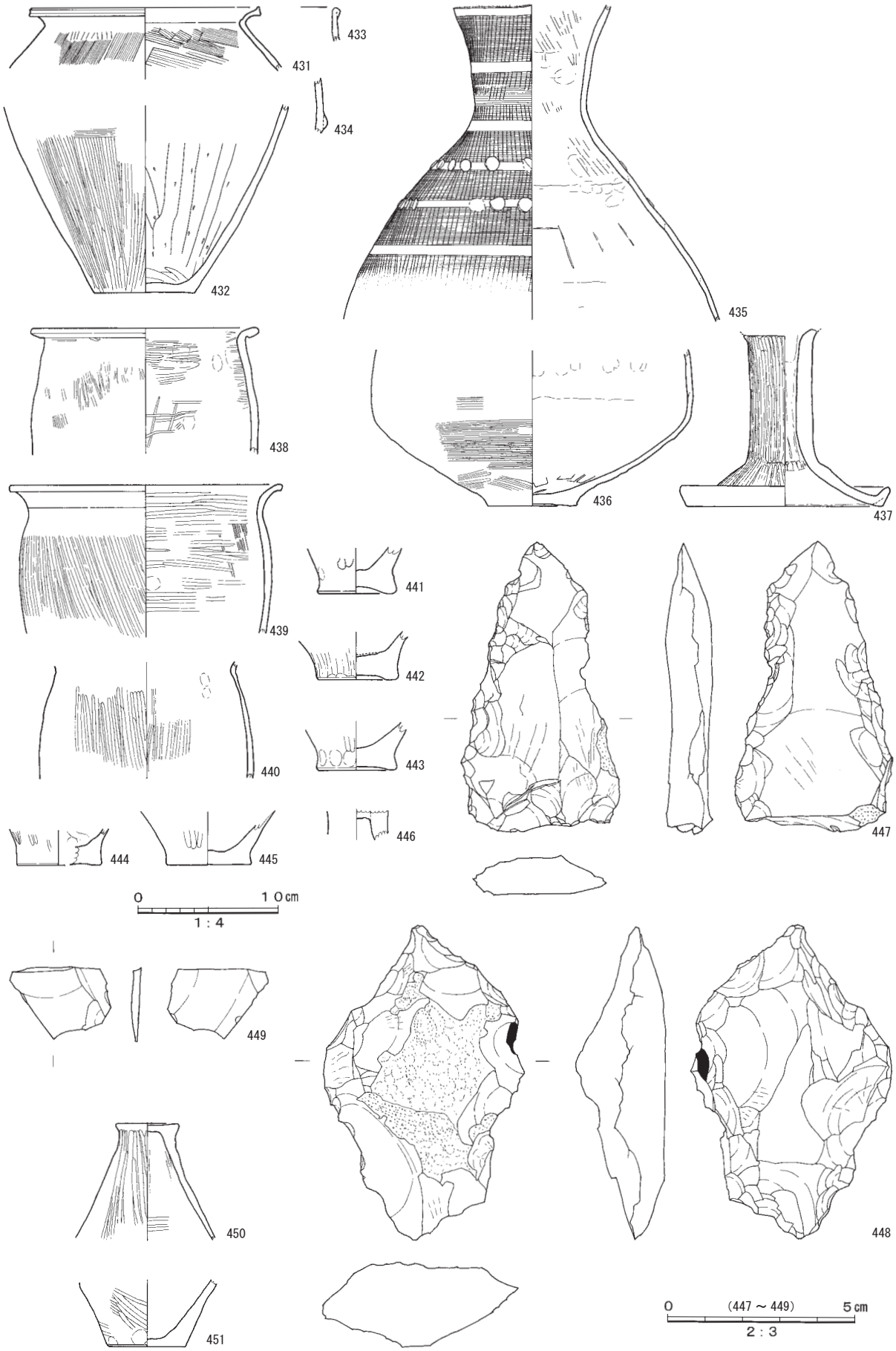
第 12 面 **B240 溝**（図 68 － 462）から弥生土器甕 1 点が出土した。外面ヘラミガキ調整､内面ハケメ、板ナデ調整である。底部と胴部は接合しなかった。弥生Ⅳ－ 2 様式かと思うものである。

**第 12 層**（図 68 － 463 ～ 466、図版 34・35）から弥生土器、サヌカイト片が少量出土した。463 は把手付鉢で、畦畔から出土している。外面に刻目と列点文を施し、把手はヘラミガキで胴部に押し付け、取り付けている。内外面ススが付着している。弥生Ⅳ－ 1 様式かと思うものである。464・465 はサヌカイト片で、464 は上面に自然面が残り、全体に白く風化している。465 はＡ面の突出した部分に叩いた痕跡がある。466 は第 12 層と確定はしないがここに掲載した。甕蓋で弥生中期である。

第 12 ｂ面 **B249 ピット**から中期の弥生土器甕片 1 点が出土した。

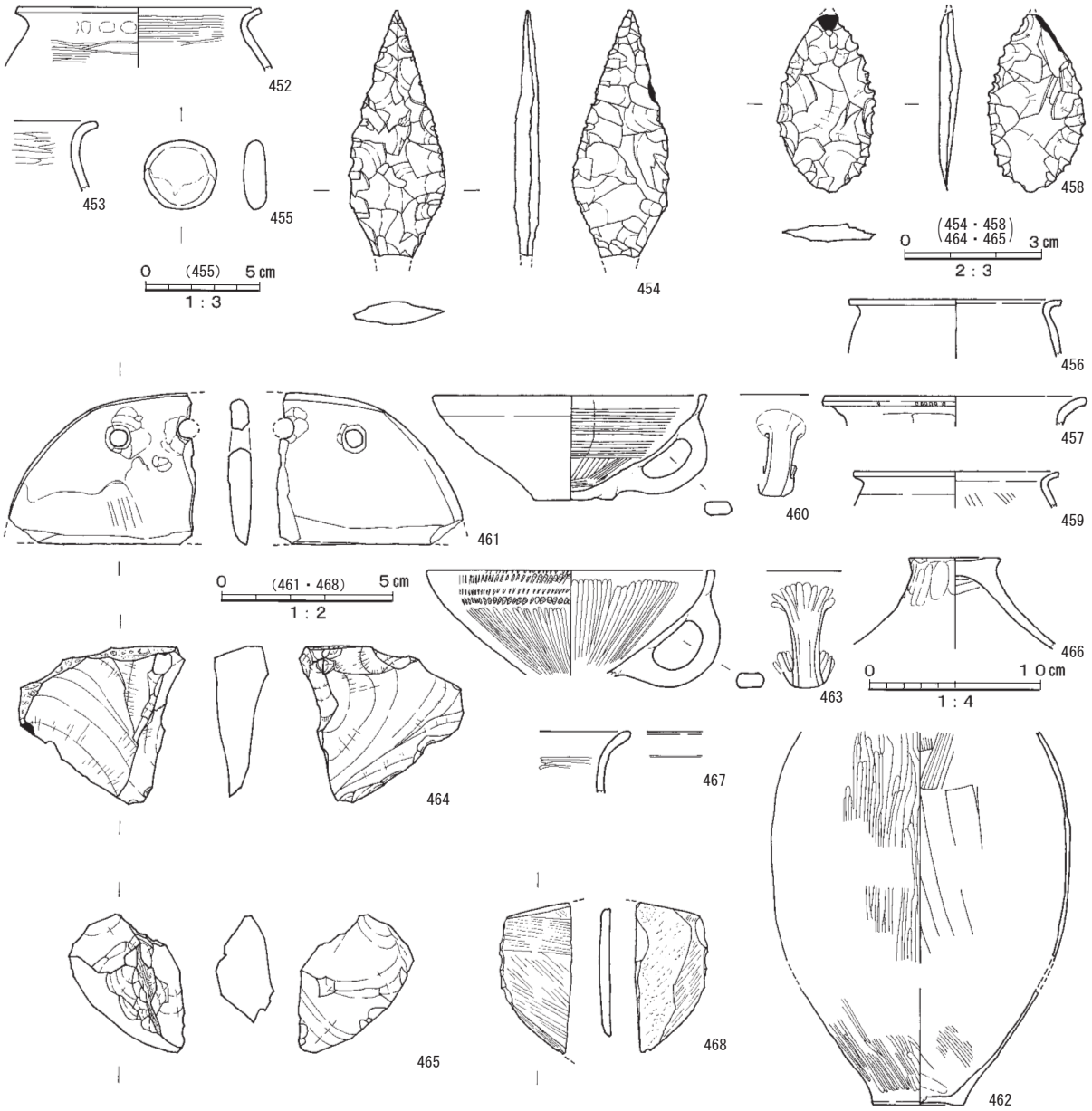
第 12 ｂ面 **B255 溝**（図 68 － 467）から弥生土器甕 1 点 が出土した。467 は弥生Ⅱ様式かと思うものである。

**第 12 ｂ層**（図 68 － 468、図版 34）から弥生土器少量と石庖丁 1 点（468）が出土した。468 はⅠ




431～434：A509 流路、435：A530 高まり、436～451：(02－1) 第 12 層

図 67　第 12 面　出土遺物（1）




452～455：(02－1）第12ｂ層、456・457：B199高まり、458：B200溝、459：B204溝、460：(06－2）第12面、461：B239高まり、462：B240溝、463～466：(06－2）第12層、467：B255溝、468：(06－2）第12ｂ層

**図68　第12面　出土遺物（2）**

類外湾刃半月形で、A・B面とも研磨痕がある。

池島Ⅰ期地区の第12面・12層出土遺物は弥生Ⅱ－3様式からⅣ様式のものが多く、第12ｂ層出土遺物は弥生Ⅰ様式後半からⅡ様式のものが多かった。今回報告する第12面・12層の遺物は池島Ⅰ期地区の様相と齟齬をきたさないが、第12ｂ層出土の遺物は少ないので不確かであるが、弥生Ⅰ様式はない。（陣内）

### 3）第 13 面・第 13 面ベース（第 13 b 面）

第 13 面（図 70、写真 41、図版 19 ～ 21）

第 12 層と第 12 b 層を除去した遺構面である。第 13 層は暗青灰色～黒色の極細砂～細砂を含むシルトが主体の土壌層であり、当遺跡で「第３黒色粘土（泥）層」と通称されてきた層に相当する。地形は、全体としては東から西へと標高を減じており、最高地点は東側の B271 微高地における T.P.2.6 m、最低地点は西側の水田域における T.P.1.67 mである。02 － 1 調査区側では、北端で微高地と水口を検出し、微高地の南側、第 12 面段階の A509 流路より西側の T.P.1.67 m～ 2.11 mの緩斜面では水田域（図版 19）を確認した。06 － 2 調査区側では B267 流路を挟んだ 2 つの微高地（標高 T.P.1.95 m～ 2.6 m）が調査区の約半分の面積を占めており、微高地上では B335 溝や土坑・ピットを検出した。

02 － 1 調査区北側に位置する **A634 微高地**は標高 T.P.1.9 ～ 2.1 mであり、南側の水田面との比高差は 0.15 ～ 0.2 mを測る。第 13 b 層のシルト～中砂を主体とする氾濫堆積物によって形成されており、池島Ⅰ期地区の 7 微高地と同一の微高地と考えられる。尚、微高地上から弥生時代前期に属すると考えられる弥生土器壺底部 1 点（469）が出土した。微高地の南側中央では、検出長 2.5 m、最大幅 1.3 m 検出面からの深さ 0.25 mの **A633 水口**を確認した（図 69、写真 40、図版 20）。埋土の大部分は青灰色の粘土～シルトからなり、部分的に有機物が見られた。水田側に向かって傾斜しており、接続する水田面上に水流による抉れが観察されたことから、水田への給水の機能を具備していたと考えられる。水田域は A509 流路西岸付近が T.P.2.0 ～ 2.1 m で最も高く、西に向かって下がって行き、調査区南西付近で T.P.1.7 m前後の最も低い箇所が見られる。調査区内では少なくとも 35 筆前後が確認された。畦畔の遺存状況の比較的良好な水田 1 筆の面積は、最小で 35.8 ㎡、最大で 202.3 ㎡である。水田を区画する畦畔の規模は、下端幅がおよそ 0.2 ～ 0.5 m、高さが 0.03 ～ 0.07 m程度であった。**A561・563・572** の畦畔、**A564・571** の畦畔、**A579・580・590・605・606** の畦畔、**A593・595・**

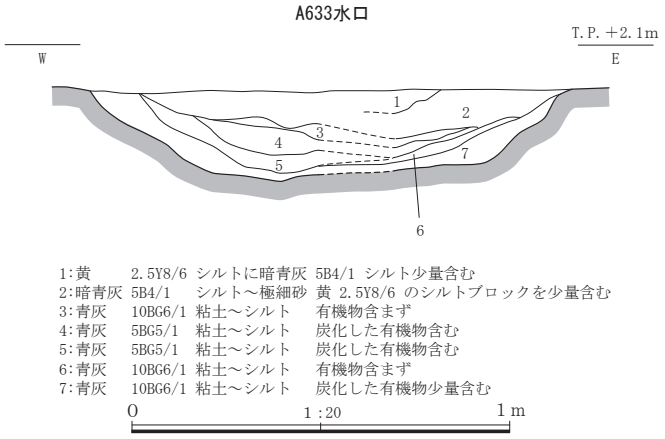



図 69　第 13 面　遺構図（1）

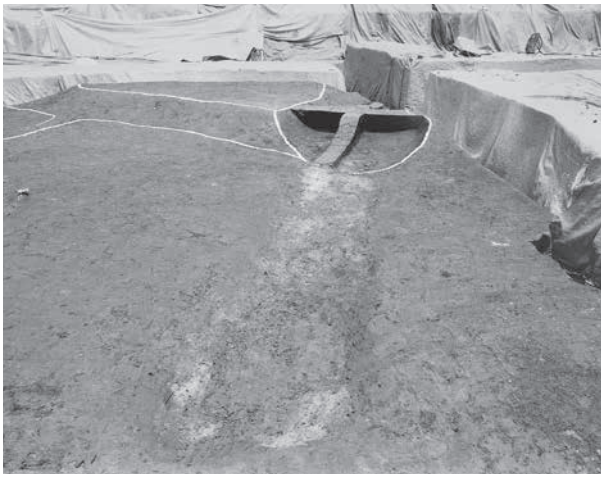


写真 40　第 13 面　A633 水口（南から）

写真 41　06 －２調査区　第 13 面　東半（北から）

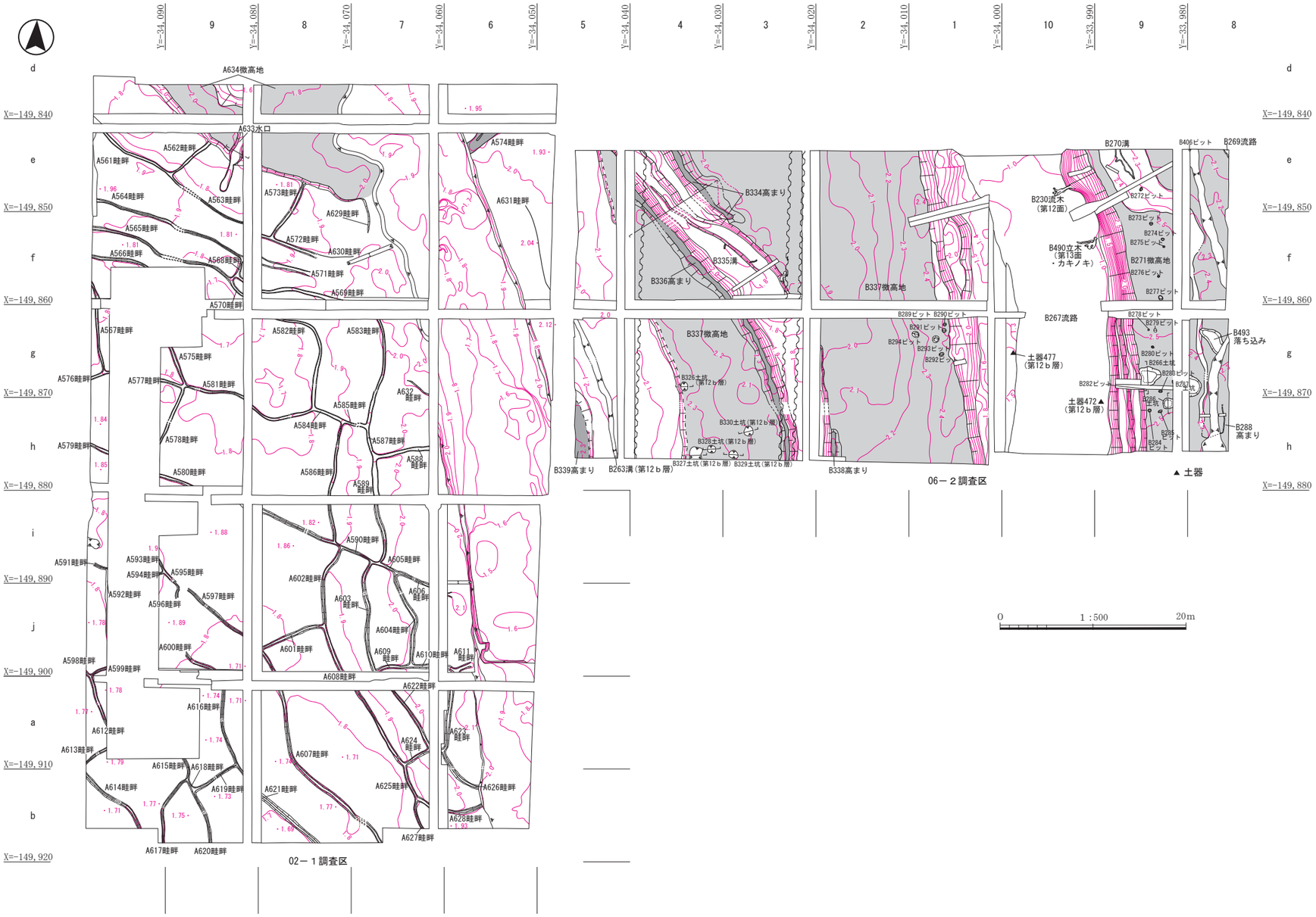

Y=-34,090
9
Y=-34,080
8
Y=-34,070
7
Y=-34,060
6
Y=-34,050
5
Y=-34,040
4
Y=-34,030
3
Y=-34,020
2
Y=-34,010
1
Y=-34,000
10
Y=-33,990
9
Y=-33,980
8
d
e
f
g
h
i
j
a
b
X=-149,840
X=-149,850
X=-149,860
X=-149,870
X=-149,880
X=-149,890
X=-149,900
X=-149,910
X=-149,920
A634微高地
A633水口
A561畦畔
A562畦畔
A563畦畔
A564畦畔
A565畦畔
A566畦畔
A567畦畔
A568畦畔
A569畦畔
A570畦畔
A571畦畔
A572畦畔
A573畦畔
A574畦畔
A575畦畔
A576畦畔
A577畦畔
A578畦畔
A579畦畔
A580畦畔
A581畦畔
A582畦畔
A583畦畔
A584畦畔
A585畦畔
A586畦畔
A587畦畔
A588畦畔
A589畦畔
A590畦畔
A591畦畔
A592畦畔
A593畦畔
A594畦畔
A595畦畔
A596畦畔
A597畦畔
A598畦畔
A599畦畔
A600畦畔
A601畦畔
A602畦畔
A603畦畔
A604畦畔
A605畦畔
A606畦畔
A607畦畔
A608畦畔
A609畦畔
A610畦畔
A611畦畔
A612畦畔
A613畦畔
A614畦畔
A615畦畔
A616畦畔
A617畦畔
A618畦畔
A619畦畔
A620畦畔
A621畦畔
A622畦畔
A623畦畔
A624畦畔
A625畦畔
A626畦畔
A627畦畔
A628畦畔
A629畦畔
A630畦畔
A631畦畔
A632畦畔
02－１調査区
B334高まり
B335溝
B336高まり
B337微高地
B338高まり
B339高まり
B263溝（第12ｂ層）
B326土坑（第12ｂ層）
B327土坑（第12ｂ層）
B328土坑（第12ｂ層）
B329土坑（第12ｂ層）
B330土坑（第12ｂ層）
B289ピット
B290ピット
B291ピット
B292ピット
B293ピット
B294ピット
B230流木（第12面）
B490立木（第13面・カキノキ）
B270溝
B271微高地
B272ピット
B273ピット
B274ピット
B275ピット
B276ピット
B277ピット
B278ピット
B279ピット
B280ピット
B281ピット
B282ピット
B283ピット
B284ピット
B285ピット
B286ピット
B287ピット
B288ピット
B266土坑
B267流路
土器477（第12ｂ層）
土器472（第12ｂ層）
▲土器
B406ピット
B269流路
B493落ち込み
B288高まり
06－２調査区
0
1:500
20m

図 70　第 13 面　平面図

**597・607** の畦畔などが、幹線畦畔として南東から北西方向に直線的に配置され、その間に支線畦畔が廻らされている。A509 流路より東側において A574 や A631 などの畦畔が部分的に検出されており、また流路西岸の畦畔の検出状況などから、第 13 面段階では A509 流路の範囲にも水田が本来存在し、A509 流路により削平された可能性が考えられる。水田への給水については、調査区北側の水田は A633 水口から取水していたと考えられるが、調査区中央や南側の T.P. 2 m前後の水田については、A509 流路の範囲などに給水のための水路や水口などが存在し、それらから取水が行われた可能性も考えられよう。畦畔には水口などの施設は確認されておらず、水田区画への配水は主に畦越しにより行われたと推定される。

02 － 1 調査区で確認された水田は、調査区に西接する池島 I 期地区の K 地区（廣瀬編 2007）の続きに相当する。**A633 水口**は K 地区の 21 流路からの取水が想定される。排水については K 地区と同様に 17 流路への排水が考えられ、北側の水田については K 地区北西の低い部分から、中央および南側の水田は南側から流路へ排水されていたと考えられる。尚、02 － 1 調査区においても排水用の水口等は確認されなかった。

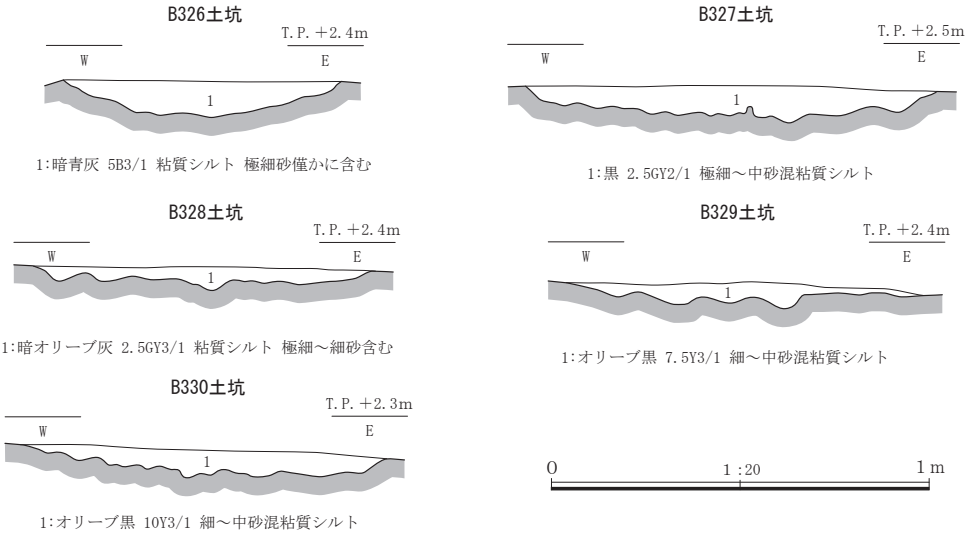
06 － 2 調査区西半の **B337 微高地**は、微高地東側の B267 流路沿い付近が T.P.2.4 m前後と最も高く、北西に向かって傾斜しており、微高地北側で T.P.1.9 m台の最も低い箇所がみられる。この微高地は、主に第 13 b 層の細砂～粗砂を中心とする氾濫堆積物によって形成されていた。 遺構については、微高地の西寄りで B335 溝、微高地の南西隅で B326 ～ 330 土坑、東側中央で B289 ～ 294 ピットを検出した。

**B335 溝**（図 56、図版 20・21） 南から北西方向へと走る溝で、幅 4.5 ～ 5.9 m、検出面からの深さは 0.2 ～ 0.5 mを測る。断面の観察から、底部付近の埋土には第 14 － 2 層に由来するブロック土が見られ、掘削が第 14 － 2 層にまで及んでいた。溝の両側に見られる第 13 b 層の内、68 層が溝側に垂れ込んでいる様相が見られることから、第 13 b 層が堆積する過程で生じた、低くなった自然地形を利用して掘削されたと推察される。溝の埋土の堆積状況より、溝が埋まるごとに再加工が繰り返されたことが想定される。溝の西側では **B336 高まり**、溝の東側の北と南ではそれぞれ **B334・B338 高まり**を検出した。幅は 2 m前後を測り、最も厚い部分で厚さ 0.2 m程の盛土が施されていた。断面の観察から、盛土内に第 14 － 2 層に由来するシルトのブロックが含まれていることが確認され、溝の加工が第 14 － 2 層に及んだ際、排出した土を利用して高まりを構築したことが推定される。

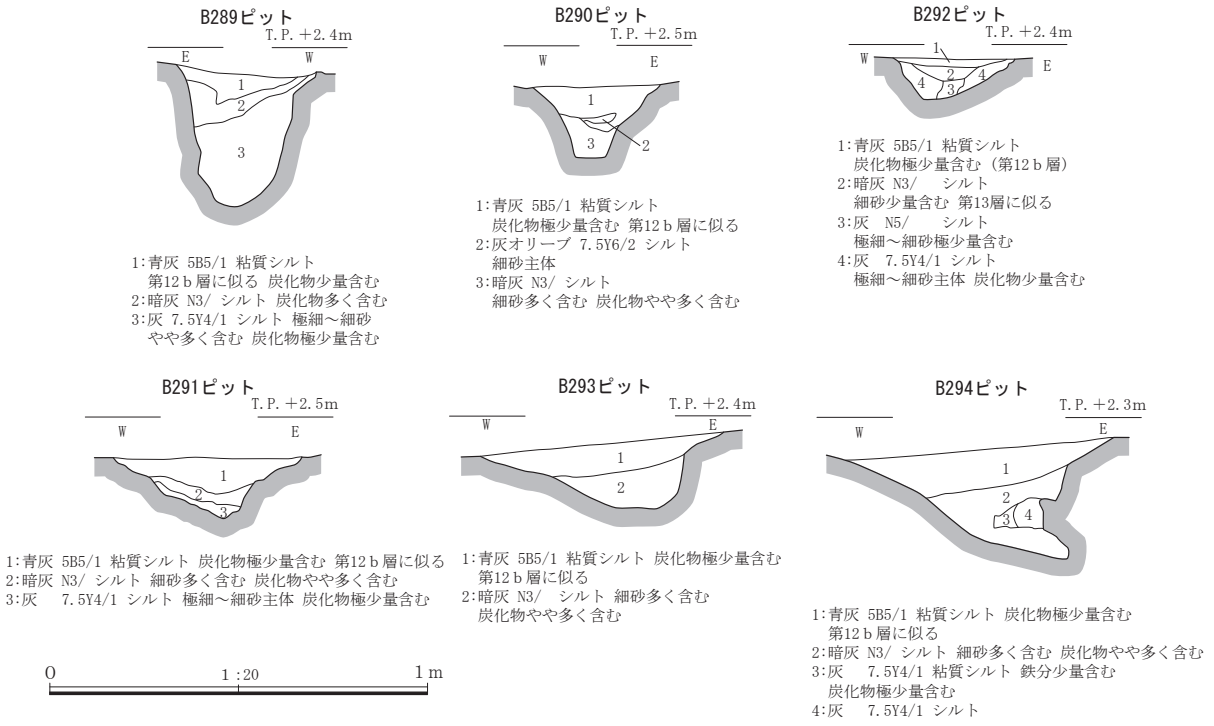
**B326 ～ 330 土坑**（図 71 ①） これらは円形もしくは隅丸方形を呈する径 1 m前後の土坑である。検出面からの深さは 0.06 ～ 0.1 mと比較的浅い。埋土は主に細砂～中砂を含む粘質シルトであり、ベースの第 13 層と比べ砂粒が目立つ。埋土の様相や検出面からの深さが浅いことなどから、上面に帰属する可能性が高いと考えられる。遺物は出土していない。

**B289 ～ 294 ピット**（図 71 ②） これらは B337 微高地東端の B267 流路西岸に相当する T.P.2.3 ～ 2.4 mのやや高い箇所で確認した。平面はいずれも円形であるが、深さは浅いもので 0.1 m前後、深いもので 0.38 mであり、底部の形状は不整形なものが多い。埋土は 2 ～ 3 層程度に細分可能で、いずれも上部には第 12 b 層に由来すると考えられる青灰色の粘質シルトがみられ、下部には炭化物の見られる暗灰色のシルトを含んでいた。位置に規則性は見られず性格は不明である。また、遺物は出土していない。

B337 微高地と調査区東側の B271 微高地との間に位置する **B267 流路**は、X ＝－ 149,860 ラインの断面観察部分付近で幅 20 ～ 21 mを測る（図 72、写真 43）。第 11 b 層段階の B197 流路とほぼ同じ位置において確認した流路であり、第 13 層段階から第 12 b 層段階にかけて流れていたと推定される。




① B337 微高地　土坑（第 12 b 面）




② B337 微高地 東端のピット

**図 71　第 13 面　遺構図（２）**

流路底は掘削限界の T.P.0.9m より下にあるため、正確な深さは不明であるが、2.5m 前後はあったと考えられる。流路の東岸はベースの地層が抉られ急角度で傾斜しており、攻撃面と考えられるのに対し、西岸は傾斜が比較的緩やかである。流路内堆積物は、西肩付近に見られるシルトを間に挟む極細砂～細砂の堆積物と、流路幅のおよそ３分の２を占める中砂～細礫からなる堆積物、およびその上部に見られる木片などの有機物を多く含む粘土～シルトの堆積物に大別される。まず、西肩付近の堆積物が流路によりもたらされた後、急流により粗い砂礫の堆積物が流路内に堆積し、さらにその後は緩やかな流水により有機物を含む粘土～シルトの堆積物が形成されたと考えられる。

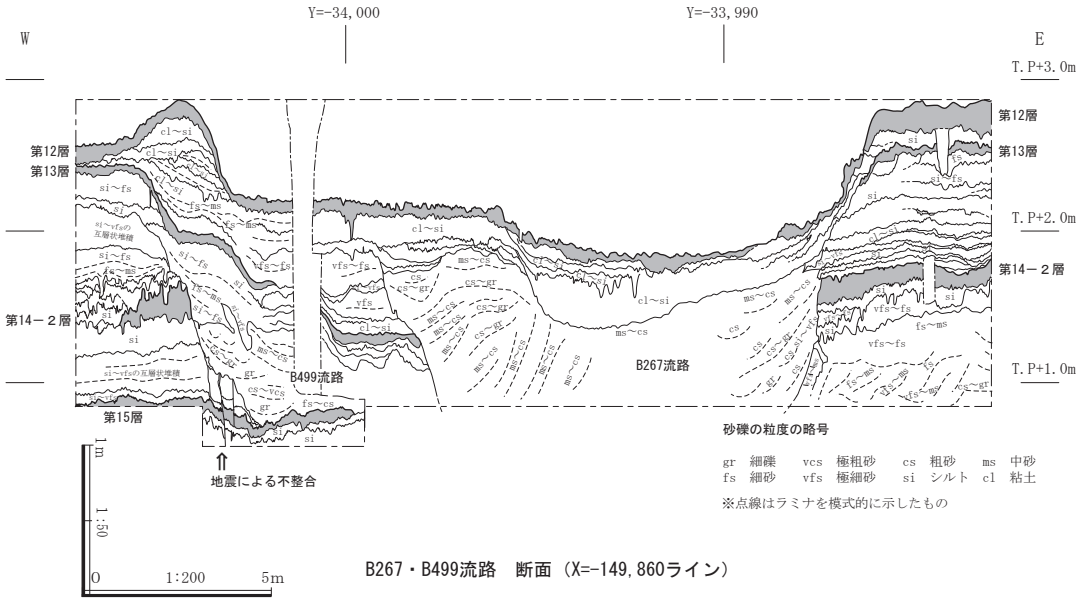



図 72　第 13 面　遺構図（３）

写真 42　B499 流路　下部　断面（南から）

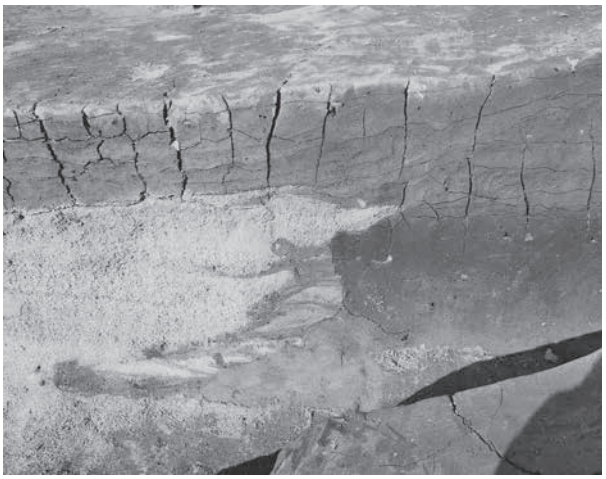


写真 43　B267 流路　東肩　断面（南から）

B267 流路堆積物中から弥生時代前期～中期初頭に属すると考えられる土器が出土している。図 70 に出土位置を示した土器 472・477 は、いずれも前期の所産と考えられる。

調査区の南西隅では、**B339 高まり**を検出した。検出長 7.3 m、検出幅 1.8 m、高さ 0.1 ～ 0.15 mを測る畦畔状の高まりである。02 － 1 調査区の水田域と一連の遺構の可能性が考えられる。

06 － 2 調査区東側で検出された **B271 微高地**は、検出範囲の中ほどが T.P.2.6 mと最も高く、北側に向かって下がっていき、最も低い北東部分で T.P.2.07 mを測る。この微高地は第 13 ｂ層の粘土～細砂主体の氾濫堆積物により形成されていた。微高地の西側、B267 流路東岸付近では、比較的多数の土坑・ピットを検出した。これらのうち微高地南半で確認した B266・287 の２基の土坑については、断面の観察から第 13 ｂ面に帰属すると考えられるが、当面で存在を確認したため、本項にて記述することにした。なお、第 13 ｂ面段階の B419 微高地において、さらに多くの土坑やピットを検出した。当面検出の土坑・ピットと第 13 ｂ面検出のものとでは、あまり時期差がなく関係性があると考えられるため、これら遺構の性格等については、次項および総括で詳述する。また、微高地の南端では畦畔を確認した。

写真 44　第 13 b 面　B266 土坑（西から）

**B269 流路**　調査区北東隅で部分的に検出された流路である。東接する 04 － 2 調査区第 13 面の 358 流路の一部と考えられる。

**B270 溝**　B271 微高地北側で検出された、検出長 3.64 m、幅 0.48 ～ 0.62 m、検出面からの深さ 0.1 m前後の溝である。

**B266 土坑**（図 73、写真 44）　楕円形の土坑で、長軸の方向は西―東である。長軸 2.08 m、短軸 1.85 m、検出面からの深さは 0.51 mを測る。埋土は灰～オリーブ灰色のシルトの混じる細砂である層と、加工時に形成されたと考えられる褐灰色

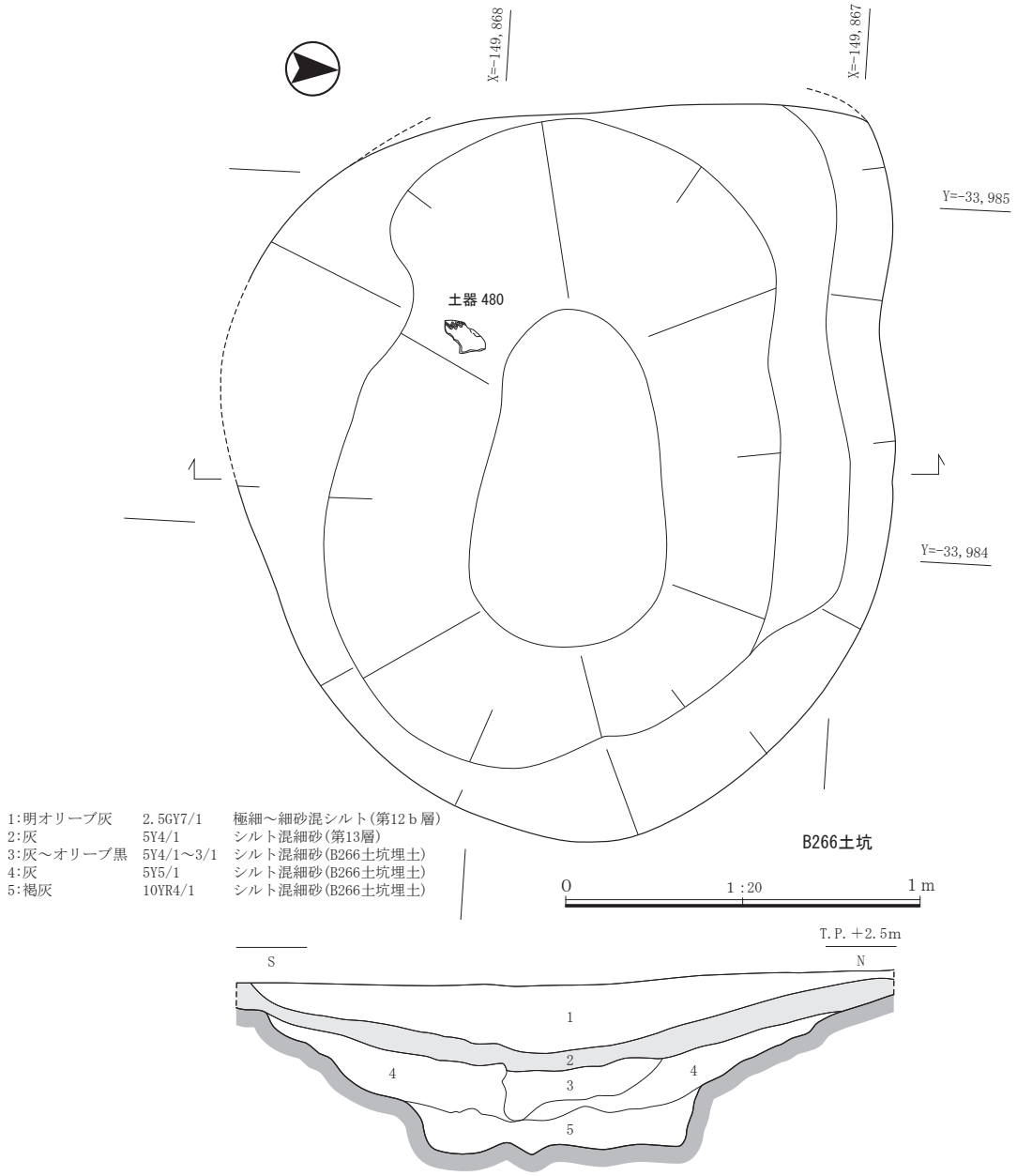
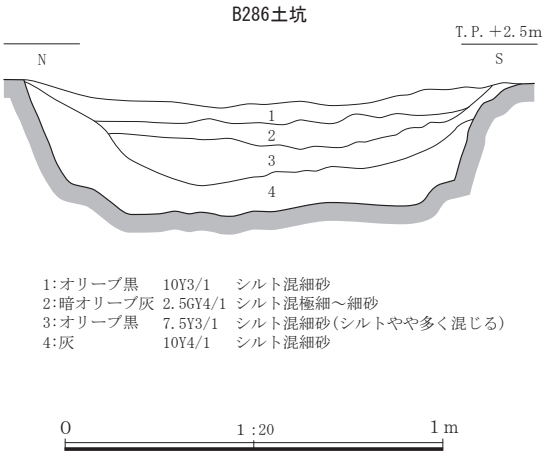



図 73　第 13 面　遺構図（4）

写真 45　第 13 ｂ面　B287 土坑（東から）



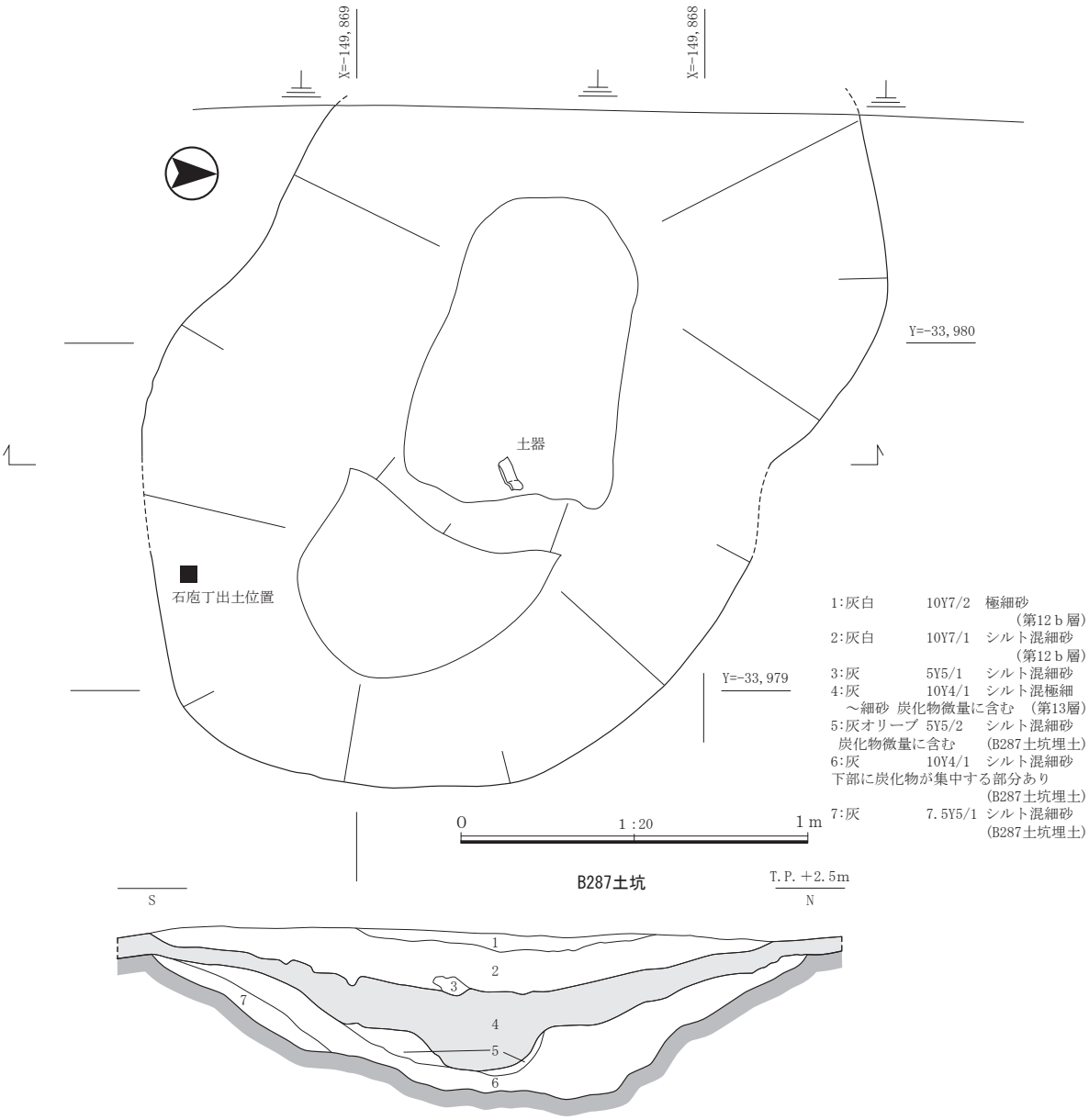
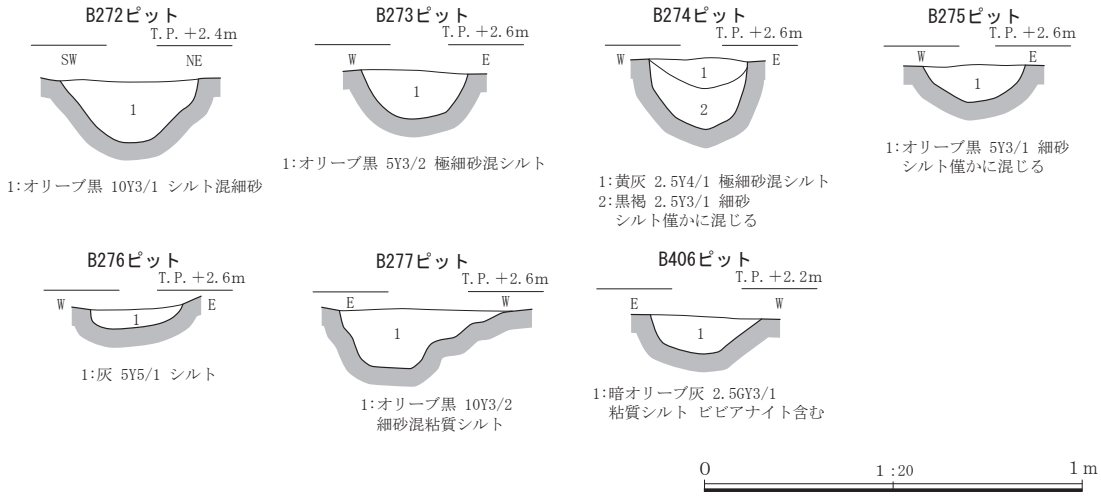
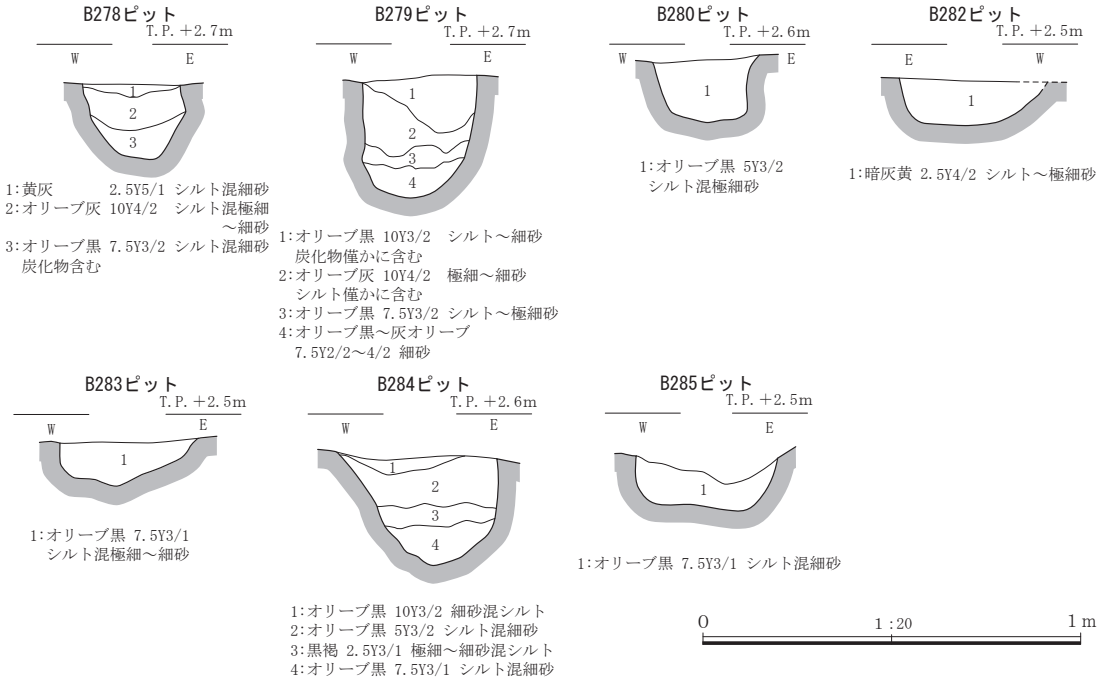




図 74　第 13 面　遺構図（５）




① B271 微高地北半のピット




② B271 微高地南半のピット

**図 75　第 13 面　遺構図（6）**

でシルト混じりの細砂の層からなる。埋土上面には第 12 b 層および第 13 層が落ち込んでいる状況が確認され、第 13 b 面に帰属すると考えられる。遺物は弥生時代中期初頭に属すると考えられる鉢(480)が出土した。尚、この土器は第 13 b 面 B399 土器出土地点の土器と接合した。

**B286 土坑**（図 74）　長軸 1.31 m、短軸 1.07 m、検出面からの深さ 0.42 mを測る楕円形の土坑であり、長軸は南―北の方向をとる。埋土はシルトの混じるオリーブ黒色や灰色の細砂からなる。遺物は出土していない。

**B287 土坑**（図 74、写真 45）　B266 土坑とほぼ同規模で、やはり平面形が楕円を呈する土坑である。長軸 2.55 m、短軸 1.75 m、検出面からの深さ 0.5 mを測り、長軸の方向は西北西―東南東をとる。埋土はシルトの混じる灰オリーブ～灰色の細砂からなり、部分的に炭化物が見られた。埋土上面には B266 土坑と同じように第 13 層と第 12 b 層が落ち込んでおり、第 13 b 面に帰属すると考えられた。

遺物は弥生時代前期に属すると考えられる壺（478）・甕（479）、および石庖丁（481）が出土している。また、埋土を洗浄したところ炭化米が２点出土した。

**B272 ～ 277、406 ピット**（図 75 ①）　微高地北半で確認された、直径 0.26 ～ 0.42 m、検出面からの深さは浅いもので 0.06 m、深いもので 0.19 mのピットである。いずれも平面は円形もしくは楕円形を呈しており、埋土は B274 ピットが２層に細分される以外は単層であり、オリーブ黒色で細砂の混じるシルトのものが多い。

**B278 ～ 280、282 ～ 285 ピット**（図 75 ②）B271 微高地南半のピットについて一括して述べる。いずれも平面は円もしくは楕円形を呈し、直径 0.25 ～ 0.42 m、検出面からの深さは 0.12 ～ 0.33 m程度である。埋土は B278・279・284 ピットの３基が３～４層に細分可能で、これら以外は単層であった。埋土の多くはオリーブ黒色で細砂の混じるシルトである。遺物は B280・B282 ピットからそれぞれ弥生土器片が１点ずつ出土したが、いずれも図化し得ない細片であった。

**B493 落ち込み**　B271 微高地南半の 20N － 8g 区で確認した、楕円形に近い不整形を呈する、深さ約 0.05 mのくぼみである。自然地形の落ち込みと考えられる。

**B288 高まり**　B271 微高地南端、20N － 8h 区において畦畔状の高まりを検出した。検出長約３m、高さは 0.3 m前後を測る。

**B490 立木**　20N － 9f・10f 区の B267 流路内で出土した立木である。樹種はカキノキであった。（飯田）

第 13 ｂ面（第 13 面ベース）（図 76、巻頭図版 1 、写真 46・47、図版 22 ～ 25）

土壌層の第 13 層を除去し、検出した遺構面であり、主に氾濫堆積物のシルト～中砂からなる第 13 ｂ層の上面に相当する。地形は第 13 面とほぼ同じで、全体的には東から西へと下がっており、最高地点は東側の B419 微高地における T.P.2.58 mであり、最低地点については西側の 1N － 9g 区付近で T.P.1.62 mの箇所が見られる。02 － 1 調査区側では、北側で微高地、くぼみ、溝群、畦畔の痕跡が確認され、また南西側の 1N － 10i 区では溝が確認された。06 － 2 調査区側では調査区の 3 分の 1 程度の面積を微高地が占めており、東端の微高地では多数の土坑、ピット、小規模な溝を検出した。これら東端の微高地の遺構の多くは第 13 層が形成される過程で掘り込まれたと考えられ、第 13 面検出の遺構と一連の時期のものと考えられる。

02 － 1 調査区北側の**A696 微高地**は、第 13 面段階の A634 微高地に相当し、標高はおよそ T.P.1.8 ～ 2.0 mである。微高地の南辺に沿って **A648 くぼみ**を検出した。くぼみは長さ 40 m、幅 4 ～ 6 m、検出面からの深さ 0.05 m前後を測り、灰色の粘土～シルトで埋まっていた。また、くぼみの内側および南側で畦畔の痕跡（A635 ～ 639 畦畔）を確認した。自然地形の可能性が考えられるこのようなくぼみが水路として利用された後、水田が次第に形成されていき、第 13 面段階において、調査区の大半に広がる水田域が成立するという景観の変遷が想像される。

A648 くぼみの北西側、1N － 10d 区では地震の液状化現象に伴う**噴砂**を検出した。第 13 ｂ層上層の粘土～シルトの面に、第 13 ｂ層下層の粗砂～極粗砂の砂脈が約 0.1 mの長さで、約 20 ヵ所見られた。02 － 1 調査区北東隅から 06 － 2 調査区北西側の平坦な箇所では、溝を 8 条（**A640 ～ 645 溝、B416・417 溝**）確認した。幅 0.2 ～ 1 m、検出面からの深さ 0.1 ～ 0.3 m前後の溝が様々な方向で掘削されていた。埋土については、A640 ～ 645 溝が暗緑灰色（5G4/1 ～ 10G4/1）のシルト～極細砂、B416・417 溝が灰色（N4/）の細砂～中砂の混じるシルトであり、いずれもベースに比べやや砂礫が多く含まれていた。また、02 － 1 調査区の 1N － 10i 区においても幅 0.7 ～ 1 m、検出面からの深さ 0.1 m前後の溝（**A646・647 溝**）が部分的に確認された。これら溝のうち A644・645 溝については、第 13 面段階の畦畔に近接した位置であり、これら畦畔の造成に関わる可能性が考えられる。それ以外の溝については位置関係や方向に規則性は見出せず、性格は不明である。また、いずれの溝からも遺物は出土していない。

06 － 2 調査区西側では、標高 T.P.2.03 ～ 2.37 mの B495 微高地を確認したが、微高地上面では遺

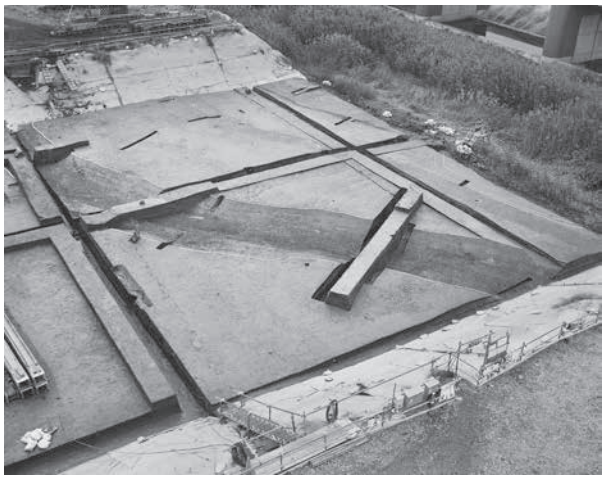


写真 46　06 － 2 調査区　第 13 ｂ面　西半（北東から）

写真 47　06 － 2 調査区　第 13 ｂ面　遺構集中部（南から）

図 76　第 13 b 面　平面図

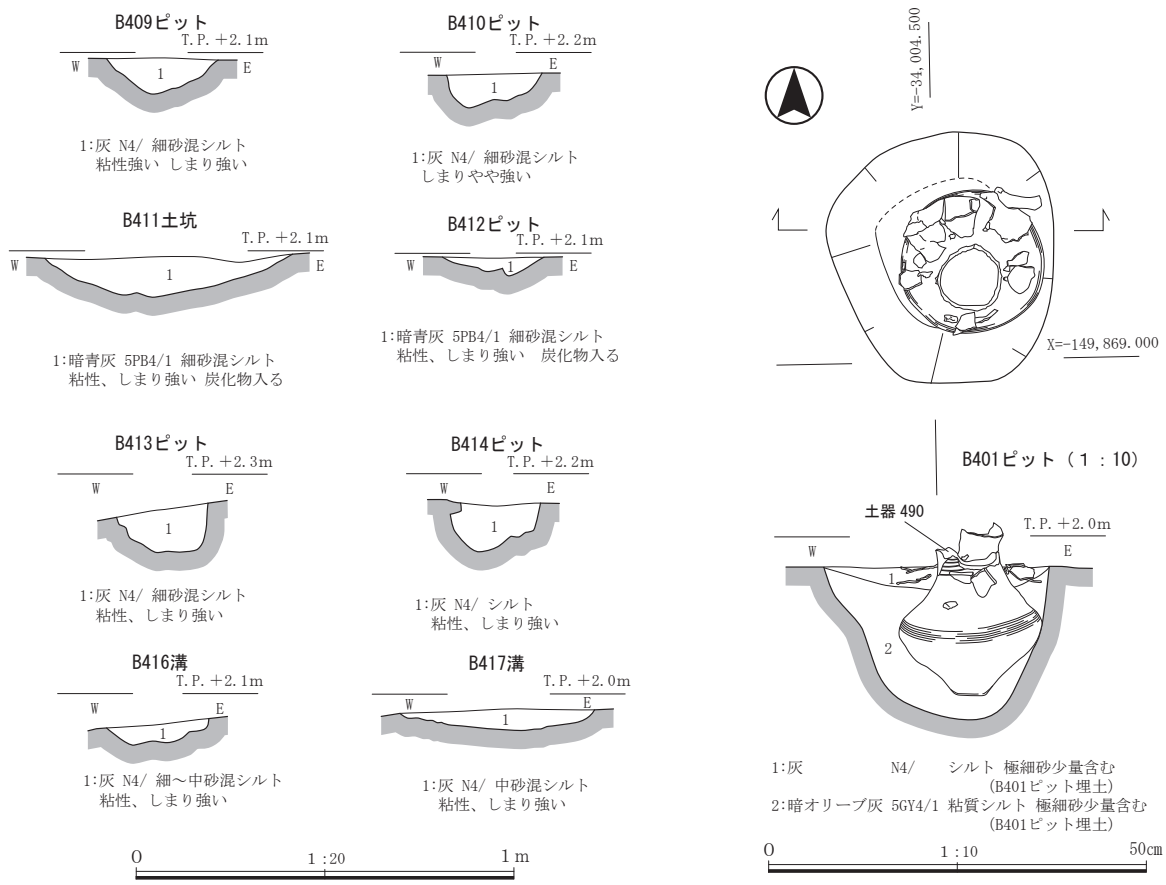



**図 77　第 13 b 面　遺構図（1）**

構は確認されなかった。この微高地の西側、T.P.2.16 ～ 2.18 mの箇所で微高地の縁辺に沿って土坑 1 基（B411）、ピット 4 基（B409・410・412・413）を、また調査区西端の 1N － 5h 区でピット 1 基（B414）を検出した。

**B411 土坑**（図 77）　長軸 0.8 m、短軸 0.65 m、検出面からの深さ 0.1 mの円形に近い不整形の土坑である。埋土は第 13 層に由来すると考えられる暗青灰色の細砂混シルトからなり、細砂～中砂主体のベースと容易に区別することができた。

**B409・410・412 ～ 414 ピット**（図 77）　いずれも、直径 0.21 ～ 0.29 m、検出面からの深さ 0.1 ～ 0.15 m前後の円形のピットである。やはり第 13 層に由来すると考えられる灰～暗青灰色の細砂混シルトが入っており、周囲の細砂～中砂主体のベースとの違いが明瞭であった。

これらの土坑・ピットの内、B411 土坑と B410・412 ～ 413 ピットは微高地縁辺に沿って 2 ～ 3 m の間隔で 1 列に存在し、性格は不明であるが、人為的に掘削された可能性は比較的高いと考えられる。

B495 微高地の東では、第 13 面で既に述べたが、第 13 b 層段階で掘削されたと考えられる B335 溝が南から北西方向へと走っていた。

06 － 2 調査区のほぼ中央では標高 T.P.2.2 ～ 2.4 mの **B496 微高地**を検出した。この微高地は、B499 流路により形成された自然堤防に相当すると考えられる。微高地上では遺構は確認できなかった。微高地の東側斜面、B499 流路西岸の 1N － 1g 区では、第 13 b 層掘削中に **B401 ピット**（図 77、図版 25）を検出した。長軸 0.34 m、短軸 0.3m、検出面からの深さ 0.2 mを測る円形に近い不整形のピットである。埋土は灰色で極細砂を含むシルトと暗オリーブ灰色の極細砂を含む粘質シルトの 2 層からなる。ピット

内には、口縁付近が一部破損しているが、ほぼ完形の弥生時代前期後半に属すると考えられる壺（490）が正位置で１個体据えられていた。

06 － 2 調査区東側の **B419 微高地**（図 78、図版 22）は、第 13 面の B271 微高地に相当する。中央の 20N － 9f 区付近における T.P.2.58 m の箇所が最も高く、北東方向と南東方向に向かって下がっており、北東の 20N － 8e 区で T.P.1.98 m、南東の 20N － 8h 区で T.P.2.2 m を測る。微高地上では土坑・ピット・小溝を多数確認した。まず土坑について、遺構番号順で述べる。

**B340 土坑**（図 79、写真 48、図版 22）微高地北半の 20N － 8e・9e 区で確認した、平面形が若干いびつな楕円形を呈する土坑である。長軸 2.27 m、短軸 1.35 m、検出面からの深さ 0.47 m を測り、掘削は第 14 － 2 層まで及んでいた。長軸の方向は北北西－南南東である。埋土、垂れ込み土については 7 層に細分可能であった。1 層は第 12 b 層と考えられる明緑灰色のシルト～極細砂、2 層は第 13 層と考えられる灰色の細砂混シルトであり、いずれも遺構埋土上に垂れ込んでいた。3 層は灰色の炭化物をラミナ状に含む細砂混シルト、4 層はオリーブ灰色の細砂混粘質シルトで炭酸カルシウムの結核を含み、5 層は灰色の粘質シルト、6 層はオリーブ灰色の炭化物を多量に含む細砂混シルトであった。最下層の 7 層は第 14 － 1・14 － 2 層に由来すると考えられる細砂混シルトのブロックを含むオリーブ灰色の粘質シルトであり、土坑の加工時に形成された層と考えられる。埋土中から弥生 I 様式の甕の底部（484）を含む、弥生土器の細片が出土している。尚、484 とは別の甕の底部が B428 土坑出土の甕（492）と接合した。また、埋土を洗浄したところ、ノブドウ属の種子が 1 点出土した。

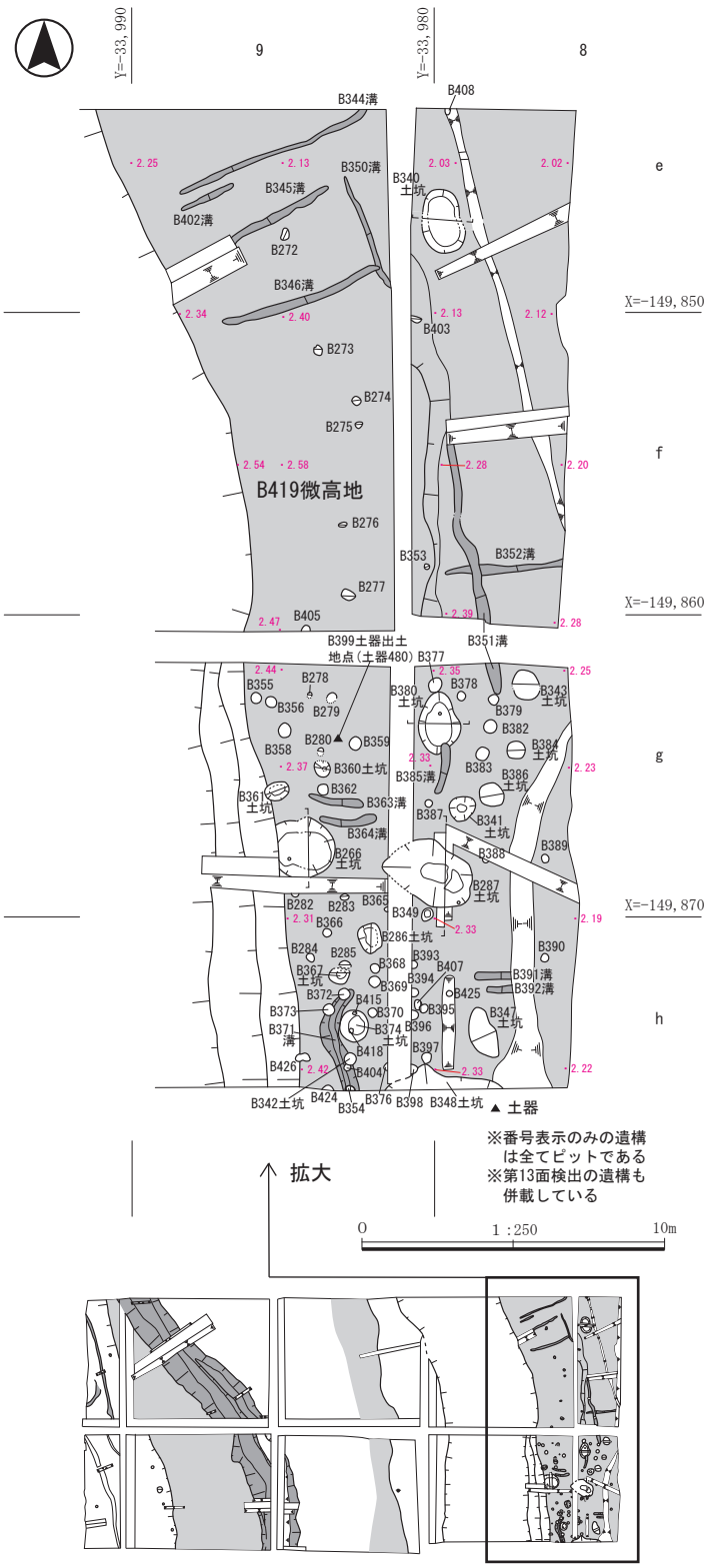



図 78　第 13 b 面　B419 微高地　平面図

**B341 土坑**（図 80、図版 23）　微高地南半の 20N － 8g 区で検出した円形に近い楕円形の土坑である。

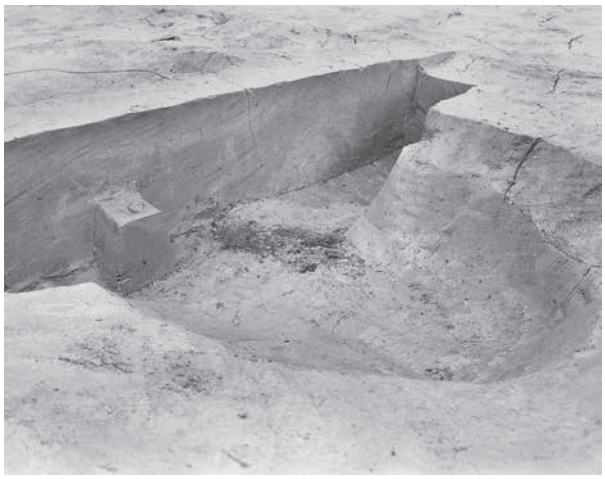


写真 48　第 13 面　B340 土坑（南西から）

長軸 0.83 m、短軸 0.74 m、検出面からの深さ 0.08 mを測る。埋土の上面には被熱して灰色に変色した砂礫の混じるシルト（1 層）や黄色の被熱したブロック土（2 層）が見られた。3 層は明緑灰色の細砂～中砂の混じるシルト、4 層は炭化物を僅かに含む青灰色の細砂混シルトであった。遺物は出土していない。

**B342 土坑・B404 ピット**（図 80、図版 23）　微高地南半の 20N － 9h 区で確認した土坑・ピットである。B404 ピットが土坑を切っていたため、ピットにつ

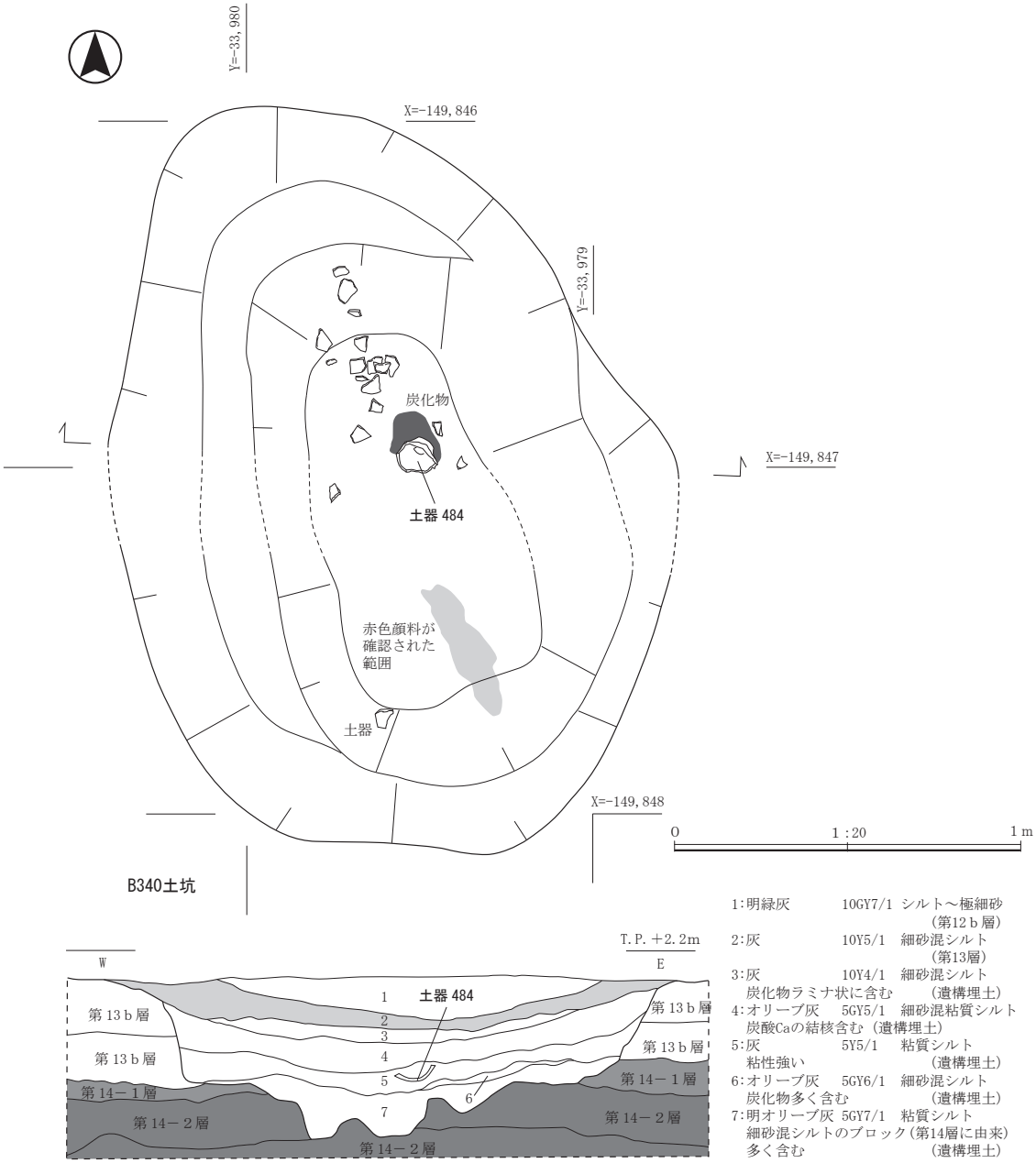



図 79　第 13 b 面　遺構図（2）

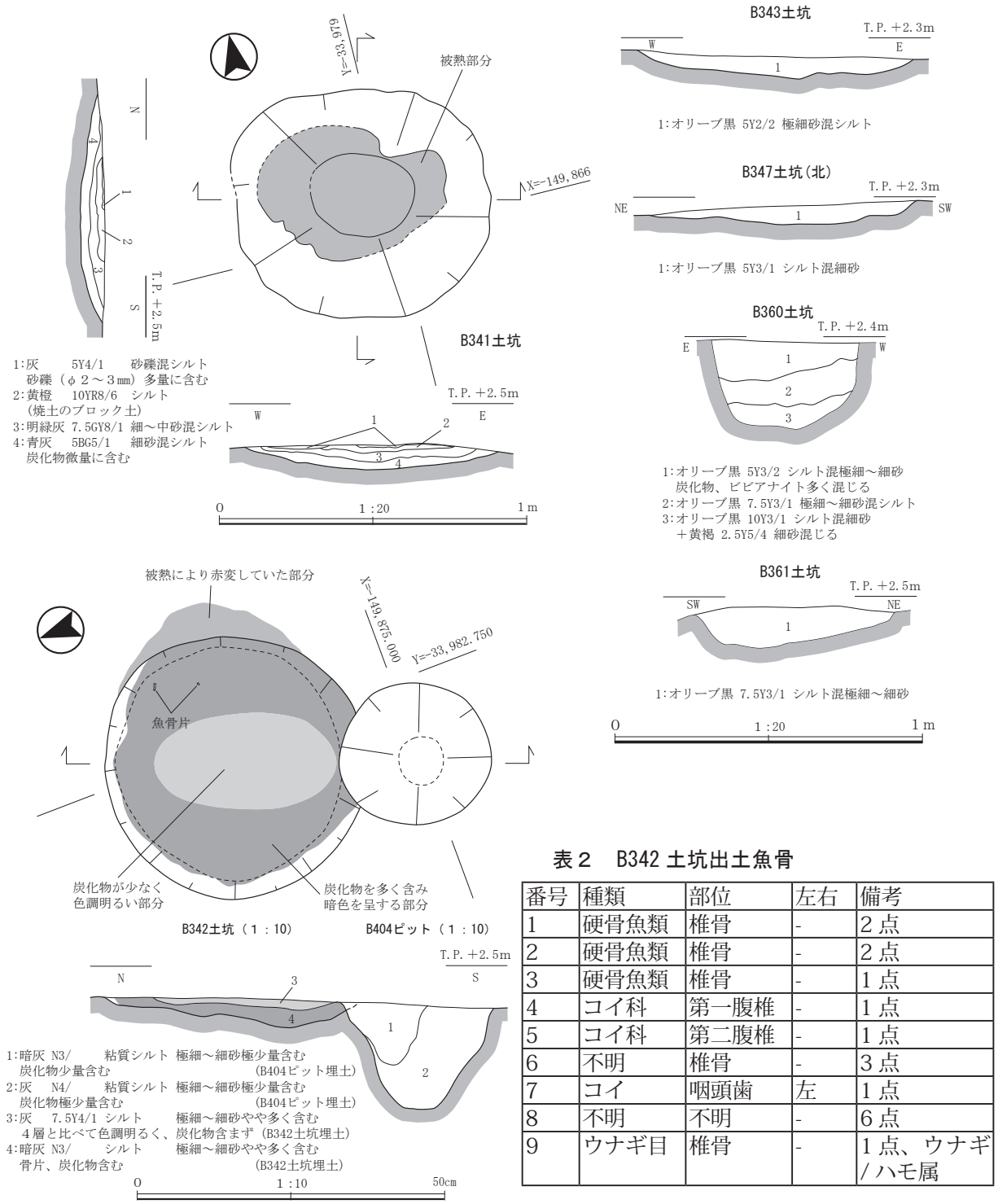



**表２　B342 土坑出土魚骨**

| 番号 | 種類 | 部位 | 左右 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 硬骨魚類 | 椎骨 | - | ２点 |
| 2 | 硬骨魚類 | 椎骨 | - | ２点 |
| 3 | 硬骨魚類 | 椎骨 | - | １点 |
| 4 | コイ科 | 第一腹椎 | - | １点 |
| 5 | コイ科 | 第二腹椎 | - | １点 |
| 6 | 不明 | 椎骨 | - | ３点 |
| 7 | コイ | 咽頭歯 | 左 | １点 |
| 8 | 不明 | 不明 | - | ６点 |
| 9 | ウナギ目 | 椎骨 | - | １点、ウナギ/ハモ属 |

**図 80　第 13 ｂ面　遺構図（３）**

いてもここで併せて詳述する。土坑の平面はほぼ円形であり、規模は、直径 0.45 m前後、検出面からの深さ 0.05 mを測る。埋土は２層に分層可能であり、下層は B341 土坑と同じく被熱した土を含んでいた。上層は灰色の極細砂～細砂を含むシルトであり、炭化物を含まないのに対し、下層は暗灰色の極細砂～細砂を含むシルトで、焼土・炭化物を含んでいた。尚、埋土下層から被熱した小動物の骨片が出土した。京都大学大学院（現　橿原考古学研究所）の丸山真史氏に鑑定していただいたところ、コイの咽頭歯やコイ科の魚類の腹椎、ウナギ目の魚類の椎骨などが含まれており、いずれも白色を呈すること

から強く被熱したことが考えられるとのことであった(表２)。また、埋土を洗浄したところ、炭化米２点、タカサブロウの種子２点が出土した。B404 ピットは平面が円形で直径 0.25 m、検出面からの深さ 0.17 mを測る。埋土は２層に分かれ、上層は暗灰色を呈する極細砂～細砂を微量に含む粘質シルト、下層は灰色で極細砂～細砂を微量に含む粘質シルトであり、両層に炭化物が少量混じっていた。埋土を洗浄したところ、カナムグラの種子が１点出土した。

**B343 土坑**（図 80） 微高地南半の 20N － 8g 区で検出した、平面が円形を呈する土坑である。直径 0.9 m、検出面からの深さ 0.09 mである。埋土はオリーブ黒色の極細砂の入るシルトである。

**B347 土坑**（図 80） 微高地南半の 20N － 8h 区で確認した、平面が楕円形に近い不整形の土坑である。長軸 1.7 m、短軸 0.9 m、検出面からの深さ 0.08 mであり、長軸は北北西－南南東の方向である。埋土はオリーブ黒色のシルトの混じる細砂であった。埋土中から弥生土器の細片が１点出土しているが、図化し得ず、時期は不詳である。

**B348 土坑**（図 81） 微高地南半の 20N － 9h 区で確認した、不整形の土坑である。調査区南端で部分的に検出し得た土坑であり、規模は、断面を観察した箇所で幅 4.4 m、検出面からの深さ 0.8 mを測る。掘削は第 14 －２層にまで及んでいた。埋土直上には第 13 層が垂れ込んでいる状況が確認できた。埋土は６層に細分可能であり、２～５層については灰オリーブ色のシルトと灰色のシルトが互層状に堆積していた。６層はオリーブ黒色の細砂～中砂を含むシルトである。最下層の７層は第 13 b、14 －１、14 －２層の各層に由来するブロック土が混じる青灰色のシルト層であり、土坑の加工時に生じたと考えられる層である。

**B349 ピット**（図 81、図版 24） ピットであるが、遺物の出土状況がやや特殊であったので、ここで土坑と一緒に詳述する。微高地南半の 20N － 9g･9h 区で検出した平面円形のピットである。直径 0.4 m、検出面からの深さ 0.1 mを測り、シルトの混じる灰色の細砂で埋まっていた。埋土中から数 cm 大の土器の細片が多数出土した。これら土器細片の中には弥生時代中期初頭の所産と考えられる甕（485）が含まれていた。出土状況から意図的に破砕された可能性も考えられる。

**B360 土坑**（図 80） 20N － 9g 区で確認した平面が円形を呈する土坑であり、直径 0.48 m、検出面からの深さ 0.29 mを測る。埋土は３層に分けることが可能で、大半はオリーブ黒色のシルト混極細砂～細砂、ないしは同色の極細砂～細砂混シルトであった。

**B361 土坑**（図 80） B360 土坑の南西 1.5 mの位置で検出した平面が楕円形の土坑である。規模は長軸 0.65 m、短軸 0.6 m、検出面からの深さ 0.14 mであり、長軸の方向は東北東－西南西である。埋土はオリーブ黒色のシルト混極細砂～細砂の単層であった。

**B367 土坑**（図 81） 20N － 9h 区で確認した、平面が楕円形に近い不整形を呈する土坑である。東西に細長い土坑であり、長軸 0.69 m、短軸 0.58 m、検出面からの深さ 0.21 mを測る。埋土は、黒褐色でシルト～中砂の１層と、オリーブ黒色で炭化物を含むシルト～細砂の２層からなる。１層から弥生時代前期に属すると考えられる甕底部（486）を含む土器の細片と風化した砂岩が出土している。

**B374 土坑・B415・418 ピット**（図 81、図版 24） 20N － 9h 区で検出した、平面形が円形に近い不整形の土坑と、土坑内で検出した円形のピット２基である。土坑は比較的浅く底部は皿状であり、東西 0.91 m、南北 1.01 m、検出面からの深さ 0.06 mを測る。埋土は灰～褐色の極細砂～細砂を含むシルトであり、被熱し赤変した部分が観察された。特に２層には炭化物が多く含まれており、また弥生時代中期に属する甕口縁片を含む弥生土器片やサヌカイト片２点（487・488）が出土した。埋土を洗浄したところ、

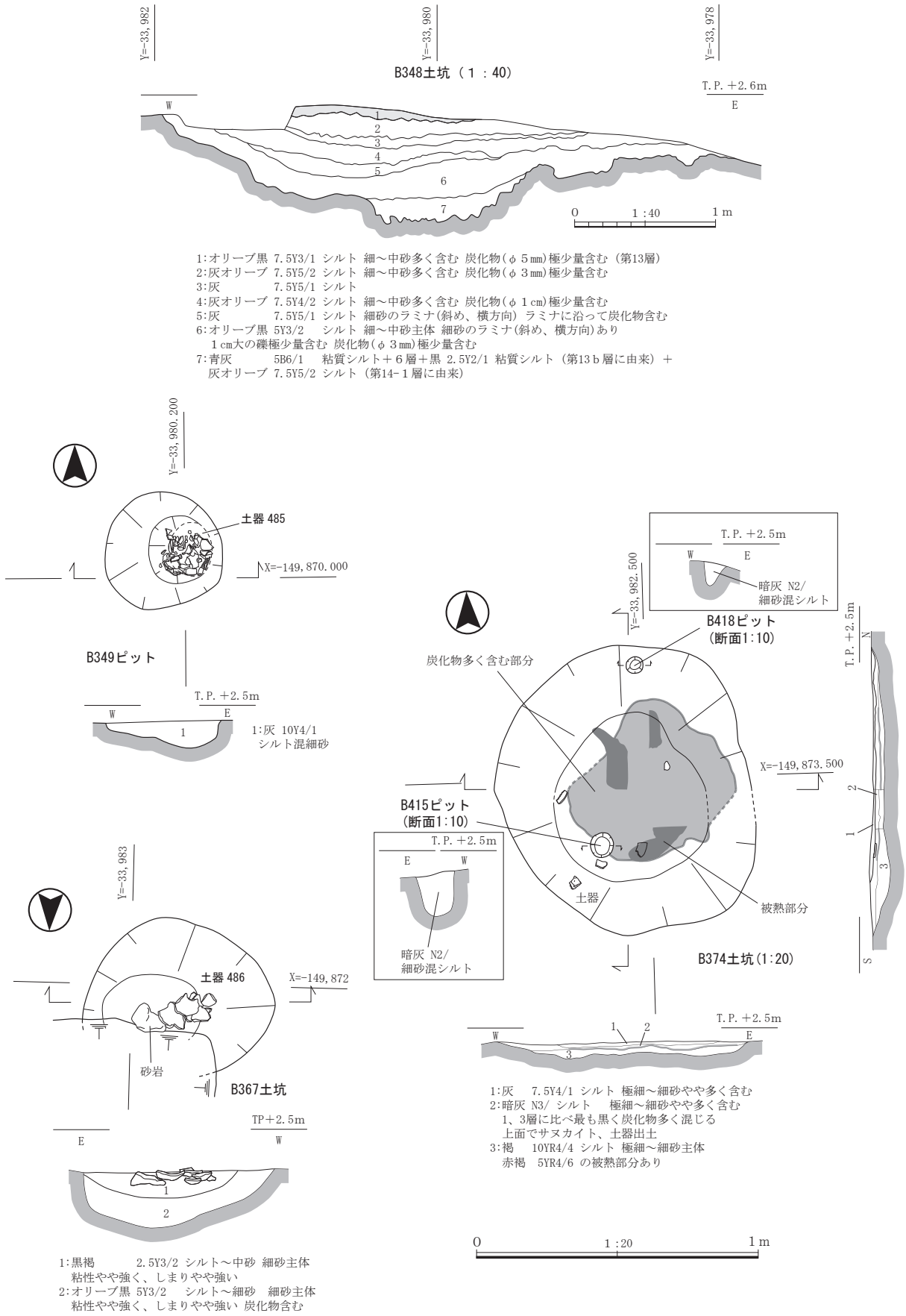



図 81　第 13 ｂ面　遺構図（４）

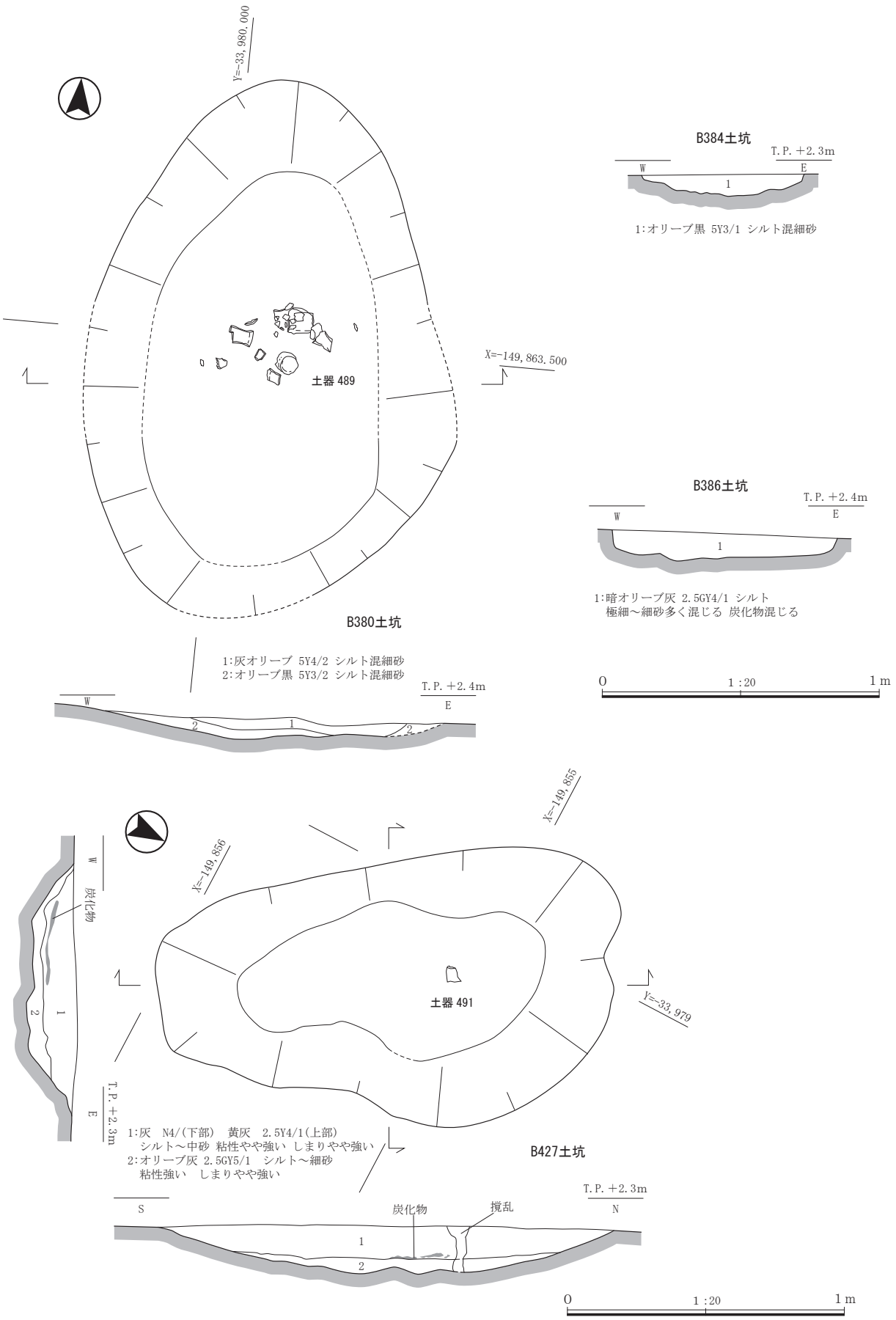



図 82 第 13 b 面 遺構図（5）

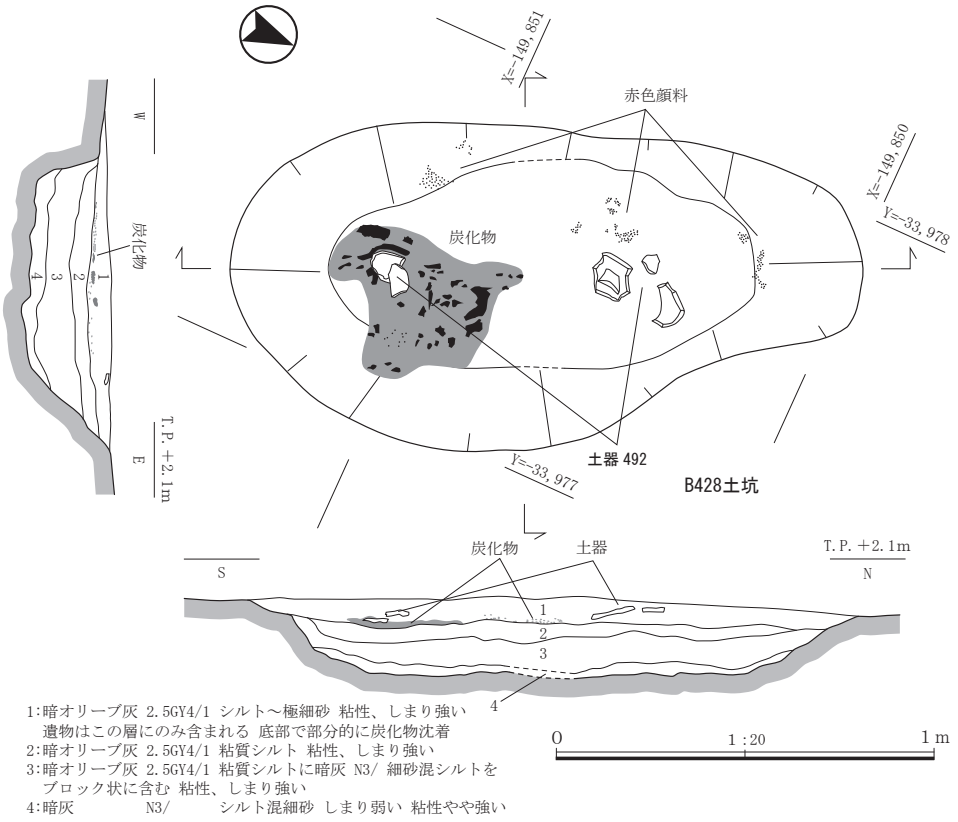



**図 83　第 13 b 面　遺構図（6）**

炭化米 44 点、ナデシコ科の種子 6 点を確認した。２基のピットについては、いずれも直径 0.1 m、深さ 0.1 m前後の小形のものであり、暗灰色の細砂混シルトで埋まっていた。

**B380 土坑**（図 82）　20N － 8g・9g 区で確認した、平面が南北に細長い楕円形の土坑である。規模は、長軸 2.01 m、短軸 1.41 m、検出面からの深さ 0.1 mを測る。埋土は２層に分層可能であり、上層の灰オリーブ色のシルト混細砂と、下層のオリーブ黒色のシルト混細砂からなる。土坑の中央付近で弥生時代中期と考えられる甕（489）を含む弥生土器が出土した。

**写真 49　第 13 b 面　B428 土坑（南から）**

**B384・386 土坑**（図 82）　20N － 8g 区で検出した、２基ともに平面が円形を呈し、比較的浅い皿状の土坑である。B384 土坑は直径 0.59 m、検出面からの深さ 0.08 mを測り、埋土はオリーブ黒色のシルトの混じる細砂の単層であった。B386 土坑は直径 0.81 m、深さ 0.07 mを測り、埋土は暗オリーブ灰色の極細砂～細砂の混じるシルトの単層であり、炭化物が含まれていた。

**B427・428 土坑**（図 82・83・90、写真 49）　微高地北半の 20N － 8f 区で検出した、いずれも長軸が北北西－南南東をとる、ほぼ楕円形を呈する土坑である。規模は B427 土坑が長軸 1.64 m、短軸 0.9 m、検出面からの深さ 0.23 m、B428 土坑が長軸 1.68 m、短軸 0.86 m、検出面からの深さ 0.23 mを

測る。B427 土坑の埋土は、1 層が灰～黄灰色のシルト～中砂、2 層がオリーブ灰色のシルト～細砂からなり、1 層下部で炭化物を検出した。また、1 層から弥生時代前期後半に属すると考えられる甕（491）が出土した。B428 土坑の埋土は 1 層が暗オリーブ灰色のシルト～極細砂、2 層が暗オリーブ灰色の粘質シルト、3 層が暗灰色のシルトのブロックが混じる暗オリーブ灰色の粘質シルト、4 層は暗灰色のシルト混細砂であり、1 層から炭化物、赤色顔料を検出した。また、1 層から弥生時代中期初頭に属すると思われる甕（492）が出土した。尚、この土器は先述のように 4 m北西に位置する B340 土坑出土の甕底部と接合した。さらに、B428 土坑の埋土を洗浄したところ、スミレ科 9 点、ナデシコ科 2 点、タデ属 6 点、ブドウ属 1 点、キイチゴ属 2 点、カナムグラ 1 点の各種種子が出土した。尚、これらの土坑はそれぞれ第 14 － 1 面･第 14 － 2 面で検出した。しかし、検出位置、長軸の方向、規模、埋土の様相、出土遺物、埋土に赤色顔料や炭化物が含まれる点など、第 13 b 面の B340 土坑と共通する特徴が多く見られることから、B340 土坑と同時期に、同様の目的で掘削された遺構と考えられるため、本項で記述することにした。

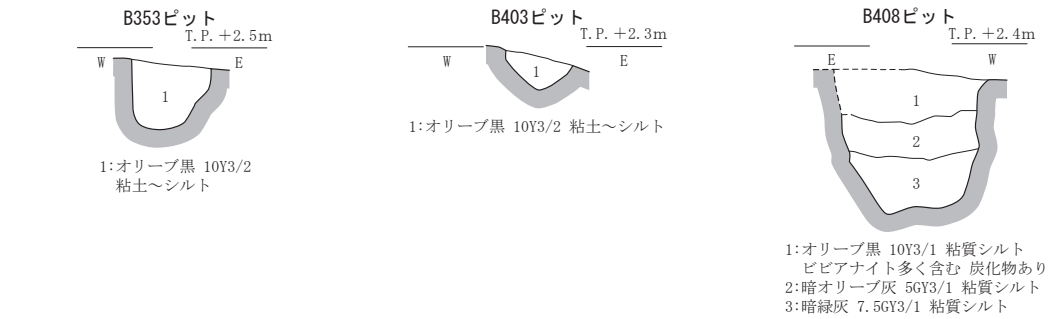
次に、ピットについて B419 微高地の北側から、地区ごとにまとめて詳述する。

**B353・403・408 ピット**（図 84 ①）　微高地北側の 20N － 8e・9f 区で検出したピットである。平面形は B353・408 ピットの 2 基が円形、B403 ピットは不整形である。B353・403 ピットは直径・幅 0.2 m前後、検出面からの深さ 0.2 m未満の小規模なピットであり、埋土もオリーブ黒色の粘土～シルトの単層であった。これらに対し B408 ピットは復元直径 0.39 m、検出面からの深さ 0.38 mとやや大きく、粘質シルトの埋土も炭化物を含むオリーブ黒色、暗オリーブ灰色、暗緑灰色の 3 層に細分可能であった。3 基それぞれ間隔が 5 m以上離れており、明確な関連性は見出し難い。

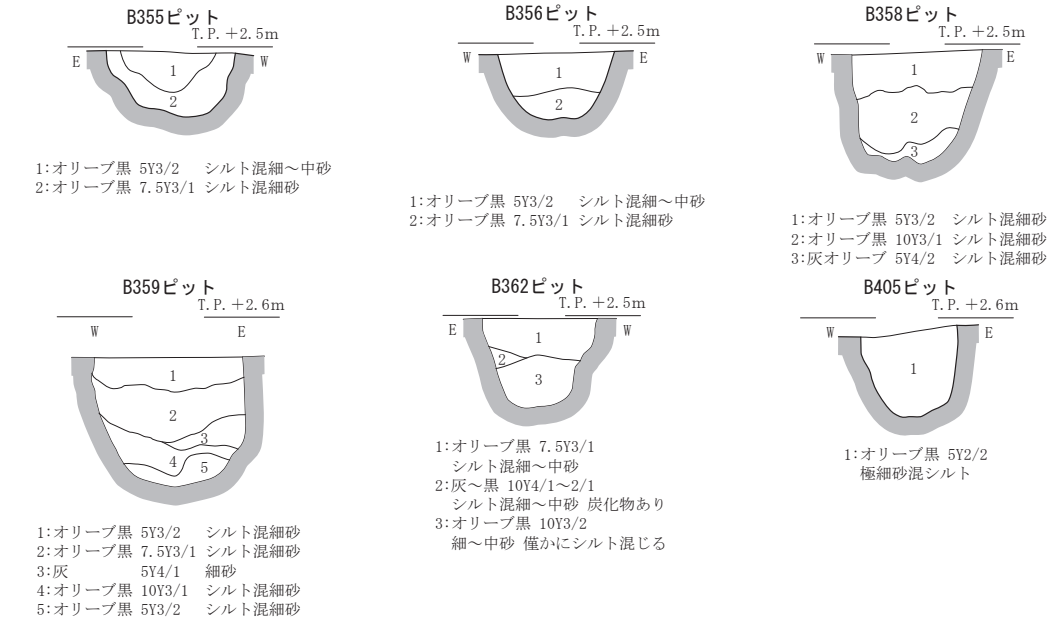
**B355・356・358・359・362・405 ピット**（図 84 ②）　微高地南側の 20N － 9g 区で確認したピット群についてまとめる。いずれも平面は円形であり、直径は B405 ピットの 0.26 mを除いて、0.3 m以上 0.4 m未満の範囲に収まる。検出面からの深さについては 0.1 m以上～ 0.2 m未満のやや浅いもの（B355・356）、0.2 m以上～ 0.3 m未満のもの（B362･405）、0.3 m以上～ 0.4 m未満のやや深めのもの（B358･359）に分かれる。これらピットの埋土の大半はオリーブ黒色のシルトの混じる細砂である。配置については、同地区内の B360・361 土坑や第 13 面検出の B278・279・280 ピットを含めた場合でも、等間隔に並ぶような規則性は見出せない。

**B377 ～ 379・382・383・387 ～ 389 ピット**（図 84 ③）　微高地南側の 20N － 8g 区を中心としたピット群である。いずれも平面は円形であり、直径については 0.2 m以上～ 0.3 m未満のもの（B378・387 ～ 389）、0.3 m以上～ 0.4 m未満のもの（B379）、0.4 m以上～ 0.5 m未満の比較的大形のもの（B377･382・383）が見られる。検出面からの深さは、0.1 m未満～ 0.1 m前後の浅いもの（B377 ～ 379・382）、0.2 m以上～ 0.3 m未満のもの（B387･389）、0.3 m以上～ 0.4 m未満のやや深いもの（B388）、0.5 m以上のかなり深いもの（B383）が見られる。埋土については、B377 ～ 379・382 の浅いピットはいずれも単層で、オリーブ黒色のシルト～細砂である。B383・388 ピットはいずれも 2 層からなり、粘質のシルトが含まれる点が共通している。B387 ピットの埋土は 3 層、B389 ピットは単層であるが、やはりオリーブ黒色のシルト混細砂が主体を占める。配置については、B341・343・380・384・386 の 5 基の土坑も含めて検討した場合でも、やはり規則性は見出せない。尚、B383 ピットから石（花崗岩）が 1 点出土している。

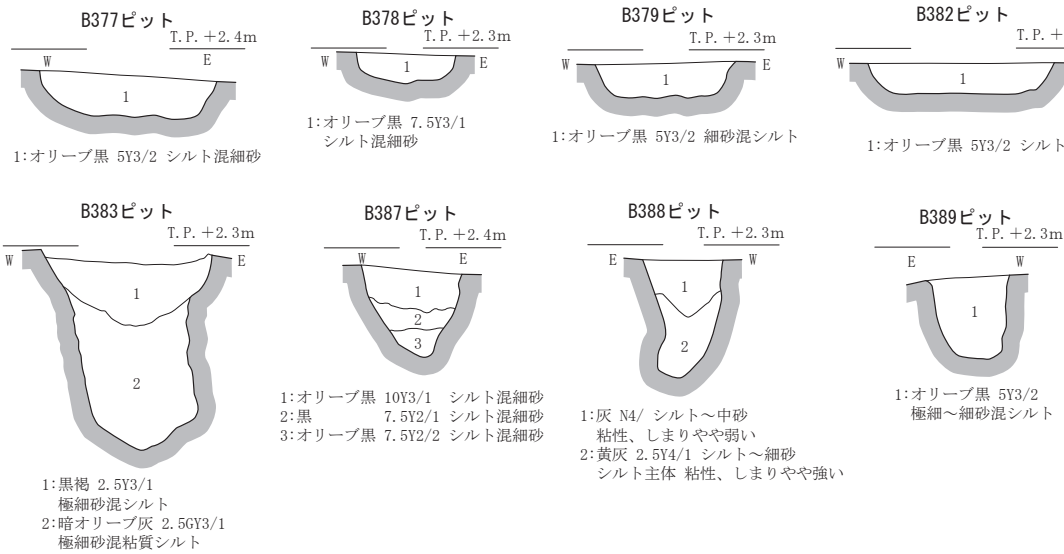
**B354・365・366・368 ～ 370・372・373・376・390・393 ～ 398・407・424 ～ 426 ピット**（図 85）　微




① B419 微高地北側（20N － 8e・9f 区）のピット




② B419 微高地南側（20N － 9g 区）のピット




③ B419 微高地南側（20N － 8g・9g 区）のピット

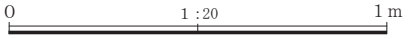



図 84　第 13 b 面　遺構図（7）

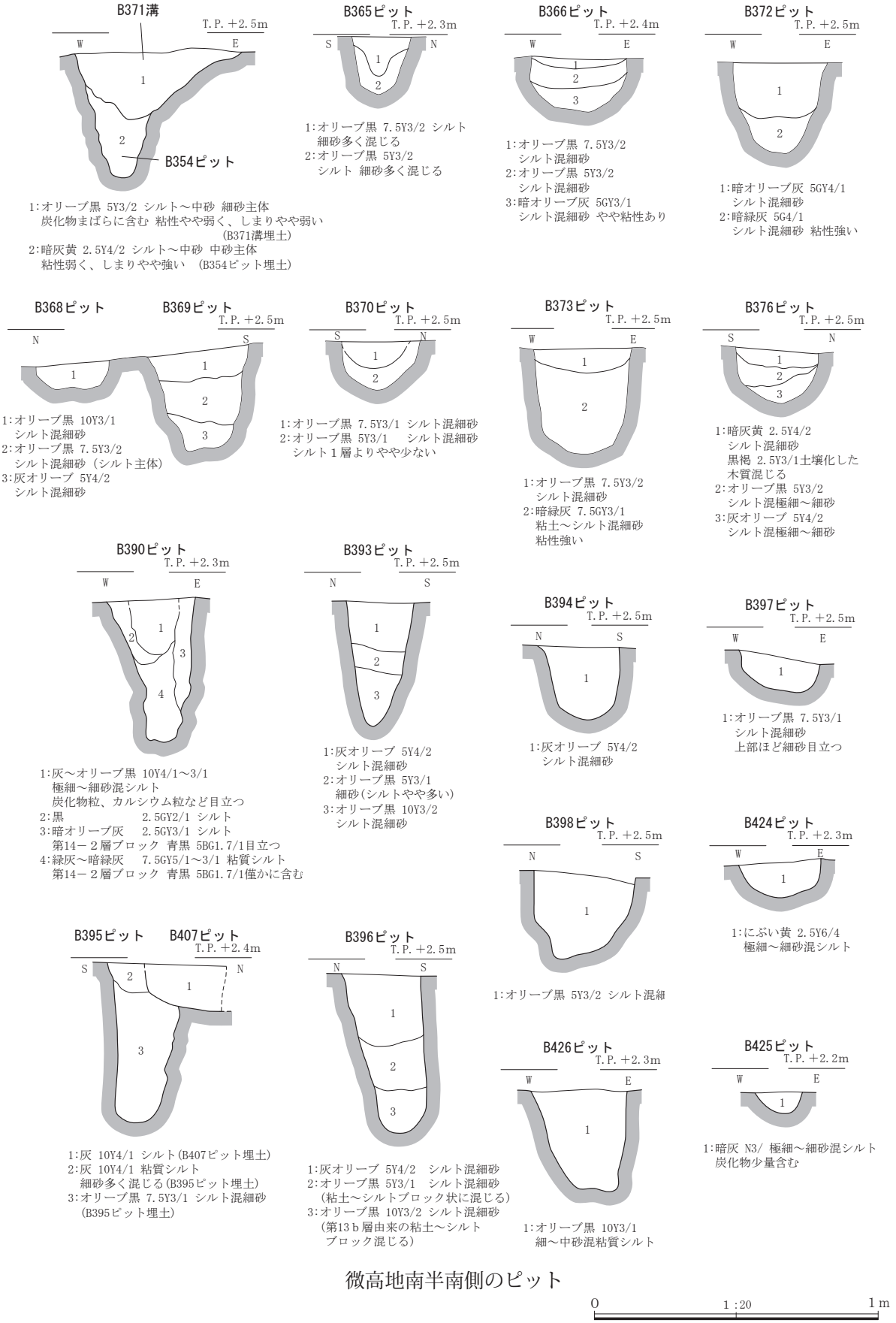
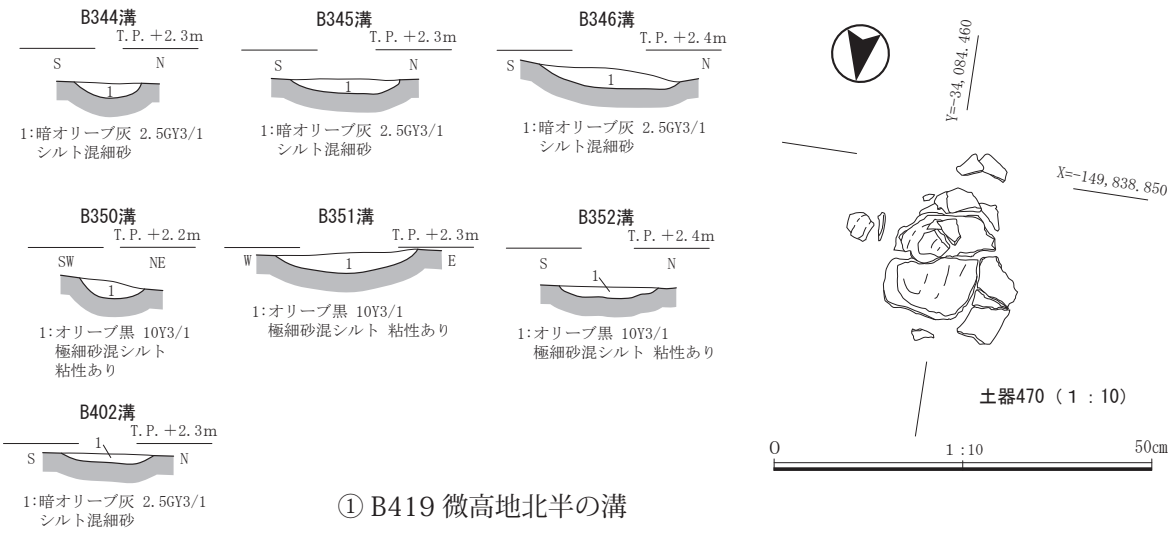
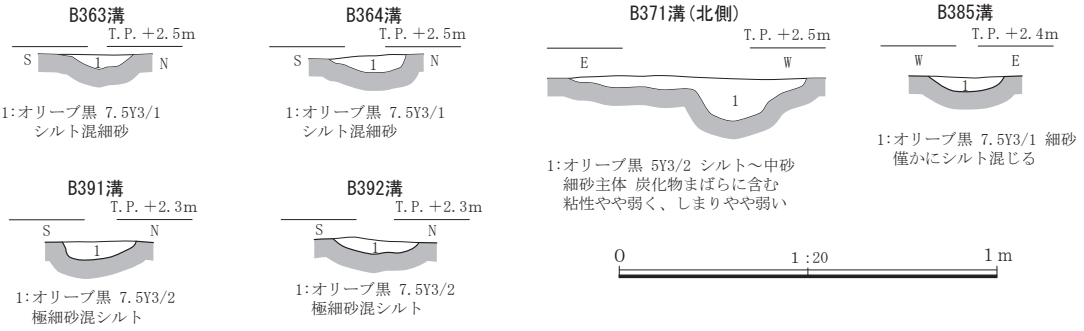



図 85　第 13 ｂ面　遺構図（８）




① B419 微高地北半の溝




② B419 微高地南半の溝

**図 86　第 13 b 面　遺構図（9）**

高地南側、第 13 面検出の B266・287 土坑より南のピット群について詳述する。このピット群が最も密集度が高く、また深さ 0.5 m前後の比較的深いピットが多く見られた。平面形は、南北に細長い楕円形の B407 ピット 、不整形の B426 ピットを除く殆どが円形である。直径は 0.2m 未満のもの（B425）、0.2 m以上～ 0.3 m未満のもの（B365・368・370・393 ～ 397・424）、0.3 m以上～ 0.4 m 未満のもの（B366・369・372・373・376・390・398・426）があり、0.4m を超えるものは見られない。検出面からの深さは 0.1 m未満のもの（B425）、0.1 m以上～ 0.2 m未満のもの（B366・368・370・397・407・424）、0.2 m以上～ 0.3 m未満のもの（B365・376・394）、0.3 m以上～ 0.4 m未満のもの（B354・369・373・398・426）、0.4 m以上～ 0.5 m未満のもの（B372・393）、0.5 m以上のもの（B390・395・396）に分かれる。埋土についてはオリーブ黒色～灰オリーブ色を呈する、細砂の混じるシルトの見られるものが多い。最も深い B390 ピット（図 85、写真 50）の埋土下層には第 14 層に由来すると考えられる青黒色のシルトのブロックが含まれていた。配置について、土坑や第 13 面検出の土坑・ピットを含めて比較・検討したが、

**写真 50　第 13 b 面　B390 ピット（南から）**

建物を構成するような規則的な傾向は見出し得なかった。

続いてB419微高地で確認した溝について北側から述べる。

**B344～346・350～352・402溝**（図86①）　微高地の北半で検出した溝（B351溝の一部は微高地南半まで及んでいる）である。B350・351溝は、微高地西側縁辺に沿う方向に、それ以外の溝は西側縁辺に直交する方向に走っていた。検出長は最も短いB402溝で1.9 m、最も長いB351溝で6 mであり、幅は0.1～0.4 m、検出面からの深さは0.04～0.08 m前後の小規模な溝である。これら溝は、近隣のピットや土坑の埋土とほぼ同じ、暗オリーブ灰色のシルト混細砂、もしくはオリーブ黒色の極細砂混シルトで埋まっていた。切り合い関係については、B346溝はB350溝を、B351溝はB352溝を切っていた。

**B363・364・385・391・392溝**（図86②）　微高地南半で検出した小規模な溝についてまとめる。検出長はいずれも2 m未満であり、幅は0.17～0.3 m前後、検出面からの深さは0.03～0.05 mである。埋土はオリーブ黒色のシルト混細砂あるいは極細砂混シルトであり、付近の土坑やピットの埋土とほぼ同じである。B385溝はB380土坑を切っていた。

**B371溝**（図86②）　微高地南側、B374土坑の西側を取り巻くように位置していた溝である。検出長3.65 m、最大幅0.65 m、検出面からの深さ0.12～0.25 m前後の溝である。底部の断面はゆるいV字を呈していた。埋土はオリーブ黒色のシルト～中砂であり、この付近の土坑・ピットの埋土とほぼ同じである。B342土坑、B372・373・404ピットに切られており、B354ピットを切っていた。このような切り合い関係から、付近の土坑、ピットが掘削された時期と比較的近接した時期に掘削された溝と推定される。（飯田）

第13面・第13層出土遺物（図87）

**A634微高地**（図87－469）から弥生土器壺底部1点（469）が出土した。外底面はヘラケズリ調整で、外面は底面まで黒色物質が塗布されており、弥生Ⅰ様式である。

**B266土坑**（図87－480、図版35）から弥生土器少量が出土した。480は鉢である。直線文3帯と鋸歯状の波状文を施され、弥生Ⅱ様式に入ると思うもので、第13 b面B399土器出土地点の土器と接合した。

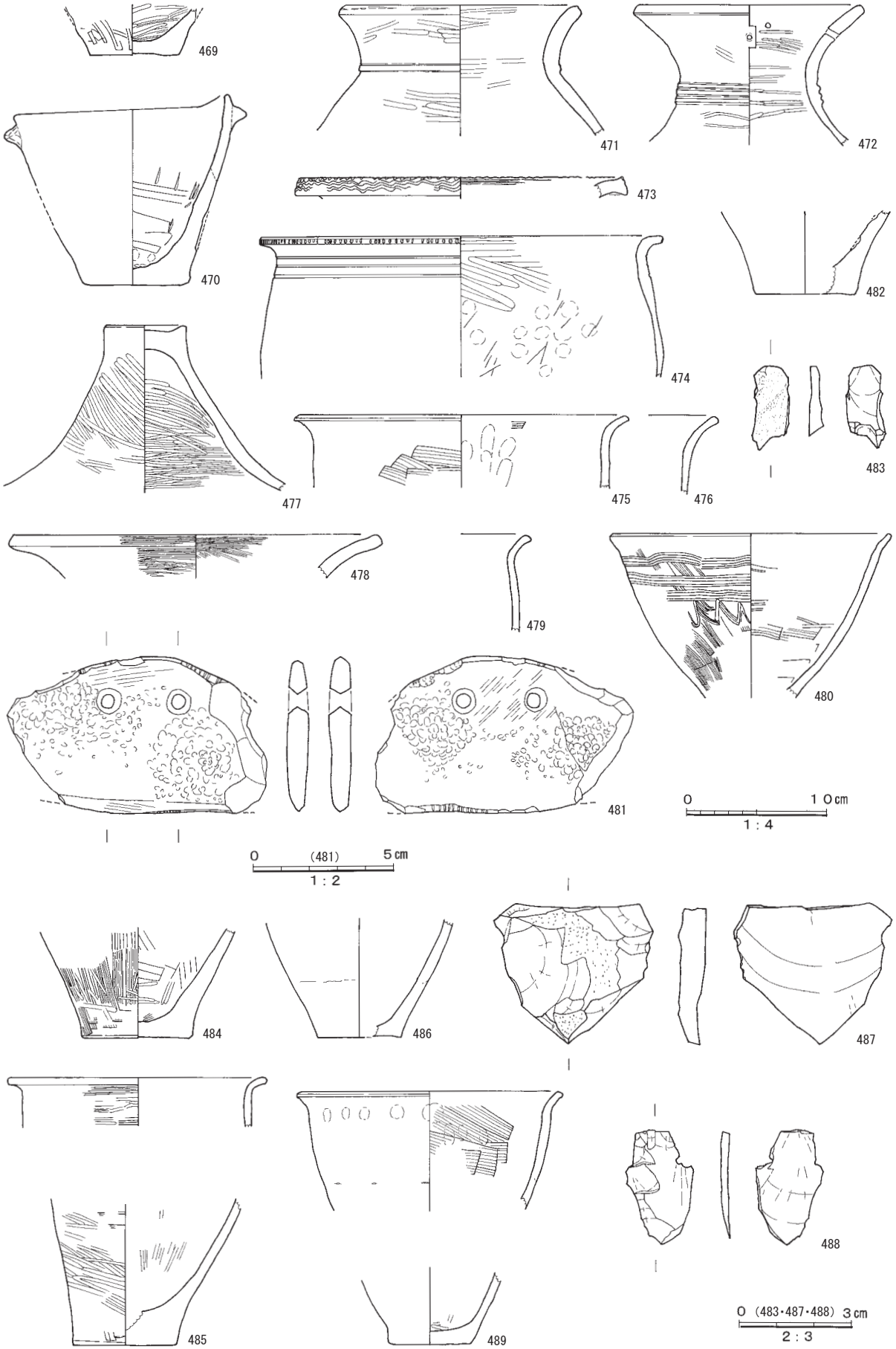
**B267流路**（図87－471～477）から弥生土器が出土した。471～473は壺、474・476は甕、475は鉢、477は甕蓋である。473・476は弥生Ⅱ様式でそれ以外は弥生Ⅰ様式である。471・472は頸部に削り出し凸帯を施され、472は口縁部に2箇所穿孔されている。473は口縁端部に刻目と櫛描波状文を施され、内面は細いヘラミガキ調整である。

**B287土坑**（図87－478・479・481、図版36）から弥生土器、石庖丁（481）が少量出土した。478は壺、479は甕で、弥生Ⅰ様式と思うものである。478は内外面に黒色物質を塗布され、ヘラミガキ調整である。481は緑泥石片岩製のⅡ類直線刃半月形で、A・B面ともに敲打痕があり、研磨痕がある。背潰れ痕は背と刃にある。

**06－2調査区　第13層**（図87－482・483、図版36）から弥生土器片、サヌカイトチップ（483）が出土した。482は底部で弥生Ⅰ様式かと思うものである。

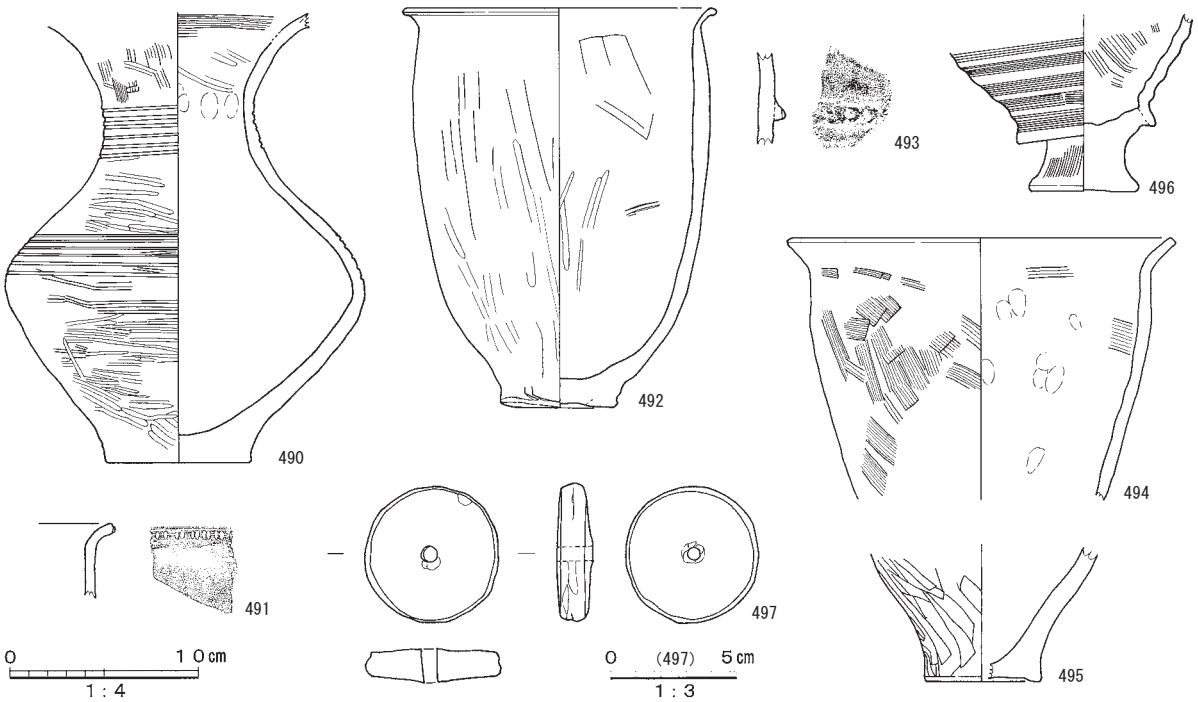
第13 b面・第13 b層出土遺物（図87・88）

**B340土坑**（図87－484）から弥生土器片が極少量出土した。484は甕底部で弥生Ⅰ様式かと思うものである。外面は粗いハケメと細かいハケメ調整後ヘラミガキ調整で、ススが付着し、内面は粗いハケメ調整後ヘラミガキ調整で、一部コゲが付着している。




469：A634 微高地、470：(02 － 1 ) 第 13 b 層、471 ～ 477：B267 流路、480：B266 土坑、478・479・481：B287 土坑、482・483：(06 － 2 ) 第 13 層、484：B340 土坑、485：B349 ピット、486：B367 土坑、487・488：B374 土坑、489：B380 土坑

図 87　第 13 面　出土遺物（1）




490：B401 ピット、491：B427 土坑、492・493：B428 土坑・周辺、494 ～ 497：(06 － 2) 第 13 b 層

**図 88　第 13 面　出土遺物（2）**

**B347 土坑**から弥生土器片 1 点が出土した。

**B349 ピット**（図 87 － 485）から弥生土器甕 1 点（485）が出土した。485 は口縁部と底部が接合しないが同一個体とした。外面はハケメ調整後ヘラミガキ調整で、ススが付着し、内面はナデ、ヘラミガキ調整でコゲが付着している。弥生Ⅱ－ 1 様式かと思うものである。

**B367 土坑**（図 87 － 486）から弥生土器甕底部 1 点（486）と砂岩 1 点が出土した。486 は外面一部にススが、内面に薄くコゲが付着している。弥生Ⅰ様式である。

**B374 土坑**（図 87 － 487・488、図版 36）から弥生中期と思う弥生土器甕口縁片 1 点、サヌカイト片 2 点（487・488）が出土した。487 はＡ面に自然面が残っている。

**B380 土坑**（図 87 － 489）から弥生土器片少量が出土した。489 は弥生土器甕で口縁部と底部が接合しないが、同一片である。弥生Ⅱ様式である。

**B401 ピット**（図 88 － 490、図版 36）から弥生土器壺 1 点（490）が出土した。頸部と体部に 6 条の沈線文が施され、内外面ハケメ、ヘラミガキ調整である。弥生Ⅰ－ 4 様式である。

**B427 土坑**（図 88 － 491）から弥生土器甕 1 点（491）が出土した。口縁端部に刻目を施され、外面ハケメ、ヘラミガキ調整で、内面ナデ、ヘラミガキ調整である。弥生Ⅰ－ 4 様式かと思うものである。

**B428 土坑・周辺**（図 88 － 492・493、図版 37・38）の埋土中から弥生土器片、土坑近くから縄文土器片が少量出土した。492 は弥生土器甕、493 は縄文土器深鉢片である。492 は B340 土坑から出土した破片と接合した。外面は板ナデ後ヘラミガキ調整でススが付着し、内面は板ナデ後ハケメ・ヘラミガキ調整で一部コゲが付着している。弥生Ⅱ－ 1 様式かと思うものである。493 は B428 土坑周辺から出土したＤ字刻目凸帯が施された長原式である。

**02 － 1 調査区　第 13 b 層**（図 87 － 470、図版 35）から弥生土器鉢 1 点（470）が出土した。口縁部に把手が 1 個残存しているが、本来は対になっていたと考えられる。二次焼成で外表面が剥離し、赤

色化しており、内面にコゲが付着している。弥生Ⅰ様式である。

**06－２調査区　第13ｂ層**(図88－494～497、図版36)から弥生土器片少量と土製紡錘車１点(497)が出土した。

494・495は甕、496は脚付鉢？である。494は弥生Ⅰ様式末かⅡ様式初めか、495は弥生Ⅱ様式かと思うものである。496は柱実の脚がつき、体部に櫛描直線文（６条１帯）５帯が施されている。弥生Ⅱ様式かと思うものである。497は焼成前に上から下に孔をあけたことにより、下の孔の周辺が突出している。

池島Ⅰ期地区の第13－１層出土遺物は弥生Ⅰ－３～４様式のものが主だがⅡ様式も含んでいる。第13ｂ層出土遺物は弥生Ⅰ－２～４様式のものが多い。今回報告する第13層は池島Ⅰ期地区の様相と齟齬をきたさないが、第13ｂ層は弥生Ⅱ様式が目立つ。(陣内)

**4）第 14 －２面・第 14 －２面ベース（第 14 －２ｂ面）**

第 14 －２面（図 90、写真 51、図版 26 ～ 28）

第 14 層は、池島Ⅰ期地区において、第 14 －１・14 －２層の２つの土壌化層と第 14 －２ｂ層の洪水堆積層に分層されているが、02 －１・06 －２の両調査区においても同様に３つの層に分層が可能であった。第 14 －１層は、暗灰色～オリーブ黒色の粘土～シルトで、ヒシの実などの有機物を比較的多く含んだ湿地性の堆積物層であり、第 14 －２層は当遺跡において「第４黒色粘土（泥）層」と通称している、黒～青黒色のシルトである。

第 14 －１面は、洪水堆積層の第 13 ｂ層を除去し検出した遺構面である。池島Ⅰ期地区の当該面では、人為的な遺構は確認されず、人・イノシシ・シカ・鳥類の足跡が検出されている。今回の２つの調査区においても、やはり遺構は検出されず、第 13 ｂ層で埋没したヒトや動物の足跡が検出された。02 －１調査区北半では人・トリ・イノシシ・シカの足跡を、06 －２調査区では 1N － 4f 区や 1N － 2g 区でヒトの足跡を比較的多数検出した。また、02 －１調査区北半中央の 1N － 7e 区では第 14 －１層掘削中にイノシシの牙製装飾品が出土した。

第 14 －２面は第 14 －１層、及び部分的に確認できる薄い水成堆積層を除去し検出した遺構面である。地形については、02 －１調査区中央及び 06 －２調査区東端に微高地が見られ、２つの微高地の南側にはいずれも水田域が形成されていた。最高地点は 06 －２調査区の微高地東端の T.P.2.02 m、最低地点は 02 －１調査区北西隅の T.P.1.11 mである。両調査区で検出した遺構は、微高地、水田畦畔のほか、溝、溝に伴う高まり、土坑、杭列などである。以下、02 －１調査区から東に向かって地形と遺構について詳説する。

02 －１調査区では中央に **A680 微高地**を確認した。検出した範囲は東西約 41 m、南北約 40 mである。微高地上は南東隅が T.P.1.72 mと最も高く、北西に向かって標高を減じており、北西部分に T.P.1.39 mの最低地点が見られる。なお、この微高地は池島Ⅰ期地区の８微高地につながると考えられる。微高地を取り巻く平坦面との比高差は 0.05 m～ 0.12 mである。微高地上の縁辺沿いにおいて、土器が一個体分出土する土坑や、ほぼ完形の土器が出土する地点が数箇所見られた。以下、それらについて詳述する。

**A677 土坑**（図 89、写真 52） 微高地南西の 1N － 9j 区で検出した、平面が隅丸長方形を呈していたと考えられる土坑である。長軸は遺存部分で 0.86 m、短軸 0.8 m、検出面からの深さ 0.07 mを測り、底部は浅い皿状を呈していた。埋土は暗緑灰色の細砂混シルトである。遺物は弥生時代前期前半に属すると考えられる壺（509）がほぼ１個体出土している。

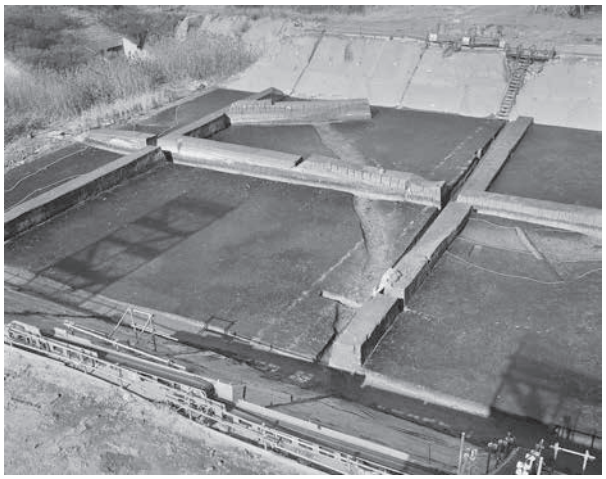


写真 51　06 －２調査区　第 14 －２面　西半（南東から）

**A678 土坑**（図 89、写真 53） 微高地南東の 1N － 6i 区で確認した平面が円形を呈する浅いくぼみ状の土坑である。規模は直径 0.6 m、検出面からの深さ 0.02 mであり、埋土は暗緑灰色の粘質シルトであった。弥生時代前期後半に属すると考えられる甕（510）が出土している。

**土器 511**（図 91） 微高地の南縁辺、A677 土坑の

写真 52　第 14 －２面　A677 土坑　出土土器（北から）

写真 53　第 14 －２面　A678 土坑　出土土器（東から）

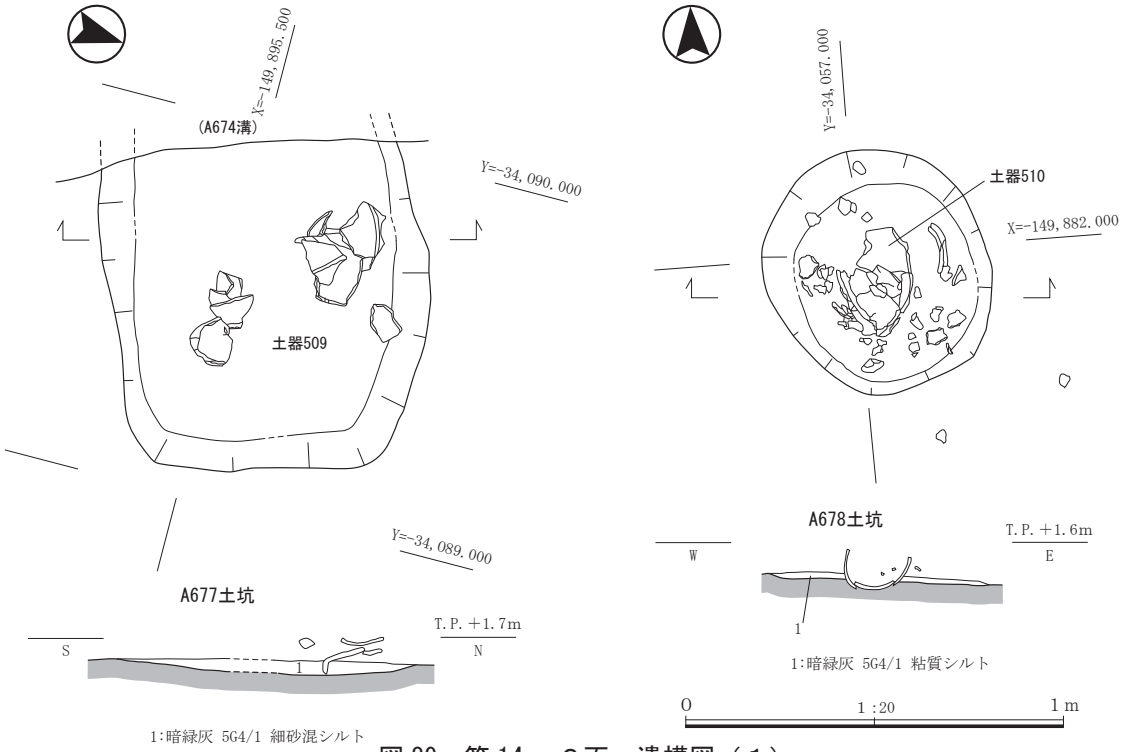



図 89　第 14 －２面　遺構図（１）

北東９ｍの地点において、弥生時代前期と考えられる壺（511）が、破片の状態で直径約１ｍの円形の範囲内にまとまって出土した。

**土器 512・513**（図 91）　土器 512 は微高地北辺、土器 513 は微高地の北東隅で出土した、ともに弥生時代前期後半と考えられる甕である。いずれも破片の状態で、直径 0.5 ｍの円形状にまとまって出土した。

**土器 500・503・504**　土器 513 の南側で出土した。土器 500 は弥生時代前期の壺、土器 503 も弥生前期の鉢、土器 504 は縄文時代晩期の土器である。土器 511 ～ 513 とほぼ同様の出土状況を呈していた。

これらの土坑や土器はいずれも微高地縁辺の隅角などの位置を占めており、微高地の縁辺以外では確認されなかった。このような出土位置から、意図的に埋納あるいは配置された可能性も想定される。

A680 微高地南側の標高 T.P.1.31 ～ 1.61 ｍの平坦な箇所において、水田域を確認した（図 92、写真 54、図版 26・27）。微高地と水田域との比高差はおよそ 0.08 ～ 0.1 ｍを測る。水田域は中央の 1N －

図 90　第 14 － 2 面　平面図

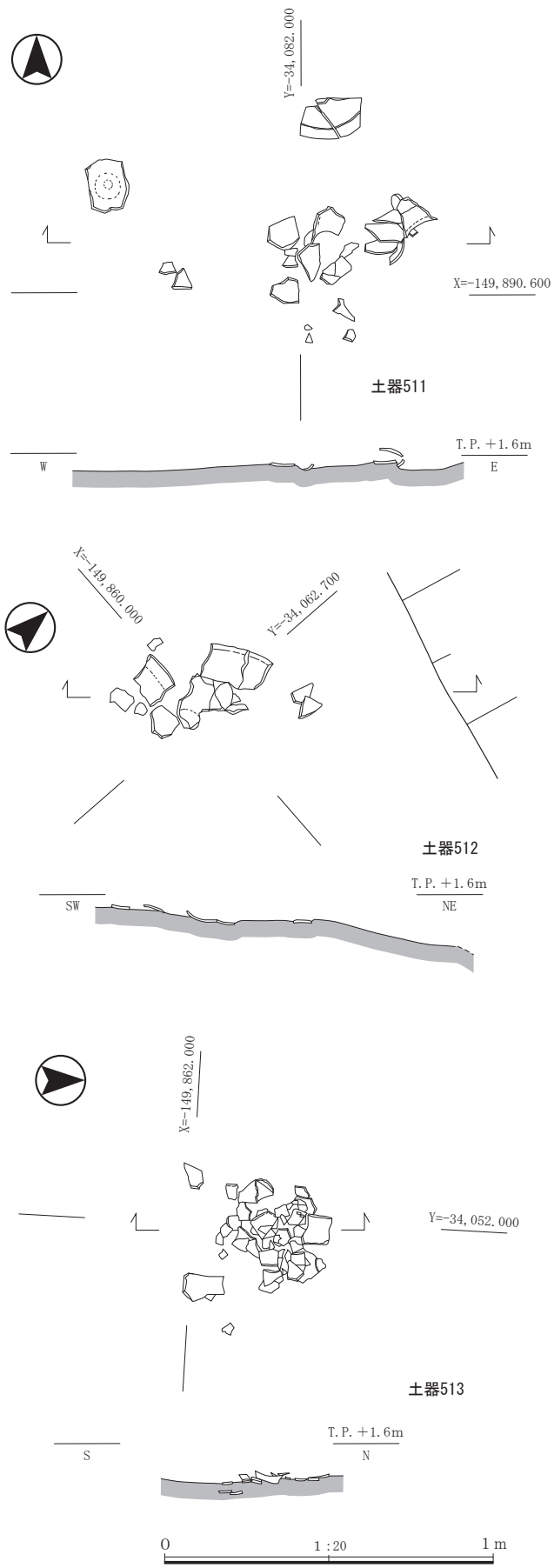



図91　第14－2面　遺構図（2）

7j・8j区付近がT.P.1.55～1.6mと最も高く、西側・南側・東側に向かって下がっていた。水田面は暗灰色の粘土～シルトに覆われていた。検出した畦畔は幅0.25～0.55m、高さは0.03～0.07mを測る。畦畔の配置から、少なくとも9筆の水田を復元することができる。中央の標高の高い部分で正方形に近い形状の水田が2筆みられ、その西側では幅3mと5m前後の2筆、東側では幅2.5～3mの3筆の水田が、北西から南東方向に細長く配置されていた。面積は、最も遺存状況のよいA653・656・657の各畦畔で囲まれる水田で約50.9㎡、その南東隣のA657・659・660・661の畦畔で囲まれる水田で約49.5㎡を測る。水田域と微高地の間にみられる幅0.5～3mの細長い部分は、水路として利用されていたと考えられる（A675水路）。畦畔には水口などの施設は確認されておらず、水田区画への配水は主に畦越しにより行われたと推定される。この水田域に水を供給していたと考えられる遺構としては、A672・673・674の3つの溝がある。いずれも北西から南東方向に走っていた。

**A672溝**　1N－10h区で部分的に検出した溝であり、検出長4.6m、幅0.55～0.75m、検出面からの深さ0.1～0.2mを測る。南側でA674溝に合流していたと推測され、また池島Ⅰ期地区の25溝と同一と考えられる。

**A673溝**　1N－10i区で部分的に検出した溝であり、検出長1.3m、幅0.5～0.7m、検出面からの深さ0.05m前後を測る。やはりA674溝に接続していると考えられる。

**A674溝**（図92、写真55、図版27）　1N－10i・9j区および1O－9b区で確認した溝である。検出長16.4m、幅0.5～1.2m、検出面からの深さ0.1～0.25mを測り、比較的規模の大きい溝である。西側にA676高まりが付随しており、また南側では両側に高まりが付く状況（A676・697高まり）が見られた。

写真 54　02 － 1 調査区　第 14 － 2 面　畦畔（東から）

写真 55　第 14 － 2 面　A674 溝・A676 高まり（南から）

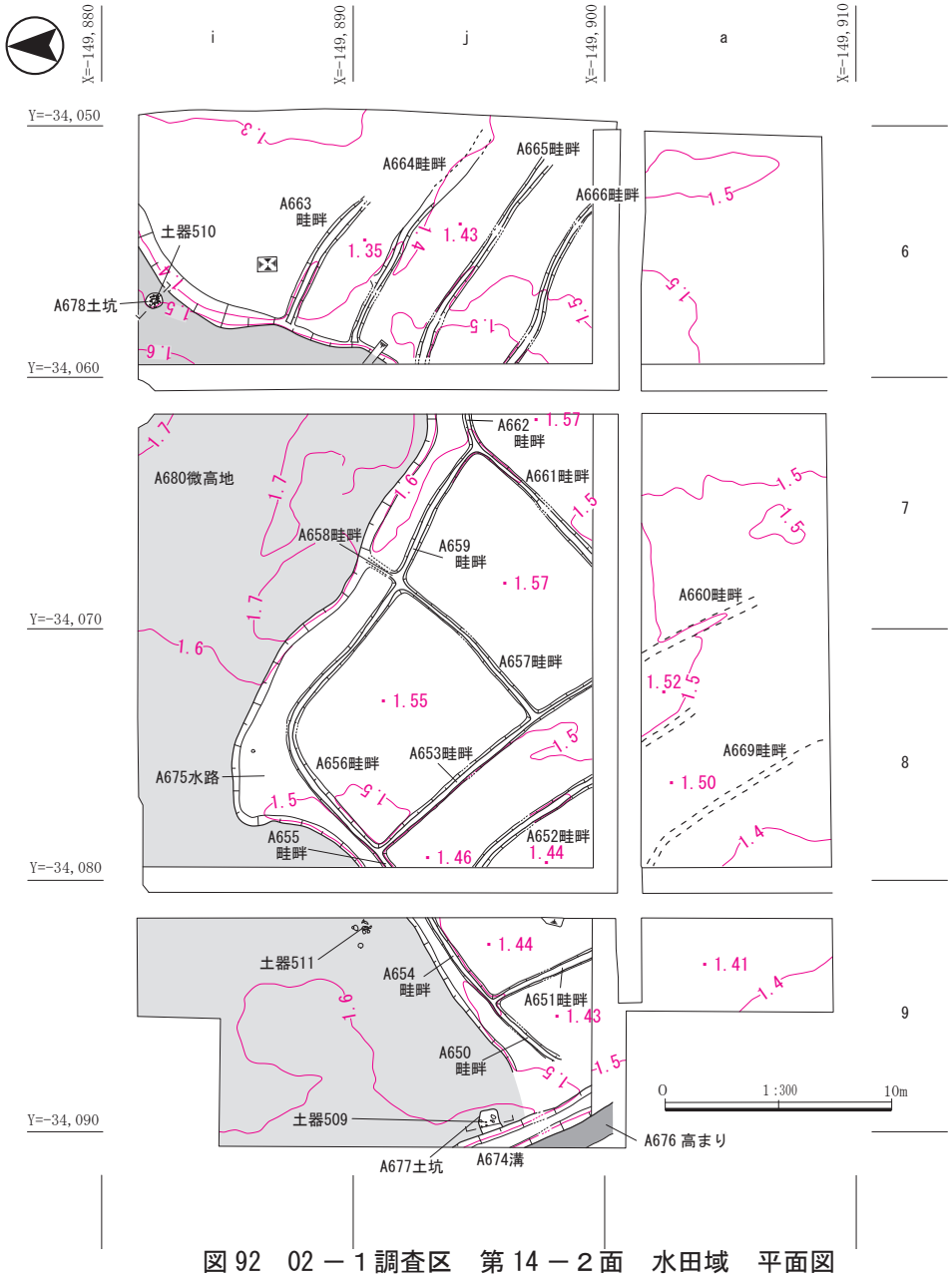



図 92　02 － 1 調査区　第 14 － 2 面　水田域　平面図

A673・674 溝は池島Ⅰ期地区の 26 溝に相当すると考えられる。

A674 溝の西側でも A649・667・668 の畦畔を検出した。幅 0.4 ～ 0.5 m、高さ 0.03 ～ 0.05 mを測る。A674 溝を中心に、両側に水田域の広がる景観が想像され、この溝が基幹水路として重要な役割を果たしたと考えられる。

微高地の北西においても幅 0.3 mの畦畔を 1 条検出した（A670 畦畔）。池島Ⅰ期地区の水田域 F 地区がこの付近まで及んでいたと思われる。

写真 56　第 14 － 2 面　B429 ～ 436 杭（南から）

微高地北側の標高 T.P.1.11 ～ 1.38 mの平坦な部分では、遺構は見つからなかった。池島Ⅰ期地区においても、やはり 8 微高地と水田域 F 地区より北側では遺構は検出されていない。

02 － 1 調査区北側の 1N － 6e 区では第 13 b 層掘削中に杭が 2 点出土した（A702 杭）。約 0.1 mの間隔で互いに若干傾けて打ち込まれていた。尚この杭の内、先端が加工され遺存状況の良好であった南側の 1 点（A702 杭）の樹種はヤナギ属であり、これに対し放射性炭素年代測定を実施したところ、2,130 ± 40(yrBP ± 1 σ ) の補正炭素年代値が算出され（表 3、PLD － 2650）、紀元前 3 ～ 2 世紀の年代を示していることが判明した。

06 － 2 調査区では、調査区中央を南北に走る B422 溝より西側は、西へ向かって標高を減じる緩やかな斜面が広がる。B422 溝付近の標高がおよそ T.P.1.6 m、調査区西端付近の標高が T.P.1.2 m程度であり、およそ 0.4 mの比高差がある。この斜面では水田畦畔などは見られず、溝と杭列を確認した。なお、B420 溝については第 14 － 2 b 面に帰属すると考えられるため、次項で述べる。

**B429 ～ 436・480・481・483・484 杭**（図 93、写真 56）　北北西～南南東の方向で約 20 mにわたって打設されていた杭である。計 12 本を確認でき、長いもので 32cm 程遺存していた。存在する方向より、上面で検出した B335 溝の位置に沿って打設されているとも考えられ、上面に帰属する可能性がある。樹種は B429 杭がムクノキ、B430 杭がサカキ、B431・432 杭がアカガシ亜種、B433 杭がヤブツバキ、B434・436・480・483・484 杭がヤマグワ、B481 杭 がヤナギ属であった。

**B499 流路**（図 72 左）　B267 流路とほぼ同位置を流れていたと考えられる、第 13 b 層段階の流路であり、図 72 に示した断面の観察において、西側部分の存在を確認した。第 14 － 2 層～第 15 層を削り込んでおり、下半部は中砂～細礫の粗い砂礫、上半部はシルト～細砂が堆積し、上方に向かうにつれて細粒化が見られた。この流路のもたらした堆積物により、第 13 面の B337 微高地、第 13 b 面の B496 微高地が形成されたと考えられる。尚、流路の下部では地震に伴うと考えられる不整合を確認した（図 72 左下、写真 42）。不整合は T.P.0.5 m付近の第 15 b 層にまで及んでおり、また不整合の上部では、流路内に堆積する砂礫がめり込んでいた。寒川　旭氏（独立行政法人　産業技術総合研究所）より、この様な状況から、不整合の生じた時期はこの流路内に砂礫が堆積した後と考えられるとのご教示を受けた。第 13 b 層が堆積する段階で発生したと考えられる地震にともなう、噴砂などの変形構造は池島Ⅰ期地区 98 － 1 調査区、池島Ⅱ期地区 02 － 2 調査区、05 － 2 調査区などで確認されており（内田 2008）、寒川氏は弥生時代前期末～中期初頭のこれら地震痕跡について、南海地震に伴う可能性を

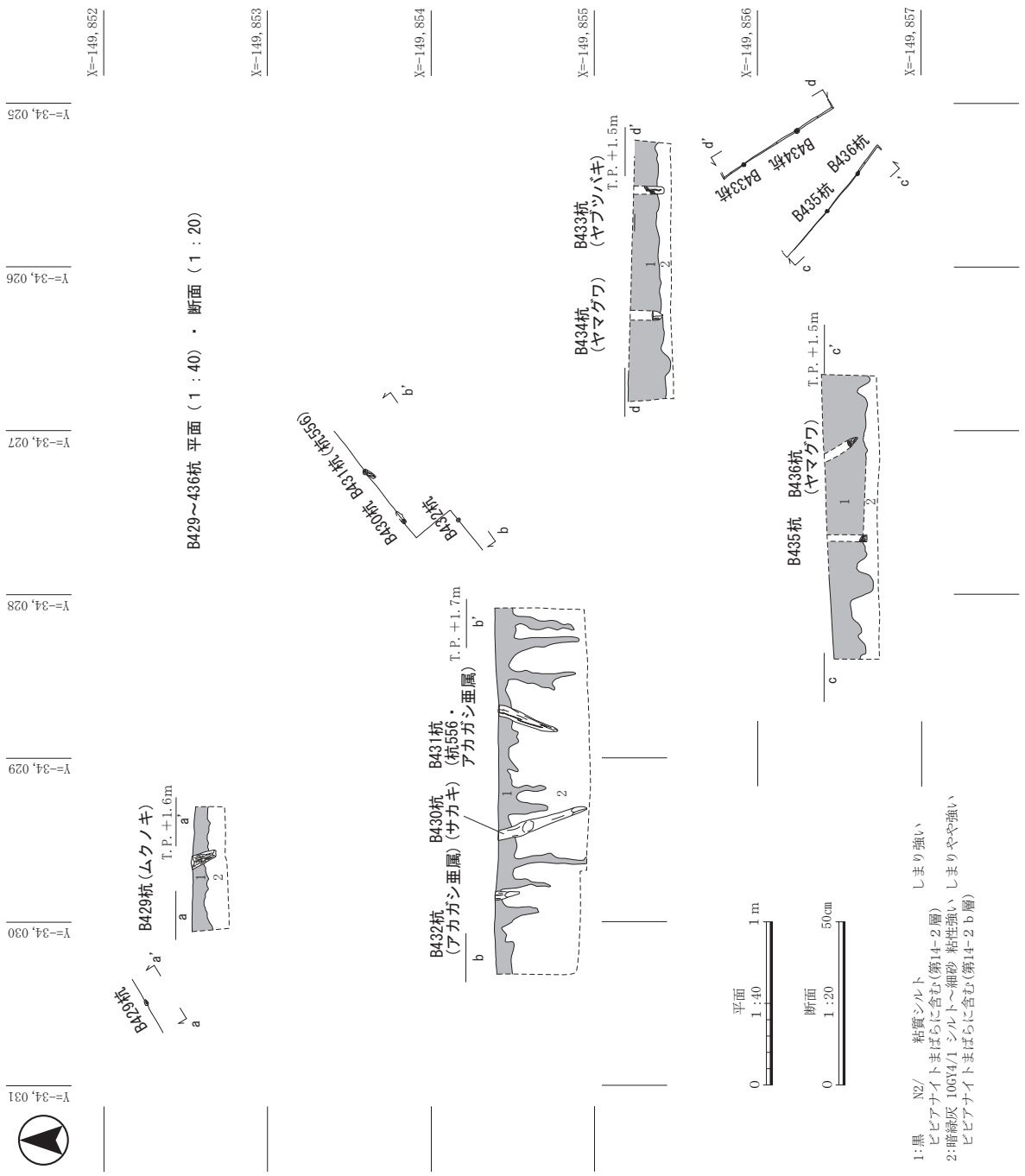



図 93　第 14 − 2 面　遺構図（3）

指摘している（寒川 2007）。

**B421 溝**（図 94）　調査区のほぼ中央、1N − 1f・2g 区で検出した、東北東から南南西方向に走る溝である。検出長 13.6 m、幅 3.5 ～ 5.2 m、検出面からの深さはおよそ 0.2 mを測り、細砂の混じる暗オリーブ灰色あるいは緑灰色のシルトで埋まっていた。Y ＝ − 34,003 m付近より東は B267・499 流路によって削られていた。埋土から弥生時代前期前半の土器片（548）と、縄文時代晩期の土器片（549）が出土している。

**B422 溝**（図 94、図版 28）　調査区中央よりやや東で検出した、南北方向に走る溝である。検出長 25.8 m、幅 0.8 ～ 2.3 m、検出面からの深さは浅い箇所で 0.15 m前後、深い箇所で 0.3 m前後を測る。オリーブ灰色や暗灰色の粘質のあるシルトが埋積していた。なお、断面の観察から、この溝が B421 溝に切

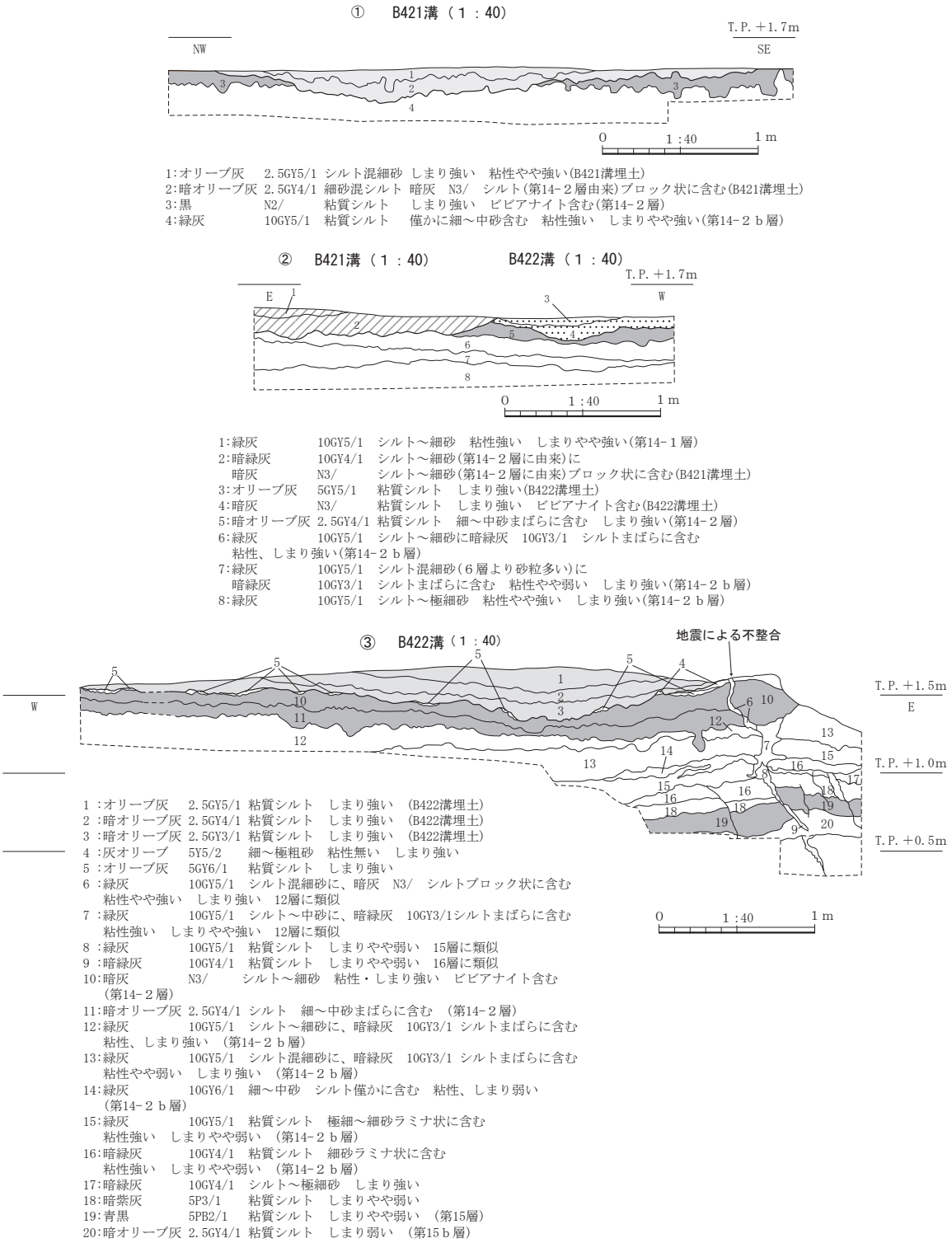



**図 94　第 14 －２面　遺構図（４）**

られている状況を確認した。南側では両側に B472・473 高まりを伴っており、さらに B472 高まりの東側では B470・471 の水田畦畔が付随する状況を確認した。高まりは幅 0.5 ～ 1 m、高さ 0.05 m程度であり、畦畔は幅 0.3 ～ 0.5 m、高さ約 0.03 mであった。後述する調査区南東側の水田域が B267・499 流路によって削られた範囲およびこの付近まで広がっていた可能性が想定され、本溝はこの水田域へ配水する主要な水路の一つであったと推察される。溝の埋土からは、弥生土器片、縄文時代晩期の深鉢口縁 1 点（565）・底部 2 点（554・555）を含む縄文土器片、砥石？ 1 点、砂岩製の投弾？ 1 点

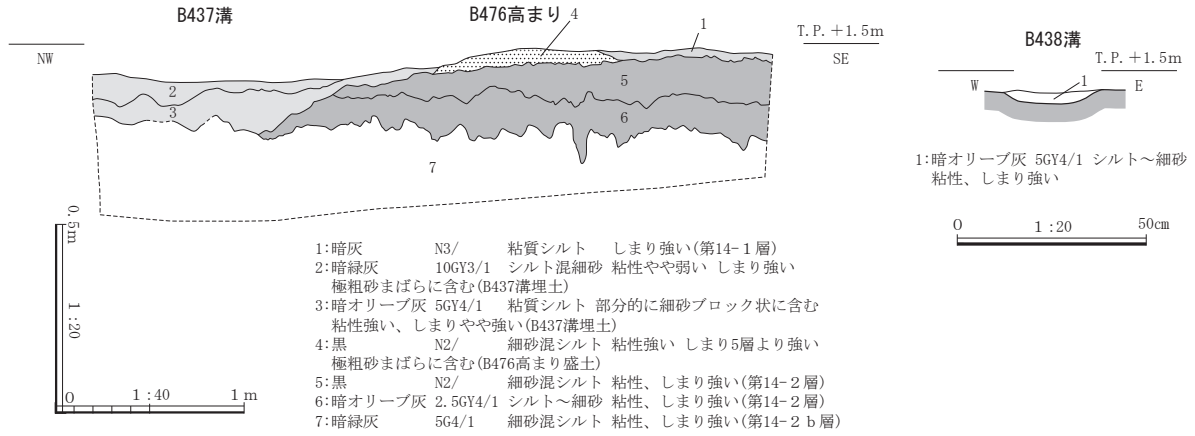



図 95　第 14 －２面　遺構図（５）

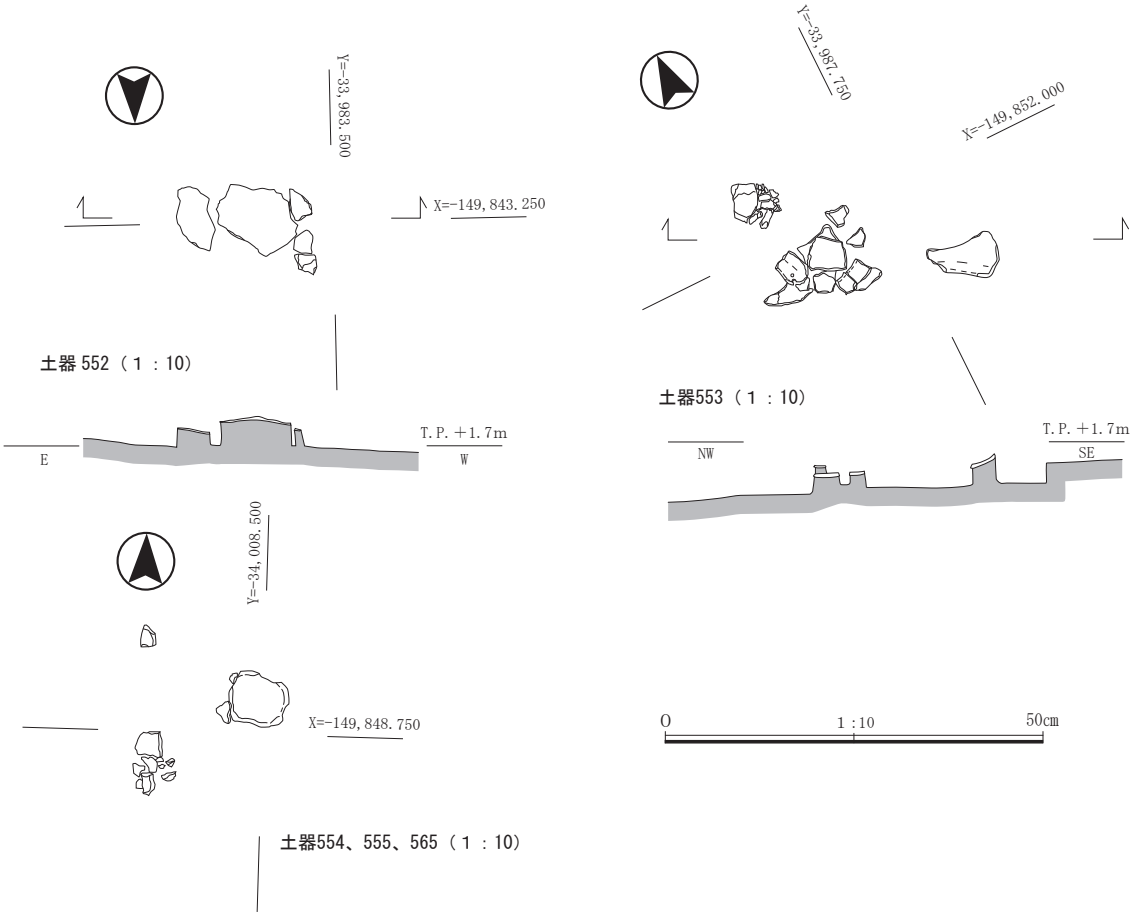


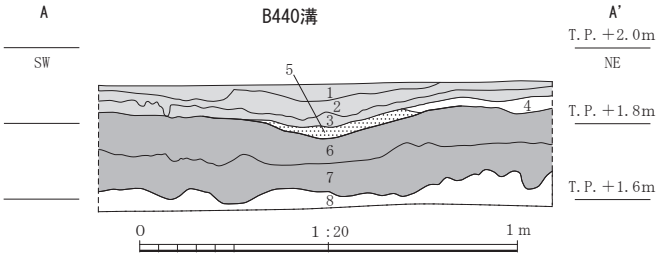

図 96　第 14 －２面　遺構図（６）

が出土した。

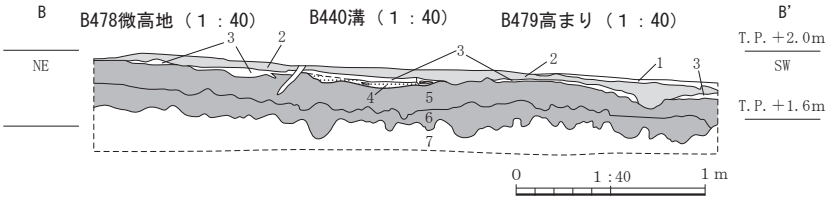
尚、B422 溝の東側においても、B499 流路にみられた地震に伴う不整合と一連のものと考えられる不整合を確認した（図 94 ③）。

06－２調査区東側は、第13面・第13ｂ面と同様に西側に比べ標高が高い。中央付近はT.P.1.78～2.02 mの B478 微高地であり、微高地の北側は北西方向に向かって傾斜している。北側の T.P.1.5 m前後の箇所で B437 溝とそれに伴う B476 高まりを検出し（図 95）、また斜面の２箇所で土器を確認した（図 96）。微高地上では、第 14 －１面の精査の段階で、２基の土坑と１条の溝を確認した（図 89）。

**B437 溝・B476 高まり**　溝は検出長が４ｍであり、肩部を部分的に検出したのみである。埋土の様相や




1:暗オリーブ灰 5GY4/1　シルトに緑灰 10GY5/1 シルトブロック状に含む
　粘性強い　しまりやや強い（第14-１層）
2:暗オリーブ灰 2.5GY4/1 粘質シルト　しまり強い（第14-１層）
3:暗オリーブ灰 5GY4/1　粘質シルト　しまりやや強い
　（第14-１層）
4:暗オリーブ灰 5GY3/1　シルト混細砂　粘性、しまり強い
5:灰オリーブ　5Y4/2　中砂　シルト僅かに含む
　粘性弱い　しまり強い(B440溝埋土)
6:黒　N2/　シルト混細砂　粘性強い　しまりやや強い(第14-２層)
7:緑黒　5G2/1　シルト混細砂　６層より細砂多い
　粘性強い しまりやや強い(第14-２層)
8:暗緑灰　10GY4/1　シルト混中砂　粘性、しまりやや強い(第14-２ｂ層)




1:オリーブ黒　7.5Y3/2　粘土～シルト
2:灰～オリーブ黒 10Y4/1～3/1 粘土～シルト(第14-１層)
3:緑黒　10GY2/1　粘土～シルト 第14-２層上部に薄く堆積 砂粒殆ど含ず
4:黒　10Y2/1　粘質シルト 細砂多く含む　細砂多く堆積(B440溝埋土)
5:緑黒　5G1.7/1　粘質シルト　第14-２層の耕作土
6:オリーブ黒　7.5Y3/1　粘質シルト　第14-２層(2)　土壌化進んだ層
7:オリーブ黒　7.5Y3/1　シルト　極細～細砂多く含む(第14-２ｂ層)

**図 97　第 14 －２面　遺構図（７）**

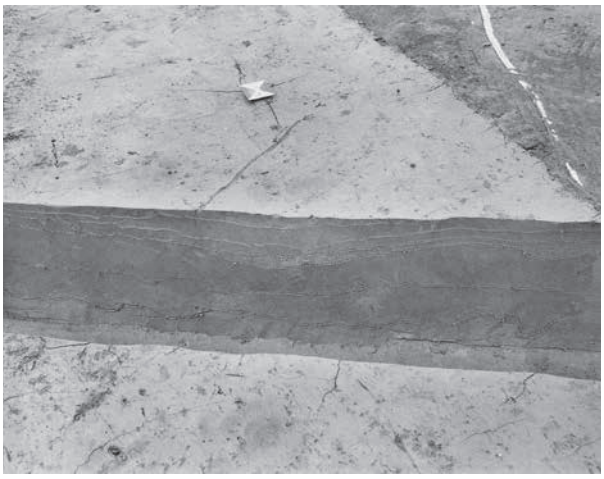


**写真 57　第 14 －２面　B440 溝　断面（東から）**

位置関係から、B421 溝と同一の可能性が想定され、B267 流路によって南西側を削られたと考えられる。溝の南東側には、黒色の細砂混シルトからなる盛土が高さ 0.05 m程で施されていた（B476 高まり）。

**土器 552・553**（図 96）　いずれも破片の状態で１ヵ所にまとまって出土した。微高地から若干離れてはいるが、02 － 1 調査区の微高地縁辺で出土した土器と同様の意図で据え置かれた可能性も考えられよう。土器 552 は弥生時代前期の壺底部で、また土器 553 は弥生時代前期後半に属すると考えられる無頸壺であった。

**B438 溝**（図 95）　調査区北東隅で確認した、検出長 2.24 m、幅 0.26 m、検出面からの深さ 0.04 mの溝である。検出位置、規模、埋土の様相などから、第 13 ｂ面に帰属する溝と考えられる。

B478 微高地南側の標高 T.P.1.47 ～ 1.89 mの東から西へと緩やかに傾斜する部分において、水田域とそれに伴うと考えられる B440 溝、B479 高まりを検出した。

**B440 溝・B479 高まり**（図 97・98、写真 57、図版 28）　微高地の南側で確認した溝と高まりである。B440 溝は幅 1.2 ～ 1.4 m、検出面からの深さはおよそ 0.04 ～ 0.08 mを測る。埋土は黒色の細砂を多

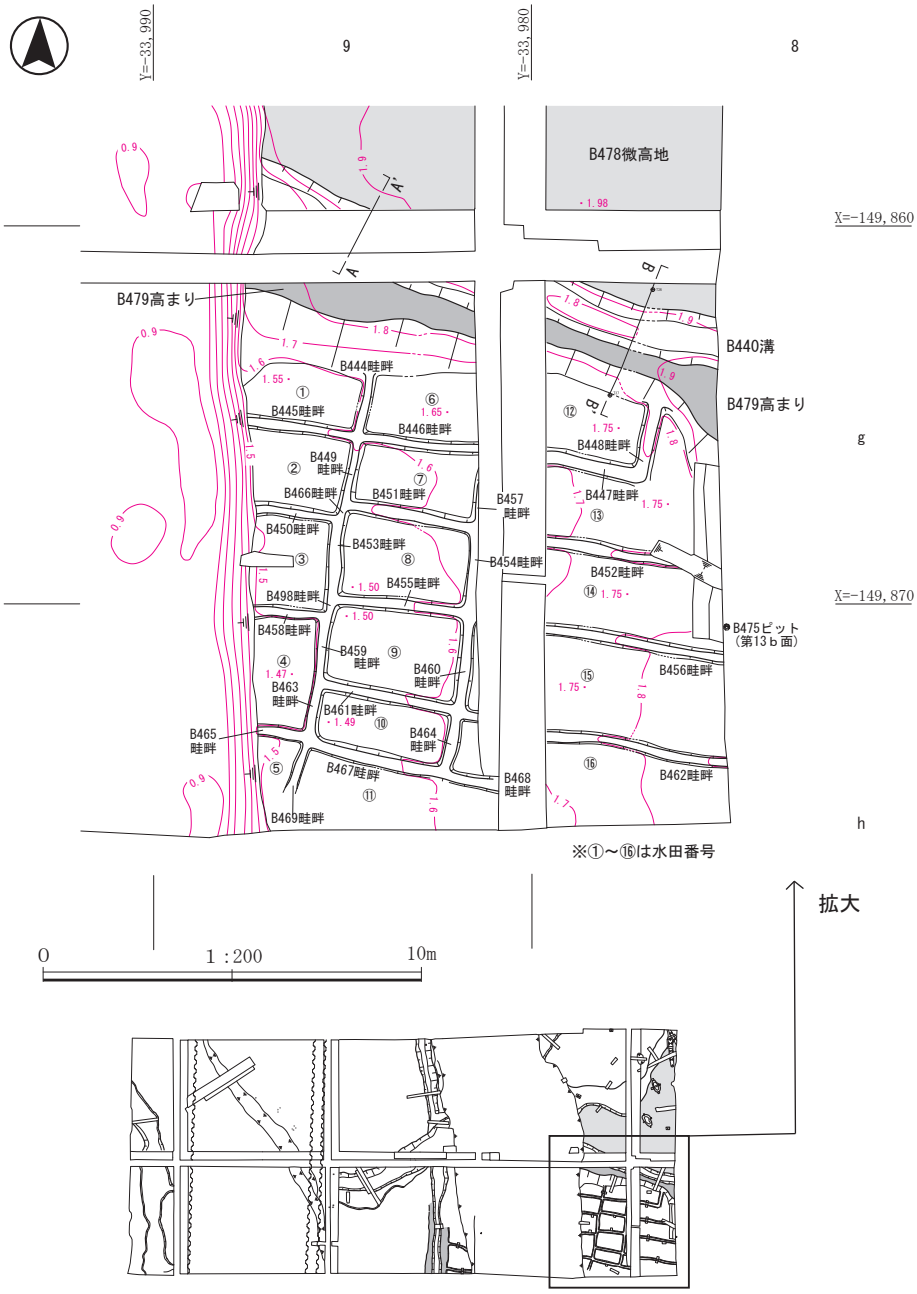



図 98　06 －２調査区　第 14 －２面　水田域　平面図

く含むシルトや灰オリーブ色のシルトを含む中砂からなっており、上層や下層に比べ細砂～中砂が多く含まれる状況が確認された。尚、この溝は東接する 04 －２調査区の 358 流路に接続すると考えられ、この流路から取水していた可能性も推測される。溝の埋土中から弥生時代中期初頭に属すると考えられる甕片（560）、縄文土器片が少量出土した。中期初頭の甕片については、第 14 －２面で出土している他の土器に比べやや新しい。但し、この甕片は第 14 －２面上面（第 14 －１層）で一括出土した土器と接合しているため、上面での耕作等により埋土中に混入した可能性も考えら、溝の機能していた時期を直接示す資料とするには問題がある。B440 溝の南側で確認した B479 高まりは、頂部の幅はおよそ 0.5 ～ 1.5 m、水田面との比高差は 0.07 ～ 0.2 m程度であり、B444・448 畦畔が付随していた。

**水田域**（図 98、巻頭図版１）は、灰～オリーブ黒色の粘質シルトおよび緑黒色の粘質シルトで覆われていた。高まりと水田との比高差は 0.1 ～ 0.2 mを測る。畦畔の遺存状況から、少なくとも 16 筆前

後の水田が存在していたと考えられる。水田一筆の規模は、南北幅が狭いもので 1.4 m、広いもので 2.8 m、東西幅は畦畔の遺存状況の良い水田⑥～⑩で 3 ～ 3.5 mを測り、それより東側の⑭～⑯などはさらに細長く、6 m以上であった可能性がある。一筆の面積については、畦畔の遺存状況が良好な水田⑦・⑧・⑨・⑩が、順に 4.7 ㎡、6.4 ㎡、6.6 ㎡、4.1 ㎡であった。畦畔の規模は、下端幅がおよそ 0.3 ～ 0.5 m、高さは 0.03 ～ 0.07 mを測る。水田域への配水については北側の B440 溝や、調査区中央の B422 溝が基幹水路として重要な役割を果たしていたことが推測される。但し、B479 高まりや B472 高まり上では、水口は確認できなかった。また畦畔上にも水口は検出されず、各筆への配水は主に畦越えで行われていたと考えられる。

水田⑭の東側の法面において、B475 ピット（図 99）を確認した。平面は円形と推測され、規模は遺存部の最大幅が 0.16 m、検出面からの深さが 0.16 mであった。埋土はオリーブ黒色の細砂混シルトに黒色のシルトをブロック状に含んでおり、埋土中から弥生時代中期に属すると考えられる壺の頸部（561）が出土している。ピットの検出位置、埋土、遺物の時期などから、第 13 b 面のピット群の中の 1 基である可能性が高いと思われる。（飯田）

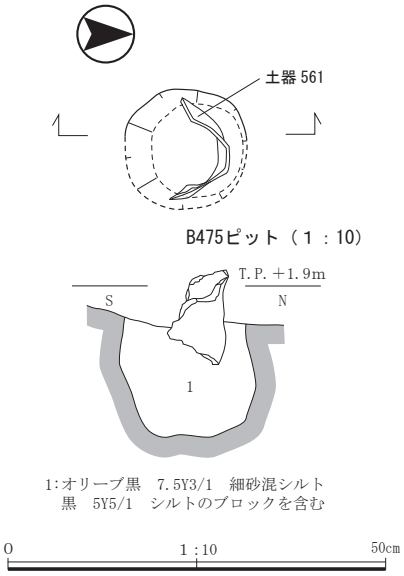



図 99　第 14 － 2 面　遺構図（8）

第 14 － 2 面ベース（第 14 － 2 b 面）（図 100、図版 29）

当面は、土壌層の第 14 － 2 層を除去し検出した面であり、氾濫堆積物である第 14 － 2 b 層の上面に相当する。第 14 － 2 面の水田遺構の痕跡や第 14 － 2 層の形成過程で掘り込まれた遺構、あるいはそれ以前の遺構を検出する目的で調査を行った。

第 14 － 2 b 層は、主に灰色を呈するシルト～細砂の部分、黄褐色の細砂～粗砂の部分、オリーブ黒色の粘土～シルトの部分が見られる。この中で特に細砂～粗砂の部分は比較的厚く堆積しており、第 13 面や第 14 － 2 面で微高地が形成される要因となったと考えられる。

地形は、第 14 － 2 面と大きな違いはない。02 － 1 調査区では、中央よりやや東で T.P.1.4 m台の高い箇所がみられ、それより北側では北西方向に向かって緩やかに標高を減じていた。調査区南側では、第 14 － 2 面において水田域を確認した箇所は、T.P.1.3 m台の平坦な部分であり、その部分より西側は南西方向に向かって下がっていく様相を呈していた。06 － 2 調査区については、第 14 － 2 面で微高地や水田域を確認した東側から中央にかけての部分が T.P.1.4 ～ 1.8 mと高く、それより西側は、西に向かって T.P.1 m前後まで標高を減じていく緩やかな斜面であった。尚、最高地点は 06 － 2 調査区東端の T.P.1.8 m、最低地点は 02 － 1 調査区北西の T.P.0.97 mである。遺構については、溝・土坑・ピットを検出した。以下各遺構について詳述する。

**A691 溝・B420 溝**（図版 29）２つの溝は、検出位置、検出レベル、埋土の様相などから、同一の溝と考えられる。02 － 1 調査区・06 － 2 調査区それぞれにみられる T.P.1.4 m台の高い部分の間の、T.P.1 ～ 1.1 mの谷状の箇所を、蛇行しながら南から北西方向へと走る溝である。幅 1.5 ～ 4 m、検出面からの深さは 0.05 ～ 0.15 mを測り、周囲のベースが緑灰～暗緑灰の細砂～中砂の混じるシルトであるのに対し、埋土は黒色（N2/）の粘土～シルトであった。遺物は出土していない。

**A681・686 土坑**　それぞれ A691 溝の北側・南側で検出した土坑である。A681 土坑は平面円形で直径 0.8 m、検出面からの深さは 0.08 mを測り、埋土は灰色（N4/）のシルト～中砂であった。A686 土坑は長軸 0.8m、短軸 0.6 mの楕円形プランを呈し、検出面からの深さは 0.22 mを測る。埋土は２層に分かれ、上層が黒色（N2/）の粘土～シルト、下層が黒～青灰色（N2/ ～ 5 BG5/1）の粗砂混シルト～中砂であった。これら土坑からは遺物は出土していない。

**A682 ～ 685 ピット**　いずれも A691 溝の南岸、溝が南南東から北西へとカーブする箇所の南側（標高 T.P.1.08 ～ 1.12 m）で検出した 4 基からなるピット群である。いずれも円形プランで、直径は 0.12 ～ 0.2 m、検出面からの深さは 0.05 ～ 0.06 m前後の浅いものであった。埋土は黒～暗灰色（N2/ ～ N3/）の粘土～シルトであり、遺物は出土していない。また位置に規則性は見出せない。

**A687 土坑**　02 － 1 調査区中央の高い箇所（標高 T.P.1.4 m前後）で確認した土坑である。平面形は一辺が 0.7m の隅丸方形に近い形であり、検出面からの深さは 0.3 mを測る。埋土は２層に分層可能であり、上層は黒色（N2/）の粘土～シルト、下層は暗灰色（N3/）の粘土～シルトを含む青灰色（10BG5/1）の粘土～シルトであった。遺物は出土していない。

**A690 ピット**　02 － 1 調査区南端の標高 T.P.1.26 mの箇所で検出した、楕円形プランのピットである。長軸 0.35、短軸 0.25 mを測り、検出面からの深さは 0.07 mであった。埋土から縄文土器深鉢片が 1 点出土した。

02 － 1 調査区では以上の遺構のほか、02 － 1 調査区南西隅の標高 T.P.1.18 ～ 1.21 mの箇所で、A688・689 の２基の土坑を部分的に検出した。**A688 土坑**は、遺存部で南北長が 0.88 m、検出面から

図 100　第 14 － 2 b 面　平面図

の深さは 0.09m を測り、A689 は遺存部で東西長が 0.7 m、検出面からの深さは 0.1 mを測る。いずれも平面が円形もしくは楕円形であったと考えられ、遺物は出土していない。

**土器 517**　02 － 1 調査区南側の 1O － 9a 区にて、縄文時代晩期に属すると考えられる深鉢片が 1 点出土した。

06 － 2 調査区では中央から西側にかけての緩斜面で、土坑とピットを検出した。一方、第 14 － 2 面で微高地と水田域を検出した東側の高い箇所では、遺構は全く検出できなかった。

**B491 ピット**（図 101、図版 29）　1N － 1f 区で確認した、平面がほぼ円形のピットであり、直径 0.4 m、検出面からの深さは 0.29 mを測る。埋土は 2 層に分かれ、上層はオリーブ黒色の細砂混シルト、下層はオリーブ灰色のシルトのブロックが混じるオリーブ黒色の細砂混シルトであった。上層から、長原式に属すると考えられる縄文土器の深鉢（570）が出土している。埋土より、第 14 － 2 層の形成途中の段階で掘削された可能性が考えられる。

**B488 ピット**（図 101）　1N － 4f 区で検出した円形プランのピットである。直径 0.17m、検出面からの深さは 0.1 mをはかり、埋土は灰色の粘質シルト粒の混じるオリーブ黒色の粘質シルトであった。遺物は出土していない。

**B485 ～ 487 ピット**（図 101）1N － 2e･2f 区で検出した 3 基からなるピット群である。B485･486 ピットは円形プランで直径 0.2 m前後、検出面からの深さは 0.15 m前後であり、B487 ピットは南北に細長い楕円形プランで長軸 0.43m、短軸 0.26 m、検出面からの深さ 0.08 mであった。埋土は黒色の粘質シルトであり、埋土中から遺物は出土していない。これらピットの位置に規則性は見られず、生痕の可能性も考えられよう。（飯田）

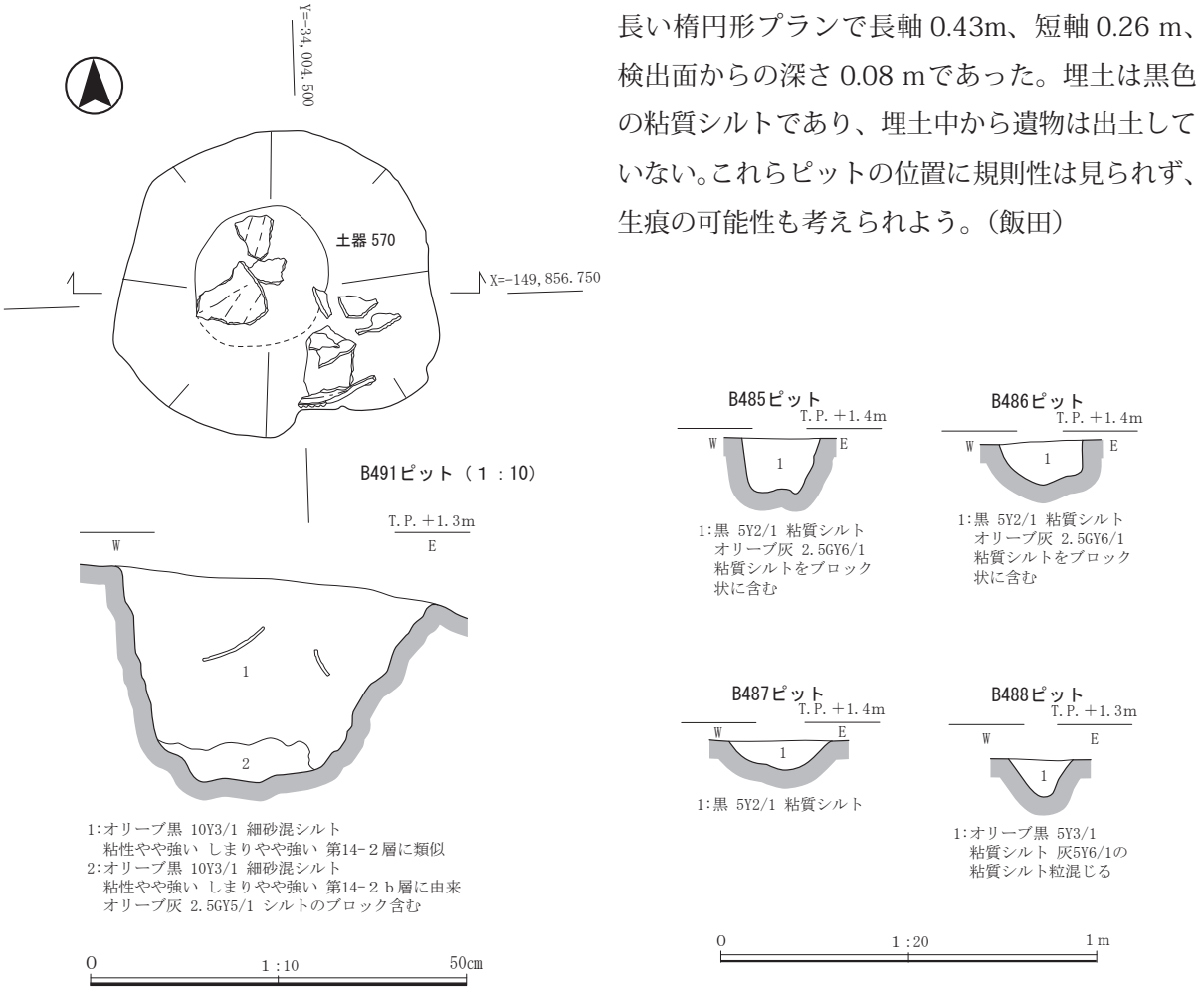



**図 101　第 14 － 2 ｂ面　遺構図**

第 14 － 1 層・第 14 － 2 面・第 14 － 2 層出土遺物（図 102 ～ 105）

**A677 土坑**（図 102 － 509、図版 37）から弥生土器壺 1 点（509）が出土した。図上復元であるが、外面ヘラミガキ調整、外底面ヘラケズリ調整で、胴部に沈線文 2 条を施されている。弥生Ⅰ－ 2 様式かと思うものである。

**A678 土坑**（図 102 － 510、図版 37）から弥生土器甕 1 点（510）が出土した。口縁端部に刻目を施し、外面ハケメ調整、内面板ナデ調整で、内外面コゲ、ススが付着している。弥生Ⅰ－ 3 様式かと思うものである。

**A680 微高地**（図 102 － 500・503・504・図 103 － 511 ～ 513、図版 36）から弥生土器壺 2 点（500・511）、甕 2 点（512・513）、鉢 1 点（503）、縄文土器（504）が出土した。500、503 は弥生Ⅰ様式である。504 は小 D 字刻目凸帯をもつ長原式である。511 は外面タテヘラミガキ、ヨコヘラミガキ調整で頸部と体部に沈線文 2 条を施され、黒色物質を塗布され、その上に一部赤彩を施されている。内面はヨコヘラミガキ、ナデ調整である。弥生Ⅰ－ 2 ～ 3 様式かと思うものである。512 は口縁端部に刻目を施され、外面板ナデ、ヘラミガキ調整、外底面ヘラケズリ調整でススが付着している。内面はナデ、板ナデ調整でコゲが付着している。512・513 は弥生Ⅰ様式後半と思うものである。

**B421 溝**（図 104 － 548・549、図版 38）から弥生土器片 1 点（548）、縄文土器片 2 点（549）が出土した。548 は胴部に段を持ち、弥生Ⅰ－ 2 様式かと思うものである。549 は小 V 字刻目凸帯をもつ長原式である。

**B422 溝**（図 104 － 550・551・554・555・図 105 － 565）から弥生土器片と深鉢口縁 1 点（565）・底部 2 点（554・555）を含む縄文土器片、砥石？ 1 点（550）、砂岩製の投弾？ 1 点（551）が出土した。565 は長原式で小 D 字刻目突帯が施されている。554・555 はどちらも縄文晩期で、外面ヘラケズリ調整である。554 は長原式で、内面にコゲが付着している。550 は流紋岩質溶結凝灰岩製で、残存する 1 面に擦痕と思うようなものがある。

**B440 溝**（図 105 － 560）から弥生土器片、縄文土器片が極少量出土した。560 は弥生土器甕で内外面板ナデ調整、外面にススが付着している。弥生Ⅱ－ 1 様式かと思うものである。第 14 － 2 面上面から一括出土した土器と B440 溝の最下層から出土した土器が接合したのでここに掲載したが、土器の時期から上層で掲載すべきだったのかもしれない。

**土器 552**（図 104 － 552）　20 N － 9e 区にて、弥生土器壺底部 1 点（552）が出土した。弥生Ⅰ様式である。

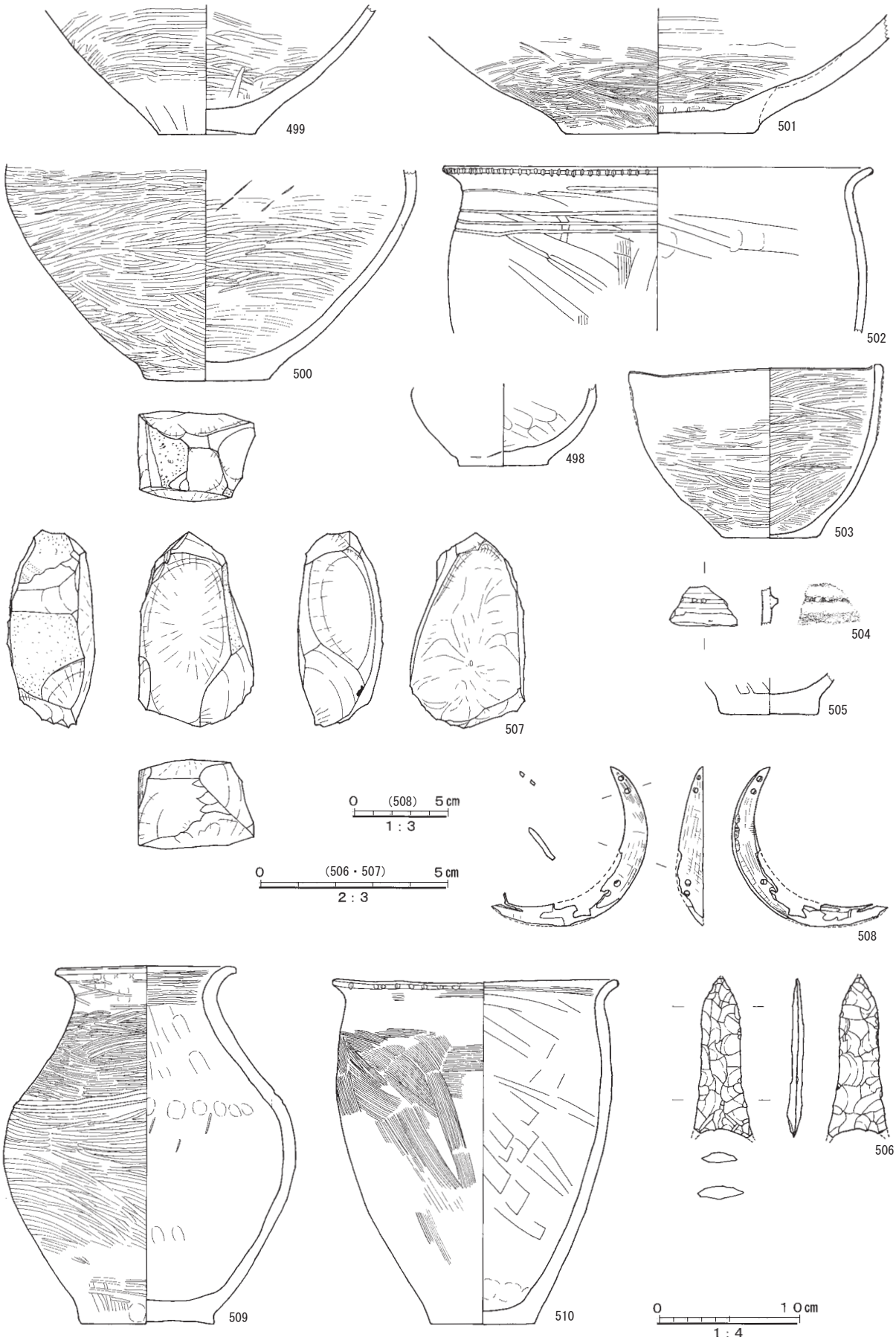
**土器 553**（図 104 － 553）　20 N － 9f 区にて、弥生土器無頸壺 1 点（553）が出土した。553 は内外面ヘラミガキ調整で弥生Ⅰ－ 4 様式かと思うもので、焼成前に外から施された 2 個 1 対の穿孔が 1 対現存している。

図 104 － 556 ～ 559 はそれぞれ **B431 杭**、**B481 杭**、**B483 杭**、**B484 杭**である。556 はアカガシ亜属材で先端を 9 面に、557 はヤナギ属材で 6 面に、558 はヤマグワ材で 5 面に、559 もヤマグワ材で 3 面にカットしている。

**B475 ピット**（図 105 － 561）から弥生土器壺頸部 1 点（561）が出土した。外面板ナデ、内面ナデ調整で、弥生Ⅱ様式かと思うものである。

**02 － 1 調査区　第 14 － 1 層～第 14 － 2 面**（図 102 － 498・499・501・502・505 ～ 508、図版 37・38）から弥生土器、縄文土器、石鏃（506）、サヌカイト石核（507）、牙製垂飾（508）が出土した。

498・499・501 は弥生土器壺、502 は弥生土器甕、505 は縄文土器である。弥生土器は弥生Ⅰ様式で、




498・499・501・502, 505～508：第14－2面、509：A677土坑、510：A678土坑、500・503・504：A680 微高地

**図102　第14面　出土遺物（1）02－1調査区**

499・502は弥生Ⅰ様式後半である。501は外面がナデ後ヨコヘラミガミ調整、外底面がヘラケズリ調整、内面がナデ後粗いヘラミガキと密なヘラミガキ調整である。506はサヌカイト製で凹基式である。508はイノシシの牙製で、現存長11.0cm、現存幅1.78㎝、現存厚0.34㎝を測り、穿孔２個１対で２対残存しており、中央の孔は径0.38㎝で両側からの穿孔、先端の孔は径0.34㎝で内側からの穿孔である。全体に擦って加工されている。東に隣接する04－２調査区の第14－１面399落ち込みから同じようなイノシシの牙製垂飾が出土している（註６）。それは「オスの右下顎犬歯で作られ、残存長8.5cm、最大幅1.9cm、最大厚0.27cmを測り、残存部のほぼ中央に径約0.4㎝の両側から穿孔した円孔２個と基部側に内面から穿孔した円孔２個が施され、外面に黒色物質が塗布されている」と記述されている。

**02－１調査区　第14－２層**（図103－514～519、図版37・38）から弥生土器片１点と縄文土器片少量とサヌカイトチップ１点（519）が出土した。514～518は縄文土器深鉢である。514・515は外面口縁部に凹線文を１条、２条と施された縄文後期の宮滝式後期、516～518は晩期かと思うものである。

**06－２調査区　第14－１層**（図104－526～536、図版37・38）から弥生土器、縄文土器、石鏃（536）が出土した。縄文土器片の方が弥生土器片より多い。

526～528が弥生土器で、弥生Ⅰ様式である。526は壺体部片で削り出し凸帯上沈線文１条の文様があり、527は底部で底面にヘラ記号がある。528は壺蓋で穿孔２個１対の１対が残存し、内外面黒色物質が塗布されている。

529～535が縄文土器で、すべて縄文晩期と思うもので、532～534は長原式である。532・533はＤ字刻目凸帯を施され、534は壺で無文の凸帯を施されている。536はサヌカイト製で凹基式である。

**06－２調査区　第14－２面**（図104－537～547・図105－568、図版38）から弥生土器、縄文土器、砂岩製の砥石？１点（568）、砂岩製の投弾？２点（546・547）が出土した。縄文土器片が圧倒的に多い。（第14－２面として別枠にしたが、第14－１層として扱ってもいいものかもしれない。）

537・538が弥生土器の壺片で、それぞれ段上沈線文１条、削り出し凸帯上沈線文１条を施され、弥生Ⅰ－２～３様式である。538は外面に黒色物質が塗布されている。539～545は縄文土器の長原式で、543・544が水走タイプ（註７）である。543は小Ｄ字刻目凸帯、544はＯ字刻目凸帯、545は小Ｏ字刻目凸帯を施されている。542が壺で他は深鉢である。

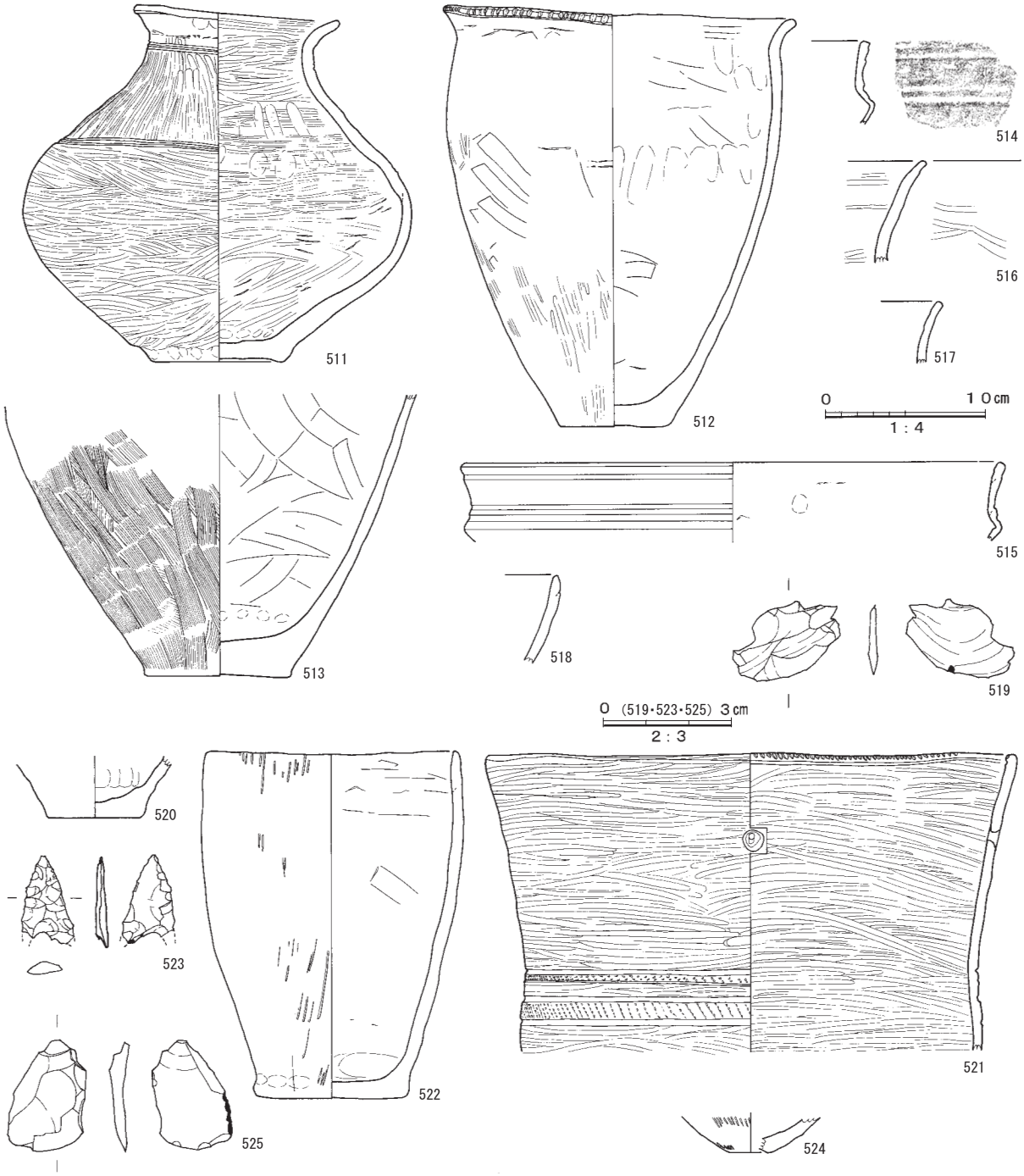
**06－２調査区　第14－２層**（図105－562～564・566・567・569、図版38）から弥生土器、縄文土器、凹み石１点（569）が出土した。縄文土器片の方が弥生土器片より多い。

562・563は弥生土器壺、564・566・567は縄文土器深鉢である。562は頸部に沈線文が施され、内外面ヘラミガキ調整で弥生Ⅰ－２様式かと思うものである。563は体部に沈線文２条以上が施され、内外面ヘラミガキ調整で弥生Ⅰ様式である。縄文土器深鉢は縄文晩期で、564・566は長原式である。564はＤ字刻目凸帯、566は小Ｄ字刻目凸帯が施されている。569は緑泥石片岩製で石棒の破片の可能性はあるが、凹み石として利用されている。

第14－２面ベース（第14－２ｂ面）、第14－２ｂ層出土遺物（図103・105）

**B491ピット**（図105－570、図版38）から縄文土器片が少量出土した。570は長原式の深鉢で、口縁部にのみ小Ｄ字刻目凸帯が施され、外面ヘラケズリ調整でススが付着し、内面板ナデ調整である。

**02－１調査区　第14－２ｂ層**（図103－520～523、図版37・39）から弥生土器、縄文土器、石鏃（523）が出土した。（第15面上、第15面上層を第14－２ｂ層として扱った。）

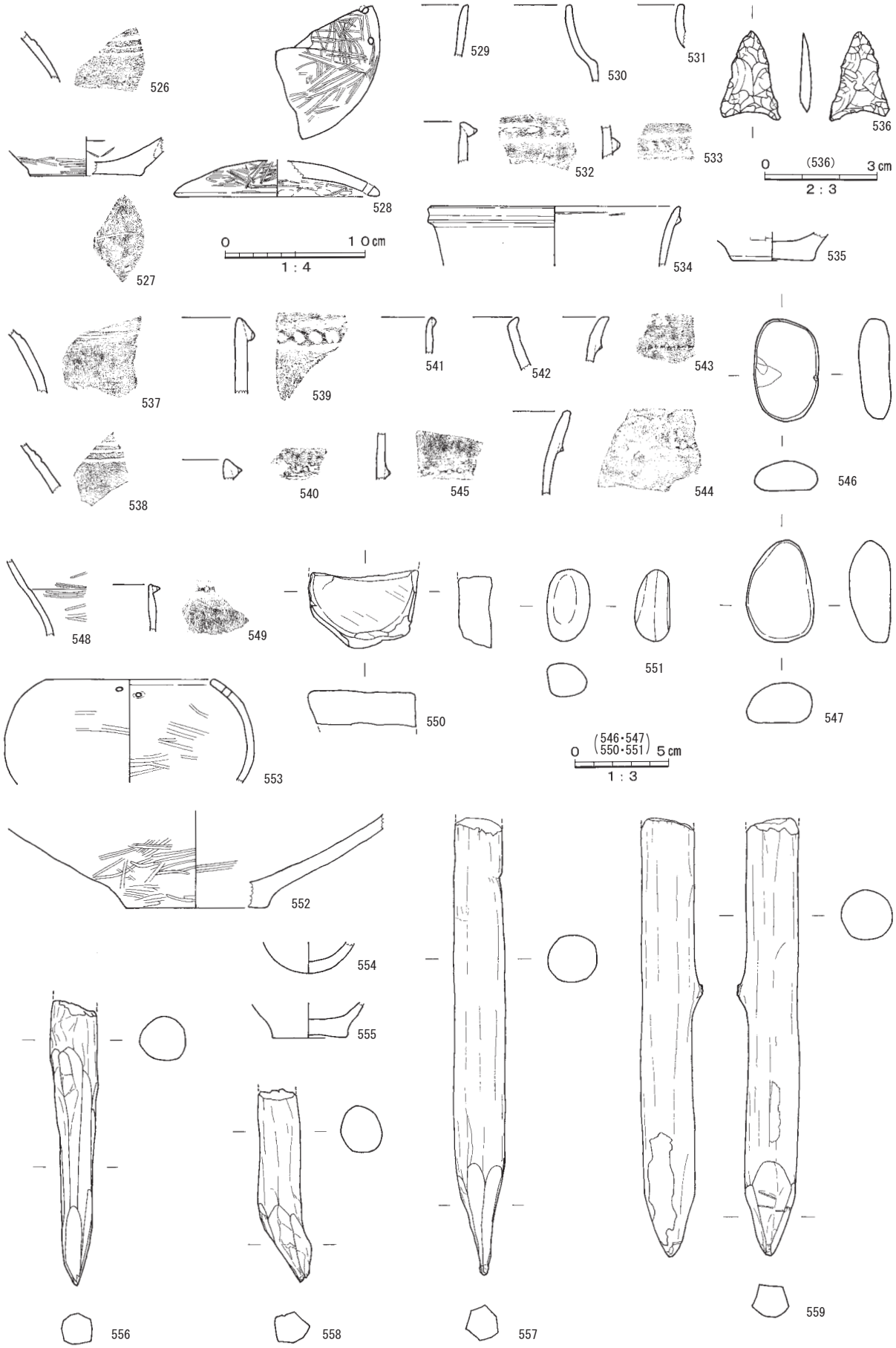



511～513：A680 微高地、514～519：第 14－２層、520～523：第 14－２ｂ層、524：第 15 層以下、525：第 15 ｂ層

**図 103　第 14 面　出土遺物（２）02－１調査区**

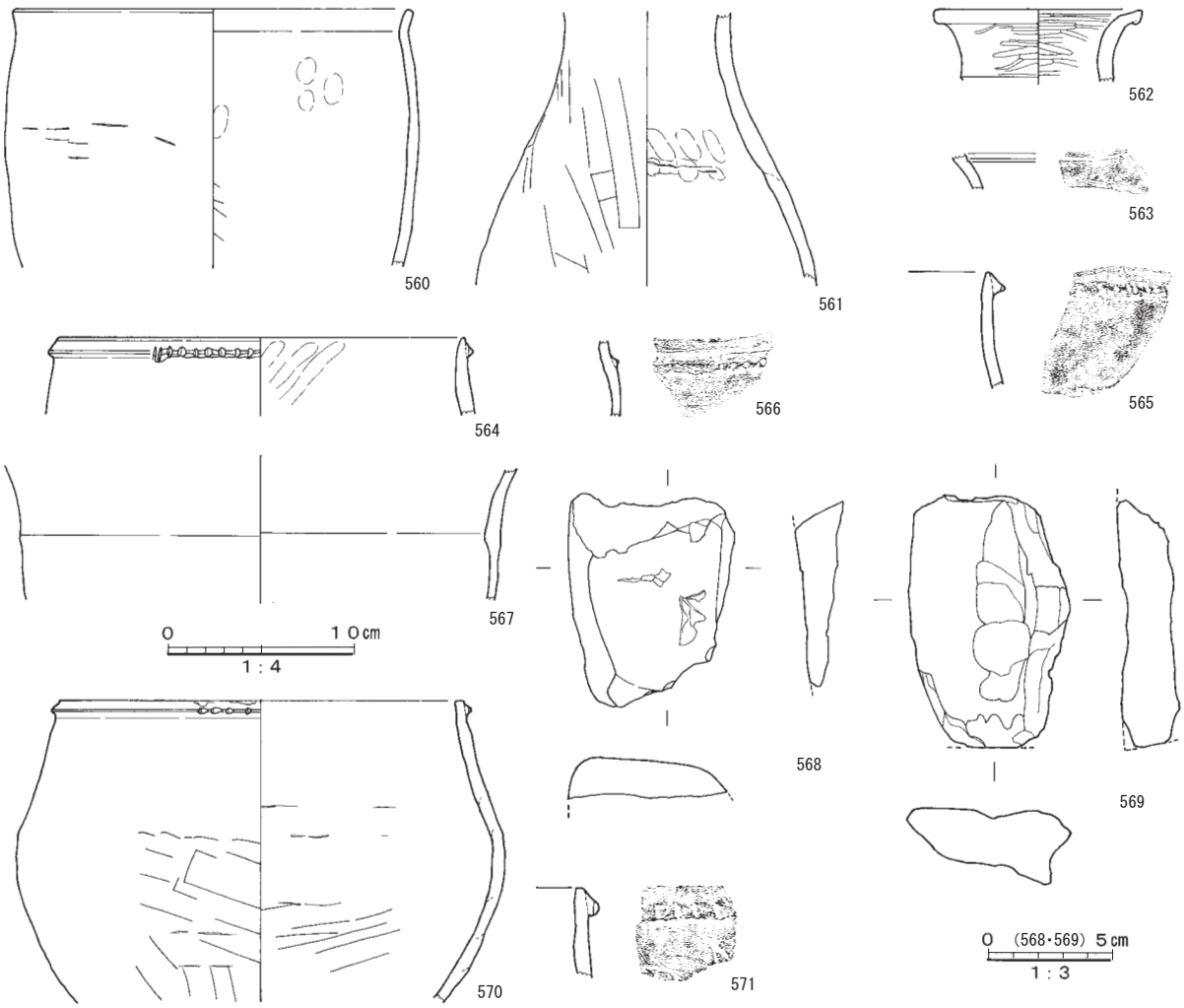
520 は弥生底部で弥生Ⅰ様式である。521 は縄文土器深鉢で一箇所穿孔があり、外面胴部に沈線文２条の間に縄文を施したものを２帯施され、ススが付着している。内面口縁端部に刻目が施されており、コゲが付着している。縄文後期の元住吉山Ⅰ式である。522 は弥生土器かと思う胎土と器形だが、520 と同じ面から出土ということで同じ時期と判断した。外面は条痕かと思う調整でススが付着している。523 は、サヌカイト製で凹基式、Ｂ面に大剥離面が残っている。

524 は第 15 層以下から出土した縄文晩期の滋賀里Ⅲｂ式かと思う底部である。外面に条痕があり、




526～536：第14－1層、537～547，552・553：第14－2面、548・549：B421溝、550・551・554・555：B422溝、556～559：B431・481・483・484杭

図104　第14面　出土遺物（3）06－2調査区




560：B440 溝、561：B475 ピット、562 ～ 564，566・567・569：第 14 － 2 層、565：B422 溝、568：第 14 － 2 面、570：B491 ピット、571：第 14 － 2 b 層

**図 105　第 14 面　出土遺物（4）06 － 2 調査区**

凹み底である。525 は第 15 b 層から出土したサヌカイトチップで、表面の風化が著しい。524・525 は第 15 面で扱わねばならないものかもしれないがここに掲載した。

**06 － 2 調査区　第 14 － 2 b 層**（図 105 － 571、図版 38）から縄文土器片 2 点（571）、石 1 点が出土した。571 はD字刻目凸帯が口縁部に施され、外面ナデ調整で、ススが薄く付着している。長原式である。

池島 I 期地区の第 14 － 1 層出土遺物は長原式土器片を多く含むが弥生 I － 2 ～ 3 様式段階のもの、第 14 － 2 面出土遺物は弥生 I － 2 ～ 3 様式のものが中心、第 14 － 2 層出土遺物は長原式土器が主体だが縄文晩期後半や後期後半のものの中に少し弥生前期土器も含んでいる。第 14 － 2 b 層出土遺物は縄文後期後半の土器と晩期後半の土器である。今回報告する遺物は I 期の様相と齟齬をきたすものではない。（陣内）

5）**第 15 面**（図 106、図版 30）

第15面は、主に氾濫堆積物からなる第14－２ｂ層を除去し検出した、土壌層の第15層の上面である。第 15 層は緑黒色（10GY2/1）の粘土からなる層であり、池島Ｉ期地区や東接する 04 －２調査区において第 15 －２層と呼称している層に対応し、また当遺跡で従来から「第５黒色粘土（泥）層」と通称されてきた層である。02 －１調査区では、本層中からヨシなどの植物遺体が多数出土しており、一帯が湿地化していたと考えられる。なお 06 －２調査区については、第 15 面の大部分は掘削限界の標高 T.P.0.9 mより下に位置するため、平面的な調査は行わず、トレンチ断面において第 15 層の様相を確認した。

地形については、02 －１調査区では、南東隅が最も高く、標高 T.P.0.73m の箇所がみられる。その部分から西側と北西側で緩やかに標高を減じており、調査区中央付近で T.P.0.5 m前後、西側で T.P.0.3 ～ 0.4 mを測る。最低地点については、調査区西端の 1N － 10i･10j 区で T.P.0.27 mの地点が見られる。06 －２調査区についてはトレンチ断面の観察から、調査区西側および中央付近で T.P.0.7 ～ 0.8 m前後、調査区東側で T.P.0.8 ～ 0.9 mであったと考えられる。

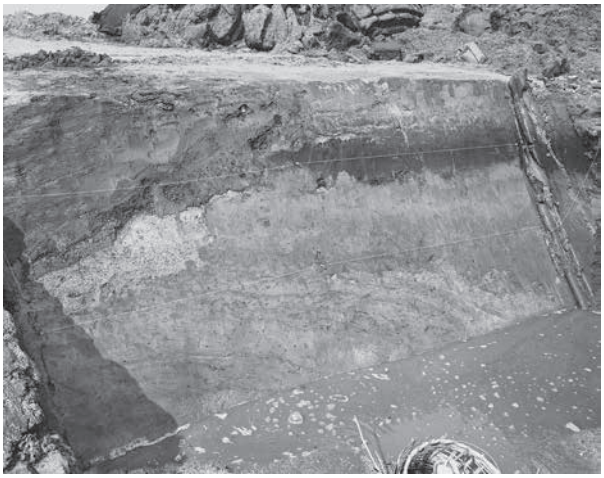


写真 58　06 －２調査区　深掘トレンチ②断面（南から）

02 －１調査区では、第 14 －２ｂ層を除去した段階で、洪水堆積物で埋まった人やイノシシの足跡が検出される土壌化の弱い面が確認されている（図版 29 －４）。この面が池島Ｉ期地区における第 15 －１面に相当すると考えられる。足跡以外の遺構が

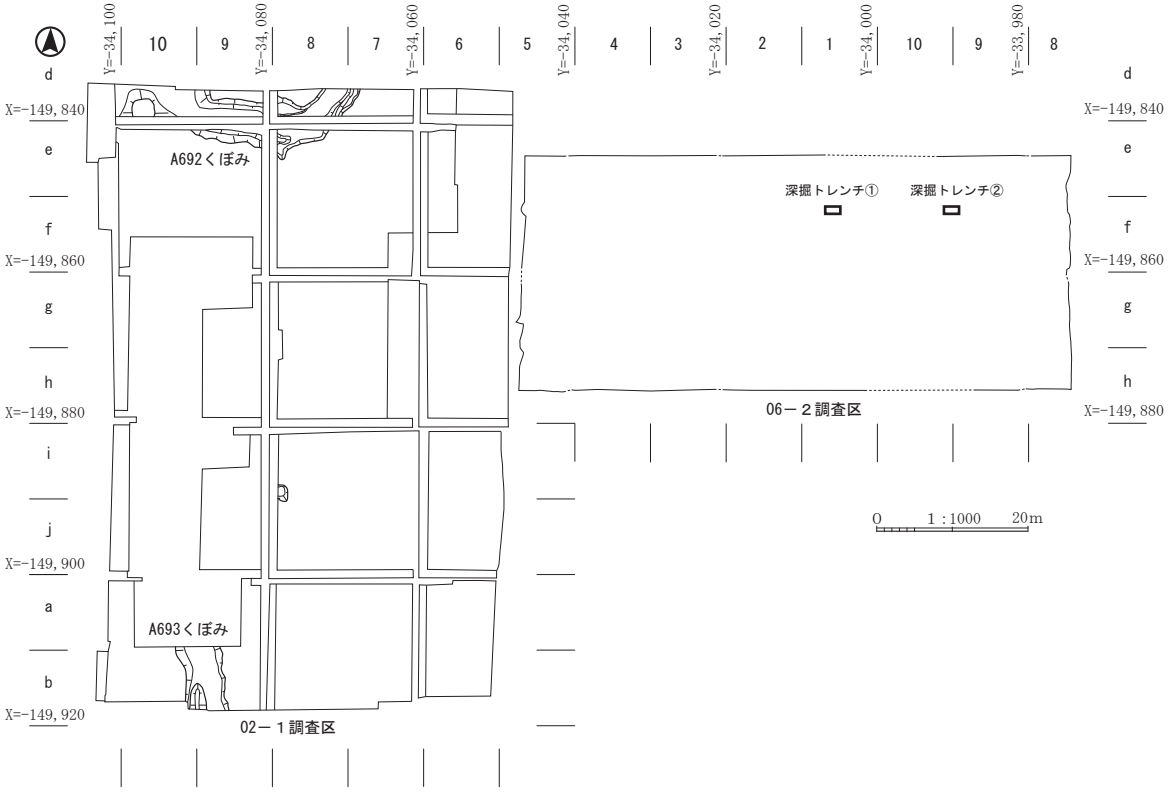



図 106　第 15 面　平面図

確認されないことから、さらにこの層を除去し、第 15 面の調査を行った。調査区北側の標高 T.P.0.3 ～ 0.5 mの部分では、**A692 くぼみ**を確認した。東西方向に細長く、検出長はおよそ 24.0 m、幅は 4 ～ 8 m、検出面からの深さは 0.12 ～ 0.32 mを測る。また、調査区南西においても、南北に細長い **A693 くぼみ**を検出した。規模は、検出長 8.2 m、幅 2.3 ～ 3 m、検出面からの深さは 0.11 ～ 0.32 mであった。いずれのくぼみも、遺物は出土しておらず、性格は不明である。

06 － 2 調査区では、第 15 層やその下の第 15 b 層の様相、および第 13 面の B267 流路の下部や第 14 － 2 面で確認した地震による不整合の下部などを確認する目的で、東西幅 2 m、南北幅 1 mの深堀トレンチを 2 箇所設定した（図 106）。深掘トレンチ①では不整合部分が T.P.0.3 m前後まで及んでいることを確認した。深掘トレンチ②では B267 流路が第 15 層を削り込み、流路下部が T.P. 0 m付近まで及んでいることを確認した（写真 58、上の水糸は T.P.0.5 m、下は T.P.0 m）。

尚、02 － 1 調査区の第 15 層中に多量に含まれていたヨシの植物遺体に対して放射性炭素年代測定を実施したところ、補正炭素年代値は 3,305 ± 40（yrBP ± 1 σ）と算出された（表 3）。（飯田）

# 第５章　総括

当遺跡では、池島・福万寺両地区ともⅡ期地区の調査が進行している。02 － 1 調査区の調査は池島地区のⅠ期とⅡ期地区をつなぐ連結部の調査である。これまでの調査との連続性とともに新たな展開が期待された。この東側に位置する 06 － 2 調査区は、前年度にさらに東側の 04 － 2 調査区で縄文晩期～弥生時代前期の集落域の一部や墓域が検出されたことから弥生前期の集落周辺の様相が明らかになるものと期待された。

## １. 近世～古墳時代の調査成果

第１層の部分は、現代の撹乱による被害が大きいが、耕作痕跡や水路等など調査開始以前の土地利用の状況がかなり遡る可能性が高いことが明らかとなった。第２層は、近世～中世末頃の層である。現状では、従来と大きな相違は無く、最上部の第２－１面が第１ｂ層の氾濫堆積物に覆われて良好に遺存していた以外は、遺存状況は非常に悪かった。第３層は各層間に自然堆積層を挟むことが多く、遺存状況の良好な場合が多い面であったが、今回報告の調査区では氾濫堆積物の供給が少なかったためか、確実な自然堆積層の被覆はわずかで、やや攪拌を受けた自然堆積層の残骸と作土層が連続する状況であった。しかし、いずれも良好に条里地割りに伴う水田景観が検出された。しかし、今回の調査区では島畠などの畠等の遺構は確認されていない。

第４層から第９層にかけては、坪境を挟んで調査区の東西で土壌の状況が非常に相違していることが特徴である。調査区西半の二十ノ坪では、粘性の強い粘土～シルトをベースとする細粒堆積物の層であるのに対し、東半の十七ノ坪では、同様な粘性の強いベース土に細砂～小礫の堆積物が非常に多く混入する層であった。いずれの層間にも自然堆積層が挟まれず、各層の遺存状況は非常に悪かった。東半では、第４層～第９層のうち第８層まではやや層厚を薄くしつつも確認ができたが、東ほど第８層下部の第９層・10 層・11 層などは層の判別や遺構の帰属面を決定することが非常に困難であった。

第９面で検出した十七ノ坪の溝は、幅のわりに深い溝が多いことが特徴である。溝間には切り合い関係があることから複数回にわたって掘削された集積と考えられる。これまでの調査においても、第８層から第９層にかけてこうした遺構が集中する部分が確認されている。今回の遺構群も、第十七ノ坪でしか検出されていない。帰属面も含めて、今後の調査で解決していきたい。

第 10 面の 02 － 1 調査区および 06 － 2 調査区西側では水田畦畔を検出した。注目されるのは、06 － 2 調査区の水田域の北側で小形仿製鏡が出土している。周囲を精査したが明瞭な遺構は確認されなかった。

このように、古墳時代に相当する第10面以降の各時期の遺構面は遺存状況の悪い面が多かった。このことは、調査成果でも見てきたように、弥生時代に相当する第 11 面以下の各面が膨大な氾濫堆積物の堆積とそれによりこの部分の地形が高くなり、この時期以降の堆積はあまり進まなかったことなどが関連しているものと考えられる。(廣瀬)

## ２. 弥生時代～縄文時代晩期の調査成果

### １）第 11 面・第 11 ｂ面（弥生時代後期の遺構面）

当面を覆う氾濫堆積物である第 10 ｂ層は 02 － 1 調査区の一部でしか確認されず、また第 10 面からの攪拌などにより第 11 層の残りは良好ではなく、そのため水田畦畔の遺存状況は他の弥生時代の面に比べ良好ではなかった。そのような検出状況下で水田域 A において復元できた水田区画はほぼ正方形であり、一筆の面積は約 25 ㎡であった。池島 I 期地区の当該面の水田では、畦畔の配置については幹線となる畦畔を地形の傾斜に合わせ数条配し、その間を支線畦畔で区切る方法が見られ、水田区画は前段階に比べ小規模で、一筆の面積が 20 ～ 50 ㎡前後とされている（岡本 2002）。今回報告した水田についても、池島 I 期地区とほぼ同じ傾向が窺える。（飯田）

### ２）第 12 面・第 12 ｂ面（弥生時代中期中葉の遺構面）

当該面では 5 箇所の水田域が確認された。水田域 C や水田域 D のように、高まりや畦畔を効率よく配置することにより、微高地の間の狭小な部分にも水田を造成している。池島 I 期地区では、当該期の遺構面で、調査区の南北を貫く基幹水路が確認され、検出された各水田域は、給排水の機能を備えた水路によって結び付けられている。こうした水田域は、全体的な計画のもとに造られているとされ、当遺跡における弥生時代の水田造成技術の最大の画期が当該期の水田に見出されている（廣瀬 2007）。今回の 2 つの調査区においても、微高地の間の狭小な土地の利用状況や、水田を区画する高まりや畦畔の配置、微高地縁辺の高まりや B200 溝の両側にめぐらした堤防状の高まりなどのあり方に、第 13 面や第 14 － 2 面の水田域に比べ、技術的な進展を見出せる。（飯田）

【立木・流木の樹種について】

第 12 面で検出した、第 11 ｂ層～第 12 面段階に生育していたと考えられる立木・流木の樹種については、ヤマグワが 7 点、ヤナギ属が 7 点であり、カヤが 1 点であった。また、杭の樹種については第 12 面の杭列の内、A535 杭列でヤナギ属が 5 点、ヤマグワが 1 点、B213・214 の杭の樹種はともにサカキであり、第 12 ｂ面の B240 溝で検出した杭の樹種はヤマグワ 4 点、ミズキ 1 点であった。

池島 I 期地区の第 12 面では、立木はヤナギ･ヤマグワ･ケヤキなどの河畔林を構成する樹種からなり、杭についてはアカガシ亜属やクスノキなどの陽樹が用いられていた（福田 2007）。また福万寺 I 期地区では、弥生時代後期において、流木にはヤナギ属やヤマグワ、ケヤキなどの河畔林を構成するものが多いのに対し、堰構築材の樹種についてはヤナギ属やヤマグワはほとんど使用されず、アカガシ亜属やクスノキ、ヤブニッケイ、ヤブツバキなどの照葉樹林の樹種が用いられており、当遺跡では付近の河畔林の樹種に加え、生駒山地の丘陵上の照葉樹林からも木材獲得が可能であり、他の低地の集落に比べ木材獲得が有利であったことが指摘されている（中原 2008）。

今回の第 12 面・第 12 ｂ面検出の立木・流木については、河畔林を構成していたと考えられるヤナギ属やヤマグワが多く見られた。一方で、杭の樹種についてもヤナギ属やヤマグワが比較的多く用いられており、付近で生育している木を利用していたと考えられる。池島Ⅱ期地区南西の 05 － 2 調査区における第 12 面の杭列にもヤナギ属やヤマグワが多用されており（内田編 2008）、池島Ⅱ期地区の当該期の杭材については、近隣の河畔林を利用していた状況が窺える。（飯田）

3）第 12 層下面検出の畝溝について

第 12 層は、池島・福万寺遺跡で通称される「第２黒色粘土（泥）層」に相当する。地形は、北西方向に延びる微高地と微高地の東西にひろがる低地に分けることができる。先述したように、微高地部分で第 12 層を細分することができ、その部分から畝溝を検出した。総括では、畝溝とした遺構の調査状況とその方法、類例などをあげ、その性格を述べる。

遺構の検出当初、水田畦畔状の高まりが東西方向に１条検出されたため、水田としての土地利用を想定しながら調査を進めたところ、この高まりに平行する高まりが等間隔に複数検出されたことから畠と判断した。また、微高地上の畠作土層である第 12 層と水田作土層である低地の第 12 層では土質に明瞭な違いが認められ、地層の堆積環境が異なることが断面観察によってわかった。

調査では図 63 の１層を薄く削ることで２層の上面を検出した。この段階で畝を確認した。次いで、２層を段階的に薄く削っていき、最終的には４層の下面までの調査を行っている。層理面だけではなく、任意に掘り下げることによって層中の平面的な検討も行っている。

これまで近畿地方において、弥生時代の畠として報告されているものの大半が等間隔で連続する小溝群である。代表例としては、兵庫県若松町遺跡、大阪府久宝寺遺跡、三重県筋違遺跡などがある。これらは畠の畝間溝、耕作溝と考えられ、溝の間が畝であろうと考えられており、高まりとなる畝は検出されていない。以上の３遺跡は遺構面が自然堆積層で覆われておらず、凸遺構となる畝が検出されなかった可能性が考えられる。自然堆積層で畠遺構が覆われていた事例として、大阪府瓜破遺跡、長原遺跡があげられる。

瓜破遺跡では弥生時代後期後半と考えられる畠遺構が検出されている。畝と畝間溝の凹凸が、水成層とされる自然堆積層によって覆われており、確実な地表面を検出している。畝・畝間は、長さ約１～５m、畝幅 0.7 ～ 1.2m と 0.1 ～ 0.3m の２種、畝間幅約 0.2m、深さ約 0.02m である。長原遺跡では、やや時代は下るが古墳時代後期～飛鳥時代と考えられる畠遺構が検出されている。畝・畝間は、長さ 0.6 ～ 4.5m、幅約 0.6m、深さ約 0.15m である。両遺跡では畝間溝に挟まれた畝が検出されたが、その高さはいずれも畝間からの高さ 0.05m 前後で、地表面の高さとは同一であり、畦畔のような凸遺構ではない。

また、畠遺構とは別ではあるが、連続する小溝群が水田遺構中から検出された例として、群馬県同道遺跡があげられる。火山灰で覆われた弥生時代後期～古墳時代初頭の水田区画内に見られる平行する小溝状遺構で、長さ約２～８m、幅 0.08m、深さ 0.02m、溝間の間隔 0.3m である。細長の水田区画に直行あるいは平行し、その方向は水田区画によって異なっている。報告では耕作痕としており、性格については言及されていないが、水田形成前に耕起された痕跡である可能性が考えられる。

検出された畝溝はその間に畝と考えられる部分が存在し、遺構面が自然堆積層によって覆われていたが、畝は遺存状況が良くなく、断面観察においても明確な高まりは確認できなかった。畝溝のみの検出では畠と断定することは難しく、同道遺跡のような耕作痕の可能性も考えられる。

自然科学分析においても良好な結果は得られず、水田に近い様相が観察された。特に植物珪酸体分析ではイネ属が多く産出され、当微高地が水田域となることも考えられるが、大阪府北島遺跡の畠土壌からもイネ属が多産する分析結果が出されており、分析結果のみでは断定することはできない。（乾・後川）

4）第 13 面・第 13 b 面（弥生時代前期末から中期初頭の遺構面）

第 13 面では、02 － 1 調査区側で水田域を検出した。第 14 － 2 面段階に比べ平坦面が広くなり、水

田１筆の面積も前段階に比べ格段に広いものが見られる。尚、この水田域は調査区に西接する池島Ⅰ期地区のＫ地区（廣瀬編 2007）の続きに相当する。Ｋ地区もこの水田域と同じように、南東から北西方向に幹線畦畔を配置している。池島Ⅰ期地区における当該期の水田については、水田区画の長辺を地形の傾斜に直交させる水田と、長辺を地形傾斜に対し並行に置く水田の２つのタイプの存在が指摘されているが（岡本編 1998）、02 － 1 調査区とＫ地区の水田はともに後者に該当する。

第 13 ｂ面では、06 － 2 調査区の B419 微高地上で集落域の一部と考えられる遺構集中部を確認した。遺構集中部は 15 基の土坑や 39 基のピット、小規模な溝で構成されていた。土坑の中には、埋土が被熱した土坑（B341・342・374 土坑）や、焼けた魚骨や炭化米の出土した土坑（B342・374 土坑）が見られ、当時の生業や生活を復元する上で重要な資料を得ることができた。魚骨を鑑定していただいた丸山真史氏によれば、B342・374 土坑はともに内部に焼土がみられることから、これら土坑は炉の機能を有していたと考えられ、魚を食用に供した後、骨を炉に投げ込んだことを推定されている。出土した魚骨の内、コイ・コイ科の淡水魚については、周辺の河川、湖沼で捕獲したことを想定されている。またウナギ目の骨とされるものについては、淡水産のウナギ、海水産のハモやアナゴのいずれかの可能性が考えられ、もし海水産の種類であれば大阪湾沿岸地域との交易が考えられるとのことである。近年、魚類遺存体の分析から、コイ科魚類を対象とした漁撈は縄文時代から認められ、また愛知県朝日遺跡などの事例から弥生時代には原始的養鯉が行われていた可能性が指摘されている（中島 2009）。池島Ⅱ期地区の今後の調査において、こうした動物遺存体のデータを検討することにより、当該期の漁撈や食料獲得の実態がさらに詳細に解明されると予想される。ピットについては、建物を復元し得るような規則的に並ぶものは見られず、また柱痕の確認ができるような例も見られなかったが、埋土や出土遺物、位置関係などから、付近の土坑と同時期のものであることは明らかであり、一定期間の居住の痕跡と考えられる。これら遺構の分布は調査区南側にさらに広がっていたことが予想され、今後の調査により集落の全容が解明されると思われる。尚、近隣で、当該期の集落遺構が確認されている遺跡としては、当遺跡の南西３km に所在する小阪合遺跡がある。弥生時代中期前半（第Ⅱ様式）の井戸１基、土坑６基、小穴 77 基などが 200 ㎡の調査区で検出されており、拠点的な集落の一部と推測されている（原田 2007）。（飯田）

### ５）第 14 － 2 面・第 14 － 2 ｂ面（縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構面）

弥生時代前期の第 14 － 2 面では、02 － 1 調査区の南側および 06 － 2 調査区の南東部分で水田域を確認した。池島Ⅰ期地区における当該期の水田域は、調査区南部の標高 T.P.1.0 ～ 1.65 m で検出されている。水田域は、点在する微高地と接する緩斜面や微高地間の谷状地形を利用して造成され、微高地縁辺に掘削された水路から導水していた（廣瀬編 2007）。このような地形利用については、比較的乾燥した灌漑に利便な地形が選択されていたとされている（岡本 2002）。

一方、池島Ⅱ期地区の当該期の水田域については、05 － 2 調査区が標高 T.P.1.7 m 前後（内田編 2008）、今回の 02 － 1 調査区側が標高 T.P.1.35 ～ 1.6 m、06 － 2 調査区側が標高 T.P.1.5 ～ 1.8 m で確認している。Ⅱ期地区のこれら水田域についても、微高地に繋がる緩斜面に形成され、また水路も微高地縁辺に開削されており、Ⅰ期地区と同様の地形利用の状況が認められる。また、06 － 2 調査区第 14 － 2 面の水田域のように、第 13b 面段階では集落が形成されるような比較的高い箇所でも水田が確認された。Ⅱ期地区の今後の調査により、当該期の水田開発における土地利用の特色がより詳細に解明

されると考えられる。水田１筆の面積については、02 － 1 調査区で 50 ㎡前後のものが見られるのに対し、06 － 2 調査区では 10 ㎡未満のものが見られ、また水田区画の形状は、正方形に近いもの、長方形あるいは短冊状の細長いものなどが見られる。

このように水田区画の面積や形状においても池島Ｉ地区の当該期の水田と同様の傾向が見いだされ、地形の起伏に合わせて小畦畔を配置している状況が窺われる。（飯田）

【杭の樹種について】

第 14 － 2 面で検出した杭の樹種は、ヤマグワ５点、アカガシ亜属２点、ヤナギ属２点、サカキ１点、ムクノキ１点、ヤブツバキ１点であった。ヤマグワやヤナギ属が半数を占める一方で、アカガシ亜属やヤブツバキなどの照葉樹林の樹種もみられ、近隣の河畔林の樹種に加え生駒山地などの丘陵に生育していたと推定される樹種を用いている状況が窺える。（飯田）

# 註

註１　湯本　整・飯田浩光 2009「池島・福万寺遺跡出土小形仿製鏡について」『大阪文化財研究』第 34 号
(財)大阪府文化財センター

註２　当センター主査　山口誠治の分析による。

註３　当分析は、株式会社パレオ・ラボに委託したものであり、その報告を要約し、掲載している。

註４　当分析についても、株式会社パレオ・ラボに委託したものであり、その報告を要約し、掲載している。

註５　当分析は、株式会社パリノ・サーヴェイに委託したものであり、その報告を要約し、掲載している。

註６　廣瀬時習編 2008『池島・福万寺遺跡５』（財)大阪府文化財センター　75 ｐ.

註７　林日佐子 2008「長原式土器深鉢の変遷」『古代学研究』第 180 号で長原式の一形態として凸帯を口縁端部から 1 ㎝以上下がった位置に貼り付けるものを水走タイプと命名されている。

# 引用・参考文献（50音順・敬称略）


泉　拓良　1989「近畿地方の縄文土器」『第７回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』

市村慎太郎　2006「中田遺跡群の具体（１）」『大阪文化財研究』第29号　(財)大阪府文化財センター

市村慎太郎　2007「中河内における条里遺構の最近の調査」『条里制・古代都市研究』第22号　条里制・古代都市研究会

井上智博編　2002『池島・福万寺遺跡２』（財)大阪府文化財センター

井上智博　2007「層序対比の問題点―第12層・第14～15層の検討―」『池島・福万寺遺跡３』（財)大阪府文化財センター

内田真雄編　2008『池島・福万寺遺跡７』（財)大阪府文化財センター

江浦　洋　1991「古墳時代集落の変遷と特質-池島・福万寺遺跡の古墳時代集落の評価をめぐる予察-」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』Ⅱ　(財)大阪文化財センター

江浦　洋　1992「条里型水田面をめぐる諸問題」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅶ』（財)大阪文化財センター

江浦　洋　1994「小区画水田造成技術の変革」『文化財学論集』

江浦　洋　1996「古代の土地開発と地鎮め遺構」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第７集　帝京大学山梨文化財研究所

江戸遺跡研究会編　2001『図説　江戸考古学研究事典』　柏書房

(財)大阪市文化財協会　2002『瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ』

(財)大阪市文化財協会　2008『長原遺跡発掘調査報告ⅩⅦ』

(財)大阪府文化財センター　2007『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ』

大阪府立近つ飛鳥博物館編　2007『河内古代寺院巡礼』(大阪府立近つ飛鳥博物館図録44)

大野　薫　1997「生駒山西麓域の縄紋集落」『河内古文化研究論集』　柏原市古文化研究会

大平　茂編　1992『三田市下相野窯跡』　兵庫県教育委員会

岡本茂史編　1998『池島・福万寺遺跡発掘調査概要　ＸＸＩ』（財)大阪府文化財調査研究センター

岡本茂史　2002「水稲耕作の始まりと展開－池島Ⅰ期地区の弥生水田－」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要　ＸＸⅥ』（財)大阪府文化財調査研究センター

奥井智子　2006「畿内における土製煮炊具の様相」『第25回中世土器研究会-土製煮炊具の諸様相-』　日本中世土器研究会

梶山彦太郎・市原実　1986『大阪平野のおいたち』　青木書店

金関　恕・大阪府立弥生文化博物館編　1995『弥生文化の成立』　角川書店

河角龍典　1999「池島・福万寺遺跡およびその周辺地域の地形」『調査研究報告』第２集　(財)大阪府文化財調査研究センター

河角龍典　2000「沖積層に記録される歴史時代の洪水跡と人間活動－大阪府河内平野池島・福万寺遺跡の事例－」『歴史地理学』42巻１号　歴史地理学会

河角龍典　2002「池島・福万寺遺跡および周辺の地形環境」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要ＸＸⅥ』（財)大阪府文化財調査研究センター

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1983　『同道遺跡』

神戸市教育委員会　2000 『若松町遺跡』
古代の土器研究会編　1992『古代の土器１　都城の土器集成』
古代の土器研究会編　1996『古代の土器４　煮沸具　(近畿編)』
阪田育功　1997「河内平野低地部における河川流路の変遷」『河内古文化研究論集』 柏原市古文化研究会
寒川　旭　2007「池島・福万寺遺跡で検出された地震の痕跡」『池島・福万寺遺跡３』 (財)大阪府文化財センター
三宮昌弘　2003「平安時代の粗製土師器椀について」『郡戸遺跡』 (財)大阪府文化財調査研究センター
下村晴文　1995「中河内の弥生時代と遺跡」『弥生時代の大阪湾沿岸-河内地域史・弥生編-』 大阪経済法科大学出版部
積山　洋　1993「律令制期の製塩土器と塩の流通」『ヒストリア』第141号　大阪歴史学会
積山　洋　1999「大坂の土師質土器」『関西近世考古学研究Ⅶ』 関西考古学研究会
高橋　学　1991～1997「河内平野の地形環境分析Ⅰ～Ⅵ」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅰ・Ⅱ・Ⅶ・ⅩⅠ・ⅩⅢ・ⅩⅤ』 (財)大阪文化財センター・(財)大阪府文化財調査研究センター
地学団体研究会大阪支部編　1999『大地のおいたち』 築地書館
千喜良淳　2002「(２)遺物　１)中・南河内における土師器皿の変遷」『瓜生堂遺跡第46、47－１・２次発掘調査報告書』 東大阪市教育委員会
中世土器研究会編　1995『概説　中世の土器・陶磁器』 真陽社
趙　哲済　1995「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅷ』 (財)大阪市文化財協会
塚本浩二編　2008『池島・福万寺遺跡４』 (財)大阪府文化財センター
辻　美紀　1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集
寺沢　薫・森井貞雄　1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編１　木耳社
中島経夫　2009「コイ科魚類の咽頭歯と考古学－フナや鯉を対象とした縄文・弥生時代の淡水漁撈－」『考古学研究』第 56 巻第１号　考古学研究会
中原　計　2008「樹種同定からみた池島・福万寺遺跡の古植生とその利用」『池島・福万寺遺跡６』 (財)大阪府文化財センター
中村　浩　1978「和泉陶窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』 大阪府教育委員会
乗岡　実　2000「備前焼擂鉢の編年について」『第３回中近世備前焼研究会資料』 中近世備前焼研究会
原田昌則　1993「久宝寺遺跡」『(財)八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』37　(財)八尾市文化財調査研究会
原田昌則　2007「Ⅱ　小阪合遺跡第18次調査(ＫＳ89－18)」『(財)八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』101　(財)八尾市文化財調査研究会
東大阪市遺跡保護調査会　1973『池島町の条里遺構－調査概要－』
東大阪市遺跡保護調査会　1975『池島町の条里地割－48年度・49年度発掘調査概要－』
東大阪市教育委員会　2001『-わが街再発見-東大阪市の古墳(改訂版)』
(財)東大阪市文化財協会　1996『北島遺跡の耕作地跡と古環境』
(財)東大阪市文化財協会　2004『生駒山西麓の王と水』 東大阪市立郷土博物館
(財)東大阪市文化財協会　2005『なぞの城-発掘調査からみた若江城-』 東大坂市立郷土博物館
樋口　薫　2007「小阪合遺跡の発掘調査」『大阪府埋蔵文化財研究会(第55回)資料』 (財)大阪府文化財センター
平井　勝　1991『考古学ライブラリー64　弥生時代の石器』 ニュー・サイエンス社
廣瀬時習　2007「弥生水田の一様相－池島・福万寺遺跡における事例から－」『考古学に学ぶⅢ』(同志社大学考古学シリーズⅨ)
廣瀬時習編　2007『池島・福万寺遺跡３』 (財)大阪府文化財センター
廣瀬時習編　2008 『池島・福万寺遺跡５』 (財)大阪府文化財センター
福田由里子　2007「池島・福万寺遺跡の自然科学分析」『池島・福万寺遺跡３』 (財)大阪府文化財センター
藤井直正　1983『東大阪の歴史』 松籟社
三重県埋蔵文化財センター　2004『筋違遺跡発掘調査報告　第１分冊』
森本　徹・廣瀬時習・島崎久恵・市村慎太郎　2007「摂河泉地域における古墳時代集落の基礎研究」『調査研究報告』第５集　(財)大阪府文化財センター
八尾市立歴史民俗資料館　1995『河内の中世考古学』 八尾市教育委員会

山崎頼人・秋山浩三・朝田公年　2000「池島・福万寺遺跡における土器埋納遺構ほかの集成とその特質」『池島・福万寺遺跡１』
(財)大阪府文化財調査研究センター
山田隆一　1994「古墳時代初頭前後の中河内地域」『弥生文化博物館研究報告』第3集　大阪府立弥生文化博物館
吉岡　哲他　1988『八尾市史(前近代)本文編』　八尾市史編集委員会
米田敏幸　1997「中河内弥生集落遺跡群の変遷」『河内古文化研究論集』　柏原市古文化研究会
若松博恵・上野利明　2002「水走遺跡の遺構と遺物」『神並・西ノ辻・鬼虎川・水走遺跡　調査報告書　国道308号関連調査の成果』
(財)東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会

## 自然科学分析関連の参考文献

安藤一男　1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境への応用」『東北地理』42
伊藤　良永　1994「乾田と畑の珪藻植生.日本珪藻学会第14回研究集会講演要旨,9」『珪藻学会誌』103
小杉正人　1989「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27
後藤 敏一　2002「畑の珪藻.日本珪藻学会第23回大会講演要旨,16」『珪藻学会誌』106
中村俊夫　2000「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の14C年代』
松田順一郎　2004「古墳時代と江戸時代の畑地堆積物堆積構造の比較－大阪府久宝寺遺跡、京都府山崎遺跡の事例－」
『日本文化財科学会第21回大会研究発表要旨』　日本文化財科学会
松田順一郎・別所秀高　1997「大阪府北島遺跡における畑地形成と地形発達」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨』
日本文化財科学会
K.Kramer・H.Lange-Bertalot　1997　Ｓusswasserflora von Mitteleuropa 1.Teil:Naviculaceae,Gustav Fischer
Krammer, K.　1992　PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26.J.CRAMER.
Stuiver, M. and Reimer, P. J.　1993　Extended 14C Database and Revised CALIB3.0 14C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35
Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M.　1998　INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon,40
Vos, P.C. & H. de Wolf　1993　Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects.Hydrobiologica

## 自然科学分析関係の一覧表

### 表３　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

| 測定番号（測定法） | 試料データ | δ $^{13}$C（permil） | $^{14}$C 年代（yrBP ± 1 σ） | $^{14}$C 年代を暦年代に較正した年代 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 暦年代較正値 | 1 σ暦年代範囲 | 2 σ暦年代範囲 |
| PLD － 2646（AMS） | 木片 1O － 6b 第 12 面 A535 杭列 | −28 | 2090 ± 40 | cal BC 95 | cal BC 165 － 130 （33.8%）<br>cal BC 120 － 55 （66.2%） | cal BC 202 － cal AD 2 （99.5% ） |
| PLD － 2647（AMS） | 木片 1N － 5g 第 12 面 立木1 | −28.9 | 2115 ± 40 | cal BC 165<br>cal BC 130<br>cal BC 120 | cal BC 175 － 90 （81.1%）<br>cal BC 75 － 60 （14.4%） | cal BC 208 － 40 （90.5%） |
| PLD － 2648（AMS） | 木片 1N － 5g 第 12 面 立木3 | −26.9 | 2090 ± 40 | cal BC 95 | cal BC 165 － 130 （34.9%）<br>cal BC 120 － 85 （35.5%）<br>cal BC 80 － 55 （29.6%） | cal BC 202 － cal AD 2 （99.5%） |
| PLD － 2650（AMS） | 木片 1N － 6e 第 13 ｂ層 A702 杭 | −28.1 | 2130 ± 40 | cal BC 170 | cal BC 200 － 90 （97.0%） | cal BC 211 － 44 （82.2%） |
| PLD － 2651（AMS） | 植物片（ヨシ） 1N － 8g 第 15 面直上 | −27.9 | 3305 ± 40 | cal BC 1600<br>cal BC 1565<br>cal BC 1530 | cal BC 1620 － 1520 （99.1%） | cal BC 1687 － 1497 （100%） |

※当表は株式会社パレオ・ラボによって平成16年３月に実施された、放射性炭素年代測定の一覧である。以下、株式会社パレオ・ラボによる報告を要約する。

**方法**　試料を酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨調整の後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定した $^{14}$C 濃度に対し、同位体分別補正を行い、補正した $^{14}$C 濃度を用い、$^{14}$C 年代を算出した。

**結果**　$^{14}$C 年代値（yrBP）の算出は、Libby の半減期 5,568 年を使用し、付記した $^{14}$C 年代誤差（± 1 σ）は計数値の標準偏差σをもとに算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは試料の $^{14}$C 年代が、その $^{14}$C 年代誤差範囲内に入る確率が 68％であることを意味する。

**暦年代較正** $^{14}$C 年代の暦年代への較正には、CALIB4.3（Stuvier,M and Reimer,P.J.(1993) Extended $^{14}$C Database and Revised CALIB3.0 $^{14}$C Age Calibration Program,Radiocarbon,35,p.215-230.）を使用した。

表４　B240 溝植物遺体同定結果一覧

| 試料番号 | 調査区名 | 遺構面 | 出土年月日 | 遺構名 | 同定結果 |
|---|---|---|---|---|---|
| 463 | Ｈ６-３-１<br>Ｎ-２ｇ | 第 12 面溝 | 2007 年<br>10 月３日 | 溝<br>採取 101.3g | イバラモ属５個 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | ヘラオモダカ属２個 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | イネ（籾殻）1 個 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | カヤツリグサ科 50 個 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | ホタルイ 23 個 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | イボクサ 1 個 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | コナギ 54 個 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | カナムグラ 2 個 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | タデ属　35 個 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | ヒユ属　1 個 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | ノブドウ属　1 個 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | ナデシコ科　8 個 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | フジ属（芽）２個 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | アカメガシワ　1 個 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | マクワウリの仲間　2 個 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | タカサブロウ 1 個 |

## 表５　B240 溝　珪藻分析結果一覧

| | 出土地点 | | | | | 同定数 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 属・種名 | 第 12 面溝 | 断面 1 | 断面 2 | 断面 3 | 断面 4 | |
| Achnanthes crenulata | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Achnanthidium pyrenaicum | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Amphora copulata | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Caloneis bacillum | 1 | 0 | 5 | 0 | 0 | 6 |
| Ceratoneis arcus | 1 | 0 | 9 | 0 | 0 | 10 |
| Coccneis placentula | 1 | 0 | 17 | 0 | 0 | 18 |
| Coccneis sp. | 22 | 5 | 0 | 3 | 5 | 35 |
| Cymbella tumida | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Cymbella sp. | 22 | 0 | 10 | 0 | 0 | 32 |
| Cymatopleura sp. | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Diplonesis sp. | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| Eunotia exigua | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| Eunotia paludosa | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 |
| Encyonema silesiacum | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 |
| Encynopsis microcephala | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Encynopsis sp. | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 2 |
| Geissleria deccusis | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| Gomphonema augur | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Gomphonema sp. | 3 | 0 | 3 | 0 | 5 | 11 |
| Gomphonema quadripunctatum | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 3 |
| Gomphonema parvulum | 0 | 0 | 9 | 0 | 0 | 9 |
| Gyrosigma spencerii | 0 | 0 | 8 | 1 | 0 | 9 |
| Gyrosigma proceum | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Gyrosigma sp. | 0 | 25 | 0 | 1 | 0 | 26 |
| Fragilaria sp. | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| Frustulia sp. | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| Frustulia vulgaria | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 2 |
| Navicula cryptocephola | 0 | 0 | 9 | 0 | 0 | 9 |
| Navicula gregaria | 0 | 0 | 14 | 0 | 0 | 14 |
| Navicula pseudosilicula | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Navicula veneta | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| Navicula sp. | 8 | 5 | 0 | 0 | 1 | 14 |
| Nitzschia amphibia | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| Nitzschia hantzshiana | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | 4 |
| Nitzschia palea | 0 | 0 | 16 | 0 | 1 | 17 |
| Nitzschia sp. | 1 | 1 | 0 | 3 | 0 | 5 |
| Pinnularia lata | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 2 |
| Pinularia subcapitata | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Pinnularia subgibba | 0 | 1 | 3 | 0 | 1 | 5 |
| Pinnularia sp. | 0 | 6 | 0 | 0 | 2 | 8 |
| Pseudostaurosira brevistriata | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 2 |
| Rhoicosphenia abbreviata | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Sellaphora japonica | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| Sellaphora seminulum | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 5 |
| Stauroneis sp. | 6 | 1 | 0 | 0 | 1 | 8 |
| Surirella angusta | 0 | 0 | 5 | 0 | 0 | 5 |
| Surirella sp. | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Synedra sp. | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| Synedra ulna | 0 | 1 | 3 | 0 | 0 | 4 |
| Synedra acus | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| 遺殻破片 | 219 | 166 | 569 | 30 | 41 | 1025 |
| 計 | 311 | 214 | 699 | 39 | 64 | 1327 |

## 表６　　掲載遺物一覧

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法　量(㎝)<br>(　)は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 9 | | 磁器<br>瀬戸染付坏 | 02－1 | 機械掘削<br>終了面 | | 19c | 高台径:2.8(1/6)<br>現高:3.6 | 外:施釉,畳付露胎,底面呉須で圏線　内:施釉 | 灰白(N8/)に呉須,緑釉 |
| 2 | 9 | | 磁器<br>波佐見染付<br>重ね鉢蓋 | 02－1 | 機械掘削<br>終了面 | | 18c | 口径:7.8(1/11)<br>現高:1.75 | 外,内:施釉,口縁部露胎 | 灰白(N8/)に呉須 |
| 3 | 9 | | 磁器<br>波佐見染付<br>芙蓉手皿 | 02－1 | 機械掘削<br>終了面 | | 17c | 口径:9.6(1/5)<br>現高:1.7 | 型つくり<br>外:施釉(ピンホールあり),稜花口縁　内:施釉 | 灰白(2.5GY8/1)に呉須 |
| 4 | 9 | | 磁器<br>波佐見染付<br>仏飯器 | 02－1 | 機械掘削<br>終了面 | | 18c | 底径:3.8(完)<br>現高:4.3 | 外:施釉,底面露胎<br>内:施釉 | 灰白(5GY8/1)に呉須 |
| 5 | 9 | | 陶器<br>京・信楽系<br>灯明台 | 02－1 | 機械掘削<br>終了面 | | 19c | 底径:4.05(完)<br>現高:3.55 | 外:施釉(貫入あり),回転ヘラケズリ<br>内:施釉(貫入あり),回転ナデ | 灰白(7.5Y7/2)・(10Y7/2) |
| 6 | 9 | | 土師器<br>炮烙 | 02－1 | 機械掘削<br>終了面 | | 19c | 現高:2.75 | 外:ヨコナデ,ヘラケズリ?<br>内:ヨコナデ,ナデ | にぶい橙(5YR6/4),<br>褐灰(7.5YR5/1)<br>石英,長石,チャート,雲母 |
| 7 | 9 | | 陶器<br>備前擂鉢 | 02－1 | 機械掘削<br>終了面 | | 17c後半 | 口径:34.0(1/7)<br>現高:4.8 | 外:回転ナデ<br>内:回転ナデ,スリ目後ナデ消し,スリ目 | にぶい赤褐(2.5YR4/3),<br>褐灰(7.5YR4/1) |
| 8 | 9 | | 磁器<br>京・信楽系<br>灯明皿 | 02－1 | 1面 | A1井戸 | 19c | 口径:6.2(3/4)<br>底径:2.4(完)<br>器高:1.2 | 外:施釉,回転ナデ,回転ヘラケズリ,スス付着<br>内:施釉(貫入あり),リング状の重ね道具使用 | 灰黄(2.5Y7/2),<br>にぶい黄橙(10YR7/3) |
| 9 | 9 | 31 | 瓦<br>転用円板 | 02－1 | 1面 | A1井戸 | | 径:5.5～5.7<br>厚:1.6　重さ:53.6g | 周縁研磨<br>外:タタキ　内:ナデ | 灰(N4/) |
| 10 | 9 | 31 | 瓦<br>井戸瓦 | 02－1 | 1面 | A1井戸 | | 長さ:28.6<br>幅:広端25.1,<br>狭端24.45　厚:3.1 | 凸:ナデ,ヘラ描き線1<br>凹:刻印「山本新田」 | |
| 11 | 9 | | 石製品<br>砥石 | 02－1 | 1面 | A1井戸 | | 現長:7.7　現幅:5.0<br>現厚:0.9 | 凝灰質頁岩<br>砥面1 | |
| 12 | 9 | | 陶器<br>肥前系京焼系碗 | 02－1 | 1面 | A2井戸 | 18c | 高台径:4.9(3/4)<br>現高:1.6 | 外:施釉(貫入あり),底面露胎で「清水」印<br>内:施釉(貫入あり),砂粒混入 | 淡黄(5Y8/3) |
| 13 | 9 | 31 | 瓦<br>丸瓦 | 02－1 | 1面 | A9暗渠 | 近世? | 現長:30.8　現幅:15.9<br>現厚:1.8 | 玉縁短い<br>凸:端部近くヨコナデ後タテナデ<br>凹:ナデ,布目痕 | |
| 14 | 9 | | 磁器<br>波佐見染付碗 | 02－1 | 1ｂ面<br>精査 | | 17c後半 | 口径:8.8(1/9)<br>現高:4.45 | 外:施釉<br>内:施釉(ピンホールあり) | 灰白(2.5GY8/1)<br>に呉須 |
| 15 | 9 | | 磁器<br>波佐見染付碗 | 02－1 | 1層 | | 17c後半 | 口径:11.8(1/6)<br>現高:5.0 | 外:施釉<br>内:施釉(四方襷) | 明緑灰(7.5GY8/1)<br>に呉須 |
| 16 | 9 | | 磁器<br>波佐見染付碗 | 02－1 | 1層 | | 18c中頃 | 口径:11.0(1/6)<br>現高:3.6 | 外:施釉(草花文)<br>内:施釉 | 明緑灰(7.5GY8/1)<br>に呉須 |
| 17 | 9 | | 磁器<br>波佐見染付碗 | 02－1 | 1ｂ面 | | 18c | 高台径:3.85(3/4)<br>現高:4.65 | 外:施釉,畳付露胎,高台内銘「大明年製」のくずれか<br>内:施釉(ピンホールあり) | 灰白(5GY8/1)に呉須 |
| 18 | 9 | | 磁器<br>波佐見染付碗 | 02－1 | 1ｂ面 | | 18c | 高台径:4.4(1/5)<br>現高:2.4 | 外:施釉(貫入あり),畳付露胎<br>内:施釉(貫入あり) | 灰白(10Y7/1)に呉須 |
| 19 | 9 | | 磁器<br>肥前系青磁碗 | 02－1 | 1層 | | 18c | 高台径:4.6(1/3)<br>現高:2.9 | 外:施釉(貫入あり,ピンホールあり),畳付露胎<br>内:施釉(貫入あり,ピンホールあり) | 灰白(5Y7/2) |
| 20 | 9 | | 磁器<br>波佐見白磁皿 | 02－1 | 1層 | | 18c | 口径:9.75(1/8)<br>高台径:3.55(完)<br>現高:3.0 | 外:施釉,回転ヘラケズリ,高台露胎　内:施釉(ピンホールあり),蛇の目剥ぎ | 灰白(N8/) |
| 21 | 9 | | 磁器<br>波佐見染付瓶 | 02－1 | 1層 | | 18c | 中程径:3.4(1/4) | 外:蛸唐草文<br>内:露胎,回転ナデ | 灰白(5GY8/1)に呉須 |
| 22 | 9 | | 磁器<br>波佐見赤絵<br>仏飯器 | 02－1 | 1層 | | 18c | 口径:5.8(1/4)<br>現高:3.0 | 外,内:施釉<br>外:焼成した後赤で彩色 | 灰白(N8/)に<br>赤(10R4/6) |
| 23 | 9 | | 陶器<br>京・信楽系<br>灯明皿 | 02－1 | 1層 | | 19c | 口径:5.7(2/3)<br>底径:4.5(完)<br>現高:3.6 | 外:施釉(貫入あり),脚端露胎<br>内:施釉 | 灰白(2.5Y8/2) |
| 24 | 9 | | 陶器<br>肥前系刷毛目碗 | 02－1 | 1ｂ面<br>精査 | | 18c | 高台径:3.75(1/2)<br>現高:2.0 | 外:施釉,畳付露胎<br>内:施釉(刷毛目文) | 灰白(2.5Y8/1) |
| 25 | 9 | | 陶器<br>唐津鉄釉碗 | 02－1 | 1ｂ面<br>精査 | | 17c第2四半期 | 高台径:4.4(一部欠)<br>現高:2.9 | 外:一部施釉,回転ヘラケズリ,下半部露胎　内:施釉 | 灰白(2.5Y8/1),<br>黒褐(2.5Y3/2) |
| 26 | 9 | | 陶器<br>肥前系碗 | 02－1 | 1層 | | 18c | 高台径:4.8(2/3)<br>現高:2.4 | 外:施釉(貫入あり),畳付露胎,重ね焼痕　内:施釉(貫入あり) | 浅黄(2.5Y7/3) |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(cm)<br>( )は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 27 | 9 | | 陶器<br>京・信楽系<br>土瓶? | 02－1 | 1層 | | 19c | 底径:9.4(1/4)<br>現高:2.3 | 外:回転ヘラケズリ,回転ナデ,露胎　内:回転ナデ,露胎 | にぶい褐(7.5YR5/4),<br>灰黄(2.5Y7/2) |
| 28 | 9 | | 陶器<br>備前伊部手蓋 | 02－1 | 1b面<br>精査 | | 17c後半 | 口径:10.2(1/4)<br>現高:1.7 | 外,内:回転ナデ | 赤褐(2.5YR4/6) |
| 29 | 9 | | 陶器<br>京・信楽系鍋蓋 | 02－1 | 1層 | | 19c | 口径:16.8(1/8)<br>現高:2.5 | 外,内:施釉(端部露胎) | 暗オリーブ(5Y4/4) |
| 30 | 9 | | 土師器<br>火鉢 | 02－1 | 1層 | | 19cか | 口径:19.6(1/10)<br>現高:4.6 | 外:回転ナデ,上端一部スス?付着,沈線1,スタンプ文様,沈線2<br>内:回転ナデ?,一部スス?付着 | 橙(7.5YR6/6)<br>石英,長石 |
| 31 | 9 | | 陶器<br>丹波甕 | 02－1 | 1b面 | | 18c | 口径:36.0(1/20)<br>現高:5.3 | 外:端部凹線3,回転ナデ,自然釉付着　内:回転ナデ,部分的に自然釉付着 | にぶい褐(7.5YR5/3),<br>灰褐(7.5YR5/2) |
| 32 | 9 | 31 | 磁器<br>転用円板 | 02－1 | 1層 | | 18c | 径:1.8～2.1<br>現厚:3～5 重さ:1.8g | 波佐見染付<br>外,内:施釉 | 灰白(10Y8/1)に呉須 |
| 33 | 9 | 31 | 瓦質土器<br>転用円板 | 02－1 | 1層 | | | 径:2.8～3.0<br>厚:1.0　重さ:9.8g | 外:剥離,ナデ　内:ナデ | 灰白(7.5Y8/1) |
| 34 | 9 | 31 | 磁器<br>転用円板 | 02－1 | 1b面 | | 18c | 径:6.35×6.15<br>厚:2.3　重さ:49.7g | 波佐見染付仏花器<br>外:施釉(一重網目文)　内:施釉 | 明オリーブ灰(2.5GY7/1)に呉須 |
| 35 | 9 | 31 | 磁器<br>転用円板 | 02－1 | 1層 | | 17c | 径:4.8～5.4<br>厚:0.7～1.8<br>重さ:35.7g | 瀬戸灰釉碗<br>内:施釉(貫入あり) | 灰白(7.5Y7/2) |
| 36 | 10 | 31 | 陶器<br>転用円板 | 02－1 | 1層 | | 18c | 径:4.35～4.85<br>厚:1.6～1.9<br>重さ:32.6g | 肥前系碗<br>外底:回転ヘラケズリ<br>内:施釉(貫入あり) | にぶい黄橙(10YR7/2) |
| 37 | 10 | 31 | 陶器<br>転用円板 | 02－1 | 1b面 | | 17c前半 | 径:4.0×4.15<br>厚0.9　重さ:19.9g | 丹波擂鉢<br>外:ナデ?　内:スリ目 | 灰白(N7/) |
| 38 | 10 | | 土製品<br>人形 | 02－1 | 1層 | | | 現高:2.9 | | 灰白(2.5Y8/2) |
| 39 | 10 | | 磁器<br>波佐見染付碗 | 02－1 | 1b面 | A10溝 | 18c中頃 | 高台径:4.2(1/4)<br>現高:3.35 | 外:施釉,畳付露胎,離れ砂少し付着　底面呉須で圏線<br>内:施釉 | 明緑灰(7.5GY8/1)に呉須 |
| 40 | 10 | | 陶器<br>備前徳利 | 02－1 | 1b面 | A24溝 | 16c末～17c初 | 口径:4.8(1/7)<br>現高:1.9 | 外,内:回転ナデ | にぶい赤褐(2.5YR5/4) |
| 41 | 10 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 1b面 | A25溝 | 18cか | 口径:9.0(1/8)<br>現高:1.0 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ<br>内外面一部スス付着 | 灰白(5Y8/2) |
| 42 | 10 | | 陶器<br>京・信楽系<br>灯明皿 | 02－1 | 1b面 | A26溝 | 19c | 口径:6.3(1/11)<br>底径:2.6(1/3)<br>現高:1.3 | 外:施釉,回転ナデ,回転ヘラケズリ　内:施釉 | 灰白(5Y7/2) |
| 43 | 10 | | 陶器<br>肥前系碗 | 02－1 | 1b面 | A26溝 | 18c | 高台径:4.1(2/3)<br>現高:2.3 | 外:施釉(貫入あり),畳付露胎,離れ砂付着<br>内:施釉(貫入あり) | 淡黄(2.5Y8/3) |
| 44 | 10 | | 磁器<br>肥前系白磁碗 | 02－1 | 1b面 | A1b土坑 | 17c | 口径:8.4(1/9)<br>高台径:3.4(1/3)<br>現高:4.5 | 外:施釉(ピンホールあり),畳付露胎　内:施釉 | 灰白(N8/) |
| 45 | 10 | | 磁器<br>伊万里染付碗 | 02－1 | 1b面 | A1b土坑 | 17c | 口径:9.8(1/18)<br>現高:4.65 | 外:施釉(一重網目文)<br>内:施釉 | 明緑灰(7.5GY8/1)に呉須 |
| 46 | 10 | | 磁器<br>波佐見染付碗 | 02－1 | 1b面 | A1b土坑 | 18c | 口径:10.8(1/7)<br>現高:5.4<br>底径:4.0(1/4) | 外:施釉(草花文),畳付露胎<br>内:施釉 | 明青灰(5B7/1)に呉須 |
| 47 | 10 | | 磁器<br>波佐見染付碗 | 02－1 | 1b面 | A1b土坑 | 18c | 高台径:4.45(一部欠)<br>現高:3.65 | 外:施釉(ピンホールあり),高台部露胎　内:施釉(一部露胎) | 灰白(10Y8/1)に呉須 |
| 48 | 10 | | 磁器<br>波佐見白磁瓶 | 02－1 | 1b面 | A1b土坑 | 18c | 高台径:4.8(1/7)<br>現高:3.15 | 外:施釉(下に削り痕),畳付露胎,離れ砂付着<br>内:露胎,重ね焼痕? | 灰白(10Y7/1) |
| 49 | 10 | | 磁器<br>伊万里染付皿 | 02－1 | 1b面 | A1b土坑 | 17c | 口径:14.2(1/9)<br>高台径:8.2(1/4)<br>現高:2.2 | 外:施釉,畳付露胎,離れ砂付着,高台内銘款?<br>内:施釉(捻花文) | 灰白(5GY8/1)に呉須 |
| 50 | 10 | | 陶器<br>肥前系刷毛目碗 | 02－1 | 1b面 | A1b土坑 | 17c | 口径:10.2(1/11)<br>底径:4.0(1/3)<br>現高:5.3 | 外:施釉,畳付露胎,離れ砂付着<br>内:施釉 | 灰オリーブ(7.5Y5/2),<br>灰白(10Y7/1) |
| 51 | 10 | | 陶器<br>肥前系碗 | 02－1 | 1b面 | A1b土坑 | 19c | 口径:9.8(1/8)<br>現高:4.6 | 外,内:施釉(貫入あり) | 淡黄(2.5Y8/3) |
| 52 | 10 | | 陶器<br>褐釉壺 | 02－1 | 1b面 | A1b土坑 | 15～16c | 口径:15.0(1/11)<br>現高:3.3 | 中国製か<br>外,内:施釉(口縁部無釉) | 黒褐(7.5YR3/2) |
| 53 | 10 | | 陶器<br>肥前系壺 | 02－1 | 1b面 | A1b土坑 | 18c | 胴部径:21.1(1/15)<br>現高:6.1 | 外:施釉,素焼きの上に鉄絵<br>内:施釉(刷毛目) | 黒褐(5YR3/1),<br>灰赤(7.5R5/2) |
| 54 | 10 | | 陶器<br>丹波擂鉢 | 02－1 | 1b面 | A1b土坑 | 17c前半 | 径:9.55×4.15 | 底部片<br>スリ目10条? | にぶい褐(7.5YR6/3)<br>石英,雲母,長石,チャート |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(cm)<br>( )は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 55 | 10 | 31 | 磁器<br>転用円板 | 02－1 | 1 b面 | A1b土坑 | 18c | 径:2.35 × 2.25<br>厚:0.8　重さ:5.5g | 景徳鎮窯系盤の底<br>外:施釉　内:施釉 | 灰白(N7/)に呉須 |
| 56 | 10 | 31 | 磁器<br>転用円板 | 02－1 | 1 b面 | A1b土坑 | 18c | 径:5.7 × 5.3<br>厚:1.5　重さ:37.5g | 波佐見染付碗<br>外:施釉(貫入あり),畳付露胎,部分的に離れ砂付着<br>内:施釉(貫入あり),胎土目? | 明緑灰(7.5GY7/1)に呉須 |
| 57 | 10 | 31 | 陶器<br>転用円板 | 02－1 | 1 b面 | A1b土坑 | 17c第2四半期 | 径:7.2 × 6.7<br>厚:1.4　重さ:74.8g | 唐津皿<br>外:畳付糸切痕<br>内:施釉,見込みに輪状の砂目 | 黄灰(2.5Y6/1) |
| 58 | 10 | 40 | 木製品<br>差歯下駄 | 02－1 | 1 b面 | A1b土坑 | | 長:20.7　幅:8.65<br>厚:4.3 | スギ<br>露卯,前壺1,横緒孔2,枘孔4,両歯部分後斜めに摩滅,右足用? | |
| 59 | 10 | | 磁器<br>波佐見染付坏 | 02－1 | 1 b層 | | 17c | 口径:6.8(1/3)<br>現高:3.5 | 外,内:施釉 | 灰白(2.5GY8/1)に呉須 |
| 60 | 10 | | 磁器<br>波佐見染付鉢 | 02－1 | 1 b層 | | 18c | 胴径:19.0(1/8) | 外:施釉(貫入あり)<br>内:施釉(貫入あり) | 灰白(5Y7/2)に呉須 |
| 61 | 10 | 31 | 磁器<br>転用円板 | 02－1 | 1 b層 | | 18c | 径:2.3 × 2.6<br>現厚:0,5　重さ:4.6g | 波佐見染付<br>外:施釉(貫入あり,一重網目文)<br>内:施釉(貫入あり) | 灰白(N7/)に呉須 |
| 62 | 10 | 40 | 木製品<br>紡織具糸巻 | 02－1 | 1 b層 | | | 現長:13.7　幅:2.9<br>厚:2.55<br>孔径:1.2 × 1.3 | スギ | |
| 63 | 10 | | 磁器<br>波佐見染付碗 | 06－2 | 1層 | | 18c | 口径:10.6(1/4)<br>高台径:4.3(完)<br>器高:5.2 | 外:施釉(泡粒あり),畳付露胎<br>内:施釉,底面一部離れ砂付着<br>口縁:一部階段状に低くなっている | 灰白(10Y8/1)に呉須 |
| 64 | 10 | | 磁器<br>波佐見染付碗 | 06－2 | 1層 | | 18c | 高台径:4.4(1/5)<br>現高:4.3 | 外:施釉,畳付露胎,離れ砂付着<br>内:施釉,釉ハギ | 灰白(10Y7/1)に呉須 |
| 65 | 10 | | 磁器<br>波佐見染付碗 | 06－2 | 1層 | | 18c | 高台径:3.9(1/3)<br>現高:2.9 | 外:施釉(貫入あり)<br>内:施釉(部分的に貫入あり) | 灰白(5GY8/1)に呉須 |
| 66 | 10 | | 磁器<br>波佐見染付瓶 | 06－2 | 1層 | | 17c後半 | 高台径:3.8(1/2)<br>現高:2.6 | 外:施釉,畳付露胎,離れ砂少しあり　内:施釉 | 明緑灰(10GY8/1)に呉須 |
| 67 | 10 | | 磁器<br>波佐見染付皿 | 06－2 | 1層 | | 17c第2四半期 | 口径:13.0(1/16)<br>現高:2.5 | 外:施釉<br>内:施釉 | 明オリーブ灰(2.5GY7/1)に呉須 |
| 68 | 10 | | 瓦質土器<br>火鉢 | 06－2 | 1層 | | 18c | 現高:4.2 | 外:摩滅<br>内:ヨコナデ | 灰(N4/),長石,石英,チャート,雲母 |
| 69 | 10 | | 土師器<br>炮烙 | 06－2 | 1層 | | 18c初か | 口径:30(1/16)<br>現高:5.0 | 外:ヨコナデ,掻き上げ?,ヘラケズリ?,厚くスス付着<br>内:ヨコナデ,炭化物付着 | 暗褐(10YR3/3)<br>赤色粒 |
| 70 | 10 | | 陶器<br>丹波擂鉢 | 06－2 | 1層 | | 18c | 現高:3.6 | 外:回転ナデ<br>内:回転ナデ後スリ目 | 暗赤褐(2.5YR3/3)<br>長石,石英 |
| 71 | 10 | | 陶器<br>堺擂鉢 | 06－2 | 1層 | | 18c | 底径:12.8(1/4)<br>現高:9.1 | 外:回転ナデ,板ナデ,ナデ<br>内:スリ目,焼台痕あり | 灰赤(2.5YR5/2)<br>石英,長石 |
| 72 | 10 | | 陶器<br>鉢 | 06－2 | 1層 | | ? | 口径:25.7(1/5)<br>高台径:17.6(1/7)<br>現高:9.9 | 外:端部ヘラで楕円文様,回転ナデ,ヘラで文様の切り込み,高台ヘラケズリ　内:回転ナデ | 黒褐(10YR3/2) |
| 73 | 11 | | 磁器<br>伊万里染付碗 | 06－2 | 1 b面 | B1b土坑 | 17c第2四半期 | 口径:11.0(1/11)<br>現高:4.7 | 外:施釉(一重網目文)<br>内:施釉 | 明青灰(5B7/1)に呉須 |
| 74 | 11 | | 磁器<br>伊万里染付碗 | 06－2 | 1 b面 | B1b土坑 | 17c | 口径:11.0(1/9)<br>現高:5 | 外,内:施釉 | 明緑灰(7.5GY8/1)に呉須 |
| 75 | 11 | | 陶器<br>肥前系京焼系<br>赤絵碗 | 06－2 | 1 b面 | B1b土坑 | 18c | 口径:10.4(1/7)<br>現高:3.9 | 外:施釉(貫入あり),赤と黄色の色絵 | 灰白(2.5Y8/1) |
| 76 | 11 | | 土師器<br>羽釜 | 06－2 | 1 b面 | B1b土坑 | 17c | 口径:26.2(1/12)<br>現高:3.0 | 外:ヨコナデ,スス付着<br>内:ヨコナデ,ナデ | オリーブ黒(7.5Y3/1),石英,長石,チャート |
| 77 | 11 | | 土師器<br>炮烙 | 06－2 | 1 b面 | B1b土坑 | 17c | 口径:32.0(1/7)<br>現高:5.5 | 外:指押え後掻き上げ,ヘラケズリ,ナデ,スス付着<br>内:指押え,ヨコナデ | 黒褐(10YR3/2) |
| 78 | 11 | 33 | 金属製品<br>不明鉄製品 | 06－2 | 1 b面 | B1b土坑 | | 現長:6.6　現幅:0.9<br>現厚:0.4(さびぬき) | | |
| 79 | 11 | | 磁器<br>波佐見染付碗 | 06－2 | 1 b層 | 坪境畦畔西 | 18c | 高台径:3.9(完)<br>現高:3.2 | 外:施釉,畳付露胎,離れ砂一部付着　内:施釉 | 灰白(10Y7/1)に呉須 |
| 80 | 13 | 31 | 須恵器<br>転用円板 | 02－1 | 2－1面 | A63井戸 | | 径:2.65 × 2.6<br>厚:0.85　重さ:8.1g | 外:平行タタキ<br>内:当て具痕 | 灰(N4/) |
| 81 | 13 | 31 | 磁器<br>龍泉窯系青磁碗 | 02－1 | 2－1層 | | 15c第4四半期 | 現高:3.5 | 外,内:施釉(貫入あり)<br>外:線描蓮弁文 | 明オリーブ灰(2.5GY7/1) |
| 82 | 13 | | 陶器<br>丹波擂鉢 | 02－1 | 2－1層 | | 17c第2四半期 | 現高:3.5 | 外,内:回転ナデ<br>内:クシ目 | 灰(N6/) |
| 83 | 13 | | 陶器<br>肥前系碗 | 02－1 | 2－1～2層 | | 18c | 口径:10.8(1/12)<br>現高:5.6 | 外:施釉(貫入あり),緑釉流しかけ　内:施釉(貫入あり) | 灰白(10YR8/2) |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(cm)<br>(　)は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 84 | 13 | | 陶器<br>肥前系灰釉碗 | 02－1 | 2－1～<br>2層 | | 18c | 高台径:4.8(1/4)<br>現高:3.45 | 外:施釉(一部貫入あり),高台部露胎　内:施釉(貫入あり),割れ口に二次焼成痕 | オリーブ褐(2.5Y4/3),<br>にぶい黄(2.5Y6/3) |
| 85 | 13 | 41 | 木製品<br>漆器椀 | 02－1 | 2－1～<br>2層 | | | 口径:11.4(2/5)<br>現高:3.9 | 材質不明<br>外:赤漆に黒漆で丸に亀甲に花菱文(3方向)　内:赤漆のみ | |
| 86 | 13 | 40 | 木製品<br>不明木製品 | 02－1 | 2－1～<br>2層 | | | 現長:12.2　現径:0.5 | スギ<br>箸?,棒状,折れて曲がる | |
| 87 | 13 | 40 | 木製品<br>下駄の歯? | 02－1 | 2－1～<br>2層 | | | 現長:5.6　現幅:8.8<br>現厚:1.2 | ヒノキ | |
| 88 | 13 | 40 | 木製品<br>不明木製品 | 02－1 | 2－1～<br>2,3層 | | | 現長:11.4　現幅:2.9<br>現厚:0.6 | ヒノキ<br>木釘1残　裏:浅い線刻がある | |
| 89 | 13 | | 磁器<br>波佐見染付碗 | 02－1 | 2－2層 | | 18c中頃 | 高台径:4.6(1/3)<br>現高:2.5 | 外,内:施釉(ピンホールあり),釉がはじけた所もあり　畳付露胎 | 灰白(5GY8/1)に呉須 |
| 90 | 13 | | 磁器<br>波佐見染付碗 | 02－1 | 2－2層 | | 18c | 高台径:4.3(1/3)<br>現高:2.6 | 外:施釉(貫入あり,一重網目文),畳付露胎,離れ砂付着<br>内:施釉(貫入あり,ピンホールあり) | 明緑灰(10GY8/1)<br>に呉須 |
| 91 | 13 | | 陶器<br>備前壺 | 02－1 | 2－2層 | | 15c | 口径:8.8(1/6)<br>現高:1.6 | 外,内:回転ナデ<br>内:自然釉付着 | 灰褐(5YR5/2) |
| 92 | 13 | 31 | 須恵器<br>転用円板 | 02－1 | 2－2層 | | | 径:2.2×3.3<br>厚:0.7　重さ:9.7g | 外:平行タタキ<br>内:当て具痕 | 灰(N5/) |
| 93 | 13 | 31 | 瓦<br>転用円板 | 02－1 | 2－2層 | | | 径:4.3×4.6<br>厚:1.4　重さ:35.6g | 凸:指押え,ナデ<br>凹:ナデ | 灰(N4/) |
| 94 | 13 | 32 | 金属製品<br>キセル | 02－1 | 2－2層 | | 18c後半か | 現長:3.37<br>現幅:1.46 | 雁首 | |
| 95 | 13 | | 磁器<br>景徳鎮窯系<br>青花碗 | 02－1 | 2－3層 | | 16c前半 | 口径:11.0(1/10)<br>現高:4.1 | 外:施釉(ピンホールあり)<br>内:施釉(砂1つ含む) | 明緑灰(10GY8/1)<br>に呉須 |
| 96 | 13 | 31 | 磁器<br>景徳鎮窯系<br>青花碗 | 02－1 | 2－3層 | | 16c第4四半期 | 高台径:3.8(5/8)<br>現高:2.4 | 外:施釉,高台内吉祥文「永保長春」　内:施釉,鳥文,万頭心 | 明緑灰(10GY8/1)<br>に呉須 |
| 97 | 13 | 31 | 磁器<br>漳州窯系青花碗 | 02－1 | 2－3層 | | 17c初 | 口径:12.4(1/5)<br>現高:4 | 外:施釉(ピンホールあり,草花文)　内:施釉(ピンホールあり) | オリーブ黄(5Y6/3)<br>に呉須 |
| 98 | 13 | | 磁器<br>波佐見染付碗 | 02－1 | 2－3層 | | 17c | 高台径:3.9(1/6)<br>現高:4.3 | 外:施釉(ピンホールあり),畳付露胎,離れ砂付着,気泡あり<br>内:施釉 | 灰白(5GY8/1)に呉須 |
| 99 | 13 | | 陶器<br>唐津皿 | 02－1 | 2－3層 | | 17c第2四半期 | 口径:11.8(若干のみ)<br>高台径:4.2(一部欠)<br>現高:3.25 | 外:施釉(ピンホールあり),回転ヘラケズリ,スス付着(灯明皿に転用)　内:施釉(ピンホールあり),砂目3 | 灰黄(2.5Y6/2) |
| 100 | 13 | | 陶器<br>唐津皿 | 02－1 | 2－4面 | | 17c第1四半期 | 高台径:4.7(一部欠)<br>現高:1.4 | 外:施釉,ヘラケズリ<br>内:施釉(縮れとピンホールあり),見込み胎土目3 | 灰オリーブ(5Y6/2) |
| 101 | 13 | | 陶器<br>肥前系灰釉碗 | 02－1 | 2－3層 | | 17c | 高台径:4.5(2/3)<br>現高:1.9 | 外:露胎(部分的に釉かかる),三日月高台　内:施釉(貫入あり) | 灰白(10Y7/1) |
| 102 | 13 | | 土師器<br>鍋 | 02－1 | 2－3層 | | 16cか | 口径:33.4(1/20)<br>現高:3.7 | 外:ヨコナデ,工具痕,ナデ?,スス付着　内:ヨコナデ,ナデによる凹み,ハケメ | にぶい黄橙<br>(10YR6/3)<br>雲母 |
| 103 | 13 | 31 | 瓦質土器<br>転用円板 | 02－1 | 2－3層 | | | 径:4.05×4.1<br>現厚:0.8　重さ:18.6g | 外:ナデ?　内:ナデ | 灰(5Y5/1) |
| 104 | 13 | 31 | 瓦<br>転用円板 | 02－1 | 2－3層 | | | 径:4.15×4.1<br>厚:1.3　重さ:28.8g | 凸,凹:ナデ | 暗灰(N3/) |
| 105 | 13 | 31 | 陶器<br>転用円板 | 02－1 | 2－3層 | | | 径:3.8×3.2<br>厚:1.1　重さ:17.8g | 丹波擂鉢<br>外:ナデ　内:スリ目 | 橙(7.5YR6/6)<br>石英,長石 |
| 106 | 13 | 32 | 石製品<br>砥石 | 02－1 | 2－3層 | | | 現長:5.5　現幅:6.8<br>現厚:2.0 | 凝灰質頁岩<br>砥面5?,工具痕?,擦痕 | |
| 107 | 13 | | 石製品<br>不明石製品 | 02－1 | 2－3層 | | | 現長:7.46　現幅:2.96<br>現厚:1.28 重さ:55.4g | 砂岩<br>先端敲打痕か | |
| 108 | 13 | | 石製品<br>不明石製品 | 02－1 | 2－3層 | | | 長:7.34　幅:4.19<br>厚:1.28　重さ:62.7g | 砂岩 | |
| 109 | 13 | 31 | 磁器<br>景徳鎮窯系<br>青花碗 | 02－1 | 2－4層 | | 16c前半 | 現高:3.0 | 外,内:施釉 | 灰白(7.5Y8/1)に<br>呉須 |
| 110 | 13 | 31 | 磁器<br>景徳鎮窯系<br>青花碗 | 02－1 | 2－4層 | | 16c前半 | 口径:10.8(1/6)<br>現高:5.05 | 外,内:施釉 | 明緑灰(7.5GY8/1)<br>に呉須 |
| 111 | 13 | 31 | 磁器<br>景徳鎮窯系<br>青花皿 | 02－1 | 2－4層 | | 16c末～17c初 | 口径:8.9(1/3)<br>現高:2.15 | 外:底面線状の印,畳付露胎,高台内外離れ砂　内:羯磨文 | 明緑灰(7.5GY8/1)<br>に呉須 |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(cm)<br>( )は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 112 | 13 | | 陶器<br>唐津灰釉碗 | 02－1 | 2－4層 | | 17c初 | 高台径:4.6(1/2)<br>現高:3.1 | 外:施釉(貫入あり),高台露胎<br>内:施釉(貫入あり) | 灰白(10Y7/1) |
| 113 | 13 | | 陶器<br>丹波擂鉢 | 02－1 | 2－4層 | | 18c | 現高:2.0 | 鉄釉<br>外:施釉,下半露胎　内:施釉 | 褐(7.5YR4/3),<br>黒褐(7.5YR3/2) |
| 114 | 13 | | 陶器<br>丹波擂鉢 | 02－1 | 2－4層 | | 17c第3四半期 | 現高:6.2 | 外,内:回転ナデ<br>内:スリ目(1.65cm幅に5本) | 灰黄(2.5Y6/2)<br>石英,長石,赤色砂粒 |
| 115 | 13 | | 緑釉陶器<br>底部 | 02－1 | 2－4層 | | 10c | 底径:7.4(1/8)<br>現高:1.0 | 京都産か<br>外:回転ナデ,緑釉,高台端部ヘラケズリ　内:緑釉 | 灰(N6/) |
| 116 | 13 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 2－4層 | | 16cか | 口径:8.6(1/6)<br>現高:1.5 | 外:ヨコナデ,指押え,スス付着<br>内:ヨコナデ,スス付着(灯明皿) | 灰白(2.5Y8/2)<br>石英,長石,金雲母 |
| 117 | 13 | | 瓦質土器<br>擂鉢 | 02－1 | 2－4層 | | 16cか | 現高:3.3 | 外:ヨコナデ<br>内:ヨコナデ,スリ目 | 暗灰(N3/) |
| 118 | 13 | | 瓦質土器<br>土管 | 02－1 | 2－4層 | | | 口径:15.2(1/8)<br>現高:3.7 | 外:ヨコナデ,ナデ?(摩滅)<br>内:ヨコナデ,ナデ? | 灰(N4/),<br>灰白(2.5Y8/2)<br>石英,長石 |
| 119 | 13 | | 瓦質土器<br>土管 | 02－1 | 2－4層 | | | 口径:13.5(1/2)<br>現高:9.55 | 外:ヨコナデ,ヘラナデ,ナデ<br>内:ヨコナデ,指押えナデ,粘土接合痕 | 灰(7.5Y6/1)<br>石英,長石,チャート |
| 120 | 14 | 31 | 磁器<br>転用円板 | 02－1 | 2－4層 | | 13c第3四半期 | 径:4.0×5.1<br>厚:1.2～1.8<br>重さ:33.3g | 龍泉窯系青磁碗<br>外:蓮弁文<br>内:圏線 | 明オリーブ灰<br>(5GY7/1) |
| 121 | 14 | 31 | 陶器<br>転用円板 | 02－1 | 2－4層 | | 17c第2四半期 | 径:4.8×4.8<br>厚:1.7　重さ:30.1g | 肥前系碗<br>外:ヘラケズリ,畳付糸切り痕,ヘラ痕　内:施釉 | 浅黄(2.5Y7/3) |
| 122 | 14 | 33 | 金属製品<br>銭貨 | 02－1 | 2－4層 | | | 残:2.15×0.97<br>厚:0.10 | 元祐通寶(北宋1086年)か元豊通寶(北宋1078年) | |
| 123 | 14 | 33 | 金属製品<br>銭貨 | 02－1 | 1b～2－3層 | | | 径:2.41　郭径:0.63<br>厚:0.12　重さ:3.1g | 元祐通寶(北宋1086年) | |
| 124 | 14 | 41 | 木製品<br>漆器椀 | 02－1 | 2－4層 | | | 高台基部径:5.75～6.0 | ブナ科<br>外:赤漆に黒漆で鳥の足文様<br>内:赤漆のみ | |
| 125 | 14 | 40 | 木製品<br>不明木製品 | 02－1 | 2－4層 | | | 現長:23.2　現幅:4.0<br>現厚:1.1 | スギ<br>蓋?孔1,木釘5(内4は側面) | |
| 126 | 14 | 40 | 木製品<br>不明木製品 | 02－1 | 2－4層 | | | 現長:3.4　現幅:22.7<br>現厚:0.7 | スギ<br>側面に木釘5(内1は痕跡のみ) | |
| 127 | 14 | 40 | 木製品<br>差歯下駄 | 02－1 | | 側溝 | | 長:15.9　幅:6.1<br>現高:1.8 | スギ<br>露卯,前壺1,横緒孔1,枘孔2(内1枘残) | |
| 128 | 14 | | 磁器<br>龍泉窯系青磁碗 | 06－2 | 2－1・2層 | | 15c | 高台基部径:5.8(2/5)<br>現高:2.0 | 外:施釉,底面露胎<br>内:施釉メンコ?に転用 | オリーブ灰<br>(10Y6/2) |
| 129 | 14 | | 磁器<br>波佐見染付碗 | 06－2 | 2－1・2層 | 坪境付近 | 18c | 高台径:4.6(1/4)<br>現高:2.0 | 外:施釉,畳付露胎,離れ砂付着<br>内:施釉 | 明オリーブ灰<br>(5GY7/1)に薄い呉須 |
| 130 | 14 | | 土師器<br>皿 | 06－2 | 2－1・2層 | | 13cか | 口径:8.8(1/8)<br>現高:2.0 | 外:ヨコナデ,ナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ | 灰白(5Y7/1)<br>チャート |
| 131 | 14 | | 瓦質土器<br>ミニチュア羽釜 | 06－2 | 2－1・2層 | | 16～17cか | 鍔径:9.2(1/7) | 外:ヨコナデ<br>内:指押えナデ | 灰(N5/) |
| 132 | 14 | 32 | 土製品<br>大型紡錘車? | 06－2 | 2－1・2層 | 坪境付近 | | 径:8.6～8.9<br>厚:3.0 | 外:全体ナデ,工具痕,周縁摩滅,孔から紐跡(裏面にもあり) | 灰黄(2.5Y6/2)<br>生駒西麓産 |
| 133 | 14 | | 磁器<br>波佐見染付碗 | 06－2 | 2－3面精査 | | 18c | 口径:9.7(1/2)<br>高台径:3.8(2/3)<br>現高:5.3 | 外:施釉(気泡多し),重ね焼痕?,畳付露胎、高台内に銘?<br>内:施釉(一部気泡あり) | 灰白(2.5Y7/1)に呉須 |
| 134 | 14 | | 磁器<br>転用円板 | 06－2 | 2－3面精査 | | 17c後半 | 径:6.2×5.9<br>厚:1.9　重さ:64.7g | 波佐見青磁碗<br>外:施釉,底部露胎,畳付離れ砂付着<br>内:施釉(貫入あり),灰?痕跡 | 明オリーブ灰<br>(5GY7/1) |
| 135 | 14 | | 瓦<br>丸瓦 | 06－2 | 2－3面精査 | | 近世 | 現長:14.5　厚:1.3 | 凸:ヨコナデ後板ナデ<br>凹:布目,ヘラケズリ | 灰(N4/)<br>石英,長石 |
| 136 | 14 | 39 | 木製品<br>漆器椀 | 06－2 | 2－2層 | | | 現高:5.7 | ブナ科<br>外:黒漆,土圧で右にひしゃげてる　内:赤漆 | |
| 137 | 14 | 39 | 木製品<br>刷毛? | 06－2 | 2－1・2層 | 坪境付近 | | 現長:11.9　現幅:6.8<br>厚:1.0 | ヒノキ<br>2枚に分割,線刻上に小孔 | |
| 138 | 14 | | 土師器<br>皿 | 06－2 | 2－3面 | B12土坑 | 17～18cか | 口径:9.7(1/14)<br>現高:1.7 | 外:指押え,ナデ,スス付着<br>内:ヨコナデ,ナデ | 灰黄(2.5Y7/2)<br>石英,長石 |
| 139 | 14 | 31 | 磁器<br>景徳鎮窯系<br>青花碗 | 06－2 | 2－3・4層 | | 16c第4四半期 | 高台基部径:5.5(1/4)<br>現高:1.6 | 蛟龍文<br>外:施釉,底部ノッキング痕<br>内:施釉,万頭心 | 明緑灰(7.5GY8/1)<br>に呉須 |
| 140 | 14 | | 土師器<br>皿 | 06－2 | 2－3・4層 | | 16c末～17c初か | 口径:8.7(1/8)<br>現高:1.7 | 外,内:ヨコナデ,指押えナデ | にぶい黄橙<br>(10YR7/3) |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(㎝)<br>( )は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 141 | 14 | | 土師器<br>羽釜 | 06－2 | 2－3・4層 | | 16c か | 現高:3.1 | 大和型(本来は瓦質)<br>外:ヨコナデ,凹線2,スス付着<br>内:ヨコナデ,コゲ付着 | 褐灰(7.5YR4/1)<br>石英,長石,赤色粒 |
| 142 | 14 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 2－3・4層 | | 弥生Ⅳ-4 | 口径:11.6(1/7)<br>現高:8.9 | 外:指押え後ヨコナデ,ヘラミガキ　内:しぼり目,板ナデ | オリーブ黒(5Y3/2)<br>生駒西麓産 |
| 143 | 14 | 39 | 木製品<br>曲物底板? | 06－2 | 2－3・4層 | | | 現長:13.9　現幅:6.0<br>厚:1.3 | スギ<br>側面に釘穴? | |
| 144 | 17 | 31 | 磁器<br>龍泉窯系青磁碗 | 02－1 | 3－1層 | | 15c 第4四半期 | 口径:13.7(1/16) | 外:施釉(貫入あり),線描蓮弁文<br>内:施釉(貫入あり) | 灰オリーブ<br>(10Y6/2) |
| 145 | 17 | | 磁器<br>景徳鎮窯系<br>端反皿 | 02－1 | 3－1層 | | 16c 末～17c 初 | 高台径:8.9(1/5) | 外:施釉(ピンホールあり),畳付露胎　内:施釉 | 灰白(2.5GY8/1) |
| 146 | 17 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 3－1層 | | 15c 後半か | 口径:8.8(1/6)<br>現高:1.8 | 外:ヨコナデ,指押えナデ,薄くスス付着<br>内:ヨコナデ,ナデ,スス付着 | 褐灰(10YR6/1) |
| 147 | 17 | | 土師器<br>羽釜 | 02－1 | 3－1層 | | 16c か | 口径:28.5(若干のみ)<br>現高:5.15 | 外:凹線3,ヨコナデ,工具ナデ,ヘラケズリ,スス付着<br>内:ヨコナデ,ハケメ,コゲ付着 | にぶい黄橙<br>(10YR6/3)<br>石英,長石,チャート,赤色砂粒 |
| 148 | 17 | | 瓦質土器<br>鉢 | 02－1 | 3－2面 | | 16c か | 口径:32(1/15)<br>現高:5.0 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ | 灰(N4/),<br>灰白(10YR8/1)<br>長石,金雲母,チャート |
| 149 | 17 | | 陶器<br>備前擂鉢 | 02－1 | 3－1層 | | 16c 末 | 口径:.23.6(1/7)<br>現高:7.0 | 外:回転ナデ,ナデ<br>内:回転ナデ,スリ目(2.5㎝幅9条),使用痕あり | 褐灰(7.5YR4/1) |
| 150 | 17 | | 陶器<br>備前擂鉢 | 02－1 | 3－1層 | | 16c 末 | 口径:42.6(1/18)<br>現高:6.3 | 外:凹線2　外,内:回転ナデ | 褐灰(7.5YR6/1),にぶい赤褐(5YR5/4) |
| 151 | 17 | | 東播系須恵器<br>片口鉢 | 02－1 | 3－2層 | | 12c 中～後半か | 現高:4.1 | 外,内:回転ナデ | 緑黒(5G1.7/1),<br>灰白(N7/) |
| 152 | 17 | | 土師器<br>羽釜 | 02－1 | 3－3層 | | 16c か | 口径:22(若干のみ)<br>現高:5.6 | 外:凹線3,ヨコナデ,ヘラケズリ　内:ヨコナデ,ナデ及びハケメ | にぶい赤橙<br>(10R6/4),石英,長石,チャート |
| 153 | 17 | 33 | 金属製品<br>銭貨 | 02－1 | 3－3層 | | | 径:2.40　郭径:0.55<br>厚:0.13　重さ:3.2g | 聖宋元寶(北宋1101年) | |
| 154 | 19 | 33 | 金属製品<br>銭貨 | 02－1 | 5面精査 | | | 径:2.39　郭径:0.69<br>厚:0.09　重さ:3.1g | 元豊通寶(北宋1078年) | |
| 155 | 19 | 31 | 磁器<br>龍泉窯系青磁碗 | 06－2 | 4層 | | 14c 中頃 | 口径:15.0(1/8)<br>現高:4.9 | 外:施釉,蓮弁文<br>内:施釉 | オリーブ灰<br>(5GY6/1) |
| 156 | 19 | | 土師器<br>皿 | 06－2 | 4層 | | 16c か | 口径:7.4(1/5)<br>現高:1.2 | 外,内:ヨコナデ,ナデ | 浅黄(2.5Y7/3)<br>石英,長石,雲母 |
| 157 | 19 | | 土師器<br>皿? | 06－2 | 4層 | | ? | 口径:不明<br>現高:4.0 | 外:ヨコナデ,指押え<br>内:ヨコナデ,ハケメ<br>内外面スス?付着 | 黄灰(2.5Y5/1)<br>石英,長石 |
| 158 | 19 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 06－2 | 4層 | 条里畦畔付近 | 14c 前半 | 口径:10.0(1/9)<br>現高:1.5 | Ⅳ-4～5期か<br>外,内:ヨコナデ,ナデ | 灰白(7.5Y7/1)<br>石英,長石 |
| 159 | 19 | | 瓦質土器<br>羽釜 | 06－2 | 4層 | | 16c か | 現高:5.0 | 外:ヨコナデ<br>内:摩滅 | 黒(N2/)<br>長石,石英,チャート? |
| 160 | 19 | | 陶器<br>瀬戸灰釉壺 | 06－2 | 4層 | | 15c | 底径:12.6(1/17)<br>現高:4.3 | 外:自然釉付着<br>内:ナデ,自然釉付着 | 灰オリーブ<br>(7.5Y5/3) |
| 161 | 19 | | 木製品<br>不明木製品 | 06－2 | 4層 | | | 現長:4.3　現幅:0.7<br>厚:0.5 | スギ<br>先端炭化 | |
| 162 | 21 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 5層 | | 13c か | 口径:8.2(1/6)<br>現高:1.5 | 外:指押えナデ<br>内:ヨコナデ? | 灰白(5Y7/2) |
| 163 | 21 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 5層 | | 13c 後半か | 口径:8.6(1/7)<br>現高:1.6 | 外:ヨコナデ(工具による?),指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ | にぶい黄橙<br>(10YR6/3),にぶい橙(5YR6/4) |
| 164 | 21 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 5層 | | 15c か | 口径:8.0(1/5)<br>現高:1.6 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ | にぶい黄(2.5Y6/3) |
| 165 | 21 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 5層 | | 15c か | 口径:9.0(1/8)<br>現高:1.6 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ | 灰黄褐(10YR6/2)<br>長石,石英,クサリ礫,雲母 |
| 166 | 21 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 5層 | | 15c か | 口径:9.8(1/4)<br>現高:1.85 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ | にぶい褐<br>(7.5YR6/3) |
| 167 | 21 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 5層 | | 13c 中頃～後半か | 口径:11.6(1/10)<br>現高:2.45 | Ⅳ-1～2期か<br>外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ヘラミガキ | 灰(N4/) |
| 168 | 21 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 5層 | | 13c 末 | 口径:11.3(1/11)<br>現高:2.5 | Ⅳ-3期<br>外:ヨコナデ,ヨコナデ後ナデ,指押え　内:ヨコナデ,ナデ | 灰白(2.5Y7/1) |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(cm)<br>( )は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 169 | 21 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 5層 | | 13c末～14c初か | 口径:11.8(1/10)<br>現高:1.8 | Ⅳ-3期か<br>外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ | 灰白(5Y7/1),<br>灰(N4/) |
| 170 | 21 | | 土師器<br>羽釜 | 02－1 | 5層 | | 15cか | 口径:22.4(1/12)<br>現高:6.9 | 外:ヨコナデ,凹線4,スス付着<br>内:ヨコナデ,ヨコハケメ,部分的にコゲ付着 | オリーブ黒(5Y3/1)<br>石英,長石,チャート |
| 171 | 21 | | 瓦質土器<br>羽釜 | 02－1 | 5層 | | 15cか | 口径:23.5(1/16)<br>現高:5.4 | 外:凹線2,鍔下半スス付着<br>内:ハケメ,ナデ | オリーブ黒<br>(10Y3/1),石英,長石,チャート |
| 172 | 21 | | 陶器<br>備前擂鉢 | 02－1 | 5層 | | 15c後半 | 口径:29.0(1/12)<br>現高:4.8 | 外:回転ナデ(シワが多い),自然釉付着　内:回転ナデ,クシ目,自然釉付着(ゴマ灰) | にぶい赤褐<br>(7.5R4/3) |
| 173 | 21 | 32 | 石製品<br>砥石 | 02－1 | 6面 | | | 現長:10.15　現幅:3.6<br>現厚:2.65 | 砂岩<br>砥面6 | |
| 174 | 21 | 33 | 金属製品<br>銭貨 | 02－1 | 5層 | | | 径:2.43　郭径:0.63<br>厚:0.13　重さ:3.5g | 周通元寶(後周955年) | |
| 175 | 21 | 33 | 金属製品<br>銭貨 | 02－1 | 5面精査 | 条理畦畔推定位置 | | 径:2.56　郭径:0.70<br>厚:0.10　重さ:3.2g | 皇宋通寶(北宋1038年) | |
| 176 | 21 | 33 | 金属製品<br>銭貨 | 02－1 | 5層 | | | 径:2.44　郭径:0.71<br>厚:0.09　重さ:2.4g | 皇宋通寶(北宋1038年) | |
| 177 | 21 | 33 | 金属製品<br>銭貨 | 02－1 | 5層 | | | 径:2.29　郭径:0.61<br>厚:0.13　重さ:2.8g | 元豊通寶(北宋1078年) | |
| 178 | 21 | 33 | 金属製品<br>銭貨 | 02－1 | 5層 | | | 径:2.46　郭径:0.63<br>厚:0.08　重さ:3.2g | 聖宋元寶(北宋1101年) | |
| 179 | 21 | 32 | 金属製品<br>鉄鎌 | 02－1 | 6面 | | | 刃幅:3.15 | 両面にサビ付着,茎部をカギ状に折り曲げ柄に装着 | |
| 180 | 21 | | 磁器<br>閩江窯系白磁皿 | 06－2 | 5層 | | 15c後半 | 口径:10.2(1/5)<br>現高:1.65 | 外:施釉,下半露胎<br>内:施釉 | 灰白(10Y8/1) |
| 181 | 21 | | 磁器<br>華南沿海窯系<br>白磁皿 | 06－2 | 5層 | | 13c第1四半期 | 底径:5.2(1/5)<br>現高:1.1 | Ⅸ 1c類<br>外:回転ケズリ痕,部分的に露胎<br>内:施釉 | 灰白(2.5Y8/2)<br>黒色粒 |
| 182 | 21 | | 土師器<br>皿 | 06－2 | 5層 | | 15cか | 口径:8.0(1/6)<br>現高:1.3 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,スス?付着 | 黄灰(2.5Y5/1)<br>石英 |
| 183 | 21 | | 土師器<br>皿 | 06－2 | 5層 | | 15c | 口径:9.0(1/7)<br>現高:1.4 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ | にぶい黄(2.5Y6/3)<br>赤色粒,雲母 |
| 184 | 21 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 06－2 | 5層 | | 14c初か | 口径:10.0(1/8)<br>現高:1.7 | Ⅳ-3～4期か<br>外:ヨコナデ,指押さえナデ<br>内:ヨコナデ一部ヘラミガキ,ナデ | 灰白(N8/) |
| 185 | 21 | | 土師器<br>羽釜 | 06－2 | 5層 | | 14c | 口径:18.0(1/12)<br>現高:1.95 | 外,内:ヨコナデ | 灰白(2.5Y8/2),石英,長石,チャート |
| 186 | 21 | | 土師器<br>羽釜 | 06－2 | 5層 | | 15c | 口径:2.6(1/18)<br>現高:6.7 | 外:指押さえ後ナデ,ヨコナデ,端部と鍔下半にスス付着<br>内:ハケメ(太細あり),部分的にコゲ厚く付着 | 黄灰(2.5Y5/1)<br>石英,長石 |
| 187 | 21 | | 瓦質土器<br>擂鉢 | 06－2 | 5層 | | 14c | 口径:34.0(1/18)<br>現高:5.4 | 外:回転ナデ,ヘラケズリ<br>内:ヨコナデ,回転ナデ後スリ目 | |
| 188 | 21 | | 瓦<br>丸瓦 | 06－2 | 6面 | B32畦畔 | 室町か | 側面幅:0.9　現厚:2.6 | 凸:平行タタキ,スス付着<br>凹:面とり広い,布目(スジ状段あり) | オリーブ黒<br>(7.5Y3/1) |
| 189 | 21 | | 石製品<br>不明石製品 | 06－2 | 5層 | | | 現長:4.72　現幅:2.53<br>現厚:2.22 | 結晶片岩<br>段? | |
| 190 | 21 | | 石製品<br>砥石 | 06－2 | 5層 | | | 現長:4.78　現幅:2.55<br>現厚:0.42 | 粘板岩<br>砥面2,スス付着 | |
| 191 | 21 | 32 | 石製品<br>砥石 | 06－2 | 6面 | | | 現長:3.0　現幅:3.75<br>現厚:2.05 | 流紋岩質溶結凝灰岩<br>砥面4,使用痕 | |
| 192 | 21 | 40 | 木製品<br>不明木製品 | 06－2 | 5層 | | | 現長:14.9　現幅:3.6<br>厚:0.8 | スギ<br>腐食 | |
| 193 | 23 | 31 | 磁器<br>龍泉窯系青磁碗 | 02－1 | 6層 | | 14c初 | 胴内径:14.0(1/9)<br>現高:4.2 | 外:施釉(蓮弁文)<br>内:施釉 | オリーブ灰<br>(5GY6/1) |
| 194 | 23 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 6層 | | 12c中頃か | 口径:8.4(1/9)<br>現高:1.7 | 外:2段ヨコナデ,摩滅<br>内:ヨコナデ,摩滅 | にぶい黄橙<br>(10YR7/3) |
| 195 | 23 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 6層 | | 13c後半か | 口径:8.4(1/7)<br>現高:0.85 | 外:ヨコナデ,摩滅<br>内:ヨコナデ | 淡赤橙(2.5YR7/4),<br>にぶい橙<br>(2.5YR6/4) |
| 196 | 23 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 6層 | | 14cか | 口径:9.2(若干のみ)<br>現高:1.8 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ | 灰白(7.5Y7/1),<br>褐灰(10YR5/1) |
| 197 | 23 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 6層 | | 14c後半か | 口径:9.0(1/6)<br>現高:1.9 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ | にぶい橙<br>(7.5YR6/4) |
| 198 | 23 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 6層 | | 15cか | 口径:8.4(1/3)<br>現高:2.1 | 外:ヨコナデ,指押え<br>内:ヨコナデ | にぶい黄橙<br>(10YR7/2) |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(cm)<br>( )は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 199 | 23 | | 瓦器<br>皿 | 02－1 | 6層 | | 12c末～13c初か | 口径:10.0(1/7)<br>現高:1.35 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,まばらなヘラミガキ | 灰(N5/)・(N4/) |
| 200 | 23 | | 瓦器<br>皿 | 02－1 | 6層 | | 13cか | 口径:9.0(1/12)<br>現高:1.0 | 外:ヨコナデ,指押え<br>内:ヨコナデ,ナデ | 灰(N4/),<br>灰白(2.5Y7/1) |
| 201 | 23 | | 瓦器<br>椀(大和型) | 02－1 | 6層 | | 12c後半か | 口径:14.7(1/17)<br>現高:1.7 | Ⅱ-A(古)段階か<br>外:ヨコナデ後一部ヘラミガキ,ナデ後一部ヘラミガキ<br>内:沈線1,ヘラミガキ | 暗灰(N3/) |
| 202 | 23 | | 瓦器<br>椀(大和型) | 02－1 | 6層 | | 12c前半か | 高台径:6.0(1/6)<br>現高:1.55 | Ⅱ-AかⅡ-B段階か<br>外:ヨコナデ,ナデ<br>内:ヘラミガキ,工具によるナデ後連結輪状暗文 | 暗灰(N3/) |
| 203 | 23 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 6層 | | 12c後半か | 高台径:4.4(1/8)<br>現高:0.95 | Ⅱ-3期か<br>外:ヨコナデ　内:格子状暗文 | 灰(N4/) |
| 204 | 23 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 6層 | | 12c末～13c初 | 口径:14.0(1/8)<br>現高:3.05 | Ⅲ-2期か<br>外:ヨコナデ(一部ヘラミガキ),ヘラミガキ<br>内:ヨコナデ,ヘラミガキ | 暗灰(N3/),<br>灰(N5/) |
| 205 | 23 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 7面 | | 13c初か | 現高:4.25 | Ⅲ-2期か<br>外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヘラミガキ | 灰(N4/) |
| 206 | 23 | | 瓦器<br>椀(大和型) | 02－1 | 6層 | | 13c中頃か | 口径:12.2(1/12)<br>現高:1.45 | Ⅲ-C段階か<br>外:ヨコナデ後ヘラミガキ?,摩滅<br>内:沈線1,ヘラミガキ | 暗灰(N3/) |
| 207 | 23 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 6層 | | 13c中頃 | 口径:12.8(1/14)<br>現高:2.5 | Ⅳ-1～2期<br>外:ヨコナデ,指押え<br>内:まばらなヘラミガキ | にぶい黄橙<br>(10YR7/2) |
| 208 | 23 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 6層 | | 13c中頃 | 高台径:3.8(1/4)<br>現高:0.5 | Ⅳ-1～2期<br>外:ヨコナデ,ナデ,粘土紐高台<br>内:ナデ後平行線状暗文 | 暗灰(N3/) |
| 209 | 23 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 6層 | | 13c中頃か | 口径:12.8(1/11)<br>現高:1.7 | Ⅳ-1期か<br>外:ヨコナデ,指押え　内:ヨコナデ,まばらなヘラミガキ | にぶい黄橙<br>(10YR7/2) |
| 210 | 23 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 6層 | | 13c後半 | 口径:11.8(1/12)<br>現高:3.05 | Ⅳ-2～3期か<br>外:ヨコナデ,指押え後ナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ後まばらなヘラミガキ | 灰(N4/) |
| 211 | 23 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 7面 | | 13c後半 | 口径:11.8(1/6)<br>現高:2.6 | Ⅳ-2～3期<br>外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,まばらなヘラミガキ | 灰(N5/)・(N4/),<br>灰白(5Y7/1) |
| 212 | 23 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 6層 | | 13c後半 | 口径:12.0(1/10)<br>現高:2.0 | Ⅳ-2～3期<br>外:ヨコナデ,指押えナデ?<br>内:ヨコナデ,ナデ後一部ヘラミガキ | 灰(N4/),<br>灰白(N8/) |
| 213 | 23 | | 土師器<br>羽釜 | 02－1 | 6層 | | 12cか | 現高:1.3 | 外,内:ヨコナデ,スス・コゲ付着 | 明褐灰(7.5YR7/2) |
| 214 | 23 | | 石製品<br>砥石 | 02－1 | 6層 | | | 現長:3.0　現幅:3.6<br>現厚:0.6 | 珪質片岩<br>砥面1,スス付着 | |
| 215 | 23 | 33 | 金属製品<br>銭貨 | 02－1 | 6層 | | | 径:2.52　郭径:0.68<br>厚:0.08　重さ:3.2g | 景祐元寶(北宋1034年) | |
| 216 | 23 | 32 | 金属製品<br>鉄鋤 | 02－1 | 6～7層 | | | 現長:11.3　現幅:7.6<br>現厚:0.2～0.4 | 外:加工面あり | |
| 217 | 23 | 32 | 金属製品<br>鉄鋤か鍬 | 02－1 | 6層 | | | 現長:4.8　現幅:4.5<br>現厚:0.3 | 全体にサビ付着 | |
| 218 | 23 | 32 | 金属製品<br>鉄釘 | 02－1 | 6層 | | | 現長:9.4　現幅:2.0 | 全体にサビ付着 | |
| 219 | 23 | 41 | 木製品<br>不明木製品 | 02－1 | 6層 | | | 現長:8.2　現幅:4.9<br>現厚:2.2 | コウヤマキ<br>下端に突出させるような加工痕 | |
| 220 | 23 | | 土師器<br>皿 | 06－2 | 6層 | | 14c後半か | 口径:9.8(1/7)<br>現高:1.8 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ | 灰黄(2.5Y6/2)<br>石英,長石,雲母 |
| 221 | 23 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 06－2 | 6層 | | 13c末～14c初 | 口径:10.8(1/4)<br>現高:2.6 | Ⅳ-3期<br>外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,まばらなヘラミガキ | 灰オリーブ(5Y4/2) |
| 222 | 23 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 06－2 | 6面 | B28畦畔 | 13c末～14c初 | 口径:11.8(1/16)<br>現高:2.4 | Ⅳ-3期<br>外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ | 灰(N5/) |
| 223 | 23 | | 瓦質土器<br>甕 | 06－2 | 6層 | | 15cか | 口径:32.4(1/9)<br>現高:5.7 | 外:ヨコナデ,タタキ<br>内:ヨコナデ,板ナデ,ハケメ | 灰白(2.5Y1/7),石英,長石,チャート |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(cm)<br>( )は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 224 | 23 | 33 | 金属製品<br>鉄小刀? | 06－2 | 6層 | | | 現長:4.0　現幅:1.0<br>現厚:0.19 | 基部? | |
| 225 | 23 | 33 | 金属製品<br>かすがい? | 06－2 | 6層 | 坪境畦畔西側 | | 現長:1.9　現幅:5.8<br>現厚:0.25(さびぬき) | 鉄製 | |
| 226 | 23 | 33 | 金属製品<br>鉄鋤か鍬 | 06－2 | 6層 | 坪境畦畔西側 | | 現長:9.7　現幅:4.7<br>現厚:0.35 | | |
| 227 | 23 | 33 | 金属製品<br>鉄釘 | 06－2 | 6層 | | | 現長:4.1<br>現幅:0.4(さびぬき)<br>現厚:0.3 | | |
| 228 | 25 | | 瓦器<br>椀 | 02－1 | 7面 | A117坪境 | 11c後半 | 高台径:6.6(1/6)<br>現高:1.4 | 外:ヨコナデ<br>内:ヘラミガキ | 暗灰(N3/) |
| 229 | 25 | 31 | 磁器<br>華南沿海窯系<br>白磁碗 | 02－1 | 7層 | | 13c第1四半期 | 現高:2.6 | Ⅳ-2類<br>外,内:施釉(貫入あり) | 灰白(7.5Y7/1) |
| 230 | 25 | 31 | 磁器<br>華南沿海窯系<br>白磁碗 | 02－1 | 8面 | | 13c前半 | 現高:3.8 | 外,内:施釉(ピンホールあり) | 灰白(7.5Y7/1) |
| 231 | 25 | 31 | 磁器<br>龍泉窯系青磁碗 | 02－1 | 8面 | | 13c第4四半期 | 現高:4.3 | 外:施釉(鎬蓮弁文)<br>内:施釉 | 緑灰(7.5GY6/1) |
| 232 | 25 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 7層 | | 13c前半か | 口径:9.0(1/8)<br>現高:1.0 | 外:ヨコナデ,指押え,ナデ(摩滅)<br>内:ヨコナデ,表面剥離 | にぶい褐(7.5YR6/3),<br>褐灰(10YR5/1) |
| 233 | 25 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 7層下部 | | 13c後半か | 口径:7.8(1/8)<br>現高:1.05 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ハケメ後ナデ | 浅黄橙(7.5YR8/4) |
| 234 | 25 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 7層 | | 13c後半か | 口径:7(1/10)<br>現高:1.2 | 外:磨滅(ナデか),指押え<br>内:磨滅(ナデか) | 浅黄(2.5Y7/3) |
| 235 | 25 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 7層 | | 15c前半か | 口径:11.4(1/7)<br>現高:2.05 | 外:ヨコナデ,指押え,ナデ<br>内:ヨコナデ | 灰黄(2.5Y7/2) |
| 236 | 25 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 7層 | | 12cか | 口径:14.5(若干のみ)<br>現高:1.8 | 外:ヨコナデ,摩滅<br>内:ヨコナデ,ナデ | にぶい黄橙(10YR7/3)<br>赤色砂粒 |
| 237 | 25 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 8面精査 | | 12c末～13c初か | 口径:14.3(1/11)<br>現高:2.15 | 外:ヨコナデ,ナデ<br>内:ヨコナデ | 浅黄橙(7.5YR8/4) |
| 238 | 25 | | 瓦器<br>椀(楠葉型) | 02－1 | 7層 | | 12c前半か | 現高:3.7 | Ⅱ-1期か<br>外:ナデ後まばらなヘラミガキ<br>内:沈線1,ハケメ後密なヘラミガキ | 暗灰(N3/) |
| 239 | 25 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 7面or7層 | | 12c前半 | 口径:14.3(1/15)<br>現高:4.05 | Ⅱ-1～2期<br>外:ヨコナデ・指押え後ナデの後ヘラミガキ,粘土接合痕?<br>内:ヘラミガキ | 灰(N4/) |
| 240 | 25 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 7層 | | 12c中頃 | 高台径:5.0(1/3)<br>現高:1.25 | Ⅱ-2～3期か<br>外:ヨコナデ,ナデ<br>内:ナデ後斜格子状暗文 | 灰(N5/) |
| 241 | 25 | | 瓦器<br>椀(大和型?) | 02－1 | 7層 | | 12c後半か | 高台径:5.7(1/4)<br>現高:1.08 | Ⅲ-A(古)段階か<br>外:ヨコナデ,ナデ<br>内:ハケメ後連続輪状暗文 | 暗灰(N3/) |
| 242 | 25 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 7層 | | 13c前半か | 口径:13.8(1/8)<br>現高:3.4 | Ⅲ-3期か<br>外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:まばらなヘラミガキ,スス付着 | 灰白(5Y7/1),<br>灰(N5/)<br>石英,長石 |
| 243 | 25 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 7層 | | 13c前半 | 高台径:4.0(1/2)<br>現高:1.08 | Ⅲ-3かⅣ-1期か<br>外:指押えナデ,ヨコナデ,ナデ<br>内:工具によるナデ後平行線状暗文 | 灰(N4/) |
| 244 | 25 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 7層 | | 13c前半 | 高台径:4.8(1/7)<br>現高:1.9 | Ⅲ-2～3期か<br>外:指押え後ナデ,ヨコナデ<br>内:ナデ後一部ヘラミガキ,見込み平行線状暗文 | 灰(N4/) |
| 245 | 25 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 7層 | | 13c前半 | 高台径:3.8(1/2)<br>現高:0.7 | Ⅲ-3期か<br>外:ナデ,ヨコナデ,ナデ<br>内:ナデ後平行線状暗文 | 灰白(N7/) |
| 246 | 25 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 7層 | | 13c中頃か | 口径:12.8(1/5)<br>現高:2.8 | Ⅳ-2期か<br>外:ヨコナデ,指押え　内:ヨコナデ,まばらなヘラミガキ | 灰(5Y4/1) |
| 247 | 25 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 7層 | | 13c中頃か | 口径:12.0(1/6)<br>現高:2.1 | Ⅳ-2期か<br>外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,数条のヘラミガキ | 灰(N4/) |
| 248 | 25 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 7層 | | 13c末～14c初か | 口径:10.8(1/6)<br>現高:2.3 | Ⅳ-3期か<br>外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:一部ヘラミガキ | 灰白(5Y7/1),<br>灰(10Y4/1) |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(cm)<br>( )は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 249 | 25 | | 瓦器<br>椀(大和型) | 02－1 | 7層 | | 13c後半か | 高台径:5.4(1/10)<br>現高:1.0 | Ⅲ-D,E段階か<br>外:ナデ,ヨコナデ,指押え<br>内:ナデ後ヘラミガキ | 灰(N4/) |
| 250 | 25 | | 瓦質土器<br>鉢 | 02－1 | 7層 | | 14cか | 現高:2.7 | 片口<br>外:ヨコナデ,ナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ | 灰白(N8/),灰(N4/) |
| 251 | 25 | | 東播系須恵器<br>甕 | 02－1 | 7層 | | 13cか | 口径:22.4(1/8)<br>現高:4.3 | 外:回転ナデ,タタキ,指押え?<br>内:回転ナデ | 灰(7.5Y5/1) |
| 252 | 25 | | 東播系須恵器<br>鉢 | 02－1 | 7層 | | 12c中頃か | 現高:3.9 | 外:回転ナデ,回転ナデ後不定方向ナデ　内:回転ナデ | 灰(N6/) |
| 253 | 25 | | 東播系須恵器<br>鉢 | 02－1 | 7層 | | 12c末～13c初 | 口径:33.0(1/16)<br>現高:3.1 | 外,内:自然釉付着,回転ナデ | 灰白(N7/),<br>灰(N4/) |
| 254 | 25 | | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 8面 | | Ⅱ-6<br>7c前半 | 口径:9.2(若干のみ)<br>受部径:11.0(1/8)<br>現高:2.6 | 外:回転ナデ,板状ナデ,未調整<br>内:回転ナデ,ナデ | 灰(N6/)<br>石英,長石,チャート |
| 255 | 25 | 32 | 金属製品<br>不明鉄製品 | 02－1 | 7層 | | | 現幅:0.5　現厚:0.15 | 責金物か<br>全体にサビ付着 | |
| 256 | 25 | 32 | 金属製品<br>鉄鎌? | 02－1 | 7層 | | | 刃幅:1.3 | 刃が曲がっている | |
| 257 | 25 | 32 | 金属製品<br>不明鉄製品 | 02－1 | 7層 | | | 現径:4.2 | 飾釘の頭部か<br>全体に破損 | |
| 258 | 25 | 41 | 木製品<br>不明木製品 | 02－1 | 7層 | | | 現長:10.95<br>現幅:2.25　現厚:0.62 | コウヤマキ<br>両側面が凹凸 | |
| 259 | 25 | 39 | 木製品<br>漆器椀 | 06－2 | 7面 | B36坪境 | | 現長:3.0　現幅:5.9<br>厚:0.5 | 破片　カツラ<br>外:赤漆　内:赤漆に黒漆の文様 | |
| 260 | 25 | 31 | 磁器<br>華南沿海窯系<br>白磁皿 | 06－2 | 7層 | | 13c第1四半期 | 底径:7.0(1/5)<br>現高:0.65 | Ⅸ 1c類<br>外:施釉,回転ヘラケズリ<br>内:施釉 | 灰白(7.5Y7/1) |
| 261 | 25 | | 土師器<br>皿 | 06－2 | 7層 | | 13c後半か | 口径:8.4(1/6)<br>現高:1.5 | 外,内:全体に摩滅 | 灰白(10YR8/2) |
| 262 | 25 | | 土師器<br>皿 | 06－2 | 8面精査 | | 15cか | 口径:7.0(1/7)<br>現高:1.6 | 外,内:ヨコナデ,ナデ | 明黄褐(10YR7/6) |
| 263 | 25 | | 瓦器<br>皿 | 06－2 | 7層 | | 13cか | 口径:7.8(1/3)<br>器高:1.2 | 外:ヨコナデ,指押え<br>内:ヨコナデ,回転状ナデ | 灰白(5Y7/1) |
| 264 | 25 | | 瓦器<br>椀(和泉型?) | 06－2 | 7層 | | 12c前半か | 高台径:5.4(1/4)<br>現高:1.5 | 外:ヨコナデ,ナデ?<br>内:摩滅 | 浅黄橙(10YR8/3),<br>褐灰(10YR4/1) |
| 265 | 25 | | 瓦器<br>椀(楠葉型) | 06－2 | 7層 | | 12c中頃か | 現高:2.8 | Ⅱ-2期か<br>外:ヨコナデ,ナデ,指押え,摩滅<br>内:沈線1,ヘラミガキ(摩滅) | 灰白(N8/),灰(N6/) |
| 266 | 25 | | 土師器<br>羽釜 | 06－2 | 7層 | | 14cか | 現高:2.8 | 大和型?<br>外:ヨコナデ,粘土接合痕<br>内:ヨコナデ,一部指押え,ハケメ一部あり,ナデ | 灰白(7.5YR8/2)<br>長石,石英,チャート |
| 267 | 25 | | 東播系須恵器<br>鉢 | 06－2 | 7層 | | 12c末～13c初か | 口径:23.2(1/6)<br>現高:5.7 | 外:回転ナデ<br>内:回転ナデ後ナデ | 灰(N6/)<br>石英,長石,赤色粒 |
| 268 | 25 | | 東播系須恵器<br>鉢 | 06－2 | 7層 | | 12c末～13c初 | 口径:32.4(1/14)<br>現高:4.4 | 外,内:回転ナデ | 灰(N6/) |
| 269 | 25 | | 瓦質土器<br>甕 | 02－1 | 7～9層 | | 13～14cか | 頸部径:25.0(1/8) | 外:ヨコナデ?,格子状タタキ<br>内:摩滅,ヨコナデ,ナデかヘラケズリ | 灰(10Y5/1)・<br>(10Y6/1)<br>石英,長石 |
| 270 | 25 | | 須恵器<br>杯蓋 | 02－1 | 7～9層 | | Ⅱ-4(TK43)<br>6c第4四半期 | 口径:14.4(1/9)<br>現高:3.2 | 外:回転ナデ,回転ヘラケズリ(砂→)　内:回転ナデ | 灰白(N7/) |
| 271 | 25 | | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 7～9層 | | Ⅱ-4(TK43)<br>6c第4四半期 | 口径:11.0(1/12)<br>現高:3.25 | 外:回転ナデ,回転ヘラケズリ(砂←)　内:回転ナデ | 灰白(N7/)<br>石英,長石 |
| 272 | 25 | | 石製品<br>砥石 | 02－1 | 7～9層 | | | 現長:5.67　現幅:3.72<br>現厚:3.0　重さ:94.3g | 凝灰質頁岩<br>砥面4<br>右側面:削られたような段あり | |
| 273 | 29 | | 黒色土器A類<br>椀 | 02－1 | 8層 | | 10cか | 現高:3.8＋1.1＋α | 外:ヨコナデ,摩滅,ナデ,ヨコナデ,ナデ　内:ヘラミガキ,ナデ後ヘラミガキ | にぶい黄橙<br>(10YR7/2)<br>金雲母 |
| 274 | 29 | | 黒色土器B類<br>椀 | 02－1 | 8層 | | 10cか | 口径:14.4(1/8)<br>現高:2.9 | 外:ヨコナデ,指押えナデ後ヘラミガキ　内:沈線1,ヘラミガキ | 黒(N2/) |
| 275 | 29 | | 土師器<br>羽釜 | 02－1 | 8層 | | 10cか | 現高:5.35 | 外:ヨコナデ,指押えナデ,ス付着　内:ヨコナデ,ナデ | にぶい褐<br>(7.5YR6/3) |
| 276 | 29 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 8層 | | 12cか | 口径:8.8(1/9)<br>現高:1.6 | 外:2段ヨコナデ<br>内:ナデ,摩滅 | 黄橙(10YR8/6) |
| 277 | 29 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 8層 | | 12cか | 口径:9.6(1/7)<br>現高:15.0 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ | 橙(7.5YR6/6) |
| 278 | 29 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 8層 | | 12c後半か | 口径:8.8(1/5)<br>現高:1.75 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ | にぶい黄橙<br>(10YR7/2) |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(cm)<br>( )は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 279 | 29 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 8層 | | 12c後半か | 口径:9.0(1/8)<br>現高:1.25 | 外:ヨコナデ,ナデ及び指押え<br>内:ヨコナデ,ナデ | 灰白(10YR8/2) |
| 280 | 29 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 8層 | | 13cか | 口径:7.9(1/4)<br>現高:1.25 | 外,内:ヨコナデ,摩滅 | 灰黄(2.5Y6/2) |
| 281 | 29 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 8層 | | 12c中頃か | 口径:15.8(1/12)<br>現高:2.0 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ | にぶい橙<br>(7.5YR7/3) |
| 282 | 29 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 8層 | | 12c後半か | 口径:14.0(1/6)<br>現高:2.4 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ | 灰白(10YR8/2)・<br>(5YR8/2) |
| 283 | 29 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 8層 | | 12cか | 口径:13.6(1/10)<br>現高:2.2 | 外:全体に摩滅,ヨコナデ,指押え　内:全体に摩滅,ヨコナデ | 浅黄橙(10YR8/3),<br>灰白(10YR8/2) |
| 284 | 29 | | 瓦器<br>皿 | 02－1 | 8層 | | 13c前半か | 口径:9.2(1/2)<br>現高:1.6 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ後1条のヘラミガキ | 暗青灰(5B3/1),<br>灰白(N8/) |
| 285 | 29 | | 瓦器<br>椀(大和型) | 02－1 | 8層 | | 12c前半か | 口径:14.8(1/9)<br>現高:2.8 | Ⅲ-AかB段階か<br>外:ヨコナデ後ヘラミガキ,指押え後ヘラミガキ<br>内:沈線1,密なヘラミガキ | 暗灰(N3/) |
| 286 | 29 | | 瓦器<br>椀(大和型) | 02－1 | 8層 | | 12c中頃か | 口径:14.2(1/12)<br>現高:2.45 | Ⅱ-BかⅢ-A(古)段階か<br>外:ヨコナデ後ヘラミガキ,指押えナデ後ヘラミガキ<br>内:沈線1,ヘラミガ | 灰(N4/) |
| 287 | 29 | | 瓦器<br>椀(大和型) | 02－1 | 8層 | | 12c後半か | 口径:13.6(1/8)<br>現高:3.25 | Ⅲ-A(古)段階か<br>外:ヨコナデ,ヨコナデ後ヘラミガキ,指押えナデ後まばらなヘラミガキ　内:沈線1,ナデ後ヘラミガキ,ナデ | 暗灰(N3/) |
| 288 | 29 | | 瓦器<br>椀(大和型) | 02－1 | 8層 | | 12c後半か | 口径:13.0(1/13)<br>現高:2.6 | Ⅲ-A(古)段階か<br>外:ヨコナデ,指押えナデ後まばらなヘラミガキ<br>内:沈線1,ヘラミガキ | 暗灰(N3/) |
| 289 | 29 | | 瓦器<br>椀(楠葉型?) | 02－1 | 8層 | | 12c後半か | 口径:12.2(1/10)<br>現高:3.1 | Ⅱ-2～3期か<br>外:ヨコナデ後ヘラミガキ?,指押え後ナデ<br>内:沈線1,ヘラミガキ | 灰(N4/),<br>灰白(2.5Y8/1) |
| 290 | 29 | | 瓦器<br>椀(大和型) | 02－1 | 8層 | | 13c中頃か | 口縁:若干のみ<br>底径:4.0(1/ 8) | Ⅲ-C段階か<br>外:ヨコナデ,指押え後一部ヘラミガキ,指押えナデ,ヨコナデ<br>内:沈線1,まばらなヘラミガキ | 灰白(5Y7/1),<br>灰(7.5Y4/1) |
| 291 | 29 | | 瓦器<br>椀(大和型) | 02－1 | 8層 | | 12c後半 | 高台径:4.8(1/2)<br>現高:1.0 | Ⅲ-A(古)段階か<br>外:ヨコナデ,ナデ<br>内:ナデ後連結輪状暗文 | 灰(N4/) |
| 292 | 29 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 8層 | | 12c前半か | 現高:3.8 | Ⅰ-3～Ⅱ-1期か<br>外:ヨコナデ,ヘラミガキ<br>内:ヘラミガキ | 灰(N4/),<br>暗灰(N3/) |
| 293 | 29 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 9面 | | 12c前半 | 現高:3.9 | Ⅲ-1～2期<br>外:ヨコナデ後ヘラミガキ,ヘラミガキ<br>内:ヨコナデ,ヘラミガキ | 暗灰(N3/) |
| 294 | 29 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 8層 | | 12c中頃か | 現高:3.65 | Ⅱ-2期か<br>外:ヨコナデ後ミガキ,指押えナデ後ヘラミガキ<br>内:ナデ後ヘラミガキ | 暗灰(N3/) |
| 295 | 29 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 8層 | | 12c後半か | 現高:3.75 | Ⅱ-3～Ⅲ-1期か<br>外:ヨコナデ,指押え後一部ヘラミガキ<br>内:ヨコナデ,ヘラミガキ | 灰(N4/),<br>灰白(5Y 7/1) |
| 296 | 29 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 8層 | | 12c後半か | 口径:14.5(1/7)<br>現高:4.0 | Ⅲ-1期か<br>外:ヨコナデ後一部ヘラミガキ,指押えナデ後一部ヘラミガキ<br>内:ヨコナデ(一部ヘラミガキ),ヘラミガキ | 暗灰(N3/) |
| 297 | 29 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 8層 | | 13c前半 | 口径:15.0(1/7)<br>現高:4.05 | Ⅲ-3期か<br>外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,まばらなヘラミガキ,工具痕 | 灰(N4/) |
| 298 | 29 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 8層 | | 13c前半 | 口径:13.0(1/8)<br>現高:2.8 | Ⅲ-3期か<br>外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ後ヘラミガキ | 灰(N4/),<br>灰白(5Y8/1)・<br>(N8/) |
| 299 | 29 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 8層 | | 13c前半か | 口径:12.8(1/7)<br>現高:2.9 | Ⅲ-3期か<br>外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:まばらなヘラミガキ,スス薄く付着 | 暗灰(N3/) |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(cm)<br>( )は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 300 | 29 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 8層 | | 14c前半 | 口径:11.0(1/4)<br>現高:2.25 | Ⅳ-4期か<br>外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ナデ後数条のヘラミガキ | 灰白(N8/)<br>石英,長石,チャート |
| 301 | 29 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 8層 | | 12c中頃か | 高台径:5.6(1/5)<br>現高:1.6 | Ⅱ-3期か<br>外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:平行線状暗文? | 灰白(2.5Y8/1) |
| 302 | 29 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 8層 | | 12c中頃か | 高台径:5.2(1/6)<br>現高:1.7 | Ⅱ-3期か<br>外:ナデ,ヨコナデ,ナデ<br>内:ナデ後平行線状暗文 | 灰(N4/) |
| 303 | 29 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 8層 | | 12c末か | 高台径:4.6～4.85(2/3)<br>現高:1.3 | Ⅲ-2期か<br>外:ナデ?,ヨコナデ,ナデ<br>内:ナデ後平行線状暗文 | 灰白(10YR8/1) |
| 304 | 29 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 8層 | | 13c前半 | 高台径:4.8(1/3)<br>現高:1.05 | Ⅲ-3期か<br>外:指押え,ヨコナデ,ナデ<br>内:ナデ後平行線状暗文 | 灰(N5/) |
| 305 | 29 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 8層 | | 13c前半 | 高台径:4.8(1/4)<br>現高:1.3 | Ⅲ-2～3期か<br>外:指押え,ヨコナデ<br>内:ナデ後平行線状暗文 | 暗灰(N3/) |
| 306 | 29 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 8層 | | 13c中頃か | 高台径:3.8(2/3)<br>現高:1.4 | Ⅳ-2期か<br>外:指押えナデ,ヨコナデ,粘土紐高台,ナデ<br>内:ナデ後数条のヘラミガキ | 黒(2.5Y2/1) |
| 307 | 29 | | 土師器<br>羽釜 | 02－1 | 9面精査 | | 12cか | 口径:20.8(1/12)<br>現高:6.25 | 外:ヨコナデ,ナデ?,部分的にス<br>ス付着<br>内:ヨコナデ,ナデ,指押えナデ | 黄灰(2.5Y5/1) |
| 308 | 29 | | 瓦質土器<br>鉢 | 02－1 | 8層 | | 13cか | 現高:4.8 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ | 灰(N5/) |
| 309 | 29 | | 東播系須恵器<br>鉢 | 02－1 | 8層 | | 12c末～13c初か | 現高:2.4 | 外,内:回転ナデ,ナデ | 灰白(N7/),<br>灰(N6/) |
| 310 | 29 | | 灰釉陶器<br>瀬戸山茶碗 | 02－1 | 8層 | | 13c | 口径:10.4(1/12)<br>底径:5.5～5.9(一部欠)　現高:3.6 | 外:施釉(一部無釉),回転ナデ,糸切痕　内:施釉,回転ナデ,自然釉?付着,重ね焼痕 | 灰白(N8/) |
| 311 | 29 | | 陶器<br>信楽?鉢 | 02－1 | 8層 | | ? | 現高:4.5 | 外,内:自然釉付着 | 灰(5Y5/1),<br>灰白(5Y7/1) |
| 312 | 29 | 31 | 磁器<br>華南沿海窯系<br>白磁碗 | 02－1 | 8層 | | 12c後半 | 現高:3.0 | Ⅳ1類<br>外,内:施釉(ピンホールあり) | 灰白(7.5Y7/1) |
| 313 | 29 | 31 | 磁器<br>華南沿海窯系<br>白磁碗 | 02－1 | 8層 | | 13c前半 | 不明 | Ⅴ2類か<br>外,内:施釉　内:圏線 | 灰白(7.5Y7/1) |
| 314 | 29 | 31 | 磁器<br>龍泉窯系青磁碗 | 02－1 | 8層 | | 13c第3四半期 | 現高:3.8 | 外:施釉(貫入あり,鎬蓮弁文)<br>内:施釉(貫入あり) | オリーブ灰<br>(2.5GY5/1) |
| 315 | 29 | | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 8層 | | Ⅱ-1か<br>(MT15か)6c第1四半期か | 口径:10.4(1/7)<br>現高:3.0 | 外:回転ナデ,磨滅<br>内:回転ナデ | |
| 316 | 29 | | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 8層 | | Ⅱ-4か(TK43か)6c第4四半期か | 口径:14.2(1/11)<br>現高:2.3 | 外,内:回転ナデ | 灰(N5/) |
| 317 | 29 | | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 8層 | | Ⅱ-4か(TK43か)6c第4四半期か | 口径:12.6(1/8)<br>現高:2.3 | 外,内:回転ナデ | 灰(N6/)・(N5/) |
| 318 | 29 | | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 8層 | | Ⅱ-4か(TK43か)6c第4四半期か | 口径:若干のみ<br>受部径:15.4(1/5)<br>現高:3.6 | 外,内:回転ナデ | 灰(N6/) |
| 319 | 29 | | 須恵器<br>杯蓋 | 02－1 | 9面直上 | | Ⅱ-5～6<br>(TK209～)6c末～7c前半 | 口径:10.6(1/4)<br>現高:3.6 | 外:回転ナデ,回転ヘラケズリ(砂→)<br>内:回転ナデ | 灰白(N7/) |
| 320 | 29 | | 須恵器<br>杯蓋 | 02－1 | 8層 | | Ⅱ-6<br>7c前半 | 口径:10.6(1/5)<br>現高:2.9 | 外,内:回転ナデ | 青灰(5PB6/1),<br>灰(N6/) |
| 321 | 29 | | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 8層 | | Ⅱ-6<br>7c前半 | 口径:9.15(1/6)<br>現高:1.8 | 外,内:回転ナデ | 灰(N5/)<br>長石,石英 |
| 322 | 29 | | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 8層 | | | 不明 | 底部片　外:回転ヘラケズリ(砂→),ヘラ記号　内:回転ナデ | 灰(N6/),石英,長石,赤色砂粒 |
| 323 | 29 | | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 8層 | | Ⅱ型式<br>6c代 | 不明 | 破片　外:回転ナデ,回転ヘラケズリ(砂←),ヘラ記号<br>内:回転ナデ,ナデ | 灰(N6/)<br>石英,長石 |
| 324 | 29 | | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 9面精査 | | | 不明 | 破片　外:回転ナデ,回転ヘラケズリ(砂←),ヘラ記号<br>内:回転ナデ | 灰(N6/)<br>石英,長石 |
| 325 | 29 | | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 8層 | | Ⅲ-1か<br>7c前半か | 底径:5.5～5.6(完)<br>現高:1.7 | 外:回転ナデ,ナデ,ヘラ記号<br>内:回転ナデ,ナデ | 灰(N6/)<br>石英,長石 |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(cm)<br>( )は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 326 | 29 | | 須恵器<br>壷 | 02－1 | 8層 | | Ⅳ-1～2<br>(MT21～)<br>8c前半 | 口径:17.9(1/12)<br>現高:1.4 | 外:回転ナデ<br>内:回転ナデ,自然釉付着 | 紫灰(5P6/1) |
| 327 | 29 | | 須恵器<br>杯蓋 | 02－1 | 8層 | | Ⅳ-4か(TK7か)9c第1四半期か | 口径:16.7(1/15)<br>現高:0.9 | 外,内:回転ナデ | 灰白(N7/) |
| 328 | 29 | 33 | 金属製品<br>銭貨 | 02－1 | 8層 | | | 径:2.49　郭径:0.63<br>厚:0.11　重さ:3.3g | 元豊通寶(北宋1078年) | |
| 329 | 29 | 32 | 金属製品<br>千歯こきの歯? | 02－1 | 8～9層 | | | 現長:20.4<br>現幅:1.55　現厚:0.5 | 鉄製全体にサビ付着 | |
| 330 | 29 | 32 | 金属製品<br>馬鍬の歯 | 02－1 | 8層 | | | 現長:24.8　現幅:1.5<br>現厚:～0.8 | 鉄製全体に厚くサビ付着 | |
| 331 | 30 | 32 | 金属製品<br>鉄鏃 | 02－1 | 8～9層 | | | 現長:14.1　現幅:1.7<br>現厚:0.5 | サビ付着,上端上に曲がる | |
| 332 | 30 | 32 | 金属製品<br>ヤリガンナ? | 02－1 | 8層 | | | 現長:15.15<br>現幅:1.38　現厚:0.55 | 鉄製全体にサビ付着,付着物あり | |
| 333 | 30 | 32 | 金属製品<br>鉄釘? | 02－1 | 8層 | | | 現長:3.73　現幅:0.34 | | |
| 334 | 30 | 32 | 金属製品<br>鉄釘 | 02－1 | 8層 | | | 現長:9.5　現幅:0.88 | 全体にサビ付着 | |
| 335 | 30 | 41 | 木製品<br>紡錘車? | 02－1 | 8層 | | | 現長:6.4　現幅:2.0<br>現厚:0.6 | スギ<br>切り傷? | |
| 336 | 30 | 41 | 木製品<br>不明木製品 | 02－1 | 8層 | | | 長:1.75　幅:3.0<br>厚:1.0 | スギ<br>上端に段 | |
| 337 | 30 | 40 | 木製品<br>曲物蓋? | 06－2 | 8面 | B41坪境 | | 現長:11.1　現幅:3.0<br>厚:0.5 | スギ<br>紐穴か?繊維存在 | |
| 338 | 30 | | 木製品<br>不明木製品 | 06－2 | 8面 | B42土坑 | | 現長:10.4　現幅:1.4<br>厚:0.6 | コウヤマキ<br>折れ曲る | |
| 339 | 30 | | 土師器<br>皿 | 06－2 | 8層 | | 13cか | 口径:12.4(1/8)<br>現高:3.0 | 外:ヨコナデ,指押え,板ナデ,指押えナデ　内:摩滅 | 灰白(7.5YR8/2) |
| 340 | 30 | | 瓦器<br>皿 | 06－2 | 8層 | | 13cか | 口径:8.6(1/7)<br>現高:1.3 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ | 灰白(2.5Y8/1) |
| 341 | 30 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 06－2 | 8層 | | 12c中頃 | 現高:3.4 | 外:ヨコナデ後一部ヘラミガキ,指押えナデ後一部ヘラミガキ<br>内:まばらなヘラミガキ | 暗灰(N3/) |
| 342 | 30 | | 瓦器<br>椀(大和型?) | 06－2 | 8層 | | 12c後半か | 現高:3.4 | 外:ヨコナデ後一部ヘラミガキ,ヘラケズリ後ヘラミガキ<br>内:沈線1,ナデ後一部ヘラミガキ | 青灰(5PB6/1) |
| 343 | 30 | 31 | 磁器<br>華南沿海窯系<br>白磁碗 | 06－2 | 8層 | 坪境段部分 | 13c前半 | 高台基部径:7.0(1/5)<br>現高:2.9 | V類<br>外:施釉(ピンホールあり),高台露胎　内:施釉(櫛描文) | 灰白(5Y7/1) |
| 344 | 30 | | 須恵器<br>杯? | 06－2 | 8層 | | 8cか | 現高:5.3 | 外,内:回転ナデ | 青灰(5PB6/1) |
| 345 | 30 | | 土師器<br>製塩土器 | 06－2 | 8層 | | 8c中頃～9c初か | 不明 | 外:摩滅<br>内:指押え | 淡黄(2.5Y8/3),石英,長石,チャート |
| 346 | 30 | | 瓦<br>平瓦 | 06－2 | 8層 | | 平安後期以後中世前半 | 現厚:2.7 | 凸:平行タタキ,面取り<br>凹:布目　凸,凹:一部スス付着 | 灰白(N7/),石英,長石,チャート |
| 347 | 35 | | 土師器<br>杯か皿 | 02－1 | 9面 | A120坪境溝 | 11c末～12c初か | 口径:16.0(1/10)<br>現高:3.0 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ | 褐灰(10YR6/1),<br>灰白(10Y8/2) |
| 348 | 35 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 9面 | A120坪境溝 | 12c前半 | 口径:15.2(1/9)<br>現高:3.6 | Ⅱ-1か2期<br>外:ヨコナデ,ヘラミガキ<br>内:ヨコナデ,ヘラミガキ | 暗灰(N3/) |
| 349 | 35 | | 瓦<br>丸瓦 | 02－1 | 9面 | A120坪境溝 | 中世か | 現長:10.4　現幅:3.7<br>現厚:2.3 | 凸:ハケナデ?,ナデ<br>凹:布目痕 | 灰黄(2.5Y7/2),石英,長石,チャート |
| 350 | 35 | | 土師器<br>椀? | 02－1 | 9層 | | 9cか | 口径:15.65(1/2)<br>現高:4.1 | 外:ヨコナデ,指押えナデ?<br>内:ナデ | 黄橙(10YR8/6) |
| 351 | 35 | | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 9層 | | Ⅲ-3か(TK48か)7c後半か | 底径:8.0(1/6)<br>現高:2.3 | 外:回転ナデ,ナデ?<br>内:回転ナデ,ナデ | 灰白(N8/) |
| 352 | 35 | | 須恵器<br>杯B | 02－1 | 9層 | | Ⅳ-1か<br>(MT21か)8c第1四半期か | 高台径:11.7(1/2)<br>現高:2.3 | 外,内:回転ナデ,ナデ | 灰(N6/) |
| 353 | 35 | | 須恵器<br>壷 | 02－1 | 9層 | | 9cか | 腹部内径:15.0(1/7) | 外:ナデ<br>内:回転ナデ | 青灰(5B6/1)<br>長石,石英 |
| 354 | 35 | | 須恵器<br>壷 | 02－1 | 10面 | | 9cか | 底径:10.8(1/4)<br>現高:10.9 | 外:回転ナデ,糸切り痕?<br>内:回転ナデ,ナデ | 灰(N6/) |
| 355 | 35 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 9層 | | 12c前半か | 口径:9.8(1/5)<br>現高:1.4 | 外:2段ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ | にぶい黄橙(10YR7/3)<br>雲母,赤色砂粒 |
| 356 | 35 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 9層 | | 12c後半か | 口径:8.8(1/9)<br>現高:1.1 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ? | 浅黄橙(10YR8/3)<br>石英,長石 |
| 357 | 35 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 9層 | | 12c後半か | 口径:9.2(1/5)<br>現高:1.1 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ | 灰白(10YR8/2) |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(cm)<br>( )は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 358 | 35 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 9層 | | 13cか | 口径:8.4(1/2)<br>現高:1.1 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ,ナデ | にぶい黄橙<br>(10YR7/4) |
| 359 | 35 | | 土師器<br>皿 | 02－1 | 9層 | | 12c前半か | 口径:16.0(1/8)<br>現高:2.3 | 外:2段ヨコナデ,指押えナデ<br>内:ヨコナデ | にぶい黄橙<br>(10YR7/3)<br>長石,石英 |
| 360 | 35 | | 瓦器<br>皿 | 02－1 | 9層 | | 12c末～13c初か | 口径:9.0(1/8)<br>現高:1.5 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:端部凹む,ヨコナデ,ナデ,平行線状暗文 | 暗オリーブ灰<br>(5GY4/1) |
| 361 | 35 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 9層 | | 12c初か | 現高:3.8 | Ⅱ－1期か<br>外:ヨコナデ,指押えナデ後ヘラミガキ　内:ナデ後ヘラミガキ | 灰(N5/)・(N4/) |
| 362 | 35 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 9層 | | 12c初か | 高台径:6.0(2/5)<br>現高:1.7 | Ⅰ－3期か<br>外:ナデ,ヨコナデ,指押えナデ<br>内:密なヘラミガキ | 暗灰(N3/) |
| 363 | 35 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 9層 | | 12c後半か | 高台径:4.8(1/4)<br>現高:1.05 | Ⅱ－3期か<br>外:ヨコナデ,ナデ<br>内:ナデ後格子状暗文 | 暗灰(N3/) |
| 364 | 35 | | 瓦器<br>椀(大和型) | 02－1 | 9層 | | 12c後半か | 高台径:5.6(1/3)<br>現高:1.1 | Ⅲ－A(古)段階か<br>外:ヨコナデ,ナデ　内:ナデ後ヘラ痕あり,連結輪状暗文 | 灰(N4/) |
| 365 | 35 | | 瓦器<br>椀(和泉型) | 02－1 | 9層 | | 13c中頃 | 口径:13.6(1/4)<br>現高:2.9 | Ⅳ－1～2期か<br>外:ヨコナデ,指押え　内:まばらなヘラミガキ,スス付着 | 灰白(2.5Y7/1),<br>明褐灰(7.5YR7/2) |
| 366 | 35 | | 土師器<br>羽釜 | 02－1 | 9層 | | 12cか | 口径:20.0(1/12)<br>現高:3.3 | 外:ヨコナデ,スス付着<br>内:ヨコナデ,指押えナデ | 浅黄(2.5Y7/3),<br>黒(2.5Y/2/1)<br>石英,長石,片岩? |
| 367 | 35 | | 須恵器<br>杯蓋 | 02－1 | 9層 | | Ⅱ－3か(MT85か)6c中か | 口径:15.7(1/9)<br>現高:3.5 | 外:回転ナデ,凹線2,回転ヘラケズリ(砂→)　内:回転ナデ | 緑灰(10GY6/1) |
| 368 | 35 | | 須恵器<br>杯蓋 | 02－1 | 9層 | | Ⅱ－5～6<br>(TK209～)6c末～7c前半 | 口径:12.7(1/7)<br>現高:4.0 | 外:回転ナデ,回転ヘラケズリ(砂→),ヘラ記号<br>内:回転ナデ,ナデ | 灰白(N7/) |
| 369 | 35 | | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 9層 | | Ⅱ－4(TK43)<br>6c第4四半期 | 口径:11.0(1/6)<br>現高:3.8 | 外:回転ナデ,回転ヘラケズリ(砂→)　内:回転ナデ,ナデ | 灰(7.5Y6/1)<br>長石,石英 |
| 370 | 35 | | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 9層 | | Ⅱ－4～5(TK43～TK209)<br>6c第4四半期～7c初 | 口径:13.0(若干のみ)<br>現高:4.1 | 図上復元<br>外:回転ナデ,回転ヘラケズリ(砂←)　内:回転ナデ | 褐灰(7.5YR6/1) |
| 371 | 35 | | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 9層 | | Ⅱ－4～5(TK43～TK209か)<br>6c第4四半期～7c初か | 口径:12.4(1/15)<br>現高:2.9 | 外:回転ナデ<br>内:回転ナデ | 灰(N6/) |
| 372 | 35 | | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 9層 | | Ⅱ－5～6<br>(TK209～)6c末～7c前半 | 口径:10.1(1/2)<br>現高:3.2 | 外:回転ナデ,ヘラ切り?未調整<br>内:回転ナデ,ナデ | 灰白(N7/) |
| 373 | 35 | | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 9層 | | Ⅱ－5～6<br>(TK209～)6c末～7c前半 | 口径:9.9(1/4)<br>現高:2.7 | 外:回転ナデ,ヘラ切り未調整<br>内:回転ナデ,ナデ | 灰白(N7/) |
| 374 | 35 | | 須恵器<br>椀? | 02－1 | 9層 | | Ⅱ型式か<br>6cか | 最大腹径:10.0(1/6) | 外,内:回転ナデ | 青灰(5PB6/1) |
| 375 | 35 | | 土師器<br>高杯 | 02－1 | 9～10層 | | 7cか | 口径:9.6(1/5)<br>脚裾径:8.9(1/5)<br>現高:8.5 | 図上復元<br>外:ヨコナデ,表面剥離,タテナデ,シボリ目,摩滅　内:ヨコナデ,表面剥離,シボリ目,指押え | 橙(2.5YR6/8)・<br>(2.5YR7/6) |
| 376 | 35 | 41 | 木製品<br>不明木製品 | 02－1 | 9層 | | | 現長:15.6　現幅:6.0<br>現厚:0.7 | ヒノキ　表:一部焼けコゲ<br>小孔1　表・裏:無数の線刻 | |
| 377 | 35 | | 黒色土器A類<br>椀 | 06－2 | 9面 | B43溝 | 10c中頃か | 高台径:6.8(1/4)<br>現高:2.5 | 外:ヘラケズリ後ヘラミガキ,ヨコナデ,ナデ<br>内:ヘラミガキ(摩滅) | にぶい黄橙<br>(10YR7/2)<br>長石,石英,雲母,チャート |
| 378 | 35 | | 須恵器<br>杯 | 06－2 | 9面 | B45溝 | Ⅱ－6<br>7c前半 | 口径:9.2(1/10)<br>現高:1.7 | 外,内:回転ナデ,ナデ | 明青灰(5B7/1)<br>石英,長石 |
| 379 | 35 | 31 | 磁器<br>華南沿海窯系<br>白磁碗 | 06－2 | 9面 | B45溝 | 13c前半 | 高台径:6.2(1/3)<br>現高:2.6 | Ⅴ類<br>外:施釉,回転ヘラケズリ,下半部露胎　内:砂付着 | 灰白(2.5Y8/1),<br>浅黄(2.5Y7/3) |
| 380 | 35 | | 土師器<br>杯B | 06－2 | 9層 | | 8c～9c | 不明 | 底部片<br>外:スス付着 | 灰白(10YR8/1),石英,長石,赤色粒 |
| 381 | 35 | | 須恵器<br>壺 | 06－2 | 9面精査 | | 9cか | 頸部径:6.0(1/4) | 頸部<br>外,内:回転ナデ<br>内:自然釉付着 | 灰白(5Y8/1) |
| 382 | 35 | 33 | 土師器<br>製塩土器 | 06－2 | 9層 | | 8c末～9c初か | 口径:12.0(1/7)<br>現高:4.5 | 外:指押え,摩滅<br>内:摩滅,シボリ目 | 灰　白(5YR8/1),長石,石英,チャート |
| 383 | 35 | | 須恵器<br>杯蓋 | 06－2 | 9層 | | Ⅱ－4(TK43)<br>6c第4四半期 | 口径:12.4(1/5)<br>現高:3.6 | 外:回転ナデ,回転ヘラケズリ(砂→),線刻か　内:回転ナデ | 灰(N6/) |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(cm)<br>( )は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 384 | 43 | | 石製品<br>サヌカイト片 | 02－1 | 10面 | A140溝 | | 長:4.03　幅:3.94<br>厚:0.42　重さ:8.0g | | |
| 385 | 43 | | 須恵器<br>壺 | 02－1 | 10面 | A212土坑 | Ⅱ-1,2か<br>(MT15～TK10か)6c前半か | 胴径:14.8(1/4) | 外:回転ナデ,自然釉付着,カキ目,ナデ,格子状タタキ<br>内:回転ナデ,自然釉付着 | 暗オリーブ灰(2.5GY4/1),<br>青灰(5PB6/1) |
| 386 | 43 | 33 | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 10面 | A243ピット | Ⅱ-2～3(TK10～MT85)6c第2四半期～中 | 口径:13.5(3/4)<br>現高:4.1 | 外:回転ナデ,回転ヘラケズリ(砂←)　内:回転ナデ,ナデ | 緑灰(10GY6/1) |
| 387 | 43 | 34 | 須恵器<br>杯蓋 | 02－1 | 10面 | A244土坑 | Ⅱ-2(TK10)<br>6c第2四半期 | 口径:14.2(完)<br>器高:4.6 | 外:回転ナデ,回転ヘラケズリ(砂→)内:段の名残り,回転ナデ,ナデ | 青灰(5PB6/1) |
| 388 | 43 | 34 | 須恵器<br>杯蓋 | 02－1 | 10面 | A260ピット | Ⅱ-4(TK43)<br>6c第4四半期 | 口径:12.6(一部欠)<br>現高:4.0 | 外:回転ナデ,回転ヘラケズリ(砂→)　内:回転ナデ,ナデ | 緑灰(10GY6/1) |
| 389 | 43 | | 土師器<br>布留式甕 | 02－1 | 10面 | A279土坑 | 布留Ⅱ～Ⅲ | 口径:15.9(1/6)<br>現高:3.6 | 外:ヨコナデ,スス付着<br>内:ヨコナデ,粗いハケメ,ナデ,指押え | にぶい黄橙(10YR6/3),<br>石英,長石,雲母 |
| 390 | 43 | | 土師器<br>布留式甕 | 02－1 | 10面 | A279土坑 | 布留期中段階 | 頸部径:10.9(1/4)<br>現高:5.6 | 外:ヨコナデ,ヨコハケメ後タテハケメ,うすくスス付着　内:ヨコナデ,指押えナデ,ヘラケズリ | 灰黄褐(10YR6/2)<br>長石,石英,雲母,角閃石? |
| 391 | 43 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 10面 | A279土坑 | 弥生Ⅳ-4か | 口径:15.0(1/11)<br>現高:2.15 | 外:ナデ,凹線文2条,ヨコナデ,摩滅　内:ヨコナデ,摩滅 | 灰黄褐(10YR6/2)<br>生駒西麓産 |
| 392 | 43 | 33 | 土師器<br>杯 | 02－1 | 10面 | A374土坑 | 8c初か | 口径:12.6(一部欠)<br>現高:3.55 | 外:ヨコナデ,指押えナデ<br>内:段?,ヨコナデ,ナデ?,摩滅,一部にスス?付着 | にぶい黄橙(10YR7/2) |
| 393 | 43 | 33 | 土師器<br>杯 | 02－1 | 10面 | A390ピット | 8c初か | 口径:14.2(一部欠)<br>現高:3.5 | 外:ヨコナデ,指押えナデ,口縁部欠(故意か)<br>内:ヨコナデ,放射状暗文 | 明黄褐(10YR6/6) |
| 394 | 43 | 34 | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 10層 | | Ⅱ-4～5(TK43～209)6c第4四半期～7c初 | 口径:11.6(完)<br>器高:4.1 | 外:回転ナデ,回転ヘラケズリ(砂←)<br>内:回転ナデ,ナデ | 灰(N6/)<br>石英,長石,チャート |
| 395 | 43 | | 須恵器<br>杯蓋 | 02－1 | 10層 | | Ⅱ-2(TK10)<br>6c第2四半期 | 口径:13.8(1/9)<br>現高:4.1 | 外:回転ナデ,稜,回転ヘラケズリ(砂→),自然釉付着<br>内:段,回転ナデ | 灰(5Y6/1)<br>石英,長石 |
| 396 | 43 | | 須恵器<br>杯 | 02－1 | 10層 | | Ⅱ-6<br>7c前半 | 口径:9.0(1/5)<br>現高:3.5 | 外:回転ナデ,回転ヘラケズリ(砂←)　内:回転ナデ | 青灰(5PB5/1)<br>石英,長石 |
| 397 | 43 | | 弥生土器<br>壺 | 02－1 | 10層 | | 弥生Ⅴ | 口径:11.6(1/5)<br>現高:4.5 | 外:ヨコナデ,擬似凹線文2条,ナデ?<br>内:ヨコナデ,摩滅? | にぶい黄(2.5Y6/4),にぶい黄橙(10YR6/4)<br>長石,石英,雲母,チャート |
| 398 | 43 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 10層 | | 弥生Ⅳ-2 | 口径:14.0(1/9)<br>現高:3.6 | 外:ヨコナデ,ヘラミガキ(摩滅),スス一部付着<br>内:ヨコナデ,摩滅 | 橙(7.5YR6/6)<br>生駒西麓産 |
| 399 | 43 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 10層 | | 弥生Ⅴ | 底径:3.7(1/2)<br>現高:3.6 | 外:タタキ,ナデ,凹み底<br>内:摩滅,工具痕 | 明赤褐(5YR5/6)<br>生駒西麓産 |
| 400 | 43 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 10層 | | 弥生Ⅴ | 底径:3.7(1/6)<br>現高:4.0 | 外:タタキ内:ハケメ | 褐(10YR4/4)<br>生駒西麓産 |
| 401 | 43 | | 弥生土器<br>鉢 | 02－1 | 10層 | | 弥生Ⅴ | 底径:4.0(3/4)<br>現高:2.3 | 外:ハケメ,凹み底　内:ハケメ後ナデか,底面にハケメ | 褐(7.5YR4/4)<br>生駒西麓産 |
| 402 | 43 | | 弥生土器<br>鉢 | 02－1 | 10層 | | 弥生Ⅴ | 底径:5.0(4/5)<br>現高:3.0 | 外:タタキ,指押え<br>内:ハケメ | にぶい黄橙(10YR6/4)<br>生駒西麓産? |
| 403 | 43 | | 弥生土器<br>鉢 | 02－1 | 10層 | | 弥生Ⅴ | 底径:4.3(一部欠)<br>現高:3.0 | 全体に摩滅<br>外:指押え | 橙(7.5YR7/6)<br>生駒西麓産 |
| 404 | 43 | | 弥生土器<br>底部 | 02－1 | 10層 | | 弥生Ⅴ | 底径:4.35(完)<br>現高:1.85 | 外:指押え,磨滅<br>内:表面剥離 | 黒褐(10YR3/1),<br>灰黄褐(10YR6/2)<br>生駒西麓産 |
| 405 | 43 | | 弥生土器<br>有孔底部 | 02－1 | 10層 | | 弥生Ⅴ | 底径:4.2(一部欠)<br>現高:3.1　孔径:0.7 | 全体に摩滅　外:指押え,穿孔<br>内:工具痕 | 黄褐(10YR5/6)<br>生駒西麓産 |
| 406 | 43 | | 石製品<br>サヌカイトチップ | 02－1 | 10層 | | | 長:1.24　幅:1.62<br>厚:0.29　重さ:0.6g | | |
| 407 | 43 | | 須恵器<br>高杯 | 06－2 | 10層 | | Ⅰ-3～4か<br>(TK208～TK23か)5c中～第4四半期か | 脚裾径:7.8(1/6)<br>現高:4.6 | 脚部<br>外:三方スカシ孔,回転ナデ,沈線1　内:回転ナデ | 青灰(5PB5/1)<br>石英 |
| 408 | 43 | | 須恵器<br>杯蓋 | 06－2 | 10層 | | Ⅱ-2(TK10)<br>6c第2四半期 | 口径:15.0(1/14)<br>現高:3.2 | 外:回転ナデ<br>内:段,回転ナデ | 灰白(N7/) |
| 409 | 43 | | 須恵器<br>提瓶? | 06－2 | 10層 | | Ⅱ-5以降<br>(TK43以降)6c第4四半期以降 | 口径:5.4(1/4)<br>現高:3.8 | 外,内:回転ナデ | 青灰(5PB6/1) |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(cm)<br>(　)は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 410 | 43 | | 須恵器<br>杯B | 06－2 | 10層 | | 8c | 高台基部径:7.6(1/4) | 外,内:回転ナデ | 灰(N6/) |
| 411 | 43 | | 土師器<br>杯 | 06－2 | 10層 | | 8cか | 口径:11.8(1/13)<br>現高:2.9 | 外:ヨコナデ,指押え<br>内:表面剥離 | 浅黄橙(7.5YR8/4) |
| 412 | 43 | | 土師器<br>製塩土器 | 06－2 | 10面直上 | | 8cか | 現高:3.1 | 外,内:表面剥離<br>内:二次焼成で赤色化<br>口縁:波打つ | 浅黄橙(10YR8/3)<br>石英,長石,チャート,赤色粒 |
| 413 | 43 | | 弥生土器<br>台付鉢 | 06－2 | 10層 | | 弥生Ⅳ末～Ⅴ | 胴部径:16(1/8) | 吉備系?<br>外:棒状浮文(3条1対か),赤彩一部あり　内:ナデ? | にぶい黄褐(10YR4/3)<br>生駒西麓産 |
| 414 | 43 | | 弥生土器<br>台付鉢 | 06－2 | 11面 | | 弥生Ⅳ-4かⅤ | 胴部径:19(1/10) | 胴部片　吉備系か(吉備Ⅴ-2?)<br>外:接合面,棒状浮文(現存3条＋α)1帯,赤彩 | 暗灰黄(2.5Y4/2)<br>生駒西麓産 |
| 415 | 43 | 33 | 金属製品<br>小形仿製鏡 | 06－2 | 9層(第10面直上) | | | 径:3.59×3.60<br>高さ:0.54<br>厚:0.12～0.18<br>重さ:9.1g | 銅製<br>表:櫛歯文,円圏1,孔1 | |
| 416 | 52 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 11b層 | | 弥生Ⅳ-2～3か | 口径:14(1/8) | 外,内:ヨコナデ,スス・コゲ付着 | 黄灰(2.5Y4/1)<br>石英,長石 |
| 417 | 52 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 11b層下部 | | 弥生Ⅳ | 底径:5.2(一部欠)<br>現高:7.0 | 外:ヘラミガキ,ナデ,スス付着<br>内:摩滅 | 暗褐(10YR3/4)<br>生駒西麓産 |
| 418 | 52 | 34 | 石製品<br>サヌカイト片 | 02－1 | 11b層(最下層) | | | 長:3.22　幅:3.80<br>厚:1.41　重さ:16.6g | | |
| 419 | 52 | 41 | 木製品<br>不明木製品 | 02－1 | 11b層(下層) | | | 現長:11.1　現幅:10.2<br>現厚:2.2　孔径:1.45 | ブナ科<br>孔1 | |
| 420 | 52 | 41 | 木製品<br>不明木製品 | 02－1 | 11b層(下層) | | | 現長:14.5　現幅:8.4<br>現高:3.65 | ケヤキ | |
| 421 | 52 | | 須恵器<br>杯蓋 | 06－2 | 11面 | B171土器 | Ⅱ-5か(TK209か)6c末～7c初か | 口径:13.8(1/6)<br>現高:2.15 | 外:回転ナデ,手持ちヘラケズリ<br>内:回転ナデ,ナデ | 灰(N5/)<br>石英,長石 |
| 422 | 52 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 11層 | | 弥生Ⅴ | 口径:16.6(1/9)<br>現高:6.0 | 外:刻目,ハケメ,平行タタキ<br>内:摩滅 | にぶい橙(7.5YR7/3),石英,チャート,長石 |
| 423 | 52 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 11b面 | B197流路 | 弥生Ⅴ-0か | 口径:17.5(1/5)<br>現高:5.9 | 外:ヨコナデ,ヘラミガキ,スス付着(口縁端部に多い)<br>内:ヨコナデ,ヘラナデ,摩滅 | にぶい褐(7.5YR6/3)<br>生駒西麓産 |
| 424 | 52 | 34 | 石製品<br>サヌカイト片 | 06－2 | 11b面 | B197流路 | | 現長:2.15　現幅:1.53<br>現厚:0.28　重さ:0.9g | | |
| 425 | 52 | | 木製品<br>不明木製品 | 06－2 | 11b面 | B197流路 | | 現長:28.7　現幅:16.1<br>厚:2.7 | ヒノキ | |
| 426 | 52 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 11b層 | B211土器 | 弥生Ⅳ-4か | 口径:12.4(3/8)<br>現高:3.7 | 外:ヨコナデ,タテヘラミガキ,スス付着,粘土接合痕<br>内:ヨコナデ,摩滅,粘土接合痕 | 褐(10YR4/4),<br>黒褐(10YR3/1)<br>生駒西麓産 |
| 427 | 52 | | 弥生土器<br>有孔鉢 | 06－2 | 11b層 | B220土器出土地点 | 弥生Ⅴ～Ⅵ | 口径:17.4(楕円形)<br>底径:4.9～5.5(楕円形)　現高:5.9<br>孔径:1.0～1.1 | 外:摩滅,指押えナデ<br>内:指押さえナデ,穿孔1(焼成前ケズリ取り) | 黄褐(2.5Y5/4)<br>生駒西麓産 |
| 428 | 52 | | 弥生土器<br>壺 | 06－2 | 11b層 | | 弥生Ⅰ-2～3 | 不明 | 頸部<br>外:段上沈線文2条,ヘラミガキ?　内:摩滅 | 黄灰(2.5Y4/1),石英,長石,チャート |
| 429 | 52 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 11b層 | | 弥生Ⅰ末～Ⅱ | 底径:6.7～7.0(完)<br>現高:4.2 | 外:ハケメ,ナデ<br>内:工具痕,指押え? | 灰褐(7.5YR4/2)<br>生駒西麓産 |
| 430 | 52 | | 石製品<br>砥石? | 06－2 | 11b層 | | | 現長:10.71 現幅:6.64<br>現厚:4.22<br>重さ:274.9g | 流紋岩質溶結凝灰岩<br>2面に擦痕 | |
| 431 | 67 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 12面 | A509流路 | 弥生Ⅳ-2～3 | 口径:16.2(1/7)<br>現高:4.5 | 外:ヨコナデ,凹線文1条,粗いハケメ後細かいハケメ<br>内:ヨコナデ,粗いハケメ後細かいハケメ | 橙(5YR6/8)<br>石英,長石,チャート |
| 432 | 67 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 12面 | A509流路 | 弥生Ⅳ-2～3 | 底径:7.1(1/2)<br>現高:13.3 | 外:ヨコヘラミガキ,タテヘラミガキ,全体にスス付着<br>内:ヘラケズリ,強い指ナデ,一部コゲ付着 | 灰オリーブ(5Y6/2)<br>石英,長石,チャート |
| 433 | 67 | | 縄文土器<br>深鉢 | 02－1 | 12面 | A509流路 | 長原式 | 現高:2.5 | 外,内:摩滅 | にぶい黄褐(10YR5/3)<br>生駒西麓産? |
| 434 | 67 | | 縄文土器<br>体部片 | 02－1 | 12面 | A509流路 | 長原式 | 不明 | 外:凸帯　内外面摩滅 | 灰(5Y4/1)<br>生駒西麓産 |
| 435 | 67 | 34 | 弥生土器<br>壺 | 02－1 | 12面 | A530高まり | 弥生Ⅳ-3か | 頸部径:8.0(2/3)<br>最大幅:26.8<br>現高:22.3 | 外:簾状文(6帯),円形浮文(2列)　内:ハケメ後ナデ,指押え,工具痕,ナデ?,粘土接合痕,指押えナデ,ハケメ?後ナデ,指押え | にぶい褐(7.5YR5/4)<br>生駒西麓産 |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(㎝)<br>( )は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 436 | 67 | | 弥生土器<br>壺 | 02－1 | 12面 | | 弥生Ⅳ-3～4 | 底径:6.2～6.4(完)<br>現高:11.1 | 外:ヘラミガキ(摩滅),スス付着,底面ヘラミガキ<br>内:指押えナデ,摩滅,ハケナデ | 黄褐(2.5Y5/4),にぶい褐(7.5YR5/3)<br>生駒西麓産 |
| 437 | 67 | | 弥生土器<br>高杯 | 02－1 | 12面上 | | 弥生Ⅳ-2～3 | 脚裾径:13.9(2/3)<br>現高:12.5 | 外:タテヘラミガキ,一部ハケメ残る,ヨコナデ<br>内:指押え,シボリ目,工具痕,ナデ,粘土接合痕,スス厚く付着 | 灰黄褐(10YR5/2)<br>生駒西麓産 |
| 438 | 67 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 12層 | | 弥生Ⅲか | 口径:16.2(1/4)<br>現高:9.0 | 外:ヨコナデ後一部ヘラミガキ,タテヘラミガキ<br>内:ナデ一部ヘラミガキ,ヨコヘラミガキ,指押え | 橙(7.5YR6/6)<br>生駒西麓産 |
| 439 | 67 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 12層 | | 弥生Ⅲか | 口径:19.2(1/4)<br>現高:10.5 | 外:ヨコナデ,ナデ,タテヘラミガキ,全体にスス付着<br>内:ヨコナデ,指押え・ハケナデ後ヨコヘラミガキ | 黒(10YR2/1)<br>生駒西麓産 |
| 440 | 67 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 12層 | | 弥生Ⅳ-1か | 胴径:15.0(1/5) | 外:ヨコナデ,タテヘラミガキ,スス付着　内:指押えナデ,ナデ後タテヘラミガキ | 黒(10Y2/1)<br>生駒西麓産 |
| 441 | 67 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 12層 | | 弥生Ⅱか | 底径:5.3(完)<br>現高:3.2 | 外:ヘラナデ?,指押え,ヨコナデ<br>内:摩滅 | 灰白(2.5Y7/1)<br>長石,石英,雲母,チャート |
| 442 | 67 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 12層 | | 弥生Ⅱか | 底径:5.8(1/2)<br>現高3.4 | 外:タテヘラミガキ,底面ヘラミガキ<br>内:ヘラミガキ,表面剥離 | 黒褐(5YR3/1),<br>灰黄褐(10YR5/2)<br>生駒西麓産 |
| 443 | 67 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 12層 | | 弥生Ⅱか | 底径:5.6(完)<br>現高:3.4 | 外:ヘラミガキ?,指押えナデ<br>内:摩滅 | 灰黄褐(10YR5/2),<br>にぶい橙(5YR6/4)<br>生駒西麓産 |
| 444 | 67 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 12層 | | 弥生Ⅲか | 底径:6.0(1/5)<br>現高:2.55 | 外:ヘラミガキ,ナデ,底面部分的にヘラミガキ<br>内:指ナデ?(摩滅) | 灰褐(7.5YR4/2),<br>黒褐(7.5YR3/2)<br>生駒西麓産 |
| 445 | 67 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 12層 | | 弥生Ⅳか | 底径:6.0(3/4)<br>現高:3.8 | 外:ヘラミガキ,スス付着<br>内:摩滅 | 灰黄褐(10YR5/2)<br>生駒西麓産 |
| 446 | 67 | | 弥生土器<br>高杯 | 02－1 | 12層 | | 弥生Ⅳか | 脚径:4.3(1/9) | 脚片<br>外:ナデ?<br>内:ナデ | にぶい黄橙<br>(10YR7/2),石英,<br>長石,チャート |
| 447 | 67 | 35 | 石製品<br>サヌカイト片 | 02－1 | 12層 | | | 長:7.74　幅:4.13<br>厚:1.19　重さ:41.2g | A面:下面に自然面残る | |
| 448 | 67 | 35 | 石製品<br>サヌカイト片 | 02－1 | 12層? | | | 長:8.36　幅:5.40<br>厚:2.37　重さ:82.1g | A面に自然面残る | |
| 449 | 67 | 35 | 石製品<br>サヌカイトチップ | 02－1 | 12層 | | | 長:1.88　幅:2.73<br>厚:0.22　重さ:1.5g | | |
| 450 | 67 | | 弥生土器<br>甕蓋 | 02－1 | 12層 | | 弥生Ⅲか | 頂部径:4.2～4.4(一部欠)　現高:8.3 | 外:ヘラミガキ,薄くスス付着<br>内:ヘラミガキ?,シボリ目,ナデ | にぶい橙<br>(7.5YR6/4)<br>生駒西麓産 |
| 451 | 67 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 12層 | | 弥生Ⅳ-1か | 底径:5.5(完)<br>現高:4.7 | 外:ヘラミガキ?,ナデ<br>内:表面剥離 | にぶい褐<br>(7.5YR6/3)<br>生駒西麓産? |
| 452 | 68 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 12b層 | | 弥生Ⅳ | 口径:14.0(若干のみ)<br>頸部径:12.8(1/6)<br>現高:3.7 | 外:ヨコナデ,指押え,ヨコヘラミガキ,スス付着　内:ヨコナデ,ヨコヘラミガキ,ナデ | 灰黄褐(10YR4/2)<br>生駒西麓産 |
| 453 | 68 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 12b層 | | 弥生Ⅱか | 現高:4.0 | 外:ヨコナデ,ナデ,スス付着<br>内:ヨコナデ,ヘラミガキ,板ナデ? | 灰褐(7.5YR6/2) |
| 454 | 68 | 35 | 石製品<br>石鏃 | 02－1 | 13面 | | | 現長:5.37　現幅:2.13<br>現厚:5.3　重さ:5.2g | サヌカイト<br>凸基Ⅱ式,片側鋸歯状加工 | |
| 455 | 68 | | 石製品<br>投弾? | 02－1 | 12b層 | | | 径:3.05×3.18<br>厚:0.98　重さ:14.1g | 砂岩<br>一部スス付着,二次焼成で赤色化 | |
| 456 | 68 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 12面 | B199高まり直上 | 弥生Ⅳか | 口径:12.2(1/8)<br>現高:3.4 | 外:ヨコナデ,ハケメ?<br>内:ヨコナデ,ナデ,指押えナデか内外面コゲ・スス付着 | 灰褐(7.5YR4/2)<br>生駒西麓産 |
| 457 | 68 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 12面 | B199高まり | 弥生Ⅱか | 口径:15.2(1/7)<br>現高:1.6 | 外:刻目,ヨコナデ,板ナデ,スス付着<br>内:ヨコナデ | にぶい黄橙<br>(10YR7/4)<br>生駒西麓産 |
| 458 | 68 | 35 | 石製品<br>石鏃 | 06－2 | 12面 | B200溝 | | 現長:3.88　現幅:2.12<br>現厚:0.42　重さ:3.5g | サヌカイト<br>凸基Ⅰ式,周縁鋸歯状 | |
| 459 | 68 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 12面 | B204溝 | 弥生Ⅳか | 口径:12.0(1/7)<br>現高:2.05 | 外:ヨコナデ,ナデ<br>内:ヨコナデ,粗いハケメ | にぶい黄(2.5Y6/3)<br>生駒西麓産 |
| 460 | 68 | 34 | 弥生土器<br>把手付鉢 | 06－2 | 12面 | B207土器 | 弥生Ⅳ-1か | 口径:16.0(一部欠損)<br>底径:4.6(完)<br>器高:5.9～6.2 | 外:ヨコナデ,ナデ,輪状底部,把手上ナデ　内:粗いハケメ(一部タテハケメ) | 明黄褐(10YR7/6)<br>生駒西麓産 |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(cm)<br>( )は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 461 | 68 | 34 | 石製品<br>石庖丁 | 06－2 | 12面 | B239高まり内 | | 長:4.4　幅:5.4<br>厚:0.7　孔径:0.8 | 緑泥石片岩<br>Ⅱ類直線刃半月形<br>A,B: 使用痕, 敲打痕 | |
| 462 | 68 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 12面 | B240溝 | 弥生Ⅳ－2か | 底径:5.3(完)<br>現高:6.8＋13.3 | <底部>外:ヘラミガキ, 一部スス付着, 指ナデ<br>内:ハケメ, 指ナデ<br><胴部>外:ヘラミガキ<br>内:板ナデ, 粘土接合痕 | <底部>灰オリーブ(5Y5/3)<br><胴部>にぶい黄褐(10YR5/3)<br>生駒西麓産 |
| 463 | 68 | 34 | 弥生土器<br>把手付鉢 | 06－2 | 12層 | B208土器 | 弥生Ⅳ－1か | 口縁:16.6(完)<br>現高:6.8 | 外:刻目, 列点文, ヘラミガキ<br>内:ヘラミガキ<br>外, 内:スス付着, 把手はヘラミガキで取り付け | にぶい橙(7.5YR7/4),<br>黒(7.5YR1.7/1)<br>生駒西麓産 |
| 464 | 68 | 35 | 石製品<br>サヌカイト片 | 06－2 | 12層 | | | 長:3.45　幅:3.65<br>厚:1.2　重さ:11.4g | 上面自然面あり, 全体に白く風化 | |
| 465 | 68 | 35 | 石製品<br>サヌカイト片 | 06－2 | 12ｂ面 | | | 長:3.15　幅:2.48<br>厚:1.26　重さ:7.8g | A面:叩き痕あり | |
| 466 | 68 | | 弥生土器<br>甕蓋 | 06－2 | 12層? | | 弥生中期 | 頂径:5.2(完)<br>現高:5.3 | 外:ナデ, 指ナデ, 爪痕かヘラ痕<br>内:ナデ内外面スス・コゲ付着 | 褐灰(10YR5/1)<br>生駒西麓産 |
| 467 | 68 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 12ｂ面 | B255溝 | 弥生Ⅱか | 現高:3.5 | 外:ヨコナデ, 沈線?, ハケメ?, 薄くスス付着<br>内:ヨコナデ, ヘラミガキ? | 褐灰(10YR4/1)<br>雲母 |
| 468 | 68 | 34 | 石製品<br>石庖丁 | 06－2 | 12ｂ層 | | | 長:4.4　幅:2.1<br>厚:0.35 | 緑泥石片岩<br>Ⅰ類外湾刃半月形か<br>A, B:研磨痕 | |
| 469 | 87 | | 弥生土器<br>壺 | 02－1 | 13面 | A634微高地 | 弥生Ⅰ | 底径:6.6(2/3)<br>現高:3.3 | 外:接合面剥離, ヘラナデ, ナデ, 底面ヘラケズリ, 黒色物質塗布(底部も)　内:ヘラミガキ | 黒褐(10YR3/1)<br>生駒西麓産 |
| 470 | 87 | 35 | 弥生土器<br>鉢 | 02－1 | 13ｂ層 | | 弥生Ⅰ | 口径:15.3(1/4)<br>底径:7.0～7.4(一部欠)<br>現高:12.1～13.5 | 外:把手残存1, 二次焼成で剥離と赤色化<br>内:板ナデ, 工具痕, 内底面指押え, コゲ付着 | にぶい黄橙(10YR7/2)<br>石英, 長石, チャート |
| 471 | 87 | | 弥生土器<br>壺 | 06－2 | 13面 | B267流路内砂 | 弥生Ⅰ－2か | 口径:16.4(1/2)<br>現高:8.8 | 外:ヘラミガキ(摩滅の為不明瞭), 粘土接合痕, 削り出し凸帯<br>内:ヘラミガキ(摩滅の為不明瞭) | 黄褐(2.5Y5/3)<br>生駒西麓産 |
| 472 | 87 | | 弥生土器<br>壺 | 06－2 | 13面 | B267流路<br>265土器 | 弥生Ⅰ－3か | 口径:15.8(5/8)<br>現高:9.6 | 外:穿孔2(焼成前内から穿孔), 削り出し凸帯上沈線文2条, ナデ後ヘラミガキ　内:ヨコヘラミガキ, 指押えナデ? | 暗灰黄(2.5Y5/2)<br>生駒西麓産 |
| 473 | 87 | | 弥生土器<br>壺 | 06－2 | 13面 | B267流路内砂 | 弥生Ⅱ－3か | 口径:22.8(1/7)<br>現高:1.5 | 外:刻目, 櫛描波状文(4条), ヨコナデ　内:ヘラミガキ(細い) | 黄褐(2.5Y5/3)<br>生駒西麓産 |
| 474 | 87 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 13面 | B267流路 | 弥生Ⅰ－3～4 | 口径:28.3(1/20)<br>現高:10.0 | 外:刻目, 沈線文3条, ナデ, 薄くスス付着　内:ヨコナデ, ヘラミガキ?, 指ナデ, 工具痕あり | 黒褐(2.5Y3/2)<br>生駒西麓産 |
| 475 | 87 | | 弥生土器<br>鉢 | 06－2 | 13面 | B267流路 | 弥生Ⅰ－4 | 口径:23.0(1/12)<br>現高:4.9 | 外:指押え後ヨコナデ, ハケメ<br>内:ヨコナデ一部ハケメ, 指押えナデ | にぶい黄褐(10YR5/4)<br>生駒西麓産 |
| 476 | 87 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 13面 | B267流路内<br>(12ｂ層下部) | 弥生Ⅱ－1か | 現高:5.5 | 外:ヨコナデ, ナデ, スス付着<br>内:ヨコナデ, 指押えナデ全体に一部分ヘラミガキ? | 黄灰(2.5Y4/1)<br>生駒西麓産 |
| 477 | 87 | | 弥生土器<br>甕蓋 | 06－2 | 13面 | B267流路内<br>268<br>土器 | 弥生Ⅰ | 頂径:5.8(完)<br>現高:10.9 | 外, 内:ヘラミガキ, ナデ薄くスス・コゲ付着 | 明赤褐(5YR5/6)<br>石英, チャート, 長石 |
| 478 | 87 | | 弥生土器<br>壺 | 06－2 | 13面 | B287土坑 | 弥生Ⅰ | 口径:26(1/14)<br>現高:3.0 | 外, 内:ヘラミガキ, 黒色物質塗布, 粘土接合痕 | 暗灰黄(2.5Y4/2)<br>生駒西麓産 |
| 479 | 87 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 13面 | B287土坑 | 弥生Ⅰ－4か | 現高:6.8 | 外, 内:摩滅の為調整不明 | 褐(7.5YR4/6)<br>生駒西麓産 |
| 480 | 87 | 35 | 弥生土器<br>鉢 | 06－2 | 13面 | B266土坑 | 弥生Ⅱ－1か | 口径:20.0(1/4) | 外:ヨコナデ, 直線文(4条)3帯, 波状文(2条)<br>内:ハケメ, 板ナデ, ナデ, 粘土接合痕 | にぶい黄(2.5Y6/3),<br>黒(2.5Y2/1), 石英, 長石, チャート |
| 481 | 87 | 36 | 石製品<br>石庖丁 | 06－2 | 13面 | B287土坑 | | 長:5.6　幅:9.2<br>厚:0.8　孔径:0.9 | 緑泥石片岩<br>Ⅱ類直線刃半月形　A, B:背潰れ痕, 敲打痕, 研磨痕 | |
| 482 | 87 | | 弥生土器<br>底部 | 06－2 | 13層 | | 弥生Ⅰか | 底径:6.8(1/6)<br>現高:5.9 | 外:ヘラミガキ?<br>内:摩滅の為調整不明 | にぶい黄褐(10YR5/3), 石英, 長石, 雲母, チャート |
| 483 | 87 | 36 | 石製品<br>サヌカイトチップ | 06－2 | 13層 | | | 長:2.21　幅:0.9<br>厚:0.38　重さ:0.9g | A面:自然面 | |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(㎝)<br>( )は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 484 | 87 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 13 b面 | B340土坑 | 弥生Ⅰか | 底径:7.3～7.5(完)<br>現高:7.6 | 外:ハケメ(粗,細あり)後ヘラミガキ,スス付着　内:粗いハケメ後ヘラミガキ,一部コゲ付着 | 黄褐(2.5Y5/3)<br>生駒西麓産 |
| 485 | 87 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 13 b面 | B349ピット | 弥生Ⅱ－1か | <口縁部><br>口径:18.0(1/6)<br>現高:3.5<br><底部>底径:7.3～7.5(一部欠)<br>現高:13.1 | <口縁部>外:ヨコナデ,ハケメ後ヘラミガキ　内:ヨコナデ,ナデ　内,外:コゲ,スス付着<br><底部>外:ヘラミガキ,工具痕,スス付着　内:ナデ後ヘラミガキ,ナデ | <口縁部><br>黒褐(10YR3/2)<br>生駒西麓産?<br><底部><br>生駒西麓産 |
| 486 | 87 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 13 b面 | B367土坑 | 弥生Ⅰ | 底径:6.0(1/8)<br>現高:8.1 | 外,内:荒れの為調整不明<br>外:一部スス付着,粘土接合痕<br>内:薄くコゲ付着 | にぶい橙<br>(7.5YR6/4),石英,長石,チャート |
| 487 | 87 | 36 | 石製品<br>サヌカイト片 | 06－2 | 13 b面 | B374土坑 | | 長:3.70　幅:4.26<br>厚:0.8　重さ:12.5g | A面:自然面あり | |
| 488 | 87 | 36 | 石製品<br>サヌカイト片 | 06－2 | 13 b面 | B374土坑 | | 長:3.04　幅:1.84<br>厚:0.19　重さ:1.0g | | |
| 489 | 87 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 13 b面 | B380土坑 | 弥生Ⅱ | <口縁部><br>口径:18.2(5/12)<br>現高:10.3<br><底部>底径:5.6(完)<br>現高:5.5 | <口縁部>外:ヨコナデ,ナデ,粘土接合痕,スス付着　内:指押さえ後ハケメ,一部コゲ付着<br><底部>外:ヘラナデ?,スス付着<br>内:ヘラミガキ? | <口縁部><br>黒褐(10YR3/1)<br><底部><br>にぶい橙(5YR6/3)<br>生駒西麓産 |
| 490 | 88 | 36 | 弥生土器<br>壺 | 06－2 | 13 b面 | B401ピット | 弥生Ⅰ－4 | 底部:7.2(完)<br>現高:23.7 | 外:ハケメ後ヨコヘラミガキ,ヨコハケメ後一部ヨコヘラミガキ,沈線文6条,ヨコヘラミガキ,沈線文6条,ヨコハケメ後ヘラミガキ,ナデ?,黒色物質塗布か<br>内:ハケメ,ヘラミガキ,指押え,ナデ?,板ナデ? | 灰黄褐(10YR6/2)<br>石英,長石,チャート |
| 491 | 88 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 13 b面 | B427土坑 | 弥生Ⅰ－4か | 現高:3.8 | 外:刻目,ハケメ後ナデ,ハケメ後ヘラミガキ,スス付着　内:ヨコナデ,ナデ後一部ヘラミガキ | 黒褐(10YR3/1)<br>生駒西麓産 |
| 492 | 88 | 37 | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 13 b面 | B428土坑 | 弥生Ⅱ－1か | 口径:16.0(若干のみ)<br>底径:5.8～5.9(完)<br>器高:21.0 | 外:ナデ,板ナデ後ヘラミガキ,スス付着　内:ヨコナデ,板ナデ後ハケメ・ヘラミガキ,ナデ,工具痕,コゲ付着 | 黄褐(2.5Y5/3)<br>生駒西麓産 |
| 493 | 88 | 38 | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 13 b面 | B428土坑周辺 | 長原式 | 不明 | 体部片<br>外:D字刻目凸帯,摩滅<br>内:摩滅 | にぶい黄橙<br>(10YR6/4)<br>生駒西麓産 |
| 494 | 88 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 13 b層 | | 弥生Ⅰ－4かⅡ－1か | 口径:20.4(1/3)<br>現高:13.7 | 外:ヨコナデ,ハケメ,スス付着<br>内:ヨコナデ,指押えナデ一部ハケメ,ヘラミガキ? | 明褐(7.5YR5/6),<br>黒褐(7.5YR3/2)<br>生駒西麓産 |
| 495 | 88 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 13 b層 | | 弥生Ⅱか | 底径:6.0(1/4)<br>現高:7.0 | 外:板ナデ,ヘラナデ,ナデ<br>内:摩滅,コゲ付着 | 明黄褐(10YR6/6)<br>生駒西麓産 |
| 496 | 88 | 36 | 弥生土器<br>脚付鉢? | 06－2 | 13 b層 | | 弥生Ⅱか | 底径:5.4～5.6(端部1/3)<br>現高:9.3 | 外:櫛描直線文(6条1帯)5帯,ヨコナデ,ハケメ,ナデ<br>内:ハケメ,ナデ,剥離の為不明 | にぶい橙<br>(7.5YR7/4)<br>石英,長石,赤色粒 |
| 497 | 88 | 36 | 土製品<br>紡錘車 | 06－2 | 13 b層 | | | 径:5.3×5.1<br>厚:1.41　孔径:0.54<br>重さ:50.1 g | 孔:焼成前上から下に穿孔 | 灰黄(2.5Y7/2),<br>にぶい橙<br>(7.5YR7/4)<br>石英,チャート,雲母,長石 |
| 498 | 102 | | 弥生土器<br>壺 | 02－1 | 14－2<br>面精査 | | 弥生Ⅰか | 底径:6.2～6.5(完)<br>現高:5.8 | 外:ナデ,工具痕,底面ヘラミガキ?<br>内:指ナデ | にぶい黄褐<br>(10YR4/3)<br>生駒西麓産 |
| 499 | 102 | | 弥生土器<br>壺 | 02－1 | 14－2<br>面(14－1 b層) | | 弥生Ⅰ－3～4 | 底径:6.7～7.0(完)<br>現高:9.2 | 外:ナデ,ヘラミガキ,ナデ,底面ゆるい凹み　内:ヘラミガキ,ナデ,コゲ?付着 | 灰黄褐(10YR5/2)<br>生駒西麓産 |
| 500 | 102 | | 弥生土器<br>壺 | 02－1 | 14－2<br>面 | A680微高地 | 弥生Ⅰ | 底径:8.5～8.7(完)<br>最大幅:29.3<br>現高:15.4 | 外:ヨコヘラミガキ,工具痕,粘土接合痕,底面ヘラミガキ?<br>内:板ナデ後一部ヘラミガキ | 灰褐(7.5YR4/2)<br>生駒西麓産 |
| 501 | 102 | | 弥生土器<br>大型壺 | 02－1 | 14－2<br>面直上 | | 弥生Ⅰ | 底径:13.5～13.7(完)　現高:8.5 | 外:ナデ後ヨコヘラミガキ,粘土接合痕,底面ヘラケズリ<br>内:ナデ後粗いヘラミガキ,粘土接合痕,密なヘラミガキ,底面ヘラミガキ | にぶい黄橙<br>(10YR6/3)<br>生駒西麓産 |
| 502 | 102 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 14－2<br>面 | | 弥生Ⅰ－3か | 口径:30.6(1/6)<br>現高:11.6 | 外:刻目,ナデ,板ナデ後沈線文3条,一部ハケメ,スス付着<br>内:ヨコナデ,指押え後板ナデ?,コゲ付着 | 灰黄(2.5Y6/2)<br>生駒西麓産 |
| 503 | 102 | | 弥生土器<br>鉢 | 02－1 | 14－2<br>面 | A680微高地 | 弥生Ⅰ | 口径:17.8(1/3)<br>底径:6.6～6.8(完)<br>現高:11.5～12.3 | 外:ナデ,ヘラミガキ,底面ヘラミガキ<br>内:ヘラミガキ | 褐灰(7.5YR5/1)<br>生駒西麓産 |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(㎝)<br>(　)は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 504 | 102 | | 縄文土器<br>深鉢 | 02－1 | 14－2<br>面 | A680 微<br>高地 | 長原式 | 不明 | 体部<br>外:ナデ,小D字刻目凸帯,ヘラケズリ,スス付着?　内:摩滅 | 灰黄褐(10YR4/2)<br>生駒西麓産 |
| 505 | 102 | | 縄文土器<br>底部 | 02－1 | 14－2<br>面 | | 晩期 | 底径:6.8～6.9(完)<br>現高:2.9 | 外:ヘラケズリ,ヨコナデ,底面未調整<br>内:指押えナデ | にぶい褐<br>(7.5YR5/4)<br>生駒西麓産 |
| 506 | 102 | 37 | 石製品<br>石鏃 | 02－1 | 14－2<br>面直上 | | | 現長:4.24 現幅:1.92<br>現厚:0.33 重さ:1.9g | サヌカイト<br>凹基式 | |
| 507 | 102 | 37 | 石製品<br>石核 | 02－1 | 14－2<br>面 | | | 長:5.11　幅:2.97<br>厚:2.29 重さ:51.6g | サヌカイト<br>B面の中心に石粒あり | |
| 508 | 102 | 38 | 骨製品<br>牙製垂飾 | 02－1 | 14－2<br>面直上 | | | 現長:11.0 現幅:1.78<br>現厚:0.34<br>孔径:0.34～0.38 | イノシシの牙<br>穿孔2個1対で2対残(両面から穿孔と内面から穿孔あり),全体に擦って加工 | |
| 509 | 102 | 37 | 弥生土器<br>壺 | 02－1 | 14－2<br>面 | A677 土<br>坑 | 弥生Ⅰ-2か | 口径:12.4(2/3)<br>底径:8.8～9.4(完)<br>現高:20.7＋α | 図上復元<br>外:ヨコナデ,指押えナデ後一部ヘラミガキ,ヘラミガキ,一部板ナデ後ヘラミガキ,沈線文2条,タテヘラミガキ後ヨコヘラミガキ、指押え,底面ヘラケズリ<br>内:ヨコヘラミガキ,板ナデ?,ナデ,指押え,工具痕,ナデ | 灰黄褐(10YR6/2)<br>生駒西麓産 |
| 510 | 102 | 37 | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 14－2<br>面 | A678 土<br>坑 | 弥生Ⅰ-3か | 口径:19.9(1/2)<br>底径:7.3(完)<br>現高:24.6 | 外:刻目,ヨコハケメ?,ハケメ,摩滅により調整不明,ナデ?,スス付着　内:ヨコナデ,ハケメ?,板ナデ,指押え,ナデ,コゲ付着 | にぶい橙<br>(7.5YR7/4)<br>石英,長石,雲母 |
| 511 | 103 | 36 | 弥生土器<br>壺 | 02－1 | 14－2<br>面 | A680 微<br>高地 | 弥生Ⅰ-2～3か | 口径:12.5(3/4)<br>底径:7.7～8.4(完)<br>現高:22.3 | 外:ヨコナデ後工具痕,ヘラミガキ,沈線文2条,タテヘラミガキ,沈線文2条,ヨコヘラミガキ,指押え,黒色物質塗布一部赤彩<br>内:ナデ後ヘラミガキ | 灰黄褐(10YR6/2)<br>生駒西麓産 |
| 512 | 103 | 36 | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 14－2<br>面 | A680 微<br>高地 | 弥生Ⅰ-3か | 口径:21.9(2/3)<br>底径:6.5～6.6(完)<br>現高:26.3 | 外:刻目,ヨコナデ,指押え,工具痕,板ナデ,ヘラミガキ,底面ヘラケズリ,スス付着<br>内:ヨコナデ,ナデ,一部板ナデ,指押え,工具痕,コゲ付着 | にぶい黄橙<br>(10YR6/4),<br>褐灰(10YR4/1),<br>赤褐(5YR4/8)<br>生駒西麓産 |
| 513 | 103 | | 弥生土器<br>甕 | 02－1 | 14－2<br>面 | A680 微<br>高地 | 弥生Ⅰ-4か | 底径:8.4～8.8(一部欠)<br>現高:17.6 | 外:表面剥離,タテハケメ,部分的にスス付着,底面未調整一部ナデ　内:板ナデ,指押え,ナデ,コゲ付着 | 灰黄褐(10YR4/2)<br>生駒西麓産? |
| 514 | 103 | 38 | 縄文土器<br>深鉢 | 02－1 | 14－2<br>層 | | 宮滝式後期 | 現高:5.2 | 外:凹線文(1,2条) | 褐(10YR4/4)<br>生駒西麓産 |
| 515 | 103 | 38 | 縄文土器<br>深鉢 | 02－1 | 14－2<br>b面 | | 宮滝式後期 | 口径:33.4(1/9)<br>現高:4.9 | 外:摩滅,凹線文(1,2条)<br>内:指押えナデ,工具によるナデ | にぶい黄褐<br>(10YR5/3)<br>生駒西麓産 |
| 516 | 103 | 38 | 縄文土器<br>深鉢 | 02－1 | 14－2<br>層 | | 滋賀里Ⅲb式か | 現高:6.4 | 外:ヨコナデ,ヘラミガキ<br>内:ヘラミガキ(摩滅) | 黒褐(10YR3/2)<br>生駒西麓産 |
| 517 | 103 | 38 | 縄文土器<br>深鉢 | 02－1 | 14－2<br>層 | | 縄文晩期か | 現高：3.9 | 外:ナデ?<br>内:摩滅 | にぶい黄褐<br>(10YR5/3)<br>生駒西麓産 |
| 518 | 103 | 38 | 縄文土器<br>深鉢 | 02－1 | 14－2<br>b面 | | 縄文晩期か | 現高:5.5 | 外:ナデ?,粘土接合痕,ヨコ・ナナメヘラケズリ　内:摩滅 | 灰黄褐(10YR4/2)<br>生駒西麓産 |
| 519 | 103 | 37 | 石製品<br>サヌカイトチップ | 02－1 | 14－2<br>層 | | | 長:1.74　幅:2.71<br>厚:0.18 重さ:0.8g | | |
| 520 | 103 | | 弥生土器<br>底部 | 02－1 | 14－2<br>b層 | | 弥生Ⅰ | 底径:5.9～6.1(完)<br>現高:3.7 | 外:摩滅,スス付着<br>内:指押えナデ | 灰白(7.5Y7/1),石英,長石,チャート |
| 521 | 103 | 39 | 縄文土器<br>深鉢 | 02－1 | 15面 上<br>層中 | | 元住吉山Ⅰ式 | 口径:33.3(1/3)<br>現高:18.5 | 外:ヘラミガキ,沈線文2条間縄文2帯,一ヶ所穿孔あり,スス付着　内:刻目,板状ナデ後ヘラミガキ,一部コゲ付着 | 褐灰(10YR5/1)<br>石英,長石,チャート |
| 522 | 103 | 39 | 縄文土器<br>深鉢 | 02－1 | 15面 | | 元住吉山Ⅰ式か | 口径:15.6(1/5)<br>底径:9.0～9.3(完)<br>現高:21.6 | 外:条痕?,ナデ後工具痕,スス付着<br>内:板ナデ?,ナデ | 暗灰黄(2.5Y4/2)<br>石英,長石,チャート |
| 523 | 103 | 37 | 石製品<br>石鏃 | 02－1 | 15面 | | | 現長:2.5 現幅:1.22<br>現厚:2.3 重さ:0.6g | サヌカイト<br>凹基式,B面大剥離面残る | |
| 524 | 103 | | 縄文土器<br>底部 | 02－1 | 15 層以<br>下 | | 滋賀里Ⅲb式か | 底径:2.0(1/4) | 外:条痕?,ナデ,条痕?,凹み底<br>内:摩滅 | 灰オリーブ(5Y5/2)<br>石英,長石 |
| 525 | 103 | 37 | 石製品<br>サヌカイトチップ | 02－1 | 15 b層 | | | 長:2.53　幅:1.75<br>厚:0.43 重さ:2.3g | 表面風化著しい | |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(cm)<br>( )は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 526 | 104 | | 弥生土器<br>壺 | 06－2 | 14－1<br>層 | | 弥生Ⅰ-2～3 | 不明 | 体部片<br>外:削り出し凸帯上沈線文1条<br>内:ヘラミガキ,黒色物質塗布か | にぶい褐<br>(7.5YR5/3)<br>生駒西麓産 |
| 527 | 104 | | 弥生土器<br>底部 | 06－2 | 14－1<br>層 | | 弥生Ⅰ | 底径:7.9(1/4)<br>現高:1.8 | 外:ヘラミガキ,底面ヘラ記号<br>内:ナデ,工具痕? | にぶい黄褐<br>(10YR5/3)<br>生駒西麓産 |
| 528 | 104 | | 弥生土器<br>壺蓋 | 06－2 | 14－1<br>層 | | 弥生Ⅰ | 口径:14.2(1/4)<br>現高:2.6 | 内,外:黒色物質塗布<br>外:ヘラミガキ,穿孔2個1対<br>内:指押さえ後ヘラミガキ | オリーブ褐<br>(2.5Y4/3)<br>生駒西麓産 |
| 529 | 104 | | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 14－1<br>層 | | 晩期 | 現高:3.75 | 外:ヨコ・タテヘラケズリ<br>内:ナデ? | にぶい黄褐<br>(10YR5/4)<br>生駒西麓産 |
| 530 | 104 | | 縄文土器<br>鉢か浅鉢 | 06－2 | 14－1<br>層 | | 晩期後半 | 現高:5.5 | 外:ナデ?,ヨコヘラケズリ<br>内:ヨコナデ,一部ヘラミガキ?,ナデ | オリーブ褐<br>(2.5Y4/3)<br>生駒西麓産 |
| 531 | 104 | | 縄文土器<br>深鉢? | 06－2 | 14－1<br>層 | | ? | 現高:3.1 | 外,内:ナデ? | 黄褐(2.5Y5/3)<br>生駒西麓産 |
| 532 | 104 | 38 | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 14－1<br>層 | | 長原式 | 現高:3.1 | 外:D字刻目凸帯,ナデ<br>内:ナデ | 灰褐(7.5YR5/2)<br>生駒西麓産 |
| 533 | 104 | | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 14－1<br>層 | | 長原式 | 不明 | 体部片<br>外:D字刻目凸帯 | 黄褐(2.5Y5/3)<br>生駒西麓産 |
| 534 | 104 | 38 | 縄文土器<br>壺 | 06－2 | 14－1<br>層 | | 長原式 | 口径:17.6(1/10)<br>現高:4.2 | 外:凸帯,ヘラミガキ?<br>内:凹線?,ヘラミガキ? | 黄褐(2.5Y5/3)<br>生駒西麓産 |
| 535 | 104 | | 縄文土器<br>底部 | 06－2 | 14－1<br>層 | | 晩期 | 底径:5.8～6.0(完)<br>現高:2.0 | 外:ヘラケズリ,ナデ<br>内:工具痕?,ナデ | にぶい黄褐<br>(10YR5/4)<br>生駒西麓産 |
| 536 | 104 | 37 | 石製品<br>石鏃 | 06－2 | 14－1<br>層 | | | 現長:2.34　現幅:1.56<br>現厚:0.31 重さ:1.0g | サヌカイト<br>凹基式 | |
| 537 | 104 | | 弥生土器<br>壺 | 06－2 | 14－2<br>面 | | 弥生Ⅰ-2 | 不明 | 体部片<br>外:段上沈線文1条,ヨコヘラミガキ　内:摩滅 | にぶい黄橙<br>(10YR7/4),にぶい黄褐(10YR5/4)<br>生駒西麓産 |
| 538 | 104 | | 弥生土器<br>壺 | 06－2 | 14－2<br>面 | | 弥生Ⅰ-2～3 | 不明 | 体部片<br>外:削出し凸帯上沈線文1条,ナデ後ヘラミガキ,黒色物塗布<br>内:ナデ後ヨコヘラミガキ | 褐灰(10YR4/1)<br>生駒西麓産 |
| 539 | 104 | 38 | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 14－2<br>面 | | 長原式 | 現高:5.4 | 外:ヨコナデ,D字刻目凸帯,ナデ,薄くスス付着　内:ナデ | 暗灰黄(2.5Y5/2)<br>生駒西麓産 |
| 540 | 104 | | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 14－2<br>面 | 水田耕作土 | 長原式 | 現高:1.4 | 外:ヨコナデ,小D字刻目凸帯,スス付着　内:ヨコナデ | 黄褐(2.5Y5/4)<br>生駒西麓産 |
| 541 | 104 | | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 14－2<br>面 | | 長原式 | 現高:2.6 | 外:凸帯,ヨコナデ,ヘラケズリ?<br>内:ヨコナデ,ナデ | にぶい黄橙<br>(10YR6/3)<br>生駒西麓産 |
| 542 | 104 | 38 | 縄文土器<br>壺 | 06－2 | 14－2<br>面 | | 長原式 | 器高:3.8 | 外,内:ヨコナデ,ナデ | 灰黄褐(10YR6/2)<br>生駒西麓産 |
| 543 | 104 | 38 | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 14－2<br>面 | | 水走タイプ | 現高:3.3 | 外:ヨコナデ,小D字刻目凸帯,一部条痕?<br>内:ヨコナデ,指押えナデ | 灰黄(2.5Y7/2),<br>黄灰(2.5Y4/1)<br>石英,長石 |
| 544 | 104 | 38 | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 14－2<br>面 | 水田耕作土 | 水走タイプ | 現高:6.0 | 外:ヨコナデ,O字刻目凸帯,薄くスス付着　内:ナデ | オリーブ黒(5Y3/1)<br>石英,長石 |
| 545 | 104 | | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 14－2<br>面 | | 長原式 | 不明 | 体部片<br>外:ナデ,小O字刻目凸帯<br>内:指押えナデ | にぶい黄橙<br>(10YR7/4)<br>生駒西麓産 |
| 546 | 104 | | 石製品<br>投弾? | 06－2 | 14－2<br>面 | | | 長:5.5　幅:3.3<br>厚:1.7　重さ:49.0g | 砂岩<br>自然石 | |
| 547 | 104 | | 石製品<br>投弾? | 06－2 | 14－2<br>面 | | | 長:5.4　幅:3.5<br>厚:2.2　重さ:58.8g | 砂岩<br>自然石 | |
| 548 | 104 | | 弥生土器<br>壺 | 06－2 | 14－2<br>面 | B421溝 | 弥生Ⅰ-2か | 不明 | 体部片<br>外:ヘラミガキ,段<br>内:ナデ一部ヘラミガキ? | 灰黄褐(10YR5/2)<br>生駒西麓産 |
| 549 | 104 | 38 | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 14－2<br>面 | B421溝 | 長原式 | 現高:3.4 | 外:小V字刻目凸帯,擦痕,スス付着　内:ナデ | 灰(5Y4/1)<br>生駒西麓産 |
| 550 | 104 | | 石製品<br>砥石? | 06－2 | 14－2<br>面 | B422溝 | | 現長:5.5　現幅:2.32<br>現厚:1.97 | 流紋岩質溶結凝灰岩<br>砥面1?擦痕? | |
| 551 | 104 | | 石製品<br>投弾? | 06－2 | 14－2<br>面 | B422溝 | | 長:3.86　幅:2.32<br>厚:1.97　重さ:25.8g | 砂岩<br>自然石 | |
| 552 | 104 | | 弥生土器<br>壺 | 06－2 | 14－2<br>面 | B442土器出土地点 | 弥生Ⅰ | 底径:10.0(1/6)<br>現高:6.7 | 外:ヘラミガキ,黒色物質塗布か<br>内:ナデ後ヘラミガキか | 黒(10YR2/1),<br>灰黄褐(10YR5/2)<br>生駒西麓産 |
| 553 | 104 | | 弥生土器<br>無頸壺 | 06－2 | 14－2<br>面 | B443土器出土地点 | 弥生Ⅰ-4か | 口径:12.0(1/5) | 外:ヘラミガキ(摩滅),穿孔(焼成前外から)2個1対で1対現存<br>内:ヘラミガキ | 褐灰(10YR4/1),にぶい褐(7.5YR6/3)<br>生駒西麓産 |

| 遺物番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(cm)<br>( )は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 554 | 104 | | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 14－2<br>面 | B422 溝 | 長原式 | 現高:2.1 | 底部外:ヘラケズリ<br>内:指押えナデ,コゲ付着 | 暗灰黄(2.5Y5/2)<br>生駒西麓産 |
| 555 | 104 | | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 14－2<br>面 | B422 溝 | 晩期 | 底径:5.2(完)<br>現高:2.5 | 底部外:ヘラケズリ,ナデ<br>内:指押えナデ | にぶい黄橙<br>(10YR7/3)<br>生駒西麓産 |
| 556 | 104 | | 木製品<br>杭 | 06－2 | 14－2<br>面 | B431 杭 | | 現長:20.2<br>径:3.2～3.3 | アカガシ亜属<br>先端断面位置で9面にカット | |
| 557 | 104 | | 木製品<br>杭 | 06－2 | 14－2<br>面 | B481 杭 | | 現長:32.3<br>径:3.4～3.5 | ヤナギ属<br>表面に部分的に薄皮あり,先端6面カット | |
| 558 | 104 | | 木製品<br>杭 | 06－2 | 14－2<br>面 | B483 杭 | | 現長:13.7<br>径:3.0～3.3 | ヤマグワ<br>外:裏面に節1がある,先端5面にカット | |
| 559 | 104 | | 木製品<br>杭 | 06－2 | 14－2<br>面 | B484 杭 | | 現長:31.3　径:3.6 | ヤマグワ<br>一部樹皮残存,先端3面にカット | |
| 560 | 105 | | 弥生土器<br>甕 | 06－2 | 14－2<br>面 | B440 溝 | 弥生Ⅱ-1か | 胴部径:22.0(1/5)<br>現高:13.8 | 外:ヨコナデ,工具痕,板ナデ?,スス付着　内:ヨコナデ,指押えナデ,板ナデ | 黒(5Y2/1)<br>生駒西麓産? |
| 561 | 105 | | 弥生土器<br>壺 | 06－2 | 14－2<br>面 | B475 ピット | 弥生Ⅱか | 頸部径:9.5(1/2) | 頸部<br>外:板ナデ<br>内:ナデ,指押えナデ | にぶい黄褐<br>(10YR5/4)<br>生駒西麓産? |
| 562 | 105 | | 弥生土器<br>壺 | 06－2 | 14－2・<br>14－2<br>b層 | | 弥生Ⅰ-2か | 口径:11.1(1/6)<br>現高:4.4 | 外:ヘラミガキ,沈線文<br>内:ヘラミガキ | 灰黄(2.5Y6/2)<br>生駒西麓産 |
| 563 | 105 | | 弥生土器<br>壺 | 06－2 | 14－2<br>層 | | 弥生Ⅰ | 不明 | 体部片<br>外:沈線文(2条＋α),ヨコヘラミガキ<br>内:指押えナデ後ヘラミガキ | にぶい黄橙<br>(10YR7/3)<br>生駒西麓産 |
| 564 | 105 | 38 | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 14－2<br>層 | | 長原式 | 凸帯下部径:<br>22.0(1/13)<br>現高:4.15 | 外:D字刻目凸帯,ヨコナデ,ナデ<br>内:指押えナデ | 灰黄褐(10YR5/2)<br>生駒西麓産 |
| 565 | 105 | 38 | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 14－2<br>層 | B422 溝 | 長原式 | 現高:6.6 | 外:ヨコナデ,小D字刻目凸帯,ナデ,スス付着　内:指押えナデ | 黒褐(2.5Y3/1)<br>生駒西麓産 |
| 566 | 105 | 38 | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 14－2<br>～14－<br>2b層 | | 長原式 | 不明 | 体部片<br>外:小D字刻目凸帯,ヘラケズリ<br>内:ナデ | 褐灰(5YR5/1)<br>生駒西麓産 |
| 567 | 105 | | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 14－2<br>層 | | 晩期 | 頸部内径:24.0(1/4) | 頸部<br>外:摩滅<br>内:ヘラミガキ?,摩滅 | 灰黄褐(10YR6/2),<br>にぶい黄橙<br>(10YR7/4)<br>生駒西麓産 |
| 568 | 105 | | 石製品<br>砥石? | 06－2 | 14－2<br>面 | | | 現長:8.6　現幅:6.7<br>現厚:1.8 | 砂岩<br>砥面1? | |
| 569 | 105 | | 石製品<br>凹み石 | 06－2 | 14－2<br>層 | | | 現長:10.1　現幅:6.5<br>現厚:2.7 | 緑泥石片岩<br>凹み | |
| 570 | 105 | 38 | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 14－2<br>b面 | B491 ピット | 長原式 | 最大胴部径:26.0(1/6)<br>現高:16.1 | 外:ヨコナデ,小D字刻目凸帯,ナデ,ヘラケズリ,スス付着<br>内:指押えナデ,板ナデ | 灰(5Y5/1),<br>オリーブ黒(5Y3/1)<br>生駒西麓産 |
| 571 | 105 | 38 | 縄文土器<br>深鉢 | 06－2 | 14－2<br>b層 | | 長原式 | 現高:4.9 | 外:ヨコナデ,D字刻目凸帯,ナデ,スス薄く付着<br>内:ヨコナデ,ナデ | 灰黄橙<br>(10YR4/2)<br>生駒西麓産 |

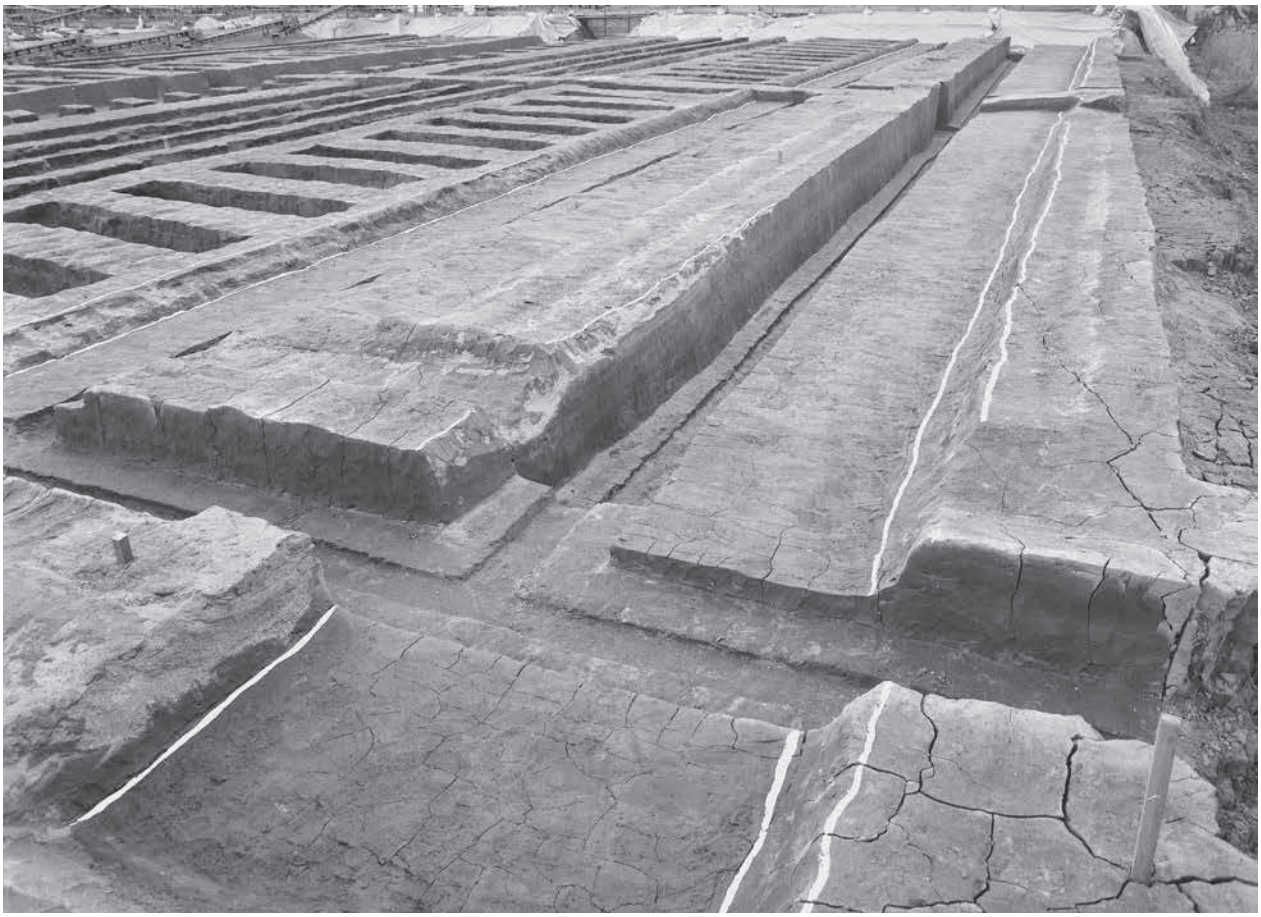
# 写　真　図　版

１　02－１調査区　第２－１面　北半　全景（北東から）

２　第２－１面　A57 水口（北から）

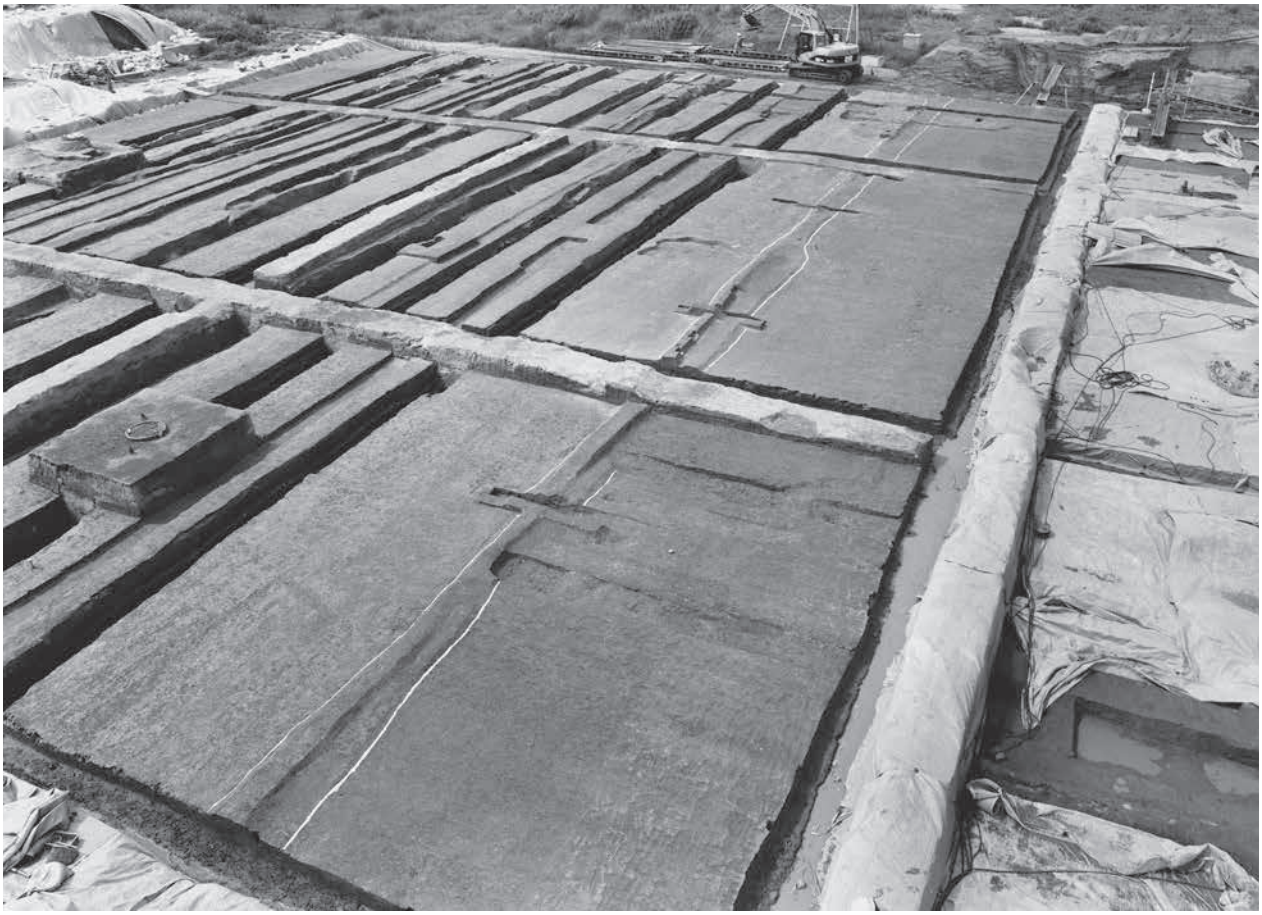
## 図版２　遺構

１　06－２調査区　第２－１面　西半　全景（北東から）



２　第２－１面　B1・B2 島畠と水田（北から）

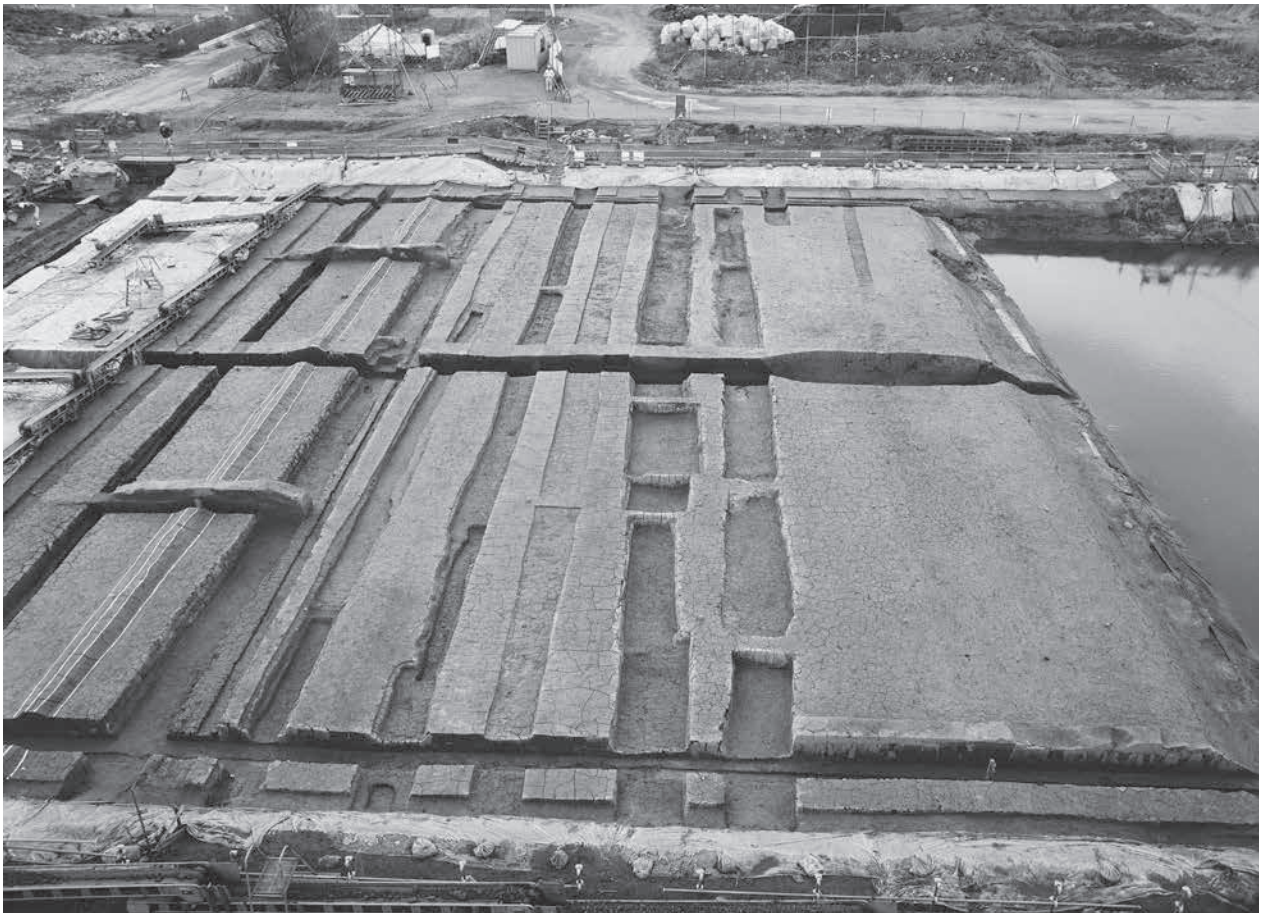
１　06－２調査区　第２－１面　東半　全景（北西から）



２　02－１調査区　第３－１面　南半　全景（北東から）

図版４　遺構

１　02－１調査区　第３－２面　北半　全景（北東から）



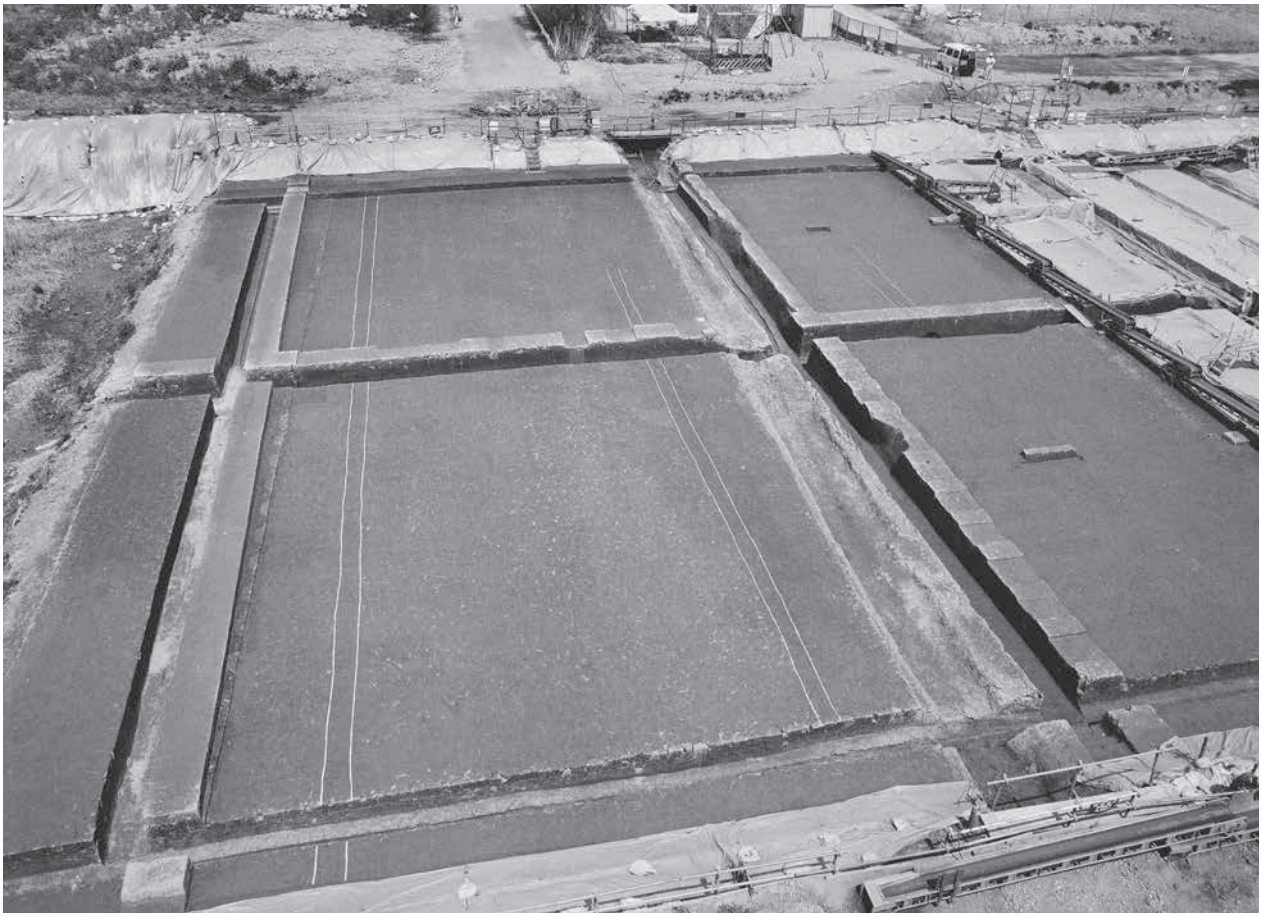
２　06－２調査区　第３－２面　東半　全景（南から）

１　第３－３面　A101 坪境（東から）

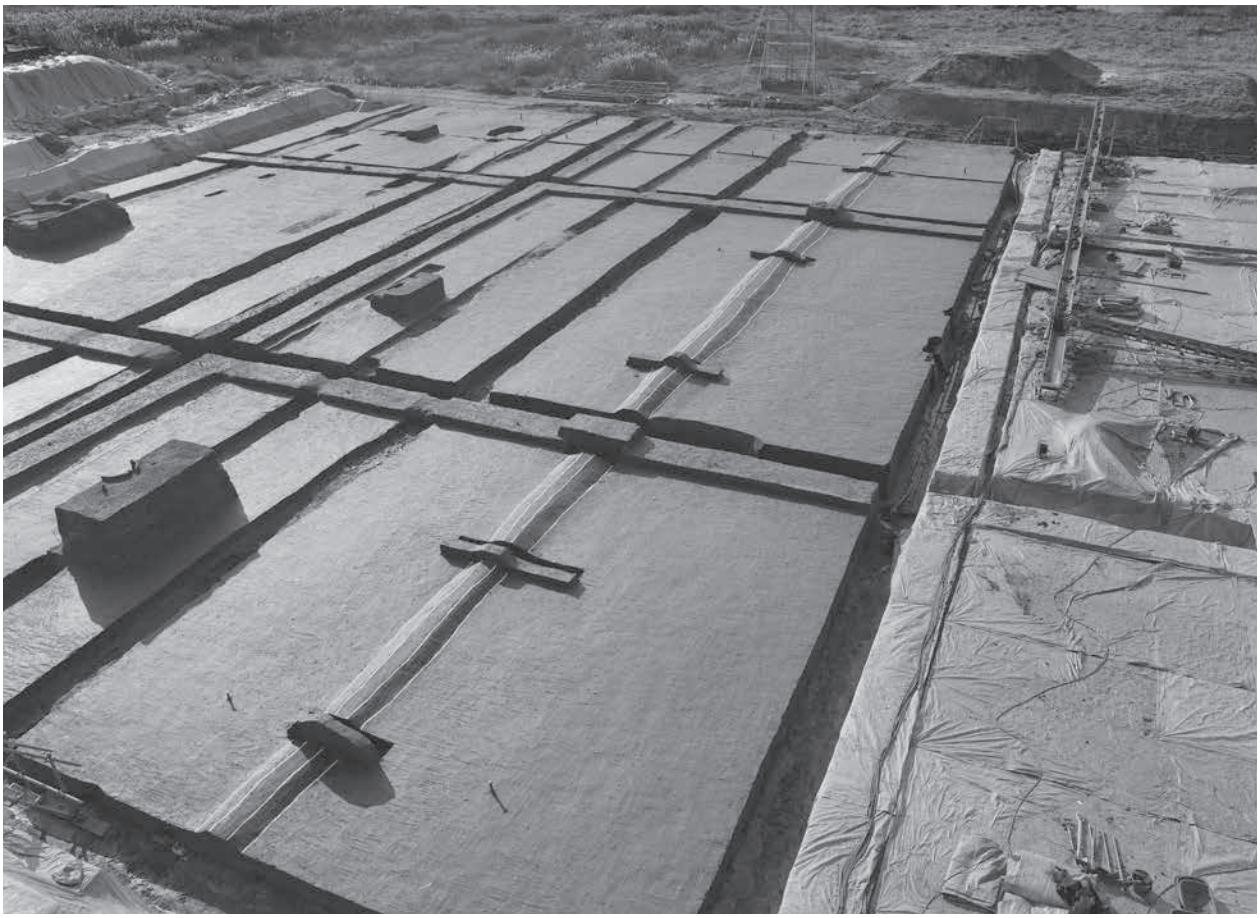
２　第３－３面　A105 畦畔（南から）

図版６　遺構

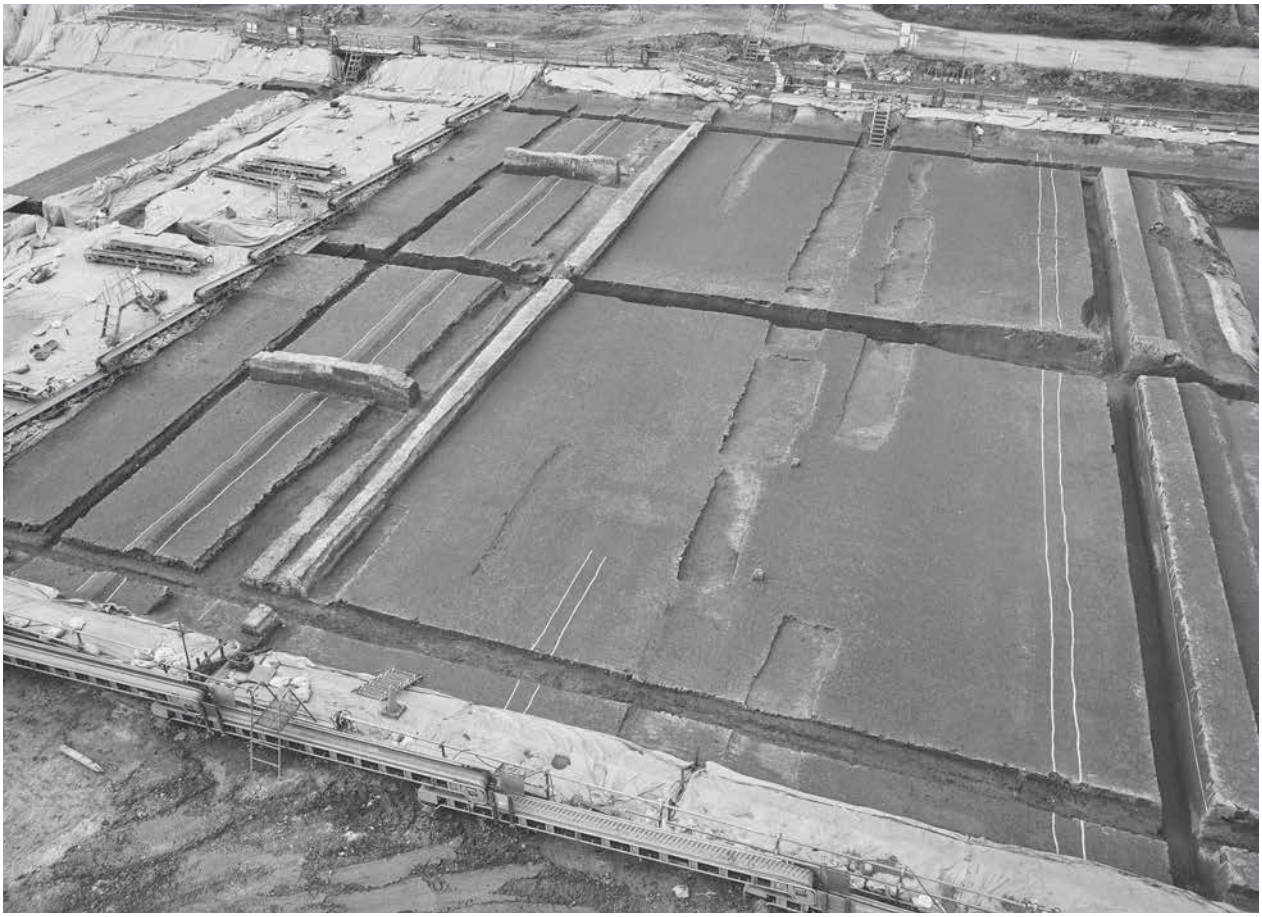
１　02－１調査区　第４面　北半　全景（西から）



２　06－２調査区　第４面　西半　全景（南から）

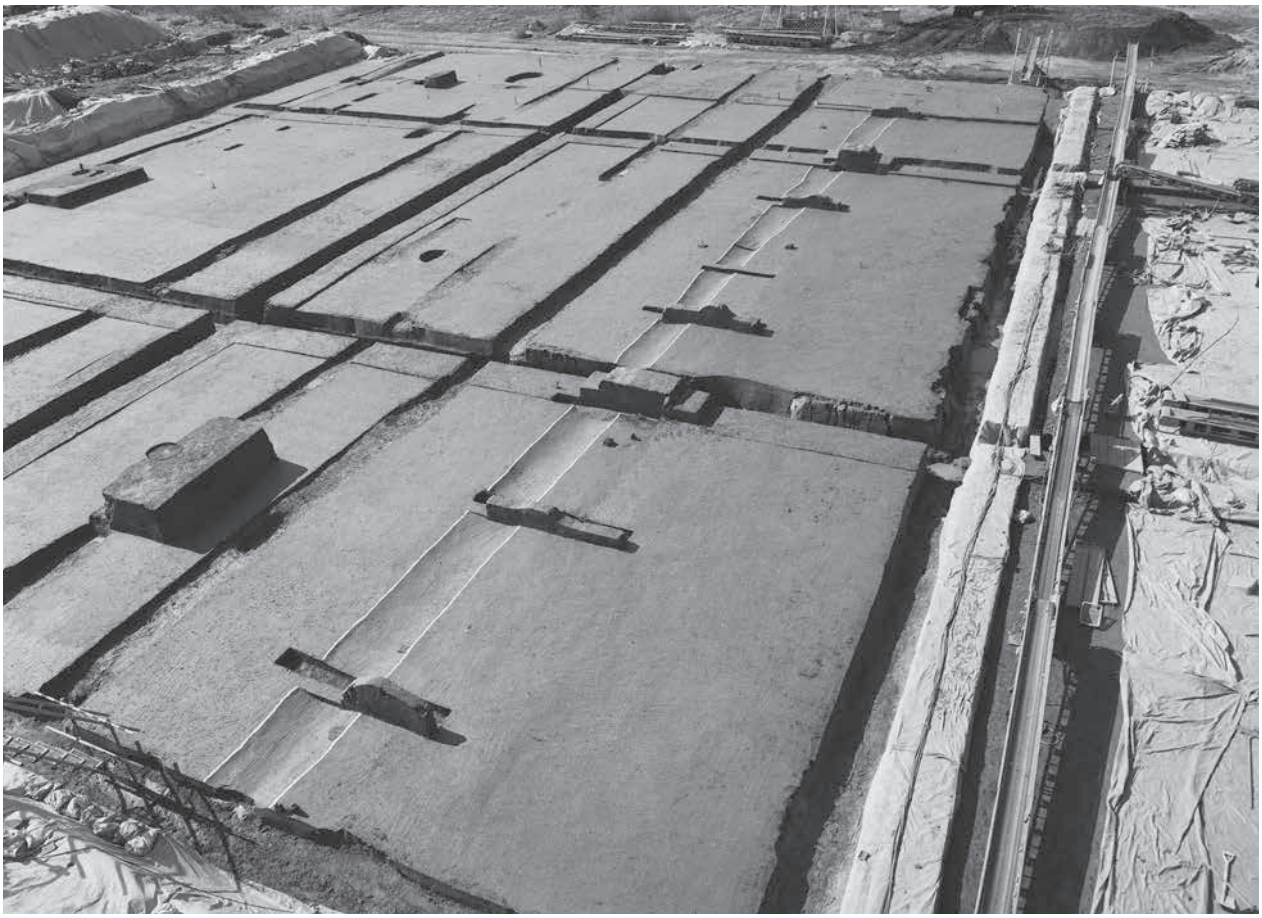


１　02－１調査区　第６面　南半　全景（北東から）

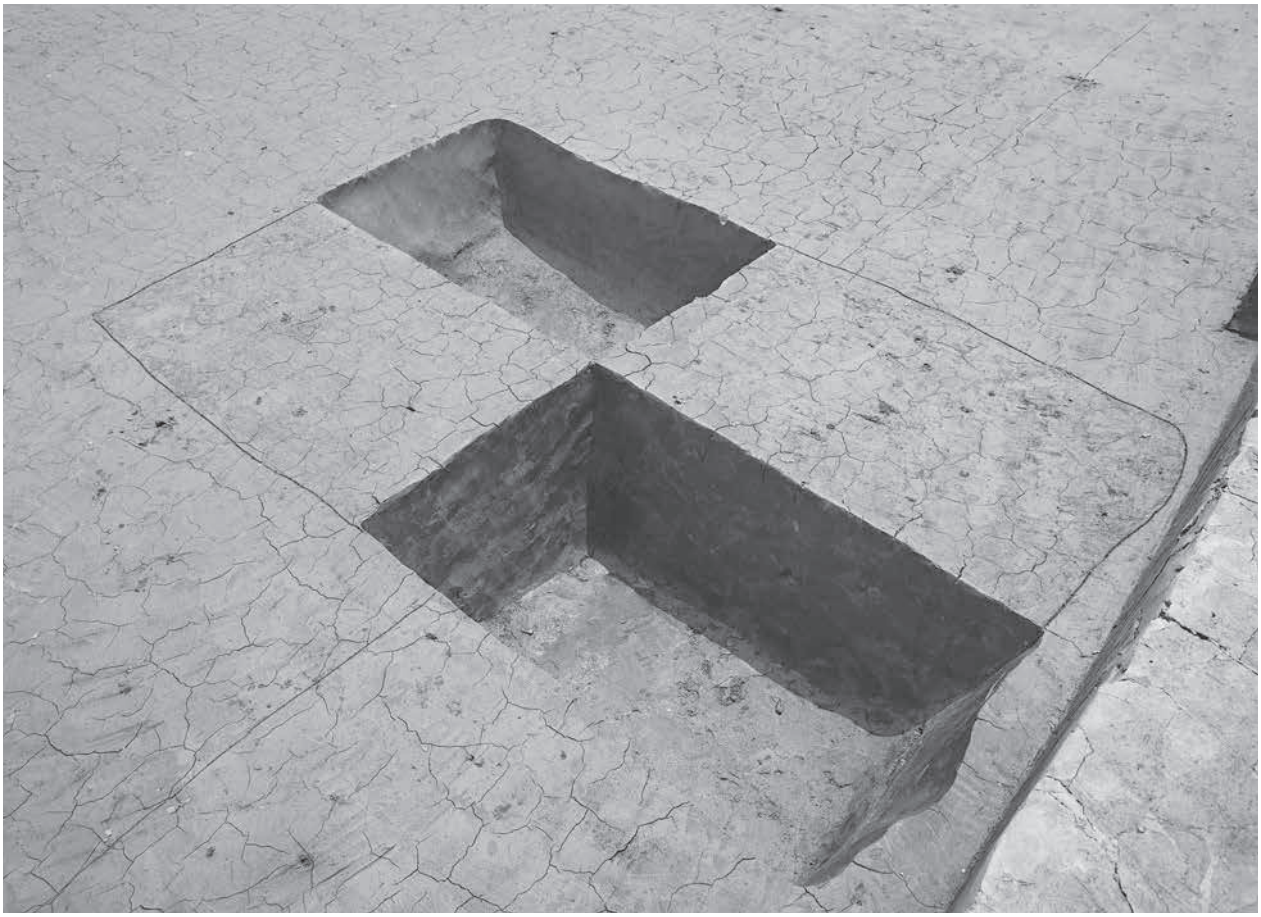


２　06－２調査区　第７面　東半　全景（南東から）

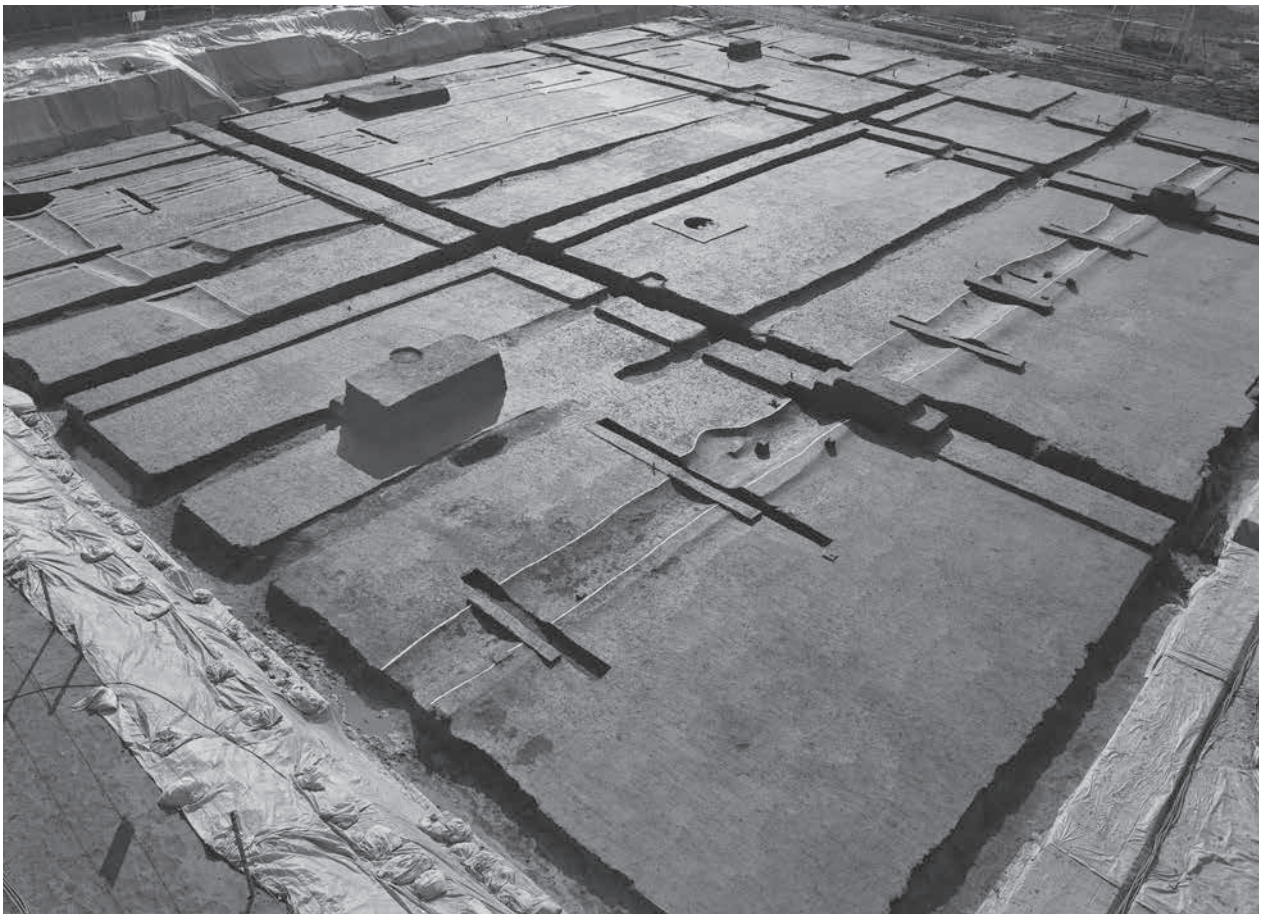
図版８　遺構



１　02－１調査区　第８面　南半　全景（北東から）



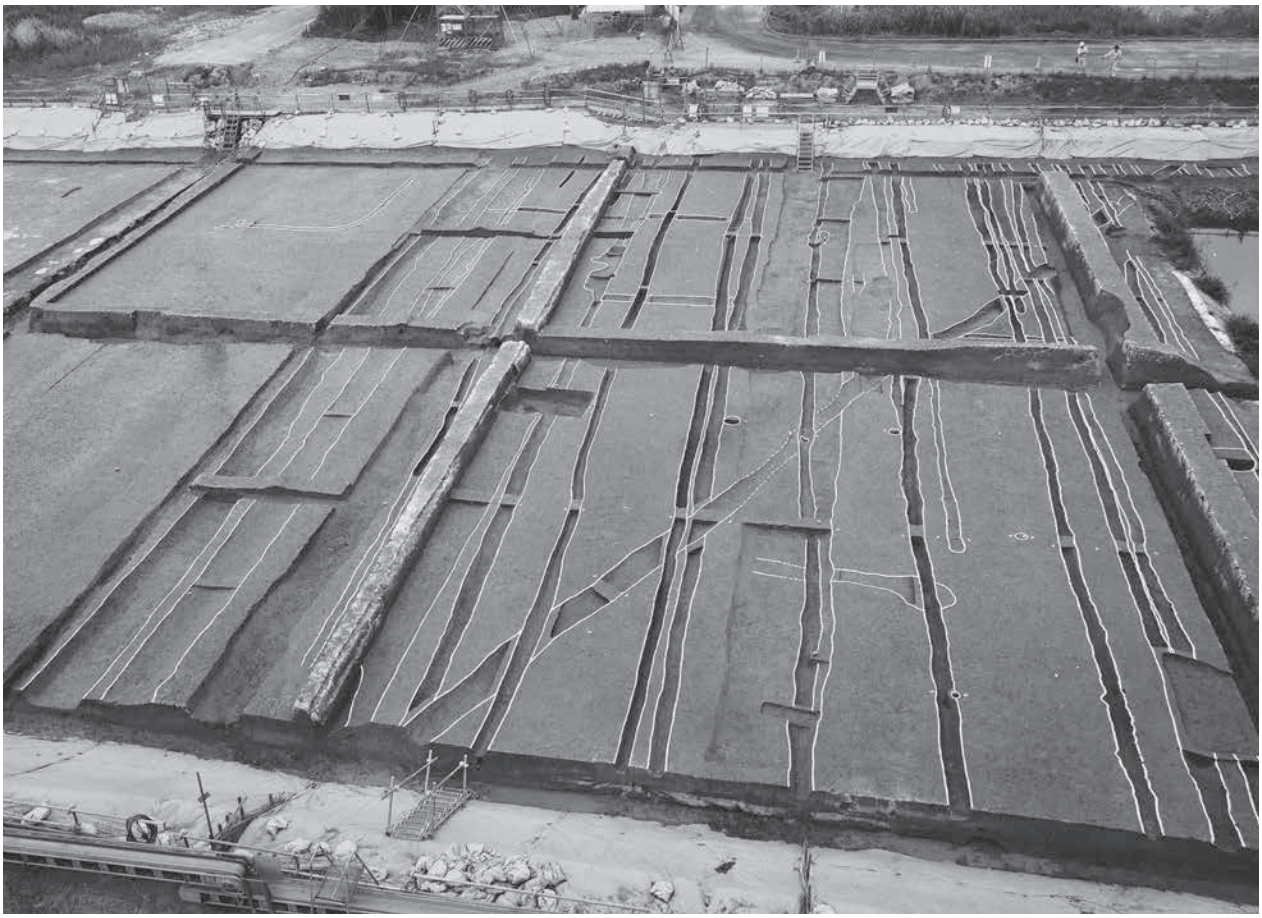
２　第８面　B42 土坑　（北西から）



１　02－１調査区　第９面　南半　全景（北東から）

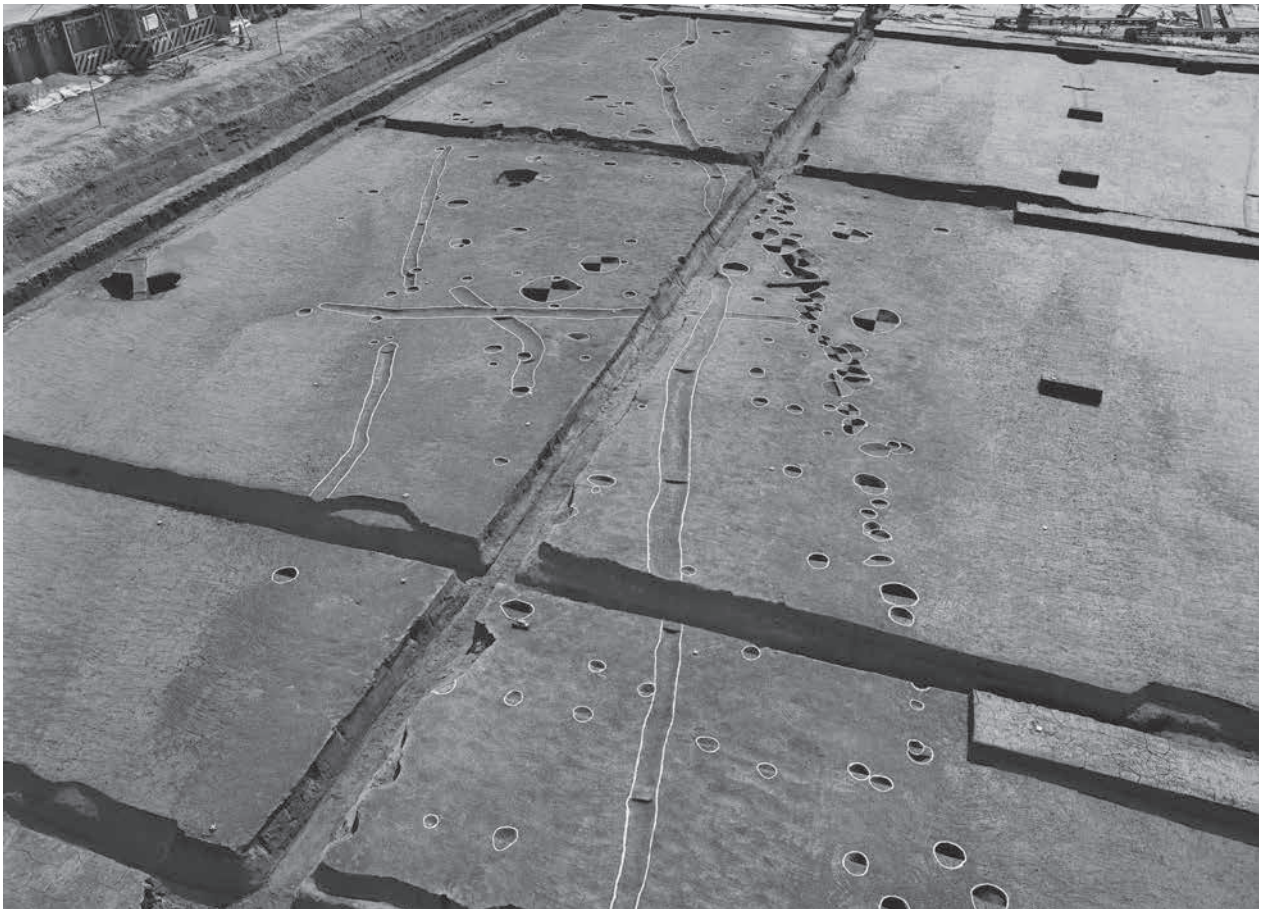
２　02－１調査区　第９面　南半　全景（南から）

図版10　遺構



1　06－2調査区　第9面　東半　全景（南から）

2　02－1調査区　第10面　北半　全景（南東から）



1　第 10 面 A391 微高地（北から）

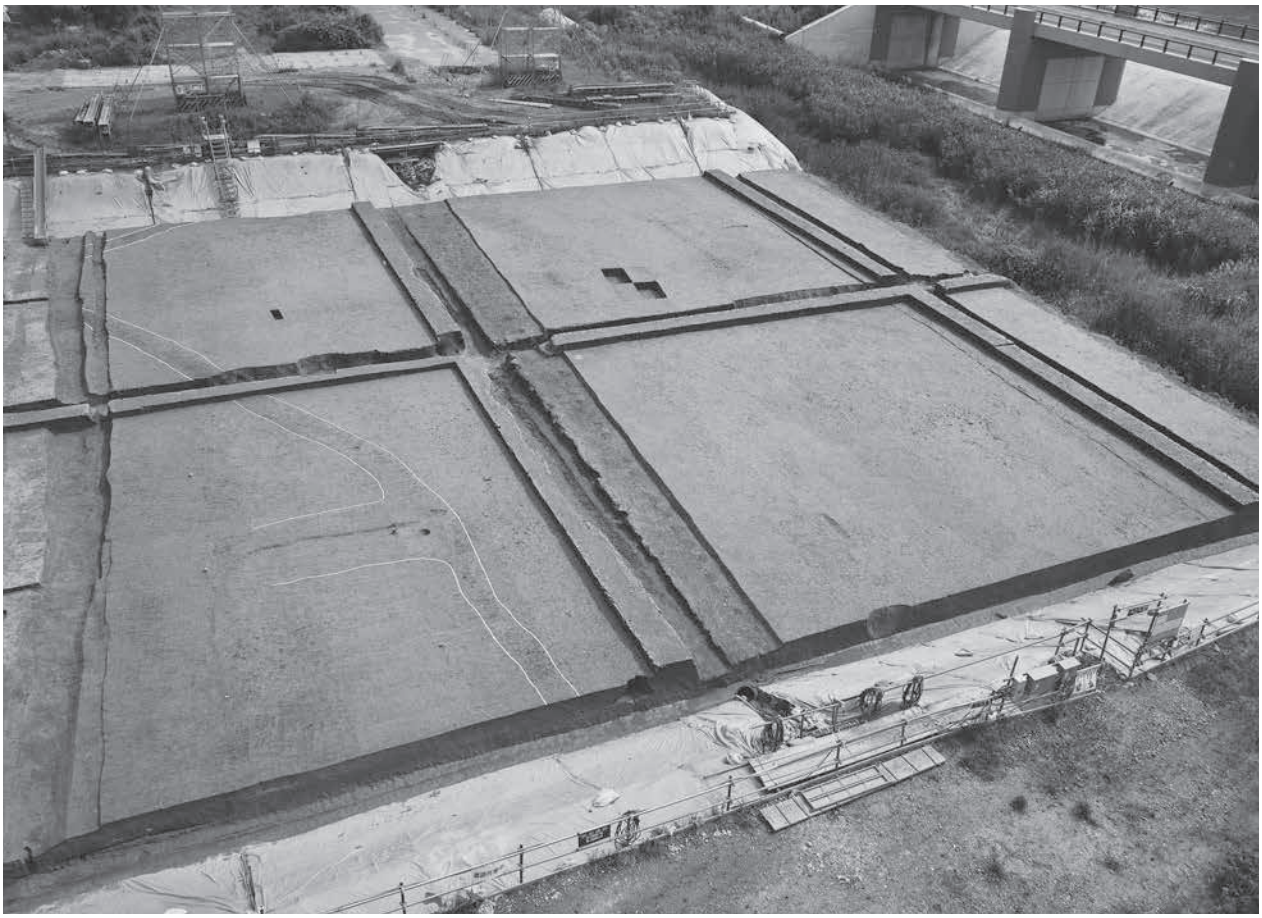
2　第 10 面　A242 土坑・A243 ピット（南から）

3　第 10 面　A243 ピット（西から）

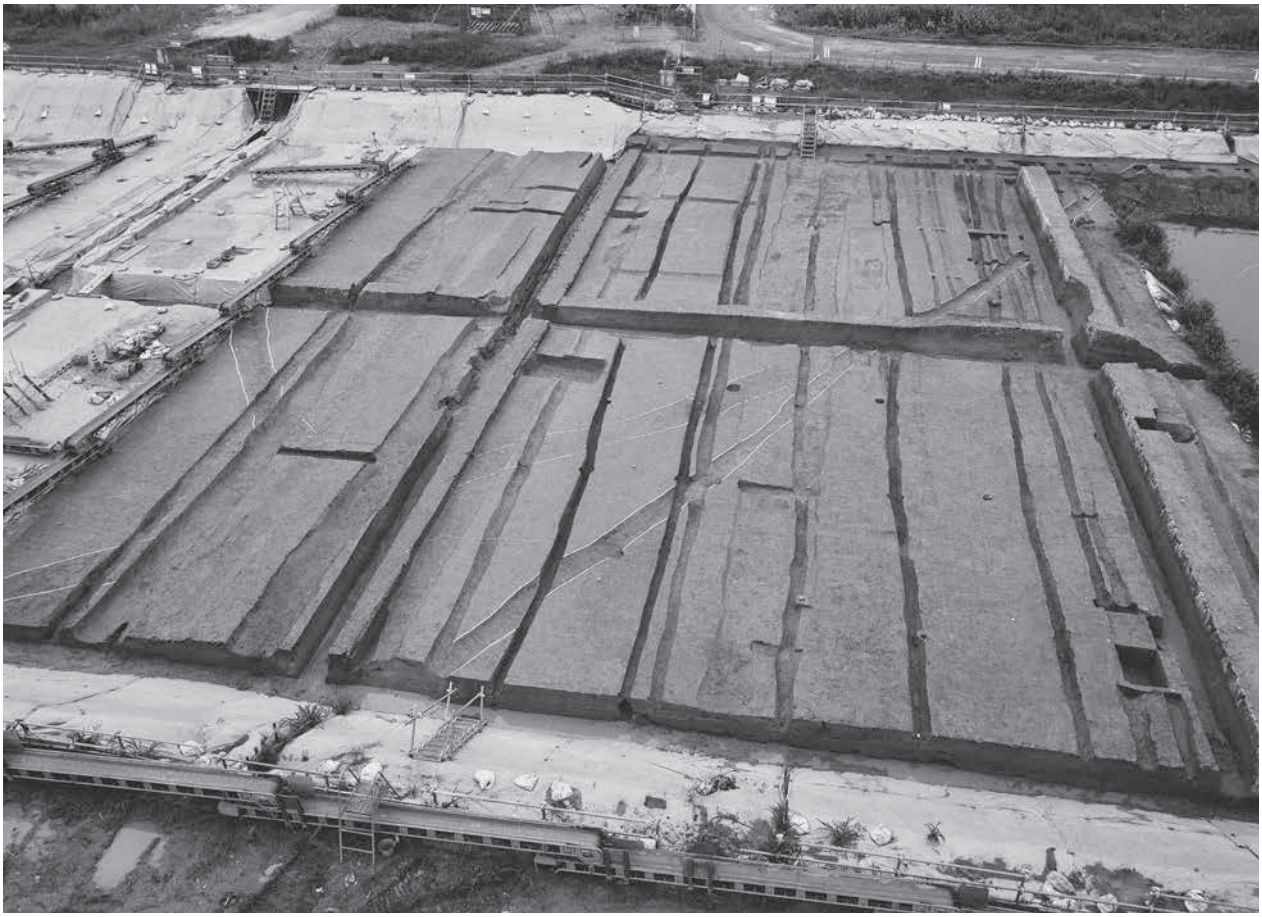
4　第 10 面　A282 土坑（北から）

5　第 10 面　A374 土坑（南東から）

図版12　遺構

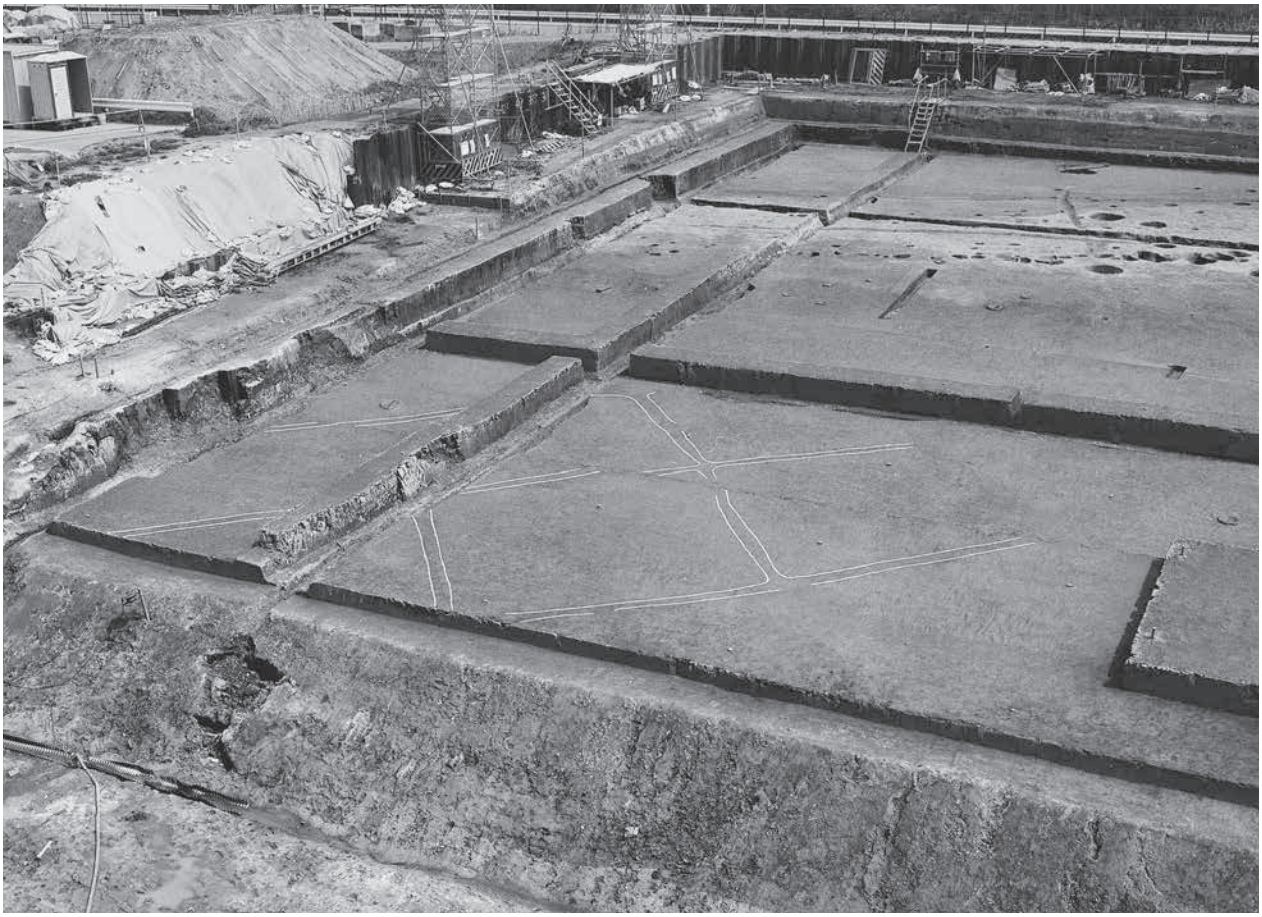


1　06－２調査区　第10面　西半　全景（北東から）



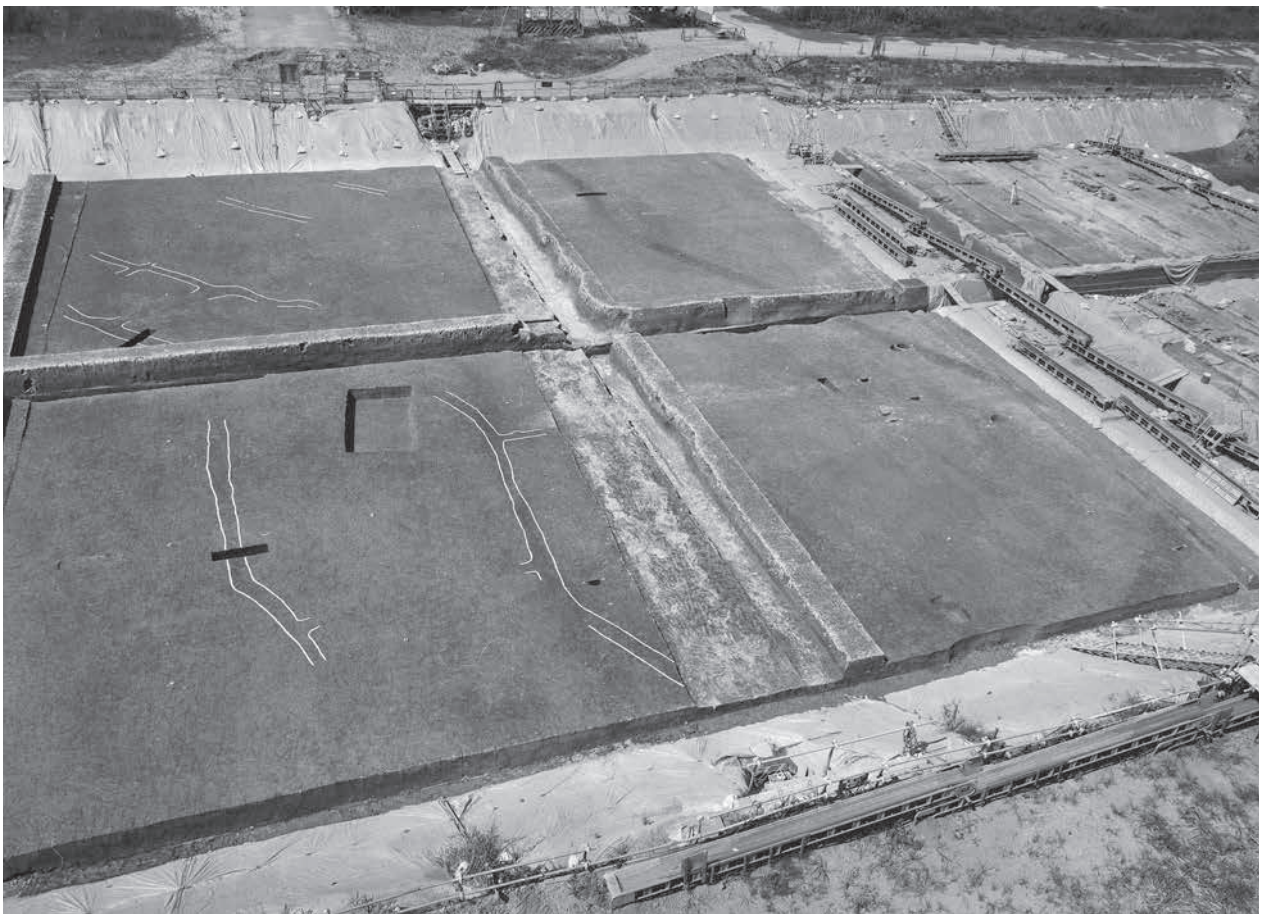
2　06－２調査区　第10面　東半　全景（南から）

1　02－1調査区　第11面　南半　全景（南東から）

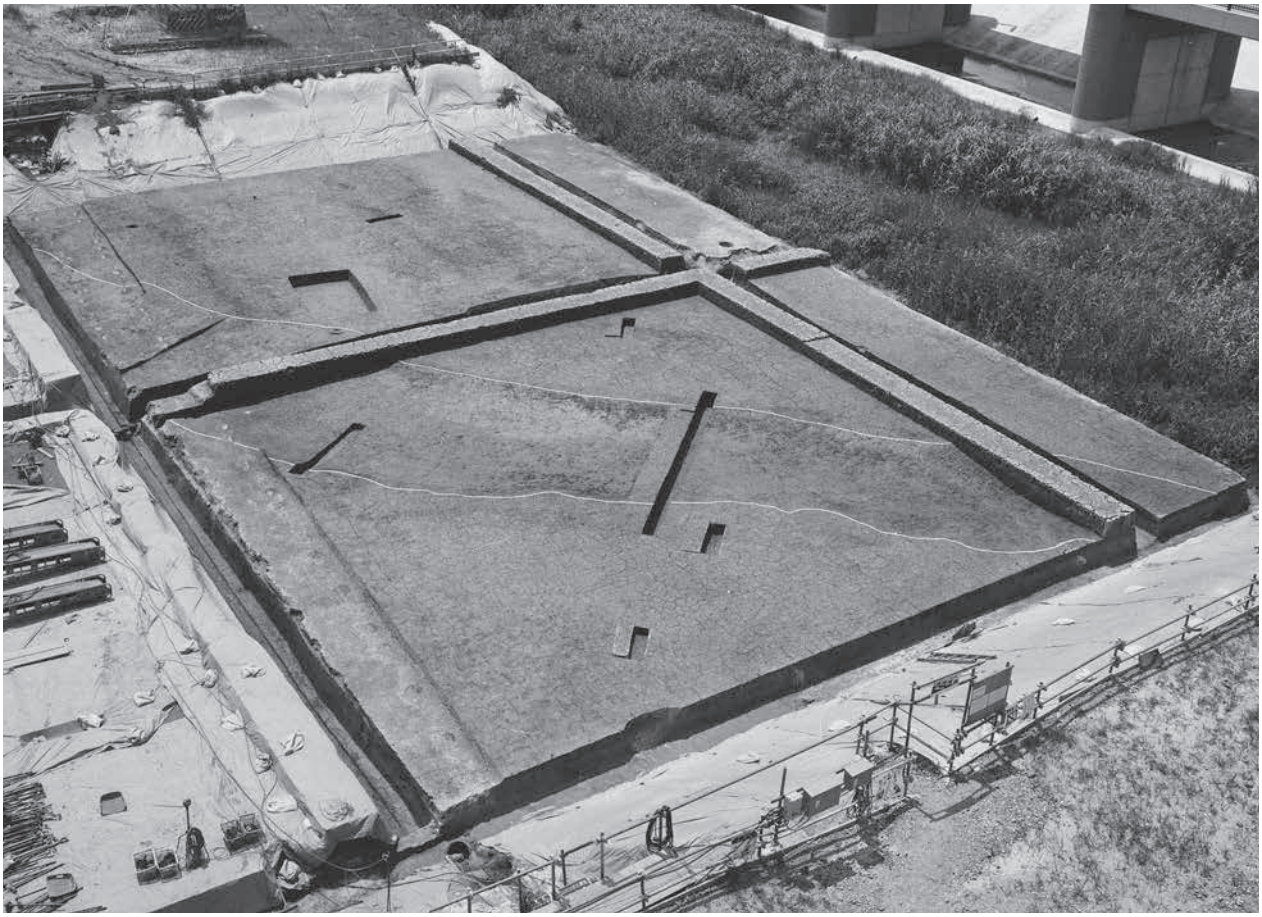


2　02－1調査区　第11面　畦畔　（西から）

図版14　遺構



1　06－２調査区　第11面　西半　全景（南から）

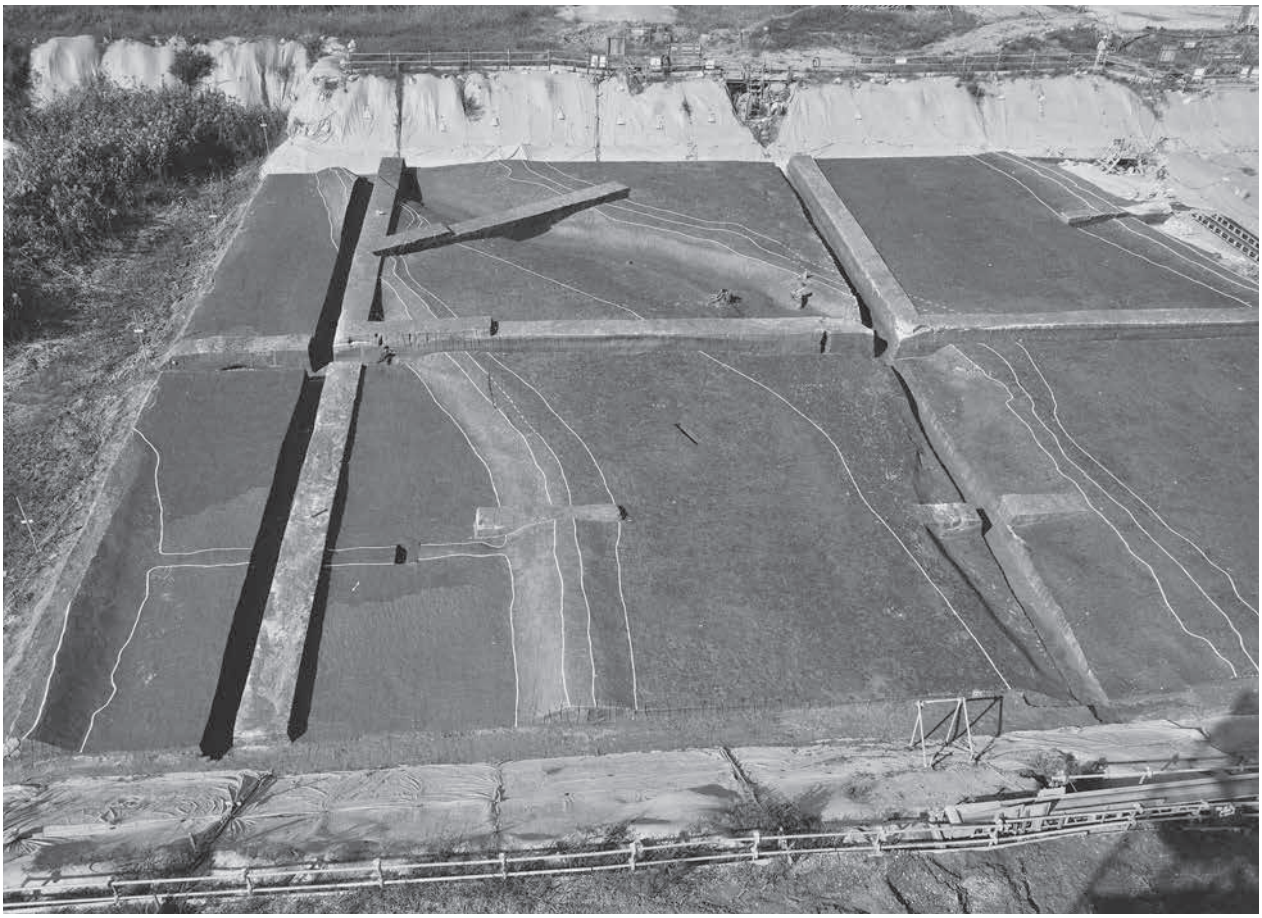


2　06－２調査区　第11ｂ面　西側　全景（北東から）

1　02－1調査区　第12面　北半　全景（西から）

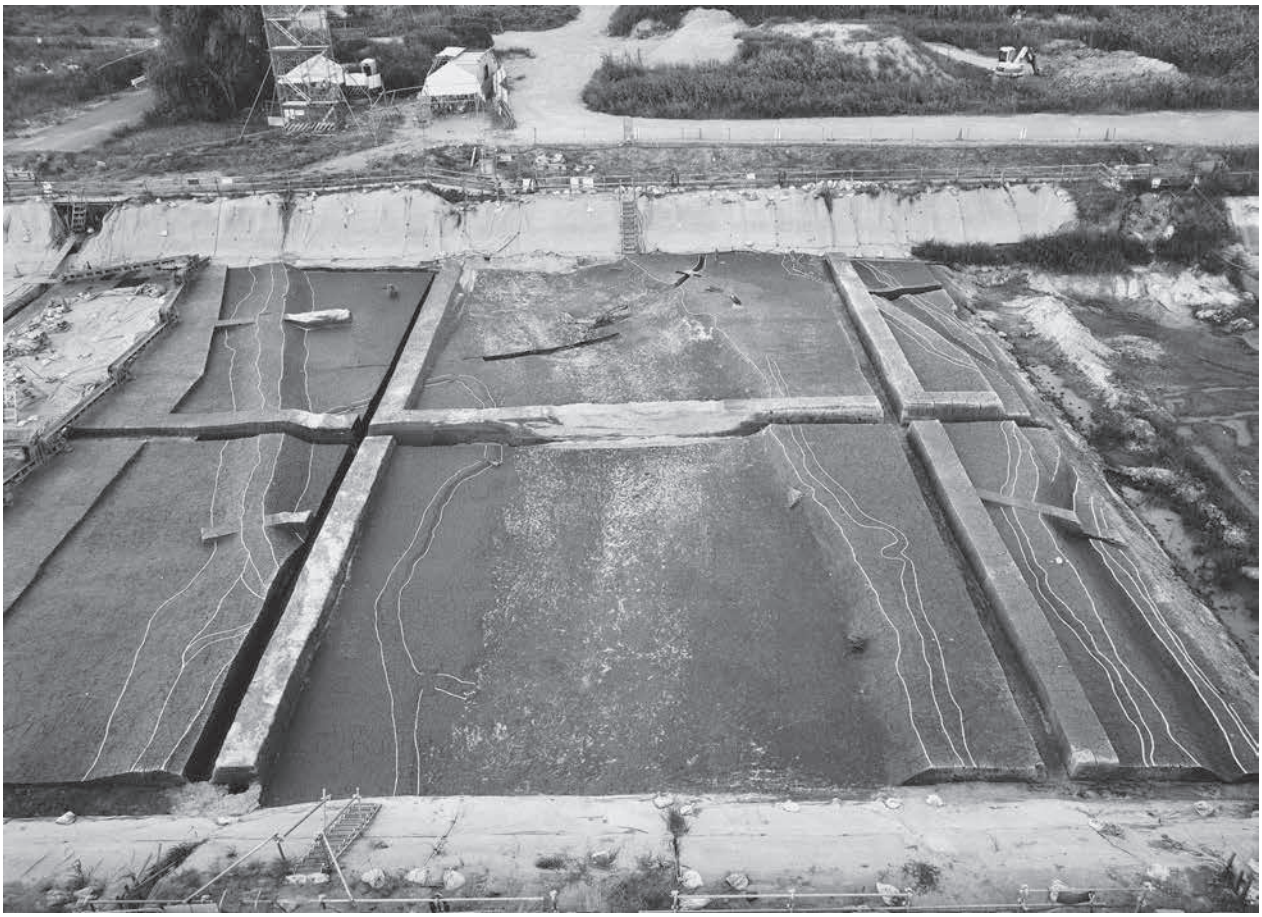
2　第12面　南半　水田域B（南東から）

図版16　遺構



1　06－２調査区　第12面　西半　全景（南から）

2　第12面　B213～219杭と立木・流木　（南西から）



1　06－２調査区　第12面　東半　全景（南から）

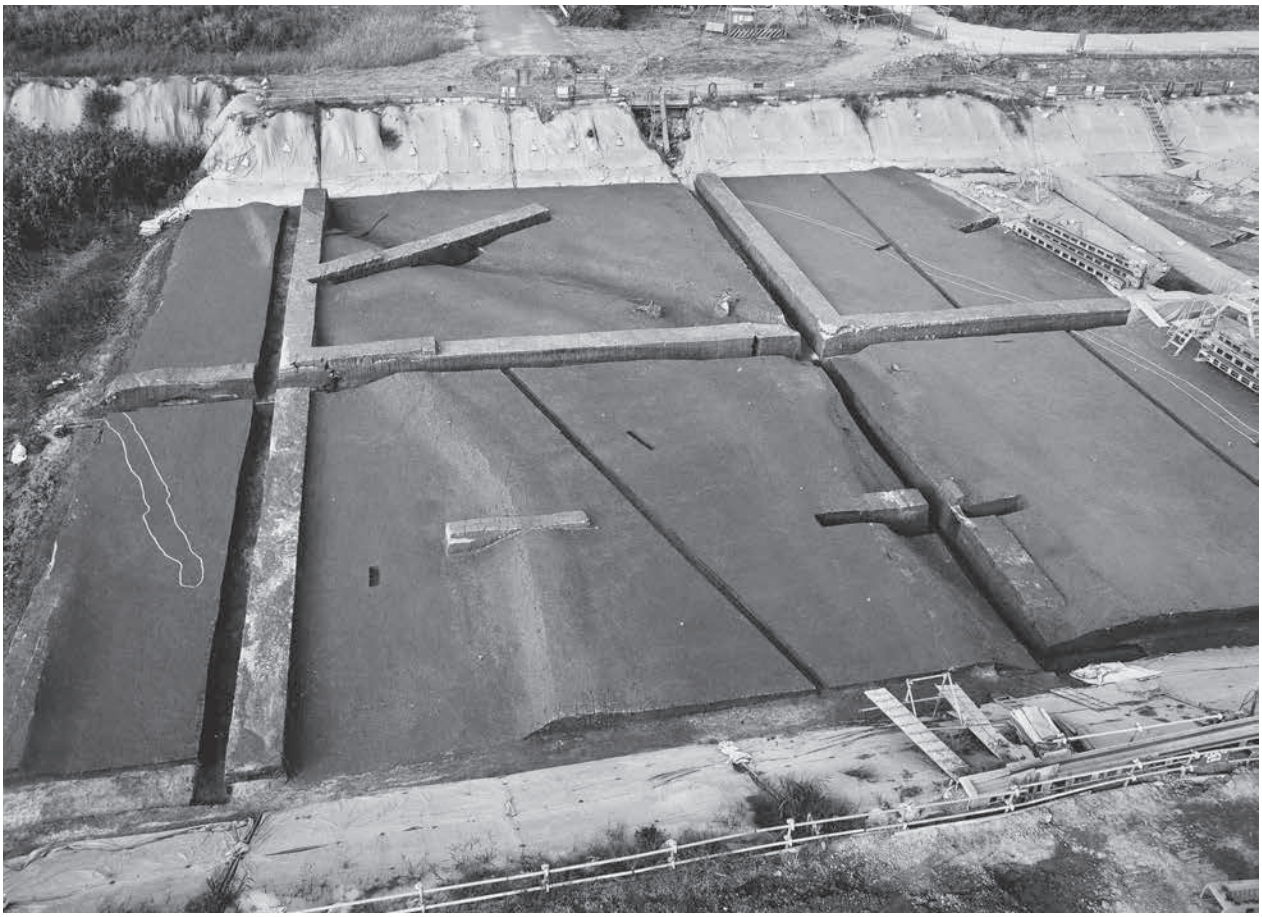
2　第12面　A527水口　（南東から）

3　第12面　B198溝　（北から）

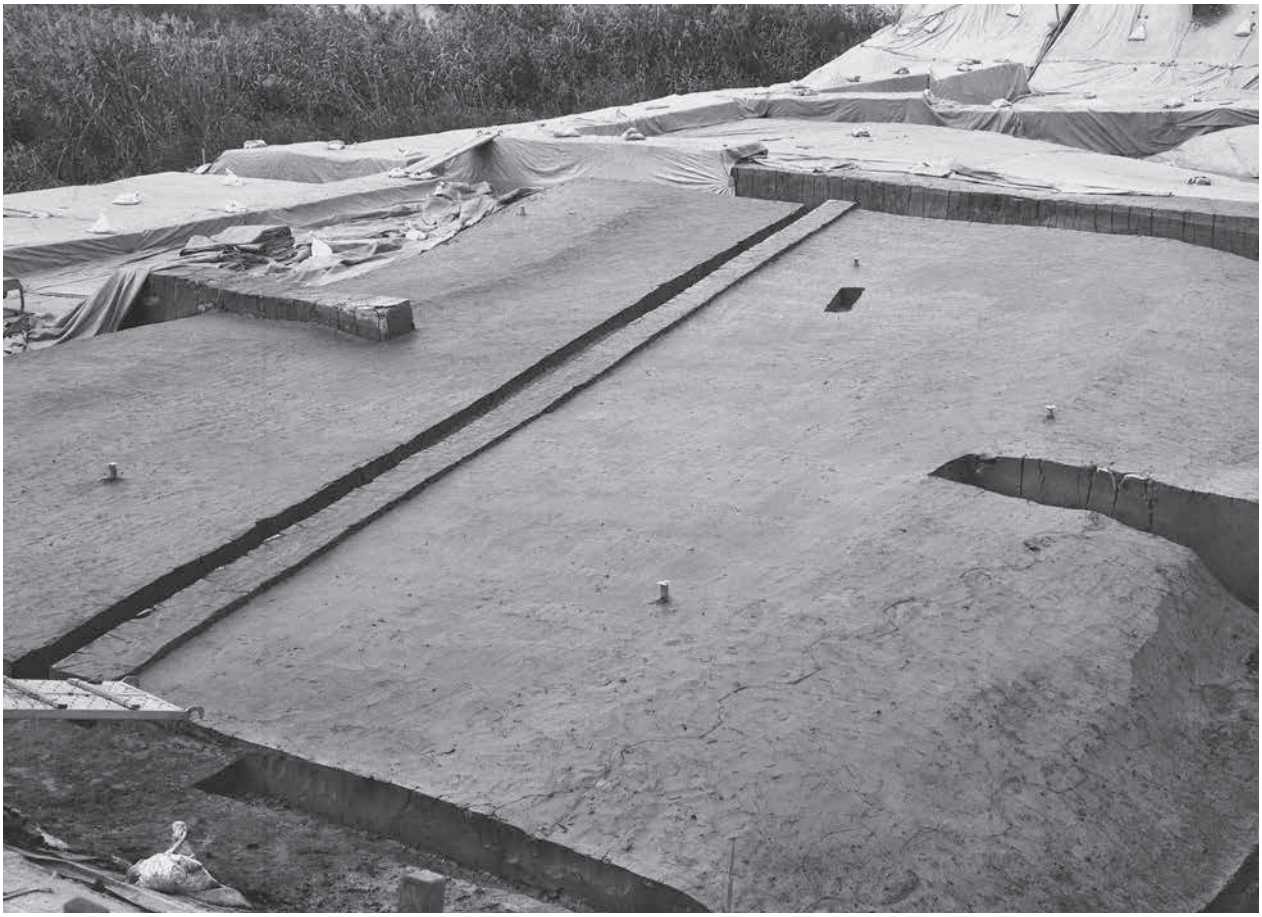
4　02－１調査区 第12面　土器437（南東から）

5　06－２調査区 第12面　土器460　（北から）

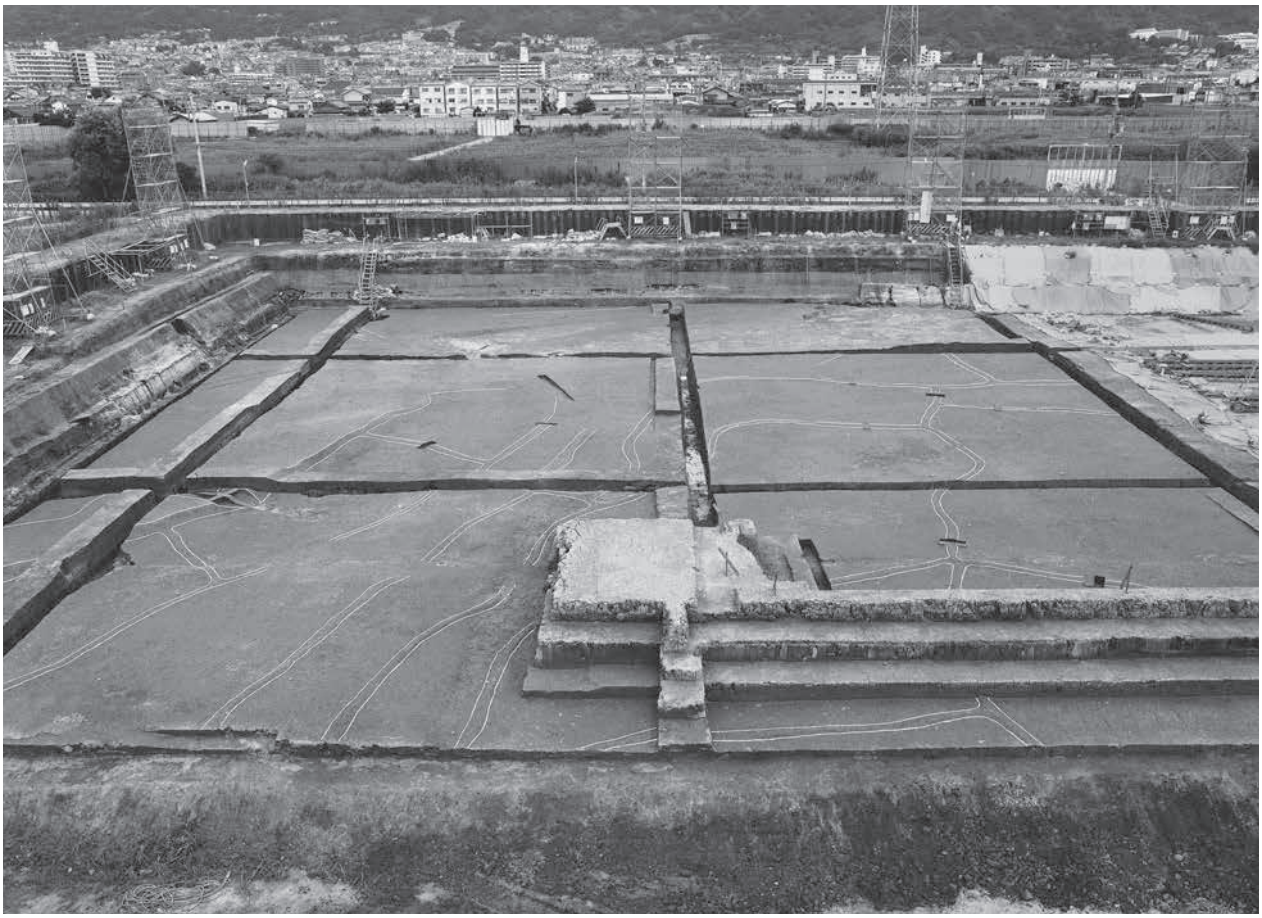
図版18　遺構



1　06－２調査区　第12ｂ面　西半　全景（南から）



2　06－２調査区　第12ｂ面　畝溝（南東から）

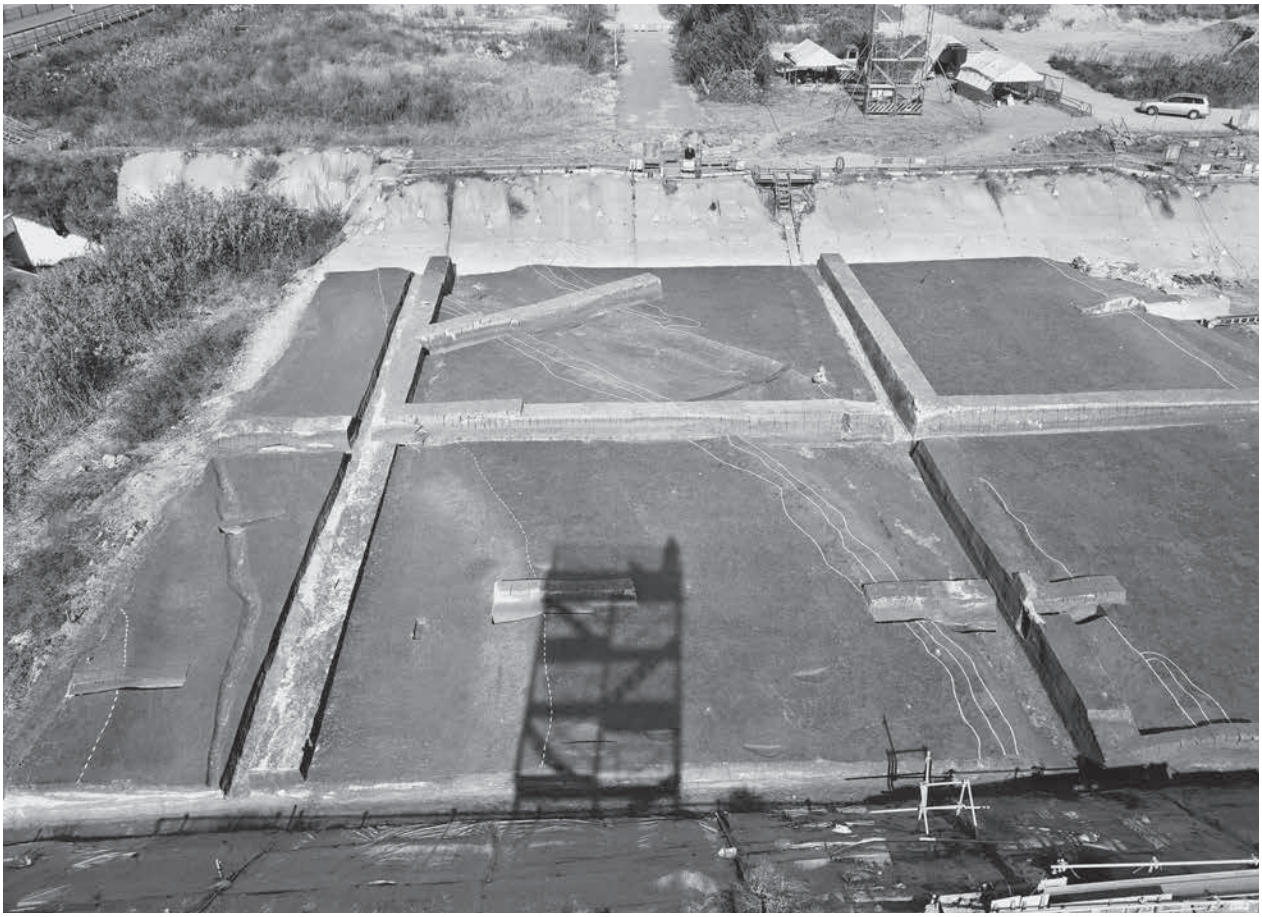


1　02－1調査区　第13面　北半　全景（西から）

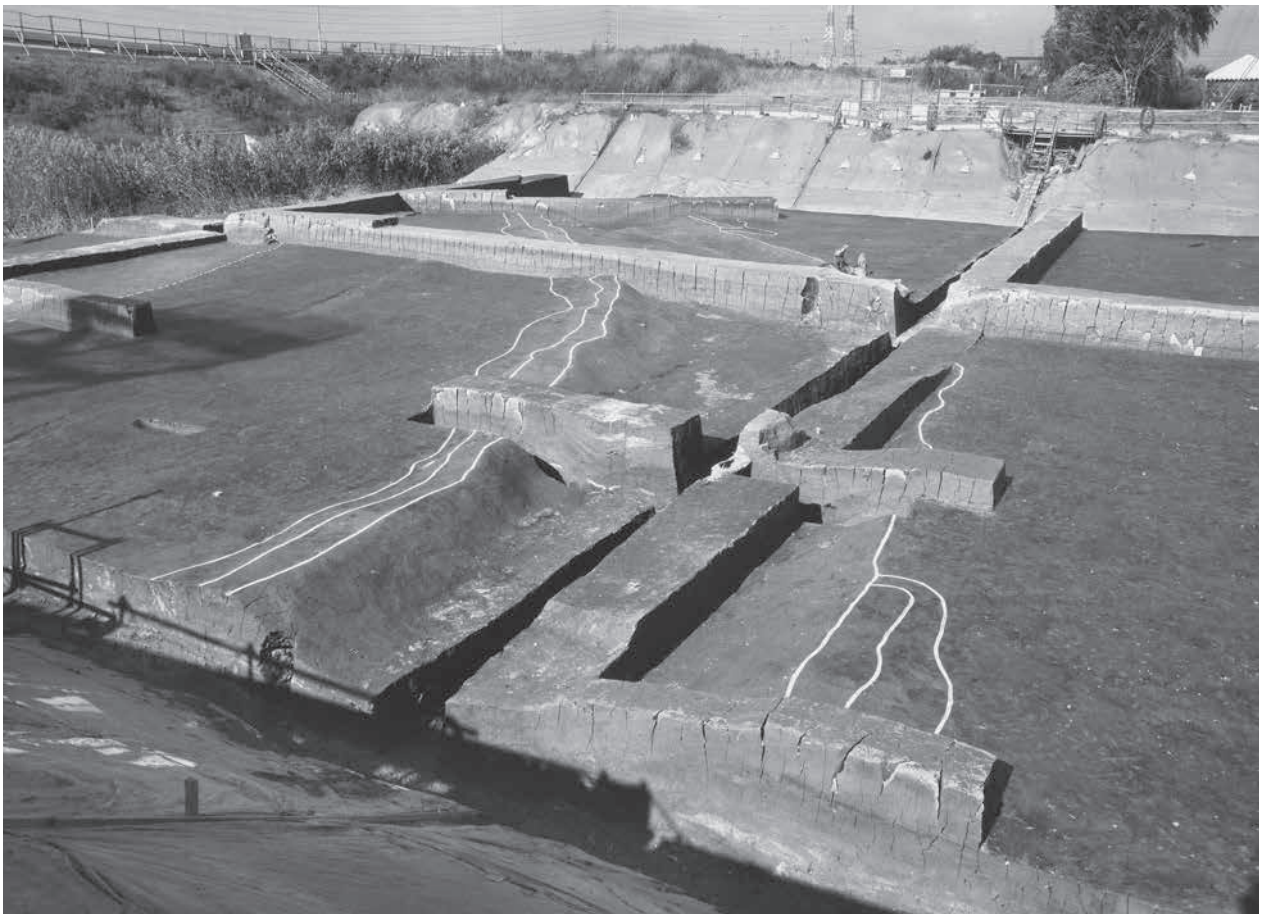
2　02－1調査区　第13面　南半　全景（西から）

図版20　遺構

1　第 13 面　A561 ～ 563 畦畔、A633 水口（西から）



2　06 －２調査区　第 13 面　西半　全景（南から）



1　第 13 面　B335 溝（南東から）

2　第 12 面　B240 溝・第 13 面　B335 溝　断面（北西から）

図版22　遺構

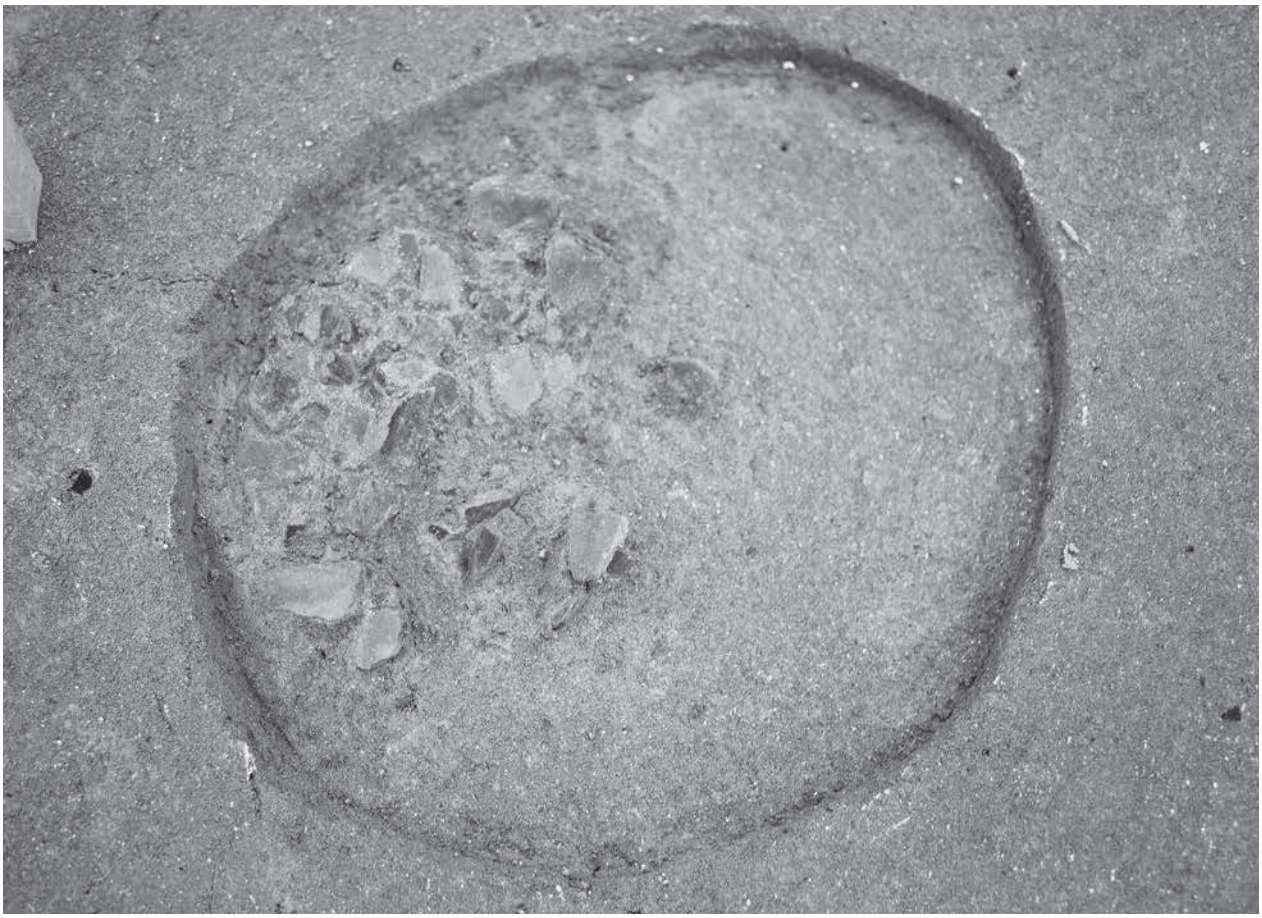
1　06－２調査区　第13ｂ面　東側　土坑・ピット群（南から）

2　第13ｂ面　B340土坑（南から）

1　第13ｂ面　B341土坑（西から）

2　第13ｂ面　B342土坑（左）・B404ピット（右）（西から）

図版24　遺構



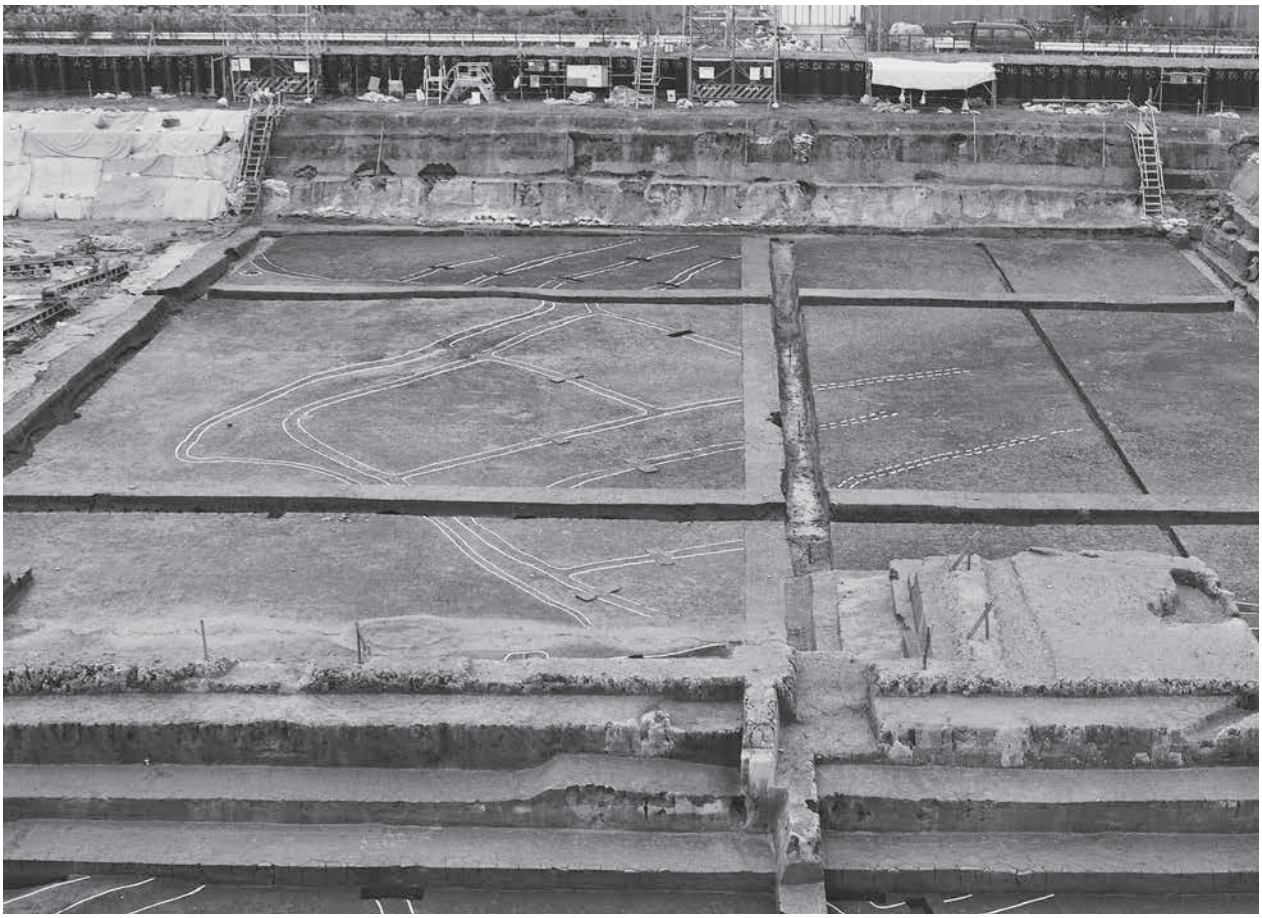
1　第13ｂ面　B349ピット（北西から）

2　第13ｂ面　B374土坑（南から）

1　第13ｂ面　B401ピット（南から）

2　02－1調査区 第14－1層　牙製垂飾508　（南西から）

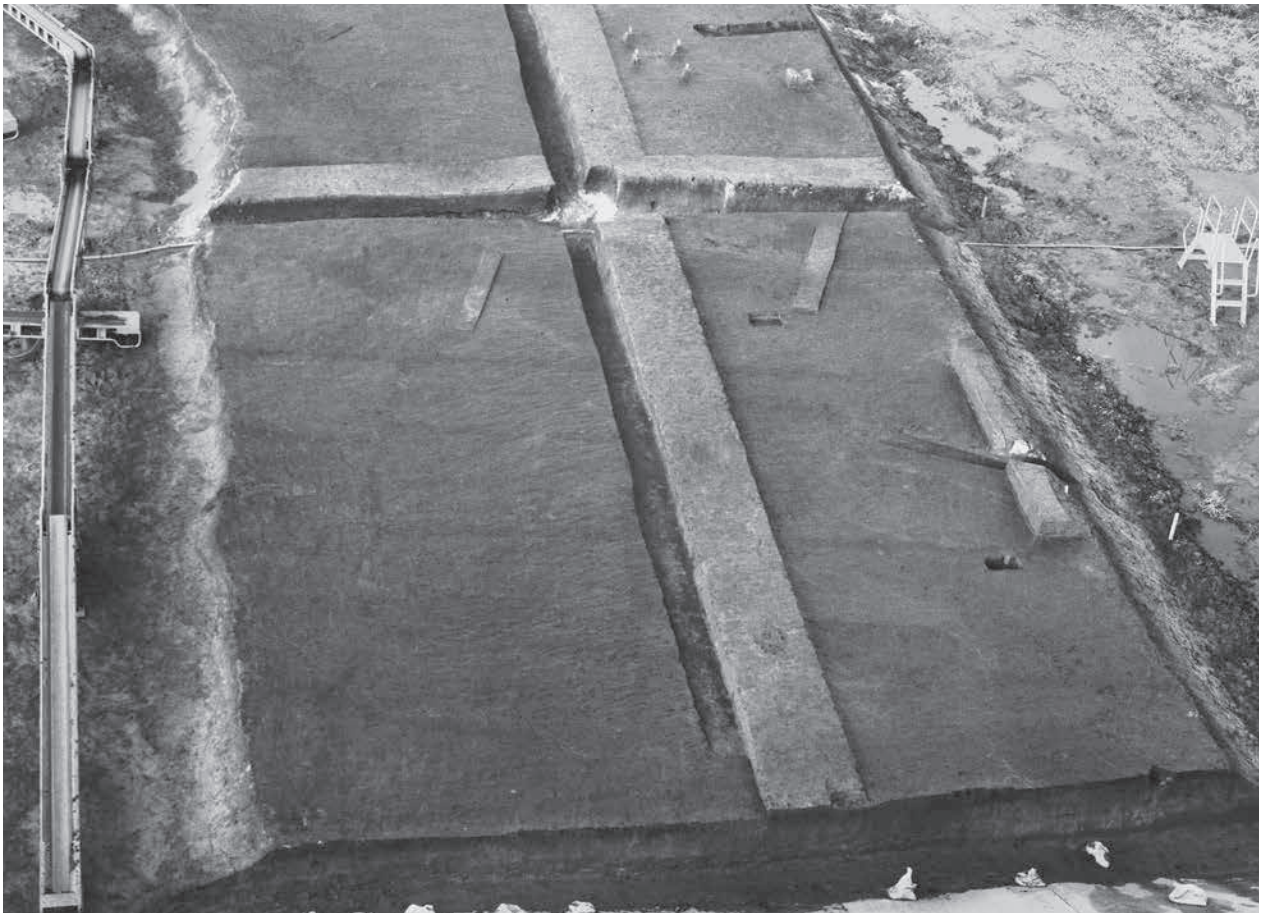
図版26　遺構



1　02－1調査区　第14－2面　南半　全景（西から）

2　06－2調査区　第14－2面　東半　全景（南から）

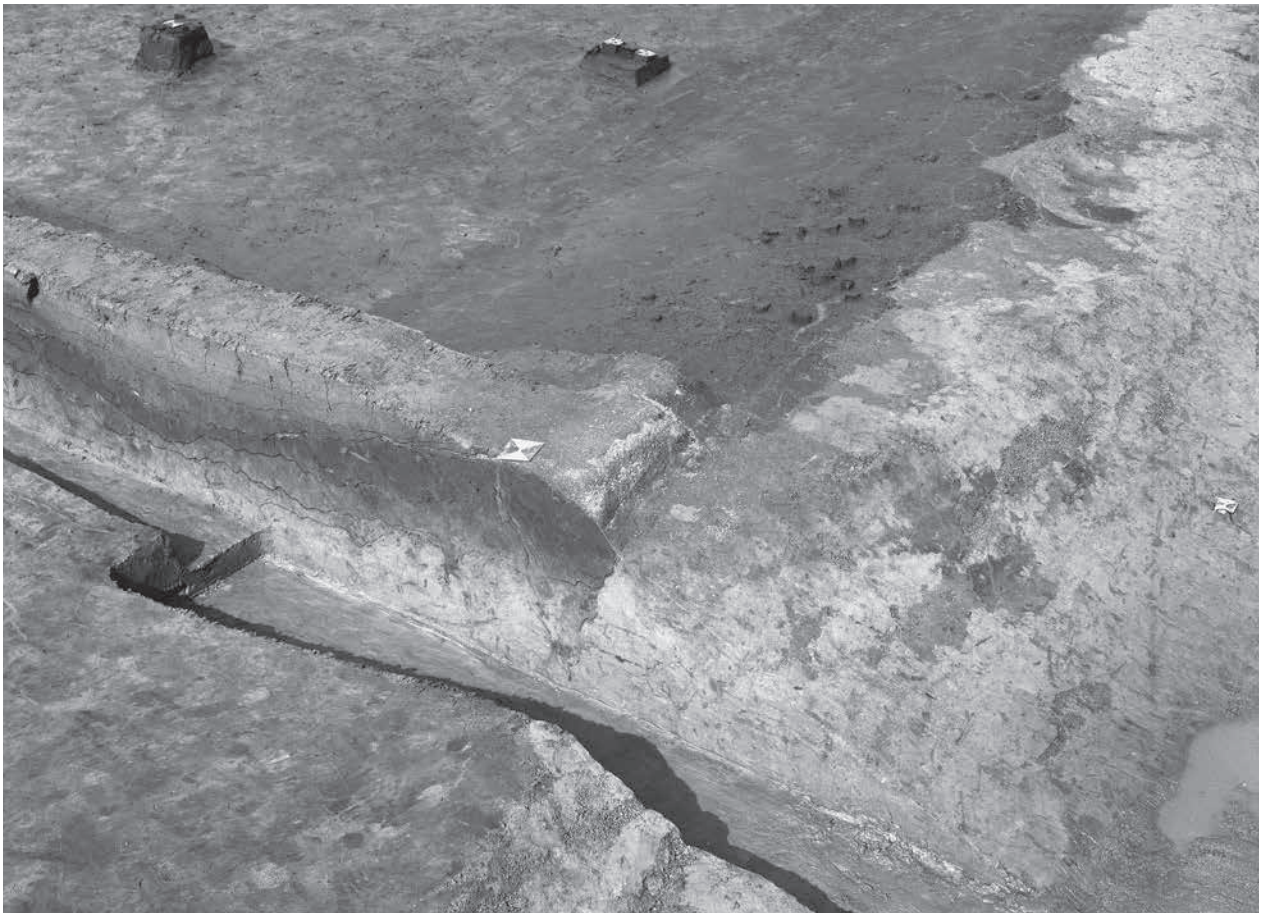
1　第14－２面　A674溝と水田域　（南西から）



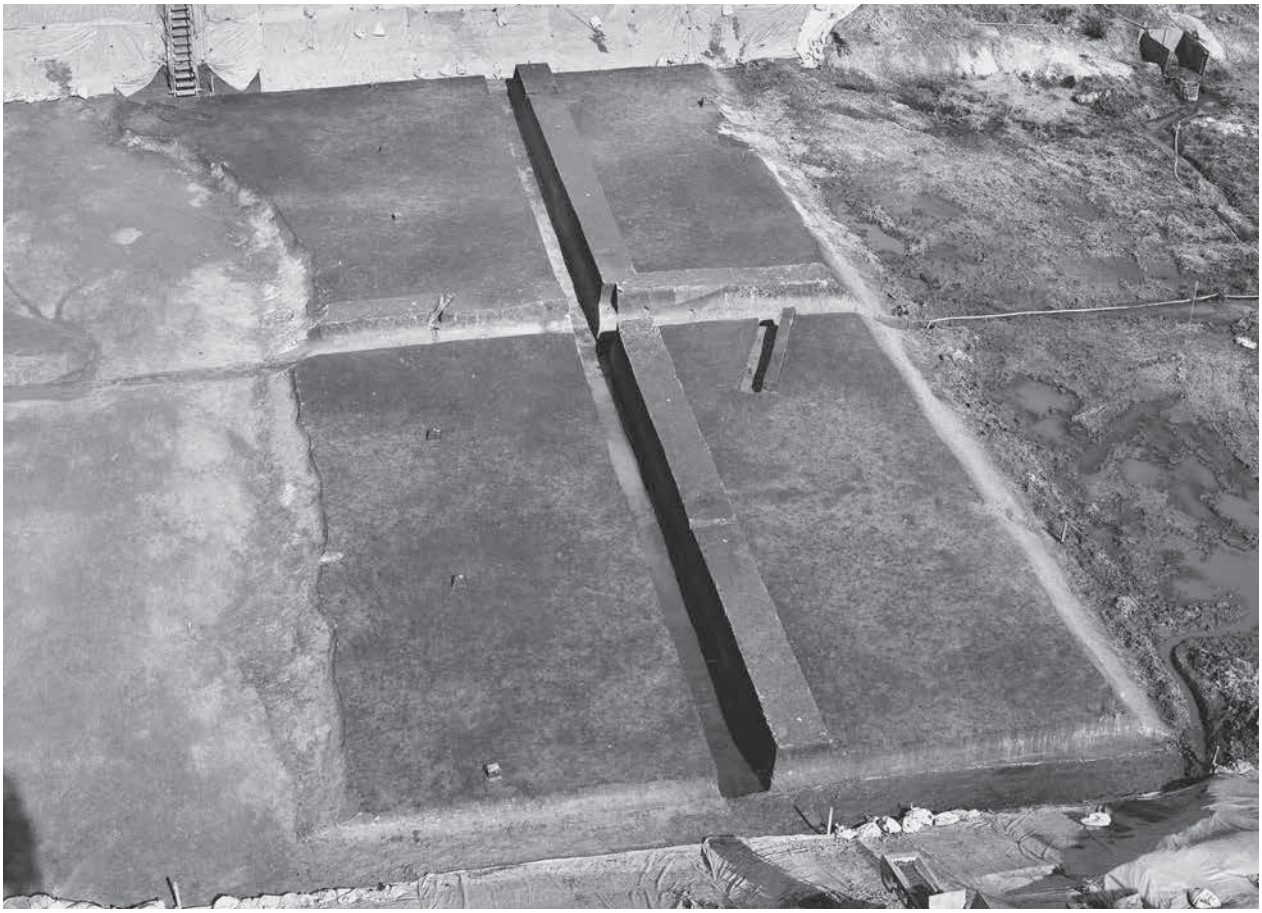
2　06－２調査区 第14－２面　畦畔検出状況　（南から）

図版28　遺構

1　第 14 －２面　B 440 溝と水田　（北西から）

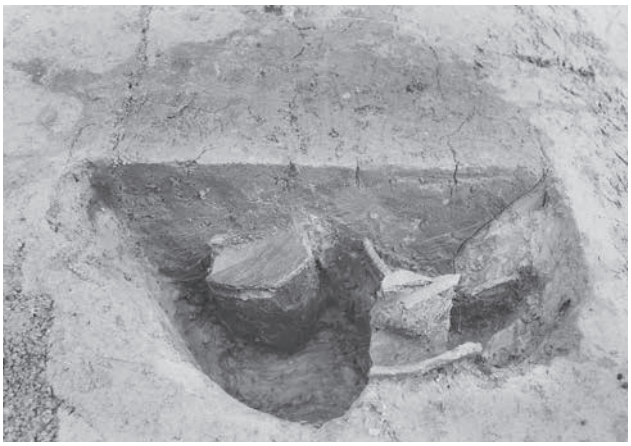


2　第 14 －２面　B422 溝　土器出土地点と断層　（南東から）



1　06－２調査区　第14－２b面　東半　全景（南から）

2　第14－２ｂ面　A691溝　（東から）



3　第14－２ｂ面　B491ピット　（南から）

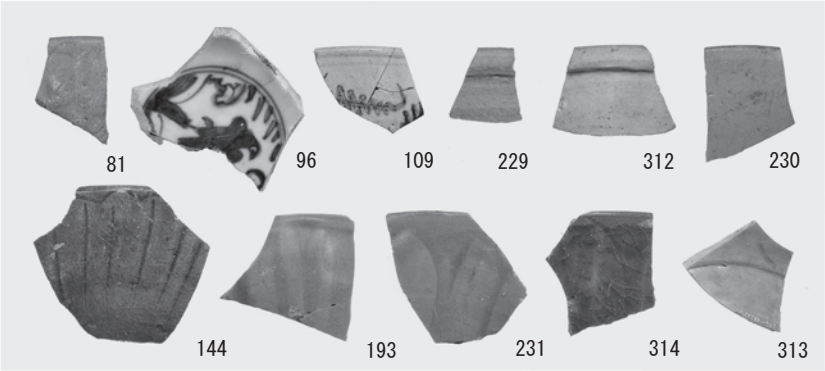
4　02－１調査区 第14－２ｂ層除去面　足跡(南から)

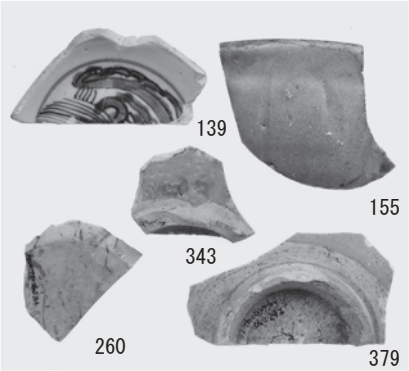
5　02－１調査区 第14－２ｂ層中　土器出土状況(西から)

図版30　遺構

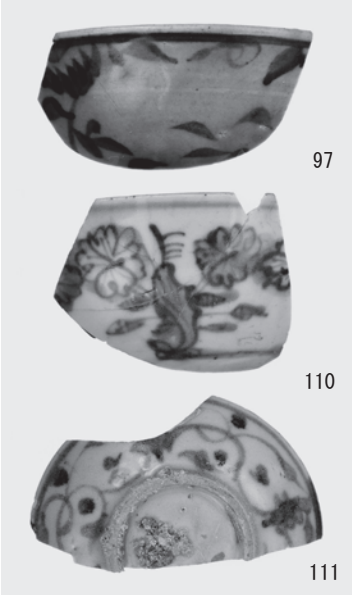
1　02－1調査区　第15面　北半　全景（南から）

2　06－2調査区　北側法面　（南から）

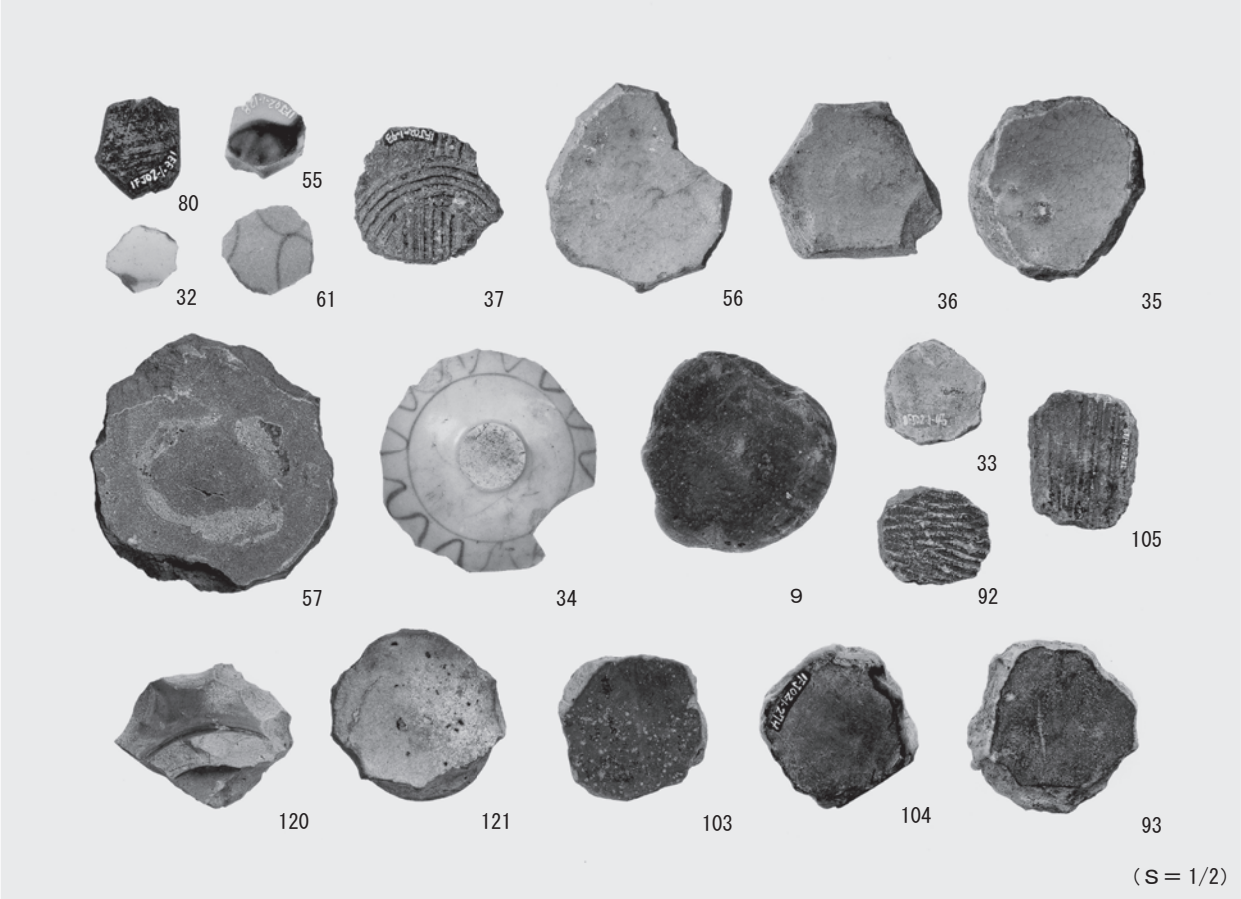

81
96
109
229
312
230
144
193
231
314
313


139
155
343
260
379

10

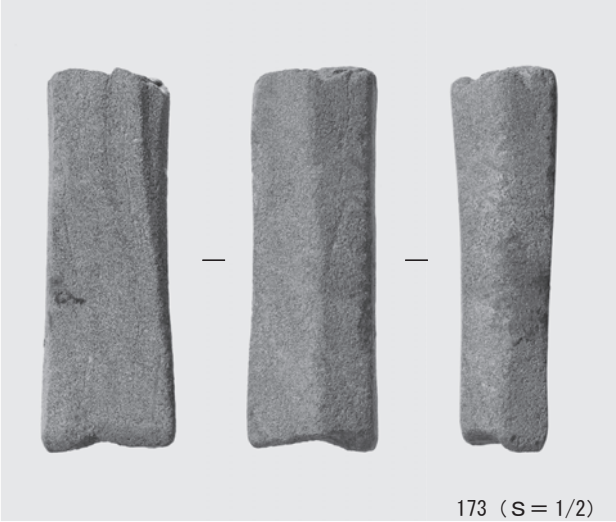

97
110
111

13

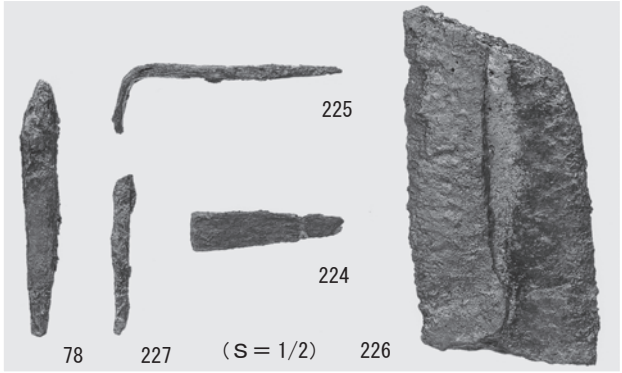

80
55
32
61
37
56
36
35
57
34
9
33
105
92
120
121
103
104
93
（S＝1/2）

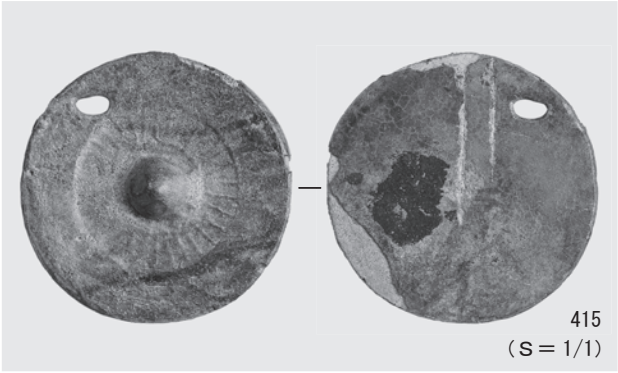
陶磁器、瓦、転用円板

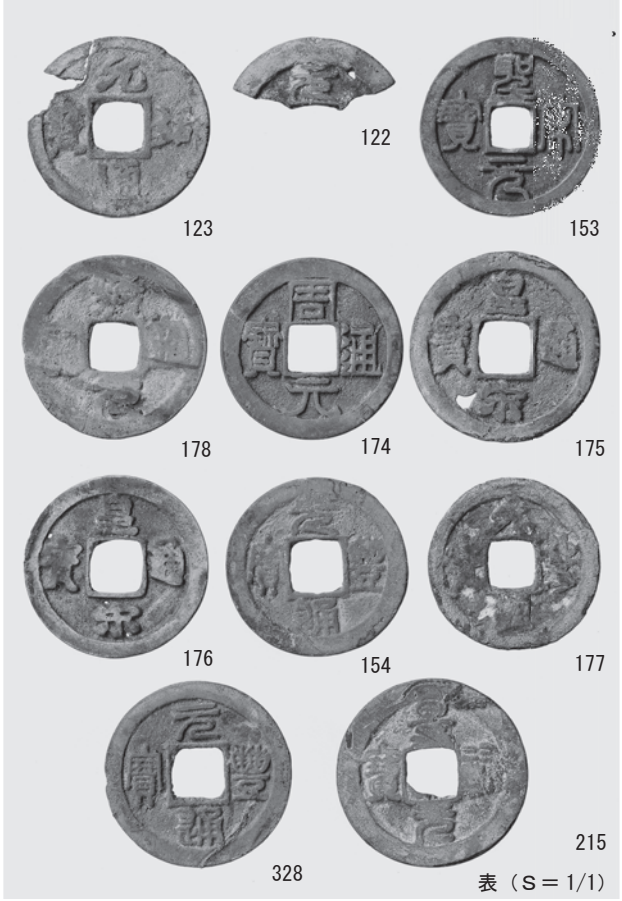
# 図版32　遺物

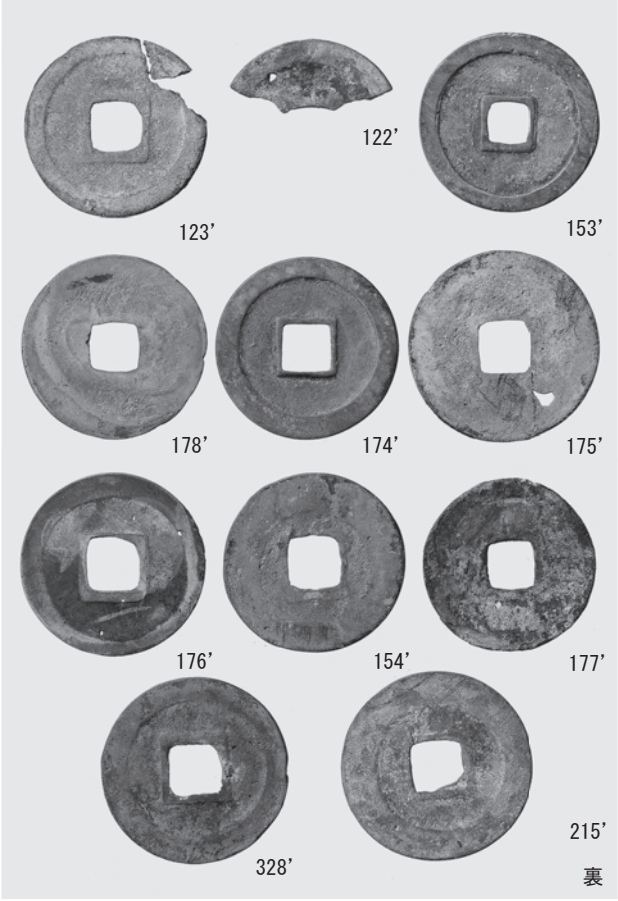


土製紡錘車、砥石、金属製品



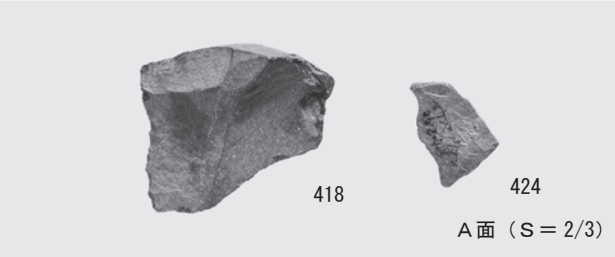
金属製品、小形仿製鏡、銭貨、土師器、須恵器

## 図版34　遺物

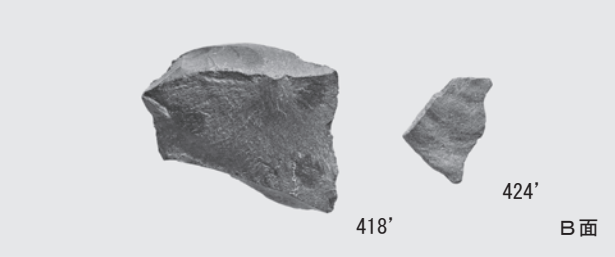
387

388

394

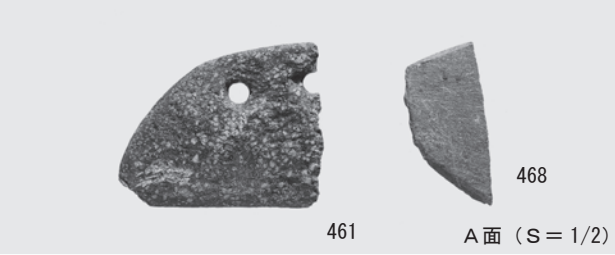

418　424
A面（S＝2/3）

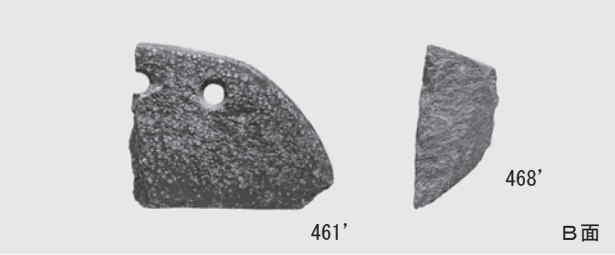
435


418'　424'
B面

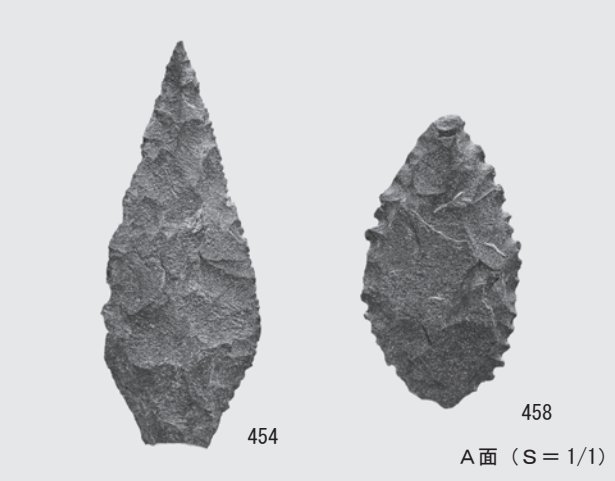
463

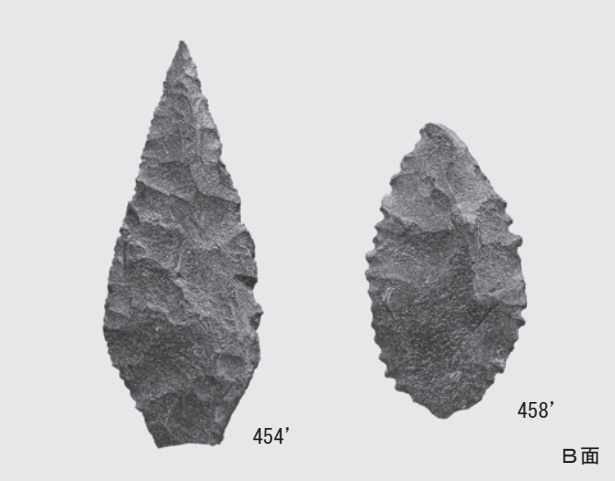
460

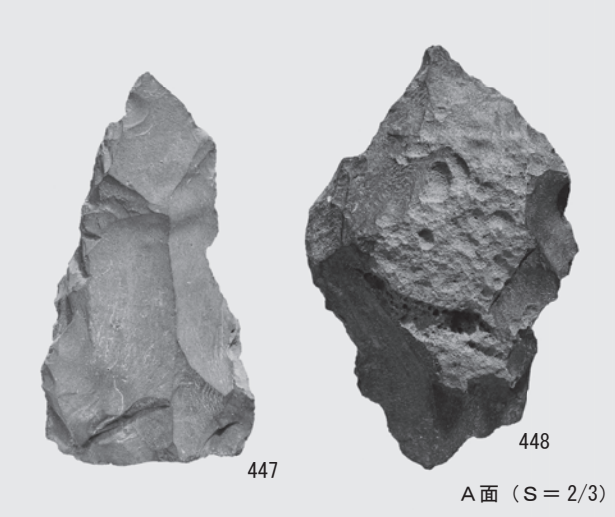

461　468
A面（S＝1/2）

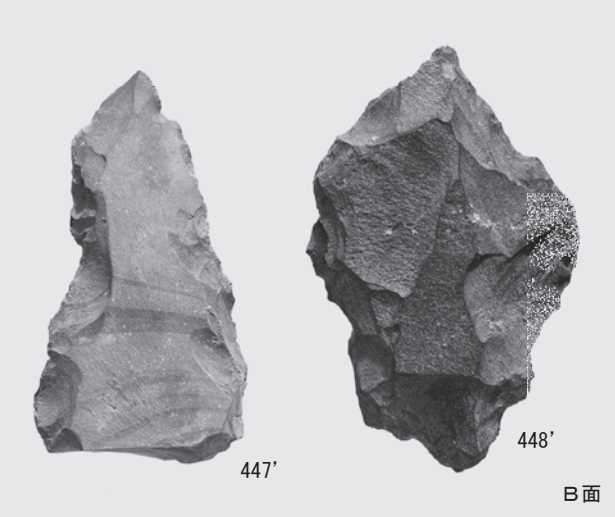

461'　468'
B面

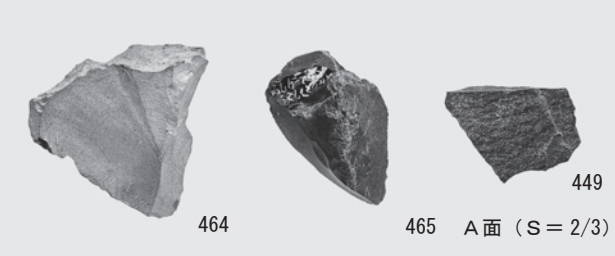
須恵器、サヌカイト片、弥生土器、石庖丁

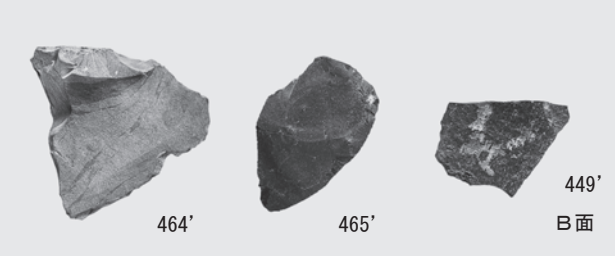


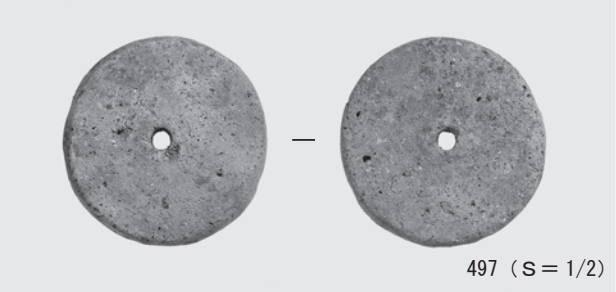



石鏃、サヌカイト片、弥生土器

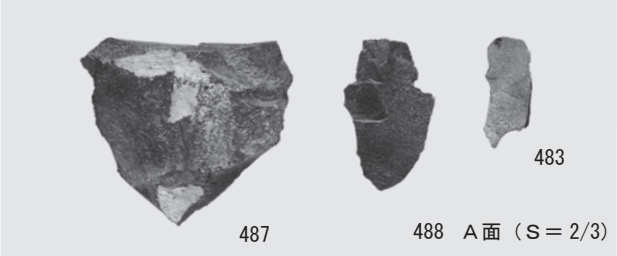
## 図版36　遺物

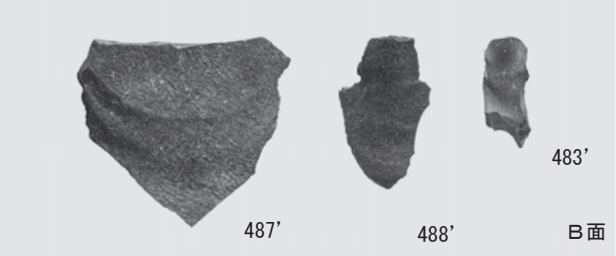
490

496


497（S＝1/2）

481（S＝1/2）


487　488　483　A面（S＝2/3）


487'　488'　483'　B面

511

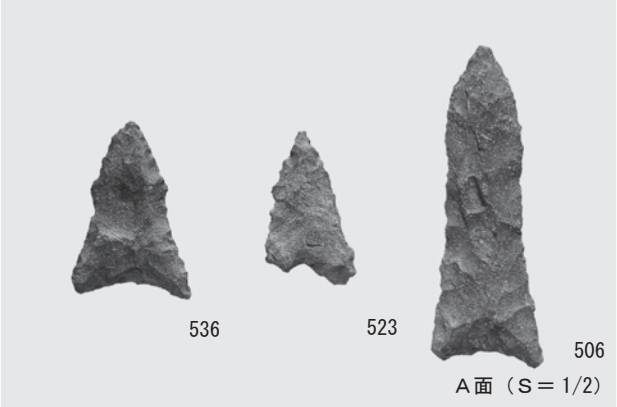
512

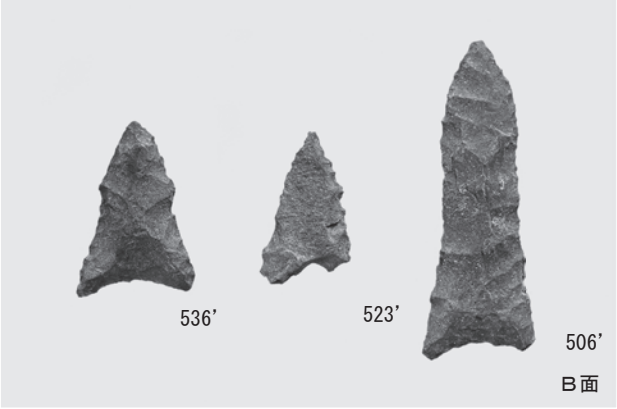
弥生土器、土製紡錘車、石庖丁、サヌカイト片

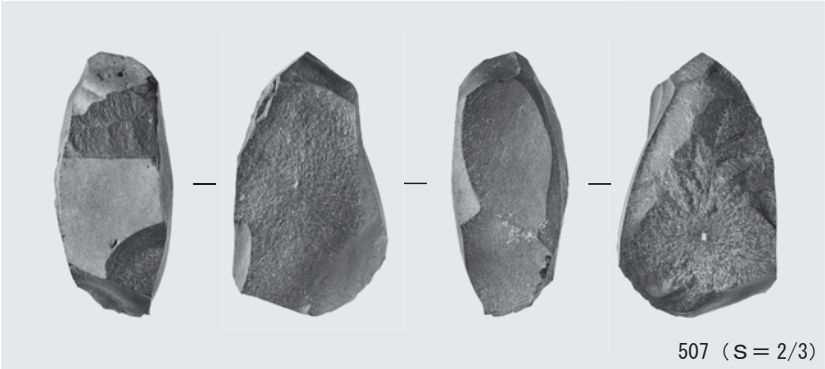
509

510

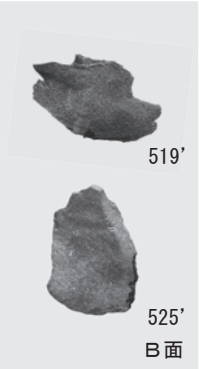
492


536　523　506
A面（S＝1/2）


536'　523'　506'
B面

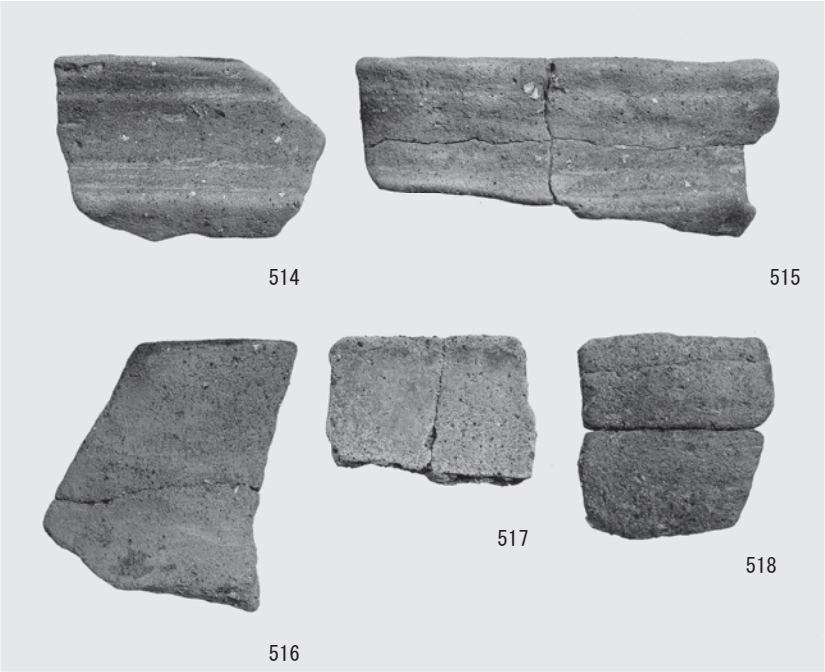

507（S＝2/3）

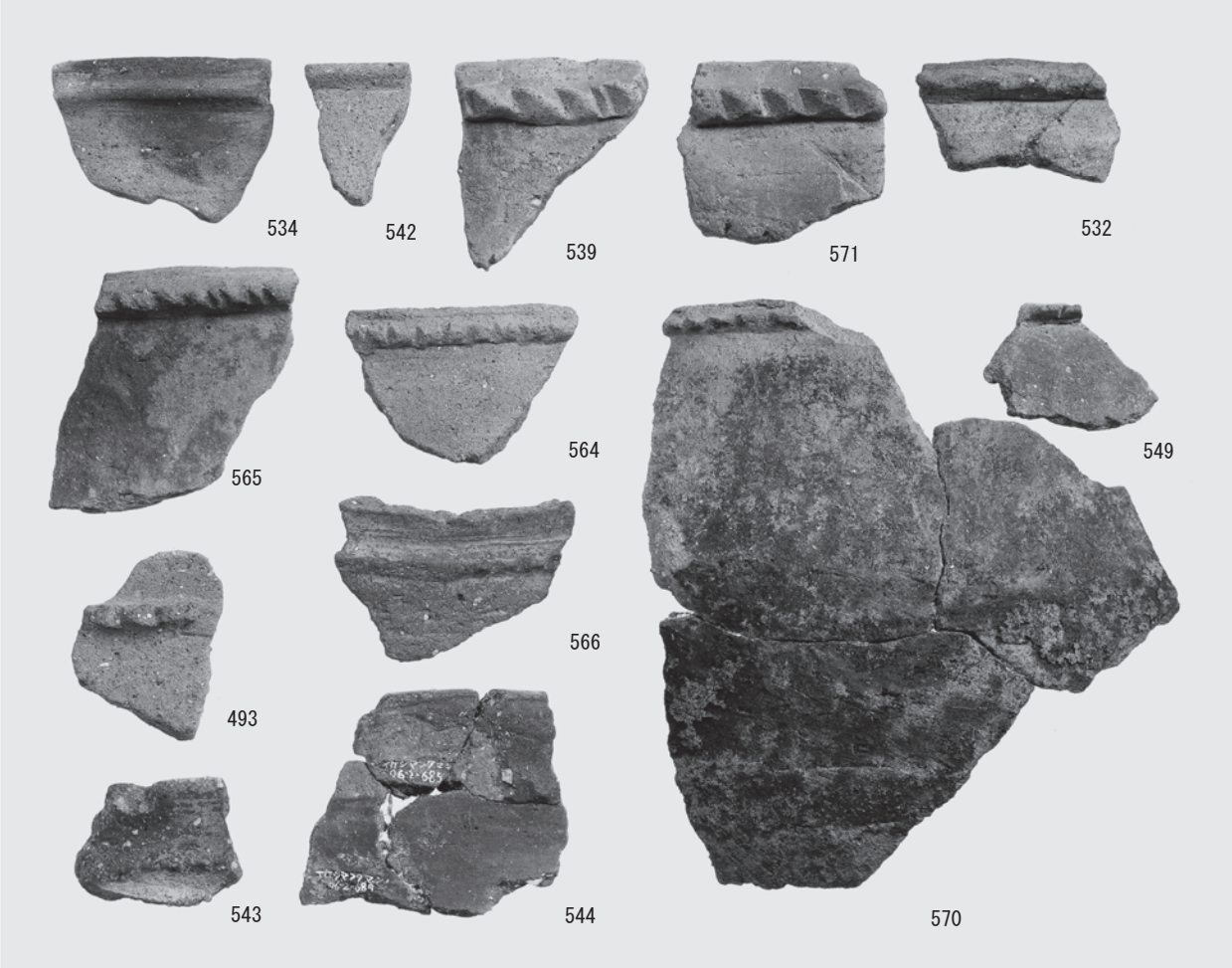
519
525
A面（S＝2/3）


519'
525'
B面

弥生土器、石鏃、サヌカイト石核、サヌカイト片

図版38　遺物

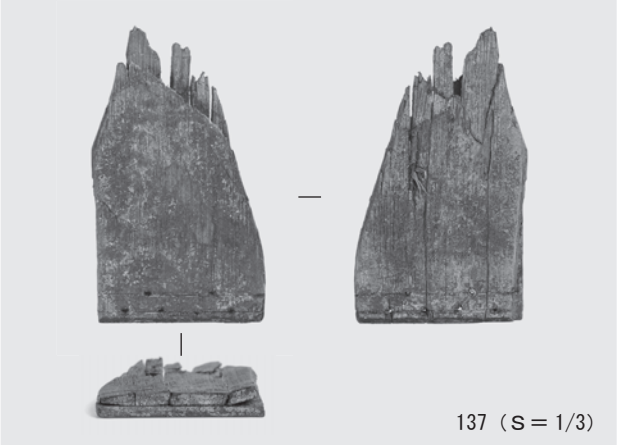


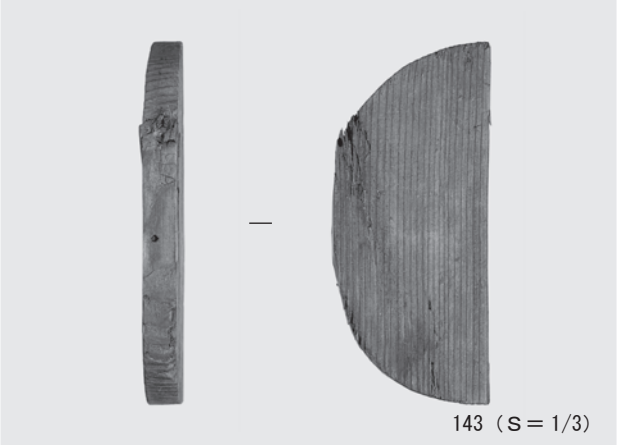



縄文土器、牙製垂飾

522

521


137（S＝1/3）


143（S＝1/3）

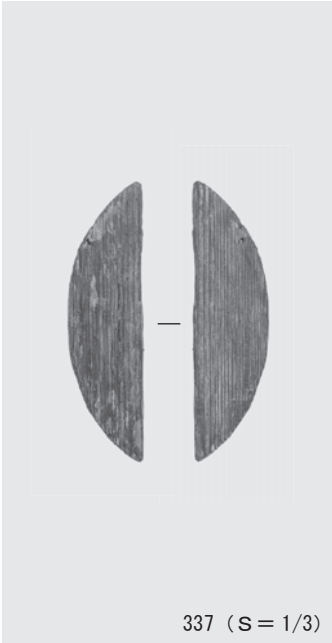
259（S＝1/2）

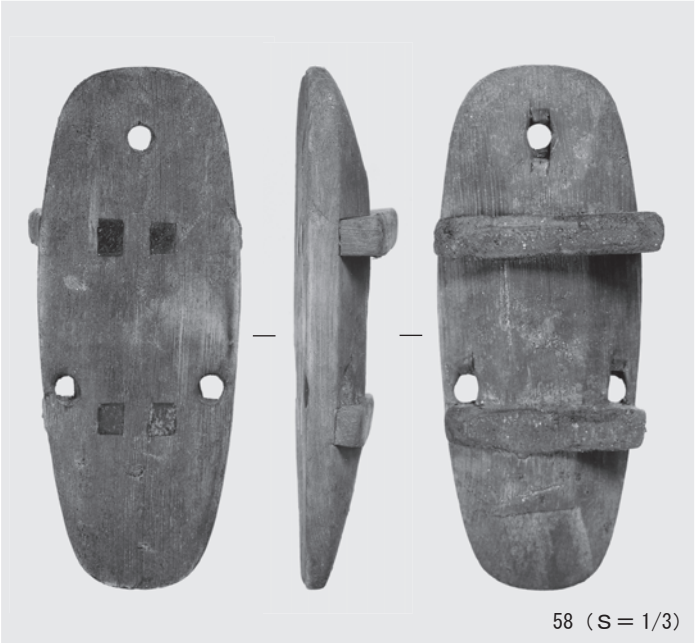
136（S＝1/2）

縄文土器、木製品

# 図版40　遺物

192（S＝1/3）


337（S＝1/3）


58（S＝1/3）

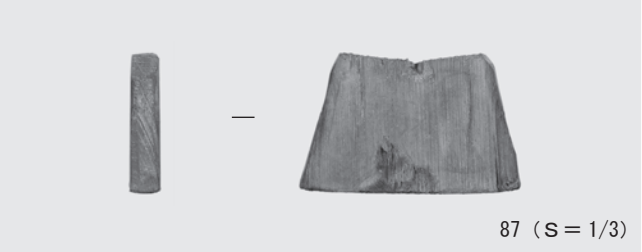
62（S＝1/3）

88（S＝1/3）

127（S＝1/3）

86（S＝1/3）

125（S＝1/3）


87（S＝1/3）

126（S＝1/3）

木製品

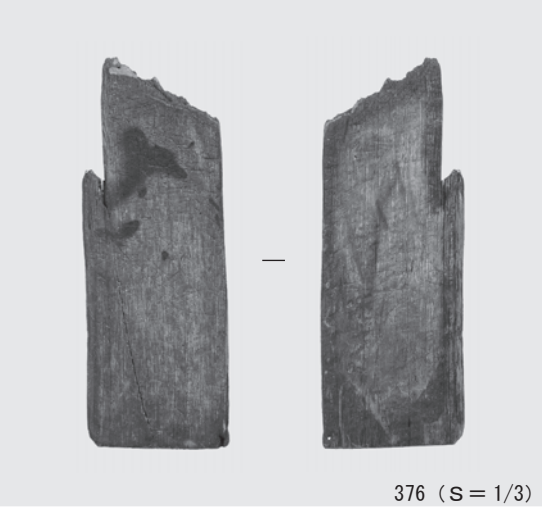
85（S＝1/2）

124（S＝1/2）

219（S＝1/3）

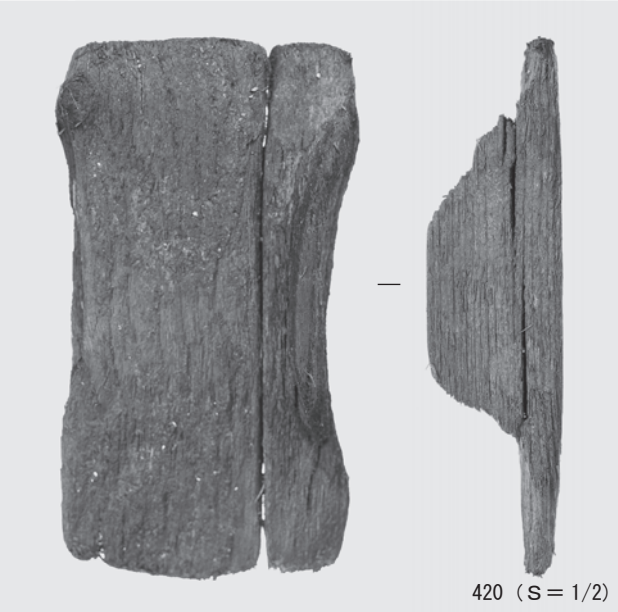
258（S＝1/3）

336（S＝1/3）


376（S＝1/3）

335（S＝1/2）

419（S＝1/3）


420（S＝1/2）

木製品

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | いけじま・ふくまんじいせき 9 |
| 書　　名 | 池島・福万寺遺跡９ |
| 副 書 名 | 一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書　（池島Ⅱ期地区02－１調査区・06－２調査区） |
| シリーズ名 | （財）大阪府文化財センター調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第196集 |
| 編 著 者 名 | 廣瀬時習・飯田浩光（編）・陣内暢子・乾哲也・後川恵太郎 |
| 編 集 機 関 | （財）大 阪 府 文 化 財　セ ン タ ー |
| 所　在　地 | 〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3-21-4　TEL:072-299-8791 |
| 発行年月日 | 2009年　12　月　28　日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 調査区 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| いけじま・ふくまんじいせき<br>池島・福万寺遺跡 | おおさかふひがしおおさかし<br>大阪府東大阪市<br>いけじまちょうちない<br>池島町地内 | 27227 | 93 | 02－１<br>調査区 | 34度<br>38分<br>56秒 | 135度<br>37分<br>41秒 | 2002年６月３日<br>～<br>2004年２月27日 | 4,371㎡ | 一級河川<br>恩智川<br>治水緑地<br>の建設 |
| | | | | 06－２<br>調査区 | 34度<br>38分<br>55秒 | 135度<br>37分<br>45秒 | 2006年10月６日<br>～<br>2008年４月30日 | 2,406㎡ | |

| 所収遺跡名 | 種　別 | 主 な 時 代 | 主 な 遺 構 | 主 な 遺 物 | 特　記　事　項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 池島・福万寺遺跡 | 田畠 | 現代～古代 | 島畠・溝・ピット | 陶磁器・瓦器・土師器・須恵器・銭貨 | 条里型水田の変遷と土地利用の推移 |
| | 水田 | 古墳時代 | 溝・土坑・ピット・畦畔 | 土師器・須恵器・小形仿製鏡 | |
| | 集落 | 古墳時代 | 溝・土坑・ピット | 土師器・須恵器 | 微高地上に溝・土坑・ピット |
| | 水田 | 弥生時代 | 大畦畔・畦畔 | 弥生土器・石鏃 | 弥生時代の地形変遷と各時期の水田の変遷 |
| | 集落 | 弥生時代 | 溝・土坑・ピット | 弥生土器・石鏃・石庖丁・魚類遺存体 | 微高地上に溝・土坑・ピット |
| | | 縄文時代 | | 縄文土器 | 水田経営以前の景観 |


要約

当遺跡における発掘調査は、1981年に発掘調査が開始され、現在も継続中である。既往の調査において、条里地割の変遷や、古墳時代～弥生時代前期中頃の水田面などの農耕関連遺構と古墳時代の初頭～前期および古墳時代中期後半～後期にかけての集落関連遺構などが重層的に検出されている。

今回の調査は、縄文時代から弥生時代にかけての堆積物が非常に厚く、古墳時代以降の堆積が各時期の人為的行為によって大きく削平を受けており、東の06－２調査区ほど遺存状況が悪かった。しかし、これまでの各調査区同様に池島地区の基本的な遺構面が確認された。特筆されるのは、06－２調査区の水田部分と考えられる位置から小形仿製鏡が見つかっている。遺構については確認できなかったが、興味深い。また、弥生時代の各面については、従来からの各面の水田遺構のほかに特筆すべき成果が上がっている。それは06－2調査区東端部の第13面で、同時期の集落域と考えられる遺構群が確認されていることである。遺構は、土坑・ピット多数を確認し、出土土器は少ないものの、一部の土坑からは魚類の骨なども確認されている。これまで、当遺跡内では弥生時代の居住域が確認された例は無く、今後の池島Ⅱ期調査の中で、これがどのように広がるのか興味深い。

（財）大阪府文化財センター調査報告書　第196集

東大阪市池島町・八尾市福万寺町

# 池島・福万寺遺跡９

（池島Ⅱ期地区02－１調査区・06－２調査区）
－一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書－

発行年月日　：　2009年12月28日
編集・発行　：　財団法人　大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号
印刷・製本　：　株式会社　明新社
奈良市南京終町3丁目464番地